

頭註
國譯本草綱目

第十冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目第十册例

一、本册には本草綱目蟲部第三十九卷卵生類上、第四十卷卵生類下、第四十一卷化生類、第四十二卷濕生類・附錄諸蟲、鱗部第四十三卷龍類・蛇類、第四十四卷魚類・無鱗魚類・附錄を收載した。

一、校訂、竝に病名・術語の註解は凡て監修白井光太郎博士親ら擔當執筆され、地理釋及び字解音訓の一部分は譯者が註記した。

一、藥名標目下の和名・學名・科名の考定は、蟲部は理學士矢野宗幹氏、鱗部は農學士木村重氏の擔當執筆に成つたものである。

一、和名・學名・科・屬・生產の東西學說異同その他に關する考證は、蟲部は矢野理學士、鱗部は木村農學士がいづれも署名して鼇頭に執筆された。

附記　本册鱗部に農學士木村重氏の考定・考證を收め得たその經過を摘記して置く。

初め日本帝國政府と中華民國政府との協定に因り、義和團事件賠償金、及び山

東問題補償金等を以て設立した東方文化事業部(舊の對支文化事業部)が、自然科學研究所を上海に置き、東京帝國大學教授理學博士岸上鎌吉氏がその生物學部の委員に任命せられて、揚子江、並に支流の水產生物の研究に第一步を進めた當時から、岸上博士の助手として、協力者として、造次も相離るることなくその研究・調查に從ひ、粗細盡く漏さずその資料の處理に任じたものは、實に木村農學士唯一人のみであつた。

かくて揚子江の上溯を企つることと昭和二年・三年の二回、倶に適〻突發せる國際問題のために沮まれて南京に停つたが、事平ぎ、昭和四年八月、專ら揚子江上流より西藏境に亙る生物の調查、研究を目的として、岸上博士・木村學士の外に民國の學徒三名を加へ、一行五名、約半个年の豫定を以て、九月九日、再び上海を出發した。行く行く調查、研究に從ひつつ、三峽を踰えて四川省に入り、重慶に達するや、南京政府の意趣疎隔に因つて卒に一行の奥地旅行を禁ぜられる等の事故に遭遇したが、それは幾もなく諒解成り、更に北に嘉陵江を溯つて所謂蜀の棧道の舊路を取り、纔に唯一の交通機關なる轎子に賴つて險隘を涉り、羈

雨と土匪・土兵の出沒とに窘みつつ、尙ほ且つ研究調査の努力をば息まなかつた。その間實に二个月、新聞紙上に一行の消息不明と傳へられたのはその時である。十一月六日、一行はやうやく成都に到着し、やや安易を得て、研究上の收穫日に增大しつつあるに方り、突如、岸上博士は腦貧血と神經痛とを發して、十一月二十二日、遂に成都日本領事館の一室に於て長逝された。時に年六十二。蓋し涉險の艱苦、食物の不十分等、その老軀を傷むることの尤も深かつたことを想はれる。是に於て、首腦者を喪つた一行は調査を一時中止するに決し、木村學士唯一人、故博士の遺骨を負ふて岷江を下り、揚子江本流に出でて一路歸朝を急ぎ、十二月二十五日、東京驛頭に歸り著いた。

この行、主眼とする調査、研究は水產動物、卽ち魚類、兩棲類、甲殼類、寄生蟲、昆蟲等に在つたのだが、四川省に入つては、漢藥として販賣さるる動物をも併せ調査し、木村學士はその後も二回まで同一の目的を以て渡支された。岸上博士歿後、能くその遺業を繼ぐものは實に木村農學士一人であつて、畏くも今上陛下には、今春三月三十日、特に木村學士を召され、入蜀研究に就ての御進

講を聞召された。至榮と謂ふべきである。その將に就らんとする成果に對しては、世界斯學界の擧つて刮目する所と聞く。

かやうな次第で、本書發刊の當初には、固より木村學士と胥謀るの機會を得なかつたのであるが、適〻今秋九月學士歸朝の際、白井博士の懇囑に因つて快よく執筆を諾され、採集標本、その他資料の整理に極めて多忙なる中に在つて、特に本冊鱗部、竝に第十一冊介部禽部等の考定・考證にその貴重なる收穫を割かれたのである。まことに本書の幸慶といはねばならぬ。

昭和五年九月二十五日

會津笈川の草堂にて

鈴　木　眞　海　記

鱗・介部考定に就て

木村重

本草綱目には永年强い興味を抱き、其中の動物なりとも科學的に考證研究を行ひ度いと思つてゐたのが緣となつて、遂に支那の動物を專攻してゐる。

本書鱗部の考定には、支那の書籍では諸經書・史書・各府縣志、各種字典等博物に關するもの、爾雅・山海經・傳說等、及び最近の科學雜誌、外國では、英・佛・獨・和・諾・露・米等の支那に於ける動物の科學的記載の書籍・雜誌、日本では本草書類や諸志・諸紀・隨筆等を參考とした。

支那旅行中は常に本草綱目を携帶して、各地でその事實を訊ねたり、又各方面に照會したりしたが、然し多くは實際の採集標本と比較し、又各地の方言を基とした。

方言では發音は判つても文字が不明だつたり、當て字が多かつたりして頗る困難した。例へばタナゴ(鱮)は全く鱮とは別物で、タナゴはポンピー・ファンヒーと云ふ。これを漢字に直せば、鰟魮(本草綱目、一名鯽魚)・鰟皮・魴鮄・硄片・膨皮・鰟鯡等であつて、音は則

ち孰れも上記のものである如きその一である。

然し本草綱目に記載されてある名稱は、大抵は通用するか似た音で呼ばれてゐる。又、綱目中に其の物の如何なるものか想像もつかない名のあるのは、科學に立脚したのでない事とて仕方のない事であらう。

此の考定に付いては總て責任を持ち、出典・質問、及び標本の敎示には一切之に應ずる。

頭註國譯本草綱目　第十册

目次

本草綱目蟲部第四十卷

本草綱目蟲部第四十一卷

本草綱目蟲部第四十二卷

本草綱目鱗部第四十三卷

本草綱目鱗部第四十四卷

附錄

本草綱目蟲部

第三十九卷

本草綱目蟲部目錄第三十九卷

李時珍曰く、蟲なるものは生物中の微なるものであつて、その種類は甚た繁多である。それゆゑに、ムシを表はす文字は三箇の虫を描いた會意の文字だ。按ずるに、攷工記には『（一）外骨、內骨、卻行、仄行、連行、紆行するもの、（二）脰鳴、注ー味（チユウ）に同じーー鳴、旁鳴、翼鳴、股鳴、胸鳴するものの屬を小蟲と謂ふ』とあつて、動物としては、到底、麟、鳳、龜、龍などと伍し得べくもない微なるものではあるが、しかし、羽、毛、鱗、介、倮それぞれの機關を具へ、胎生、卵生、風、濕生、化生それぞれに發生狀態の異相があつて箇箇に靈精を有し、獨特の些なる運動を爲して各〻生存を營んでゐる。隨つてそれぞれに特異なる性、氣を具有するものであつて、その功果と害毒とを記錄して審明することに研究價値を認むればこそ、聖人も意を用ゐられたものであつた。況や蜩、蠜、蟻、蚳など、食膳に調理し得るものとしては、禮記にその記錄がある。蜈、蠶、蟾、蠍など、藥劑に合和し得るものとしては方書に記錄がある。周官には、庶氏は毒蠱を除き、（三）剪氏は蠹物を除き、蟈

（一）外骨ハ龜屬、內骨ハ鼈屬、卻行ハ蚓蜒、仄行ハ蟹屬、連行ハ魚屬、紆行ハ蛇屬ヲ指ス。

（二）脰鳴ハ䵷黽屬、注鳴ハ促織屬、旁鳴ハ蟬屬、翼鳴ハ甲蟲屬、股鳴ハ螽斯屬、胸鳴ハ榮原屬ヲ云フ。

（三）周官原文ニヨレバ剪ハ翦ノ誤。

氏は鼃黽を去り、赤(四)祓氏は牆壁の貍蟲、(五)蠼螋の屬を除き、壺涿氏は水蟲、狐蜮の屬を除くといふやうな官職もあつたのである。かやうに古代の聖人は微小瑣細なものに關してまでも周到な注意を缺くことはなかつたのだ。現代の學徒には、與へられたる對象の形態的、理論的討究に更に歩を進めて、その功果、害毒の審察を成し遂げねばならぬ義務があらうと思はれる。是に於て、小蟲の有功のもの、有害のものを通じ集めて蟲部とし、凡て一百零六種を、卵生、化生、濕生の三類に分けて記述することとした。舊本の蟲魚部に收められたものは、三品を通じて二百三十六種であるが、本書には鱗、介の二部を分離して六種を併入し、八種を禽獸、服器部に移し入れ、有名未用から六種を移し入れ、木部から二種を移し入れた。

神農本草經二十九種　梁陶弘景註。　名醫別錄十七種　梁陶弘景註。
唐本草一種　唐　蘇恭。　本草拾遺二十四種　唐陳藏器。
海藥本草一種　唐　李珣。　開寶本草二種　宋　馬志。
圖經本草二種　宋　蘇頌。　日華本草一種　宋人大明。
證類本草二種　宋唐愼微。　本草會編一種　明　汪機。

(四)祓ハ祓ノ誤。
(五)蠼螋ノ屬ハ貍蟲ノ註文、狐蜮ノ屬ハ水蟲ノ註文ナルヲ、李氏誤ツテ本文中ニ混書セリ。

本草綱目二十六種　明李時珍。

附註

魏李當之藥錄　吳普本草　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對
唐甄權藥性　唐孫思邈千金　唐楊損之刪繁　孟詵食療
南唐陳士良食性　蜀韓保昇重註　宋掌禹錫補註　寇宗奭衍義
張元素珍珠囊　元李杲法象　王好古湯液　朱震亨補遺
吳瑞日用　明汪穎食物

蟲の一　卵生類上二十三種

蜂蜜 本經 蠶雀を附す。　蜜蠟 本經　蜜蜂 本經
土蜂 別錄　大黃蜂 別錄　露蜂房 本經　竹蜂 拾遺
赤翅蜂 拾遺　獨脚蜂 拾遺　蠮螉 本經 即ち果蠃。雄黃蟲を附す。
蟲白蠟 會編　紫鉚 唐本 即ち紫梗。五倍子 開寶 百藥煎。螳螂桑螵蛸 本經
雀甕 本經 即ち天漿子。　蠶 本經　原蠶 別錄 即ち晚蠶。
石蠶 本經 雲師雨虎を附す。　九香蟲 綱目　海蠶 海藥
雪蠶 綱目　枸杞蟲 拾遺　蘹香蟲 綱目

右附方　舊六十四　新二百零五

（一）矢野曰ク、蜂蜜ハみつばち(Apis)類ガ花蜜ヲ集メテカモシタル蜜ヲ云フ。〔石蜜〕ハ岩石ノ間ニ營巣セルモノノ蜜ナラン。〔土蜜〕一みつばち類ニハ土中ニ營巣スルモノナキヲ以テ別種ノ蜂ノモノナラン。まるはなばち(Bombus)ノ類ハ地上ニ營巣シ、又蜜ヲ集ム、或ハ此等ノモノヲ云フカ。

（三）氐、羌ハ西北方異種族ノ稱。今ノ青

蟲の一　卵生類上　二十三種

（一）蜂　蜜（本經上品）

和名　はちみつ、みち
英名　Honey.



〔蜂　　蜜〕

〔釋　名〕　蜂糖（俗名）　巖石に生ずるものを **石蜜** と名ける。（本經）　**石飴**（同上）　**巖蜜**　時珍曰く、蜜は密にして成るものだといふ意味で蜜といふのである。本經にはもと石蜜と書いてある。蓋し巖石に生ずるものを良しとすることを表はしたものだ。既往の諸家は、ために疑惑的解説を試みてゐるが、本書では卒直に蜂蜜と題した。これが正しい名稱なのである。

〔正　誤〕　恭曰く、土蜜は（三）氐羌地方に産するものが最も勝れてゐる。現に（三）闕

中の白蜜は甘美であつて長期の貯藏に耐へ、すべての點に於て江南のものに勝れてゐる。陶氏はそれ等のものを實見しなかつたところから、南方の產を勝るといつたのだ。現に水牛乳、(四)沙糖で作るものもやはり石蜜と名けるが、此にいふ蜜は蜂が作つたものだ。石の字は除き去るが至當と思ふ。

宗奭曰く、嘉祐本草には、石蜜なるものが二種あつて、一は蟲魚部に揭げ、一は果部に揭げてあるが、乳糖を石蜜といふ以上、蟲部の石蜜は石といふべきわけがない。石の字は白の字の誤らしい。故に現に一般にもやはり白沙蜜と呼んでゐる。蓋し新蜜は稀薄で黃であり、陳蜜は白く(五)沙なるものだ。

藏器曰く、(六)巖蜜は南方の(七)巖嶺の間に出る、藥用として最も勝れたものだ。石蜜とあるは巖蜜と改めるが正しいのである。蘇恭は(八)荊襄の出身で、その地方には巖石の險崖がない。それで石蜜の勝れたことを知らないから、かやうな說をなしたのだ。

時珍曰く、按ずるに、本經に『石蜜は諸山の石中に生ずる。色白くして膏の如くなるものが良し』とあるのだから、蜜なるものは、山石から取つたものを勝れたも

海者地方ヲ指シテ當時氏羌ノ地ト稱ス。石部石膽ノ羌道ノ註參照。
(三)關中ハ今ノ陝西ノ地ニシテ、東ニ函谷關、西ニ散關、南ニ武關、北ニ蕭關アリ、ソノ中間四塞ノ地ナルヲ以テ關中ト稱ストイフ。
(四)大觀ニ此條沙字上煎ノ字アリ、即水牛乳ヲ以テ沙糖ヲ煎ジ作ル者ト讀ムヲ正トス。
(五)沙ハ結晶ヲ云フ。
(六)大觀ニ巖ヲ崖ニ作ル。
(七)大觀ニ崖ニ作ル。
(八)荊襄ハ草部山草類貫衆ノ註ヲ見ヨ。
(九)武都ハ漢ノ郡。石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(一〇)河源即チ黃河水源ノ地ノ意味ナリ。河源ノ說ハ漢ノ張騫

ヨリ始マル。漢書西域傳ニ「河有兩源。一出葱嶺。一出于闐」トアルハ素ヨリ實査ヲ經タルモノニアラズ、只大體ノ想定ヲ示シタルモノニ過ギズシテ、事實ト甚ダ遠シ。黄河水源ガ今ノ青海省ノ巴顔喀喇山ノ東ニ發スルコトヲ確メタルハ實ニ清ノ康熙年間ノコトニ係ル。別錄ノ河源ハ西域傳ノ說ニ據リタルヤ、或ハソノ以前ノ說ニ因リタルヤ固ヨリ明ナラザレドモ武都ト並べ稱スルトコロヨリ考フルニ、武都ヨリ更ニ西ニ亙ル現今ノ河源ノ地、蘇恭ノ所謂氐羌ノ地ヲ指セルモノナラント想ハル。

(一一)大觀ニ青下ニ赤字アリ。

のとするのである。蘇恭は、本文の山、石の文字に注意を缺いたために、乳糖にも同名があるを理由として石の字を除かうとし、寇氏は、眞蜜には白沙なる質があり、僞蜜は稀薄で黄色なる事實を知らずして、ただ新、久を根據として區別したが、いづれも誤である。凡そ蜜の眞僞を試驗するには、火筋(くわきん)を紅く燒いて中に挿入し、それを引上げて見て、氣が起るものならば眞物、烟が起るものならば僞物である。

集解　別錄に曰く、石蜜は(九)武都(ぶと)の山谷、(一〇)河源(かげん)の山谷、及び諸山の石間に生ずる。色白くして膏の如くなるものが良し。

弘景曰く、石蜜とは卽ち崖蜜のことである。高山巖石の間に作るもので、色が(一一)青く、味は少し酸し、これを食へば心煩(しんはん)する。この蜜を作る蜂は黒色で虻(ばう)に似たものだ。木蜜は樹枝上に懸けて作るもので、色が青白い。土蜜は土中に在つて作るもので、色はやはり青白く、味が(一二)醶である。人家や樹の端に作るものも、やはり色が白くして濃厚で美味である。現に(一三)晉安(しんあん)、(一四)檀崖(だんがい)に產するものには土蜜が多く、これが最も勝れたものとなつてゐる。(一五)東陽、臨海の諸處、及び江南、(一六)向(かう)西(せい)に產するものには木蜜が多い。(一七)於潛(おせん)、(一八)懷安(くわいあん)の諸縣に產するものには崖蜜が

多い。また樹木にあるものや人家で飼養するものもある。概していづれの蜜の場合でも、多くは雜ぜ物があり、また煎煮したものがあつて、それ等は藥には用ゐ得ないものだから、必ず親しく自ら看て取る必要がある。看て取れば雜ぜ物の虞もないわけだ。凡そ蜂が蜜を作るには、いづれも人の尿を須ゐて諸種の花を釀すのだ。それでよく和熟するのであつて、その狀態は、飴を作る場合に糵を須ゐて發酵させる關係と似たものだ。

藏器曰く、普通の蜜にも、やはり石上に作るものと土中に作るものとあつて、北方は土地が燥いてゐるところから多く土中に作り、南方は土地が濕つてゐるところから多く木中に作る。それぞれその土地の適する所に隨ふのだ。蜜そのものは同一である。崖蜜といふはまた別の一種の蜂であつて、陶氏の、南方の崖嶺の間に產するといふ說の通りである。その房窠は懸崖の上、或は(一九)土窟の中に作るので、人間が近寄つて手づから取ることが出來ない。ただ長い竿でその房を刺して蜜を出し、下からそれを器物に承けて取るのであつて、多きは三四石に達することもある。味は酸く、色は綠で、藥用として凡ての蜜に勝るものだ。張華の博物志に『南方諸山

(一二)醶ハ酸ノ誤ナラン。
(一三)晉安ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(一四)檍崖、未詳。
(一五)東陽ハ石部禹餘粮、隰草類石龍芻ノ註ヲ見ヨ。臨海ハ石部石髓、丹參ノ註ヲ見ヨ。
(一六)向西ハ河西ノ誤カ。河西、即チ今ノ陝西省北半ノ地ナリ。山草類甘草ノ註參照。
(一七)於潛ハ毒草類海芋ノ註ヲ見ヨ。
(一八)懷安、一ハ縣名、晉、宋ニハ楊州宣城郡ニ屬ス。即チ今ノ安徽省寧國縣ノ東南於潛ニ通ズル中間ニ在リ。一ハ郡名、宋、齊ニハ梁州ニ屬ス、ソノ舊治ハ當時マタ懷安縣ト稱シタリ。ソノ地ハ今ノ四川省境ニアルモノノ如キ

の幽僻の處に蜜蠟が出る」とあるが、蜜蠟の附著する處は皆絕巖の石壁であつて、攀ぢ登つて取るわけに行かない。ただ山頂から籃轝を吊り下げて採取するのである。その巖には蜂が他に移り去つて後にも取殘された蠟が石に著いてゐて、何處からともなく雀のやうな鳥が群つて來てそれを啄み、殆どそれを食ひ盡す。この鳥の名は靈雀といふ。かくて春になればまた蜂が歸つて來て、前年の通りに蠟を著けるので、その地方の人民はその場所を區劃して蜜塞と呼び、特に保護を加へてゐる。これが卽ち石蜜だ。

○頌曰く、食蜜にも兩種あつて、一は山林の樹木の上に房窠を作り、一は人家で窠檻を作つて飼養する。その蜜はいづれも濃厚で美味なものだ。近世、(二〇)宣州にある黃連蜜なるものは、色が黃で味は少し苦く、目熱に主效がある。(二一)雍、洛地方にある梨花蜜なるものは、凝脂のやうに色が白い。(二二)亳州の(二三)太淸宮にある檜花蜜なるものは色が少し赤い。(二四)柘城縣にある何首烏蜜なるものは、色が更にそれよりも赤い。いづれも蜂がその名の示す花を採つて作るのであつて、それぞれの花の性に隨つて溫、涼の差異がある。

モ未詳。此ニイフ懷安縣ハ前者ヲ指ス。

(一九)大觀ニハ房著巖窟トアリ。

(二〇)宣州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(二一)雍洛ハ雍、卽チ今ノ陝西省鳳翔縣附近雍水沿流ヨリ、上洛、卽チ今ノ陝西省商縣附近洛水ノ南岸ニ亙ル古ノ雍州ノ地ヲ指ス。

(二二)亳州ハ唐ニ置ク。今ノ安徽省亳縣ソノ舊治ナリ。

(二三)太淸宮ハ亳州ノ治譙縣、卽チ今ノ安徽省亳縣ニアリ。寰宇記ニ「太淸宮。玄元舊宅。今有檜樹。鹿跡存焉」トアリ。

(二四)柘城縣ハ隋ニ置ク。今ハ河南省開封道ニ屬ス。

宗奭曰く、山蜜なるものは、多く石中、木上に在るもので、一二年を經過するものもある。その物ならば氣味が醇厚だが、人家で作るものは一箇年間に二回取るので、氣味に不足があり、前者に及ばない。且つ長期間貯藏すれば酸くなり易い。

時珍曰く、陳藏器の所謂靈雀は、小さい鳥で、一名蜜母といふ。黑色の鳥だ。正月になると巖石の間へ來て安全な場所を探し求め、群蜂がそれに隨つて集るのである。南方の地にある事實だ。

【修治】斅曰く、凡そ蜜を煉るには、一斤で十二兩半を得るが定則であつて、若し火が少いか、又は過大であれば、いづれも用ゐられない。

時珍曰く、蜜を煉沙するには、一斤毎に水四兩を入れ、銀、石器に入れて桑柴の慢火で煉り、浮沫を掠め去り、水に滴しても散らずして珠になるまでにして用ゐるこれを水火煉法といふ。また別の方法では、器に盛つて重湯で一日間煮て、水に滴しても散らずして珠になるまでにして取つて用ゐるも佳し。かくすれば火力で失敗する虞がない。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。頴曰く、諸蜜の氣味

は蜂の吸ふ花に因るものだ。冬、夏のものが上位で、秋のものがこれに次ぐ。春のものは味が變じて酸くなり易い。(二五)閩、廣の蜜は極めて熱であるが、それは南方の地には霜雪が少いために、諸種の花が多くは熱なるに因るのである。川蜜は溫、西蜜は涼である。

劉完素曰く、蜜は蜂が釀すものだが、蜂は寒で蜜は溫だ。質は同じいが性は異ふ。

時珍曰く、蜂蜜は、生は涼、熟は溫であつて、冷ならず、燥ならず、中和の氣を得たものだ。故に十二臟腑の病として宜しからざるはないのである。しかし、多く食へばやはり濕熱、蟲䘌を生ずるもので、就中小兒には警戒を要する。王充の論衡には『蜂蠆は太陽の火氣を稟けて生ずるものだから毒が尾にある。蜜は蜂の液であつて、多量に食へば人體に害がある』とあつて、注意を要することだが、煉つた上ならば毒がない。

宗奭曰く、蜜は無毒ではあるが、多量に食へばやはり諸風を生ずる。

朱震亨曰く、蜜は喜んで脾に入るものだ。西北地方は高燥だから、その地の人が食へば健康を益するが、東南地方は卑濕だから、多量に食へば脾に害が現はれる。

(二五)閩廣　閩ハ今ノ福建省、廣ハ今ノ廣東、廣西兩省地方。

思邈曰く、七月には生蜜を食つてはならぬ。暴下、霍亂を起すものだ。青、赤色の酸きものを食へば心煩する。生葱、萵苣と共に食つてはならぬ、利下するものだ。蜜を十分に食つて後には鮓を食つてはならぬ。頓死することがある。

主治　【心腹邪氣、諸驚癇痓。五臟を安じ、諸不足に氣を益し、中を補し、痛を止め、毒を解し、衆病を除き、あらゆる藥を和す。久しく服すれば、志を強くし、身を輕くし、饑ゑず、老いず、天年を延べ、神仙となる】（本經）【脾氣を養ひ、心煩、飮食不下を除き、腸澼、肌中の疼痛、口瘡を止め、耳目を明にする】（別錄）【牙齒の疳䘌、唇口瘡、目膚赤障。蟲を殺す】（藏器）【卒心痛、及び赤白痢を治するには、水で蜜漿を作つて一椀を頓服すれば止まる。或は薑汁と蜜と各一合を水で和して頓服する。常に服すれば、顏色が花のやうに紅になる】（甄權）【心腹の血刺痛、及び赤白痢を治するには、生地黄汁と各一匙を服すれば下る】（孟詵）【薤白と共に搗いて湯火傷に塗れば、卽時に痛が止まる】宗奭曰く、肘後方では、一日三回、白蜜を上に塗つて竹膜を貼る。【營、衛を和し、臟、腑を潤し、三焦を通じ、脾、胃を調へる】（時珍）

發明 弘景曰く、石蜜は、道家で丸にして服餌するものには必ず用ゐねばならぬもので、仙方にもやはり單服して『長生不老に至る』といつてある。

時珍曰く、蜂は無毒の花を採り、釀すに大便を用ゐて蜜を作る。所謂『臭腐神奇を生む』とはこのことだ。藥用としての功力に五種ある。熱を淸し、中を補し、毒を解し、燥を潤し、痛を止めるがそれであつて、生では性涼なるが故に能く熱を淸し、熟すれば性溫なるが故に能く中を補し、甘にして和平なるが故に能く毒を解し、柔にして濡澤なるが故に能く燥を潤し、緩は急を去るものなるが故に能く心腹、肌肉、瘡瘍の痛を止めるのである。調和の作用は中正の結果を得るものだから、能くあらゆる藥を調和することに於て甘草と同功だ。張仲景が、陽明結燥の大便不通を治するに用ゐた蜜煎導法は、まことに千古の神方である。

詵曰く、ただ一般に熱あるを覺えて四肢の不和なるには、蜜漿一椀を服するが甚だ良し。又、目中の熱膜に點けるには、人家で飼養した白蜜が第一であつて、木蜜はそれに次ぎ、崖蜜は更にそれに次ぐものだ。薑汁と共に熬煉したものは癩を治するに甚だ效がある。

【附　方】　舊十三、新六。【大便不通】張仲景の傷寒論に『陽明の病で、自汗し、小便が反つて利し、大便の硬きものは津液の內竭である。これには蜜煎を用ゐて導く。蜜二合を銅器に入れて微火で煎じ、凝つて飴のやうな狀態になり、丸にし得るほどになつたとき、熱に乘じて、頭端を鋭くして太さ指ほど、長さ一寸半ほどの挺に作り、冷えて硬くなるを俟つてそれを便道中に挿入する。少頃して通ずる』とある。○ある法では、皂角、細辛を末にして少量を加へる。就中速である。【噎して食物の下らぬもの】崖蜜を取つて含み、微しづつ嚥下す。（廣利方）【產後の口渴】煉つた蜜を多少に拘らず熟水で調へて服す。直に止まる。（產書）【難產、橫產】蜂蜜、眞麻油各半椀を半に煎じて服す。立ろに分身する。（海上方）【天行虜瘡】近年天行斑瘡といふ病があつて、頭部、面部、及び身體に忽ちのうちに瀰漫し、火瘡のやうな狀態で、各箇に白漿を戴き、潰せばまた隨つて生じ、即時に治療せねば數日にして必ず死亡する。また瘥えて後も瘡瘢が黯色に遺り、一年ほど經つて漸く消える。これは惡毒の氣に因るもので、世に、（二六）建武年間、（二七）南陽で外寇と戰爭があつた際に侵入して來たものだといふ。それで虜瘡といふのである。醫師達は參詳するがよ

（二六）建武、後漢ノ光武帝ノ年號、元年ハ西曆二五年。東晉

元帝ノ年號、一年ニシテ終ル。西暦三一七年。此ニ晉ノ葛洪ガ「比歳有病」トイヒ「南陽擊虜」トイフニ據ツテ考フレバ、晉ノ建武ヲ指スモノノ如シ。若シコレヲ後漢ノ建武トセバ、次ニ南陽トアルハ南海ノ誤トセザルベカラズ。建武中。馬援南虜ヲ擊チ、二十五年、軍ニ卒ス。ソノ時痘瘡始メテ中國ニ傳フトモイフ。

(三七)南陽ハ後漢ノ南陽郡ノ地ヲ指シタルモノナラン。石部玉類玉ノ註參照。

し。これを治するには、好き蜜を瘡上に摩し、蜜煎の升麻數匕で拭ふ。(肘後方)【痘疹の癢きもの】忍び難きために抓いて瘡になり、また疱が落ちんとして落ちぬには、百花膏――上等の石蜜を多少に拘らず湯で和し、時時に翎で刷く。これで瘡は落ち易くなり、瘢痕が自らなくなる。(全幼心鑑)【癮疹瘙痒】白蜜を多少に拘らず、好き酒で調へて服するが有效である。【五色丹毒】蜜で乾薑末を和して傅ける。(肘後)【口中に生じた瘡】蜜に大青葉を浸して含む。(藥性論)【陰頭に生じた瘡】蜜煎甘草を塗れば瘥える。(外臺)【肛門に生じた瘡】肛門は肺と關係があつて、肺が熱すれば肛が塞り、腫縮して瘡を生ずる。白蜜一斤、猪膽汁一頭分を相和し、微火で丸にし得るまでに煎じて長さ三寸の挺にし、油を塗つて下部に納れ、臥して後重せしめる。須臾にして通泄する。(梅師)【熱油で焼いた痛み】白蜜を塗る。(梅師)【疔腫惡毒】生蜜と隔年葱とを研つて膏にし、先づ腫を刺し破つて塗る。人が五支里を歩行するほどの時間を經てば疔が出る。後に熱醋湯で洗ひ去る。(濟急仙方)【大瘋癩瘡】白蜜一斤、生薑二斤の擣汁を用ゐ、先づ銅鐺の重量を秤り。薑汁を蜜中に投じて溶化してまたその重量を秤り、いづれも重量の覺えを記して置く。かくてその蜜を鐺中に入

れて微火で煎じて蜜汁を煎じ盡し、秤つて見て最初の蜜の重量だけになれば藥に完成したのである。癩病三十年の癩には、早朝に棗ほどの一丸を服し、一日三回、溫酒で服す。生、冷、醋、滑、臭の物を忌む。功用甚だ多く、一一擧げ盡せない。（食療方）【顏面の䵟䵳】白蜜で茯苓末を和して塗る。七日にして瘥える。（孫眞人食忌）【目に生じた珠管】一日一回づつ生蜜を目に塗り、半日仰臥して洗ふ。（肘後方）【誤つて銅錢を吞みたるとき】煉蜜二升を服すれば出る。（葛氏方）【諸魚骨鯁】好き蜜を少しづつ服して下す。（葛氏）【白髮を拔き、黑髮を生ず】年少者の髮白を治するには、その白髮を拔き去り、白蜜を毛孔中に塗れば黑髮が生える。なほ生えぬときは、梧桐子の搗汁をその上に塗れば必ず黑い毛が生える。（梅師方）

蜜蠟（一）（本經上品）

和名　みつらふ
英名　Bees-wax.

【釋名】弘景曰く、蜜中に生ずるものだから蜜蠟といふ。時珍曰く、蠟は鬣と同じ意味であつて、蜂は蜜蠟を造つて皆（二）鬣を成すものである。

【集解】別錄に曰く、蠟は武都の山谷の蜜（三）盧、木石の間に生ずる。弘景曰く、

（一）矢野曰ク、蜜蠟ハみつばち（Apis）ノ巢房ヲ作ル爲メ白體ヨリ分泌スル所ナリ。
（二）鬣ハ蜂房壁ヲ形容シタル語。
（三）盧ハ大觀ニ房ニ作ル。

蜂は先づ蜜を醸すべき場所を決定するためにこれを造るものである。蜜を煎じても作り得る。この物は採取した當初は極めて香しく軟かだ。一般には更に煮煉し、或は醋、酒を少し加へて作るので黃赤色になるが、褐色になつたものを好しとする。現に醫家では皆白蠟を用ゐるが、これは蠟を削り取て夏季百日間ほど暴せば、自然に白くなるのである。急の場合に用ゐるには、烊いて水中に十餘回納れても白くなる。

宗奭曰く、新しい蠟は色が白く、久しく經つに隨つて黃色になる。白蠟は蠟の精英なるものだ。

時珍曰く、蠟なるものは(四)蜜脾の底である。蜜を採取して後、煉つて水中に濾し入れて凝つたところを取つたものは色が黃である。俗に(五)黃蠟と呼ぶものだ。煎煉して極めて淨く白色になつたものをば白蠟といふ。新しいから白く、久しく經つたから黃になるといふわけではない。現に一般に用ゐられてゐる蟲の造つた白蠟とは異ふ。

【氣味】【甘し、微溫にして毒なし】之才曰く、芫花、齊蛤を惡む。

【主治】【蜜蠟は、下痢膿血に主效があり、中を補し、絕傷金瘡を續ぎ、氣を

(四) 蜜脾ハ蜜ヲ貯フル蜂房ヲ云フ、底トハ之ヲ所理シタ殘物ヲ指ス。

(五) 矢野曰ク、黃蠟ハ精製セザル蜜蠟ナリ、英名 Yellow wax. 白蠟茲ニテハ黃蠟ノ煎煉精製セルモノヲ云フ、蟲白蠟トハ別ナリ。

し、食後に五十丸を服すれば飢ゑない。○頌曰く、往古には凶作の歳に多く蠟を食つて飢を救つたものだ。大棗と合せて咀嚼すれば爛れ易い。

【白蠟は、人の(六)洩澼で後重し、便中に白膿あるを療じ、絶傷を補す。小兒の健康によし。久しく服すれば、身を輕くし、饑ゑぬ】(別錄)【孕婦の胎動で下血絶えず、死せんとするには、雞子大の量を煎じて三五沸し、美酒半升を投じて服すれば立ろに瘥える。又、白髮を鑷で拔き去り、蠟を溶かして毛孔中に點ければ、黑い毛を生ずる主效がある】(甄權)

【發明】　時珍曰く、蜜は蠟から成るものであつて、萬物の味の徹底せるものとして蜜よりも甘いものはなく、蠟よりも淡いものはない。これは蜜としての一面に十分なる濃厚さを有たぬならば、蠟としての他の一面に十分な淡薄さを發揮し得ないわけであらう。蜜は、氣、味倶に厚くして陰に屬する。故に脾を養ふ。蠟は、氣、味倶に薄くして陽に屬する。故に胃を養ふ。厚き方面では、味は甘くして性は緩、質は柔である。故に臟腑を潤す。薄き方面では、味は淡くして性は嗇、質は堅であ

(六)　洩上ノ人字大觀ニ久ニ作ル。

る。故に洩痢を止めるのである。張仲景の痢を治する藥に調氣飲があり、千金方の痢を治する藥に膠蠟湯があつて效果甚だ捷だ。蓋し此の點に見るところがあつたものか。又、華佗の老少の下痢、食事後直ちに吐くものを治する方に、白蠟方寸匕、雞子黄一箇、石蜜、苦酒、髮灰、黄連末各半雞子殼の量を用ゐ、先づ蜜、蠟、苦酒、雞子の四味を煎じ勻ぜてから黄連、髮灰を納れ、熬つて丸にし得る程度に止めて二日に服し盡す、神效無比なりとあつて、この方は實地に使用して屢〻效驗を認められたものである。これで見ると、本經の『下痢膿血に主效あり』といふ說は、深く服膺すべきものである。

附方　舊十八、新十五。【仲景調氣飲】赤白痢で小腹痛忍び難く、下重し、或は顏色靑く、手足倶に變色するものを治す。黄蠟三錢、阿膠三錢を共に溶化し、黄連末五錢を入れて攪き勻ぜ、三回に分けて熱服する。神の如き妙效がある。（金匱）【千金膠蠟湯】熱痢、及び婦人產後の下痢を治す。蠟を碁子二箇ほど、阿膠二錢、當歸二錢半、黄連三錢、黄蘗一錢、陳廩米半升を用ゐ、水三鍾で米を煮て一升につまつた時米を去り、藥を入れて一鍾までに煎じて溫服する。神效がある。（千金方）【急心

疼痛】黄蠟を燈火の上で焼き溶かし、芡子大の丸にして百草霜を衣にかけ、井水で三丸を服す。【肺虚咳嗽】立效丸——肺虚で膈熱し、咳嗽し、氣急し、煩滿し、咽乾し、燥渇し、冷水を飲みたがり、倦怠し、肌痩し、發熱し、減食し、喉が嘶嘶と鳴つて聲の出ぬものを治す。黄蠟を溶して濾し淨め、漿水で煮て八兩を用ゐ、再び溶化して一百二十丸を作り、蛤粉四兩を衣にかけて藥を養ひ、一日二回、一丸づつを胡桃半箇と細に嚼んで溫水で服し、臥して發語せずに口を閉ぢる。（普濟方）【肝虚雀目】黄蠟を多少に拘らず溶して汁を取出し、蛤粉を入れて適度に和し、小刀で切つて二錢づつを一回の用量とする。先づ猪肝二兩を批開し、內側へその粉を摻つて麻繩で縛り、銚子に入れて水一椀で煮熟して取出し、熱に乘じて眼を（七）蒸し、溫んだときその肝と共に食ふ。一日二回づつ試み、平安を得るを度とする。その效神の如きものである。（集驗方）【頭風の掣疼】湖南の押衛顏思退が所傳の方では、蠟二斤、鹽半斤を和して（八）鍒羅の中で十分に溶和し、揑つて頭蓋の大小に合せて（九）兜鍪の型を作り、頭上から額際まで被る。痛は立ろに止る。（經驗方）【脚上の轉筋】劉禹錫の續傳信方では、蠟半斤を銷して舊い絹帛に塗り、患部の大小、廣狹に應じて熱に乘

（七）蒸、大觀ニ薫ニ作ル。

（八）鍒羅詳ナラズ、鍋ノ類ナランカ。

（九）兜鍪ハカブトノハチ。

(一〇)代指ハ爪根炎、俗ニユビヒヤウソト云フモノ。

じて脚に纒ひ、脚心に當てて足袋を穿いて裹み、冷えれば易へる。同時に兩手の心に貼る。(圖經)【劇しき風の身冷】劇しき風で全身が水のやうに冷え、癱緩する如きには、前記の方法を用ゐ、患部の大小、廣狹に應じて攤して貼り、幷に手足の心を裹む。【風毒驚悸】前記の方法に同じ。【破傷風濕】瘧の如きには、黄蠟一塊を熱酒に溶化して服す。立ろに效がある。玉眞散と對用するが尤も妙である。(瑞竹堂方)【(一〇)代指の疼痛】蠟と松膠とを和し、火で炙つて指を裹めば瘥える。(千金翼)【脚上の凍瘡】黄蠟を濃煎して塗る。(姚和衆)【狐尿の人を刺せるもの】腫痛するには、蠟を熱して瘡に著け、幷に烟で熏じて汁を出せば癒える。(肘後方)【犬咬で發した瘡】蠟を炙り溶して瘡中に灌ぎ入れる。(葛氏方)【蛇毒の螫傷】竹筒を瘡に合せ、上から溶した蠟を灌げば效がある。(徐王方)【湯火傷瘡】焮赤して疼痛し、毒腐して化膿せるには、この方を用ゐれば熱毒を拔き、疼痛を止め、瘡口を斂める。麻油四兩、當歸一兩を煎じ焦して滓を去り、黄蠟一兩を入れて攪ぜ溶し、そのまま冷して帛に攤して貼る。神效がある。(醫林集要)【臁脛の爛瘡】桃、柳、槐、椿、楝の五種の枝を煎芥と共に煎じた湯で洗つて拭き淨め、生黄蠟を油紙上に攤し、瘡の大小に隨ひ十層

に貼つて帛でその上から縛り、三日に一回洗つてその都度一層を除去する。一个月間に達せずして痊癒する。(醫林集要)【妊娠胎漏】黄蠟一兩を老酒一椀に溶化して熱服する。頃刻にして止まる。【呃逆(あくぎやく)の止まぬもの】黄蠟を燒いて二三回熏烟すれば止る。(醫方摘要)【霍亂吐利】蠟を彈丸一箇ほど熱酒一升に溶化して服すれば止る。(肘後方)【諸般の瘡毒】臁瘡、金瘡、湯火等の瘡には、黄蠟一兩、香油二兩、黄丹半兩を共に化開し、急に冷して瓶に貯藏し、攤して貼る。(王仲勉經驗)

(一)蜜蜂(本經上品)

和名　みつばち、みちばち
學名　Apis indica, Fabricius.

釋名　蠟蜂(綱目)䗬　時珍曰く、蜂は尾に鋒を垂れるものだから蜂といふ。蜂は禮範ある動物だから䗬(えん)といふ。禮記に『范は則ち冠す。而して蟬(ぜん)は緌(すゐ)あり』とあり、化書に『蜂に君臣の禮あり』とあるはこれをいつたのだ。

集解　別錄に曰く、(二)蜂子は(三)武都の山谷に生ずる。

頌曰く、今は處處にある。卽ち蜜蜂の子のことだ。蜜脾の中に在るもので、蠶蛹のやうで色が白い。嶺南地方では、頭や足のまだ形成されぬものを取り、油で炒つ

(一)矢野曰ク、支那ニ產スルみつばちハApis indica 又ハ其變種ナルvar. nigrocincta Smith, var. peroni, Latreille ナリ、本邦ニ普通ナルハA. indica, var. japonica, Radoszkowski ナリ、而シテ歐洲種ハA. mellifica, Linne. 又ハ其變種ナリ。

(二)矢野曰ク、蜂子ハ和名はちのこ、野

蜂ハ和名のばち、但シ現今云フのばちトハ別ナリ、蜜蜂ノ野生種家蜂、和名いへばち人家ニ飼養スルモノ共ニ蜜蜂ナリ。へご武部ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

て食ふ。

時珍曰く、蜂子、卽ち蜜蜂の子であつて、まだ蜂にならぬ白蛹のことである。禮記に、雀、鷃、蜩、范、皆以て食に供すとあるところを見ると、これは古代から食つたものだ。その蜂に三種あつて、一種は林木、或は土穴中に房窠を作る野蜂である。一種は、人家で器に入れて收養する家蜂である。いづれも小さい微黃色のもので、蜜はいづれも濃美である。一種は、山巖高峻の場所に房窠を作るもの、卽ち石蜜であつて、その蜂は色黑く、牛虻に似たものだ。三者いづれも羣居するもので、それを統べる王者がある。その王は衆くの蜂よりも大きくして青蒼色だ。衆くの蜂は一日の中に朝夕二度王の周圍に伺候しては退下する。卽ち朝衙暮衙である。凡そ蜂は、雄は尾が銳く、雌は尾に岐があり、交尾すれば黃色が褪せる。花を嗅ぐには、鬚を鼻の代りに働かせ、花を採るには股で抱へるものだ。

按ずるに、王元之の蜂記に次の如く記載してある。

「蜂の王には毒がない。始め窠を造營するに方つては、必ず大いさ桃李ほどの一箇の臺を作る。王はその臺上に棲んで、その中に子を生むのだ。その王子はまた盡く

王となり、毎年その部族を分けて他の場所に移住するのであるが、その王子が部族を分けて往く狀態を見るに、或は扇の形に整列して王子を推戴して往くもあり、圓く罌の形になつてその中に王子を擁して往くもある。蜂は王の居る場所では決して人を螫さない。またその王を失つた場合には、他の衆くの蜂はその團體を解散して死亡するものだ。蜂が釀して置く蜜は脾のやうな狀態だ。それで蜜脾といふ。凡そ蜜の採收には、多く採り過ぎてはならない。多く採れば蜂が飢ゑて増殖しなくなる。又、少きに失してもならない。少ければ蜂が惰けて蜜を作らなくなるものだ。また蜂には大いに感嘆すべきところがある。王の無毒なるは、君主の德にも似たものだ。臺の如く巢を營むは、國家の建設にも似たものだ。子が復た王となるは、その封疆を分けて政を布くにも似たものだ。王を擁して往く有樣は、王を護衛するに似たものだ。王の在る所では螫さぬといふは、法令を遵奉しつつあるに似たものだ。王を失へば團體を解散して死亡するは、殉忠の節義を守るものだ。人間が蜜を採取するにも中庸を得さへすれば、彼等にその十分の一を税として公課するにも似たものだ。然るに山間の民がその私利を貪るところから、蜂の他に分割移植することを恐れて、

(四)頭瘋、大觀ニ風頭ニ作ル。

その王子を刺殺すなどいふことをする。まことに不仁も甚しいものだ』

蜂子　〔氣味〕『甘し、平にして微寒なり、毒なし』大明曰く、涼にして毒あり。これを食ふには、冬瓜、苦蕒、生姜、紫蘇でその毒を制する必要がある。之才曰く、黄芩、芍藥、牡蠣、百藥煎を畏る。

〔主治〕『(四)頭瘋。蠱毒を除き、虚羸、傷中を補す。久しく服すれば人體を光澤にし、顏色を好くし、老衰せぬ』(本經) 弘景曰く、酒に漬けて顏に傅ければ色白く悅澤ならしめる。『身を輕くし、氣を益し、心腹痛、顏面、及び目の黃、大人、小兒の腹中に五蟲があつて、口から吐出すものを治す』(別錄) 『丹毒、風疹、腹內の留熱に主效があり、大小便澀を利し、浮血を去り、乳汁を下す。婦人帶下の病』(藏器)

【大風癘疾】(時珍)

〔發明〕時珍曰く、蜂子は、古代には食膳に供したものだ。故に本經、別錄にはその意味での功力、效果を記錄したのだが、聖濟總錄では、大風疾を治するに諸種の蜂子を兼用した。これはやはり足の陽明、太陰の藥である。

〔附方〕新一。【大風癘疾】鬚眉墮落し、皮肉が已に爛れて瘡となつたものには、

蜜蜂子、胡蜂子、黄蜂子、いづれも炒つて各一分、白花蛇、烏蛇、いづれも酒に浸し皮、骨を去つて炙り乾し、全蠍を尾を去つて炒り、白殭蠶を炒つて各一兩、地龍を土を去り炒つて半兩、蠍虎の完全なものを炒り、赤足蜈蚣の完全なものを炒つて各十五箇、丹砂一兩、雄黄を醋で熬つて一分、龍腦半錢、以上を末にし、一日三回乃至五回、一錢匕づつを溫蜜湯で調へて服す。（總錄）

(一)土蜂（別錄）

和名　まるはなばち？
學名　Bombus sp.?

校正　舊本草には蜜蜂子と同一條に記載してあるが、本書では別條に記載することとした。

釋名　**蜚零**（本經）　**蟺蜂**　蟺の音は蟬（セン）である（同上）　**馬蜂**　頌曰く、郭璞の爾雅註に『現に江東地方では、大蜂の地中に在つて房を作るものを土蜂と呼ぶ。卽ち馬蜂のことだ。(二)荊、巴の地方では蟺蜂と呼ぶ』とある。

集解　別錄に曰く、土蜂は武都の山谷に生ずる。

藏器曰く、土蜂は穴居して房を作るもので、色は赤黑くして最も大きく、人が螫

(一) 矢野曰ク、從來土蜂ニゆするばち・つちばち・又ハつちすがり等ノ名ヲ附シ、土中ニ營巢スル種種ノ蜂ヲ此ニ充ツレドモ、此等ノモノトハ異ルガ如シ、穴居シテ房ヲ作リ、蜜ヲ釀ス等ノ點ヨリ見ルニ、まるはなばち(Bombus)ヲサスモノノ如シ、假ニ此名ヲ附ス。

(二) 荊巴ハ今ノ湖北省荊州ヨリ四川省閬中ニ亙リ、巴峽東西ノ一帶ヲ指ス。

されると死亡することがある。やはり能く蜜を醸し、その子もまた大きくして白い。



【土蜂】

頌曰く、土蜂子も江東地方ではやはり啖ふ。又、木蜂といふ土蜂に似たものがあつて、世人はこれもその子を食ふ。して見れば、蜜蜂、土蜂、木蜂、黄蜂子倶に食ひ得るものである。概して蜂の類は同科の蟲であつて、その薬性、効果は甚しい相違のないものだ。

蜂 主治 【焼いて末にし、油で和して蜘蛛の咬瘡に傅ける】藏器曰く、この蜂は能く蜘蛛を食ふ。その相伏する點を薬として應用するのだ。

蜂子 氣味 【甘し、平にして毒あり】大明曰く、蜜蜂に同じ。○畏るものもまた同じ。

主治 【癰腫】(本經) 【噎痛】(別錄) 【大小便を利し、婦人の帯下を治す】(日華) 【功は蜜蜂子に同じ】(藏器) 【酒に浸して顔に傅ければ、色を白くし、悦澤にする】(時珍)

附方　新一。【顏色の黑きを白くする】土蜂子のまだ頭、翅の成らぬものを炒つて食ふ。また酒に浸して顏に傅ける。(聖惠方)

房　主治　【癰腫の消せぬには、末にして醋で調へて塗り、乾けば更に易へる。服食には入れない】(藥性)　【丁腫瘡毒を療ず】(時珍)

附方　新一。【疔腫瘡毒】充分危篤のものも二服で癒え、輕きものは一服で立ろに效がある。土蜂房一箇、蛇蛻一條を用ゐ、黃泥で固濟して煆いて性を存して末にし、一錢づつを空心に好き酒で服す。少頃して腹中が痛むが、痛が止めばその瘡は巳に化して黃水となる。(普濟方)

(一)大黃蜂　(別錄)

和名　すずめばち
學名　Vespa spp.

校正　舊本草には蜜蜂と同一條に記載してあるが、本書には別條に記載することとした。

釋名　黑色のものを**胡蜂**と名ける。(廣雅)　**壺蜂**(方言)　**𤬪瓠蜂**　音は鈎婁(コウロウ)である。**玄瓠蜂**　時珍曰く、凡そ黑い色のものを胡といふ。壺といひ、

(一)矢野曰ク、すずめばち屬(Vespa)ハ種類多シ、支那ニモ亦十餘種ヲ產シ、其何レナルヤヲ知ルヲ得ザレドモ Vespa mandarinia, Smith. 又ハ Vespa muraria, Smith. 等ノ大形種ニシテ、樹洞内又ハ家屋ノ檐下等ニ營巢

スルモノヲ云フナランカ、啓蒙ニハまるばち、やまばち等ノ名ヲ以テシ、現今ノまるはなばち(Bombus)ヲ充ツル如キモ如何カ。

(二) 宣歙、宣ハ今ノ安徽省宣城縣、歙ハ歙縣ノ地ナリ。

瓠といひ、壺𤬪といふは、いづれも姿態を形容した名稱だ。壺𤬪とは苦瓠の名である。楚辭に『玄蜂は壺の若し』とあるはこの蜂のことだ。大黄蜂は色が黄で、壺𤬪蜂は色が黒い。一類の二種であつて、陶氏の說が正しい。蘇頌が、これを一種だといふは正しくない。けれども、蜂蛹、蜂房の功用の點は同一なのだから、必ずしも別條に記さねばならぬこともない。

【集解】弘景曰く、大黄蜂子といふは、人家の屋上のもの、及び壺𤬪蜂のことである。

頌曰く、大黄蜂子は、人家の屋上に房を作り、また大木の間に作る、即ち壺𤬪蜂の子である。嶺南地方で子を取つて食膳に供するその蜂は黄色のもので、蜜蜂に比すれば更に大きい。嶺表錄異に『(二)宣、歙地方では好んで蜂の子を食ふ。それは山林中の大蜂で、その作る房の大なるものは瓦鐘ほどあり、その房は數百層になつてゐる。地方民がそれを採るには、草衣で身體を蔽ふてその毒螫を拒ぎ、また烟火で熏じて母蜂を驅逐してから、その崖なり木なりに攀ぢ登つてその蔕を斷ち切るのであるが、一房の蜂兒が五六斗から一石ほどある。その中から鹽蛹のやうで瑩白なる

もののみを揀り取つて鹽で炒つて暴乾し、それを京師その他の大都市に送つて方物にする。しかし房中の蜂兒の三分の一は已に翅や足が成つてゐるもので、それは用ゐるわけに行かない』と記載してある。この說に據れば、木上に房を作るものであつて、蓋し䗪䗲の類であるが、しかし、現に宣城地方の蜂子は地を掘つて取るのだから、土蜂のやうでもある。郭璞の爾雅註に『土蜂とは大蜂の地中に在つて房を作るもの、木蜂は土蜂に似て小さいものである。江東地方では、いづれもその子を食ふ』とあるのだから、これに從へば、二蜂はいづれも可なり古くから食つたものである。概して性、味にはやはり甚しい相異はない。

蜂子　氣味　【甘し、涼にして小毒あり】大明曰く、說は蜜蜂の條に掲げてある。

主治　【心腹の脹滿痛、乾嘔。身を輕くし、氣を益す】（別錄）【雀卵斑、面皰を治す。その他の功力は蜜蜂子に同じ】（時珍）

附方　新一。【雀斑、面皰】七月七日に取つた露蜂子を漆椀の中で水、酒に浸し、濾した汁で胡粉を調へて傅ける。（普濟方）

(一)矢野曰ク、すずめばち屬(Vespa.)ノ巢ヲ云フ、或ハ其他ノあしながばち(Polistes)等凡テすずめばち科(Vespidae)ノ巢全部ヲ指スカ。
(二)牂牁大觀ニ牂柯ニ作ル。草部芳草類蒟醬ノ註ヲ見ヨ。
(三)木、大觀ニ腹ニ作ル。

(一)露蜂房（本經中品）

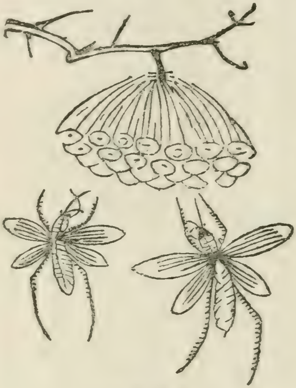
和名 はちのす
學名 Wasps' nests.

釋名 **蜂腸**（本經）**蜂勳** 勳は窠（クワ）と同じ。**百穿**（いづれも別錄）**紫金沙**

集解 別錄に曰く、露蜂房は(二)牂牁（しやうか）の山谷に生ずる。七月七日に採つて陰乾する。

弘景曰く、この蜂房は、樹(三)木中、及び地中に多く在る、現に露蜂房といふものだ。人家の屋根や樹の枝の間に苞裹（はうくわ）して作るものを用ゐて然るべきわけだが、殊更に遠隔の地なる牂牁を擧げた理由が判らない。

恭曰く、これは房が樹上に懸けてあつて、風露に暴（さら）されたものである。これを作る蜂は、黄黒色で長さ一寸ほどのもので、牛、馬、及び人が螫されると死するほどの患に罹るものだ。人家の



〔黃蜂房〕

軒下などにあるささやかな蜂房ではない。

韓保昇曰く、これは樹上の大黄蜂の窠であつて、所在いづれにもある。大なるものは甕ほどあり、小なるものも桶ほどある。十一二月に採收する。

宗奭曰く、露蜂房に二種ある。一種は、形の小さい淡黄色のもので、窠の長さは六七寸から一尺まで、濶さは二三寸、蜜脾のやうで一方が下垂し、多く叢木、深林の中に在るものだ。これを(四)牛舌蜂といふ。一種は、高い木の上、或は屋下に在つて、三四斗位から一二斗ほどの外面を圍つてあるもので、その圍の中に窠があるその形狀が瓠のやうなところから(五)玄瓠蜂なる名稱があるのだ、その蜂は色が赤黄で他の諸蜂よりも大きい。今は一般にこの兩者を兼用してゐる。

斅曰く、蜂房には四種の別がある。その一は、名稱を革蜂窠といひ、大なるは一二丈圍りあり、樹上在るもので、內部の窠は小さきも六百二十六箇に仕切られ、大なるは一千二百四十箇ある。その大なる窠を木に粘著する蔕は(六)七姑木汁で作り、外部の蓋は牛糞の沫で作り、その仕切りは葉と蕊で作つてある。その二は、名稱を(七)石蜂窠といひ、ただ人家の屋上にあつて、大いさは拳ほど、色は蒼黑で、內部に

(四)矢野曰ク、牛舌蜂ハあしながばち(Polistes)ノ類ニシテ、扁長ナル巢ヲ作ルモノアリ、或ハ此ニ類スル Polybia 等ナルカ。

(五)矢野曰ク、玄瓠蜂ハすずめばち(Vespa)ノ一種ナリ。

(六)七姑木汁ハ漆姑草汁ノ誤リト考フ。

(七)矢野曰ク、石蜂窠、獨蜂窠共ニ未詳。

は青色の蜂が二十一箇、或はただ十四箇ある。外部の蓋は石垢で作り、粘著する部分は七姑木汁で作り、仕切は竹蛀で作つてある。その三は、名稱を獨蜂窠といひ、大いさは鵞卵ほどで皮が厚く、色は蒼黄だ。窠の中には、小蜂から蜂翅の强盛になるまでの蜂がただ一箇ゐるだけである。その蜂の大いさは小石燕子ほどのもので、人、馬が螫されると立ろに死亡する。その四は、(八)草蜂窠と名くるものだ。藥に入れるには革蜂窠が勝れてゐる。

時珍曰く、革蜂とは山中の大黄蜂のことで、その房は幾重層の樓臺のやうに作るものだ。石蜂、草蜂は普通ありふれた蜂である。獨蜂は俗に七里蜂といふもので、その毒は最も猛烈だ。

【修治】 斅曰く、凡そ革蜂窠を使用するには、先づ鴉豆枕と等分を拌ぜて午前十時から午後二時まで蒸し、鴉豆枕を全部取り出して晒し乾して用ゐる。大明曰く、藥に入れるにはいづれも炙いて用ゐる。

【氣味】 【甘し、平にして毒あり】 別錄に曰く、鹹し。之才曰く、乾薑、丹參、黄芩、芍藥、牡蠣を惡む。

(八) 矢野曰ク、草蜂窠どろばち(Odynerus)等ノ蜂ニシテ、草莖中ニ營巣スルモノアリ、此等ヲ云フカ。

主治 【驚癇瘈瘲、寒熱邪氣、癲疾、鬼精、蠱毒、腸痔。火で熬るが良し】(本經)【蜂毒、毒腫を療す。亂髮、蛇皮と合せて燒灰し、酒で日每に二方寸匕を服すれば、惡疽、附骨癰の病根が臟腑にあつて歷節に腫出するもの、丁腫、惡脈の諸毒を治して皆瘥える】(別錄)【上氣、赤白痢、遺尿失禁を療ず。燒灰を酒で服すれば、陰痿に主效がある。水で煮て狐尿刺瘡を洗ふ。汁を服すれば乳石の毒を下す】(蘇恭)【水で煎じて熱病後に毒氣が目を衝くを洗ふ。炙つて硏り、猪脂に和して瘰癧の瘻と成りたるものに塗る】(蘇頌)【水で煎じて牙齒を漱げば風蟲疼痛を止める。又、乳癰、蜂疔惡瘡を洗ふ】(大明)

發明 時珍曰く、露蜂房は陽明の藥である。外科、齒科、及びその他の病に用ゐるは、いづれもその毒を以て毒を攻め、兼ねて蟲を殺すの功力を利用するのである。

附方 舊十五、新十八。【小兒の卒癇】大蜂房一箇を水三升で煮た濃汁で一日三四回浴するが佳し。(千金方)【臍風濕腫】久しく瘥えぬには、蜂房を燒いて末にして傅けるが有效である。(子母祕錄)【手足の風痺】黄蜂窠の大なるもの一箇、小なるも

(九)大觀ニ濟菜ニ作ル。

のは三四箇を灰に燒き、獨頭蒜一盌、百草霜一錢半と共に搗いて上に傅け、一時の後に取り下して陰處に埋めて置く。生、冷の物、葷、腥の物を忌む。(乾坤祕韞)【風氣瘙痒】及び癮疹には、蜂房を炙き、蟬蛻と等分を末にし、一日三回、酒で一錢を服す。○梅師方では、露蜂房の煎汁に芒消を入れて一日五回傅ける。【風熱牙腫】頭部、面部に連及するには、露蜂房を燒いて性を存して研末し、酒少量で調へて噙み漱ぐ。(十便良方)【風蟲牙痛】露蜂房を醋で煎じ、熱して漱ぐ。○袖珍方では、草蜂房一箇の房孔內に鹽を詰めて燒いて研末し、それを擦つて鹽湯で漱ぎ去る。或は一塊を咬むが祕方である。○普濟方では、露蜂房一箇、乳香三塊を水で煎じて漱ぐ。○又、細辛と共に水で煎じて漱ぐ。○又、露蜂房、全蠍を共に研つて擦る。○聖惠では、蜂房蔕を綿に包んで咬むが效がある。【喉痺腫痛】露蜂房灰、白殭蠶等分を末にし、半錢づつを乳香湯で服す。○食醫心鏡では、蜂房を灰に燒き、大人、小兒に拘らず、一錢づつを喉中に吹き入る。【重舌腫痛】蜂房を炙つて研り、一日三四回、酒で和して傅ける。(九)(聖惠方)【舌上出血】針の孔ほどの竅のあるには、紫金沙、卽ち露蜂房の項上の實した部分一兩、貝母四錢、盧會三錢を末にし、蜜で和して雷丸大の丸に

(一〇)大觀ニハ千金方ニ作ル。

し、一丸づつを水一小盞で五分に煎じて溫服する。吐血には溫酒で調へて服す。(雲臺方)【吐血、衄血】方は上に同じ。【崩中漏下】五色漏下は妊娠不能になる。蜂房末三指撮を溫酒で服す。大いに神效がある。(一〇)(張文仲方)【小兒の下痢】赤白を下すには、蜂房を燒いて末にし、飮で五分を服す。(張傑子母祕錄)【小兒の咳嗽】蜂房二兩を洗淨して燒いて研り、一字づつを米飮で服す。(勝金)【二便不通】蜂房を燒いて末にし、大人、小兒に拘はらず、一日二回、酒で二三錢づつを服す。(子母祕錄)【陰痿で興起せぬもの】蜂窠を燒いて研り、新汲水で二錢を服す、十女を御し得る。(岣嶁神書)【陰寒痿弱】蜂房灰を每夜陰上に傅ければ熱起する。(千金方)【陰毒腹痛】露蜂房三錢を燒いて性を存し、葱白五寸と共に研つて丸にし、男は左、女は右の手中に著けて陰を握り、臥して汗を出せば癒える。【寸白蚘蟲】蜂窠を燒いて性を存し、酒で一匙を服す。蟲は死んで出る。(生生編)【乳石熱毒】壅悶し、頭痛し、口乾き、排する尿の赤く少きには、蜂房の煮汁五合を服す。乳石末は小便に從つて下り、大いに效がある。○圖經には『十二分を炙き、水二升で八合に煮て分服する』とある。【藥毒の上攻】如聖散——蜂房、甘草等分を麩で黃色に炒り、麩を去つて末にし、水二盌で八分に

（一）一小、大觀ニ半ニ作ル。

（二）羔、大觀ニ膏ニ作ル。

（一）矢野曰ク、竹蜂ハみつばち科 Apidae ノ種ニシテ、竹管等ノ中ニ營巢シ、花蜜及花粉ヲ集メテ子ヲ養フ類ナリ、何種ナリヤ未詳。

煎じ、就寢時に頓服する。目を明にし、惡物を取り下す、（經驗方）【鼻外の查瘤】膿水や血を出すには、蜂房を炙いて研り、一日三回、酒で方寸匕を服す。（肘後方）【頭上の瘡癬】蜂房を研末し、臘猪脂で和して塗るが有效だ。（聖惠）【軟癤の頻生するもの】露蜂房を燒いて性を存し、巴豆二十一粒を清酒で煎じて二三沸して豆を去り、その油で調へて傅ける。甚だ效がある。（唐氏得效方）【婦人の妬乳】乳癰で乳汁が出ず、內結して腫となつたものを妬乳と名ける。蜂房を灰に燒いて研り、二錢づつを水（一）一小盞で六分に煎じ、滓を去つて溫服する。（濟衆方）【風瘻の合はぬもの】露蜂房一筒を黃に炙いて研末し、一錢づつを臘猪脂で和して塗る。（肘後方）【下部の漏痔】大露蜂房を燒いて性を存し、研つて摻る。乾くときは眞菜子油で調へる。（唐氏經驗方）【蜂螫腫疼】蜂房を末にし、猪（二）羔で和して傅ける。或は水で煎じて洗ふ。（千金方）

（一）竹蜂（拾遺）

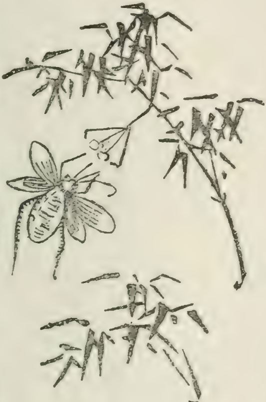
和名 たけばち
英名 A sweet bee which bleed in a bawboo stick.

【釋名】**留師** 郭璞は笛師と書いた。

【集解】藏器曰く、方言に『竹蜂は留師なり』とある。その蜂は大いさ小指ほ

どの正黑色のもので、竹を嚙んで窠を作る。その蜜は稠糖のやうで酸く甜(あま)く、(二)やや食へる。

時珍曰く、六帖に『竹蜜蜂は蜀中に產し、紺色で太さ雞子ほどの長さ一寸ばかりで蒂のある窠を野竹の上に結ぶ。その窠の中に普通の蜜の倍も甘い蜜がある』とあるはこの物だ。按ずるに、今人家に見る一種の黑蜂に、大いさ指頭ほどのもので、能く竹木に穴を穿つて棲み、腹中に蜜があつて、小兒がよく撲殺して取つて食ふものがある。やはりこの類のものだ。



〔竹蜂〕
—留師—

又、杜陽編に『外國に鸞蜂(らんほう)といふがある。大いさ十餘斤あつて、その蜜は碧色だ。服すれば仙と成る』とあるが、これは途方もない話であつて、深く信ずるに足らない。又、刺蜜、木蜜などいふ草木の上に生ずるものがある。いづれも果部の本條に記載した。木蜜、卽ち枳椇(きぐ)である。

(二) 本書ニ如ヲ好ニ作ル。

(一)矢野曰ク、べつかふばち科(Psammocharidae)中べつかふばち屬(Psammocaris)ノ中ニハ赤翅ノ種少カラズ、此等ノモノナラン。

(二)巴中ハ草部隰草類天名精ノ註ヲ見ヨ。

留師蜜 [氣味]【甘く酸し、寒にして毒なし】

[主治]【牙齒の䘌痛(ちくつう)、及び口瘡。いづれも含むが良し】(藏器)

(一)赤翅蜂(拾遺)

和名 べつかふばち、あかきはればち
學名 Psammocaris spp.

[集解] 藏器曰く、嶺南(れいなん)に産する。形狀は土蜂のやうで、翅が赤く頭が黑い。大いさ螃蟹(ほうかい)ほどのもので、土を穿つて窠を作る。蜘蛛を食物とするので、蜘蛛は遂にこの蜂の來るに氣が付くと、みな狼狽して逃げ隱れるが、しかし蜂は預(あらかじ)めその居處を感知してゐて、悉くその蜘蛛を食つて了ふ。



〔赤 翅 蜂〕

時珍曰く、これは毒蜂で、土を穿つて窠を作るものだ。木に窠を作る一種の獨蜂もやはりこの類である。その窠は、大いさ鵞卵(がらん)ほどで皮が厚く、色は蒼黄だ。小石燕子ほどの蜂がただ一箇棲んでゐる。人、馬が螫されると立ろに死亡する。又、蛒蜂(かくほう)といふ一種が(二)巴中(はちう)に産する。褰鼻蛇(けんびだ)の穴中に居るもので、その毒の甚しいことは普通のものに倍するものだ。人の手足を螫せばために斷

ち落ちる。心胸を螫せば毀裂する。到底方藥では治療の方法がないので、ただ禁術で制厭する。故に元稹の詩に『巴蛇窟穴に蟠り、穴下に巣蜂あり。樹に近づけば禽翅を垂れ、原に依れば獸蹤を絶つ。微かに遭へば手足を斷ち、厚き毒は心胸を破る。昔は招寃の句を甚しとすれども、那ぞ知らん眼のあらう自ら逢ふことを』とある。この蜂の毒はかやうに甚しいものだ。生を養ひ害に遠ざからんとする者の心得のために此に附載して置く。

【主治】〔毒あり。蜘蛛咬、及び疔腫、疽病を療ずるには、黒く燒いて油で和して塗る。或は蜂窠土を醋で和して塗れば、蜘蛛咬の傷から絲を取り出すものである〕（藏器）

(一)獨脚蜂（拾遺）

和名　きばち、かたあしばち
學名　Sirex spp.

【集解】藏器曰く、嶺南に產する。小蜂に似て色黑く、足は一本で樹根に連り、去ることも動搖することも出來ぬものだ。五月に採る。又、獨脚蟻といふもあつて、これも樹根に連つてゐて動搖し得ぬものだ。功用は蜂に同じ。

(一)矢野曰ク、きばち科(Siricidae)ニ屬スル蜂類ハ長キ產卵針ヲ有シ、樹幹ニ之ヲ挿入シテ產卵ス、老衰セルモノハ產卵針ヲ樹幹ニ貫キタルママ斃死シ、雨露ニサラサレテ肢ハ皆脫

落シ、只針ニヨリテ樹ニ附著ス、ヨリテ獨脚蜂ト云フ Sirex, Pawrurus, Tremex 等ノ數屬アリテ、支那ニモ數種ヲ産ス。獨脚蟻ハひめばち(Ichneumonidae)ニ屬スルモノカト思ヘドモ未詳。

(一)矢野曰ク、とつくりばち科、ちがばち科、べつかふばち科及其近似ノ科ニ屬スル蜂類ハ種種ノ集房ヲ營ミ他ノ昆蟲ヲ捕ヘテ其巣ニ搬入シ



〔獨脚蜂〕

時珍曰く、嶺南に小兒樹といふがあつて、蛺蝶(はふてふ)、及びこの蜂、蟻がいづれもその樹に生ずる。これはやはり氣化して生ずるもので、乃ち無情にして有情を生ずるものだ。酉陽雜俎に『嶺南には、夜中に光のある毒菌があつて、雨を經れば腐化して巨蜂となる。その蜂は色黒く、喙(くちばし)は鋸のやうで長さ三分ある。人を嚙めば甚だ毒がある』とある。物類の變化は一樣にはいへない。やはりあることだらう。

主治 【疔腫、癰疽。燒いて研り、油で和して塗る】(藏器)

(一)蠮螉 音は噎翁(エイヲウ)である。 (本經下品)

和名 ちがばち(總名)

學名 Eumenidae,(とつくりばち科) Psammocharidae,(べつかふばち科) Sphegidae(ちがばち科)等

〔釋名〕 **土蜂**（別錄） **細腰蜂**（莊子） **蜾蠃**（詩經） **蒲盧**（爾雅） 弘景曰く、この物は種類が甚だ多い。土蜂とは名けるものの、土中に窠窟を作るのではなく、土を運んで房を作るのだ。時珍曰く、蠮螉とはその鳴聲を表した名稱だ。

〔集解〕 別錄に曰く、蠮螉は(一)熊耳の山谷、及び牂牁、或は人屋の間に生ずる。

弘景曰く、今の一種の黑色の蜂で、腰が甚だ細く、泥を啣んで人家の屋根や器物の邊に竹管を併せたやうな房を作るものがそれであつて、その中に粟米大の子を生み付け、草上の青蜘蛛十餘箇を捕へてその中に滿ててから口を塞ぐ。それはその子が成長するまでの食料に充てるのだ。その一種で蘆管の中に入るものも、やはり草上から青蟲を取る。詩に『(二)螟蛉子あり、果蠃これを負ふ』とあつて、その意味は、細腰のこの物には雌がないので、いづれも青蟲を取つて祝つて己が子に生れ變らすのだといふ。けれども、それは謬だ。詩の作者に動物に關する知識のないことは兎も角として、孔夫子がかやうなひが事を採用したのは何事であらう。聖人にもかやうな手落は多いのかも知れない。

韓保昇曰く、按ずるに、詩の疏に『螟蛉は桑蟲なり、果蠃は蒲盧なり』とあつて、

卵ヲ産附シ置ク、是ヨリ孵化セル幼蟲ハコノ昆蟲ヲ食シテ生長シ、巣内ニテ蛹化シ次ギテ化シテ蜂トナル、茲ニ蠮螉ト稱スルモノハ主トシテ上ノ内とつくりばちノ類ナルガ如シト云ヘドモ、習性ノミニテハ何レナルカ明ナラザルヲ以テ總名トス。

(一)熊耳ハ草部毒草類醉魚草ノ註ヲ、牂牁ハ芳草類蒟醬ノ註ヲ見ヨ。

(二)矢野曰ク、螟蛉ハあをむし、鱗翅目ニ屬スルモノノ幼蟲ニシテ、毛少ク綠色ヲ呈スルモノ。

その詩の意味は、蒲盧が桑蟲を負ふて己れの子にするといふのだが、他の蟲を負はせて、封じて置いても、やはり蜂になつて飛んで往く。現にある人が、その穴を封ずる時を俟つて、壞つて內部を覗いて看ると、死んだ蟲の上に粟ほどの卵があるのを發見した。果して陶氏の說の通りであつたといふ。蓋し詩人は、その大なる物のみが目に入つて、その微細な物のあることには注意が及ばなかつたのだ。この蜂は所在にあるもので、或は只一箇、或は二箇を、土石といはず、竹木といはず、隨處にその窠を作るものだ。



〔蠮　螉〕

正誤　李含光曰く、祝咒を唱へて己が子に變らせる事實を近頃數〻實見したものがある。これは虛言ではない。

頌曰く、詩には『螟蛉之子、果蠃之を負ふ』とある。楊雄の方言には、また『螟蛉は、子が殪れてから果蠃に逢ふと「我れに類せよ。我れに類せよ」と祝咒を唱へる。すると久しくして變じて蜂になる』とある。陶氏や蜀本では、いづれも、粟ほどの子を生んで、諸蟲を捕つてその食料にすると考へてある。段成式は、また『書

齋に蠮螉の窠が多く、その祝する聲がはつきり聽えるので、窠を開いて中を視ると、それは悉く小さい蜘蛛ばかりで、泥で隔をしてあつた。して見ると、これはただ桑蟲のみを負ふに限つたものではない』といつてある。これ等數說はそれぞれ同一でないが、しかし、物類の變化はまことに測り知る可からざるものであつて、蚱蟬は轉丸から生じ、衣魚は瓜子から生ずる類の如き、一樣にはいへないのである。桑蟲や蜘蛛が變じて蜂となることも、怪しむまでもないことだ。陶氏がいふ粟ほどの卵といふそのものも、必ずしも蟲を祝なつて變生せしめたものでないとはいはれない。宋齊丘の所謂『蠮螉の蟲は螟蛉の子を孕む。その情が傳はり、その精が交り、その氣が溷はり、その神が和し、物の大小に隨つて倶にその生命なるものが發生するのである。あらゆる微小動物には、その者のみに限られた一定の情といふものはない。すべての物にはその物のみに限られた一定の形態といふものはない』といふ說明の方が妥當な見方であると思ふ。

宗奭曰く、諸家の說は、どこまで往つても詩に寓せられた意味の範圍から脫し切らないが、嘗て窠を開いて實驗したところに據ると、果して粟米ほどの子があつた。

色は白くして微黄であつた。負ふといふ青菜蟲は、却つて子の下に在つて蟲とは著いてゐなかつた。陶氏の説が事實に近い。

時珍曰く、蠮螉に關する説はそれぞれ相異があるが、現に多くの説を檢討し、且つ實驗した結果に據ると、その卵のあること、及びその蜂が二羽づつ竝んで往來する事實がある。これは必ずその雌雄であることが推定される。陶氏、寇氏の説が正しく、李氏、蘇氏の説は誤とせねばならぬ。按ずるに、解頤新語に『果蠃にはそれ自身の卵を有つてゐる。粟ほどのものだ。それを蟲の身體に寄托して置くのであつて、その蟲が不死不生の狀態のうちに卵が孵化し、久しくして蟲が枯死する頃には、子は長大となつてそれを食つて外部へ出て來る。さながら蠅が卵を蠶の身體に寄托して置いて、久しくして繭になつてから卵が孵化し、繭に穴を穿けて出て來るやうなものである。列子は「純ら雄にして雌なし、その名を穉蜂といふ」といひ、莊子は「細腰の者は化す」といつたが、これは古代から已に誤られてゐたものだ』とある。羅願の爾雅翼には『陶氏の説が物の事實に當つてゐる』とある。しかし、これを以て聖人を疑ふならばそれは詩の本旨を知らないものだ。詩に『螟蛉子有り、果

蠃之を負ふ。爾が子を敎誨し、式て穀く之に似せしむ』とあるその意味は、蓋し國君がその民を他人に取られたことをいつたものだ。解說者が、その似の字の意味は似續の似に用ゐてあることを解せずして、如似の似と誤り解した結果、遂にその說を附會して了つたものである。『鳲鳩、既に我が子を取る』なる句もあるが、これも同じ筆法で、鴞が他の衆くの鳥を己が子にする意味をいつたのだと解釋して了ふわけには行くまい。現にその房を破つて見るに、子と他の蟲とが同處してゐるもあり、或は子が已に去つて蟲が空殼になつて殘つてゐるものもあり、或は蟲が蛹になつても子がまだ小さいものもある。これは蟲が結局壞死しないので、それが蛹になつてから子がそれを食つて外へ出るのである。近頃の王浚川著の雅述にも、やはり『年年、實驗してゐるが、いづれも陶氏の說の通りだ』とある。

【氣味】【辛し、平にして毒なし】大明曰く、毒あり。藥に入れるには炒つて用ゐる。

【主治】【久しき聾、欬逆、毒氣、刺を出し、汗を出す】（本經）【鼻の窒りたるを療ず】（別錄）【嘔逆を治す。生で研つて能く竹木刺を罯ふ】（大明）　岣嶁書に『五月

五日に取つた蠮螉を末にし、凶器で死んだものの血を取つて丸にし、それを衣服の中に入れて置けば人を畏伏せしめる』とある。

(四)**土蜂窠** 土部に記載してある。

附錄 **雄黃蟲**（別錄）有名未用に曰く、目を明にし、凶器、不祥を辟け、氣力を益す。形狀は蠮螉のやうなものだ。

(一)蟲白蠟（會編）

和名 いぼたらふ、又、ねずみもちのらふ
英名 White wax of Ericerus pela, Westwood.

集解 機曰く、蟲白蠟は、蜜蠟の白いものとは異ふ。これは小蟲が作るもので、蟲が冬青樹の汁を食つて久しくして白脂に化し、樹枝に粘敷したものである。一般に、蟲の屎が樹に著いてかやうになつたもののやうに思つてゐるが、誤だ。秋になつて刮り取つて水で煮溶し、濾して冷水中に入れて置けば凝聚して塊になる。碎いて見ると白石膏のやうな文理があつて瑩澈だ。一般にこれを油に和して燭火用とするが、大いに蜜蠟に勝るものだ。

時珍曰く、唐、宋以前に、燭火用、藥用とした白蠟はいづれも蜜蠟であつた。こ

(四)矢野曰ク、とつくりばち又ハ類似ノ蜂ノ土ニテ作レル巢、英名(Nest of the pattern wasp.)

(一)矢野曰ク、かいがらむし科ニ屬スルいぼたらうむしノ雄ノ方ノ分泌セル蠟。和名いぼたらふ、ねずみもちのむしらふ、あいずらふ等ト稱ス。日本及支那ニ產ス。

(二)滇南ハ今ノ雲南ノ地、閩ハ福建、嶺ハ廣東廣西、吳越ハ長江以南ノ江蘇、浙江地方ヲイフ。

(三)川ハ四川省地方、滇ハ雲南省地方、衡、永ハ倶ニ湖南省ノ南部。

(四)芒種ハ陽曆六月初六初七。

(五)白露ハ陽曆九月初八初九。

の蟲白蠟は、元時代以來、始めて一般人に知られたので、今では日用品となつてゐる。四川、湖廣、(二)滇南、閩嶺、吳越等の東南諸郡にいづれもあるが、(三)川、滇、衡、永に產出するものが勝れてゐる。蠟の樹は、枝葉の形狀は冬青に類したもので、四季を通じて凋まず、五月に叢になつた白花を開き、結實は纍纍として蔓荊子ほどの大いさで、生は青く熟すれば紫になる。冬青の樹ならば紅色な筈だ。その蟲は蟣虱ほどの大いさで、(四)芒種の節後になると樹の枝に匍ひ廣がり、汁を食ひ、涎を吐いて嫩莖に粘著し、それが白脂に化して凝結し、凝霜のやうな狀態の蠟となる。それを處暑の節後に剝ぎ取つたものを蠟渣といふ。(五)白露の節を過ぎては固く粘著して刮れなくなるものだ。その蠟渣を煉り溶して濾淨し、或は甑に入れて蒸化し、器に瀝下するとやがて凝つて塊になる。卽ち蠟である。この蟲は、嫩い時は白色だが、蠟を作つて老境に入るとやはり黑色になり、樹の枝に苞を結ぶ。その苞は、當初には黍米ほどの大いさだが、春に入ると漸次に成長して雞頭子ほどになり、紫赤色で纍纍として枝を抱き、さながらその樹が實を結んだやうに見える。蓋しその蟲は卵を遺すために房を作るので、雀甕や螵蛸の類と同一のものだ。俗にそれを蠟種と呼



〔蟲白蠟〕

び、また蠟子ともいふ。その子の內部は皆白く、卵は細かい蟣ほどのもので、一箇の苞に數百箇ある。それを翌年立夏の日に摘み下し、箬葉で包んで各樹に分けて吊つて置くと、芒種の節後にその苞が開け、卵が蟲に化して葉の裏へ匍ひ出し、復た樹に上つて蠟を作るのである。蟻が附いてその蟲を食ふものだから、樹下をよく掃拂してそれを防ぐ必要がある。又、水蠟樹といふがある。葉は微し槐に似た樹で、これもその蟲を放飼して蠟を作らせ得るものだ。甜櫧樹もやはり蠟を作れるものである。

氣味　【甘し、溫にして毒なし】

主治　【肌を生じ、血を止め、痛を鎭め、虛を補し、筋を續ぎ、骨を接ぐ】（震亨）【丸、散に入れて服すれば、瘵蟲を殺す】（時珍）

發明　震亨曰く、白蠟は金に屬し、收斂、堅强の氣を稟けたもので、外科の

要藥である。合歡皮と共に、肌肉を長ずる膏藥中に入れて用ゐれば神效がある。しかし、服餌しての良否はまだ實驗されない。

時珍曰く、蠟樹の葉もやはり瘡腫を治すものだから白蠟も外科の要藥となるのであつて、あだかも桑螵蛸と桑木とがその氣相通ずると同じやうなものである。

【附方】新一。【頭上の禿瘡】蠟燭を頻に塗り、日光に晒さぬやうにして久しくすれば自然に髮が生える。（集玄方）

（一）紫鉚　音は礦（クワウ）である。（唐本草）　和名　ゑんじ　英名　Lac-dye

【校正】もとは麒麟竭と同一條に記載してあつたが、本書では木部から分離して此に編入した。

【釋名】**赤膠**（蘇恭）**紫梗**　時珍曰く、鉚は礦と同じ。この物は、色が紫、形狀は礦石のやうで、破り開いて見ると紅い。故にかく名けたものだ。現に（二）南番地方で、著いた枝のまま折り取つて紫梗と呼ぶものがそれである。

【集解】恭曰く、紫鉚は紫色で膠のやうなものだ。赤檗皮や寶鈿を加工するに

（一）矢野曰ク、らつくかいがらむし、一名ゑんじむし（Tachardia lacca）ト稱スル介殼蟲ノ一種ガ樹枝ニ寄生セルモノニシテ、其體中ニハ紅紫色ノ染料ヲ有シ其體ノ分泌物ハ脂臘質ニシテ之ヲ木材ノ塗料トス、即チラツク(lac)是ナリ、古クハ主トシテ之ヲ染料ニ使用セルガ、今ハ塗料トシテ重用セラ

ル。

(二)南番ハ今ノ交州以南、南洋等ノ諸外國ヲ指ス。

(一)眞臘國ハ石部鹵石類或鹽ノ註ヲ見ヨ。

これを用ゐて著色し、また貴重なる什器、珍翫物を膠付けるにもこれを用ゐる。蟻が海岸の樹や藤皮中に作るものだといふ。紫鉚の樹をば渇稟といひ、麒麟竭の樹をば渇留といふ。あだかも蜂が蜜を造るやうなものだ。斫り取つて用ゐる。呉錄に所謂『赤膠』なるものはこれである。



〔紫鉚〕

珣曰く、廣州記に『紫鉚は南海の山谷に生ずる。その樹は紫赤色のもので、この木の中の津液を結成すれば胡燕脂になる。その餘滓は玉作工に用ゐる。麒麟竭とはこの紫鉚樹の脂のことだ。

志曰く、按ずるに、別本の註に『紫鉚、麒麟竭の二物は同一條下に掲げてあるが、功力、效果は全く別である。紫鉚は、色が赤くして黑く、その葉の大いさ盤ほどあつて、その葉の上から鉚が出る。麒麟竭は、色が黄にして赤く、木中から松脂のやうに出るものだ』とある。

頌曰く、按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『紫鉚の樹は(一)眞臘國に產し、彼の地で

（四）波斯ハ土部伏龍肝金部金ノ註ヲ見ヨ。

は勒佉と呼ぶ。また（四）波斯國にも産する。木は高さ一丈ほどのもので、枝葉が鬱然と繁茂し、葉は橘柚に似て冬を經て凋まず、三月白色の花を開き、子は結ばない。霧露や降雨のためにその枝條が濡れ沾ふと紫鉚が出るのだといふ。これは波斯から朝貢した使者の說だが、また眞臘から朝貢した使者の話では、これは、蟻が樹の枝端へ土を運び上げて窠を作ると、その蟻壤が雨露に當つて凝結する。それが紫鉚となるのだといふ。崑崙の産が善く、波斯のものはそれに次ぐ』とある。又、交州地志にも、やはり『本州から每歲紫鉚を貢納する。蟻壤から出るものだ』とある。これで見ると、血竭と同樣木に出るものではあるが、一物でないことは明だ。現に醫家では一向に用ゐるものが稀だが、染料としてだけ用ゐられてゐる。

宗奭曰く、紫鉚は、形狀は糖霜のやうで、纍纍然として細枝上に結する。紫黑色のものだが、研り破れば紅い。現に一般に綿臙肢を造るに用ゐるが、近來ではやはり得難くなつた。

時珍曰く、紫鉚は南番に産する。乃ち蟻虱のやうな細蟲が樹の枝に著いて造るもので、あだかも今の冬青樹上の小蟲が白蠟を造る狀態と一般である。故に世間では

（五）九眞ハ漢ノ郡、後ニ交州ニ屬ス。今ノ安南ノ淸華ニ治ス。草部芳草類山薑ノ註參照。

（六）移風縣ハ漢ノ居風縣ナリ。九眞郡ニ屬ス。舊九眞郡治、卽チ今ノ淸華ノ南方ニコウ山ノ東麓ノンコン附近ニ治シタルモノノ如ク思ハル。

多く枝を挿して造るのだ。現に呉地方では、胭脂をこれで造る。按ずるに、張勃の呉錄に『（五）九眞の（六）移風縣に膠のやうな赤色の土がある。その地の人民はその土を視て蟻のゐることを視別け、そこを開墾して木の枝を挿む。するとそれに蟻が上つて漆を生じ、それが凝結するのである。螗螂螵蛸子のやうな狀態だ。その地方では、その漆を折き取つて織物を染め、その正赤に染め上つたものを蟻漆赤絮と呼んでゐる』とある。これが卽ち紫鉚である。血竭といふはその樹の脂膏のことだ。別に木部に記載してある。

【氣味】〔甘く鹹し、平にして小毒あり〕大明曰く、毒なし。

【主治】〔五臟の邪氣、金瘡、帶下。積血を破り、肌を生じ、痛を止める。騏驎竭と大同小異である〕（蘇恭）〔濕痒、瘡疥。膏に入れて用ゐるがよし〕（李珣）〔陽精を益し、陰の滯氣を去る〕（太淸伏錬法）

【附方】新三。〔齒縫の出血〕紫礦、乳香、麝香、白礬等分を末にして摻り、水で漱ぐ。（衞生易簡方）〔產後の血運〕狂言し、失志するには、紫鉚一兩を末にし、酒で二錢匕を服す。（徐氏家傳方）〔經水の止まぬもの〕日に日に黃ばみ瘦せるものには、紫礦

末二錢づつを空心に白湯で服す。(楊氏家藏方)

(一)五倍子(開寶)　和名　ふし　英名　Nutgalls.

校正 木部より此に移し入る。

釋名 **文蛤**(開寶) **百蟲倉**(拾遺) 一定の方法に據つて釀(かも)したものを **百藥煎**と名ける。時珍曰く、五倍は五構と書くが正しい。山海經にさう記載してある。その形狀が海中の文蛤(ぶんがふ)に似てゐるところから、やはり同名を呼ばれたのだ。百蟲倉は會意の名稱、百藥煎は隱語である。

集解 志曰く、五倍子は處に依つてあるもので、その子は色青く、大なるものは拳ほどあり、內部に多くの蟲がゐる。

頌曰く、蜀中(しよくちう)の者が勝れてゐる。膚木の葉上に生ずるもので、七月實を結ぶ。花はない。その木は青黃色だ。その實は青く、熟すれば黃になる。九月に子を採つて曝乾し、染料として用ゐる。

時珍曰く、五倍子は、宋の開寶本草には草部に編入し、嘉祐本草には木部に移し

(一)矢野曰ク、五倍子ハ蚜蟲ノ類ノぬるてのきノ葉ニ寄生シテ造レル蟲癭ニシテ數種アリ、支那產ノモノハMelaphis chinensis, Bell.ノ寄生ニヨリ本邦產ノみみぶしト稱スル、支那產ニ類似セルモノハMelaphis Miyabei, Matsumura(＝M mimifushi Matsumura, M. intermedia, Matsumura)ノ寄生ニヨルモノニシテ、此ノMelaphis ナル屬名ハ從來Schlechtendaria ト稱セシモノナリ、又其一種ニシテえだぶしト稱スルハ Nurdeopsis はなぶしト稱スルハ Fushia ト稱スル屬ノ

蚜蟲ノツクル所ニシテ Melaphis ト近似ノモノナリ。

(二) 皂色ハ黒色。

入れてある。膚木の上に生ずるものだといふことだけ判つてゐたが、それが蟲の造つたものだといふことは判らなかつたのだ。膚木とは鹽膚子木のことで、詳細は果部の鹽麩子の條に記載してある。この木は叢林になつた場所に生えるもので、五六月蟻のやうな小蟲があつてその汁を食ひ、老いると小毬を葉の間に結んで種を遺す。



〔五倍子〕

さながら蛅蟖が雀甕を作り、蠟蟲が蠟子を作るやうなものだ。作つた當初には甚だ小さいが、漸次に長く堅くなつて拳ほどの大いさになり、或は小さい菱のやうな形狀のものもあり、圓く長いものもあつて一定しない。初めの間は青綠色だが、久くして細黃になる。枝葉に綴著する狀態はさながら結成したもののやうに見える。その殼は堅く脆く、その中は空虛で蠛蠓のやうな細蟲が入つてゐる。山地の住民が、降霜前に採取し、蟲を蒸殺して賣出すのである。蒸殺せねば必ずその蟲が殼を穿ち壞すので薄くなり、且つ腐敗する。皮革工はこれで百藥煎を造り、物を(二)皂色に染める。大いに產業上の資料となるものだ。他の樹

(三)齒宣ハ牙宣トモ云フ、ハグキノ壊敗スル病。
(四)疳䘌ハ潰瘍ノ類、下疳ハ梅毒、疳瘡ニ同ジ。

にもこの蟲の毬は著くが、藥用には入れない。木の性が殊るからだ。

【氣味】【酸し、平にして毒なし】

【主治】【(三)齒宣(四)疳䘌。肺臟の風毒が皮膚に流溢して風濕癬疥となり、痒くして膿水あるもの。五痔下血の止まぬもの。小兒の顔面、鼻の疳瘡】(開寶)【腸虚泄痢。末にして熱湯で服す】(藏器)【津液を生じ、酒毒を消し、蠱毒、毒藥の中毒を治す】(日華)【口瘡には、これを摻れば飲食し得るやうになる】(宗奭)【肺を斂め、火を降し、痰飲を化し、欬嗽、消渴、盜汗、嘔吐、失血、久痢、黄病、心腹痛、小兒の夜啼を止め、鬚髮を烏くし、眼赤濕爛を治し、腫毒、喉痺を消し、潰瘡、金瘡を斂め、脫肛、子腸墜下を收める】(時珍)

【發明】震亨曰く、五倍子は金と水とに屬す。これを噙めば善く頑痰を收め、熱毒を解す。他藥の佐として尤も良し。黄昏の欬嗽は火氣が肺中に浮入するのであつて、涼藥は用ゐられない。五倍、五味を用ゐるがよし。斂して降すものだ。

時珍曰く、鹽麩子、及びその木の葉は、いづれも酸、鹹、寒、涼であつて、能く痰飲、咳嗽を除き、津を生じ、渴を止め、熱毒、酒毒を解し、喉痺、下血、血痢の

諸病を治す。五倍子なるものは、蟲がその木の津液を食つて結成するものだ。故に主治に於ても同功である。その味の酸、鹹は、能く肺を斂め、血を止め、痰を化し、渇を止め、汗を收める。その氣の寒は、能く熱毒、瘡腫を散ずる。その性は收であつて、能く泄痢、濕爛を除くものだ。

附方　舊二、新六十九。【虛勞遺濁】玉鎖丹――腎經の虛損で心氣が不足し、思慮の過度で眞陽が固からず、排尿に餘瀝があり、小便が白濁して膏のやうになり、夢中に頻に遺精し、骨節が拘痛し、顏色黧く、肌瘦せ、盜汗し、虛煩し、食慾減退し、氣力衰乏するものを治す。この方は、性溫にして熱ならず、極めて神效がある。五倍子一斤、白茯苓四兩、龍骨二兩を末にし、水糊で梧子大の丸にし、一日三回、七十丸づつを食前に鹽湯で服す。（和劑方）【睡眠中の盜汗】五倍子末、蕎麥麪等分を水で和し、餅にして煨熟し、夜間寢臥中に空腹を感じたとき、乾いたまま二三箇を食ふ。茶、水を飲んではならぬ。甚だ妙效がある。（集靈）【自汗、盜汗】平常出るものを自汗といひ、睡眠中に出るものを盜汗といふ。五倍子を研末して津液で調へ、臍中を塡めて縛りつけて置く。一夜にして止む。（同上）【心疼腹痛】五倍子を生で研末

し、一錢づつを鐵杓に入れて炒り、烟が出て黒色になるを度とし、好き酒一鍾をその杓中に傾け入れて服す。立ろに止る。（鄧眞人經驗方）【消渇飲水】五倍子を末にし、一日三回、水で方寸匕を服す。（危氏得效）【小兒の嘔吐】鎮らぬには、五倍子二箇——一箇は生、一箇は熟——を用ゐ、甘草一握を濕紙で包んで煨いたものと共に研つて末にし、半錢づつを米泔で調へて服す。立ろに瘥える。（袖珍方）【小兒の夜啼】五倍子末を唾液で調へて臍を塡める。（楊起簡便方）【暑中の水泄】五倍子末を飯で黄豆大の丸にし、二十丸づつを荷葉を水で煎じて服す。卽時に效が現れる。（余居士選奇方）【熱瀉下痢】五倍子一兩、枯礬五錢を末にして糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米湯で服す。（鄧筆峯雜興方）【瀉痢の止まぬもの】五倍子一兩を半生半燒にして末にし、糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを、紅痢には燒酒で服し、白痢には水酒で服し、水泄には米湯で服す。〇集靈では、五倍子末一錢づつを米飲で服す。【滑痢の止まぬもの】五倍子を七回醋で炒つて末にし、米湯で服す。【脾泄久痢】五倍子を炒つて半斤、倉米を炒つて一升、白丁香、細辛、木香各三錢、花椒五錢を末にし、一日二回、一錢づつを蜜湯で服す。生、冷のもの、魚肉を忌む。（集靈方）【赤痢の止まぬもの】

文蛤を炒つて研末し、水に浸した烏梅肉で和して梧子大の丸にし、七十丸づつを烏梅湯で服す。【腸風下血】五倍子、白礬各半兩を末にし、順流水で梧子大の丸にし、七丸づつを米飲で服す。酒を忌む。（本事方）【臟毒下血】五倍子を多少に拘らず末にし、大鯽魚一尾の腸、胃、鱗、腮を取去つてその中に末藥を塡滿し、瓶に入れて煨いて性を存して末にし、一錢づつを溫酒で服す。（王璆百一選方）【糞後の下血】大人、小兒に拘らず、五倍子末一錢を艾湯で服す。（全幼心鑑）【腸風臟毒】下血の止まぬには、五倍子を半生半燒にして末にし、陳米飯で和して梧子大の丸にし、一日三回、二十丸づつを食前に粥飲で服す。（聖惠方）【酒痢腸風】下血するもの。百藥煎の項を見よ。【小兒の下血】腸風臟毒には、五倍子末を煉蜜で小豆大の丸にし、二十丸づつを米飯で服す。（鄭氏）【大腸痔疾】五倍子の煎湯で熏じ洗ひ、或は燒烟して熏ずる。自然に收縮する。（直指方）【脫肛の收らぬもの】三因方では、五倍子末三錢に白礬一塊を入れ、水一椀で湯に煎じて洗ふ。立ろに效がある。○簡便方では、五倍子半斤を水で極端に煮爛し、桶に盛つてその上に坐して熏じ、溫むを待つて手で輕く托上し、參、芪、升麻の藥を內服する。○普濟方では、五倍子、百草霜等分を末にし、

醋で熬つて膏にし、鵝翎で上へ掃き傅ければ入る。【產後の腸脫】五倍子末を摻り、或は五倍子、白礬の煎湯で熏じ洗ふ。（婦人良方）【婦人の陰血】交接に因つて傷動するには、五倍子末を摻るが良し。（熊氏）【孕婦の漏胎】五倍子末二錢を酒で服す。神效がある。（朱氏集驗方）【風毒の眼を攻むるもの】腫痒し、澀痛して忍び難く、或は上下瞼が赤爛し、或は浮瞖、瘀肉が睛を侵すものに神效ある驅風散——五倍子一兩、蔓荊子一兩半を末にし、(五)每服二錢を水二盞で銅、石器中で汁に煎じて滓を去り、熱に乘じて洗ふ。滓をば棄てずに再び煎じて用ゐる。大いによく目を明にし、澀を去る。（博濟方）【小便尿血】五倍子末と鹽梅を搗きまぜて梧子大の丸にし、五十丸づつ空心に酒で服す。（集簡方）【風眼赤爛】集靈方では、五倍子を煆いて性を存して末にし、飛過した黃丹少量を入れて一日三回傅ける。甚だ良し。○普濟方では、五倍子を研末して傅ける。これを拜堂散と名ける。【爛弦風眼】五倍子、銅靑、白墡土等分を末にし、熱湯に泡けて目を閉ぢて淋洗し、冷えれば再び熱して洗ふ。眼弦に湯の入らぬやうに注意する。（濟急方）【眼中の弩肉】方は上に同じ。【耳瘡腫痛】五倍子末を冷水で調へて塗る。濕ひるものには乾いたまま摻る。（海上名方）【膿の出る聤

(五)原文ニ服二錢トアリ。疑ラクハ每字ヲ脫セルモノナラン。此ニ每字ヲ補入ス。（譯者）

耳】普濟方では、五倍子末を吹き入る。○經驗では、五倍子を焙じ乾して一兩、全蠍を焼いて性を存して三錢を末にし、耳中に摻る。【衄血】五倍子末を吹き入れて、末と新綿灰等分を二錢づつ米飲で服す。【牙縫の出血】止まぬには、五倍子を焼いて性を存し、研末して傅ければ止まる。（衞生易簡方）【牙齒の動搖】及び外傷で動いて落ちんとするには、五倍子、乾地龍を炒つて等分を末にし、先づ薑で齒を揩つて後に傅ける。（御藥院方）【牙齦の腫痛】五倍子一兩を瓦で焙じて研末し、半錢づつを患部に傅け、半時ばかりで涎を吐出し、風熱を去る藥を內服する。（楊子建護命方）【風牙腫痛】五倍子一錢、黃丹、花椒各五分を末にして摻れば止まる。○五倍子末を冷水で調へて頰の外部に塗る。甚だ效がある。【唇が緊つて痛むもの】五倍子、訶子等分を末にして傅ける。（端效方）【天行口瘡】五倍子末を摻つて涎を吐けば癒える。（龐氏傷寒論）【咽中の懸癰】舌が腫れ、咽が塞つて痛むには、五倍子末、白殭蠶末、甘草末等分を白梅肉で搗きまぜ、彈子大の丸にして噙み嚥む。その癰は自ら破れる。（朱氏經驗方）【口舌に生じた瘡】儒門事親では、赴筵散——五倍子、密陀僧等分を末にし、漿水で漱いでから乾して貼る。院方では晩蠶蛾を加へる。○澹寮方では、五倍子一兩、

滑石半兩、黄柏を蜜で炙いて半兩を末にし、漱ぎ淨めてから摻る。それで飮食し得るやうになる。【白口惡瘡】形狀が木耳に似たものには、大人、小兒に拘らず、いづれも五倍子、青黛等分を末にし、筒で吹き入る。（端效方）【走馬牙疳】五倍子、青黛、枯礬、黄蘗等分を末にし、先づ鹽湯で漱ぎ淨めに摻る。立ろに效がある。（便覽）【牙齦の疳臭】五倍子を炒焦して一兩、枯礬、銅青各一錢を末にし、先づ米泔で漱淨して摻る。絕對的有效の方である。（集簡方）【口、鼻の疳蝕】五倍子を燒いて性を存し、研末して摻る。（普濟方）【小兒の口疳】白礬を五倍子の中に裝入して燒き、共に研つて摻る。（簡便方）【下部の疳瘡】全幼心鑑では、五倍子、枯礬等分を研末し、先づ虀水で洗つて搽る。○杏林摘要では、五倍子、花椒を子を去りて炒つて各一錢、細辛を炒つて三分を末にし、先づ葱湯で洗淨して搽る。一二日で肉が生ずる。【陰囊の濕瘡】水が出て痊えぬには、五倍子、臘茶各五錢、膩粉少量を研末し、先づ葱椒湯で洗つてから、香油で調へて塗る。痊えるを度とする。（太平聖惠方）【(六)魚口瘡毒】まだ化膿せぬ初期には、南五倍子を黄に炒つて研末し、百草霜等分を入れ、臘醋で調へて患部に塗る。一晝夜で消く。（杏林摘要）【一切の諸瘡】五倍子、黄蘗等分を末に

(六)魚口ハ便毒、俗ニヨコネ。

して傅ける。(普濟方)【一切の腫毒】五倍子を炒つて紫黑色にし、蜜で調へて塗る。○簡便では、一切の腫毒の初期で頭なきには、五倍子、大黃、黃蘗等分を末にし、一日三回乃至五回、新汲水で調へて四圍に塗る。【一切の癬瘡】五倍子を蟲を去り、白礬を燒き、各等分を末にして搽る。乾くときは油で調へる。(簡便方)【癩頭軟癤】及び諸熱瘡には、五倍子七箇を研末し、香油四兩で半量までに煎り、布で渣を絞り去つて三四回搽る。水で洗つてはならぬ。(普濟方)【風癩濕爛】五倍子末を唾液で調へて塗る。(同上)【頭瘡、熱瘡】風濕諸毒には、五倍子、白芷等分を研末して摻れば膿水が乾く、乾く瘡には清油で調へて塗る。(衞生易簡)【瘡口の收らぬもの】五倍を焙じて研末し、臘醋脚で調へて四圍に塗るが有效だ。【一切の金瘡】五倍子、降眞香等分を炒り、研末して傅ける。皮肉が自ら痊える。これを啄合山と名ける。(拔萃方)【金瘡出血】止まぬには、五倍子末を貼る。若し閉氣するならば、五倍子末二錢に龍骨末少量を入れて湯で服す。立ろに效がある。(談埜翁方)【杖瘡の腫痛】五倍子を瓤を去つて米醋に一日浸し、慢火で黃に炒つて研末し、乾くものには摻り、破れぬものには醋で調へて塗る。(衞生易簡方)【手足の皸裂】五倍子末を牛骨髓と共に割れ目に

納れ塡めれば安易になる。（醫方大成）【雞骨の哽咽】五倍子末を喉中へ摻入すれば溶けて下る。（海上名方）【小兒の脫肛】五倍子を末にし、先づ艾と紙で倍子末を捲き込んだ筒を作り、それを便桶の中へ置いて上に瓦を載せ、患者をその桶上に坐らせて筒に火を點け、その藥烟を肛門に熏じ入れる。肛は自から上り收まる。かくて後、白礬末を肛門に搽ればその肛は自ら緊り、再び脫しない。【魚口便毒】五倍子を多少に拘らず淨い瓦器に盛り、陳醋で熬つて膏にし、綿布に攤して貼り、乾けば三五回換へる。それで癒える。【偏墜氣痛】五倍子一箇の中へ食鹽少量を入れ、（七）火紙でよく包んで水に浸し濕し、文武火灰の中で煨いて性を存して末にし、酒で調へて服す。【鬚髮を黑く染める】聖濟總錄では、針砂八兩を米醋に五日間浸し、炒つてやや紅色にして研末し、五倍子、百藥煎、沒石子各二兩、訶黎勒皮三兩を研末して各別に包み、先づ皂莢水で髭鬚を洗つてから、米醋で作つた蕎麥麪糊で針砂末を和して傅け、一夜の間荷葉でそれを包み、翌日それを取り去り、蕎麥麪糊で右の四味を塗つて、一日置いて洗ひ去れば黑くなる。○杏林摘要では、五倍子一斤を研末し、銅鍋で塊にならぬやうに注意しつつ炒り、烟が起つときは取り下して攪き廻し、

（七）火紙未詳、發火シ易キ紙ノコトカ。

氣永に火にかけて色が黒くなるまで緩やかに炒り、濕ふた青布で包み括つて、足で踏み固めて餅にし、それを貯藏して隨時に使用する。使用する際には、先づ皂角水で鬚髮を洗淨し、その五倍子一兩、紅銅末を酒で炒つて一錢六分、生白礬六分、訶子肉四分、沒石子四分、硇砂一分を末にし、それを烏梅と酸榴皮の煎湯で調勻し、碗に入れて重湯で煮て四五十沸し、飴のやうな狀態になつたとき、眉掠で鬚髮に刷いて一時して洗ひ去り、再び刷いてしつかりと包み、翌日洗ひ去つて核桃油で潤ほす。半月に一回染るが甚だ妙である。【河豚の中毒】五倍子、白礬末等分を水で調へて服す。（事林廣記に記載がある）

百藥煎　［修治］　時珍曰く、五倍子を粗い末にして一斤づつを、眞茶一兩の濃煎汁に酵糟四兩を入れて擂り爛したもので拌ぜ和し、器に盛つて糠缸の中へ入れて罯ひ、發酵して發麪のやうな狀態になれば成つたのである、それを揑つて餅丸にし、晒し乾して用ゐる。

嘉謨曰く、藥用には、五倍子の新鮮なもの十斤を細に舂いて瓷缸に盛り、稻草で蓋ふて七晝夜間罨ひ、取り出して再び搗き、桔梗、甘草の末各二兩を入れてまた七

晝夜盦ひ、かく搗き且つ盦ふこと七回にして取り出し、餅に捏つて晒し乾して用ゐる。新鮮なものがなければ乾いたものを水に漬けて作る。

又、ある方では——五倍子末一斤と生糯米粉一兩を(八)滾水に浸して捻り、細茶一兩を研末して共に罐內に入れて固封し、六月中に、七日間そのまま置いて封を開き、白毛を生じたものを搗き爛らして配合して用ゐる。

また一方では——　倍子一斤を研末し、酒麹半斤、細茶一把を研末し、右を小蓼汁でまぜ調へ、鉢に入れて上を緊く押して長稻草で固く封じ、別に一箇の籮に稻草を多く詰めてその中へ藥鉢を据ゑ、上から稻草で蓋ふて七晝夜間淨處に置いて後、藥の上に長い霜が現はれれば藥が成つたのである。或は捏ねて丸にし、或は餅にし、晒し乾してそのまま貯藏して用ゐる。

【氣味】【酸く鹹く微し甘し、毒なし】

【主治】【肺を淸し、痰を化し、嗽を鎭め、熱を解し、津を生じ、渴を止め、濕を收め、酒を消し、鬚髮を黑くし、下血、久痢を止め、脫肛、牙齒の宣𧏾、顏、鼻の疳蝕、口舌の糜爛、風濕諸瘡に主效がある】(時珍)

(八)滾水ハ熱湯。

【發明】時珍曰く、百藥煎の功は五倍子と異らないが、ただ釀造の方法を加へたものだから、その體が輕く虛し、その性が浮し、收し、且つ味に餘分の甘を帶びてゐる。上焦、心、肺の欬嗽、痰飲、熱渴の諸病に含噙するに尤も適するものだ。

【附方】新十二。【肺を斂め、嗽を劫す】百藥煎、訶黎勒、荊芥穗等分を末にし薑汁に蜜を入れて和して芡子大の丸にし、時時に噙む。（丹溪心法）【嗽を鎭め、痰を化す】百藥煎、片黃芩、橘紅、甘草各等分を共に細末にし、蒸餅で菉豆大の丸にし、時時に乾いたまま數丸を嚥むが佳し。（瀕湖醫案）【氣を淸し、痰を化す】百藥煎、細茶各一兩、荊芥穗五錢、海螵蛸一錢を蜜で芡子大の丸にし、一丸づつを噙むが妙である。（筆峰雜興）【髭鬚の黑染】川百藥煎一兩、鍼砂を醋で炒り、蕎麥麪と各半兩を用ゐ、先づ髭髮を洗つて荷葉を熬つた醋で調へて刷き、荷葉で一夜間包んで洗ひ去る。黑くなること妙である。（普濟方）【髮を沐して(九)膩を除く】百藥煎末を乾して髮に搽り、一夜置いて落す。（同上）【牙に揩つて鬚を黑くする】川百藥煎半兩、玄胡索三錢、雄黃三錢を末にし、先づ薑で擦つて涎を去つてからこれを牙に揩り、津で目を洗ふ。日每にこれを用ゐるが甚だ佳し。（普濟方）【牙痛の頭に引くもの】方は上に同じ。【風

(九)膩ハ頭髮上ノ脂膏、俗ニカミノヨゴレ。

熱牙痛】百藥煎を泡けた湯で含嗽する。（聖濟總錄）【牙齦の疳蝕】百藥煎、五倍子、青鹽を煆いて各一錢半、銅綠一錢を末にし、一日二三回摻る。神效がある。（普濟方）

【煉眉瘡癬】小兒の面湮瘡、また鍊銀瘡と名ける。母が妊娠中に酸、辣の邪物を食つたために起るものだ。百藥煎五錢、生白礬二錢を末にし、油で調へて搽る。（外科精義）

【脚肚に生ずる瘡】初期には粟米ほどの大いさだが、絶えず搔けば片となり、脚を包んで相交り、黃水を出し、忍び難く痒く、久しくして痼疾となるものである。百藥煎末を唾で調へ、一日一回、瘡毎にその周圍に塗り、外から內に入れる。豫め貫衆の煎湯で洗ふ。（醫林集要）【乳結硬痛】百藥煎末三錢づつを酒一盞で煎じ、數沸して服して效を取る。（經驗方）【腸癰の內痛】大棗を核共に燒いて性を存し、百藥煎と等分を末にし、一日一回、一錢づつを溫酒で服して效を取る。（直指方）【大腸便血】百藥煎、荊芥穗を燒いて性を存して末にし、糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。（聖惠方）【腸風下血】百藥煎二兩半を、半ば生、半ば炒つて性を存して末にし、飯で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。これを聖金丸と名ける。（王璆百一選方）【大腸氣痔】痛んで下血するには、百藥煎末三錢づつを、一日二回、稀粥

で調へて服す。（集簡）【腸風臟毒】下血するには、百藥煎を燒いて性を存し、烏梅を核共に燒き、白芷を火に當らぬやうにして末にし、水糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを米飮で服す。（濟生）【酒痢下血】百藥煎、五倍子、陳槐花等分を焙じて研末し、酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。（本事方）【下痢脫肛】百藥煎一塊、陳白梅三箇、木瓜一握を水一碗で半碗に煎じ、一日二回づつ服す。（聖濟總錄）【男、女の血淋】眞百藥煎、車前子、炒黃蓮各三錢半、木香二錢、滑石一錢を末にし、一日二回、空心に燈草湯で二錢づつを服す。（普濟方）【暑を消し、渇を止む】百藥煎、蠟茶等分を末にし、烏梅肉と搗き和して芡子大の丸にし、一丸づつを含む。これを水瓢丸と名ける。（事林廣記）

五倍子内蟲　主治　【赤眼、爛弦。爐甘石末と共に乳細して點ける】（時珍）

(一)蟷螂桑螵蛸（本經上品）

和名　かまきり又いぼしり又いぼむしり
學名　Species of Mantidae（かまきり科）

釋名　**蟷螂**　音は當郎（タウラウ）である。**刀蜋**（綱目）**拒斧**（說文）**不過**（爾雅）**蝕肬**　肬の音は尤（イウ）である。その子の房を(二)**螵蛸**と名ける。音は瓢綃（へ

(一)矢野曰ク、かまきり科ニ屬スルモノ數種アリ、其全體ヲ指スモノナラン。
(二)螵蛸、和名おほぢがふぐりかまきり

ウセウ）である。蜱蛸　蜱の音は皮（ヒ）である。蟳蟭　音は煿焦（センセウ）である。

致神（別錄）**野狐鼻涕**　頌曰く、爾雅に『莫貈は蟷蠰、不過は螳蜋なり、その子は蜱蛸なり』とあり、郭璞は『江東では石蜋と呼ぶ』といつてある。

時珍曰く、蟷蜋は兩臂の形が斧のやうで、車の轍に當つても避けようとせぬ、それで當郎と呼ばれたのだ。俗に刀蜋と呼ぶ。（三）兗地方では、拒斧といひ、また不過と呼ぶ、（四）代地方では天馬といふ。その首が驤馬のやうだからだ。（五）燕、趙地方では蝕肬といふ。肬、即ち疣子。小肉贅のことだ、現に世間で肬を病む者が往往これを捕つて食ふは、やはり由來があるわけだ。その子の房を螵蛸と名けるのは、形狀が輕飄で綃のやうだといふ意味だ。村落ではよくこれを炙き焦し、夜尿の止む藥だといつて小兒に食はせる。蟳蟭、致神などの名は蓋し此の意味を取つたものだらう。西陽雜俎にこれを野狐鼻涕といつたのは狀態の形容である。又、楊雄の方言に『螳蜋は、或は髠といひ、或は羊匕といふ。（六）齊、兗以東では敷常といふ。螵蛸はまた夷目とも名ける』とある。

［集解］弘景曰く、螳蜋は俗に石蜋と名ける。樹でさへあれば產み付けるもの

ノ卵塊（Egg case of montils）ナリ。

（三）兗ハ今ノ山東省ノ西部地方。

（四）代ハ今ノ直隸省宣化ノ西、山西省大同ニ亙ル一帶ノ地方。

（五）燕趙ハ今ノ直隸、山西兩省ノ地。

（六）齊兗ハ今ノ山東省ノ中部以西ノ地ナリ。

だが、桑樹上のものを好しとする。これは桑皮の津氣(しんき)を兼ね染みてゐるからで、枝著きのまま斷ち取つたものが眞物だ。僞物は桑の枝に膠で著けてある。

保昇曰く、螵蛸は處に依つてある。螳螂の卵であつて、多くは小桑樹や荆棘(けいきよく)の叢中にある。三四月頃、一本の枝から數百匹の小螳螂が出るものだ。



〔螳螂桑螵蛸〕

時珍曰く、螳螂は、首を驤、卽ち走る馬のやうに高く擧げ、臂を張り、頸が長く、腹が太く、手が二本、足が四本でよく渡り歩行くことが捷(すみや)かだ。鬚が鼻の代用をなし、喜(この)んで人髪を食ひ、能く葉を翳(かざ)し身を隱して蟬を捕る。方術家が身を隱す翳の作法は、この螳螂の形を學んだものだといふことである。晩秋に入つて子を產み、房を作つて枝上に粘著する。それが螵蛸だ。房は長さ一寸ばかり、太さは拇指ほど、その內部は幾重にも仕切られて、房毎に蛆卵(そらん)ほどの子があり、芒種の節後に一齊に生れ出る。故に月令に『仲夏螳螂生ず』といつたのだ。

修治　別錄に曰く、桑螵蛸は桑枝上に生ずる螳蜋の子であつて、二月、三月に採收し、蒸してから火で炙つて用ゐる。爾らざれば人をして泄せしめる。

斅曰く、凡そこれを使用する場合に、雜木に著いた螺螺と名けるものを用ゐてはならない。必ず桑樹の東側の枝に著いたものに限る。採取つたならば、核子を去り、沸漿水に浸して七回淘り、鍋で熬り乾して用ゐる。これ以外の方法で修治しては效がない。

韓保昇曰く、三四月に採收し、熱漿水に一伏時浸して焙じ乾し、柳木灰中で黄に炮いて用ゐる。

螳蜋　主治　【小兒急驚風の搐搦。又、箭鏃を出す。生のものは能く疣目を食する】（時珍）

發明　時珍曰く、螳蜋は古方には用ゐられてないが、ただ普濟方の、驚風を治し、鼻に吹いて搐を鎭める法の中に用ゐてある。これはやはり蠶、蠍の搐を鎭める關係と同じものだ。古方の風藥に多く螺蛸を用ゐてあるのだから、螳蜋が風を治するも同一理だ。又、醫林集要には、箭鏃を出すにやはりこれを用ゐてある。

【附方】 新二。【驚風定搐】中分散――螳螂一箇、蜥蜴一條、赤足蜈蚣一條を各中分し、左のみのものと右のみのものとに各〻中分し、研末して誤らぬやうに標記し、男患者には左の研末を用ゐ、女患者には右の研末を用ゐ、一字づつを鼻に吹き入る。その搐は、左に吹けば左が鎮まり、右に吹けば右が鎮まるものだ。(普濟)【箭鏃の肉に入りたるもの】拔出し得ぬには、螳螂一箇、巴豆半箇を共に研つて患部に傅ける。微し痒き間は忍び、極めて痒くなつたとき撼つて鏃を拔き取り、黄連、貫衆湯で洗ひ拭いて石灰を傅ける。

桑螵蛸 【氣味】【鹹く甘し、平にして毒なし】之才曰く、龍骨と配合すれば洩精を療す。旋復花、戴椹を畏る。

【主治】【傷中、疝瘕、陰痿。精を益し、子を生ましめる。婦人の血閉、腰痛。五淋を通じ、小便、水道を利す】(本經)【男子の虛損、五臟の氣の微弱、夢寐に失精し遺溺するを療す。久しく服すれば、氣を益し、神を養ふ】(別錄)【炮き熟して空心に食へば小便利を止める】(甄權)

【發明】時珍曰く、桑螵蛸は肝、腎、命門の藥であつて、古方には盛んに用ゐ

【修　治】別錄に曰く、桑螵蛸は桑枝上に生ずる螳蜋の子であつて、二月、三月に採收し、蒸してから火で炙つて用ゐる。爾らざれば人をして洩せしめる。

斅曰く、凡そこれを使用する場合に、雑木に著いた螺螺と名けるものを用ゐてはならない。必ず桑樹の東側の枝に著いたものに限る。採取つたならば、核子を去り、沸漿水に浸して七回淘り、鍋で熬り乾して用ゐる。これ以外の方法で修治しては效がない。

韓保昇曰く、三四月に採收し、熱漿水に一伏時浸して焙じ乾し、柳木灰中で黄に炮いて用ゐる。

螳蜋【主　治】【小兒急驚風の搐搦。又、箭鏃を出す。生のものは能く疣目を食する】（時珍）

【發　明】時珍曰く、螳蜋は古方には用ゐられてないが、ただ普濟方の、驚風を治し、鼻に吹いて搐を鎭める法の中に用ゐてある。これはやはり蠶、蠍の搐を鎭める關係と同じものだ。古方の風藥に多く螵蛸を用ゐてあるのだから、螳蜋が風を治するも同一理だ。又、醫林集要には、箭鏃を出すにやはりこれを用ゐてある。

附方　新二。【驚風定搐】中分散——螳螂一箇、蜥蜴一條、赤足蜈蚣一條を各中分し、左のみのものと右のみのものとに各〻中分し、研末して誤らぬやうに標記し、男患者には左の研末を用ゐ、女患者には右の研末を用ゐ、一字づつを鼻に吹き入る。その搐は、左に吹けば左が鎮まり、右に吹けば右が鎮まるものだ。(普濟)【箭鏃の肉に入りたるもの】拔出し得ぬには、螳螂一箇、巴豆半箇を共に研つて患部に傅ける。微し痒き間は忍び、極めて痒くなつたとき撼つて鏃を拔き取り、黄連、貫衆湯で洗ひ拭いて石灰を傅ける。

桑螵蛸　氣味【鹹く甘し、平にして毒なし】之才曰く、龍骨と配合すれば洩精を療す。旋復花、戴椹を畏る。

主治【傷中、疝瘕、陰痿。精を益し、子を生ましめる。婦人の血閉、腰痛。五淋を通じ、小便、水道を利す】(本經)【男子の虛損、五臟の氣の微弱、夢寐に失精し遺溺するを療す。久しく服すれば、氣を益し、神を養ふ】(別錄)【炮き熟して空心に食へば小便利を止める】(甄權)

發明　時珍曰く、桑螵蛸は肝、腎、命門の藥であつて、古方には盛んに用ゐ

てある。

權曰く、男子の身體が衰弱して精の自ら出るもの、及び虚して小便の利するものに加へて用ゐる。

頌曰く、古方の漏精、及び風藥中に多く用ゐてある。

宗奭曰く、男、女の虚損、腎衰、陰痿、夢中の失精、遺溺、白濁、疝瘕に缺くべからざるものである。隣家の一男子が、房事過度が原因で小便の數一日に數十回になり、稠米泔のやうに白濁し、心神恍惚として痩瘁し、食欲が減退したとき、桑螵蛸散を服ませると、藥を服すること僅に一劑にして癒えた。この藥は、神霓を安じ、心志を定め、健忘を治し、心氣を補じ、小便數を止める。桑螵蛸、遠志、龍骨、菖蒲、人參、茯神、當歸、龜甲を醋で炙いて各一兩を末にし、就寢時に二錢を人參湯で調へて服す。桑枝上のもののないときは、炙いた桑白皮を佐として他の樹のものを用ゐる。桑白皮は水を行るもので、螵蛸を率ゐ導いて腎の經に就かしめるものだ。

附方　舊三、新七。【遺精白濁】盜汗、虚勞には、桑螵蛸を炙き、白龍骨と等分を細末にし、二錢づつを空心に鹽湯で服す。（外臺）【小便不通】桑螵蛸を黄に炙つて

三十箇、黄芩二兩を水で煎じ、二回に分服する。（聖惠）【婦人の胞轉】小便の通ぜぬには、桑螵蛸を炙いて末にし、一日二回、飲で方寸匕づつを服する。（産書）【婦人の遺尿】桑螵蛸を酒で炒つて末にし、薑湯で二錢を服す。（千金翼）【妊娠遺尿】禁ぜぬには、桑螵蛸十二箇を末にし、二回に米飲で分服する。（産乳書）【産後の遺尿】或は尿數には、桑螵蛸を炙いて半兩、龍骨一兩を末にし、二錢づつを米飲で服す。（徐氏胎産方）【咽喉腫塞】桑上の螳螂窠一兩を灰に燒き、馬屁勃半兩と研りまぜて蜜で梧子大の丸にし、犀角を煎じた湯で三五丸づつを服す。（總病論）【咽喉骨哽】桑螵蛸を醋で煎じて呷ふ。（經驗良方）【底耳の疼痛】桑螵蛸一箇を燒いて性を存し、麝香一字と研末して半字づつを摻り入る。神效がある。膿あるときは豫め繳淨する。（經驗方）【小兒の(七)軟癤】桑螵蛸を燒いて性を存して研末し、油で調へて傅ける。（危氏方）

(一)雀甕（本經下品）

和名　すずめのたご
英名　Cocoon of Cochlidae.

【釋名】　雀兒飯甕（蜀本）蛅蟖房（別錄）音は髯斯（センシ）である。蚝蟲窠蚝の音は刺（シ）である。躁舍（本經）天漿子（圖經）棘剛子（衍義）紅姑娘（綱目）

(七)軟癤、和名ナツブシ。

(一)矢野曰ク、いらむしが科（Cochlidae）ノ幼蟲ハ刺毛ヲ有シ、人ノ皮膚ヲ刺スニヨリいらむしト稱ス。但シいらむし

ナル名ハ一層廣クけむしノ義ニ用ヰラルルコトアレドモ狹義ノ方可ナラン。いらむしノ繭ハ卵形ヲ呈シ、質厚ク蛾ノ中ヨリ出ヅルヤ繭ノ一端切斷シテ甕狀ヲ呈スルニ至ル、すずめのつぼ、すずめのたご等ノ邦名ノ生ズル所以ナリ。

毛蟲　藏器曰く、毛蟲の作る繭で、形が甕のやうだから雀甕といふ。俗に雀癰と呼ぶは發音が近いからだ。保昇曰く、雀が好んでその甕中の子を食ふところから、俗に雀兒飯甕と呼ぶ。弘景曰く、蛅蟖は背毛で人を螫す。故に蛓と名ける。音は刺である。蛓と同じ。時珍曰く、俗に毛蟲と呼び、また楊瘌子と名ける、螫毒を有つからだ。この蟲は多く石榴樹上に生ずるところから天漿なる名がある。天漿とは甜榴の名だ。宗奭曰く、多く棘枝上にゐるところから棘剛子といふ。

集解　別錄に曰く、雀甕は漢中に出る。樹枝の間に生ずる蛅蟖の房である。八月に採收して蒸す。弘景曰く、蛅蟖は蛓蟲である。石榴樹上にゐるもので、その背毛で人を螫す。その生む卵の形は雞子のやうで、巴豆ほどの大いさだ。

藏器曰く、蛓蟲はよく果樹上にゐる蟲だ。大いさは蠶ほどで、身體の表面、背上に五色の斑毛があり、毒があつてよく人を刺螫する。老期に入ると口中から白汁を吐き、それが凝聚して漸次に硬くなり、あだかも雀の卵のやうになる。その蟲はその甕を繭としてその中に入つて蛹になる。蠶が繭の中にゐるやうなものだ。夏季には羽化して蛾になつて出て、葉の間に蠶の子のやうな子を産み著ける。陶氏が『雞

（二）襉、大觀ニ間ニ作ル。

子のやうな卵を生む』といふは誤だ。

恭曰く、雀甕は、樹間にゐる蠨蛸に似た蟲だ。この物は、紫白色で砷礫の文のやうな有様の（二）襉斑があり、美しいものだ。



「雀　甕」

時珍曰く、蛄蟖は處處の樹上にゐるもので、牡丹の木に就中多い。しかし、藥用には榴棘上に在つて房内に蛹のあるものに限る。あだかも蠨蛸は桑樹上のものに限るやうなものだ。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】日華曰く、毒あり。

【主治】【寒熱結氣、蠱毒、鬼疰、小兒の驚癇】（本經）頌曰く、現に醫家では、小兒の慢驚を治するに、天漿子の蟲あるもの、白殭蠶、乾蠍の三物各三箇を用ゐ、微し炒つて搗いて末にし、一日三回、麻黃の煎湯で調へて一字づつを服し、加減を施す。大いに有效だ。

藏器曰く、雀甕を打破つて汁を取り、小兒に與へて飲ませると無病ならしめる。

小兒が撮口を病み、漸次に口を撮して乳を飲み得ぬには、先づ口の傍を劈つて血を

出し、甕を研つてその汁を塗る。或は、鼠婦と共に生で搗いて塗る。今世間で、出産の際、この物を皆口を開かせ閉ぢぬやうにして置くは、蓋し厭禳の意味である。

附方　新五。【撮口噤風】棘枝に著いた雀兒飯甕子のまだ口を開かぬものの内部の物を取り、乳汁に和して研つて灌ぐ。○又、ある方では、棘剛子五箇、赤足蜈蚣一條を燒いて性を存して研り勻ぜ、飯で麻子大の丸にし、三五丸づつを乳汁で服す。また末一字を服するもよし。(いづれも聖惠)【小兒の臍風】白龍膏——天漿子の蟲あるもの一箇、眞殭蠶を炒つて一箇、膩粉少量を研り勻ぜ、薄荷の自然汁で調へて灌ぐ。毒物を取下す神效がある。(聖惠)【急性、慢性の驚風】口眼喎斜し、搐搦し、痰の盛なるには、天漿子房を皮を去つて生で三箇、乾蠍を生で七箇、硃砂一錢を研り勻ぜ、飯で粟大の丸にし、二丸づつを荊芥湯で服す。(聖惠方)【乳蛾喉痺】天漿子、卽ち紅姑娘を徐徐に嚼んで嚥む。【小兒の癇疾】棘枝上の雀甕を研つてその間の蟲を出し、汁を取つて灌ぐ。(聖惠方)

蠶（本經中品）

和名　かひこ
學名　Bombyx mori, L.

【校正】拾遺の烏爛蠶、及び繭鹵汁、嘉祐の蠶蛻を此に併記した。

【釋名】自ら死んだものを**白殭蠶**と名ける。時珍曰く、蠶の字は朁に從ふ。その頭と身との形容だ。䖵に從ふは、この蟲は數多く繁殖するものとの意味である。



〔蠶〕

俗に蚕の字を書くは誤だ。蚕の字は腆(テン)と發音する。蚯蚓の名稱だ。蠶が風を病んで死ぬと色が自然に白くなる。それで白殭といふ。死んで朽ちぬものを殭といふのである。再び養ふものを原蠶といひ、蠶の屎を沙といひ、皮を蛻といひ、甕を繭といひ、蛹を螝——音は龜(キ)——といひ、蛾を羅といひ、卵を蚢——音は允(イン)——といひ、蠶の初めて卵から出たものを䖸——音は苗(メウ)——といひ、蠶紙を連といふ。

【集解】時珍曰く、蠶は絲を孕む蟲であつて、種類甚だ多く、大、小、白、黑、

斑色などの差異がある。この蟲は陽に屬し、燥を喜(この)み、濕を惡み、固形物は食ふが流動物は飮まず、三眠、三起して二十七日で老いる。卵から出て䖢となり、䖢から蛻けて蠶となり、蠶から繭に、繭から蛹に、蛹から蛾に、蛾から卵に、その卵から復た䖢になる。また胎生のもので母と共に老いるものもある。蓋し神蟲である。南粤(なんえつ)には三眠、四眠、兩生、七出、八出のものがあり、その繭には黃、白の二色がある。爾雅に『蟓(ざう)は桑繭なり、雔由(しういう)は樗繭(ちよけん)なり、蚢(かう)は蕭繭なり。棘繭、欒繭(らんけん)』などとある。いづれもその各ゝ食ふ所の葉に因つて命名したもので、蟓とは今の桑上の野蠶である。今いふ柘蠶(しやさん)は桑蠶と同樣に生育するもので、即ち棘繭である。南海の(一)橫州には風繭絲といふ釣緡(てうびん)に作るものがある。凡そ諸草木には、いづれも蚅(やく)、蠋(しよく)の類の蟲があつて葉を食ひ絲を吐くが、衣類、被服の材料として天下に行渡る蠶絲とは全く比較にならない。故に同等に取扱ふわけには行かぬのである。凡そ蠶類を藥に入れるには、いづれも桑を食ふものを用ゐることになつてゐる。

(二)**白殭蠶**　[修治]　別錄に曰く、(三)潁川(えいせん)の平澤に生ずる。四月、自ら死んだものを取る。濕に中らせてはならぬ。中れば有毒で用ゐられない。弘景曰く、一般人家

(一)橫州ハ唐ニ置ク今ノ廣西省橫縣ノ地ナリ。

(二)白井曰ク、白殭蠶和名こしやり、蠶兒ニ Botrytis Bassi-

ana, Buls ト稱スル菌類ノ寄生ニ由リテ發生スル病蠶ナリ。
(三)潁川ハ漢ノ郡。草部隰草類菊ノ註ヲ見ヨ。
(四)箔ハ養蠶用ノスダレ。

で養蠶中に、時に(四)箔一枚分全部殭れるものがある。それを暴燥した全部壞れないものがそれであつて、現に小白で鹽度あるに似たものを見る。
恭曰く、蠶が自ら殭死すれば色が自然に白くなるものだ。鹽度あるに似たといふは誤である。
頌曰く、所在の養蠶地にある。早蠶、晩蠶に拘らず、ただ桑葉を食つたもの、白色で條直なるものであれば佳し。使用するには絲綿、及び子を去つて炒つて用ゐる。
宗奭曰く、蠶には二番、三番とあるが、第一番の殭蠶が最も佳く、大きくして蛆が無い。
○斅曰く、凡そこれを使用するには、先づ糯米泔で一日浸し、蠶の桑涎が出て水上に蝸涎のやうに浮いてから漉出し、微火で焙じ乾し、布で黄色の肉、毛、并に黑い口甲をよく拭き淨め、搗き篩つて粉のやうにして藥に入れる。

【氣　味】【鹹く辛し、平にして毒なし】甄權曰く、微溫にして小毒あり。○桑螵蛸、桔梗、茯苓、茯神、萆薢を惡む。

【主　治】【小兒の驚癇、夜啼。三蟲を去り、黑䵳を滅し、顏色を好くする。男子

の陰癢病】（本經）【婦人の崩中赤白、産後の腹痛。諸瘡の瘢痕を滅す。末にして丁腫を封ずれば根を抜くに極めて效がある】（別錄）【口禁を治し、汗を發す。白魚、鷹屎白と等分を用ゐて、瘡を治し、痕を滅す】（藥性）【七箇を末にして酒で服すれば、中風失音、幷に一切の風疰、小兒の客忤、男子の陰癢痛、婦人の帶下を治す】（日華）【焙じ研つて薑汁で調へて灌げば、中風喉痺で絕せんとするを治し、喉を下れば立ろに癒える】（蘇頌）【風痰を散ず。結核、瘰癧、頭風、風蟲齒痛、皮膚の風（五）瘡、丹毒の癢きもの、痰瘧癥結、婦人の乳汁の通ぜぬもの、崩中下血、小兒の疳蝕、鱗體、一切の金瘡、疔腫、風（六）痔】（時珍）

發明　元素曰く、殭蠶は、性は微溫、味は微辛。氣味倶に薄く輕く、浮にして升る。陽中の陽である。故に能く皮膚の諸風で蟲が行くやうに覺ゆるを去る。

震亨曰く、殭蠶は、火に屬して土と金、木とを兼ね、老いて金の氣を得るものだから殭れても溶けない。喉痺を治するは、その淸化の氣を取り、相火を從治して濁逆、結滯の痰を散ずるのである。

王貺曰く、凡そ咽喉腫痛、及び喉痺にこれを用ゐれば、咽を下れば立ろに癒える。

（五）瘡ヲ本經逢原ニ疹ニ作ル。
（六）痔ヲ本經逢原ニ疾ニ作ル。

奏效せずといふことなし。一般の救療に大いに有效なものだ。吳幵內翰は『屢〻效驗を擧げた』といつてある。

時珍曰く、殭蠶は、蠶の風病に罹つたものだ。風を治し、痰を化し、結を散じ、經を行らすは、所謂その氣の相感ずるがためであつて、この關係を利用するのである。又、人の指甲の軟薄なるものには、これを烟に燒いて熏ずれば厚くなる。やはり前述の關係だ。蓋し厥陰、陽明の藥である。故にまた諸血病、瘧病、疳病を治するのである。

附方　舊十五、新十九。【一切の風痰】白殭蠶七箇、條直なるものを細研し、薑汁で調へて灌ぐ。（勝金方）【小兒の驚風】白殭蠶、蠍梢等分、天雄尖、附子尖各一錢を微し炮いて末にし、一字、或は半錢づつを薑湯で調へて灌ぐ。甚だ效がある。（寇氏衍義）【風痰喘嗽】夜間臥し得ぬには、白殭蠶を炒つて研り、好き茶末と各一兩を末にし、五錢づつを就寢時に沸湯に泡けて服す。（瑞竹堂方）【酒後の咳嗽】白殭蠶を焙じて研末し、一錢づつを茶で服す。（怪證奇方）【喉風、喉痺】仁存の開關散――白殭蠶を炒り、白礬を半生半燒にして等分を末にし、一錢づつを自然薑汁で調へて

灌ぐ。頑痰を吐出して立ろに效がある。小兒には薄荷、生薑少量を加へて共に調へる。ある方では、白梅肉で和して丸にし、綿で裹んで含み、汁を嚥む。〇朱氏集驗では、白殭蠶を炒つて半兩、生甘草一錢を末にし、薑汁で調へて服す。涎が出て立ろに癒える。(聖惠では、白殭蠶二十一箇、乳香一分を末にし、一錢づつを燒烟して喉中に熏じ入る。涎が出て直に癒える。【急喉風痺】王氏博濟方の如聖散——白殭蠶、天南星等分を生で研末し、一字づつを薑汁で調へて灌ぐ。涎が出て癒える。後に生薑を炙つて含む。〇百一選方では南星がない。【撮口噤風】顏色黃赤となり、氣喘し、啼聲の出ぬものは、胎氣に熱を挾んで毒を心、脾に流すためであつて、それ故に舌强し、唇青く、聚口し、發噤せしめるのである。直殭蠶二箇を觜を去り、やや炒つて末にし、蜜で調へて唇中に傅ける。甚だ效がある。(聖惠方)【(七)大頭風、小兒の驚風】いづれも大蒜七箇を用ゐ、先づ地上を紅く燒き、その上で蒜を一箇づつ磨つて膏にし、殭蠶一兩を頭、足を去つてその蒜上に置き、氣を洩さぬやうに一夜椀で覆ひ、その蠶のみを取つて研末し、鼻、口からその末を嗃ひ、水を含む。有效なものだ。(普濟方)【偏正頭風】並に夾頭風。兩太陽穴に連つて痛むには、聖惠方では、

(七)大頭風ハ頭部丹毒、俗ニナベカブリ病ト云フモノナラン。

白殭蠶を末にし、葱、茶で方寸匕を調へて服す。葉椿の頭風を治する方では、白殭蠶、高良薑等分を末にし、一錢づつを就寢時に茶で服し、一日二服する。【卒然の頭痛】白殭蠶を末にし、二錢づつを熱水で服す。立ろに癒える。（斗門方）【牙齒の疼痛】白殭蠶の條直なるものを生薑と共に炒つて赤黃色にし、薑を去つて末にし、皂角水で調へて擦る。直に止まる。（普濟）【風蟲牙痛】白直殭蠶を炒り、蠶蛻紙を燒いて等分を末にし、それを擦つて良久して鹽湯で口漱ぐ。（直指方）【瘧疾の止まぬもの】白殭蠶の條直なるもの一箇を七段に切つて綿で裹み、丸にして硃砂を衣にかけ、それを一服とし、日出前に東に向つて桃李枝七寸の煎湯で呑下す。（院方）【腹內龜病】普濟方の詩に『人間の龜病は言ふに堪へず、肚裏に生成して硬くして磚に似たり。白死殭蠶、白馬尿、時刻を過さずば軟にして綿の如にす』とあつて、神效がある。【面上の黑䵟】白殭蠶末を水で和して搽る。（聖惠方）【粉滓面䵟】顏色を好くする。白殭蠶、黑牽牛を細研して等分を末にし、毎日澡豆のやうにして用ゐる。（斗門方）【癮疹風瘡】疼痛するには、白殭蠶を焙じ研つて酒で一錢を服す。立ろに瘥える。（聖惠）【野火丹毒】背上、兩脇から起るものである。殭蠶十四箇の愼火草と和して搗いて塗る。

（揚氏産乳）【小兒の鱗體】皮膚が蛇皮の鱗甲のやうになるもので、原因は氣血の否澀である。また胎垢(たいこう)ともいひ、蛇體ともいふ。白殭蠶を嘴を去つて末にし、湯に煎じて浴す。あるひは蛇蛻(じやぜい)を加へる。（保幼大全）【小兒の久疳】體虛して物を食はなくなる。諸病後の天柱骨倒は、醫師の不明から五軟と診(み)るものである。白殭蠶の直なるものを炒つて研り、半錢づつを薄荷酒で服す。これを金靈散と名ける。（鄭氏方）【小兒の口瘡】全體に白きものには、白殭蠶を黄に炒り、黄肉毛を拭ひ去つて研末し、蜜で和して傅ける。立ろに效がある。（小兒宮氣）【風疳蝕瘡】前記の方に同じ。【項上の瘰癧】白殭蠶を末にし、一日三回、水で五分を服す。十日にして瘥える。（外臺）【風痔腫痛】不定期に或は發し或は歇(や)むものである。白殭蠶二兩を洗つて剉み、黄に炒つて末にし、烏梅肉で和して梧桐子大の丸にし、五丸づつを空心に薑蜜湯で服するが妙である。（勝金方）【一切の金瘡】及び刃斧傷(にんふしやう)には、白殭蠶を黄に炒つて研末して傅ける。立ろに癒える。（斗門）【乳汁不通】白殭蠶末二錢を酒で服し、少頃して脂麻茶一（八）盞を服し、數十回頭髮を梳(くしけづ)る。乳汁は泉のやうに出る。（經驗方）【崩中下血】止まぬには、白殭蠶、衣中の白魚等分を末にし、一日二回、井華水で服す。（千

（八）大觀ニ盞ヲ錢ニ作ル。

(九)白井曰ク、和名たれこ。

(一〇)矢野曰ク、蠶蛹、英名 Pupae of silk-worm.

(八)【重舌、木舌】殭蠶を末にして吹く。痰を吐して甚だ妙である。〇ある方では殭蠶一錢、黃連を蜜で炒つて二錢を末にして摻る。涎が出て妙である。(陸氏積德方)

【腸風下血】殭蠶を炒つて嘴、足を去り、烏梅肉を焙じて各一兩を末にし、米糊で梧子大の丸にし、一日三回、百丸づつを食前に白湯で服す。(筆峯雜興方)

(九)**烏爛死蠶**(拾遺)【氣味】【小毒あり】藏器曰く、これは簇上で死んだ黒く臭いものである。

【主治】【蝕瘡の根を有つもの、及び外野雞病。いづれもこれを傅ける。白死のものは白遊瘮に主效があり、赤死のものは赤遊瘮に主效がある】(藏器)

(一〇)**蠶蛹** 瑞曰く、絲を繰つた後の蛹を、今世間では小蜂兒と呼んで食ふ。思邈曰く、猘犬に嚙まれたものは終身これを食ふことを忌む。食へば必ず毒が發して治療し難い。

【主治】【炒つて食へば、風、及び勞瘦を治す。研つて瘑瘡、惡瘡に傅ける】(大明)【末にして飲で服すれば、小兒の疳瘦を治し、肌を長じ、熱を退け、蚘蟲を除く。煎汁を飲めば消渴を止める】(時珍)

〔附　方〕　新一。【消渴煩亂】蠶蛹二兩を、無灰酒一中盞、水一大盞で一中盞に煮て温服する。（聖惠方）

繭鹵汁　藏器曰く、これは繭中の蛹の汁であつて、鹹鹵をいふのではない。繭甕の下に出るものを取收める。

〔主　治〕　【あらゆる蟲の肉に入りたる蠹蝕、瘙疥、及び牛馬の蟲瘡には、湯にして浴す。小兒瘡疥の殺蟲には、竹筒に盛つて浸す。山蜍、山蛭の肉に入りたるもの、蚊子、諸蟲の咬毒にもよし。預め一筒に鹵汁を入れ、一蛭を取つてその中に入れて帶び、幷に乾海苔一片を所持しても諸蛭を辟ける】（藏器）

〔發　明〕　藏器曰く、蘇恭の蛭の註に『山間の住民には彼等特有の療法がある』とあるは、蓋しこの法だ。時珍曰く、山蛭は蛭の條に記載してある。山蜍——音は余（ショ）——とは蜘蛛のことだ。嚙まれると甚だ毒がある。

（二）**蠶繭**　已に蛾を出したものである。〔氣　味〕　【甘し、温にして毒なし】

〔主　治〕　【燒灰を酒で服すれば、癰腫の頭なきものを治し、翌日破れる。又、諸疳瘡、及び下血、血淋、血崩を療す。煮汁を飲めば、消渴、反胃を止め、蚘蟲を除

（二）矢野曰く、蠶繭、英名 Silkworm cocoon.

く】（時珍）　○弘景曰く、繭甕は方術家で使用する。

發明　時珍曰く、蠶繭は方書に多く用ゐてある。然るに諸家のいづれの本草にも言及してないのは、誠に研究上の缺漏だ。近世では、これを癰疽の治療に鍼の代用にするが、一箇を用ゐれば一箇の頭が生じ、二箇を用ゐれば二箇の頭が生じ、まことに神效無比である。煮た湯の消渴を治することは、古方に甚だ稱揚してある。朱丹溪氏は『この物は火に屬して陰の作用があり、能く膀胱中の相火を瀉し、淸氣を引いて口に上朝する。それで能く渴を止めるのだ』といつてある。繰絲湯、及び絲綿の煮汁、いづれも同功だ。又、黃絲絹は能く脬を補し、錦灰は血を止める。いづれも服器部に記載してある。

附方　新五。【痘瘡、疳蝕】膿水の絕えぬには、蠶蛾の出た繭に生白礬末を塡滿して煆き枯し、末にして擦る。甚だ效がある。（陳文仲小兒方）【口舌に生じた瘡】蠶繭五箇で蓬砂を包んで瓦上で焙じ焦し、末にして抹る。【大小便血】蠒黃散――腸風、大小便血が淋瀝して疼痛するを治す。蠒黃、蠶蛻紙をいづれも燒いて性を存し、晚蠶沙、白殭蠶をいづれも炒つて等分を末にし、麝香少量を入れ、一日三回、二錢づ

つを米飲で服す。甚だ效がある。（聖惠方）【婦人の血崩】方法は上に同じ【反胃吐食】蠶繭十箇の煮汁で雞子三箇を烹て食ひ、無灰酒で飲下す。一日二服すれば神效がある。或は繰絲湯で粟米粥を煮て食ふ。（惠濟方）

（一二）**蠶蛻**【釋名】**馬明退**（嘉祐）**佛退**

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【血病。婦人に益あり】（嘉祐）【婦人の血風】（宗奭）【目中の翳障、及び疳瘡を治す】（時珍）

（一三）**蠶連**【主治】【吐血、鼻洪、腸風瀉血、崩中帶下、赤白痢。疔腫瘡に傅ける】（日華）【婦人の血露を治す】（宗奭）【牙宣、牙痛、牙癰、牙疳、頭瘡、喉痺、風癲、狂祟、蠱毒、藥毒、沙證腹痛、小便淋閟、婦人難產、及び吹乳疼痛】（時珍）

【發明】禹錫曰く、蠶蛻は、現に醫家では、多く蠶子の出たばかりの紙に著いてゐる殼を用ゐ、東方の諸醫は、老蠶の眠起に蛻した皮を用ゐる。功用は兩者相近いが、蛻皮を用ゐるが正しいのである。藥には微し炒つて用ゐる。

宗奭曰く、蠶蛻は、眠起の時に蛻した皮を用うべきものだ。蠶連を灰に燒いて用ゐてもよし。

（一二）白井曰ク、和名かひこのたれのから。

（一三）白井曰ク、和名たれがみのから。

時珍曰く、馬明退と蠶連紙との功用は相同じものだ。やはり蟬蛻、蛇蛻と同じやうな意味で應用する。但し古方で蠶紙を多く用ゐたのは、その物が手近に得易かつたからである。

附方　舊四、新十五。【吐血の止まぬもの】蠶蛻紙を燒いて性を存し、蜜で和して芡實大の丸にし、含み溶して津を嚥む。(集驗)【牙宣、牙壅】及び口瘡。いづれも蠶蛻紙を灰に燒き、乾して傅ける。(集驗)【風蟲牙痛】蠶紙の燒灰を擦り、良久して鹽湯で漱ぐ。(直指方)【走馬牙疳】集驗では、蠶蛻紙灰に麝香少量を入れて貼る。○直指では白殭蠶等分を加へる。【一切の疳瘡】馬明退の燒灰三錢、輕粉、乳香少量を用ゐ、先づ溫漿水で洗淨してから傅ける。(儒門事親)【小兒の頭瘡】蠶蛻紙を燒いて性を存し、輕粉少量を入れて麻油で調へて傅ける。(聖惠)【纒喉風疾】蠶蛻紙を燒いて性を存し、煉蜜で和して芡實大の丸にし、含み溶して津を嚥む。(集驗)【耳を熏じて聾を治す】蠶蛻紙を撚にして麝香二錢を入れ、筆筒に入れて燒烟して熏ずる。三回で開くものだ。【癲狂邪祟】凡そ狂發して走出し、或は自ら高貴なるものの如く妄想し、自己を神と稱し、或は悲泣し、吟呻するものは邪祟のためである。蠶紙を

（二四）沙證ハ虎列剌病ノ如キモノ。

灰に焼き、酒、水の任意のもので方寸匕を服す。また風癲をも治す。（肘後方）【（二四）沙證壯熱】江南地方に沙證の病がある。それは傷寒のやうな狀態で、頭痛し、壯熱し、嘔惡し、手足の指の末端が微厥し、或は腹痛し、悶亂し、須臾にして死亡する。これには、先づ蠶蛻紙を剪碎し、瓷中に入れて碟で蓋ひ、滾つた湯を沃いで固く封じ、良久して熱に乘じて服し、暖臥して汗を取る。（活人書）【蠱藥の中毒】顏色青くして脈絶し、腹脹して吐血するものである。これを服すれば活きる。蠶蛻紙を焼いて性を存して末にし、新汲水で一錢を服す。（嶺南衛生方）【諸藥の中毒】蠶紙數枚を灰に焼いて冷水で服す。（衛生易簡方）【小便澀痛】通ぜぬには、蠶蛻紙を焼いて性を存し、麝香少量を入れ、二錢づつを米飲で服す。（王氏博濟方）【血の如き熱淋】蠶紙の焼灰に麝香少量を入れ、水で二錢を服す。極めて有效の方である。（衛生家寶）【崩中の止まぬもの】蠶故紙一枚を剪碎して炒り焦し、槐子を黄に炒り、各等分を末にして酒で服す。立ろに癒える。（衛生易簡方）【吹奶疼痛】馬明退の焼灰一錢五分、輕粉五分、麝香少量を酒で服す。（儒門事親）【婦人難產】蠶布袋一枚、蛇蛻一條を新瓦中に入れて鹽泥で固濟し、煆いて末にし、楡白皮湯で調へて服す。（集成）【婦人斷產】蠶子故

（二五）白井曰ク、和名いとひきなべのゆ。

（一）秦、晉ハ今ノ山西、陝西兩省地方。金部鐵ノ註ヲ見ヨ。

紙一尺を燒いて末にし、酒で服す。終身產をせぬ。（千金）【疾痛下血】蠶紙半枚を碗內で燒灰して酒で服す。自から除く。（奚囊備急方）

（二五）**繰絲湯**　［主治］【消渴を止むるに大いに效驗がある】（時珍）

原蠶（別錄中品）

和名　なつこ
學名　Bombyx mori, L.

［釋名］**晚蠶**（日華）**魏蠶**（方言）**夏蠶**（廣志）**熱蠶**　弘景曰く、原蠶とは二度目に飼ふ蠶のことで、俗に魏蠶と呼ぶ。宗奭曰く、原とは原復敏速の意味で、此にいふものは第二番目の蠶のことだ。

時珍曰く、按ずるに、鄭玄の周禮の註に『原は再なり』とあつて、再び養ふものといふ意味に解してある。郭璞の方言の註には『魏とは細のことで、（一）秦、晉地方でいふ言葉だが、今はそれが轉訛して二蠶といふ』とあるがそれである。永嘉記には『多くの蠶は三月から十月までの間に養ふもので、八種類の種別がある。蠶種をば蚖といひ、再養を珍といひ、珍子を愛といふ』とある。

［集解］頌曰く、原蠶は東南方の州郡で多く養ふ。これは一年に二回養ふもの

で、俗に晩蠶と呼ぶ。北方の地ではあまり養はない。周禮に『原蠶を禁ず』とあり、鄭康成の註に『蠶は火に生じ、秋に藏れ、馬と氣を同くする。物は兩ながら盛大にはならぬもので、原蠶を禁ずるは、これを飼へば馬に害があるためだ』とある。それに相違ないが、しかし馬に害ありといふは禁ずる理由中での一事項に過ぎない。淮南子に『原蠶は一歳に二回收穫するのだから有利なものには相違ないが、王者の法に於てこれを禁じたのは、そのために桑を殘ふからのことだ』とあるが意を得てゐる。一般には既に養ふものが稀である。賣藥商の有つ品は多くは（二）早蛾であつて、藥用にはならない。

弘景曰く、僵蠶を末にして馬齒に塗れば草を食ひ得なくなり、桑葉でそれを拭ひ去ればまた食ふやうになる。これは蠶が馬の類だといふことを示すものだ。

時珍曰く、馬と龍と氣を同うするところから龍馬なるものがあつて、蠶も馬と氣を同うするところから、蠶にも龍頭、馬頭などいふものがある。蜀地方では、蠶の早期のものを馬頭娘といふ。好事家はそれを附會して奇怪な說を作り、馬皮に女を卷いて桑樹の中に入れたところ、それが化して蠶となつたのだなどといふ。これは

（二）早蛾ハ春蠶ヲ云フ。

妄言だ。北方の地では馬を重ずるのゆゑにこれを禁じ、南方では馬が無いから、一歳に二回、三回、乃至七、八回も孵化して養ふものがある。けれども、古代の聖王は一般の動植物にまでその仁愛を及ぼしたので、この飼養を禁じたのは、一歳のうちに二回までも湯鑊を加へて、この蟲類に苦痛を受けしむるに忍びぬといふ意味と、且つ農事の妨となるからであつて、やはり單に馬を害するとか、桑を殘ふとかいふに止まるわけではなかつたのだ。

(三)**雄原蠶蛾** [氣味] 【鹹し、溫にして小毒あり】時珍曰く、按ずるに、徐之才の藥對には『熱なり、毒なし 藥に入れるには炒つて翅、足を去つて用ゐる』とある。

[主治] 【精氣を益し、陰道を强くし、交接に倦まざらしめ、また精を止める】(別錄)【陽事を壯にし、泄精、尿血を止め、水臟を暖め、暴風、金瘡、凍瘡、湯火瘡を治し、瘢痕を滅す】(時珍)

[發明] 宗奭曰く、蠶蛾は、第二番のものを用ゐるはその生育の敏速な點を取るのである。時珍曰く、蠶蛾は性の淫なもので、繭から出ると直に媾接し、身體が枯槁するに及んで始めて已める。故に强陰、益精にこれを用ゐるのだ。

(三) 矢野曰ク、Male silkworm moth.

正誤 頌曰く、現に、小兒の撮口、及び發噤するものを治す。晩蠶蛾二箇を黄に炙いて研末し、蜜で和して唇の內側へ塗れば、それで瘥える。時珍曰く、この方は聖惠方に記載してあるもので、これは白殭蠶を用ゐるのだ。蘇氏が引擧して蠶蛾としたのは誤である。蠶蛾に就ては、元來『驚を治す』なる文はない。此に正して置く。

附方 舊二、新八。【男子の陰痿】まだ卵を著けぬ蠶蛾二升を頭、翅、足を去り、炒つて末にし、蜜で梧子大の丸にし、毎夜一丸づつを服す。十人の女を御し得る。菖蒲酒を用ゐればそれが止む。（千金方）【遺精白濁】晩蠶蛾を焙じ乾し、翅、足を去つて末にし、飯で菉豆大の丸にし、四十丸づつを淡鹽湯で服す。この丸は常に火で烘つて置かねば糜濕し易い。（唐氏方）【血淋疼痛】晩蠶蛾を末にし、熱酒で二錢を服す。（聖惠方）【小兒の口瘡】及び風疳瘡。宮氣方では、晩蠶蛾を末にして貼るが妙である。○普濟方では、小兒の口瘡、及び生後百日以內の口瘡を治するに、麝香少量を入れて摻る。【血を止め肌を生ず】蠶蛾散——刀斧の傷創で箭のやうに出血するを治す。晩蠶蛾を炒つて末にして傅ける。直ちに止むの效がある。（勝金方）【刀斧金瘡】

(四) 矢野曰ク、Silkworm excrements.

端午の日の正午に取つた晩蠶蛾、石灰、茅花を搗いて團にし、草で蓋ふて熱を發せしめてから取つて貯ひ、時に臨んで刮下して末にして摻る。【竹刺の肉に入つたとき】五月五日に晩蠶蛾を取つて生きたまま竹筒に入れ、自然に乾死させて末にし、少量を取つて津で和して塗る。（便民圖纂）【蛇虺の咬傷】生蠶蛾を研つて傅ける。（必效方）【玉枕の瘡】枕骨上に生じ、癰のやうで破れて後筋頭のやうなるには、原蠶蛾を炒り、石韋と等分を末にし、乾して貼つて瘥えしめる。（聖濟總錄）

(四)**原蠶沙** 頌曰く、蠶沙、蠶蛾はいづれも晩出のものを用ゐるが良し。時珍曰く、蠶沙を用ゐるには、晒し乾して淘淨し、再び晒して用ゐれば、久しく貯藏しても腐敗せぬ。

［氣味］【甘く辛し、温にして毒なし】時珍曰く、硇砂、焰硝、粉霜を伏す。

［主治］【腸鳴、熱中、消渴、風痺、癮疹】（別錄）【黃に炒つて袋に盛り、酒に浸して用うれば、風緩の諸節不隨、皮膚の頑痺、腹內の宿冷、冷血、瘀血、腰脚の冷疼を去る。炒り熱して袋に盛り、偏風の筋骨癱緩、手足不隨、腰脚軟、皮膚の頑痺を熨す】（藏器）【消渴、癥結、及び婦人の血崩、頭風、風赤眼を治し、風を去り、

（五）痺、大觀ニ閉ニ作ル。

濕を除く】（時珍）

【發明】　弘景曰く、蠶沙は多く諸方に入れる。風を熨するに限つたものではない。

宗奭曰く、蠶屎は牛の飼糧として穀物の代用になる。三升の醇酒を蠶沙五斗に拌ぜて甑で蒸し、暖室中に置いて上に油單を鋪き、風冷、氣（五）痺、及び發病後間もなき癱風の患者をその沙上に横臥させ、患部を直接それに就かせて被で厚く蓋ふて汗を取る。但し虚した患者には大熱を防がねばならぬ。昏悶するときは頭と顔を露出させる。もしなほ全癒せぬときは一日隔てて再び試みる。

時珍曰く、蠶は火に屬し、その性は燥である。燥は能く風に勝ち、濕を去るものだから、蠶沙は主として風濕の病を療するのだ。ある風痺の患者にこの熨法を實行して奏效した經驗がある。按ずるに、陳氏經驗方に『一抹膏――爛弦風眼を治す。蠶沙を眞麻油で二三晝夜浸して研細し、篦子で患部に塗る。病の新、舊を問はず、一晝夜經てば癒える。從兄盧少樊がこの病を患つたとき、これを用ゐて癒えた。親しく書册に記して置く』とある。時珍の家の一下婢も十餘年この病を患つてゐたが、

(六)熱、大觀ニ熱ニ作ル。

(七)大觀ニ此處ニ千金方三字アリ。

(八)大觀ニ五ヲ二ニ作ル。

試にこれを用ゐて二三回で頓に瘳えた。その功力は、やはり風を去り濕を收める點に在る。又、桑柴灰の淋汁で煮た鼈肉と共に丸にしたものは腹中の癥結を治す。鼈の條を見よ。李九華は『蠶沙を煮た酒は色が清くして美味だ。また能く疾を療ずる』といつてある。

附方　舊四、新六。【半身不遂】蠶沙二碩を二箇の袋に盛つて蒸(六)熱し、更互に患部を熨し、同時に羊肚と粳米で煮た粥を日毎に食ふ。一日一回、羊肚一箇を食ひ、十日繼續すれば止む。【(七)風瘙癮疹】痒くして瘡となるには、蠶沙一升、水(八)五斗を一斗一升に煮取つて滓を去り、洗浴して風に當らぬやうにする。(聖惠方)【頭風白屑】癢きには、蠶沙の燒灰で取つた淋汁で洗ふ。(聖惠方)【眯目の出ぬもの】蠶沙の淨きものを揀り取り、空心に十箇を新汲水で呑下す。嚼み破つてはならぬ。(聖惠)【消渴飲水】晩蠶沙を焙じ乾して末にし、二錢づつを冷水で服す。數服に過ぎずしてよし。(斗門方)【婦人の血崩】蠶沙を末にし、酒で三五錢を服す。(儒門事親)【月經久閉】蠶沙四兩を砂鍋で半黄に炒り、無灰酒一壺に入れて煮沸し、澄して沙を去り、一盞づつを溫服すれば通ずる。【胎中の女を男に轉ずる】婦人が始めて妊娠を自覺したと

き、一日三回、原蠶屎一箇づつを井華水で服す。(千金)【跌撲傷損】扭閃や脱臼した患者には、蠶沙四兩を黄に炒り、綠豆粉四兩を黄に炒り、枯礬二兩四錢と末にし、醋で調へて傅け、絹で包んで縛る。三四回換へれば癒える。産婦に近くことを忌む。(邵眞人經驗良方)【男子、婦人の心痛】忍び難きには、晩蠶沙一兩を滾つた湯に泡けて濾淨し、清水を取つて服すれば止る。(瑞竹堂方)

石蠶(一)　(本經下品)

和名　いさごむし
英名　Caddice fly larva.

校正　有名未用の石蠹蟲を併せ入る。

釋名　沙蝨(本經)　石蠹蟲(別錄)　石下新(拾遺)　弘景曰く、沙蝨は東方地方の水中にゐる細蟲であつて、人が水に入つて浴すると身體に著き、ただ見ただけではそれと判らぬが、鍼で刺したやうに鋭く痛むもので、その部分を挑げて見ると、やはりその蟲がゐる。しかし、今此にいふ物は名稱はそれと同一だが、蟲そのものは異ふらしい。時珍曰く、按ずるに、呉普本草には、沙蝨を沙蜂と書いてある。

集解　經に曰く、石蠶は(二)江漢の池澤に生ずる。

(一) 矢野曰ク、毛翅目(Trichoptera)ニ屬スル昆蟲ノ幼蟲ニシテ水中ニ棲息シ、砂又ハ植物ノ破片等ヲ以テ巣ヲ造ル、成蟲ヲとびげらト云フ。

(二) 江漢ハ今ノ湖北

省ノ東半部漢水、長江ノ流域、即チ民國ニ江漢道ト稱スル一帶ノ地ヲイフ。

(三)伊洛ハ草部隰草類木賊附錄問荊ノ註ヲ見ヨ。

宗奭曰く、石蠶は處に依つて山河中に多くゐる。水中の石上に附生し、釵股のやうで長さ一寸ばかりの絲繭を作つてその身を蔽ふ。その色は泥のやうだ。その中に蠶がゐるので石蠶といふ。やはり只の水中の蟲である。方家では用ゐることが稀だ。



〔石　蠶〕

別錄に曰く、石蠹蟲は石中に生ずる。

藏器曰く、石蠹、一名石下新。今は(三)伊洛の間の水底の石下にゐる。形狀は蠶のやうで、絲を吐いて繭のやうに小石を連綴する。春、夏に羽化し、小蛾となつて水上に飛ぶ。

時珍曰く、本經には石蠶とあり、別錄には石蠹とあるが、此に陳、寇二氏の說、及びその主治功用に就いて考察するに、蓋し同一物なること疑ない。又、石類にも石蠶と呼ぶものがあるが、これとは同物でない。

【正誤】弘景曰く、李當之は『石蠶は、江左ではその實物を識らずして草の根だと思つてゐる。その實は蟲に類し老蠶のやうな形で石上に生え附くものだ。傖人

はこれを取つて食ふ。味鹹く微し辛い』といつてある。その言ふ所に道理はあるが、ただ本經にいふ江漢は(四)滄地ではない。大體この物は海中の蛤、蠣などのやうな生氣の物で、石に附いて動かないがいづれも動物なのである。今俗間で色黑くして角節多く、やはり蠶に似た草根を用ゐてゐるが、恐らく此にいふ石蠶の實物ではないと思ふ。方家では用ゐない。

恭曰く、石蠶は、形は蠶に似て、細小で角節があり、色が青黑い。江漢の石の側つた穴中に生ずる。(五)岐、(六)隴の地方にもゐる。北方地方では多く用ゐないので、採收の事實も遂に跡を絕つた。

韓保昇曰く、(七)李氏はこれを草の根といひ、陶氏はこれを生氣の物といひ、蘇恭の說では、半ば草のやうでもあり、半ば蟲のやうでもあるが、いづれも妄說だ。この蟲は所在の水石の間にあるもので、取つて魚を釣る餌にするものだ。(八)馬湖、(九)石門に最も多く、彼の地ではこれを食ふが、鹹く微し辛いといふことだ。

頌曰く、石蠶は、陶氏、蘇氏はすべて定論が無い。蜀本の說が正しいのである。現に(一〇)川、廣地方に多くある。草の根で蠶に似たといふものにもやはり石蠶なる名

(四)滄トハ水濱ヲイフ。後魏ニ滄州ヲ置ク、今ノ直隷省天津府滄縣ノ地ナリ。此ニ滄トアルハ恐ラク傖ノ誤ナラン。傖トハ賤夫ノ稱ナリ。六朝當時南方人ガ北方人ヲ譏稱シテ傖夫トイフ。傖地即チ當時ノ北朝ノ領域ナリ。江漢、即チ今ノ湖北省ノ地ハ當時南朝ニ屬シ、後ニ後梁此ノ地ニ據ル。

(五)岐州ハ草部山草類秦艽ノ註ヲ見ヨ。

(六)隴州ハ西魏ニ置ク。今ノ陝西省隴縣ノ地ナリ。

(七)弘景ノ引用セル李氏說ノ原文ハ『李當之云石蠶江左不識謂爲草根其實類蟲形如老蠶生附石上傖人得而食之味鹹微辛』

稱があつて、(一一)福州に產する。現に(一二)信州の山石上には四時を通じてこの物があつて、やはり採取して藥に入れる。詳細は菜部草石蠶の條に記載してある。

附錄　**雲師雨虎**　時珍曰く、按ずるに、遁甲開山圖に『(一三)霍山に雲師雨虎あり』とあり、榮氏の註に『雲師は蠶のやうで長さ六寸、兎のやうな毛がある。雨虎は蠶のやうで長さ七八寸、(一四)蛙のやうに雲雨の際に石の內から出て來る。炙いて食へるものだ』とある。やはり石蠶の類だ。

氣味　【鹹し、寒にして毒あり】保昇曰く、鹹く微し辛し。吳普曰く、雷公は鹹し毒なしといふ。

主治　【(一五)五癃、石淋を破り、胎を墮す。その肉は結氣を解し、水道を利し、熱を除く】(本經)【石蠹蟲は、石癃、小便不利に主效がある】(別錄)

發明　宗奭曰く、石蠶を草といふは謬だ。經に『肉は結氣を解す』とある。諸註は何故にこの點に正確な考察審定を試みなかつたであらうか。

時珍曰く、石蠶は皮殼の著いたままを用ゐ得るものだ。肉といふときはその皮殼を去つて用ゐる場合を指す。

トアリ。韓保昇ハ之ヲ『江左では識らないが、謂ふに草の根である。その結實は蟲に似てゐる』ト讀ミタルガ如シ。然レドモ原文ノ文脈上ヨリコレヲ見レバ本書譯文ノ如ク讀ムベキニ似タリ。

(八)馬湖ハ江名。金沙江ノ下流ナリ。明ニ府ヲ置ク。府治ハ今ノ四川省屏山縣ニ在リ。

(九)石門ハ石門山ヲ中心トスル一帶ノ地ナリ。石門山ハ今ノ四川省慶符縣ノ南五支里ニ在リ。

(一〇)川ハ今ノ四川省地方、廣ハ廣東、廣西兩省地方ナリ。

(一一)福州ハ石部肉石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

(一二)信州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(一三)霍山、爾雅ニ『霍山爲南嶽』トアリ、郭璞ノ註ニ『即天柱山。潛水所出』トアリ、邢昺ノ釋ニハ衡山一名霍山トナス。衡山、即チ今ノ湖南省ノ衡山。天柱山、即チ今ノ安徽省霍山縣ノ西ノ霍山ナリ。

(一四)衡嶽志ニ、兩虎似蛹長七八寸似蛭トアリ。

(一五)五癃ハ五淋ニ同ジ。

(一)矢野曰ク、九香蟲ハ水中ニ棲息スル有吻目ニ屬スル一種ノ昆蟲ナルガ如キモ明ナラズ、現今此名ニヨリテ藥用ニ供セラルヽモノハ有吻目ノかめむしノ一種ナリ。

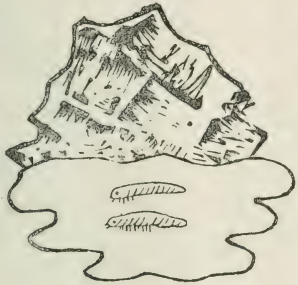
(二)永寧衛ハ今ノ貴州省關嶺縣ノ地ナリ。

(一)九香蟲（綱目）

和名　未詳
學名　未詳

釋名　黑兒蟲

集解　時珍曰く、九香蟲は貴州(二)永寧衛の赤水の河中に産する。大いさは小指の端ほど、形狀は水黽のやうで、身は青黑色だ。冬季には石下に蟄伏する。それを地方民が多く取つて贈答品などに用ゐる。驚蟄の節後には飛んで出るので、その頃のものは用ゐられない。



〔九香蟲〕赤水衛

氣味　【鹹し、溫にして毒なし】

主治　【膈脘の滯氣、脾、腎の虧損。元陽を壯にする】(時珍)

發明　時珍曰く、攝生方の烏龍丸は前記の病證を治し、久しく服すれば健康を益す。四川の總兵何卿氏は常服して效を得た。その方は、九香蟲一兩を半生に焙

じ、車前子を微し炒り、陳橘皮と各四錢、白朮を焙じて五錢、杜仲を酥で炙つて八錢を用ゐ、右を末にして煉蜜で梧桐子大の丸にし、毎服一錢五分を鹽白湯、或は鹽酒で朝、夕各一服する。この方はこの蟲に妙處が在る。

海蠶（海藥）

和名 未詳
學名 未詳

【集解】李珣曰く、按ずるに、南州記に『海蠶は南海の山石の間に生ずる。形狀は蠶のやう、大いさ拇指ほどのもので、その沙は甚だ白く、玉粉のやうな狀態で、毎箇に節がある。眞物は得難いものだ。彼の地方人は葛粉や石灰を水で捜ぜ、梳の齒で型を印して僞物を作る。それはたとひ服しても益がないばかりか、反て能く害をなすものだ。深く注意を要する』とある。

沙 【氣味】【鹹し、大溫にして毒なし】

【主治】【虛勞冷氣、諸風不遂。久しく服すれば、虛羸を補し、身體を光澤にし、身を輕くし、天年を延べ、老衰せぬ】（李珣）

雪蠶（綱目）

和名 未詳
學名 未詳

釋名 雪蛆

集解 時珍曰く、按ずるに、葉子奇の草木子に『雪蠶は(一)陰山以北、及び峨嵋山に生ずる。北方人はこれを雪蛆といふ。この兩山嶽は幾千年の積雪が消えない。その中にこの蟲を生ずるのである。大いさは瓠ほどのもので、味が極めて甘美だ』とある。又、王子年の拾遺記に『(二)員嶠の山に水蠶といふがある。長さ六七寸、黑色で鱗角があり霜雪で覆はれると長さ一尺ほどの繭を作る。その繭から出る五色の絲で織つた文錦は、水に入つても濡れず、火に投じても燎けない。堯の時に海人がこれを獻上した。その質は輕く暖かで柔滑なものだつた』とある。按ずるに、これもやはり雪蠶の類のものだ。

氣味 【甘し、寒にして毒なし】

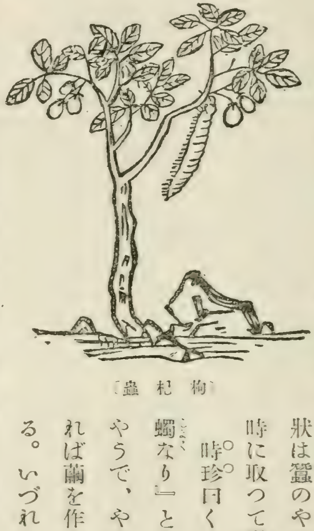
主治 【內熱、渇疾を解す】（時珍）

(一)陰山、卽チ今ノ蒙古ノ陰山山脈ニシテ寧夏ノ賀蘭山ヨリ、歸化城ノ境ニ連亙ス。峨嵋山ハ石部菩薩ノ註ヲ見ヨ。

(二)員嶠、列子ニ『渤海之東。有大壑焉。其中有五山。一曰岱輿。二曰員嶠。三曰方壺。四曰瀛洲。五曰蓬萊』トアリ。海中ノ仙山ナリ。

枸杞蟲（一）（拾遺）

和名　くこのむし
英名　Caterpillar on Lycium chinense.



（枸杞蟲）

釋名　蠋（爾雅）

集解　藏器曰く、この蟲は、枸杞の樹上に生じて枸杞の葉を食ふもので、形狀は蠶のやうだ。繭を作つて蛹になつた時に取つて曝乾し、貯藏して用ゐる。

時珍曰く、これは爾雅に所謂『蚅烏は蠋なり』とあるそのものだ。形狀は蠶のやうで、やはり五色のものがある。老いれば繭を作り、蛾に化して子を生み付ける。いづれの草木にもこの蟲はあるのだが、やはりそれぞれ食ふ所の草木の性に隨つて差異が生ずる。故に廣志に『藿蠋は香しく、槐蠋は臭い』といつてある。

氣味　【鹹し、溫にして毒なし】

主治　【陽道を益し、人體を悅澤にし、

（一）大觀ニ枸杞上蟲トアリ。矢野曰ク、蛾ノ一種ノ幼蟲くこかひこ（貝原）又はくひ（啓蒙）ノ名ヲ充ツレドモ何種ナルカ明ナラズ。

子を生ましめる。黄に炙き、地黄末と和して丸にして服すれば、大いに陽を起し、精を益す】（藏器）【腎臟病、風虛を治す】（時珍）

〔一〕蘹香蟲（綱目）

和名　ういきやうむし（啓蒙）
英名　Caterpillar on Foeniculum vulgare.

集解　時珍曰く、蘹香の枝葉中に生ずる。形狀は尺蠖のやうで色が青い。

主治　【小腸疝氣】（時珍）

本草綱目蟲部第三十九卷　終

〔一〕矢野曰ク、啓蒙ニハあげはのてふノ類ノ幼蟲カトナス、若シ然ラバきあげは（Papilio machaon, L.）カ、但シ尺蠖ハしやくとりむしナリ種名未詳。

本草綱目蟲部

第四十卷

本草綱目蟲部目錄第四十卷

蟲の二　卵生類下二十二種

青蚨 拾遺　蛺蝶 綱目　蜻蛉 別錄 卽ち蜻蜓。

樗雞 本經 卽ち紅娘子。　棗貓 綱目　斑蝥 本經　芫青 別錄

葛上亭長 別錄　地膽 本經　蜘蛛 別錄　草蜘蛛 拾遺　壁錢 拾遺

螲蟷 拾遺 卽ち土蜘蛛。　蠍 開寶　水蛭 本經

蟻 綱目 白蟻を附す。　青腰蟲 拾遺　蛆 綱目　蠅 綱目

狗蠅 綱目 壁蝨を附す。　牛蝨 綱目　人蝨 拾遺

右附方　舊二十　新八十一

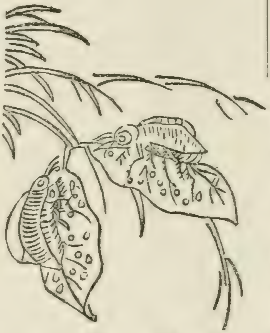
蟲の二　卵生類　下　二十二種

青蚨（拾遺）

和名　未詳
學名　未詳

【釋名】　**蚨蟬**　**蟱蝸**　音は謀瓜（ボウクワ）である。　**蜳蝸**　音は敦隅（トングウ）である。　**蒲虻**　虻の音は萠（ホウ）である。　**魚父**　**魚伯**

【集解】　藏器曰く、青蚨は南海に生ずる。形狀は蟬のやうなもので、その子を木に著ける。取つて錢に塗れば皆本の處へ歸る。搜神記に『南方に蜳蝸と名ける蟲がある。形の大いさは蟬ほどのものだ。辛く美味なもので、食し得る。子は蠶種のやうに草葉上に著ける。その子を取れば その母蟲が飛んで來る。母蟲に判らぬやうに潛に取つても、やはりその子の取られて在る處を知つてゐる。その母を殺し



〔青蚨　南海一〕

(一)貫ハゼニサシ、錢ヲ繫グ繩索ノコト。

て錢に塗り、子を(一)貫に塗つてその錢を使へば、その錢は自から還つて來る』とある。淮南子萬畢術には『青蚨は錢を還す』とあり、高誘の註に『青蚨、一名魚父、魚伯、その子と母と同數を各別に甕中に入れて東側の垣の下に埋め、三日の後開いて見ると、子、母が一處に聚つてゐる。母の血を八十一錢に塗り、子の血を八十一錢に塗り、子の血の方を留めて母の血の方を使ひ、また母の血の方を留めて子の血の方を使へば、いづれもその錢が自から還つて來る』とある。

○○李珣曰く、按ずるに、異物志に『蟼蝺は南海の諸山に生ずる。雌、雄常に同居して決して離れない。青金色のものだ。人がそれを採つて一定の方法で末にし、それを錢に塗つて他人から物を買へば、晝使つたものはその夜歸つて來る。又、能く精を祕し、小便を縮める』とある。やはり一般には得難いものだ。

○○時珍曰く、按ずるに、異物志に『青蚨は形が蟬のやうで長い。その子は蝦子のやうなもので、草葉の上に著けてある。その子を取れば母蟲が飛んで來るものだ。煎じて食へば甚だ辛くして美味だ』とある。岣嶁神書には『青蚨、一名蒲䖟。小蟬に似て、大いさは䖟ほど、色は青く、光がある。池澤に生じて多く蒲葉の上に集り、

春蒲の上に子を生み、それが八箇づつ八行、或は九箇づつ九行に著き、大蠶子のやうで圓い。その母蟲の血、及び火で炙いて子の血を取つて錢に塗り、それで物を買へばその錢は自から歸還する。この方法を用ゐれば同一の錢を無限に使ひ得るもので、誠に仙術のやうなものだ」とある。これ等の說は俱に彷彿たるものだが、ただ藏器の『子を木上に著ける』といふ點は同じくない。而して許氏の說文にはまた『青蚨は水蟲なり』とある。蓋しこれは水蟲であつて、子を草木に生み著けるものなのだ。

附錄 **龐降** 時珍曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄異に『龐降は嶺南に生ずる。橄欖樹上に多くゐるもので、形は蜩蟬のやうで、腹が青くして薄い。自から己の名を呼ぶもので、その聲だけはよく聞くが、これを採り得ることは稀なものだ。世人は高價に買つて媚藥にする』とある。按ずるに、形狀が蟬に似たといひ、媚藥にするといふ說と、李珣の海藥の『青蚨は雌雄が離れぬ、精を祕するものだ』といふ說と一致點がある。恐らくこれも青蚨の類にして木上に在る一種であらう。

氣味 【辛し、溫にして毒なし】

【主治】【中を補し、陽道を益し、冷氣を去り、身體を悦澤ならしめる】（藏器）【精を祕し、小便を縮む】（藥普）

蛺蝶（一）（綱目）

和名　てふ・及ビがノ類
學名　Butterflies and moths Lepidoptera（鱗翅目）

【釋名】　蛈蝶　蛈の音は葉（エフ）である。蝴蝶　時珍曰く、蛺蝶とは、輕く薄く、夾翅で飛ぶさまが葉葉然たりといふことだ。蝶は鬚が美しく、蛾は眉が美しい。故に蝴蝶といふのであつて、俗に鬚を胡といふからだ。

【集解】　時珍曰く、蝶は蛾の類であつて、大なるを蝶といひ、小なるを蛾といふ。その種類は甚だ繁多なもので、いづれも翅が四枚で粉があり、好んで花香を嗅ぎ、鼻の代に鬚を使ふ。その交尾は鼻で行ひ、交尾すれば粉がなくなる。古今注には『橘蠹蝶に化す』といひ、爾雅翼には『菜蟲蝶に化す』といひ、列子には『烏足の葉蝶に化す』といひ、埤雅には『蔬菜蝶に化す』といひ、西陽襍俎には『百合花蝶に化す』といひ、北戶錄には『樹葉が丹青のやうな蝶に化す』といひ、野史には『綵裙蝶に化す』といふ。いづれも各自が見たそのものを根據としていつたに過ぎ

（一）矢野曰ク、蛺蝶一般ニハ之ヲてふト訓シ、又現今ハたてはてふノ類ノミヲ指スコトトナセドモ、元義ハ寧ロてふ及ビがノ凡テヲ意味シ、今日ノ鱗翅目ニアタルモノノ如シ。

ない。蓋し蠶、蠋などの諸蟲は、蠶が必ず羽化するやうに老いればいづれも蛻して蝶となり蛾となるといふ事實をば知らなかつたのである。古く朽ちた衣服、器物のやうなものも必ず蟲が生じて化するものだ。草木の花や葉が化すのは氣化、風化に因るのであつて、やはり化する蟲が食物とした花や葉、及びその化する所の物の色に隨つてそれぞれの色が現はれる。楊愼の丹鉛錄には『草蝶、水蝶あり』とある。それは水中に棲むものだ。嶺南異物志には『ある人が南海に渡航したとき、蒲帆ほどの大いさの蛺蝶を見た。その肉を秤つて見ると八十斤あつて、食つて見ると極めて肥美であつた』といふ記載がある。



〔蛺　蝶〕

氣味　（闕）

主治　【小兒の脫肛には、陰乾して末にし、唾で半錢を調へて手心に塗り、瘥えるを以て度とする】（時珍）

發明 時珍曰く、胡蝶は、古方には用ゐてないものだ。ただ普濟方に右脫肛を治するの方を載せてあるが、やはり如何なる蝶を用ゐるかが判らない。

(一)蜻蛉（別錄下品）

和名 とんぼ
英名 Dragon fly (Odonata spp.)

釋名 **蜻虰** 音は丁（テイ）である。**蜻蝏** 蜓とも書く。**虰蛵** 音は馨（ケイ）である。**負勞**（爾雅） **蟌** 音は忽（ソウ）である。**諸乘**（弘景） **紗羊**（綱目） 赤きものを **赤卒** と名ける。 時珍曰く、蜻、蟌とは、その色が青いもの、葱のやうなものといふ意味だ。蛉、虰とは、その狀態が伶仃（さまよふ）してゐるものといふ意味だ。或はその尾が丁の字の下の一劃のやうに見えるからだともいひ、或はその尾がよく亭（とどま）つて挺（上下に動く）するものだから蝏（てい）といひ、蛵（けい）といふともいふ。俗に紗羊と呼ぶは、その翅が紗のやうだからである。按ずるに、崔豹の古今注に『大にして色青きものを蜻蜓といひ、小にして黃なるものを、江東では胡黎と呼び、(二)淮南では𧊋𧍢（わうい）と呼び、(三)鄱陽（はんやう）では江鷄と呼ぶ。小にして赤きものを呼んで赤卒といひ、絳騶（かうすう）といひ、赤衣使者といひ、赤弁丈人といふ。大にして黑紺色のものを、(四)遼海では紺蠜（こんけん）と呼

(一) 矢野曰ク、とんぼ類中ノ蜻蜓、胡黎其他ニハ從來和名ヲアテアルモノアレドモ、本文ニ記ス所ノミニテハ正確ニ其何種ヲ意味スルカヲ知ルコトヲ得ズ、今ハ參考ノ爲ニ從來ノ使用セラルルモノヲ以テ列記スルニ止ムベシ、蜻蜓やんま、胡黎せうれうとんぼ、赤卒あかとんぼ、紺蠜てふとんぼ、馬大頭やんま。

(二) 淮南ハ淮河以南長江ニ至ル一帶ノ地、唐ノ淮南道ハ今ノ湖北省ノ大江以北漢水以東、及ビ江蘇、安徽

兩省ノ大江以北淮河以南ノ地ナリ。
(三)鄱陽ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(四)遼海ハ今ノ遼東ノ地ナリ。
(五)汴ハ今ノ河南省開封ノ地ナリ。

び、また天雞ともいふ』とある。陶氏が、胡黎を蜻蛉としたのは、この說を採つたものに相違ない。

[集解] 弘景曰く、蜻蛉に五六種あるが、青色で眼の大なるものを一名諸乘といひ、俗に胡黎と呼び、これだけを藥に入れる。道家では『その眼は靑珠に變化し得るものだ』といふ。その他の黃なるもの、細いもの。黑いものは藥に入れない。

保昇曰く、所在にある。好く水際に飛んでゐるもので、六足、四翼だ。

宗奭曰く、ここに蜻蜓といふは、その中の一種の最も大なるもので、(五)汴地方で馬大頭と呼ぶものがそれである。身は綠色で、雌には腰間に一條の碧色が通つてゐる。藥には雄を入れることになつてゐる。この物は水中に生ずるものだから水上に多く飛ぶので、この種類のものはいづれも眼が大きい。陶氏は、蜻蜓だけを眼が大きいといふが、わけが判らない。



〔蜻蛉〕
—蜻蜓—

時珍曰く、蜻蛉は頭が大きく、目が露出し、頸が短く、腰が長く、尾が彈れ、翼が紗のやうに薄く、蚊、虻を食ひ、露水を飲むものだ。造化權輿に『(六)水蠆が化して蟌となる』とあり、羅願は『水蠆が化して蜻蛉となる。蜻蛉となつたものが、水上で交尾して有りあふ物に卵を附け散らし、その卵がまた水蠆となる』といふ。張華の博物志にも、やはり『蜻蛉の頭を五月五日に戸の内に埋めて置けば青珠に化す』といつてあるが、果して事實か否か判らない。古方には、ただ大なる青色のものを用ゐ、近頃の房中術にはまた紅色のものを用ゐるものもある。崔豹は『遼海地方に紺蠜といふがある。蜻蛉のやうで黑紺色のものだ。六七月頃群り飛ぶので天日が闇くなる。夷人は、海中の青蝦の化したものだといひ、それを食ふ』といひ、雲南志には『(七)瀾滄の(八)蒲蠻諸地では、土蜂、蜻蛉、蚱蜢の類、すべて食はぬものはない』とある。

氣味　【微寒にして毒なし】

主治　【陰を强くし、精を止める】(別錄)　【陽を壯にし、水臟を暖める】(日華)

(六) 矢野曰ク、水蠆和名やご蜻蜓ノ幼蟲ナリ。英名 Nymph of the dragon fly.

(七) 瀾滄ハ今ノ雲南省ノ南邊チ指ス現ニ瀾滄縣アリ。瀾滄江ノ東岸ニ在ルニ因ル。

(八) 蒲蠻ハ蠻族ノ一、元ノ時、中國ニ內附ス。

(一)樗　雞（本經中品）　和名 未詳　學名 未詳

釋名　**紅娘子**（綱目）　**灰花蛾**　時珍曰く、鳴くに一定の時刻があるところから、雞なる名稱が付せられたのだ。廣雅には樗鳩と書き、廣志には皐雞と書いてあるが、いづれも誤だ。その羽に文綵があるところから、俗に紅娘子、灰花蛾などと呼んだのだ。

集解　別錄に曰く、(二)河内の川谷の樗樹上に生ずる。七月に採つて暴乾する。弘景曰く、今は(三)梁州に産する。形狀は寒螿に似て小さい。樗樹は漆に似て臭い樹だ。これはやはり芫青、亭長が芫、葛の上にゐるやうなものである。

恭曰く、河内にこの蟲はゐない。今は(四)岐州に産する。この蟲には二種ある。五色具るものは雄であつて、藥に入れて良好だ。質が青黑で白斑のあるものは雌であつて、藥には入れない。

宗奭曰く、(五)汴洛の諸處に就中多い。形は蠶蛾に類するが、ただ腹が太く、頭と足が微し黑く、二重の翅があり、外の一重は灰色、内の一重は深紅色で、五色皆具

(一)矢野曰ク、樗雞ヲ本邦ニテハ從來うちすずめト訓ジ、すずめが科（Sphingidae）ニ屬スルモノニシテ、翅體紅色ノモノトナセドモ此ハ全ク誤ナリ、其記事ヨリ之ヲ見ルニ蟬又ハ之ニ類モノニシテ、或ハ白蠟蟲科（Fulgoridae）ニ屬スルびはぜみ（Fulgora）ノ事ナラント想像ス。

(二)河内ハ草部隰草類菊ノ註ヲ見ヨ。

(三)梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

(四)岐州ハ草部山草類秦艽ノ註ヲ見ヨ。

(五)汴洛ハ草部芳草類香薷ノ註ヲ見ヨ。

つてゐる。

○頌曰く、爾雅に『螒は天雞なり』とあり、郭璞の註に『小蟲で身が黒く頭が赤い。一名莎雞。又、樗雞といふ』とある。しかし、現に莎雞と呼ぶは樗木の上に生じ、六月中に出て飛ぶ羽音が索索と聞えるものだ。世間には籠に入れてこれを飼ふものもある。但し頭が四角で腹が太く、翅羽は外が青く內が紅いものである。身も黒くなく、頭も赤くはない。この點は郭璞の說とは甚だ(六)類せぬ。樗木上にゐて頭、翅皆赤い一種で舊說の如きものは一般に紅娘子と呼ぶ。しかし樗雞とは呼ばないが、これは事實その物と相違ないやうに思はれる。古代と現代とでは名稱が變つてゐるのであらう。

○○時珍曰く、樗とは臭椿のことである。この蟲は、初生には頭が四角で扁く、喙が尖つて下を向き、足が六本で二重の翼があり、色が黒い。成長するとよく飛ぶ。外翼は灰黃色で斑點があり、內翅は五色交錯してゐるものだ。この蟲は、樹上に行列をなしてゐるもので、秋深くして樗樹の皮上に子を生み著ける。蘇恭、寇宗奭の說が事實を得てゐる。蘇頌が、郭璞の說を引證して、莎雞をそのものとしたのは誤だ。

(六)類セズノ下ニ、大觀ニハ『蓋別一種而同名也今在』ノ十字アリ。コノ項大觀ノ記載ト出入甚ダ多シ。

莎雞は、莎草の中にゐる蟋蟀の類で、蝗に似て斑があり、數重の翅があつて下翅が正赤である。六月飛び、羽を振つて音をたてるものだ。陸機の毛詩疏義に詳説してある。ところが羅願の爾雅翼には、莎雞を絡緯としてあるが、



【樗雞】

絡緯ならば俗に紡絲と呼ぶ蟲のことだ。

修治　時珍曰く、凡そこれを使用するには、翅、足を去り、糯米、或は麪を用ゐて黄色に炒り、その米、麪を去つて用ゐる。

氣味　【苦し、平にして小毒あり。目に近けてはならぬ】（別錄）

主治　【心腹の邪氣、陰痿。精を益し、志を强くし、子を生ませ、顏色を好くし、中を補し、身體を輕くする】（本經）【腰痛、下氣。陰を强くし、精を多くする】（別錄）【血閉を通じ、瘀血を行る】（宗奭）【瘰癧に主效があり、目中の結翳を散じ、邪氣を辟け、狂犬の咬傷を療ず】（時珍）

【發　明】弘景曰く、方藥には用ゐることが稀だが、大麝香丸を作るにこれを用ゐる。

時珍曰く、古方の、辟瘟殺鬼丸中に用ゐてあり、近世の方中には多く用ゐてある。蓋し厥陰の經の藥であつて、能く血を行らし、血を活すものだ。普濟方の、目翳を治する撥雲膏中に、芫青、斑蝥と共に用ゐてあるが、やはり血を活かし、結を散することを目的としたものだ。

【附　方】新四。【子宮の虛寒】杏林摘要に『婦人の不妊症は、子宮の虛寒で下元が虛し、月經が不調となり、或は閉ぢ、或は痛み、或は崩中、帶下し、或は產後敗血の盡きぬものが內結して散ぜぬに原因する。紅娘子六十箇、大黃、皂莢、葶藶各一兩、巴豆一百二十箇を末にし、棗肉で彈子大の丸にし、綿で裹んで繫ぎ留め、竹筒を用ゐて膣內に近入する。一時ばかりすると、熱を發して渴するものだが、その時は熱湯一二盞を用ゐれば解す。後に發寒するから、安靜にして睡眠を取る。かくて三日間挿入して取出し、每日空心に雞子三箇、胡椒末二分と共に炒つて食ひ、酒で呑下して補ふ。久しく繼續すれば子宮が暖まる』とある。【瘰癧結核】紅娘子十四

箇、乳香、砒霜各一錢、硇砂一錢半、黄丹五分を末にし、糯米粥で和して餅にして貼る。一个月に過ぎずして自然に核が脱下する。(衞生易簡方)【狂犬の咬傷】治療せねば死亡する。紅娘子二箇、斑蝥五箇をいづれも翅、足を去り——四十歳の患者には各一箇を增加し、五十歳には各二箇を增加する——青娘子三箇を翅、足を去り——四十歳には一箇を增加し——五十六歳には二箇を增加する——海馬半箇、續隨子一分、乳香、沈香、桔梗各半分、酥油少量を末にし、十歳の患者には四服とし、十五歳には三服とし、二十歳には二服とし、三十歳には一服として用ゐる。(談埜翁方)【横痃便毒】雞子一箇に孔を開けて紅娘子六箇を入れ、紙で包んで煨熟し、紅娘子を去つて雞子を食ひ、酒で呑下す。小便淋瀝し、濃血を出して癒える。(陸氏積德堂方)

(一)棗猫（綱目）

和名　こがねむしノ一種(?)
學名　未詳

[集解] 時珍曰く、棗貓は、古方には考證の手掛がない。近世の方廣丹溪心法附餘に、小兒病の治方にこれを用ゐて、その註に「棗樹上に生ずる飛蟲である。大いさ棗子ほどの、青灰色で兩角あるものだ。採つて陰乾して用ゐる』とある。

(一)矢野曰ク、明瞭ナラザレドモ、こがねむし科(Scarabeidae)ノ一種食草性ノモノナラン。

【氣味】（缺）

【主治】【小兒の臍風】時珍曰く、按ずるに、方廣には『小兒の初生には、綿で臍帶を裹み、臍から五六寸離れた部分を括つて咬み斷り、この藥一二分を鵞翎筒で臍の大孔に送入して輕く揉み散し、艾炷で臍頭に三壯灸し、自ら落ちるまでそのまま結び著けて動かさずに置く。永く臍風を患はぬこと萬に一も失たない。これは臍の硬いものに用ゐるのであつて、軟かなものは無病だから用ゐる必要はない。その法は、陰乾した棗猫兒三箇を研末し、眞珠四十九粒を搗き研り、炒黄丹五分、白枯礬、蛤粉、血竭各五分と研り勻ぜて前記の方法で用ゐる。臍には三箇の孔があつて、一孔は大きく、二は小さいものだ』とある。

斑蝥（本經下品）(一)

和名　はんめう
學名　Mylabris spp.

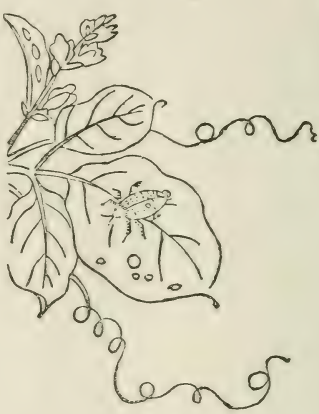
【校正】陳藏器の盤蝥蟲は重複だ。本書にはこの一條に併記する。

【釋名】**斑猫**（本經）**盤蝥蟲**（拾遺）**龍蚝**　音は刺（シ）である。**斑蚝**　時珍曰く、斑はその色を表したもの、蝥、刺はその毒の矛、刺のやうだとの意味を表した

(一) 矢野曰ク、つちはんめう科（Meloidae）ニ屬スルはんめう屬（Mylabris 又ハ Zonabris）ノ種ナリ、此屬支那ニ產スルモノ十數種アリ、本邦ニテみちしるべ科（Cicindelidae）ノ諸

ものだ。また盤蝥（はんめう）とも書き、俗に訛つて斑猫といひ、また斑蚝、斑尾と訛つてゐる。呉普本草には、又、斑菌と名付け、腃髮（けんはつ）といひ、晏青といつてある。

集解 別錄に曰く、斑猫は(二)河東の(三)山谷に生ずる。八月に採取して陰乾する。



〔斑　蝥〕

呉普曰く、(四)河内の(五)山谷に生ずる。やはり木や石に生ずるものだ。

保昇曰く、斑猫は所在にある。七八月、大豆の葉にゐる甲蟲であつて、長さ五六分、黄黑の斑文（はんもん）があり、腹は鳥のやうで喙が尖つてゐる。葉に附いてゐるものを採つて陰乾して用ゐる。

弘景曰く、この蟲は一蟲が五種に變形するもので、主たる治效はいづれも似たものだ。二三月芫花上に在るものを芫青と呼び、四五月王不留行草（わうふるかうさうじやう）上に在るものを王

種チ和ノはんめうト稱シ藥用ニ供シタリ、從テ今日ニテモ此科ノモノチ普通ニはんめうト稱スレドモ、之ハ全ク誤リニシテ眞ノ斑蝥ニ非ズ、區別スベキモノナリ。

(二) 河東ハ草部山草類甘草ノ註チ見ヨ。

(三) 大觀ニ山チ川ニ作ル。

(四) 河内ハ草部隰草類菊ノ註チ見ヨ。

(五) 大觀ニ山チ川ニ作ル。

不留行蟲と呼び、六七月葛花上に在るものを葛上亭長と呼び、八九月豆花上に在るものを斑蝥と呼び、九月、十月また地中に還つて蟄伏するものを地膽と呼ぶ。これは眞の地膽では無いが、治療上に用ゐては同じやうなものだ。斑蝥そのものは、大いさ巴豆ほどで、甲上に黃黑の斑點がある。芫青は青黑色、亭長は身が黑く頭が赤い。

○斆曰く、芫青、斑蝥、亭長、赤頭の四種は、その態樣は各〻その居る場所と食物とに依つて同じくないので、表はれる效果もやはり同じくない。芫青は、嘴が尖つて背上に黃色の一畫があり、芫花上にゐてその汁を食物とする。斑蝥は、背上に黃色の一畫と黑色の一畫とがあつて、嘴の尖つた部分に一箇の小赤點があり、豆葉上にゐてその汁を食物とする。亭長は、形が黃黑で、葛葉上にゐてその汁を食物とする。赤頭は、身が黑く、額上に一箇の大なる紅點がある。

○頌曰く、四蟲いづれも同一類で、ただ時期に因つて變るだけのものである。深師方に『四月、五月、六月は葛上亭長といひ、七月は斑猫といひ、九月、十月は地膽といふ』とある。今の醫家は芫青、斑蝥を用ゐることは知つてゐるが、地膽、亭長は使ふことが稀れである。故に詳細の知識がない。

(六)幽州ハ草部山草類人參ノ註ヲ見ヨ。
(七)寧州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(八)雍州ハ草部隰草類菊ノ註ヲ見ヨ。

恭曰く、本草にも、古今の諸方にも、いづれも王不留行蟲といふものはない。陶氏のいふところでは、四種の蟲はみな同一土地に在ることになるが、現に地膽は(六)幽州に出る。芫青は(七)寧州に出る。亭長は(八)雍州に出る。斑蝥は何處にでもゐる。かやうにこの四蟲の産地は四箇處に分れてゐる。一箇年の内に四州を周遊するわけでもあるまい。芫青と斑蝥とは形段が似てゐるが、地膽は狀貌が大いに異ふ。且つ草菜上から採るものだ。陶氏は蓋しでたらめをいつたのだ。

時珍曰く、按ずるに、本經、別錄にある四蟲採收の時期は、正に陶氏の說と合致してゐる。深師の方にも亭長を用ゐるとあつて、その註の解釋はやはり同樣だ。これは元來一類の蟲で、その發生、棲息の場所に隨つて、それぞれ殊なる名稱が付せられたまでのことだ。蘇恭は强ひて陶氏の說を駁撃したが、不明は反つて駁撃者の方にある。按ずるに、太平御覽に引用した神農本草經の文には『春、芫花を食ふを芫青といふ。夏、葛花を食ふを亭長といふ。秋、豆花を食ふを斑蝥といふ。冬、地中に入るを地膽といふ』とあつて、黑頭、赤尾に關する說も甚だ明確だ。然るに唐、宋時代の校正者が、反つて事實の取捨を失つて、更に紛紜を惹起したのは何事ぞ。陶

氏のいふ王不留行蟲は、雷氏のいふ赤頭のことで、方藥には未だ用ゐられてない。要するに、いづれもこの類の蟲であることは事實上から推定される。その他の説明は地膽の條に揭げる。

【修治】斅曰く、凡そ斑蝥、芫青、亭長、地膽の修治は、いづれも糯米、小麻子と(九)漬けて拌ぜ、炒つて米が黃黑色になつたとき取出して頭、足、兩翅を去り、(一〇)血餘を以て裹み、東側の墻角に一夜懸けて置いて用ゐる。かくすれば毒が去るものだ。大明曰く、藥に入れるには、翅、足を去り、糯米で炒熟して用うべきものである。生では吐瀉を發すものだから用ゐてはならぬ。時珍曰く、ある法では、麩を用ゐて炒り、醋で煮て用ゐる。

【氣味】【辛し、寒にして毒あり】普曰く、神農は辛しといひ、岐伯は鹹しといひ、扁鵲は甘し、大毒ありといふ。○馬刀が使となる。巴豆、丹參、空青を畏れ、膚青、甘草、豆花を惡む。時珍曰く、斑猫、芫青、亭長、地膽の毒は、靛汁、黃連、黑豆、葱、茶のいづれでも解し得る。

【主治】【寒熱鬼疰、蠱毒、鼠瘻、(一一)瘡疽。死肌を蝕し、石癃を破る】(本經)

(九)漬、大觀ニ用ニ作レ。

(一〇)血餘ハ亂髮ヲ云フ。

(一一)大觀ニ瘡上ニ惡字アリ。

【血積で肌を傷めたもの。痃癖を治し、胎を墮す】（別錄）【瘰癧を治し、水道を通利す】（甄權）【淋疾を療じ、惡瘡瘻爛に傅ける】（日華）【疝瘕を治し、疔毒、猘犬の毒、沙蝨の毒、蠱毒、輕粉の毒を解す】（時珍）

發明 宗奭曰く、妊娠の婦人は服してはならぬ。人の肉を潰るものであつて、淋を治する方に多く用ゐれば、極めて人を苦めるから斟酌を要する。

時珍曰く、斑蝥は、獲らうとすると尾後から面を向けられぬほどの惡氣を射出する。故にこの物を藥に入れるとやはり專ら下竅に走り、直ちに精、溺を貯へてある部分に走するが主たる效力であつて、敗物を蝕し下して痛み當るべからざるものである。葛氏は『凡そ斑蝥を用ゐるは、その小便を利し、藥を引き、氣を行らす點を取る。毒を以て毒を攻むとはこのことだ』といひ、楊登甫は『瘰癧の毒には必ず根を有つものであつて、大抵、斑蝥、地膽を主とし、法則に遵つて適度に制法を加へて用ゐればよくその根を小便中から排出せしめる。或は粉片の如き、或は血塊の如き、或は爛肉の如きものを排出するがその證驗だ。しかしこの物の毒が行るために、排尿の際に當るべからざる澀痛を覺えるものだから、木通、滑石、燈心などの

藥を用ゐて尿を導く』といひ、又、葛洪肘後方には『席辯刺史の傳にいふ、凡そ蠱毒に中つた場合には、斑蝥蟲四箇を翅、足を去つて炙熟し、桃皮を五月初五日に採つて黒皮を去つて陰乾し、大戟を骨を去つて各ゝ末にし、斑蝥一分に對し他の二味各二分の割合で合和して棗核大の量を米淸で服す。必ず蠱を吐出する。もし一服で瘥えぬときは、十日後に更に服す。蠱は洪州に最も多く、ある老嫗がこの療法を知つてゐて、患者一人に對し縑二十疋の治療代を要求し、その方を祕密にして傳へなかつたが、その後子孫に法を犯したものがあつた際、時の都督黄華公若于則がその犯狀訊問中にこの方を得た』とある。

附方　舊六、新九。【瘰癧の內消法】大人、小兒に拘らず、經驗方では、斑蝥一箇を翅、足を去つて粟一升と共に炒り、粟米が焦げたとき米を去つて米をば用ゐず、薄荷四兩を入れて末にし、烏雞子淸で菉豆大ほどの丸にし、空心に臘茶で三丸を服し、五丸まで增加してから、却つて毎日一丸づつ最後の一丸までに減じ、その後は毎日五丸を服し、消するを以て度とする。〇廣利では、瘰癧の久しきに亙つて瘥えぬを治す。斑蝥一箇を翅、足を去つて微し炙り、漿水一盞で空腹に呑む。蜜水を用

ゐるも可し。重きものも七箇に過ぎずして瘥える。【蟲の有る瘻瘡(ろうさう)】八月中に多く斑蝥を取り、苦酒に半日浸して晒し乾し、五箇づつを銅器で炒熟して末にし、巴豆一粒、黄犬の背の毛十四本を炒つて研り、硃砂五分と共に苦酒で和して頓服する。その蟲は盡く排出する。【癰疽(ようそ)の膿を拔く】癰疽の破れぬもの、或は破れても硬く腫れて膿無きものには、斑蝥を末にし、蒜(さん)と膏に搗き、水で和して豆一粒ほどを貼る。少頃して膿が出たならば藥を去る。(直指)【疔腫の根を拔く】斑蝥一箇を捻り破り、瘡上を鍼で米字型に劃(か)き破つてその上を封ずれば根を出す。(外臺)【(一)血疝便毒】已に成りたると未だ成らざるとに拘らず、用ゐるに隨つて消散する。斑蝥三箇を翅、足を去つて炒り、滑石三錢と共に研つて三服に分け、一日一服、空心に白湯で服す。毒は小便から排出する。もし痛むときは、車前、木通、澤瀉、猪苓(ちよりやう)を煎じて飲む。これは破毒散と名くるもので、甚だ效がある。(東垣方)【積年の癬瘡】外臺では、斑蝥半兩を炒つて末にし、蜜で調へて傅ける。○永類では、斑蝥七箇を醋に浸し、一夜露(さら)して搽る。【顏面の痦瘟(はいるゐ)】大風で顏面に生じた紫痦瘟の消えぬには、乾斑蝥末を生油で調へて傅け、約半日でその痦瘟が脹起したとき、軟い帛でその藥を拭ひ去り、

(一)血疝ハ便毒ノ別名、和名よこね。

棘鍼で最も近い部分を挑げ破つて水を出して乾かしめる。瘡の皮は剝いではならぬ。藥を口、眼に近けてはならぬ。もし尖瘖瘤ならば別に膽礬の藥を用ゐて治すべきもので、この藥は用ゐてはならぬ。（聖濟總錄）【疣、痣、黑子】斑蝥三箇、人言少量を糯米五錢と共に炒り、黃になつたとき米を去り、蒜一箇を入れて搗き爛して點ける。

【狂犬の咬傷】衞生易簡方に『これは九死一生の危險な病である。急に斑蝥七箇を糯米と炒り、黃になつたとき米を去つて斑蝥を末にし、酒一盞で半盞に煮じて空心に溫服する。小肉狗三四十箇を取下せば毒が盡きたのだが、もしその數が少いときは數日にして再服し、七回服して犬毒の樣子がなくなれば永く再發せぬ。屢ゝ實驗を經て效を認めた』とある。○醫方大成では、大斑蝥二十一箇を頭、翅、足を去つて用ゐ、糯米一勺にその斑蝥七箇を入れて略ぼ炒つて斑蝥を去り、別の斑蝥七箇を入れて前記の如くして色が變るまで炒つて斑蝥を去り、別の斑蝥七箇を入れて前記の如くして青烟が起つまで炒つて蝥を去り、只その米のみを取つて粉にし、冷水に淸油少量を入れて調へて空心に服し、少頃して再服し、小便に毒物を利下するを度とする。もし利せぬときは再服する。利して後、肚が疼くときは、急に冷水で青靛を

調へて服してその毒を解す。さなくば健康を傷めるものだ。黄連水でも解し得る。但し一切の熱物を服してはならぬ。【沙虱の中毒】斑蝥二箇を用ゐ、一箇をば末にして服し、一箇をば烟が盡るまで燒いて研末して瘡中に傅ける。立ろに瘥える。（肘後）【耳を塞いで聾を治す】斑蝥を炒つて二箇、生巴豆を皮、心を去つて二箇を杵いて棗核大の丸にし、綿で裹んで塞ぐ。（聖惠方）【妊婦の胎兒死亡】斑蝥一箇を燒いて研り、水で服す。直ちに下る。（廣利方）

（一）芫青（別錄下品）

和名 あをはんめう
學名 Lytta spp.

【釋名】 **青娘子** 時珍曰く、芫花の上にゐて色が青いところから芫青と名けたのだ。俗にその名を諱んで青娘子といひ、紅娘子と對にして呼ぶ。

【集解】 別錄に曰く、三月に取つて暴乾する。

弘景曰く、二月、三月に芫花の上にゐるもので、花期中に採收する。青黑色の蟲だ。

恭曰く、寧州に產する。

（一）矢野曰ク、つちはんめう科（Meloidae）ニ屬スルあをはんめう屬（Lytta）ノ種ナリ、此屬支那ニ產スルモノ八種アリ、歐洲ニテハ Lytta vesicatoria, L. ヲ藥用トス、此屬本邦ニ產セズ。

頌曰く、處處にある。形は斑蝥に似てゐるが、色が純青綠で背上に一條の黄色の文があり、喙が尖つてゐる。三四月、芫花の發く時期に生ずるものだ。多く芫花の上にゐるものを採つて暴乾する。

時珍曰く、ただ芫花を莖、葉の附いたまま採り、一夜地上に置けば盡く自ら出るものだ。その他斑蝥の條に記載してある。



〔芫青〕

修治　斑蝥の條に記載してある。

氣味　【辛し、微溫にして毒あり】

時珍曰く、芫青の功力は斑蝥と同一だが、毒は就中猛烈だ。蓋し芫花そのものが有毒だからである。○畏、惡の關係も斑蝥に同じ。

主治　【蠱毒、風疰、鬼疰。胎を墮す】（別錄）【鼠瘻を治す】（弘景）【疝氣に主效がある。小水を利し、瘰癧を消し、痰結を下し、耳聾、目翳、猘犬の傷毒を治す。その他の功用は斑蝥に同じ】（時珍）

附方　新三。【偏墜疼痛】靑娘子、紅娘子各十箇を白麪を拌ぜて黄色に炒り、二蟲を去つて熟湯でその麪を調へて服す。立ろに效がある。（談埜翁方）【日中の頑翳】發背膏——靑娘子、紅娘子、斑蝥各二箇を、頭、足を去つて麪で黄色に炒り、蓬砂一錢、蕤仁を油を去つて五箇と末にし、一日五六回、少量づつを點けてから、春雪膏を點ける。この膏は黄連の條に記載してある。（普濟方）【耳を塞いで聾を治す】芫靑、巴豆、蓖麻仁各一箇を硏つて棗核大の丸にし、綿で包んで塞ぐ。（聖惠方）

（一）葛上亭長（別錄下品）

和名　まめはんめう
學名　Epicauta spp.

釋名　弘景曰く、この蟲は、身が黑く、頭が赤く、亭長が黑衣、赤幘を著けた姿に似てゐるところから名けたものだ。

集解　別錄に曰く、七月採取して暴乾する。
弘景曰く、葛花の花期中に取る。身が黑く、頭が赤く、腹中に米粒ほどの白卵がある。
恭曰く、雍州に產する。

（一）矢野曰ク、つちはんめう科（Meloidae）ニ屬ス、此屬支那ニ產スルモノ五種アリ、廣ク亞細亞ニ分布シ本邦ニモ二種ヲ產ス。

保昇曰く、處處にある。五六月葛葉上から採るもので、形は芫青に似て蒼黑色だ。斅曰く、亭長は、外形が黑黃で、葛上にゐて蔓の膠汁を食物とする。又、赤頭で身の色が黑く、額上に一箇の大紅點のあるものもあり、それぞれ用途がある。

時珍曰く、陶氏は『黑身赤頭だから亭長と名ける』といつてある。而るに雷氏は、別に赤頭のものを掲げて出處を說明してないが、謬のやうだ。

【修治】斑蝥に同じ。【氣味】【辛し、微溫にして毒あり】惡、畏の關係は斑蝥に同じ。

【主治】【蠱毒、鬼疰、淋結、積聚を破り、胎を墮す】（別錄）【血閉、癥塊、鬼胎を通ず。その他の功用は斑蝥に同じ】（時珍）

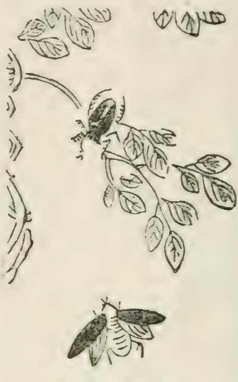
【發明】頌曰く、深師の淋を療ずるに亭長を用ゐる說明が最も詳細である。それに據れば『葛上亭長の腹を折斷して腹中に米粒ほどの白子のあるものを取り、二三分を白板上に載せて二三日間（二）陰晴の處に置いて取收め、十年の淋患者には三箇を服ませ、八九年以內の患者には二箇を服ませる。服するには、水を棗ほどの量を小盃中に入れて亭長を爪甲で研り、水上に扁扁として浮ぶのを、仰面して呑む。

（二）大觀ニ陰下ニ乾燥ノ二字アリ。

（三）大觀ニ四月五月六月ニ作ル。

（四）大觀ニ九月下ニ十月ノ二字アリ。

牙齒の間に近けてはならぬ。藥は微小なるものではあるが、喉を下れば自ら下焦、淋の患部に至るを覺え、少頃して大いに煩急を作す。煩急堪へ難きときは、乾麥飯汁を飲めば藥熱が止むものだ。乾麥飯がなければただ水でもよし。老人、小兒は三分の一を服す。それで淋疾は膿血のやうに連連として下り去り、或は指頭ほどの、或は青、或は黄のものを下して、男、女に拘らず皆癒える。藥が快速に作用せねば淋は下らぬものだから、その適度を量つて更に增服する。この蟲は、（三）五六月は亭長といひ、頭が赤く、身が黑い。七月は斑蝥といひ、九月（四）は地膽といふ。その時季に依つて變ずるものだ』とある。



〔葛上亭長〕

附方　新二。【經脈不通】婦人の經脈不通で癥塊、脹滿し、腹に鬼胎あるものには、葛上亭長五箇を糯米と和して炒り、翅、足を去つて硏末し、空心に甘草湯で三回に分服する。須臾にして臍腹に急痛を覺えたならば、黑豆の煎湯を服すれば通

ずる。(聖惠方)【肺風白癩】方は蝮蛇の條に掲げてある。

地膽(一)（本經下品）

和名　つちはんめう
學名　Meloe spp.

【釋名】 蚖青(本經) 青蠵　蠵(ケイ)である。弘景曰く、地膽は芫青の變化したものだからまた蚖青とも名けるのであるが、蚖の字を用ゐるは、やはり誤を承けたものらしい。

時珍曰く、地膽とは、地中にゐて色が膽のやうだといふことだ。按ずるに、太平御覽には、(二)爾雅を引いて『地膽、地要は青蠵なり』とあり、又、呉普本草を引いて『(三)地膽、一名杜龍。一名青虹』とある。陶弘景が蠵の字を蛙の字として、烏蝸の切(ア)と發音したのは誤だ。宋本もそれに因つてゐるが、本書ではいづれも釐正した。

【集解】 經に曰く、(四)汶山の山谷に生ずる。八月に採取する。

弘景曰く、眞の地膽は(五)梁州に産する。形狀は大馬蟻のやうで翼がある。僞のものは斑蝥が變化したもので、大豆ほどの形のものだ。大抵治病に使用する對症は略同じものだが、やはり眞物は得難いものだ。

(一) 矢野曰ク、つちはんめう科(Meloidae)ニ屬スルモノニシテ、此屬ハ廣ク歐亞ニ分布シ、支那ニ九種ヲ産シ本邦亦六種ヲ産ス。

(二) 爾雅ハ廣雅ノ誤。

(三) 太平御覽ニハ地膽、一名芫青。一名杜龍。一名青虹トアリ。

(四) 汶山ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。

(五) 梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

(六)邠州ハ唐ニ置ク。今ノ陝西省邠縣ソノ舊治ナリ。

恭曰く、大馬蟻のやうな形のものは、現に(六)邠州に産し、三月から十月までの間に於いて草菜上から採取する。地中のものではない。大豆のやうな形のものといふは見たことがない。やはり陶氏の妄斷だ。

保昇曰く、二月、三月、八月、九月に草菜上から採取する。形體が倍ゝ黒色のもので、芫青の變化したものだ。



〔地膽〕

時珍曰く、現に處處にある。地中、或は墻石の內にゐるもので、蓋し芫青、亭長の類が冬期に入つて蟄したものだ。形狀は斑蝥のやうである。蘇恭はまだ實物を見てゐないのだ。反つて陶氏の說を非るは怪しからぬ。本經に、別名を芫青といつてあるのが就中有力な證左ではないか。既に地膽といふ以上、草菜の上にゐさうなわけはなからう。蓋し芫青は青綠色、斑蝥は黃斑色、亭長は黑身赤頭、地膽は黑頭赤尾であつて、色は同じくないが、功力はやはり相近い。

修治 斑蝥に同じ。

氣味 【辛し、寒にして毒あり】

主治　【鬼疰寒熱、鼠瘻惡瘡、死肌。癥瘕を破り、胎を墮す】（本經）【瘡中の惡肉、鼻中の瘜肉を蝕し、結氣を散ず。石淋に子を去るには、一刀圭を服すれば直ちに下る】（別錄）【瘰癧を宣拔して小便より排出し、上部からも吐出する。又、鼻鼽を治す】（藥性）【疝積疼痛を治す。その他の功力は斑蝥と同じ】（時珍）

發明　頌曰く、今の醫家では斑蝥、芫青を多く用ゐるが、亭長、地膽を用ゐることは稀である。蓋し功力はやはり相類するものなのだ。

時珍曰く、按ずるに、楊氏の直指方に『ある癌瘡に、顆顆が纍纍として垂れ、裂けて瞽眼のやうになり、その中が靑を帶び、それ等の頭が簇つて各〻一舌のやうに見え、毒が深くして孔を穿つものがある。男子は多く腹に發し、婦人は多く乳、或は項、或は肩に發して昏迷せしめるものである。急に地膽を君とし、白牽牛、滑石、木通を佐として用ゐ、小便を利してその毒を宣するがよし。更に童尿を服して餘邪を灌滌すれば、それで平安を得るものだ』とある。

附方　新二。【小腸の氣痛】地膽を翅、足、頭を去つて微し炒り、硃砂と各半兩、滑石一兩を末にし、毎食前に二錢づつを（七）苦杖酒で調へて服す。直に癒える。

（七）苦杖ハ虎杖ノ別名。

(宣明)【鼻中の瘜肉】地膽を生で研つてその汁を灌ぐ。乾いたものは酒で煮て汁を取る。○またある方では、細辛、白芷等分を末にし、生地膽汁で和して膏にし、少量づつを點けて消するを度とする。(いづれも聖惠)

蜘蛛 (別錄下品)

和名 くも
英名 Species of Araneida (蜘蛛目)

釋名 **次蟗** 音は秋(シウ)(爾雅) **蠋蝓** 音は屬兪(ショクユ)(方言) **蠿蟱** また蠿蝥とも書く、音は拙謀(セツボウ) 時珍曰く、按ずるに、王安石の字說には『一面の網をかけ、物が觸れると後にそれを誅す。平誅の義を知るものだから蜘蛛といふ』とあり、爾雅には『鼅鼄』と書いて鼄に從ふ。鼄とは大腹のことだ。揚雄の方言には『(一)關より東方の地では蠾蝓と呼ぶ。これは侏儒なる語の轉じたものだ。(二)北燕、朝鮮地方では蟠蜍などともいひ、(三)齊地方ではまた(四)杜公と呼ぶ』とある。蠿蟱の說明は下に述べる。

集解 弘景曰く、蜘蛛には數十種あつて、現に藥に入れるは、魚を獲る網のやうな網を懸けるもののみである。これはまた蠿蟱とも名けるものだ。赤斑のもの

(一)關トハ函谷關ヲ指ス。關東、卽チ今ノ河南、山東地方ヲ指ス。草部隰草類麥門冬ノ函谷ノ註、及ビ同蛇繭草ノ關東ノ註參照。
(二)北燕ハ今ノ奉天、吉林地方。

は絡新婦と名け、方術家ではやはり使用する。その他はいづれも藥には入れない。

頌曰く、蜘蛛は處處にある。その類の極めて多いものだ。爾雅には『次蠹は鼅鼄なり。鼄蝥なり。土鼅鼄なり。草鼅鼄なり。蠨蛸は長踦なり』とあり、郭璞の註に『今江東では鼅鼄を鼄蝥と呼び、脚の長いものを蟢子といふ』とある。して見ると、陶氏のいふ蝃蝥は鼄蝥のことだ。

藏器曰く、蝃蝥は孔穴の中や草木の上にゐるものだ。陶氏がこれを蜘蛛としたのは誤だ。

斅曰く、凡そ五色のもの、及び大身にして刺毛が生えてゐるもの、幷に薄小なるものはいづれも藥に入れない。ただ身が小さくして尻が太く、腹中に蒼黃色の膿汁を有つものを眞物とし、屋根の兩側に網を張つたものを取り、頭、足を去つて膏に研つて用ゐる。

宗奭曰く、蜘蛛は品類の多いもので、いづれも有毒だ。今一般に多く用ゐるのは、家の簷角や垣根や人家と人家の間などの空中に圓い網を作る腹の大きい深灰色のものだけだ。その遺尿が人體に著くと瘡が生ずる。

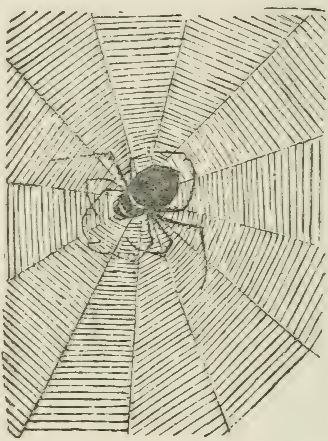
（三）齊ハ今ノ山東省ノ地ヲ指ス。

（四）杜公、爾雅ニ杜公トアリ。

（五）剣南ハ唐十道ノ一、草部芳草類茅香ノ註ヲ見ヨ。山東、即チ今ノ山東省地方。

恭曰く、（五）剣南、山東地方では、この蟲のために囓まれると瘡が生じて瘡中から絲を出し、屢々死亡するものがある。

時珍曰く、蜘蛛が網を懸けるには、その絲を右に繞らすものだ。種類甚だ多く、



〔蜘　蛛〕

大小や狀貌や色は一定せぬが、爾雅には、ただ蜘蛛、草蜘蛛、土蜘蛛、及び蠨蛸の四種のみに分けてある。蜘蛛が人を嚙めば甚だ毒のあるものだといふことは、往往典籍に記載されてある。按ずるに、劉禹錫の傳信方には『判官張延賞は斑蜘蛛に頸部を咬まれ、一夜にして二筋の赤脈が生じ、項下を繞つて心の附近まで及び、頭部、面部が數斗ほどに腫れ、殆ど救治の方法がなかつたが、ある者が大藍汁に麝香、雄黃を入れて、それに一匹の蜘蛛を投入すると、見る間に溶けて水となつたので、そこでその藥を咬まれ

(六)赤木兒城ハ漢書ノ烏孫ノ都セル赤谷城ノ地、卽チ今ノ露領、舊淸領ジンガル部、ウチツルフアン(烏什)ヨリ邦里凡八里ノ西ニ在ルシヤト(沙圖)ノ地ナリ。

(七)賽藍ハ今ノ露領土耳其斯坦ノシル河ノ東タシケント驛北方ニアルサイラムノ地ナリ。

た處へ點けて見ると、二日間で悉く平癒した』とあり、又『貞元十年、崔從質員外の話に、蜘蛛に咬まれて腹が妊婦のやうに大きくなつた者があつたが、ある僧に教へられて羊乳を飲むと數日で平癒したといふ』とある。又、李絳兵部手集には『人が蜘蛛に咬まれて全身に瘡を生じた場合には、好き酒を飲むがよい。醉ふまで飲むと、小米のやうな蟲が肉中から自から出るものだ』とある。劉郁の西域記には『(六)赤木兒城に蛛のやうな蟲があつて、人がその毒に中ると煩渴し、水を飲むと立ろに死亡する。ただ葡萄酒を醉ふまで飲んで吐けばその毒を解す』とあるが、これは李絳が人が蜘蛛の毒に中つたときは、醉ふまで酒を飲めば癒えるといつたと同一事實だ。やはりその蟲は蜘蛛である。鄭曉の吾學編には『西域の(七)賽藍地方には、夏、秋の間に草に小さい黑蜘蛛が生じ、甚しい毒があつて、嚙まれたものは痛んで地に徹するやうな聲を揚げる。その場合、土人は、咒文を誦へて薄荷の枝でその瘡を拂ひ、或は羊肝でその身體を悉く擦るのであるが、それで一晝夜經てば痛が止み、癒えて後に、皮が脱ける。牛馬が傷を受ければ直ちに死亡する』とある。元稹の長慶集には『巴中の蜘蛛は大きくて毒が甚しく、身の圍り數寸、蹄の長さその數倍あつて、竹

（六）癀ハ脫腸。
（九）丁奚ハ脾疳。

木は網を懸けられると皆枯死する。人がその毒に中ると、瘡痏が生じて非常に痛痒するが、ただ苦酒で雄黄を調へて塗り、同時に鼠負蟲にその絲を食はせれば癒える。急に治療せねばその毒が心臓を犯して能く死亡する』とある。段成式の酉陽雜俎には『深山には大いさ車輪ほどの蜘蛛がゐて、よく人や動物を食ふ』とある。これ等の數説は心得て置いてよいことだが、淮南萬畢術に『赤斑蜘蛛に猪肪を食はせて百日飼つてから殺し、それを布に塗れば雨にも濡れなくなる。足に塗れば水上を歩める』とあり、抱朴子に『蜘蛛と水馬とを合せた馮夷水仙丸を服すれば水中に居れる』とあるは、いづれも方士の駄法螺だから信ずるに足らない。

【氣味】【微寒にして小毒あり】大明曰く、毒なし。蔓青、雄黄を畏る。時珍曰く、蜘が飲食物に入つたときは食つてはならない。

【主治】【大人、小兒の（六）癀、及び小兒の大腹、（九）丁奚で三年歩行不能のもの】（別錄）【蜈蚣、蜂蠆の螫傷には、これを取つて咬まれた處に置いてその毒を吸はす】（弘景）【蛇毒、温瘧に主效があり、嘔逆、霍亂を止める】（蘇恭）【汁を取つて蛇傷に塗る。燒いて喫へば小兒の腹疳を治す】（蘇頌）【口喎、脫肛、瘡腫、胡臭、齒䘌に主

效がある』(時珍)『斑なものは瘧疾、疔腫を治す』(日華)

發明　○頌曰く、別錄に『蜘蛛は㿉を治す』とあり、張仲景は、陰狐疝氣の偏にして大小あり、時時に上下するを治するに蜘蛛散を用ゐた。蜘蛛十四箇を炒り焦し、桂半兩と散にし、一日二回、八分づつを服す。或は蜜で丸にしても宜し。

○恭曰く、蜘蛛はよく蛇を制す。故に蛇毒を制するものだ。しかし本條にはこの事實の記載がない。

○時珍曰く、鶴林玉露の記載に『蜘蛛はよく蜈蚣を制すもので、蜘蛛が蜈蚣に尿を放射すると節節が斷れ爛れる』とあるは、陶氏の『蜘蛛は蜈蚣傷を治す』といつたこととやはり符合するわけだ。沈括の筆談の記載に『蛛が蜂に螫されると、よく芋の梗を嚙んで創に磨り、それで癒す』とある。現に蜘蛛はまたよく蜂蠍の螫傷を治するが、何かの關係があるのかも知れぬ。又、劉義慶の幽明錄に『張甲と司徒蔡謨とは親しい間柄だつたが、ある日、謨が晝寢の夢に、甲が「突然の劇しい心腹痛で、脹滿して吐下し得ないのだ。これは乾霍亂といふ病で、ただ蜘蛛を生で脚を斷つて呑めば癒えるのだが、しかし世間でそれを知つてゐない」といひ、そして其時刻に死

（一〇）車字、大觀ニ據テ補入ス。

んだと見た。譲は夢が覺めてから實際を視に使を遣ると、果して甲は死んでゐた。その後乾霍亂の治療にこれを用ゐて見ると直ちに癒えた』とある。按ずるに、この說は當てにならぬやうではあるが、正に唐本草の註に『嘔逆、霍亂を治す』とある文と合致する。やはり出鱈目ではないかも知れぬ。蓋し蜘蛛は、服すればよく人を利せしめるものだ。

附方 舊七、新十四。【中風口喎】火に向ひ、蜘蛛を取つて偏急した頰（一〇）車上に摩り付け、正しくなるを俟つて止める。（千金方）【小兒の口噤】直指では、立聖散——乾蜘蛛一箇を足を去つて一夜竹瀝に浸して炙き煎し、蠍梢七箇、膩粉少量と末にし、一字づつを乳汁で調へて時時に口中に灌ぎ入る。○聖惠では、生後十日の小兒が口噤して哺乳不能なるを治す。蜘蛛一箇を足を去つて炙き焦して研末し、猪乳一合を入れて和匀し、三服に分けて徐徐に灌ぐ。神效無比である。【瘧疾の止截】葛洪の方では、蜘蛛一箇を飯と共に搗いて丸にして呑む。○楊氏家藏では、蜘蛛一箇を蘆管中に入れて密に塞ぎ、患者に知れぬやうにその項上に綰ける。○海上では、蜘蛛三五箇を綿で包んで寸口上に繫ける。○宣明方では、大蜘蛛三箇、信砒一錢、雄黑豆四

十九粒を末にし、水を滴して豌豆大の丸にし、前夜一丸を北斗の下に獻げ、翌早朝紙で裹んで耳中に挿む。立ろに神聖な效驗を現すもので、一丸で二人を治療し得る。

【泄痢脱肛】已に久しきものには、黑聖散が主效がある。大蜘蛛一箇を瓠葉で二重に包んで括り付け、燒いて性を存し、黄丹少量を入れて末にし、先づ白礬、葱、椒の煎湯で洗つて拭ひ乾し、右の藥末を軟い帛に置いて托入して收める。この方法は甚だ有效なものだ。（乘閑方）【走馬牙疳】出血して臭きには、蜘蛛一箇、銅綠半錢、麝香少量を杵き勻ぜて擦る。蛛がないときは殼を用ゐる。（直指）【齒䘌の斷爛】大蜘蛛一箇を濕紙で二重に裹み、それを更に荷葉で包んで灰火で煨き焦して末にし、麝香少量を入れて研つて傅ける。（永類鈐方）【膿の出る聤耳】蜘蛛一箇、臙脂坯子半錢、麝香一字を末にし、鵞翎で吹き入る。【吹嬭の疼痛】蜘蛛一箇を麪で裹んで燒いて性を存し、末にして酒で服すれば直ちに止む。神效がある。【(二)頦下の結核】大蜘蛛を多少を許らず好酒で浸してから共に研爛し、澄して滓を去り、就寢時に服するが最も效がある。（醫林集要）【瘰癧結核】頭あると頭なきとを問はず、大蜘蛛五箇を日光で乾し、足を去つて細研し、一日二回、酥で調へて塗る。（聖惠方）【鼠瘻腫核】已

(二)頦ハ頤ノ下、俗ニアゴ。

に破れて膿水の出るには、蜘蛛十四箇を燒き、研つて傅ける。(千金)【便毒の初期】大なる黒蜘蛛一箇を研り爛し、熱酒一椀に攪ぜて服す。左右に隨つて側臥して利を取る。退かぬときは再服すれば必ず效がある。(壽域)【丁腫の根を拔く】戸邊の蜘蛛を取つて杵き爛して醋を和し、先づ腫の四畔を挑げて血を出し、根をやや露出さして傅け、乾けば易へる。一晝夜で根を拔出し、大いに神效がある。(千金)【腋下胡臭】大蜘蛛一箇を、黄泥に少量の赤石脂末、及び鹽少量を入れて和匀したもので裹んで煆き、末にして輕粉一字を入れ、醋で調へて膏にし、就寢時に腋下に傅ける。翌早朝厠へ行くと必ず黒汁を泄下するものだ。(三因方)【蜂蠆の螫傷】蜘蛛を研つて汁を塗り、幷に生きたものを咬まれた處に置いて毒を吸はす。(廣利方)【蜈蚣の咬傷】上に同じ。【蛇虺の咬傷】蜘蛛を搗き爛して傅けるが甚だ效がある。【一切の惡瘡】蜘蛛を晒して研末し、輕粉、麻油を入れて塗る。(直指方)

蛻殼 主治 【蟲牙、牙疳】(時珍)

附方 舊一、新一。【孔のある蟲牙】蜘蛛殼一箇を綿で裹んで塞ぐ。(備急)【牙疳出血】蜘蛛殼を末にし、臙脂、麝香少量を入れて傅ける。(直指方)

網【主治】【よく忘れるには、七月七日に取り、人に知られぬやうに衣服の領に入れて置く】(別錄)【これで疣贅をくるめば七日で消落する效驗がある】(蘇恭)【瘡毒を療じ、金瘡出血を止める。黄に炒つて研末し、酒で服すれば吐血を治す】(時珍)記載は聖惠方にある。

【發明】時珍曰く、按ずるに、侯延賞の退齋閑錄に『凡そ突然の劇しき吐血には、大蜘蛛網を搓んで小團にし、米飮で呑めば一服で立ろに止む。これは孫紹先が所傳の方だ』とあり、又、酉陽雜俎に『裴旻は山へ行つて、蜘蛛が布を一疋ほど張り廻したやうな網を懸けてゐるのを發見し、弓で射殺してその絲を數尺ばかり斷り取つて持歸り、部下の者が金瘡を受けたとき、それを一寸四方に切つて貼ると血が立ろに止んだ』とある。これで見ると、蜘蛛は蓋し血を止めるものである。

【附方】新四。【積年の諸瘡】蜘蛛膜を貼つて數〻易へる。(千金方)【反花瘡疾】上に同じ。【肛門の鼠痔】蜘蛛絲を纏へれば落ちる。【疣瘤の初期】柳樹上の花蜘蛛網を纏へて久しく置けば自ら消える。(簡便方)

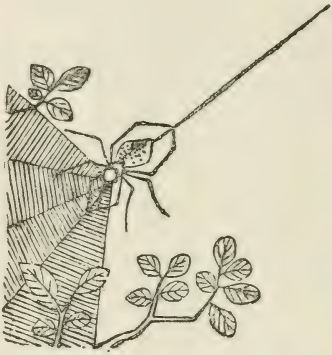
草蜘蛛（拾遺）

和名 くさぐも
學名 未詳

正誤 舊本には標題を𧊒蟱としてあるが、ここには爾雅に據つて草蜘蛛と書き改めた。理由は下文に記す。

集解 藏器曰く、𧊒蟱は、孔穴中、及び草木の稠密な場所に蠶の絲のやうな網を作り、蒂を著け、中に一箇の門を開いて出入する。形態は蜘蛛に似て斑があり、小さい。陶氏が、𧊒蟱、卽ち蜘蛛といつたのは誤だ。

時珍曰く、爾雅に『鼅鼄は鼄蝥なり。草鼅鼄は草上に幕を絡めるものだ』とある。これに據れば、陶氏が𧊒蟱といつたのは正に爾雅と合致するのであつて、陳氏のいふ𧊒蟱は、卽ち爾雅の草蜘蛛のことだ。ここに改め正して置く。しか



草蜘蛛 —𧊒蟱—

し、草上のものにも數種あるので、藥にはやはりその大なるものを入れることになつてゐる。甚だ有毒のものだから注意を要することで、李氏の三元書に「草上の花蜘蛛の絲は最も毒なもので、よく牛の尾を纏ひ斷つものだ。ある人は放尿する際に絲が纏つたためにその陰が斷爛するに至つた』とある。又、沈存中の筆談に『草上の花蜘蛛に咬まれたものを天蛇毒といふ』とあるは誤だ。鱗部天蛇の條に詳記してある。

氣味　(缺)

主治　【疔腫のを根出すには膏に搗いて塗る】(藏器)

絲　主治　【瘤贅、疣子を去り、瘧疾を禳ふ】(時珍)

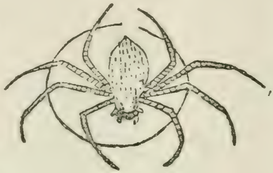
附方　新二。【瘤疣】稻上の花蜘蛛十餘を取つて桃枝の上に置き、絲を垂下するを待つて東側に垂れた絲を取り、撚つて綿にして繫け、七日に一回換へれば自ら消落する。(總微論)【瘧を截る】五月五日に花蜘蛛を取り、晒乾して紅絹の嚢に入れ、發作期に臨み、患者に知らせぬやうに、男は左、女は右の臂に繫ける。(普濟方)

壁錢（拾遺）

和名　ひらたぐも
學名　Uroctea spp.?

釋名　**壁鏡**　時珍曰く、いづれも窠の形態を形容した名稱だ。

集解　藏器曰く、壁錢は蜘蛛に似たもので、墻壁の間に錢ほどの白幕を作るものだ。北方では壁繭と呼ぶ。


〔壁錢〕

時珍曰く、蜘蛛ほどの大いさで、形は扁く、色は斑だ。足は八本あつて長い。やはり時に殼を蛻ぐ。その膜は色が白く光つて繭のやうだ。或は、その蟲は有毒なもので、咬まれると死ぬことがあるが、ただ桑柴灰を煎じた汁で白礬末を調へて傅けるが妙だといふ。

氣味　【毒なし】

主治　【鼻衄、及び金瘡出血の止まぬには、この蟲の汁を捺り取つて鼻中に注ぎ、及び瘡上に點ける。また五種の野雞病の下血を療ず】（大明）　【大人、小兒の急疳、牙蝕腐臭を治するに、壁蟲と人中白と等分を燒き、研つて貼る。又、喉痺に主

效がある】（時珍） 記載は聖惠等の方にある。

【附　方】 新一。【喉痺、乳蛾】已に死んだものも復活する。墻上の壁錢七箇を採り、その中に生きた蛛二箇を交へて一處に撚り集め、重量七分の白礬一塊を溶し、壁錢にその礬を惹いて燒いて性を存し、火毒を出して末にし、竹管で吹き入れば立ろに好くなるものだ。熱物、肉類、硬きものを忌む。

窠幕 【主　治】【小兒の嘔逆には、十四箇の煮汁を取つて飲む】（藏器）【産後の欬逆が三五日止まずして死せんとするには、十五箇を取つて汁に煎じて呷ふが良し。又、金瘡、諸瘡の出血の止まぬもの、及び瘡口の斂らぬを治するには、繭を取つて頻りに貼る。蟲牙痛を止める】（時珍）

【附　方】 新一。【蟲牙疼痛】普濟では、壁上の白蟢窠四五箇を取つて黑きものを剝き去り、鐵刀で燒いて汁を出し、窠に汗を惹いて丸にし、それを牙中に納るが甚だ效がある。又、乳香を窠內に入れ、燒いて性を存して納れるも效がある。○ある方では、墻上の白蛛窠に胡椒末を包んで耳を塞ぐ。左の痛には右を塞ぎ、右の痛には左を塞ぎ、手で抑へて額に微し汗の出るまで側臥すれば癒える。

（一）蛭蟷（拾遺）

和名　ちぐも
學名　Atypus spp.

釋名　**蛈蜴**（爾雅）　**顚當蟲**（拾遺）　**蛈母**（綱目）　**土蜘蛛**　藏器曰く、蛭蟷の發音は窒當（チツタウ）である。爾雅には、蛈蜴、發音は迭湯（テツタウ）としてある。今はそれを轉訛して顚當蟲（てんたうちう）と呼ぶ。河北地方では、蛈蟷—發音は姪唐（テツタウ）—と呼ぶ。鬼谷子には、これを蛈母（ちつぼ）といつてある。

集解　藏器曰く、蛭蟷は是處にある。形は蜘蛛に似たもので、土の穴に窠を作り、穴の上に蓋を作つて穴口を覆ふものだ。

時珍曰く、蛈蜴、卽ち爾雅の土蜘蛛のことで、土中に網を布くものだ。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『部屋の前に、雨上りに顚當が多くゐる。蚓の穴のやうに深い窠を作つてその中に絲網を懸け、地面と平に上を蓋ふ。その蓋の大いさ



［蠨　蟷］
一土蜘蛛一

（一）矢野曰ク、此種ニ對シじぐもニ近キとたてぐも（Kishinouyeus）ヲ充ツルモノアレドモ、玆ニハ從來ノ說ニ從フ。

は榆莢ほどで、常にその蓋を上に支へて獲物の通りかかるを待ち構ひ、蠅や蠖が來ると忽ちその蓋を跳ね返し、捕獲すると、咄嗟に穴へ引込んでまた閉ぢて了ふ。蓋の色が地の色と同一なので、所在の隙がなかなか見付からない。ところが、蜂はまたそれを捕つて食ふ。(二)秦地方の童謡に、『顚當顚當牢守レ門、蠮螉寇レ汝無レ處レ奔。といふがある』とある。

氣味　【毒あり】

主治　【一切の疔腫、附骨疽蝕等の瘡、宿肉、贅瘤には、燒いて末にし、臘月豬脂に和して傅ける。また諸藥と共に疔腫に傅けるがよし。根を出すによきものだ】（藏器）

蠍(一)（開寶）

和名　さそり
學名　Species of Scorpionidae（さそり目）

釋名　蛜蝌　音は伊祁（イキ）である。主簿蟲（開寶）杜白（廣雅）蠆尾蟲　○志曰く、段成式の酉陽雜俎に『江南にはもと蠍はなかつたのだが、開元の初に、ある主簿が竹筒に入れて江を渡つて來たので、今でも往往この蟲がゐる。故に俗に稱して

(二) 秦トハ今ノ陝西省ノ南半地方ヲ指ス。

(一) 矢野曰ク、支那ニ數種ヲ產シ、其何レヲ藥用ニ供スルカ明ナラザレドモ、つくしさそり（Buthus Martensi, Karsch）及（Buthus occitanus, Amoreux）等其主ナルモノナル可キカ、

前種ハ支那ノ中部以北ヨリ朝鮮滿洲ニ產シ、後者ハ中部以南ニ產ス、其他Hormurus australasiae, Fabricius, Isometrus maculatus, Geer. 等數種アリ。

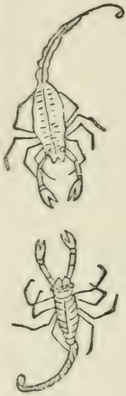
(二) 幽州ハ草部山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

(三) 青州ハ草部隰草類天名精ノ註ヲ見ヨ。

(四) 陳州ハ草部隰草類豨薟ノ註ヲ見ヨ。

主簿蟲といふのだ。

時珍曰く、按ずるに、唐史に『劍南にはもと蠍はゐなかつた。ある主簿が將來したもので、それで主簿蟲と呼ぶ』とあるが、又、張揖の廣雅には『杜白は蠍なり』とあり、陸機の詩疏には『蠆、一名杜白。(二)幽州地方ではこれを蠍といふ』とある。これで觀ると、主簿といふは杜白の訛であつて、それを後世にかやうな說に傅會したのだ。許愼は『蠍は蠆尾蟲であつて、長尾なるを蠆といひ、短尾なるを蠍といふ』といひ、葛洪は『蠍は、前に刺すを蠚といひ、後に刺すを蠆といふ』といひ、古語には『蜂蠆、垂芒、その毒尾に在り』といふ。現今では、藥用として一匹全部用ゐる場合にそれを全蠍といひ、尾を用ゐる場合にそれを蠍梢といふ。その力が尤も緊しいものだ。



蠍

集解 志曰く、蠍は(三)青州に產する。形の緊つて小さいものが良し。段成式は『鼠負蟲の巨なるものが多く化して蠍になるもので、その背に多く蠍の子を負ふ子は色が白く、纔に稻粒ほどのものだ。(四)陳州の古倉に錢ほどの形の蠍がゐて、人

が螫されると必ず死亡する。蝸はよくこれを食ふもので、蝸の跡の涎で蠆の居る周圍をくぎり廻らして置くと、その中からなかなか立ち去らない』といつてある。

宗奭曰く、現に青州では、山中の石の下からこれを捕つて慢火で逼り、或は烈日中に晒し、蠆が渇した時に青泥を食はせ、かくて十分食はせてから火で逼殺する。それで色が多く赤くなつてゐる。これはその蠆の重さを增して高價に售るための手段なのだ。使用するにはその土を去らねばならぬ。

頌曰く、今は(五)汴洛、河陝の州郡にいづれもある。採收に一定の時期はない。火で逼乾して殺すものだ。陶隱居の集驗方に『蠆には雌雄の別があつて、雄が螫したときは痛が一局部に止るものだ。それには井泥を傅ける。雌が螫せば痛が各處に牽及するものだ。それには瓦溝下の泥を傅ければいづれもよし。一地點を十字に劃してその土水を取つて方寸匕を服し、或は螫傷が手足の場合には、冷水に漬けて微し暖まれば易へる。身の場合には、布を水に浸して搨する。いづれも效驗がある。又咒禁法もあつて、やはり應驗がある』とある。

時珍曰く、蠆は、形態は水黽のやうで、八足あつて尾が長く、節があつて色は青

(五) 汴洛ハ草部芳草類香薷ノ註ヲ見ヨ。河陝ハ河西、陝西、卽チ今ノ陝西省ノ地ナリ。

い。現にこれを捕捉する者は、多くは鹽泥を食はせる。藥用には、足を去つて焙じて用ゐる。古今錄驗には『蠍に螫されたときは、ただ木椀をその螫傷に合はせて置くが神驗不傳の方だ』とある。

氣味 【甘く辛し、平にして毒あり】

主治 【諸風癮疹、及び中風の半身不隨、口眼喎斜、語澀、手足の抽掣】(開寶)
【小兒の驚癇、風搐、大人の痃癖、耳聾、疝氣、諸風瘡、婦人の帶下、陰脱】(時珍)

發明 宗奭曰く、大人、小兒に通用し、驚風に尤も闕くべからざるものだ。

頌曰く、古今の、中風抽掣、及び小兒の驚搐を治する方に多く用ゐてあつて、篋中方には、小兒の風癇を治する方が記載されてある。

時珍曰く、蠍は東方に產し、色は青く、木に屬する。足の厥陰の經の藥である。故に厥陰の諸病、諸風の掉眩、搐掣、瘧疾寒熱、耳聾で聲の聞えぬものを治す。いづれも厥陰、風、木に屬するものだ。故に東垣李杲は『凡そ疝氣、帶下は皆風に屬する。蠍は風を治する要藥だから、いづれもこれを加へて用ゐるがよい』といつてあるのだ。

附方　舊三、新二十。【小兒の臍風】宣風散——初生兒が臍緒が斷れてから後に風濕に傷み、唇青く口撮して白沫を出し、乳を飮まぬには、全蠍二十一箇を無灰酒を塗つて炙いて末にし、麝香少量を入れ、半字づつを金銀煎湯で調へて服す。（全幼心鑑）【小兒の風癇】蠍五箇を、一箇の大石榴を頭を割取つて內側を剜つた中に納れ、割取つた頭で蓋ふて紙筋と黃泥で封裹し、微火で炙き乾してから、漸次に火を加へて赤く煆き、冷えるを俟つて泥を去り、中の黑く焦げたものを取つて細研し、半錢を乳汁で調へて灌げばそれで定まる。病兒のやや大なるには、防風湯で調へて服す。（篋中方）【慢脾驚風】小兒の久病後、或は吐瀉の後に驚を起して慢脾に轉じたるには、蠍梢一兩を末にして無灰酒で調へ、石榴一箇を內部を剜つた中に納れて蓋をし、文武火上に置いて時時に攪動しながら熬膏し、取出して放冷し、一字づつを金銀薄荷湯で調へて服す。○本事方では、吐、利の後に昏睡し、瘋癇慢脾を起したるを治す。全蠍、白朮、麻黃を節を去つて等分を末にし、二歲以下は一字、三歲以上は半錢を薄荷湯で服す。【天釣驚風】翻眼して上を向くには、乾全蠍一箇を瓦で炒り、好き硃砂を綠豆三粒ほどと末にし、飯で綠豆大の丸にして硃砂少量を衣にかけ、酒に溶化

(六) 胎兒ノ驚搐スルヲ云フ。

(七) 通關散ハ處方ノ名。

(八) 婆蒿ハ蓋シ皤蒿、卽白蒿ノ一名。

して一丸を服すれば頓に癒える。(聖惠)【小兒の(六)胎驚】蠍一箇を薄荷葉に包んで炙つて末にし、硃砂、麝香少量を入れ、麥門冬(ばくもんどう)の煎湯で一字を調へて服すれば效がある。(湯氏寶書)【小兒の驚風】蠍の頭、尾全きもの一箇を薄荷葉四枚でよく裹み、火の上で炙き焦して共に研末し、白湯で四回に分服する。(經驗方)【大人の風涎】卽ち上記の方を一服として用ゐる。【風淫濕痺】手足擧らず、筋節攣疼するには、先づ(七)通關を與へ、次に全蠍七箇を瓦で炒り、麝香一字を入れて研勻し、酒三盞で調へて空心に服す。已に透つたと覺えるときは止め、なほ透らぬときは再服する。もし病がなほ盡く除けぬときは、その後專ら(八)婆蒿根(はかうこん)を洗淨して酒で煎じて日毎に二回服す。(直指方)【破傷中風】普濟では、乾蠍、麝香各一分を末にして患部に傅ける。速に風を癒えしめる。○聖惠では、乾蠍を酒で炒り、天麻と各半兩を末にし、蟾(せん)酥(そ)二錢を湯に化して作つた糊と搗き和して綠豆大(りよくづだい)の丸にし、一丸乃至二丸を豆淋酒で服す。甚しきには三丸まで增加し、汗を取る。【腎氣冷痛】聖惠では、定痛丸――腎臟の虛冷で臍腹に氣攻し、忍び難く疼痛するもの、及び兩脇の疼痛するを治す。乾蠍七錢半を焙じて末にし、酒、及び童尿各三升で稠膏のやうに煎じ、梧子大の丸

にして二十丸づつを酒で服す。〇又、蛜蝛散——蛜蝛の頭足全きもの三十箇を、深さ濶さ各五寸の一地坑を炭火五斤で赤く焼き、火を去つて醋一升を淋入し、醋が滲み乾いたとき、その坑底に排べて椀で蓋ひ、一夜置いて取出し、木香、蘿蔔子を炒つて各一分、胡椒三十粒、檳榔、肉豆蔻一箇と末にし、一錢づつを熱酒で服す。【小腸疝氣】緊つた小さき全蝎を焙じて末にし、發作時に、一錢づつに麝香半字を入れ、溫酒で調へて服し、少頃して再服すれば神效がある。【腎虛の耳聾】十年のものは二服で癒える。小蝎四十九箇、生薑を蝎の大にして四十九片を共に薑が乾くまで炒つて研末し、溫酒で服す、夜間一二更時刻に更に一服する。醉ふても差支なし。翌日耳中に笙簧のやうな聲が聞えれば奏效したものである。（杜壬方）【突然の耳の聾閉】全蝎を毒を去つて末にし、酒で一錢を服す。耳中に水のやうな聲が聞えて奏效する。（周密志雅堂雜鈔）【耳に膿があつて疼痛するもの】蝎梢七箇を毒を去つて焙じ、麝香半錢を入れて末にし、少量を取つて耳中に入れる。一晝夜に三四回、癒えるを度とする。（楊氏家藏）【偏正頭風】氣が上攻して忍び難きには、全蝎二十一箇、地龍六本、(九)土狗三箇、五倍子五錢を末にし、酒で調へて大陽穴上に攤し貼る。（德

(九) 土狗ハ螻蛄、和名けら。

生堂經驗方）【風牙疼痛】全蠍三箇、蜂房一錢を炒り研つて擦る。（直指方）【腸風下血】乾蠍を炒り、白礬を焼いて各二兩を末にし、半錢づつを米飲で服す。（聖惠方）【子腸の收らぬもの】全蠍を炒つて研末し、口に水を噙んで鼻中からその末を嗜ふ。立ろに效がある。（衛生寶鑑）【諸痔の發癢】全蠍を多少に拘らず烟に焼いて熏ずる。卽效ある祕法である。（袖珍方）【諸瘡毒腫】全蠍七箇、梔子七箇を麻油で黑く煎じて滓を去り、溶した黃蠟を入れて膏にして傅ける。（澹寮方）

(一)水蛭（本經下品）

和名 ひる
學名 Hirudo spp.

【釋名】蚑 蜞と同じ。爾雅には虮と書いてある。**至掌**（別錄） 大なるものを**馬蜞**と名ける（唐本） **馬蛭**（唐本） **馬蟥**（衍義） **馬鼈**（衍義） 時珍曰く、地方音で、蛭を痴と訛る。故に水痴、草痴などといふのだ。宗奭曰く、汴地方では、大なるを馬鼈といひ、腹の黃なるを馬蟥といふ。

【集解】別錄に曰く、水蛭は(二)雷澤の池澤に生ずる。五月、六月に採つて暴乾する。弘景曰く、處處の河、池にゐるものだ。蚑には數種あつて、水中の馬蜞の人

(一) 矢野曰ク、現今醫用ニ用キラルルひるハ、本邦及支那ニハ Hirudo nipponica Whitman. ヲ産シ、歐洲ニテハ Hirudo medicinalis, L. ナリ、みづびる科(Hirudinidae)ニ屬ス。

(二) 雷澤ハ草部隰草類蓼ノ註ヲ見ヨ。

を嚙んで腹中に血あるものを得て之を乾かしたものが佳い。山蚑、及び諸種の小なるものはいづれも用ゐるに堪へない。

恭曰く、水蛭、草蛭といふがあつて、大なるものは長さ一尺ほどある。いづれもよく牛馬や人の血を吮ふもので、現に俗間で、多く水中の小なるものを取つて用ゐ、大いに效がある。しかし必ずしも人血を食つて(三)滿腹したるもののみに限るを要しない。(四)草蛭といふは深山の草中に居るもので、人が通ると脛や股に著いて知らぬ間に肉中に入り、それが生育して害をなすものだが、山間の住民はそれ相當の療法を心得てゐる。

保昇曰く、用ゐるは水中の小なるものに限る。別に石蛭といふ石上に生ずるものがあり、泥蛭といふ泥中に生ずるものもあつて、この二蛭は頭が尖つて腰が粗く、色は赤い。誤つてこれを食へば、眼中に烟を生じたやうになり、漸次に枯損するに至るものだ。

時珍曰く、李石の續博物志に『南方の水痴は鼻涕のやうだ。人のけはひを聞くと、ひらひらと動いて人體に著き、それが瘡となるが、ただ麝香、硃砂を塗れば癒える』

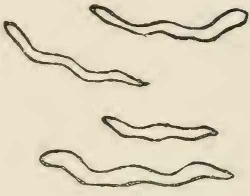
(三) 此處大觀本草ノ文ニ據テ譯セリ。

(四) 矢野曰ク、草蛭やまびる、たにびる、かさびるト稱スルモノハ支那ニ產スル種ハ Haemadipsa zeylanica, Tennant ニシテ、本邦ノモノ其變種 var. japonica Whitman ナリ。

とある。これは草蛭のことだ。

修治　保昇曰く、採取したならば、簟竹筒に盛り、乾くを待つて米泔に一夜浸して暴乾し、冬猪脂で黄色に煎じ焦してから用ゐる。

藏器曰く、蛭を採つて乾すには、その身を長く伸して腹中にある子を去らねばならぬ。火で炙り燒ても容易に死なぬもので、恰も魚子は煙熏して年を經たものでも水にさへ入れば立派に活きると同じやうだ。



〔水　蛭〕

大明曰く、この物は極めて修治し難い。必ず細剉して微火で炒り、色が黄になつて熟したものを用ゐねばならぬ。爾らざれば、腹に入つてから子を産んで害を爲す。

時珍曰く、昔、ある旅人が水を飲み、また水菜を食つた際に誤つて水蛭を呑んだ。ところが腹へ入ると子を生んで害を爲し、臟腑を食ひ血液を咂はれるので、腸痛し黄瘦したが、ただ泥、或は黄土を擂つた水數升を飲むと、蛭が悉く下出したといふ。蓋し蛭が人の腹中に在つて突然土氣に遭ふと下るものだ。或は牛、羊の熱血一二升を猪脂と共に飲んでも下る。

【氣　味】【鹹く苦し、平にして毒あり】別錄に曰く、微寒なり。○石炭、食鹽を畏る。

【主　治】【惡血、瘀血、月閉を逐ひ、血瘕積聚を破り、子無きを治し、水道を利す】（本經）【胎を墮す】（別錄）【婦人の月閉で血勞と成らんとするを治す】（藥性）【赤白游瘮、及び癰腫、毒腫を咂はす】（藏器）【折傷、墜撲の畜血を治するに功がある】（寇宗奭）

【發　明】成無已曰く、鹹は血に走り、苦は血に勝つ。水蛭の鹹苦は畜血を除くもので、肝經の血分の藥である。故によく肝經の聚血を通ずる。

弘景曰く、楚王は寒葅を食ふときに蛭を見てそれを呑んだ。ところが果してよく結積を去つたといふ。たとひ王に陰に天祐があつたにしても、これはやはり物の性に然る所以を兼ねてゐたからのことであらう。

藏器曰く、この物は容易に死なぬ。それ故に楚王は病となつたのだ。

時珍曰く、按ずるに、賈誼の新書に『楚の惠王は、食事のとき寒葅の中に蛭を發見したが、膳部責任者の死に當る罪を氣の毒に思ひ、そのままそれを呑み込んで了

つた。王は腹に疾があつて食事不能であつたが、令尹は「天道親無し、惟れ德是れ輔く、王仁德あり、病も傷を爲さぬでありませう」といつた。王の病は果して癒えた』とある。これが楚王蛭を呑むの故事であつて、王充の論衡にも、やはり『蛭といふは血を食ふ蟲だ。楚王は積血の病があつたらしい。それゆゑに蛭を食つて病が癒えたのだ』とある。陶氏の說と符合する。

附方　舊四、新六。【漏血の止まぬもの】水蛭を炒つて末にし、一日二回、酒で一錢を服す。惡血が消して癒える。（千金）【產後の血暈】血が胸中に結聚して、或は少腹に偏し、或は脇肋に連るには、水蛭を炒り、蝱蟲を翅、足を去つて炒り、沒藥、麝香各一錢と末にし、四物湯で調へて服すれば血が下り痛が止む。そこで四物湯を服す。（保命集）【折傷疼痛】水蛭を新瓦で焙じて細末にし、酒で二錢を服す。食頃して痛みを覺えるとき更に一服し、痛が止んだならば折骨藥で封じ、物を以て夾定し、適當の處置を取る。（經驗方）【跌撲損傷】瘀血が凝滯して心腹が脹痛し、大小便不通で死せんとするには、紅蛭を石灰で黃に炒つて半兩、大黃、牽牛の頭末各二兩を末にし、二錢づつを熱酒で調へて服す。惡血を下すものだ。下し盡るを度とする。

これを奪命散と名ける。(濟生)【墜跌、打撃】內傷に神效の方である。水蛭、麝香各一兩を剉碎し、燒いて烟を出して末にし、酒で一錢を服す。畜血を下すものだ。なほ止まぬときは再服する。その效神の如きものだ。(古今錄驗方)【杖瘡の腫痛】水蛭を炒つて研り、朴消と等分を研末し、水で調へて傅ける。(周密志雅堂抄)【赤白丹腫】藏器曰く、水蛭十餘箇を取つて患部を咂はせる。皮を皺ませ肉を白くして效がある。冬季で蛭のないときは地中から掘取り、暖水で養つて活動するやうにし、先づ患者の皮膚を淨め、竹筒にその蛭を盛つて皮膚上に合はせ著ける。須臾にして十分血を咂へば自から落ちるが、そのときは更に飢ゑた蛭を換へて用ゐる。【癰腫の初期】上記の方法に同じ。【白鬚染めの法】談埜翁方では、水蛭を極細末にし、龜尿で調へて鬚毛に撚りつける。自から根まで滲み込む。○あるひは、白烏骨雞一羽を殺して血を瓶に入れ、それに活きた水蛭數十を入れて溶けて水となるを待ち、指を猪膽皮で包んでその水を蘸けて鬚毛に撚る。自ら根まで黑くなる。○普濟では、大水蛭七箇を末にし、銀三兩で作つた小盒子に汞一兩を盛つた中に入れ、蚯蚓泥で半指の厚さに固濟し、馬糞中に深く埋めて四十九日置いて取り出すと黑い油になる。それ

を指に魚脬を被せて少量づつ蘸けて鬚に撚る。この油は自然に滲入して根まで黑く變色する。〇又、黑鬚倒捲簾方では、大馬蟻二三十條を用ゐ、竹筒に入れて夜間外氣に露し、七日間夜氣を受けて餓ゑしめてから、雞冠血で京墨を磨つたものを與へて食はせ、かく四五回試みてまた陰乾し、猪脛骨を打ち斷つてその中へその蟻を入れ、鐵線で卷きつけて鹽泥で塗り、乾いたとき地上へ置いて火で煨き、五寸の香を二回爇く時間を經過した時火から三寸離し、また五寸の香を三回爇く間煨いて再び火から遠け、また五寸の香だけ煨いて取出して末にし、指を猪膽皮で包んでその末を承けて鬚毛に搽る。根まで黑くなる。

蟻（綱目）

和名　あり
英名　Ant.
科名　Formicidae（あり科）

【釋名】 **玄駒** 蚼とも書く、**蚍蜉** 時珍曰く、蟻には君臣の義があるものだ。故に文字は義に從ふ。また螘とも書く。大なるものを(一)蚍蜉といひ、また馬蟻ともいふ。赤いものは蠪と名け、飛ぶものは(二)螱と名ける。楊雄の方言には『(三)齊、魯

(一)矢野曰ク、蚍蜉和名おほあり、學名Camponotus.
(二)矢野曰ク、螱ハはあり、雌及雄ノ翅

の地方ではこれを蚼(四)蟻といひ、(五)梁益の地方ではこれを玄蚼といひ、(六)幽、燕ではこれを(七)蟻蛘といふ』とある。夏小正に『十二月玄蚼奔る』とあるは、蟻が蟄に入ることだ　大蟻はよく激しい戰をなすものだから馬駒と呼ばれるのだ。而るに、崔豹の古今注に、それを蟻妖として附會してあるが、その說は謬だ。採用し兼ねる。

【集解】 時珍曰く、蟻は處處にある。大、小、黑、白、黃、赤の數種あつて、穴居して卵生する。その居處には階級があり、その行步には隊伍をなす。よく雨晴の天候を豫知するものだ。春、冬蟄から出て土を堆く築き上げて作る封を蟻封といひ、また蟻垤、蟻塿、蟻冢といふ。形狀が封や垤や塿や冢に似てゐるからだ。卵を蚳——音は遲(チ)——といふ。山間の人民はその卵を斗、石ほど掘り出すことがある。古代には食つたものだ。故に禮の內則篇に、周官の饋食の(八)豆に蚳醢なるものがある。今はただ南夷のものが食ふだけだ。劉恂の嶺表錄異に『(九)交、廣の溪峒地では、酋長が多く(一〇)蟻卵を取り、淘淨して醬にする。味が肉醬に似たもので、尊貴な階級以外の者には味はへぬものだといふ』とあり、又『嶺南には蟻が多く、その窠は薄絮囊のやうなもので、枝葉に分れて連帶してゐる。彼の地の者はそれを

チ有スルモノ。
(三)齊魯ハ山東地方。
(四)蟻、本書ニ蟓ニ作ル。
(五)梁益ハ湖北、四川湖南地方。
(六)幽燕ハ直隷省、及ビ遼東地方。
(七)蟻、本書ニ蛾ニ作ル。
(八)豆ハ食器ノ名。
(九)交廣ノ溪峒、交ハ交州、廣ハ廣東、廣西地方チ指ス。溪峒ハ所謂溪蠻族ノ棲息地ノ稱ナリ。
(一〇)矢野曰ク、蟻卵ハ蟻ノ幼蟲、又ハ繭ナリ、卵ニ非ズ。

布袋に取つて貯へ、柑子を栽培する者に蠹蟲を辟けるための物として賣つてゐる』とある。五行記に『後魏の時、(一一)兗州に赤蟻と黒蟻との鬪があつて、長さ六七歩、廣さ四寸に亙つて戰つたが、赤蟻は頭を斷たれて死んだ』とある。して見ると離騷に所謂、南方の赤蟻は象の如く、玄蜂は壺の若しとあるも寓言ではないらしい。又按ずるに、陳藏器は『嶺南に獨脚蟻といふがあつて、一本の足が樹根下に連り、ただよく動搖するだけでそこから脱け去れない』といつてあるが、やはり一種の異なるものだ。

附錄 (一二)**白蟻** 時珍曰く、白蟻、卽ち蟻の白いものだ。一名螱、一名飛蟻といふ。地に穴を穿つて棲み、木を蠹んで食ひ、濕氣に隨つて居處を構ひ、大いに物の害を爲す。初生には蟻蝝といふ。夏になると卵を產み落し、翼が生えて飛ぶのであるが、その時は黒色に變つてゐて、やがてやはり死ぬものだ。性は蜉炭、桐油、竹雞を畏れるさうだ。○蝝の音は鉛(エン)である。

(一三)**蟻蛭土** **白蟻泥** いづれも土部に記載してある。

獨脚蟻 主治 [丁腫、疽毒に搗いて塗る](藏器)

(一一)兗州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。

(一二)矢野曰ク、白蟻ハしろあり又はあり 英名 Termit 等翅目(白蟻目 Isoptern)ノ昆蟲ナリ、種類多シ、螱又飛蟻はあり雌及雄ノ翅ヲ有スルモノヲ云フ、本邦ニテハ此ノ僞白蟻全體ノコトヲ亦はありト云フ。

(一三)矢野曰ク、蟻蛭土又白蟻泥・白蟻ハ巢ノ内面ヲ木質ノ泥

（一）青腰蟲（拾遺）

和名　はれかくし一種
學名　未詳
科名　Staphilinidae

【集解】藏器曰く、蟲の大いさは中蟻ほど、色は赤くして腰中が靑く、首は狗、渇に似て、一箇の尾で尖つてゐる。短い翅があつてよく飛ぶ。春、夏にゐるものだ。

【主治】【大毒あり。人の皮、肉に著けば腫起し、人の面皮を剝ぎ、即字の骨に至るものを除く。また惡瘡瘜肉を蝕く食ひ、癬蟲を殺す】（藏器）

（二）蛆（綱目）

和名　うじ又はいのこ
英名　Larvae of Musca domestica, L. and others
科名　Muscidae

【釋名】時珍曰く、蛆は步む狀態が趦趄たるものだから蛆といふ。或は、沮洳の場所に生ずるの意味だともいふ。やはり通ずる。

【集解】時珍曰く、蛆は蠅の子であつて、凡そ物が腐敗すると生ずるものだ。古法では、醬に生じた蛆を退治するに草烏を切片して投じた。張子和は、癰疽、瘡

狀ノ物質ニヨリテ塗リ、又土ニヨリテ特別ノ巢ヲ造ル。

（一）矢野曰ク、此記事ニヨルニはねかくし科（Staphilinidae）ニ屬スルあをばありがたはねかくし（Paederus idae, Lewis）或ハ其近似ノ種ナルガ如シ、此類支那及日本共ニ數種アリ。

（二）矢野曰ク、蠅類其他雙翅目(Diptera)ニ屬スル昆蟲ノ幼蟲ハ肢ヲ有セズ、總稱シテ蛆ト稱スルモノナルモ、其內主ナルモノハいへばい科(Muscidae)ニ屬スルモノナリ、中ニモ普通ノいへばい(Musca domestica, L.)ノ幼蟲ハ代表的ノモノ

ナリ。

瘍に蛆を生じたるに木香檳榔散の末を傅けた。李樓は、爛痘に蛆を生じたるを治するに、柳の嫩葉を鋪いてそれに臥さしめ、蛆を引き出した。高武は、猪肉片を用ゐて引出し、黎蘆、貫衆、白斂を末にし、眞香油で調へて傅けた。

[氣味]【寒にして毒なし】

[主治]【糞中の蛆は、小兒の諸疳積、疳瘡、熱病の譫妄、毒痢で吐くものを治す】

泥中蛆【目赤を治す。洗淨し、晒し研つて貼る】

馬肉蛆【鍼箭の肉中に入りたるを治し、及び蟲牙を取る】

蝦蟇肉蛆【小兒の諸疳を治す】(いづれも時珍)

[附方] 新十。【一切の疳疾】聖濟總錄では、六月に糞坑中の蛆を取つて淘浸し、竹筒に入れて封じ、乾くを待つて研末し、一二錢づつに麝香を入れて米飲で服す。○又ある方では、蛆蛻を逐日米泔を換へて浸し、五日經つてから淸水に換へて三日浸し、晒し焙じて末にし、黄連末等分を入れ、毎半兩に麝香五分を入れ、豶猪膽汁で和して黍米大の丸にし、三四十丸づつを米飲で服す。神效がある。【小兒の熱疳】

尿が米汁のやうになり、大便不調なるには、糞蛆を灰に燒いて物に雜へ、與へて食はす。【小兒の疳積】糞中の蛆を洗浸し、晒乾して末にし、甘草末少量を入れ、米糊で梧子大の丸にし、五七丸づつを米飮で服ませるが甚だ妙である。(總微論)【小兒の諸疳】疳積、及び無辜疳は一服で熱が退き、二服で煩渴が止み、三服で瀉痢が住まる。端午の日の正午に、金眼で腹が大きく、跳ねず鳴かぬ蝦蟇を取り、搥き殺して尿桶中に入れ、蛆が發生して蝦蟇を食ひ盡したときその蛆を取り、新布袋に入れて三日間長流水中に吊り浸し、新瓦で焙じ乾し、麝香少量を入れて末にし、一錢づつを空心に砂糖湯で調へて服す。或は粳米糊で丸にし、二三十丸づつを米飮で服す。(直指)【齒、鼻の疳瘡】糞蛆の尾あるものを灰に燒いて一錢、褐衣灰五分を和匀し、頻に吹く。神效無比である【熱痢吐食】熱藥を服したために發つたものには、糞中蛆を流水で洗淨し、晒乾して末にし、一錢づつを米飮で服す。【眼目の(三)赤瞎】靑泥中の蛆を淘淨し、日光で乾して末にし、患者を仰臥して目を閉ぢさせ、一日に一錢づつを目の上に散らし、須臾にして藥が行るが、少時待つて藥を去る。赤瞎も同様だ。(保命集)【骨を利し、牙を取る】普濟の如神散——牙を取る。肥えた赤馬の肉一

(三)赤瞎ハタダレメ。

斤に硇砂二兩を入れて拌和し、蛆の生ずるを俟つてその蛆を取り、日光で乾して末にし、一兩づつに(三)粉霜半錢を入れて研勻し、先づ鍼で牙根の四畔を撥動して空虛にし、次に燈心に右の末少量を蘸けて點ければ良久して自ら落ちる。○祕韞の利骨散——白馬の腦上の肉一二斤を用ゐて蛆の生ずるを待ち、その蛆を烏骨白雞一羽に與へて食はせ、その糞を取つて陰乾し、一錢づつに硇砂一錢を入れて研勻し、少量を疼處に擦り片時にして取る。直ちに落ちる。

(一)蠅（綱目）

和名 はい
學名 Spp. of Muscidae（いへはい科）

釋名 時珍曰く、蠅とは飛ぶ狀態が營營たるもので、その聲が自らを呼ぶやうに聞えるから名けたものだ。

集解 時珍曰く、蠅は處處にゐる。夏季に發生して冬季に蟄し、暖を喜み寒を惡む。蒼色のものの聲は雄壯だ。背の金色のものの聲は淸括だ。靑色のものの糞はよく物を腐敗さす。巨なるものの首の(二)火麻のやうなものは茅根から化生するものだ。蠅は聲を鼻から出し、足をよく組合せる。蛆の胎中から生ずるもので、蛆を

(三)粉霜ハオシロイノヤキカヘシ。

(一)矢野曰ク、雙翅目(Diptera)いへばい科(Muscidae)ノ諸種及近似ノ蠅ヲ云フ此種ノ中ニテ蒼蠅ヲくろばい、火麻蠅ヲしまばい又にくばい、靑蠅ヲくそばい又きんばいニ當ツルコト普通ナレドモ、正確ニ何種ヲサスモノナルカ明カニスルコト能ハズ。

(二)火麻ハ大麻。

灰中に入れて置くと蛻化して蠅になる。蠶や蝎が變化して蛾になるやうなものである。水に溺れて死んだ蠅に灰をかけて置くと復活する。故に淮南子に『爛灰生蠅』といつたのだ。古代にもこれを憎んだもので、辟除法が多くあつた。一種の小蜻蛛は專らこれを捕へて食ふ。(三)蠅虎といふはこの蟲だ。

【主治】【拳毛倒睫には、臘月の蟄した蠅を乾して研末し、鼻で頻りに嗅げば癒える】(時珍)

【發明】時珍曰く、蠅は、古方には用ゐられなかつたが、近頃の普濟方にこの法を記載して『海上から出た名方だ』といつてある。

狗蠅(綱目)

和名 いぬしらみばい
學名 Hippobosca capensis, Oef.
科名 Hippoboscidae(しらみばい科)

【集解】時珍曰く、狗蠅は狗の身體に發生するもので、形狀は蠅のやうで黃色だ。能く飛ぶ。皮が堅く喙が鋭くして狗の血を咂ひ啖ふ。冬季には狗の耳の中に藏れる。

(三)矢野曰ク、蠅虎はいとりぐも(Sitticus)屬及近似ノ種ナリ。

氣味　（缺）

主治　【痎瘧の止まぬには、活きたもの一箇を取り、翅と足を去つて麪で裹み、丸にして黄丹を衣にかけ、發作の日の早朝に米飮で呑む。吐して止むものだ。或は蠟で丸にして酒で服するもよし。又、酒に擂つて服すれば痘瘡の倒靨を治す】（時珍）

發明　時珍曰く、狗蠅は、古方には用ゐられなかつたが、近世では、醫方大成に治瘧の方を記載し、齊東野語に托痘方を記載してある。これはやはり鼠負、牛蝨などを用ゐると同様なものだらう。周密は野語に『同僚に(一)括蒼の陳坡といふ老儒があつた。その人の話に、孫が三歳の時、發熱七日にして痘が出て倒靨となつた。色黒く、唇口は氷のやうに冷え、危篤の證であつたので、あらゆる藥を試みたが奏效せぬ。そこで卜筮に因らうと考へて、ある卜者に孫の狀態を話したところ、卜者のいふには「それは適當な藥がある、その病ならば必ず本復する。甚だ奇效の藥だ」とのことで、そこで相當の禮をして、その藥少量を持ち歸つて服ませると、しばらくして痘は紅色に潤ふて來た。それから懇にその方を聞かして貰つたのだが、それ

(一)括蒼ハ縣名、隋ニ置キ、唐ニ麗水ト改ム。今ノ浙江省麗水縣治ナリ。

(二)矢野曰ク、なんきんむし又とこしらみ、學名 Cimex lectularius, L. 從來壁蝨ヲだにト訓スレドモ誤ニシテ、なんきんむしナルガ如シ。

(一)矢野曰ク、だに首科(Ixodoidea)中ニハ Argasidae, Ixodidae, Gamasidae, Holothyridae, 等ノ諸科アリテ多數ノ種ヲ含ミ獸類ニ寄生ス、其內牛ニ寄生スルモノニハ Boophilus, Haemaphysalis 等アリ、牛蝨ガ其等ノ中

は、狗蠅七箇を細に擂り、醅酒少量で和し調へて服すといふだけのことだつたといふ。そもそも痘瘡は元來危險な病だが、しかし慌て騒いではならない。大體は、臟氣を强固にする以外はその自然に任すより外ないものであるが、變證の起ることもあるのだから、その場合は藥の力に待たざるを得ない』といつてある。

附錄 (二)**壁蝨** 時珍曰く、卽ち臭蟲である。形狀は酸棗仁ほどのもので、人血を咂つて食物とし、蚤と同樣、いづれも椅子や寢臺に居て害を爲すものだ。古代には、多くは席下に麝香、雄黃、或は菖蒲末、或は蒴藋末、或は楝華末、或は蓼末を置き、或は木瓜の烟、黃蘗の烟、牛角の烟、馬蹄の烟を燒いて辟けたものだ。

(一)牛蝨（綱目）

和名　だに
科名　Ixodoidea（だに首科）

釋名 **牛螕** 音は卑(ヒ)である。時珍曰く、螕は蜱とも書く。按ずるに、呂忱の字林には『螕は牛を齧む蝨なり』とある。

集解 時珍曰く、牛蝨は牛の身體に發生し、形狀は蜱麻子のやうで白、黑の二種ある。血を嚙つて滿腹すると自から墜落するものだ。藥には白色のものを用ゐ

ノ特種ノモノヲ指スカ、又ハ類似ノモノヲ廣ク含ムカ明ナラズ。

（一）矢野曰ク、吸口亜目（Siphunculata）ニ屬スルモノニシテ、

る。

氣味　（缺）

主治　【小兒の痘疹毒の預解には、焙じ研つて服す】（時珍）

發明　時珍曰く、牛蝨は、古方には用ゐられなかつたが、近世では痘毒預解の方に時に用ゐることもある。按ずるに、高仲武の痘疹管見に『世俗で、牛蝨を治痘に用ゐるが、本草を調べて見ると記載されてない。そもそも牛蝨は血を啖ふこと蝱蟲と同様なものだ。結局痘患者のために宜きものであるまいと思ふ。竊に恐れるところだ。病毒に對しても、やはり必ずしも解する效力は判らない』とある。

附方　新二。【痘毒の預解】譚野翁方では、白水牛蝨を年齡一歳に對し一箇づつを米粉に和して餅にし、小兒に與へて空服に食はす。惡糞を取下し、終身痘瘡の患を免れる。〇ある方では、白牛蝨四十九箇を焙じ、綠豆四十粒、硃砂四分九厘と研末し、煉蜜で小豆大の丸にして綠豆湯で服す。

（一）人蝨（拾遺）

和名　しらみ
學名　Pediculus humanus, Linne.

人體ニ寄生スルモノニ二種アリ、一ハしらみ Pediculus humanusニシテ、一ハけじらみ又つびじらみ Phthirius inguinalis ナリ、前者ニハ二ツノ品形ヲ有シ、之ヲ別ツ者ハ之ヲあたまじらみ (Pediculus captis) ころみじらみ (Pediculus vestimenti) トナスモ、今ハ普通之ヲ一種トス。

釋名　**虱**　時珍曰く、蝨の字は卂に從ひ䖵に從ふ。卂は音迅（ジン）䖵は音昆（コン）であつて、蝨とは、歩むことが卂疾（スミヤカ）で昆しく繁殖するの意味だ。俗に虱と書く。

集解　愼微曰く、按ずるに、酉陽雜俎に『人の將に死せんとするときは蝨が身から離れる』とあり、或は、病人の蝨を取つて病床の前へ置くと病の吉凶を卜へる。蝨がもし歩んで病人の方へ向へば必ず死ぬともいふ。荊州の兵曹張典は兩頭の蝨を取つたさうだ。

時珍曰く、人間にも動物にも皆蝨があるもので、ただ形が各〻同くない。發生の始には氣化に由るが、後に卵を產み付けて蟣が生れる。草木子には『そのものは六足で、歩めば必ず北に向ふ』といひ、抱朴子には『頭の蝨は黑いが身に著けると白く變化し、身の蝨は白いが頭に著けると黑く變化する。自らなる力がさやうに現はれるのだ』とある。又、蝨癥、蝨瘤などの諸方法があるのだから、蝨が害たるや小なるものでないことを知るべきであつて、千金方には『人が蝨を嚙んで腹中に呑込むと、生長して癥となり、そのために生命を隕すことがある。敗篦、敗梳各一半

を灰に燒き、一半を湯に煮て調へて服すれば下部から下出する』とあり、徐炫の稽神錄には『後梁の李生は背部が盂ほど隆起し、その痒さが如何にも忍び難かつた。世人はその如何なる病なるやを判定し得なかつたが、醫士秦德立がこれを蝨瘤と斷じ、藥を傅けると一夕にして瘤が破れ、その中から蝨を一斗餘出て、身體は卽日輕快になつた。しかし小竅が殘つて合はず、時時無數の蝨を出して竟に死亡した』とある。予の記憶にも、唐の小說の記載に、(二)滑臺のある人がこの病に罹つたことがあつて、賈魏公が「ただ千年の木梳の燒灰、及び黃龍浴水がよくこれを治するものだ」といつたといふ話がある。洪邁の夷堅志には『(三)臨川のある者が頰に瘤を生じ、忍び難く痒いので、ただ火に向けて炙つてゐたが、ある醫師が切開すると無數の蝨が出て、最後に二箇の大蝨が出た。一箇は黑く、一箇は白かつた。病はそれで頓に癒え、全く瘢痕もなくなつた。これは蝨瘤といふものだ』とある。又、現に世間には、陰毛中に多く陰蝨を生ずるものがある。始末のつかぬほど痒いもので、肉中から摘出して見ると、皆八足で扁く、白いものや紅いものがある。古方には記載がないが、醫師は、銀杏を擦り込み、或は銀硃で熏ずる。いづれもそれで癒える。

(二)滑臺ハ河南省ノ滑臺、草部毒草類附子ノ註參照。

(三)臨川ハ草部芳草類白芷ノ註ヲ見ヨ。

水中竹葉、赤龍浮萍を畏る。

〔氣味〕【鹹し、平にして微毒あり】水銀、銀硃、百部、菖蒲、蝨建草、水中竹葉、赤龍浮萍を畏る。

〔主治〕【人が大いに頭熱を發するには、腦縫を裂開して、黑蝨三五百を搗いて傅ける。又、疔腫を治するには、十箇を瘡上に置き、狄箔繩を灶にしてその蝨の上から灸すれば根が出る。又、脚指間の肉刺瘡を治するには、黑蝨を傅ければ根がやはり出る】（藏器）【眼毛の倒睫するもの】毛を拔き去り、蝨の血を數回點ければ癒える。（時珍）

〔附方〕新一。【脚指の雞眼瘡】先づ挑破して黑、白蝨各一箇をその上に置いて縛る。數〻試みれば自ら癒える。（便民圖纂）

本草綱目蟲部第四十卷　終

本草綱目蟲部

第四十一卷

本草綱目蟲部目錄第四十一卷

蟲の三　化生類三十一種

蠐螬 本經　乳蟲 綱目　木蠹蟲 拾遺　桑蠹蟲 別錄
柳蠹蟲 綱目　桃蠹蟲 日華　桂蠹蟲 綱目　柘蠹蟲 拾遺
棗蠹蟲 綱目　竹蠹蟲 綱目　蘆蠹蟲 拾遺　蒼耳蠹蟲 綱目
青蒿蠹蟲 綱目　皂莢蠹蟲 綱目　茶蛀蟲 綱目　蚱蟬 本經
蟬花 證類　蜣螂 本經 蜉蝣、天社蟲を附す。
天牛 綱目 飛生蟲を附す。　螻蛄 本經　螢火 本經
衣魚 本經　鼠婦 本經 丹戩を附す。　䗪蟲 本經
蜚蠊 本經　行夜 別錄　竈馬 綱目 促織を附す。
䗥螽 拾遺 吉丁蟲、媚蝶、腆顆蟲、金龜子、卽ち頭蟲を附す。　木蝱 本經
蜚蝱 本經 扁前、卽ち蜜蟲、蚊子、蚋子を附す。　竹蝨 綱目

右附方　舊二十四　新一百零四

蟲の三　化生類三十一種

(一)蠐螬（本經中品）

和名　ぢむし
英名　White grub.

【釋名】 蟦蠐　蟦の音は墳(フン)である。（本經）蜰蠐　蜰の音は肥(ヒ)である。（別錄）乳齊（弘景）　地蠶（郭璞）　應條（呉普）　時珍曰く、蠐螬といふは、方言に『それを蟦蠐といふは、その蟲の物を蠹む聲を形象したものだ』とある。或は、これは(二)齊の人、曹氏の子が化したものだなどといふが、蓋し謬說だ。蟦といひ、蜰といふは、その形體の肥つた狀態を言ひ表したものだ。乳齊といふは、この蟲に乳を通ずる效力あることを意味したもので、別錄に『教齊』と書いてあるは誤だ。



〔蠐　螬〕
—諸蠶も同じ—

【集解】 別錄に曰く、蠐螬は(三)河內の平澤、及び人家の積糞(四)草中に生ずる。採取に一定の時期はない。反行するものが良し。弘景曰く、大なるものは足の大趾

(一)矢野曰ク、こがねむし科（Scarabeidae）ニ屬スル甲蟲ノ幼蟲ナリ。

(二)齊トハ今ノ山東省ノ地ヲ指ス。

(三)河內ハ漢時ノ郡名。草部隰草類菊ノ註參照。

(四)大觀ニ草ヲ莊ニ作ル。

（五）白井曰ク、乳母ハ次條乳蟲ノ別名、乳田ノ誤寫ト思ハル。

（六）下ノ字大觀上ニ作ル、然ラバ蠐ノ字ノ下ニトアルハ蠐ノ字ガ下ニアルト訓ム可キナリ。

ほどであつて、背で轉がつて行く方が脚よりも速いものだ。猪蹄に雜へて羹とすれば(五)乳母と區別がつかない。

時珍曰く、その狀態は蠶のやうで大きく、身は短く、節は促り、足は長く、毛がある。樹根、及び糞土中に生ずるものは外が黃で肉が黑く、舊茅屋上に生ずるものは外が白く肉が黯い。いづれも濕熱の氣の熏蒸で化生するものだ。宋齊丘の所謂『燥濕相育し、母あらずして生ずる』といふその事實である。久しく經てば羽化して飛び去る。

【正誤】弘景曰く、詩に『領は蝤蠐の如し』とあるが、この蠐の字を(六)下に置くは、恐らく顚倒したものらしい。

恭曰く、この蟲は、一名蝤蠐といふ。糞聚中、或は腐木中に棲息するもので、腐ちた柳木中にゐるものは內外潔白だが、糞土中にゐるものは皮が黃で肉が黑黯色だ。かく形と色とに相異があり、土と木との特殊もあるのであつて、木中のものが勝るのである。冬季に採るをよしとする。

宗奭曰く、諸腐木の根下に多くゐるものだ。構木は津が甘いので、その根下に就

中多い。また糞土中に生ずるものは肥大ではあるが腹中が黒く、木中のものの瘦せてゐても稍白いものには及ばない。研つて汁を用ゐる。

○斅曰く、蠐螬は、桑樹、柏樹中のものを使用するが妙である。

○○○韓保昇曰く、按ずるに、爾雅注に『蟦は蠐螬なり。糞土中に在り』とあり、『蠐螬は蝎なり』『蝎は蛣蝠なり』また『蝎は桑蠹なり』といひ、いづれも木中の蠹としてあつて、正に本經の『蟦蠐は積糞草中に生ず』とあるに合致する。蘇恭は『木中のものが勝る』といひ、それ以外のものは恐く用うべきものでないやうに言つてあるが、これは決してさうではないと思ふ。現に諸朽樹中の蠹蟲をば通じて蝎といひ、その主たる療效は判らないとなつてゐる。ただ桑樹中のものだけは、近世の方に用ゐられてあるが、これは有名未用、(七)曾用未識類中に桑蠹の一條を掲げてあるそのものだ。蓋しその發生するところの物が異れば、主たる療效にもやはり差別があつて、有毒、無毒の判別は容易であるが、相使、相惡の判別は六ヶ敷いのである。且つ蝎を蠐螬とは呼ばず、蟦に蛣蝠なる別名はない。自ら審かに考ふ可きである。

○○藏器曰く、蠐螬は糞土中にゐるもので、身が短く、足が長く、背に毛筋がある。

(七)曾、大觀ニ有ニ作ル。

これは夏から秋に入つて蛻して蟬となり、空を飛び、露を飲み、よく鳴いてすばらしく高く飛ぶものだ。蝤蠐は、一名蝎、一名蠹といひ、朽木中に發生して木の心を食ひ、錐でもんだやうに木に穴を穿ち、身は長く、足が短く、口が黑く、毛が無く、節が間伸びてゐる。これは春雨の後になると化して天牛となる。水牛の如き兩角があつて、色黑く、背に白點があり、木に緣つて上下し、飛び騰つても遙か高くは飛べないものだ。かやうに、發生する處も異へば形質も別である。陶氏、蘇氏は、それを混淆して註解したが、蓋し千慮の一失だ。ただ郭璞の爾雅註に『蠐螬、糞土中にあり』といひ、『蝤蠐、桑蠹なり。木中に在り、桑を囓ふ。(八)蝸牛に似て長角あり、喜んで桑樹を囓ふ』とあるが正確である。

頌曰く、現に醫家で、產褥に在る婦人に與へて乳を下す藥に糞土中のものを用ゐ、その效甚だ速かなるを見ても、蘇恭の說の據るべからざることが判る。

修治　斅曰く、凡て採收して後に陰乾し、糯米と共に炒つて米が黑く焦げたとき取出し、米、及び身體、口邊の肉毛、竝に黑塵を去つてから三四截にし、粉に研つて用ゐる。時珍曰く、諸種の方に、乾して研るもの、及び生で汁を取るものが

(八)蝸、大觀ニ蝎ニ作ル。

あつて、やはり雷斆のいふこの例には拘らない。

氣味　【鹹し、微溫にして毒あり】別錄に曰く、微寒なり。之才曰く、蜚蠊が使となる。附子を惡む。

主治　【惡血、血瘀、痺氣、破折の血が脇下に在つて堅滿し痛むもの、月經閉止、目中の淫膚、靑翳、白膜】（本經）【吐血が胸腹に在つて去らぬもの、破骨、踒折の血結、金瘡內塞、產後の中寒を療じ、乳汁を下す】（別錄）【汁を取つて目に滴せば翳障を去る。血を主り、痛を止める】（藥性）【惡瘡に傅ける】（日華）【汁は赤白遊瘮に主效がある。瘮を擦り破つて塗る】（藏器）【汁を取つて喉痺に點ける。通じがついて開く】（蘇頌）【脣緊口瘡、丹瘮、破傷風瘡、竹木の肉に入つたもの、芒物の眯目に主效がある】（時珍）

發明　弘景曰く、猪蹄と共に羹にして食へば甚だ乳汁を下す。

頌曰く、張仲景が雜病を治する大䗪蟲丸の方中にこれを用ゐたのは、この物の脇下堅滿を去る效力を取つたのだ。

時珍曰く、許學士の本事方に、筋急を治し血を養ふ地黃丸中に用ゐたのは、この物の血瘀痺を治する效力を取つたのだ。按ずるに、陳氏經驗方に『晉書に、吳の中

書郎盛冲の母王氏が失明したとき、婢が蠐螬を取つて蒸熟し、それを與へて食はせると、王氏は大そう美味だといつた。冲が還つてそれを知り、母を抱いて慟哭したが、母の目はそれで開いたとあるが、これは本草に「目中の靑翳、白膜を治す」とあり、藥性論に「目中に滴せば翳障を去る」とある說と合致する。予は嘗てこれを以て患者を治療して效驗を得た。因て記錄して一般に公表する』とある。又按ずるに、劉伯嗣の嬰童百問に『張太尹傳に、破傷風を治する神效の方——蠐螬を用ゐ、駝脊背を押しつけて口から水を吐かせ、それを取つて瘡上に抹する。身體が麻するを覺えて汗を出し、活きぬものなし。子弟が跌んで額上を破り、七日にして風となつたときも、この方で治療して數時間にして癒えた』とある。これは又『踒折を療じ、惡瘡、金瘡內塞に傅け、血を主とし、痛を止める』の說と符合する。蓋しこの藥は、よく血分に行り、結滯を散ずるものである。故に已上の諸病を治する效力があるのだ。

附方　舊五、新四。【小兒の臍瘡】蠐螬を研末して傅ける。數回に過ぎずしてよし。（千金方）【小兒の唇緊】蠐螬を研末して豬脂に和して傅ける。（千金方）【赤白口瘡】

蠐螬の研汁を頻に捺つて效を取る。(大觀) 【丹毒の浸淫】皮中を走串するものを火丹と名ける。蠐螬を搗き爛して塗る。(刪繁方) 【瘰癧、痔漏】蠐螬を研末して一日一回傅ける。(子母祕錄) 【虎に咬まれた傷瘡】蠐螬を搗き爛らして日毎に塗る。(唐瑤經驗方) 【竹木の眼に入つたもの】蠐螬を搗いて塗れば立ろに出る。(肘後) 【麥芒の眼に入つたもの】新布で目(九)中を覆ひ、蠐螬を持つてその上から摩る、芒は布上に著いて出る。(千金方) 【禁酒法】蠐螬を研末して酒で服す。永く飲まなくなる。(千金方)

乳蟲(綱目)

和名 未詳
學名 未詳

【釋名】 土蛹

【集解】 時珍曰く、按ずるに、白獺髓に『(一)廣中の(二)韶陽管下のある田舍に乳田といふがある。その方法は、土地に窖を掘つて粳米粉を鋪き入れ、草で蓋ふてその上に糞埃を壅せて置き、雨後氣が蒸してから開いて見ると、米粉は皆化して蠐螬のやうな狀態の蛹になつてゐる。その蛹から取つた汁を粳粉に和して乳にして食ふのだが、味甚だ甘美なものだ。これはやはり人爲的に生産する蠐螬の類のもので、

(九)中、大觀ニ上ニ作ル。

(一)廣中トハ今ノ廣東、廣西兩省地方ヲ指ス。

(二)韶陽ハ今ノ廣東省曲江縣ノ地ナリ。

淮南萬畢術の所謂、黍を溝中に置いて生ずる蠐螬、廣雅の所謂、土蛹、蠁蟲はいづれもこの物だ。服食には、これを蠐螬の代用とするが、更に有效無毒のやうである』とある。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【虛羸を補し、胃氣を益し、中を溫め、目を明にする】(時珍)

(一)木蠹蟲(拾遺)　和名 きくひむし　英名 Wood borers.

【釋名】蝎 音は曷(カツ)である。蝤蠐 音は囚齊(シユウセイ)である。蛣蝠 音は乞屈(キックツ)である。蛀蟲 時珍曰く、蠹は、古は螙と書いた。木を食ふ蟲といふ意味の會意の文字である。爾雅に『蝤蠐は蝎なり。蝎は蛣蝠なり』とあり、郭璞は『凡そ木中の蠹蟲は通じて蝎といふ。但しその蟲の發生し棲息するところに因つて相異がある』と註してある。

【集解】藏器曰く、木蠹は、さながら蠐螬のやうで、節が長く、足が短い。腐木中に生じて錐でもんだやうに木に孔をあける。春(二)雨の時期が來ると化して天牛

(一)矢野曰ク、樹幹中ニ蝕入スル昆蟲ノ幼蟲ノ總稱ナルガ如シ、即チ甲蟲類ニ屬スルかみきりむし科(Cerambycidae)たまむし科(Buprestidae)等及ビ蛾類ニ屬スルかはほりが科(Hepialidae)ぼくとうが科(Cossidae)等ノ幼蟲ニシテ大形ナルモノヲ指スガ如シ、本邦ニ於テモ此等ノ幼蟲ハ藥用トシテ之ヲ食ス。

(二)大觀ニ雨ヲ羽ニ

となる。蘇恭がこれを蟦螬としたのは甚しい誤だ。詳細は蟦螬の條を見よ。

時珍曰く、蠶に似て、木中にゐて木を食ふものは蝎(かつ)である。蠶に似て、樹上にゐて葉を食ふものは(三)蠋である。蠋に似て小さく、歩行するとき首と尾とを就け、屈して後に伸びるものは(四)尺蠖(せきかく)である。尺蠖に似て青く小さいものは(五)螟蛉(めいれい)である。この後者の三蟲はいづれも木に穴を穿(うが)てぬもので、夏になるといづれも羽化して蛾となるものだ。ただ木に穴を穿つ蠹だけを藥用とすべきものである。

氣味 【辛し、平にして小毒あり】 **主治** 【血瘀(けつお)、勞損、月經閉止、月經不調、腰脊痛、損血あるもの、及び心腹間の疾】(藏器)

發明 時珍曰く、諸種の木はそれぞれ性、味に良、毒の不同があるので、蠹(と)もやはりその棲息し食するものに隨つて差異がある。一概に用ゐるわけには行かない。古方に用ゐてある蠹は、多くは桑、柳、構の木のものを取つたもので、やはりそれぞれの理由がある。

(一)桑蠹蟲 (別錄)

和名　くはのきくひむし
英名　Mulberry wood-borer.

作ル、卽チ春ニ至リ羽化シテト讀ム可キデアル。

(三)矢野曰ク、蠋ハ普通いもむしト稱シ、すずめが科(Sphingidae)ノ幼蟲及類似ノ體形ヲ有スルモノヲ云フ。

(四)矢野曰ク、尺蠖ハ和名しやくとりむしニシテしやくとりが科(Geometridae)ノ幼蟲ナルベシ。

(五)矢野曰ク、螟蛉、和名あをむし、蛾類ノ幼蟲ニシテ毛少ク裸出セルモノナルベシ。

(一)矢野曰ク、桑蠹蟲ハ桑ノ幹ニ食入スルかみきりむし科

(Cerambycidae)ノ幼蟲ナラン、此類數種アリ、くはかみきり、くはとらかみきり、きぼしかみきり等皆日本支那共ニ產ス。

【校正】有名未用より此に移し入る。

【釋名】**桑蝎**　音は曷（カツ）である。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【心の暴痛。金瘡の肉の生ずることと不足のもの】（別錄）【胸下の堅滿、障翳、瘰癧。風疹を治す】（日華）【眼を治して奏效した】（蜀本）【氣を去り、不足を補し、小兒の乳霍を治す】（藏器）【小兒の驚風、口瘡、風疳。婦人の崩中で赤白を漏下するもの、墮胎下血、產後の下痢】（時珍）

【附方】新二。【崩中漏下】赤、白を下すには、桑蝎を灰に燒き、一日二回、溫酒で方寸匕を服す。（千金）【墮胎下血】止まぬには、桑木中の蝎蟲を燒いて末にし、一日二回、酒で方寸匕を服す。蟲の屎を用ゐてもよし。（普濟方）

糞【主治】【腸風下血。婦人崩中、產痢。小兒驚風、胎癬。咽喉骨哽】（時珍）

【附方】新四。【腸風下血】枯れた桑樹下の蟲の糞を燒いて性を存し、酒で一錢を服す。（聖惠方）【產後の下痢】一日五十回ほど下るには、桑木中の蠹蟲糞を黃に炒り、急に水を沃いで適當に稀稠して服し、瘥えるを度とする。これは祭酒獨孤訥の

方である。(必效方)【小兒の胎癬】小兒の頭に瘡が生じ、手で爬くと更に蔓延するものを胎癬といふ。先づ癬を葱鹽湯で洗淨し、桑木蛀屑を燒いて性を存し、輕粉等分を入れて油で和して敷く。(聖惠)【咽喉骨鯁】桑木上の蟲糞を米醋で煎じて呷ふ。(永類鈐方)

(一)柳蠹蟲(綱目)

和名 やなぎのきくひむし
英名 Salix wood-borer.

【集解】時珍曰く、柳蠹は柳木中に甚だ多く生ずるもので、内外潔白だ。春、夏になると化して天牛となる。諸家は蝤蠐の註に多くこれを引いてあるが、やはり誤だ。

【氣味】【甘く辛し、平にして小毒あり】

【主治】【瘀血、腰脊の瀝血痛、心腹の血痛、風瘻、風毒、目中の膚翳。功力は桑蠹に同じ】(時珍)

糞【主治】【腸風下血、産後の下痢、口瘡、耳腫、齒齦の風毒】(時珍)

【附方】新三。【風疳の口瘡】小兒の病むものだ 柳木蛀蟲の糞を燒いて性を存

(一)矢野曰ク、かみきりむし科ノ幼蟲ニシテ柳ノ幹ニ蝕入スル種ナルベシ、數種アレドモしらほしかみきり普通ナリ、或ハ此ノ種カ。

して末にし、麝香少量を入れて搽る。雜木のものでもよし。(幼幼新書)【齒齦の風腫】柳蠹末半合、赤小豆を炒り、黑豆を炒つて各一合、柳枝一握、地骨皮一兩を用ゐ、三錢づつを水で煎じ、熱して漱ぐ。(御藥院方)【耳腫風毒】腫起して出血するには、柳蟲糞を取つて水に溶化し、滴んだ汁を取つて白礬末少量を調へて滴す。(肘後)

(一)桃蠹蟲(日華)

和名　もものみのむし
英名　Peach fruits borer.

【校正】本經にはもと桃核仁の條下に附記してあつたが、本書は分離して此に入れた。

【集解】別錄に曰く、桃樹を食ふ蟲である。藏器曰く、桃蠹は鬼を辟ける。皆隨つて出るもので、それぞれ有功だ。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【鬼の邪惡、不祥を殺す】(本經)【食へば身體が肥り、顏色が好くなる】(日華)

糞【主治】【溫疫を辟けて感染せしめない。末にして水で方寸匕を服す】(子母祕錄)

(一)矢野曰ク、本經逢原ノ記事ニ依レバ桃實中ニ食入スル蟲ナルヲ以テ、恐ラクすいむしが科(Pyralidae)ニ屬スルごまだらめいが(Dichocrocis punctiferalis Guen.)ナルベシ。但シ別錄ノ桃樹ヲ食フト稱スルモノハ別種ナルコト明カニシテ種名明ナラズ。

桂蠹蟲（綱目）

和名　につけいのむし
英名　Cinnamon wood-borer.

【集解】藏器曰く、これは桂樹中の蟲である。辛し、啖へば美味なものだ。
時珍曰く、按ずるに、漢書の陸賈傳に、(一)南越の尉佗が桂蠹二器を獻じたとあり、又、大業拾遺錄に『隋の時、(二)始安から桂蠹四瓶を獻じた。蜜で漬けると紫色になり、辛く香しくして風味がある。これを啖へば痰飮の疾を去る』とある。これで觀ると、この物は漢、隋の時代から、贈物になるほどの珍味となつてゐたものだ。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【冷氣を去る】（藏器）【寒痰、澼飮、冷痛を除く】（時珍）

糞【主治】【獸骨の哽咽に、醋で煎じて漱ぎ嚥む】（時珍）

柘蠹蟲（拾遺）

和名　はりくはのきくひむし
英名　Cudrania wood-borer.

【集解】藏器曰く、陶氏は詹糖に註して『僞物は柘蟲屎で作る』といつたが、これは柘蠹であつて、木の間にゐて木を食つたその屎である。詹糖は燒けば香しい

(一)南越ハ石部馬鬜ノ註ヲ見ヨ。
(二)始安ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。

が、この屎は香しくない。かく類似點がないのだから、やはり僞物に作るは六ヶ敷いことだらう。

屎　【主治】【血を破る】（藏器）

棗蠹蟲（綱目）

和名　なつめのきくひむし
英名　Jujube wood-borer.

【集解】時珍曰く、これは棗樹中にゐる蝤蠐（しうせい）のことだ。

屎　【主治】【聤耳（ていじ）で膿水が出るには、研末して麝香少量と共に吹く】（時珍）普濟

竹蠹蟲（一）（綱目）

和名　たけのきくひむし
英名　Bamboo wood-borer.

【集解】時珍曰く、竹蠹は諸種の竹の中に生ずる。形狀は小さい蠶のやうで、老いると羽化して翅の硬い蛾になる。

【氣味】（缺）【主治】【小兒の（二）蠼螋頭瘡（らふりづさう）には、慈竹内のものを取つて搗き、牛の尿に和して塗る】（時珍）

【發明】時珍曰く、竹蠹蟲は、古方には用ゐられてないが、ただ袖珍方に、小

（一）矢野曰ク、時珍ノ說ク所ニテハ竹材中ニ生ズルモノノ如ク、恐クハかみきりむし科（Cerambicidae）ノ種ナルガ如シ。此科ニ屬スルモノニシテ竹材ヲ食フモノ數種アリ。
（二）蠼螋頭瘡ハシラクボ。

兒の蠟梨を治するに用ゐてある。按ずるに、淮南萬畢術に『竹蟲を飲ませると、その人は自らその誠を言ふ』とあり、高誘の註に『竹蟲三箇、竹黃十箇を和匀し、大豆一粒ほどづつを燒いて酒の中に入れて飲ませ、大醉に至らぬ程度にして聽かんとする目的の事物を問ふと、必ずその眞實を吐露する』とある。この方法は古典にかく傳はつてゐるが、果してその效驗ありや否やはまだ實驗したことがない。姑らく此に記載して置く。

蛀末　【主治】【聤耳で膿水の出るもの、湯火傷瘡】（時珍）

【附方】新六。【水の出る聤耳】苦竹の蛀屑、狼牙白斂等分を末にし、和匀して頻りに摻る。（聖惠）【耳から臭膿の出るもの】竹蛀蟲末、臙脂坏子等分、麝香少量を末にして吹く。（朱氏集驗）【耳の化膿して痛むもの】耳中に水の入るが原因である。如聖散——箭簳內の蛀末一錢、膩粉一錢、麝香半錢を末にし、綿杖でよく繳淨してからその藥を耳中に送入し、綿でよく塞ぐ。惡物あるものは十分流出さす。甚しきものも三回試みれば必ず癒える。（普濟）【湯火傷瘡】竹蠹蛀末を傅けるがよし。（外臺祕要）【濕毒臁瘡】枯竹の蛀屑、黃蘗末等分を用ゐ、一日一回、先づ葱椒茶湯で洗淨

してから搽る。【牙齒の疼痛】蛀蟲屑、陳皮各一兩を末にし、烏梅肉と共に泥のやうに研つて傅ける。(救急方)

(一)蘆蠹蟲 (拾遺)

和名　あしのずいむし
英名　Stem borer of Phragmitis communis.

【集解】藏器曰く、蘆の節の中から出るもので、形狀は小さい蠶のやうだ。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【小兒が乳を飲んで後吐逆し、腹に入らぬには、蟲二箇を取つて煮てその汁を飲む。嘔逆と哯乳とは同一でない。乳を十分に飲んで後に嘔聲を出さずして吐き出すものを哯乳といふ】(藏器)

(二)蒼耳蠹蟲 (綱目)

和名　おなもみのむし
英名　Stem borer of Xanthium strumarium

【釋名】麻蟲

【集解】時珍曰く、蒼耳蠹蟲は蒼耳の梗中に生ずる。形狀は小さい蠶のやうだ。これを取るには、一見して梗に大きい蛀の孔眼のある蒼耳を擇び、刀で兩頭の蛀のつかぬ梗を截り去り、かく多數取揃へて絲で縛つて簷下に掛けて置く。その蟲は內

(一)矢野曰ク、蘆節中ニ生ズル蟲ナレバ、すいむしが科(Pyralidae)又ハ此ニ類セル蛾ノ類ノ幼蟲ナランカ、種名詳ナラズ。

(二)矢野曰ク、恐ラクハかみきりむし科(Cerambicidae)ノ幼蟲ナラン。

部に在つて年を經ても死なぬものだ。それを使用する際に取出し、細いものは三條を一箇と數へて用ゐる。

【氣味】（缺）【主治】【疔腫惡毒には、燒いて性を存して研末し、油で調へて塗れば卽效がある。或は麻油で浸して殺して貯へ、一二箇づつを擣いて傅ける。卽時に毒が散じて大いに神效あるものだ】（時珍）

【發明】時珍曰く、蒼耳は疔腫、腫毒を治するものだから、蟲にもやはりこれと同一功力がある。古方には用ゐてないが、近世の方法では每に用ゐてある。

【附方】新三。【一切の疔腫】及び無名腫毒、惡瘡。劉松石の經驗方では、蒼耳草梗中の蟲一條、白梅肉三四分を共に泥のやうに搗いて貼る。立ろに癒える。○聖濟總錄では、麻蟲、卽ち蒼耳草內の蟲を黃色に炒り、白殭蠶、江茶各等分を末にし、蜜で調へて塗る。○又、蒼耳節內の蟲四十九條を搥き碎き、(二)人言少量を入れて搥いて塊にし、瘡を刺し破つて傅け、少頃して手で根を撮出すれば直ちに癒える。

青蒿蠹蟲（綱目）

和名　かはらにんじんのむし
英名　Stem borer of Artemisia Dracunculus.

(二) 人言ハ砒石ノ別名。

【集解】時珍曰く、これは青蒿の節の間の蟲である。形狀は小さい蠶のやうで、久しくしてやはり蛾になる。

【氣味】（缺）【主治】【急性、慢性の驚風には、この蟲を搗いて硃砂、汞粉各五分を和して粟粒大の丸にし、一歳に對し一丸の割合で乳汁で服す】（時珍）

【發明】時珍曰く、古方には用ゐてないが、保嬰集に、驚風を治するに用ゐてあつて『十に一も失たぬ』といひ、その詩に『一半の硃砂一半の雪、その功ただ青蒿の節に在り。任教死去したるも也魂を還さしむ。服するとき須く(一)生人血を用うべし』とある。

皂莢蠹蟲（綱目）

和名　さいかしのむし
英名　An insect which feeds on Gleditchia pods.

【集解】（本文缺）

【氣味】【辛し】【主治】【蠅が耳に入つて害をなすには、研り爛らして鱓魚血と共に點ける】（危氏）

(一)生人血ハ乳汁ノ別名。

（一）茶蛀蟲（綱目）

和名　ちやをくふむし
英名　An insect, which spoils tea.

【集解】時珍曰く、これは包裝した茶籠の中の蛀蟲（しゆうう）であつて、その屎を取つて用ゐる。

蛀屑【主治】【聤耳の汁の出るには、研末を日日繳淨（しやくじやう）してから摻る】（時珍）記載は聖惠方にある。

蚱蟬（本經中品）

和名　せみ
英名　A large cicad.

【釋名】**蜩**　音は調（テウ）である。**齊女**　時珍曰く、按ずるに、王充の論衡に『（一）蠐螬（せいさう）が化して腹蜟（ふくいく）となり、腹蜟の背が折（さ）けて蟬となつて出る』とあるそのものだ。腹蜟とは腹で育つの意味、蟬とは變化して相禪するの意味、蚱の字は窄（サク）と發音し、蟬の鳴聲、蜩とはその音が調（テウ）と聞えるからだ。崔豹の古今注に『齊王の后は王を怨んで死んだが、化して蟬になつた。故に蟬を齊女と名けるのだ』とあるが、これは無稽の說だ。按ずるに、詩の作者は、（二）莊姜（さうきやう）の美なるを稱して『齊

（一）矢野曰ク、啓蒙ニハちやのむしト訓シ、現時一般ニハ此名ヲちやたてむしニ充ツ、ちやたてむしハ嚙蟲目（Corrodentia）ニ屬スル昆蟲ナリ、然レドモ恐クハ誤ナラン。

（一）矢野曰ク、蠐螬ハ一般ニぢむしニシテこがねむしノ幼蟲ナリ。茲ニ蠐螬腹蜟ニ化スト云フハ、蟬ノ蛹トぢむしトヲ混同セルモノナルベシ、腹蜟ハせみノ蛹ナリ。
（二）莊姜卽チ齊后。

侯之子。螓首蛾眉』といつた。螓はやはり一種の蟬の名である。世人はそれに因んで、齊女と隱語で呼んだものであつて、意味は蓋しこれを取つたのだ。蟬には品類が甚だ多い。下文に詳述する。

集解 別錄に曰く、蚱蟬は楊柳の上に生ずる。五月に採收して蒸し乾す。蠹はせてはならぬ。

弘景曰く、蚱蟬は啞蟬である。雌蟬であつて、鳴けないものだ。蟬には類が甚だ多い。此に柳の上のものといふは、詩に『鳴蜩嘒嘒』とあるそのもので、形は大きくして黑く、五月になると鳴くものだ。俗に『五月に鳴かねば嬰兒に災が多い』といふ。故にその治療もやはり專ら小兒を主とする。昔は一般に啖つたものだ。故に禮に、雀、鷃、蜩、蕈とあつて、(三)傴僂丈人はこれを掇つたといふ。その四五月に鳴くもので、小さい紫青色のものは蟪蛄であつて、莊子に『蟪蛄は春秋を知らず』とあるがそのものだ。離騷には誤つて蟪蛄を寒螿としてある。寒螿は九月、十月中に鳴いて、聲の甚だ凄急なものだ。七八月に鳴いて色の青いものは蛁蟟と名ける。二月中に鳴くものは寧母と名け、寒螿に似て小さい。

(三)傴僂丈人、淮南子精神訓ニ『子求。行年五十四。而病傴僂。脊管高於頂。腸下迫頤。兩脾在上。燭營指天。匍匐自闚於井。曰。偉哉造化者。其以我爲比拘拘耶』トアリ。弘景ノ所謂

偃僂丈人ハコノ子求ヲ指スカ。ソノ人未詳。丈人トハ道家ニ於ケル得道者ノ尊稱ナリ。

恭曰く、蚱蟬は鳴く蟬だ。諸蟲はいづれも雄を用ゐるを良しとする。陶氏が雌蟬といふは正しくない。

頌曰く、按ずるに、玉篇に『蚱は蟬聲なり』とあつて、正に月令に、仲夏蟬始めて鳴くとあるに合致する。



〔蚱 蟬〕

蘇恭の說が妥當だ。爾雅に『蝒は馬蜩なり。これは蟬の最大なるものだ』とあるがこのものであつて、蟬は種類が多いけれども、獨りこの一種のみを藥用とする。醫方に蟬殼を多く用ゐるが、やはりこの蟬の殼だ。もとは土中に生ずるもので、これは蜣蜋の轉丸が久くして、この蟲に化し、夏になると木に登つて殼を蛻ぐのだといふことだ。

宗奭曰く、蚱蟬は、夏季に身も聲も倶に大きくして徹頭徹尾同じ聲で鳴いてゐる

ものだ。夜の闇い間に土中から出て高處に升り、殼の背を拆いて出る。日が出れば人を畏れるのと、日光で炙乾されるためにその殼を蛻し得なくなるを畏れるのだ。時候が寒くなると地に墜る。小兒が取つて數日間畜つて置いても、やはり飮まず食はずにゐる。古人は、この物を風露を飮んで生きるものだといつたが、糞せずして尿するところを觀ると、やはりさうと見える。

時珍曰く、蟬とは諸種の蜩の總稱であつて、いづれも蠐螬、腹蜟から變じて蟬となる。また轉丸から化成するものもある。いづれも三十日間で死ぬものだ。その何種を問はず、いづれも首は四角で額が廣く、翼が二枚、足が六本あり、脇で鳴く。風を吸ひ露を飮んで生きるもので、尿はするが糞はしない。古代には一般に食つたもので、耀蟬と稱して夜間火を照して取つたものだ。爾雅、淮南子、楊雄方言、陸機の草木疏、陳藏器の本草の諸書の記載は往往混亂して一定せぬが、誤用せぬやう今左にこれを考定して置く。

(四)夏季になると始めて鳴き、大きくして色黒きものは蚱蟬であつて、又、蝒——音は綿(メン)である——といひ、馬蜩といふ。豳詩に『五月鳴蜩』とあるは

(四)矢野曰ク、蟬ノ各種ニ本邦産ノ種名ヲ充ツルモノ多シ、

啓蒙ニハ蟳母ニはるぜみ、蚱蟬ニあかぜみ・さとぜみ即チ現時ノあぶらぜみ、馬蜩ニむまぜみ即チくまぜみ、茅蜩ニひぐらし即チかなかなぜみ、蟪蛄ニなつぜみ即チにいにいぜみ、蛁蟟ニみんみんぜみ、寒蟬ニつくつくぼうし等ヲ充テ、現時亦多ク之ニ從フ、但シ此等當否ハ明カナラズ。

この物だ。

頭上に花冠があるものは、螗蜩といひ、蝘といひ、胡蟬といふ。蕩詩に『如ㇾ蜩如ㇾ螗』とあるがこの物だ。

五色を具するものは、蜋蜩といふ。夏小正に記載がある。

以上はいづれも藥用になる。

小さくして文のあるものは、螓といひ、麥蚻といふ。

小さくして色の青綠なるものは、茅蜩といひ、茅蠽といふ。

秋季に鳴いて色の青紫なるものは、蟪蛄といひ、蛁蟟といひ、蜓蚞といひ、螇螰といひ、蛥蚗――音は舌央（ゼツケツ）である――といふ。

小さくして色の青赤なるものは、寒蟬といひ、寒蜩といひ、寒螿といひ、蜺といふ。

また秋風の吹かぬうちから瘖して鳴けないものは、啞蟬と呼び、また瘖蟬ともいふ。

二三月に鳴いて寒螿より小さいものは、蟳母といふ。

以上はいづれも藥に入れない。

蚱蟬　［氣味］【鹹く甘し、寒にして毒なし】甄權曰く、酸し。

［主治］【小兒の驚癇、夜啼、癲病寒熱】（本經）【驚悸。婦人の難産、胞衣不出。能く胎を墮す】（別錄）【小兒の癇絕で言語不能のもの】（蘇恭）【小兒の驚で哭して止まぬもの。疳蟲を殺し、壯熱を去り、腸中の幽幽として聲を作すを治す】（藥性）

［發明］藏器曰く、本功の外、その腦の煮汁を服すれば、産後の胞衣不下に主效あることは自ら正傳がある。

時珍曰く、蟬の産難に主效があり、胞衣を下すは、やはりその能く退蛻する意味を取つたのだ。聖惠方には、小兒の發癇を治するに、蚱蟬湯、蚱蟬散、蚱蟬丸等の方がある。今は一般に、ただ蛻を用ゐることを知つて蟬を用ゐることを知らない。

［附方］新三。【百日發驚】蚱蟬を翅、足を去つて炙つて三分、赤芍藥三分、黃芩二分、水二盞を一盞に煎じて溫服する。（聖惠方）【破傷風病】表裏を問はず、角弓反張するには、秋蟬一箇、地膚子を炒つて八分、麝香少量を末にし、酒で二錢を服す。（同上）【頭風疼痛】蚱蟬二箇を生で研り、乳香、硃砂各半分を入れて小豆大の丸

にし、一丸づつを痛の左右に隨つて鼻中に納れる。黄水が出て奏效する。(聖濟總錄)

(五)**蟬蛻**　**釋名**　**蟬殼**　**枯蟬**　**腹蜟**(いづれも別錄)　**金牛兒**

修治　時珍曰く、凡そ蛻殼を用ゐるには、沸湯で洗つて泥土、翅、足を去り、漿水で煮てから晒し乾して用ゐる。

氣味　【鹹く甘し、寒にして毒なし】

主治　【小兒の驚癇、產婦の子の下らぬもの。燒灰を水で服すれば久痢を治す】(別錄)　【小兒の壯熱驚癇。渴を止める】(藥性)　【研末一錢を井華水で服すれば啞病を治す】(藏器)　【目昏障翳を除く。水で煎じた汁を服すれば、小兒の瘡疹が出て不快なるを治するに甚だ良し】(宗奭)　【頭風眩運、皮膚の風熱、痘疹の癢きもの、破傷風、及び丁腫毒瘡、大人の失音、小兒の噤風、天弔驚哭、夜啼、陰腫を治す】(時珍)

發明　好古曰く、蟬蛻の翳膜を去るは、その物の蛻する意味を取つたものだ。蟬は性が蛻するもので翳を退け、蛇は性が竄するもので風を袪る。その性に因つて功用を現はすのだ。

時珍曰く、蟬は土、木の餘氣の化したもので、風を飲み、露を吸ひ、その氣が淸

(五) 矢野曰ク、蟬蛻、和名せみから一名せみのぬけがら、英名 The cast skin of the cicada.

虛なものだから、主たる治療上の功效は皆一切の風熱の證である。古代には身を用ゐ、後世では蛻を用ゐるが、概して、臟腑、經路を治するには蟬身を用うべく、皮膚、瘡瘍、風熱を治するには蟬蛻を用うべきものである。それぞれその類に從ふのだ。又、啞病、夜啼に主效のあるは、その晝鳴いて夜息む意味を取つたものだ。

【附方】 舊二、新十四。【小兒の夜啼】心鑑では、一百二十日以內の小兒の夜啼を治するには、蟬蛻四十九箇を前截を去つて後截を用ゐ、末にして四服に分け、釣藤湯で調へて灌ぐ。○普濟では、蟬花散——小兒が夜啼して止まず。鬼祟のやうな狀態なるを治す。蟬蛻の下半截を末にし、一字を薄荷湯に酒少量を入れて調へて服ます。その效を信ぜぬときは、上半截を末にし前記の湯で調へて服ます。直ちにまた啼き出すものだ。古人が制定した方は不可思議な妙處がある。【小兒の驚啼】啼いて哭せぬは煩するものだ。哭して啼かぬは躁するものだ。蟬蛻十四箇を翅、足を去つて末にし、硃砂末一字を入れ、蜜で調へて吮はす。(活幼口議)【小兒の天弔】目を釣り上げて反り張るは、痰塞內熱である。金牛兒、卽ち蟬蛻を漿水で一日煮て晒し乾し、末にして一字づつを冷水で調へて服す。(衞生易簡方)【小兒の噤風】初生兒が口噤

して乳を飮まぬには、蟬蛻十四箇、全蠍を毒を去つて十四箇を末にし、輕粉末少量を入れて乳汁で調へて灌ぐ。（全幼心鑑）【破傷風病】發熱するには、醫學正傳では、蟬蛻を炒つて研り、酒で一錢を服す。神效がある。普濟方では、蟬蛻を末にし、葱涎で調へて破處に塗る。卽時に惡水を取り去つて立ろに效がある。これを追風散と名ける。【頭風旋運】蟬殼一兩を微し炒つて末にし、時に拘らず酒で一錢を服す。白湯で服するもよし。（聖惠）【皮膚の風癢】蟬蛻、薄荷葉等分を末にし、一日三回、酒で一錢を服す。（集驗）【痘瘡の癢きもの】蟬蛻二十一箇、甘草を炙つて各一錢を水で煎じて服す。（心鑑）【痘後の目翳】蟬蛻を末にし、一日一回、一錢づつを羊肝の煎湯で服す。（錢氏）【膿の出る聤耳】蟬蛻半兩を燒いて性を存し、麝香半錢を炒り、右を末にして綿で裹んで塞ぐ。惡物を追出して效がある。（海上）【小兒の陰腫】多くは地に坐して風に襲はれ、または蟲蟻に吹かれたために起るものだ。蟬蛻半兩を煎じた水で洗つてから、五苓散を服す。直ちに腫が消いて痛が止む。（危氏）【胃熱の吐食】淸膈散――蟬蛻五十箇を泥を去り、滑石一兩と末にし、二錢づつを水一盞に蜜を入れて調へて服す。（衛生家寶方）【丁瘡毒腫】破れねば毒が腹に入るものだ。靑囊雜纂で

は、蟬蛻を炒つて末にし、一錢を蜜水で調へて服し、外部に唾液で和して塗る。醫方大成では、蟬蛻、殭蠶等分を末にし、醋で調へて瘡の四圍に塗り、根の出るを俟つて拔き出して再び塗る。

蟬花（證類）

和名　せみたけ
學名　Cordyceps sobolifera, Hill.

［釋名］冠蟬（禮註）胡蟬（毛詩）螗蜩（同上）蝘　時珍曰く、花冠を形容した名であつて、胡とはその狀態が胡のやうだといふこと、唐とは黑い色をいふ。古は俗に胡蟬といひ、江南では螗といひ、蜀地方では蟬花といふ。

［集解］愼微曰く、蟬花は所在にある。苦竹林に生ずるものが良し。花は頭上に出るものだ。七月に採る。

頌曰く、蜀中に出る。その蟬は頭上に花冠のやうな形狀の一角があるので蟬花といふ。彼の地からその蛻を都下へ賣りに出してゐる。醫師のいふところでは、藥に入れて最も奇效があるさうだ。

宗奭曰く、これは蟬が殼中に在り、又は殼を出てから花と化して頂中から出たも

（一）矢野曰ク、こがねむしノ類ニシテ、獸糞ヲ食トスル類ノ總稱ニシテ、其内特ニ成蟲ガ仔蟲ノ爲メニ獸糞ヲ球狀ニナスモノヲ云フガ如シ、

のだ。

時珍曰く、蟬花、卽ち冠蟬のことで、禮記に所謂『蕡は則ち冠す。而して蟬は緌あり』とあるそのものだ。緌は蕤（スヰ）と發音し、冠纓のことである。陸雲の寒蟬賦に『蟬に五德あり、頭上に幘あるは文なり。氣を含み露を吸ふは淸なり。黍稷を享けざるは廉なり。處るに巢居せざるは儉なり。候に應じて常あるは信なり』とあり、陸佃の埤雅に『螗は、首は方廣にして冠あり。蟬に似て小さく、鳴聲淸亮なり』とあり、宋祁の方物贊に『蟬の蛻せぬものにして、秋に至ればその頭に花あり、長さ一二寸にして黃碧色なり』とあるは、いづれもこれを指したものだ。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【小兒の天弔、驚癇、瘈瘲、夜啼、心悸】（愼微）【功は蟬蛻に同じ。又、瘧を止める】（時珍）

蜣蜋（一）（本經下品）

和名　まろむし、一名くそむし
學名　Species of Coproplnginae

【釋名】　**蛣蜣**　音は詰羌（キツキヤウ）である。**推丸**（弘景）　**推車客**（綱目）　**黑牛兒**（同上）　**鐵甲將軍**（同上）　**夜遊將軍**　弘景曰く、莊子に『蛣蜣の智は轉丸に在り』

とある。喜(この)んで糞土中に入つて屎を取り、丸にして推却するところから俗に推丸と名ける。時珍曰く、崔豹の古今注にこれを轉丸、弄丸(ろうぐわん)といひ、俗に推車客と呼ぶは、いづれもこの意味を取つたのだ。その蟲の目深く鼻高い狀態が、羌胡が背に黑甲を負ふたやうでもあり、武士のやうでもあるところから、蜣蜋(きやうらう)、將軍などの稱がある。

【集解】　別錄に曰く、蜣蜋は(二)長沙(ちやうさ)の池澤に生ずる。弘景曰く、その種類に三四種あるが、大きくして鼻頭の扁なるものを眞物とする。

韓保昇曰く、これは種類の多いもので、所在にある。鼻高く目深きものを藥に入れ、胡蜣蜋(こきやうらう)と名ける。


〔蜣蜋〕

宗奭曰く、蜣蜋には大、小の二種あつて、大なるものをば胡蜣蜋と名け、身は黑くして光り、腹の翼下に小さい黃子があつて母に附いて飛ぶ。晝は伏して夜出で、燈火を見ると來るものだ。これが藥用に適する。小なるものは、身は暗黑色で、晝飛んで夜伏す。狐はみな喜(この)んでこれを食ふ。小なるものは藥用には堪へないが、た

卽チ歐洲ニ於テ「スカラブ」(Scarab)ト稱スルモノニシテ、今ふんころがしト通稱スルモノナリ。コノ類朝鮮臺灣ヨリ支那ニ產シ地中海沿岸ニ及ブ、Scarabaeus, Gymnopleurus 等是ナリ、本邦ニ產スルモノハ此奇習ナシ。

(二)長沙、漢ノ長沙國。今ノ湖南省衡州以北、湖南省東北半チ統ブ。

だ牛、馬の脹結に、三十箇を水に研つて灌ぐが甚だ佳し。

時珍曰く、蜣蜋は、土で糞を包んで轉して丸にし、雄が曳いて雌が推し、それを坎の中に入れて隱して行くものだが、數日經つとその中から小さい蜣蜋が出る。つまりその中で卵が孵化するのだ。

附錄 (注)**蜉蝣** 時珍曰く、蜉蝣は一名渠略といふ。蛣蜣に似て小さく、大いさ指頭ほどのもので、身は狹くして長く、角があり、黃黑色だ。甲下に翅があつて能く飛ぶ。夏季の雨後に糞土中に叢生し、朝生れて暮に死ぬ。猪が好んでこれを啖ふが、人が取つて炙つて食つても、蟬より美味だといふことだ。蓋し蜣蜋、蜉蝣、腹蜻、天牛は、いづれも蠐螬、蠹、蝎から變化するものだ。この物はやはり蜣蜋の一種なることを忘れてはならぬ。或は、蜉蝣は水蟲であつて、形狀は蠶蛾に似て、朝生れて暮に死ぬものだといふ説もある。

蜣頭 **修治** 別錄に曰く、五月五日に採收して蒸して貯ひ、使用に際して足を去つて火で炙る。水中に置いてはならぬ。人を吐かせるものだ。

氣味 【鹹し、寒にして毒あり】好古曰く、酸し。之才曰く、羊角、羊肉、石

(注)矢野曰ク、蜉蝣、和名まろむし類、學名 species of Coprophagirae

矢野曰ク、蜉蝣ハくそむしノ類ニシテ、糞ヲ球トナスノ奇習ナキモノヲ云フガ如シ、故ニ邦俗ノまろむし、くそむし又ハせんちこがね等ハ此名ノモノニ相當ス。而シテ或ハ糞中ニ棲息スルはねかくしノ類ヲモ混用スルモノ歟。啓蒙ニハくろあぶらむし、一名ごもくあぶらむしヲ充ツ。是ハおさむしノ類ナルが如シ。

膂を畏る。

主治　【小兒の驚癇、瘈瘲、腹脹寒熱、大人の癲疾、(四)狂陽】(本經)【手足の端の寒するもの、肢滿、(五)賁豚。搗いて丸にして下部を塞げば、痔蟲を引き出し盡して永く痊える】(別錄)【小兒の疳蝕】(藥性)【能く胎を墮し、疰忤を治す。乾薑と和して惡瘡に傅ける。箭頭を出す】(日華)【燒いて末にし、醋で和して蜂瘻に傅ける】(藏器)【大腸の風熱を去る】(權度)【大小便不通、下痢赤白、脫肛、一切の痔瘻、丁腫、附骨疽瘡、癧瘍風、灸瘡出血の止まぬもの、鼻中の息肉、小兒の重舌を治す】(時珍)

發明　時珍曰く、蜣蜋は、手、足の陽明、足の厥陰の藥である。故に主とするところは皆三經の病だ。總微論に『古方では、小兒の驚癇を治するに蜣蜋を第一とする』とあるが、後世の醫界では用ゐられてない。蓋し右の藥理を知らないのだ。

○頌曰く、箭鏃が骨に入つたために動けぬには、楊氏家藏方に、巴豆を微し炒つて蜣蜋と共に搗いて塗る。少時すると痛が鎭まつて必ず微し痒くなるが、それを忍んでやがて耐へ切れぬ程痒くなつたとき、撼り動かして拔けば立ろに出る。この方は夏侯鄆から傳へたもので、鄆が曾て(六)閩州に(七)奉職した當時、ある人の額に箭痕のあ

蜉蝣ヲ水蟲ナリト云フニ對シテ、ひをむし(和名鈔)かげらふヲ充ツルコト現時ノ通説ナリ、かげらふハかげらふ目(Ephemerida)ナル昆蟲類中ノ一目ヲナシ、種類多シ。

(四)本經ニ狂易ニ作ル、房事過度ヨリ起ル病氣ヲ易病ト云フ。

(五)賁豚ハ腹部ノ痙攣スル病。

(六)閩州ハ唐ニ置ク。

今ノ四川省閬中縣ソノ舊治ナリ。
(七)大觀ニハ閬州ノ下ニ錄軍參事ノ四字アリ。
(八)洪州ハ隋ニ置ク今ノ江西省南昌縣ソノ舊治ナリ。

るを見て訊ねたところ、『馬侍中の部下として田悅と戰爭をしたとき敵箭に中つたのだ。侍中にこの藥を貰つて用ゐると立ろに鏃が出て、その後生肌膏を傅けてこの通り癒えたのだ』といひ、『凡そ諸瘡いづれも治療し得るものだ』といつて、その方を耶に授けたのであつた。耶が(八)洪州へ往つて旅館に宿泊してゐたとき、主人の妻が瘡を患つて呻吟してゐたが、この方を用ゐると立ろに癒えたとある。

○翰院叢記に『李定の話に、石藏用は近世の良醫であつた。ある人が簷下の溜水を承けて手を浣つたとき、何物か爪甲の內へ入つたやうに覺えたが、初は細い絲か毛髮ほどであつたが、數日後には縫絲ほどになり、伸縮が不能になつた。その時始めて龍が爪甲に伏藏したものかも知れぬと氣が付いて藏用に治療を請ふたところ、藏用は「方書にはこの病の記錄がないから、專ら想定で治療するの外はないが、蜣螂を末にして指に塗るがよい。それで龍の活動に因る震厄をば免れ得るだらう」といつた。そこで指圖の通りを實行してゐたが、その後その身邊を雷火に取圍まれたことがあつて、その時急に針で刺し破つて取り出すと、果してある物が躍り出たといふ』とある。醫說にもこの記事が載つてゐる。

附方　舊七、新十六。【小兒の驚風】急性、慢性に拘らず、蜣蜋一箇を杵き爛らして水一小盞に入れ、百沸湯に入れて湯煎し、滓を去つて飮む。【小兒の疳疾】土で蜣蜋を裹んで煨熟し、それを食はせる。（韓氏醫通）【小兒の重舌】蜣蜋を燒いて末にし、唾で和して舌上に傅ける。（子母秘錄）【膈氣吐食】地牛兒二箇を推屎蟲の雄一箇、雌一箇と共に罐に入れ、蟲が牛兒を食盡すを待ち、泥で裹んで煨いて性を存し、白を去つた陳皮二錢と巴豆とを共に炒つて豆を去り、その陳皮とその蟲を末にし、一二分づつを咽中に吹入れて痰を吐く。三四回で癒える。（孫氏集效方）【赤白下痢】黑牛散——赤白痢、噤口痢、及び泄瀉を治す。黑牛兒、卽ち蜣蜋、一名鐵甲將軍を燒いて研り、半錢、或は一錢づつを燒酒で調へて服す。小兒は黃酒で服す。立ろに效がある。（李延壽方）【大腸脫肛】蜣蜋を燒いて性を存して末にし、氷片を入れて研勻し、肛上に摻つて托入すれば直ちに收まる。（醫學集成）【大小便閉】一个月以上に亙つて死せんとするには、本事の推車散——推車客七個を、男は頭を用ゐ、女は身を用ゐ、土狗七箇を、男は身を用ゐ、女は頭を用ゐ、新瓦で焙じて研末し、虎目樹の南向の皮の煎汁で調へて服す。ただ一服で直ちに通ずる。○楊氏經驗方では、大小便不通

(九)沙風ハ沙蝨ノ誤
沙蝨、水弩ハ溪毒ノ
一種、我邦越後ノ恙
蟲病ノ類。

を治す。六七月に牛糞中の大蜣蜋十餘箇を捜し取り、線で穿つて陰乾して取收め、使用の際、形の完全なもの一箇を清淨な磚の上に置いて四面から灰火で烘り乾し、腰の部分から切斷して、大便不通には上截を用ゐ、小便不通には下截を用ゐ、それぞれ細末にして井華水で服す。二便不通には全體を用ゐれば直ちに解す。【大腸秘塞】蜣蜋を炒つて翅、足を去つて末にし、熱酒で一錢を服す。(聖惠)【小便轉胞】通ぜぬには、死せる蜣蜋二箇を燒いて末にし、井華水一盞で調へて服す。(千金)【小便血淋】蜣蜋を水に研つて服す。(鮑氏)【水の出る痔漏】唐氏方では、蜣蜋一箇を陰乾し、氷片少量を入れて細末にし、その末を紙撚に蘸けて孔内に入れる。漸次に肉が生じ、藥が自ら退出して癒える。○袖珍方では、蜣蜋を焙じ乾して研末し、先づ礬湯で洗つてから貼る。【一切の漏瘡】蜂瘻、鼠瘻に拘らず、蜣蜋を燒いて末にし、醋で和して傅ける。(千金)【附骨疽漏】蜣蜋七箇を大麥と共に搗いて傅ける。(劉涓子方)【一切の惡瘡】及び(九)沙風、水弩、惡疽には、五月五日に蜣蜋を取つて蒸して陰乾し、末にして油で和して傅ける。(聖惠)【丁腫惡瘡】楊柳上の大烏殼硬蟲、或は地上新糞内、及び泥堆中のものを取つて蜜湯に浸して殺し、新瓦で焙じ焦して末にし、先づ燒いた

（一〇）大赫瘡ハ火赫瘡ノ誤、丹毒ヲ云フ。
（一一）癧瘍ハ汗斑、アセナマズ。

針で瘡を撥開してから、好き醋で調へて傅ける。（普濟方）【無名惡瘡】突然生じて性質の判らぬものには、死蜣蜋の杵汁を塗る。（廣利）【灸瘡の出血】止まぬには、死蜣蜋を燒いて研り、猪脂で和して塗る。（千金方）【（一〇）大赫瘡疾】急に毒氣の心に入るを防ぐ。先づ灸して後、乾蜣蜋を末にして鹽水で和し、一日一回、瘡の四圍に韮菜ほどの濶さに傅け繞らす。（肘後）【（一一）癧瘍風病】汚泥中の死蜣蜋を取つて杵き爛らし、瘡に揩り熱して封ずる。一夜で癒える。（外臺祕要）【鼻中の息肉】蜣蜋十箇を青竹筒中に納れて油紙で密封し、四十九日間厠坑中に置いて取出し、晒し乾して麝香少量を入れ、末にして塗る。化して水になるものだ。（聖惠）【沙塵が目に入つたとき】生蜣蜋一箇を取り、その背で眼の上に影せば自ら出る。（肘後）【下部の䘌蟲】痛痒し、膿血を出し、旁に孔竅を生ずるには、蜣蜋七箇を五月五日に採り、新牛糞半兩、肥羊肉一兩を黃に炒つて共に搗いて膏にし、蓮子大の丸にして炙き熱し、綿に裹んで肚中に納れる。半日にして大便中に蟲を出し、四回試みれば永く瘥える。（董炳集驗方）

心　［主治］【丁瘡】頌曰く、按ずるに、劉禹錫が編纂した柳州救三死方に『元和十一年に丁瘡を患ひ、凡そ十四日にしてますます重くなり、效果ありといふ藥を

傳けて見ても效がなかつたが、長(一二)慶の賈方伯の敎に因つて蜣蜋心を用ゐたところ、一夕にしてあらゆる苦痛が悉く已んだ。明年正月、羊肉を食つてまた大いに起つたが、再びそれを用ゐて神の如き效驗を得た。その法は、蜣蜋心を用ゐるのであつて、腹下の心のありと思ふ部分を見定めて取ると、肉の稍白いものがある。それが心だ。それを瘡に貼り、半日ばかりで再び易へれば、血が盡き根が出て直に癒える。蜣蜋は羊肉を畏るものだから、食へば直に再發する』とある。蓋しこの法は葛洪の肘後方から出たものだ。

轉丸 土部に記載してある。

「附錄」 (一三)**天社蟲** 別錄) 有名未用に曰く、味甘し、毒なし、不姙症に主效があり、氣を益す。その蟲の形狀は(一四)犬のやうで腰が太く、草木の葉を食物とする。三月採收する。

時珍曰く、按ずるに、張揖の廣雅に『天社は蜣蜋なり』とある。この蟲と元來同一類のものなりや否や判然せぬ。

(一二)慶、大觀ニ樂ニ作ル。長樂縣ハ唐ニ置ク。今ハ福建省閩海道ニ屬ス。

(一三)矢野曰ク、天社蟲、未詳。亦せんちこがねノ類ナルガ如シ、現時之チ蛾ノ類ナルしやちほこむし類ニ誤用ス。

(一四)犬、大觀ニ蜂ニ作ル。

天牛（綱目）(一)

和名　かみきりむし
學名　Spp. of Cerambycidae

【釋名】**天水牛**（綱目）**八角兒**（同上）一角のものを**獨角仙**と名ける。時珍曰く、この蟲は水牛角に似た八の字の黒角があるところからかく名けたものだ。一角のものもある。

【集解】藏器の蠐螬の註に云ふ。蝎、蠹は朽木中に發生して木の心を食ひ、錐でもんだやうに木に穴を穿ち、口は黒く、身は長く、足は短く、節が間伸びてゐて毛がない。春雨の後になると化して天牛となる。水牛のやうな形狀の兩角があり、また一角のものもあり、色は黒く、背に白點があり、木に緣つて上下し、飛び騰つても遙に遠くは飛べないものだ。

時珍曰く、天牛は處處にある。大いさ蟬ほどのもので、甲は黒くして漆のやうに光り、甲上に黄白點があり、甲下に翅があつてよく飛ぶ。目の前に二箇の黒角があつて甚だ長く、水牛の角のやうに前方に向ひ、能く動く。その喙は黒色で扁く、鉗のやうで甚だ鋭利だ。また蜈蚣の喙にも似てゐる。腹に六本の足がある。これは諸

(一) 矢野曰ク、天牛ハ一般ニかみきりむしノ總稱トス。但シ黒甲光リ漆ノ如ク甲上黄白點アリト云フ點ニテハほしかみきり。(Melanauster chinensis, Förster. 又ハしろすぢかみきり(Batocera) 等普通ナル大形種ヲ指スモノノ如シ。玆ニハ廣義ニ解シ置ク。

(二)嚙桑ニほしかみきりヲ充ツルコト普通ナリ、但シ桑ヲ害スル點ヨリ見ルニ、或ハきぼしかみきり歟。

樹木の蠹蟲の變化したもので、夏期に生存し、雨の時に主として出る。按ずるに、爾雅に『蠰は嚙桑なり』とあり、郭璞の註に『形狀は天牛に似て角長く、體に白點があり、善く桑樹を嚙ひ、孔を作つて藏れる。江東では嚙髮と呼ぶ』とある。これは天牛と(二)嚙桑とを二物と見た解釋だが、蘇東坡の天水牛の詩には『兩角徒に自ら長く、空に飛んで箱に服せず。牛となつて竟に何の益ぞ、利吻枯桑に穴す』とあつて、これは天牛、即ち嚙桑と考へたものだ。しかし概して桑樹にゐるものを嚙桑と見ればよし。一角のものをば獨角仙と名ける。藥に入れるには、いづれも甲、翅、角、足を去つて用ゐる。



〔天牛〕

〔氣味〕【毒あり】〔主治〕【瘧疾寒熱、小兒の急驚風、及び疔腫、箭鏃の肉に入つたもの、痣靨を去る】(時珍)

【發明】時珍曰く、天牛、獨角仙は本草には記載がないが、宋、金以來の方家は時に用ゐたもので、聖惠の、小兒の急驚風を治するに鼻に吹く定命丹、宣明方の、身體、面部の疣贅に點ける芙蓉膏の中に、いづれも獨角仙を用ゐてある。これはやはり毒物なので、藥としては多く記錄されてない。蝎の變化した天牛には毒があり、蠐螬が變化した蟬には毒がないところを見ても、蠐螬と蝎との性味に良、毒の別あることが肯かれる。

【附方】新三。【疔腫惡毒】透骨膏――八角兒、楊柳上のものを陰乾し、殼を去つて四箇――冬季でこの物がないときはその窠をこれが代用とする――蟾酥半錢、巴豆仁一箇、粉霜、雄黃、麝香少量を用ゐ、先づ八角兒を泥のやうに研つて溶化した黃蠟少量を入れ、右の諸藥末と共に和して膏子に作り、密封して貯へ、使用の際、針で瘡頭を刺し破つて血を出し、楡條を用ゐて膏子を麥粒ほど瘡中に送入し、雀糞二箇をその瘡口に置き、瘡が回復すれば止める。再用の必要がない。冷水を忌む。針で破つたとき血縈がないものは著骨疔である。その場合は男は左、女は右の中指の甲の末端を刺して血を出し、その血で藥を糊する。又、血が中指甲から出な

いときは足の大拇指を刺して出した血で薬を糊する。もし全然血がないものならば最早醫し難い。【箭鏃の肉に入つたとき】天水牛の一角のものを取つて小瓶に盛り、硇砂一錢と水數滴とを入れて自然に溶化して水になるを待ち、その水を取つて傷處に滴せば出る。【寒熱瘧疾】猪膏丸——瘧疾で發渇し、往來して一定せぬを治す。臘猪膏二兩、獨角仙一箇、獨頭蒜一箇、樓葱一握、五月五日の三戸の家の粽尖を用ゐ、五月五日の夜五更時刻に清淨の場所で、頭に何物をも被らず足は洗足になり、舌は上の齶に拄け、顔を北に振り向けて一千杵搗いて皂子大の丸にし、一丸づつを男は左、女は右の臂上に繋ける（聖惠）

附錄 (三)**飛生蟲**（拾遺）藏器曰く、形狀は嚙髮のやうで頭上に角がある。その角は毒がない。難産に主效がある。燒いて末にして水で少量を服す。またそれを産婦に握らせてもよし。時珍曰く、この蟲もやはり天牛の內の別類のもので、鼺鼠と同功だ、故にこれを飛生と呼ぶ。

螻蛄（本經下品）

和名　けら
學名　Gryllotalpa africana, Pal.

(三) 矢野曰ク、飛生蟲未詳、普通かぶとむし(Xylotrupes dichotomus, L.)ニ充ツ。

【釋名】螻蛄（本經）天螻（本經）螜　斛（コク）である。（本經）螻蟈（月令）仙姑（古今注）石鼠（古今注）梧鼠（荀子）土狗（俗名）時珍曰く、周禮の註に『螻は臭なり』とあつて、この蟲は臭氣があるから螻なる名を呼ばれたのだ。姑とか婆とか、娘子とかいふは蟲を稱する呼び方だ。螻蛄と呼ぶは蟬の名と同じく、螻蟈といふは蛙の名と同じく、石鼠といふは碩鼠の名と同じく、梧鼠といふは飛生の名と同じだが、いづれも同名異物だ。

【集解】別錄に曰く、螻蛄は（一）東城の平澤に生ずる。夜出るものが良し。夏至に取つて暴乾する。弘景曰く、この物は頗る鬼神と通ずるところのあるもので、昔は獄中に入つたものがこの物の力に賴つたといふ。今は一般に、夜これ（二）が來ると、鬼の手先が來たといつて多くは打ち殺す。

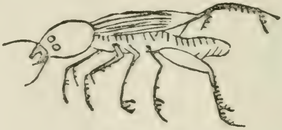
頌曰く、今は處處にゐる。地中や糞壤中に穴を作つて生じ、夜になると外に出て餌を漁る。荀子に所謂『梧鼠は五技にして窮す』といひ、蔡邕の所謂『鼠は五能にして一技を成さず』といふはいづれもこの蟲を指す。魏詩に碩鼠とあるは大鼠のことで、この蟲と同名だが技に窮りないものだから、固より同物ではない。五技と

（一）東城ハ秦ノ縣名故城ハ今ノ安徽省定遠縣ノ東南ニ在リ。

（二）大觀ニ入夜忽見出多ニ作ル。

は、能く飛ぶが屋根をば超せず、能く木を攀ぢるがその頂までは登れず、能く游ぐが谷をば渡れず、能く穴を掘るが全身を隠すまでには掘れず、能く走るが人の捕獲をば免れ得ないといふことだ。

宗奭曰く、この蟲は、立夏の後に夜になると蚯蚓のやうな聲で鳴く。月令に『螻蟈鳴く』とあるはこのことだ。



〔螻蛄　一 土狗〕

時珍曰く、螻蛄は土に穴を掘つて棲息し、短い翅と四本の足がある。雄は善く鳴いて飛ぶが、雌は腹が大く羽が小さく、善く飛べない。風を吸ひ、土を食ひ、喜んで燈光に寄つて來るものだ。藥用には雄を用ゐる。或は、地を火で赤く焼いた上へ螻を置き、跳ね悶えて死んだとき下向になるものが雄、仰ぐものが雌だといふ。類從には『磨鐵は蛄を致し、汗韉は死を引く』とある。物の性の相感ずる結果だ。

【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】日華曰く、涼にして毒あり。翅、足を去つて炒つて用ゐる。【主治】【産難。肉中の刺を出し、癰疽を潰し、哽噎を下し、毒を

解し、惡瘡を除く】(本經)【水腫、頭面腫】(日華)【大小便を利し、石淋を通じ、瘰癧骨哽を治す】(時珍)【口瘡を治するに甚だ效がある】(震亨)

【發明】弘景曰く、腰から前の部分は甚だ澀くして能く大小便を止め、腰から後の部分は甚だ利して能く大小便を下す。

朱震亨曰く、螻蛄は水を治するに甚だ有效だが、ただその性が急なものだから、虛せる者には警戒を要する。

頌曰く、今の方家では、石淋を治し、水を導くに、螻蛄七箇、鹽二兩を用ゐる。新瓦の上に鋪いて蓋ふて焙じ乾し、研末して一錢匕づつを溫酒で服するので、直ちに癒える。

【附方】舊一、新二十。【十種の水病】腹滿、喘促して臥し得ぬには、聖惠方では、螻蛄五箇を焙じ乾して末にし、食前に白湯で一錢を服す。小便が利して奏效する。楊氏は、甘遂末一錢、商陸汁一匙を加へる。水を取下して奏效する。一百日間鹽を忌む。○小便の祕するには、聖惠では、螻蛄の下截を焙じて研り、水で半錢を服す。立ろに通ずる。○保命集では、螻蛄一箇、葡萄心七箇を共に研り、一夜露して日光

で乾し、研末して酒で服す。○乾坤祕韞では、端午の日に螻蛄を取つて陰乾し、頭と尾とを分けて焙じて取收め、身體上部の病を治するには頭末七箇を用ゐ、中部を治するには腹末七箇を用ゐ、下部を治するには尾末七箇を用ゐ、食前に酒で服す。

【大腹水病】肘後では、螻蛄を炙り熱して日に十箇づつ食ふ。○普濟では、半邊散——水病を治す。大戟、芫花、甘遂、大黃各三錢を末にし、土狗の五月に能く飛ぶものの七箇を取り、葱を搗いて新瓦に鋪いたその上でその土狗を焙じ、乾くを待つて翅、足を去り、各箇に剪つて兩半邊にし、左、右を標記して貯へ。病の左方に在るものから退けんとするときは、その左邊の七片を焙じ研つて前記の末二錢を入れ、淡竹葉、天門冬の煎湯で調へて五更に服し、左の病が退くを俟つて、三日後に前記の方の如くして右邊を服す。【鼻に嗜いで水を消す】顏面の浮腫甚しきには、土狗一箇、輕粉二分半を末にし、少量づつを鼻中に嗜ぎ込む。黃水を出し盡して妙である。（楊子家藏方）【石淋の痛むもの】方は發明の項にある。【小便不通】葛洪の方では、大螻蛄二箇の下體を取り、水一升に漬けて飲む。須臾にして通じる。○壽域方では、土狗の下截を焙じて研り、半錢を調へて服す。生で研るもよし。○談埜翁方では、車前草

を加へ、共に搗いて汁を服す。○唐氏經驗方では、土狗の後截を麝を和して搗き、臍中に納れて縛つて置く。直ちに通じる。○醫方摘要では、土狗一箇を炙つて研り、氷片、麝香少量を入れ、翎管で陰莖中に吹き入る。【大小便閉】一月を經過して死せんとするには、普濟方では、土狗、(三)推車客各七箇を、いづれも男子には頭を、婦人には身を用ゐ、瓦で焙じ焦して末にし、南に向いて生えた樗の皮を煎じた汁で飲む。一服で神效がある。【胞衣不下】極端に苦み弱つて腹が脹れば死亡する。螻蛄を水で煮て二十沸して灌ぎ入る。喉を下れば直ちに出る。(延年方)【臍風で汗の出るもの】螻蛄、甘草等分を、いづれも炙いて末にして傅ける。(總錄)【牙歯の疼痛】土狗一箇を舊糟で裹み、濕紙で包んで煨き焦し、糟を去つて研末して傅ける。立ろに止む。(本事)【緊唇裂痛】螻蛄を灰に燒いて傅ける。(千金方)【耳を塞いで聾を治す】螻蛄五錢、穿山甲を炮いて五錢、麝香少量を末にし、葱汁で和して丸にして塞ぎ、外には嗃鼻藥を用ゐる。直ちに通じる。(普濟)【頸項の瘰癧】殻を帶びた螻蛄七箇から生で肉を取り、丁香七粒をその殻内に入れて燒き、肉と共に研つて花型に剪つた紙にのして貼る。(救急方)【(四)箭鏃の肉に入つたもの】螻蛄の杵汁をその上に滴す。三五回で

(三)推車客ハ羌蜋ナリ。

(四)箭鏃入肉ハ箭鏃

自ら出る。（千金方）【鍼、刺の咽に在るもの】（同上）【誤つて鈎線を呑んだもの】螻蛄を身を去り、その頭數箇を呑ます。本人に知らしめてはならぬ。（聖惠方）

螢火（本經下品）

和名 ほたる
學名 Spp. of Lampyrinae.

［釋名］ 夜光（本經） 熠燿 音は熠躍（イクヤク）である。卽炤 炤の音は照（セウ）である。夜炤 景天 救火 據火 挾火（いづれも吳普） 宵燭（古今注） 丹鳥 宗奭曰く、螢は通常（一）大暑の前後に飛んで出る。これは（二）大火の氣を稟受して化生したものだからかやうに光を放つのだ。



［螢 火］

時珍曰く、螢の文字は熒に從ふ省文である。熒とは小火のことでその會意の文字だ。詩の豳風に『熠燿たる宵行』とあつて、宵行が蟲の名稱、熠燿はその光の形容なのだが、詩の注、及び本草に、みな誤つて熠燿を螢の名稱として了つた。

［集解］ 別錄に曰く、螢火は（三）階地の池澤に生ずる。七月七日に取つて陰乾す

在咽ノ誤。鍼刺在咽ハ鍼刺入肉ノ誤。

（一）大觀ニ大ノ下ニ中字アリ。
（二）大火ハ二十八宿中心宿ノ別名。
（三）階地ハ後唐ニ階州チ置キタル地方、

る。

弘景曰く、この蟲は腐草、及び爛竹根から化生するもので、初めは蛹のやうなものだが、その時から已に腹の下に光がある。それが數日にして變じて飛ぶやうになるのだ。方術家では、これを捕つて酒に入れて殺して乾す。一般醫方で用ゐることは一向に稀だ。

時珍曰く、螢に三種ある、一種は小さくして宵に飛び、腹の下に光がある。これは茅根から化生したもので、呂氏月令に所謂『腐草化して螢となる』とあるそのものだ。一種は、蛆、蠋のやうに長いもので、尾後に光があり、翼がなく、飛ばない。これは竹根から化生したもので、一名蠲といひ、俗に(四)螢蛆と呼ぶ。明堂月令に所謂『腐草化して蠲となる』とあるそのもので、それ等を宵行と名けたのは、茅や竹の根に夜視で光があるからだ。また茅なり竹なりの物質に感ずる濕熱の氣が、遂に有形の物に變化したものである。一種は(五)水螢で、水中にゐる。唐の李子卿の水螢賦に所謂『彼れ何爲而ぞ草より化し、此れ何爲而ぞ泉に居る』とあるそのものだ。藥には飛ぶ螢を用ゐる。

漢ノ武都郡、廣漢郡ノ界、桓水沿流ノ一地方ヲ指スナルベシ。魏ノ武階郡、唐ノ階州ハ清朝ノ甘肅省階州ノ地ニ治ス。卽チ民國ニ改メテ武都縣ト稱スル地ナリ。

(四)矢野曰ク、螢蛆、和名みちほたる、又みづぼたる、螢ノ幼蟲ナリ、或ハ螢ノ類ニシテ、雄ハ翅ヲ以テ飛翔スレドモ、雌ハ翅退化シテ飛ブ能ハズ、蛆狀ヲ呈スルモノアリ、之ヲ指スカ。

(五)水螢、螢ノ幼蟲ニシテ水邊ニ棲息スルモノアリ、之ヲ指スカ、和名みづぼたる。

【氣味】【辛し、微温にして毒なし】【主治】【日を明にする】(本經)【青盲を療ず】(甄權)【小兒の火瘡傷、熱氣、蠱毒、鬼疰。神精に通ずる】(別錄)

【發明】時珍曰く、螢火が能く邪を辟け、目を明にするといふは、蓋しそのものが幽暗を炤し、夜間明に光る點を取つたものだ。神仙感應篇に、務成の螢火丸の事蹟を甚だ詳細に記載してあるが、龐安常の總病論に、やはりその效驗を極言して『曾て實驗したところに據れば、一家五十餘人悉く疫病に感染した中で、ただ四人だけこれを帶びてゐたものが病に罹らなかつた』といつてある。許叔微の傷寒歌にもこれを稱揚してある。予もこれを實驗して見たいと心掛けてゐるが、因循としてまだその機會を得ないわけだ。龐翁は蘇東坡や黄山谷から友人として敬意を拂はれた人だから、事實無根の話ではあるまいと想ふが。

○神仙感應篇に云く、務成子の螢火丸は、疾病、惡氣、百鬼、虎狼、蛇虺、蜂蠆の諸毒、五兵、白刃、盜賊の兇害を辟けるに主たるものだ。昔、漢の冠軍將軍、武威の太守劉子南が道士尹公からこの方を傳受してゐて、(六)永平十二年、北方の邊疆で匈奴と戰爭のあつたとき、大敗して士卒殆んど全滅に近く、子南

(六) 永平十二年、西暦七一年。

その身も重圍を受け、雨の如くに矢を被つたが、その矢は子南の馬から數尺のところで悉く地に落ちた。さしもの兇虜もこれを見て神の威力と怖をなし、圍を解いて去つたのである。子南はこの方を部下の壯夫共に教へて、それぞれ一方の將としたが、いづれも傷を被つたものはゐなかつた。漢の末葉、青牛道士がこの方を得て、これを安定の皇甫隆に傳へ、隆はこれを魏の武帝に傳へ、それ以來一般世間にも多少傳はるやうになつたのである。かやうな由緒に因つて、一名冠將丸といひ、又、武威丸と名ける。螢火、鬼箭羽、蒺藜各一兩、雄黃、雌黃各二兩、羖羊角を煅いて性を存して一兩半、礬石を火で燒いて二兩、鐵鎚柄の鐵の入つた部分を燒き焦して一兩半を用ゐて倶に末にし、雞子、黃丹、雄雞冠一羽分を和し、千杵搗いて杏仁ほどの丸にし、三角に作つた絳囊に五丸を盛つて左臂上に帶びる。從軍には腰に繫け、家に居ては戶上に掛ける。まことによく盜賊を辟ける。

附方　新二。

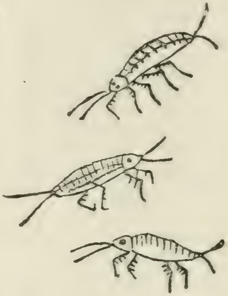
【髮を黑くする法】七月七日の夜に取つた螢火蟲十四箇を髮に撚り傳ければ自ら黑くなる。（便民圖纂方）【目を明にする】勞傷肝氣で目の暗きを治す

る方。螢火十四箇を大鯉魚膽中に納れ、百日間陰乾して末にし、少量づつを點ける。極めて妙である。ある方では白犬膽を用ゐる。（聖惠方）

衣魚（本經下品）

和名　しみ
學名　Lepisma sp.

【釋名】 **白魚**（本經） **蟫魚** 蟫には覃（タン）淫（イン）尋（ジン）の三種の發音がある。 **蛃魚**（郭璞） **壁魚**（圖經） **蠹魚** 宗奭曰く、衣魚は久藏した衣帛中、及び書紙中に生じ、形狀がやや魚に似て尾にもまた二岐があるところから魚なる名稱を呼ばれたのだ。時珍曰く、白とはその色である。壁とはその居所である、蟫とはその狀態である。丙とはその尾の形である。



〔衣　魚〕

【集解】 別錄に曰く、衣魚は(一)咸陽の平澤に生ずる。

(一)咸陽ハ草部隰草類地黃ノ註ヲ見ヨ。

○頌曰く、今は處處にある。衣中には少いが書卷中に甚だ多い。身は白く、厚い粉があつて、手で觸ると落ちる。段成式は『補闕の張周は、壁上に置いた瓜子が化して壁魚になつたのを見たといふ。なるほど、列子の「朽瓜魚に化す」なる言は虛妄ではない。俗間の傳說に、壁魚が道敎の經卷の中に入つて神仙と書いてある文字を食ふと、身の色が五色になる。人がそれを取つて呑むとその身が神仙になるといふ話があるので、唐の張易之の子が、神仙の文字を多數書き、引き劈いて瓶の中に入れ、それに衣魚を入れてその文字を食はせ、首尾よく神仙にならうと企てたが、それは失敗に終つて、たうとう心臟病に罹つたのであつた。此に記錄して俗說の惑を解く』といつてある。

時珍曰く、衣魚は甚だ衣帛、書畫を蠹するもので、始めには靑色だが、老いると白粉が生じ、碎くと銀のやうに見える。書籤などに塗れるものだ。按ずるに、段成式の言に『何諷は書籍の中から長さ四寸ばかりの一條の髮を見付け出し、捲き取らうとした機に力が入り過ぎて絕ち切ると、その兩端から水が滴つた。それをある方士に見せると「これは脈望と名けるもので、衣魚が神仙の文字を三度食ふとこの物

に變化する。これを手に持つて夜間天に向へば、星を墜し、丹を求め得るものだ」といつた』とある。これは衣魚を呑めば神仙になるといふ話とは異ふが、大抵謬妄の說だから誤られてはならない。

氣味　【鹹し、溫にして毒なし】甄權曰く、毒あり。大明曰く、芸草、莽草、萵苣を畏る。

主治　【婦人の疝瘕で小便の利せぬもの、小兒の中風で項强し、背起するものをこれで摩す】(本經)【淋を療じ、瘡に塗れば瘢を滅し、胎を墮す】(別錄)【小兒の淋閉には、これを臍、及び小腹に摩れば通ずる】(陶弘景)【鷹屎、殭蠶と合せて傅ければ瘡瘢が滅する】(蘇頌)【小兒の臍風、撮口、客忤、天弔、風癇、口喎、重舌、目翳、目眯、尿血、轉胞、小便不通に主效がある】(時珍)

發明　時珍曰く、衣魚は太陽の藥である。故にその主治の對症は、中風、項强、驚癇、天弔、目翳、口喎、淋閉等いづれも手足の太陽の經の病である。范汪の方に、小便不利を治するに、十四箇を取り、搗いて數丸に分け作り、頓服すれば通ずるとある、(二)濟書に『明帝の病が危篤のとき、臺省に勅して藥にする白魚を求め

(二)濟書ハ齊書ノ誤。

た』とあつて、これは神農の藥として古方には盛に用ゐてあるが、今一般には知るものが罕だ。

附方　舊五、新七。

【小兒の胎寒】腹痛し、汗の出るには、衣中の白魚十四箇を絹に包み、病兒の腹の上を回轉しつつ摩し、癒るを度とする（聖惠方）【小兒の撮口】壁魚兒を研末し、少量づつを乳房に塗つて病兒に吮はす。（聖惠）【小兒の客忤】項强し、死せんとするには、衣魚十箇を研り、乳房に傅けて吮はす。啊を入れば立ろに癒える。或は二箇を母の手中に塗つて兒の臍を掩ふ。吐、下して癒えるものだ。外用として項强する局所に摩る【小兒の天弔】睛瞳の上視するには、壁魚兒の乾いたもの十箇、濕ふもの五箇を乳汁に和し、研つて灌ぐ。（聖惠方）【小兒の癎疾】白魚酒——衣中の白魚七箇、竹茹一握、酒一升を二合に煎じて溫服する。（外臺）【偏風口喎】白魚を取つて耳に摩る。左喎には右に摩り、右喎には左に摩り、正しくなれば已める。（外臺祕要）【小兒の重舌】衣魚を灰に燒いて舌上に傅ける。（千金翼）【目中の浮翳】書中の白魚を末にし、一日二回、少量を翳上に注ぐ。（外臺）【沙塵の目に入つたとき】出ぬときは、白魚を杵き、乳汁で和して目中に滴す。直に出る。或は末に

して黏ける。(千金)【小便不通】白魚散——白魚、滑石、亂髪等分を散にし、一日三回、飲で半錢匕を服す。(金匱要略)【小便轉胞】出ぬには、衣魚一箇を莖中に納れる。(千金方)【婦人の尿血】衣中の白魚(三)二十箇を陰中に納れる(子母祕錄)

鼠婦(本經下品)

和名 わらぢむし
學名 Porcelis sp.

釋名 **鼠負**(弘景) **負蟠** 煩(ハン)と發音する。(爾雅) **鼠姑**(弘景) **鼠粘**(蜀本) **蜲蟋**(別錄) **蛜蝛** 伊威(イヰ)と發音する。(本經) **濕生蟲**(圖經) **地雞**(綱目) **地虱** 弘景曰く。鼠婦は、爾雅には鼠負と書いてある。その意味は、鼠が多く坎(あな)の中にゐるとこの蟲が背に粘(ねば)る。それでよく負ふてゐるから鼠負といつたのだ。現に婦の字を書くは、甚だ事實にそぐはぬやうだ。


〔鼠婦〕

韓保昇曰く、甕器(をうき)の底、及び土坎中に多くゐる。よく鼠の背にたかつてゐるもの

(三)二、大觀二三二作ル。

(一)魏郡ハ草部隰草類紅藍花ノ魏ノ註參照。

だからかく名けたので、俗にまた鼠粘ともいふ。葈耳に羊負來なる名稱があるやうなものだ。

○時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『鼠負は、食へばよく淫せしめるものだから婦なる名稱がある。又、鼠姑と名けるは鼠婦と同じやうな意味、鼠粘といふは鼠負といふと同じやうな意味だ』とある。かうして見ると、婦といふも負といふもその名稱としての矛盾はない。濕に因つて化生するところから、俗に濕生蟲と呼ぶ。地雞といひ地虱といふはその形態の形容だ。

【集解】別錄に曰く、鼠婦は(一)魏郡の平谷、及び人家の地上に生ずる。五月五日に采る。

○頌曰く、今は處處にある。下濕の場所の甕器の底、及び土坎中に多くゐる。詩に『蛜蝛室に在り』とあつて、鄭玄は『家に住む人がない。そこでこれが生じたといふ意味だ』といつてある。

○宗奭曰く、濕生蟲は、足が多く、大なるものは長さ三四分あり、色は蚓のやうで背に横紋が蹙起してゐる。これを用ゐた處方は甚だ稀だ。

時珍曰く、形は衣魚に似てやや大きく、灰色だ。

【氣味】【酸し、溫にして毒なし】大明曰く、毒なし。

【主治】【氣癃で小便し得ぬもの、婦人の月閉血瘕、癇痓寒熱。水道を利し、胎を墮す】(日華)【久瘧寒熱、風蟲の牙齒疼痛、小兒の撮口、驚風、鵞口瘡、痘瘡倒靨を治し、射工毒、蜘蛛毒を解し、蚰蜒の耳に入りたるを治す】(時珍)

【發明】頌曰く、張仲景の久瘧を治する大鼈甲丸中に用ゐてある。この物の寒熱を主療する點を應用したものだ。

時珍曰く、古方では、驚、瘧、血病を治するに多く用ゐてある。蓋し厥陰の經の藥だ。太平御覽に、葛洪の瘧方といふを載せて『鼠負蟲十四箇を各〻槽で釀して丸にし、十四五丸を發作時に水で呑み下せば癒える』とあるが、葛洪肘後方には『瘧疾寒熱を治するには、鼠負四箇を餹で裹み、丸にして水で服す。それで瘧が斷つ。又、鼠負、豆豉各十四箇を搗いて芡子大の丸にし、發作の前日に二丸を湯で服し、發作の直前に二丸を再服すれば止む。又、蜘蛛の毒螫で生じた瘡には、この蟲を取つてその絲を食はせれば癒える』とある。それは蜘蛛の條に詳記してある。

(二)本經逢源ニ産婦祕尿ヲ産婦遺尿ニ作ル。

附方　舊一、新八。【産婦の(二)祕尿】鼠婦七箇を熬り、研末して酒で服す。(千金)【撮口臍風】聖惠では鼠負蟲を杵いて汗を絞り、少量を灌ぐ。○陳氏の方では、鼠負、及び雀甕を生で杵いて汁を服す。【鵞口白瘡】地雞を水で研つて塗れば癒える。(壽域方)【風蟲牙痛】濕生蟲一箇を綿で裹み、人に知られぬやうに咬む。(聖惠)【風牙疼痛】濕生蟲、巴豆仁、胡椒各一箇を研勻し、飯で綠豆大の丸にし、綿で裹んで一丸を咬み、良久して涎の出るのを吐き去る。言ふべからざる效がある。(經效濟世方)【痘瘡倒靨】濕生蟲を末にし、酒で一字を服すれば靨凹が起つ。(痘疹論)【蚰蜒の耳に入つたとき】濕生蟲を研り爛らして耳邊に塗れば自ら出る。或は紙に攤して撚にし、耳中に挿入して置いても出る。(衞生寶鑑)【射工溪毒】鼠婦、豆豉、巴豆各三箇を脂で和して塗る。(肘後)

附錄　**丹戩**(別錄)有名未用に曰く、味辛し、毒あり。心腹積血に主效がある。蜀郡に生ずる。形狀は鼠婦のやうで、股が青く、頭が赤い。七月七日に採る。一名飛龍といふ。

(一)矢野曰ク、ごきぶり、一名あぶらむしノ一種ニシテ、雌ノ翅ヲ有セザルモノアリ、Polyphagaトナス、䗪蟲ト云フハ此屬ノ雌ナルベシ。此屬ハ雄ハ體長クシテ翅ヲ有シ、雌ハ扁平楕圓形又ハ卵形ヲナス。時珍ガ燈蛾ト相牝牡スト云フハ是ニ依ルモノニシテ、茲ニ燈蛾ト云フハ其雄ノ翅ヲ有スルモノナルコト明カナリ。

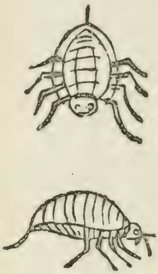
(一)䗪　蟲

音は蔗(シヨ)である。（本經中品）

和名　ごきぶりノ一種
學名　Polyphaga sp.

釋名　**地鼈**（本經）**土鼈**（別錄）**地蜱蟲**（綱目）**簸箕蟲**（衍義）**蚵蚾蟲**（綱目）**過街**　弘景曰く、形態が扁扁として鼈のやうだ。故に土鼈と名ける。宗奭曰く、今は一般に簸箕蟲と呼ぶ。やはり形態の形容だ。時珍曰く、按ずるに、陸農師は『䗪は申の日に逢ふと街を過る』といつてある。故に過街と名ける。袖珍方では、蚵蚾蟲とし、鮑氏の方では、地蜱蟲としてある。

集解　別錄に曰く、河東の川澤、及び沙中、人家の墻壁の下、土中の濕處に生ずる。十月に采つて暴乾する。弘景曰く、形は扁たく、鼈のやうで甲があり、飛べない。やや臭氣がある。



〔䗪蟲〕――土鼈――

恭曰く、この物は、好んで鼠壤土中、及び屋壁下に生ずるもので、狀態は鼠婦に似てゐるが、大なるものは一寸餘あり、形體がやや鼈に似たもの

だ。甲は無くて鱗がある。小兒が多くこれを捕つて物を負はせて戯れる。

時珍曰く、處處にある。燈蛾と牝牡關係にあるものだ。

【氣味】【鹹し、寒にして毒あり】甄權曰く、鹹く苦し。之才曰く、皂莢、菖蒲、屋遊を畏る。

【主治】【心腹寒熱の洗洗──旋（セン）と發音する──たるもの、血積癥瘕。堅きを破り、血閉を下す。子を生ますに大いに良し】（本經）【月水不通。留血積聚を破る】（藥性）【乳脈を通ずるに、一箇を水半合に擂つて濾し、知らしめぬやうにして服ます】（宗奭）【産後の血積、折傷の瘀血を行り、重舌、木舌、口瘡、小兒の腹痛、夜啼を治す】（時珍）

【發明】頌曰く、張仲景の雜病を治する方、及び久病積結を治するものに大黃䗪蟲丸があり、又、大鼈甲丸があり、及び婦人藥にいづれもこれを用ゐてある。それは、この物の堅きを破り、血を下す功果を利用したものだ。

【附方】新七。【大黃䗪蟲丸】産婦の腹痛で乾血あるを治す。䗪蟲二十箇を足を去り、桃仁二十箇、大黃二兩を末にし、煉蜜と杵き和して分けて四丸にし、一丸

づつを酒一升で二合に煮取つて溫服する。（張仲景方）【木舌腫强】口の塞がるものは、治療せねば死に至る。䗪蟲を炙いて五箇、食鹽半兩を末にし、水二盞で煎じて十沸し、時時に熱含して涎を吐く。瘥えれば止める。（聖惠方）【重舌塞痛】地鼈蟲を生薄荷の研汁に和し、綿に包んで舌下の腫處を捻る。一名地蜱蟲といふ。（鮑氏方）【腹痛夜啼】䗪蟲を炙き、芍藥、芎藭と各二錢を末にし、一字づつを乳汁で調へて服す。（聖惠方）【折傷、接骨】楊拱の摘要方では、土鼈を焙じて性を存して末にし、二三錢づつを服す。接骨に神效がある。ある方では生のものを擂つた汁を酒で服す。○袖珍方では、蚵蚾、即ち土鼈六錢を紙を隔てて砂鍋で焙じ乾し、自然銅二兩を七回火で煆き水に淬して末にし、二錢づつを溫酒で調へて服す。病の上部にあるには食後に、下部にあるには食前に服す。神效がある。○董炳の集驗方では、土鼈を陰乾して一箇を、使用する場合に旋研して末にし、乳香、沒藥、龍骨、自然銅を火で煆き醋に淬して各等分、麝香少量を末にし、毎服三分の中に入れて酒で調へて服す。豫め折損した骨を整定してから服藥すべきものであつて、然らざれば接挫するものだ。これは家傳の祕方だから愼重を要する。又、この藥の功

果は杖に代るものである。(杖刑を受くるも痛楚を感ぜずといふ意味なり)

(一)蜚蠊

蜚蠊(ヒレン)と發音する。(本經中品)　和名　ごきぶり、一名ごきかぶり、一名あぶらむし、一名つのむし

學名　Spp. of Blattidae (ごきぶり科)

【釋名】　石薑(唐本)　盧蜰　音は肥(ヒ)である。負盤(唐本)　滑蟲(唐本)　茶婆蟲(綱目)　香娘子　弘景曰く、この蟲には兩三種あつて、廉薑の臭氣があるものを眞物とし、南方人はこれを啖ふところからかく名けたものだ。恭曰く、この蟲は辛く臭く、漢中地方ではこれを食つて、石薑と呼び、また盧蜰と呼ぶ。一名負盤といふ。南方地方ではこれを滑蟲といふ。時珍曰く、蜚蠊、行夜、蝜螽の三種は、(二)西南夷はいづれも食ひ、混じて負盤と呼ぶ。俗にはまた盤を婆と訛り、その婆の稱を諱んで香娘子といつてゐる。

【集解】　別錄に曰く、(三)晉陽の山澤、及び人家の屋間に生ずる。形は蠶蛾に似て腹の下が赤い。二月、八月、及び立秋に採る。弘景曰く、形狀は䗪蟲に似て輕く小さく、能く飛ぶものだ。もとは草中に生ずるのだが、八九月寒さを感じてから、

(一)矢野曰ク、ごきぶり科(Blattidae)ノ諸種、殊ニ大形ナルPeriplaneta　等ヲ云フカ。

(二)西南夷トハ今ノ雲南省及ビ緬甸等ノ蠻夷地方ヲ指ス。

(三)晉陽ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。

(四)金州、房州ハ金部錫ノ註ヲ見ヨ。

多く人家の屋裏に逃げ込むのだ。

保昇曰く、(四)金州、房州等のある地方にゐる。多くは林樹の間にゐて、百千の多數が聚合してゐるものだ。山間の住民は石薑と呼んでこれを啖ふ。郭璞注爾雅に、所謂『蜰、卽ち負盤、臭蟲』である。



〔蜚蠊〕
——行夜も同じ——

藏器曰く、形狀は蝗のやうだ。蜀地方ではこれを食ふ。左傳に『蜚は災を能くせず』とあるはこの蟲のことだ。

時珍曰く、現に一般人家の壁間や竈下に極めて多いもので、甚しきは千百の多數に至るものもある。身は蠶蛾に似て腹、背倶に赤く、二枚の翅があつてよく飛び、燈火の光を喜む。その氣の甚だ臭いもので、その屎は尤も甚しい。羅願は『この物は、好んで早朝に稻花を食ひ、日が出ると散ずる』といつてあるが、水中の一種がそれに酷似してゐる。

氣味 【鹹し、寒にして毒あり】 恭曰く、辛辣にして臭し。

主治 【瘀

血、癥堅、寒熱。積聚を破る。喉咽(三)閉。內寒で子無きもの】(本經)【血脈を通利する】(別錄)【これを食へば氣を下す】(蘇恭)

【發明】時珍曰く、徐之才の藥對に『立夏に先つて蜚蠊が先づ生ずる。人參、茯苓の使となる。腹中七節に主效があり、神を保ち、中を守る』とあるに見ると、西南夷がこれを食ふもやはり謂はれがあるわけだ。又、吳普本草の記載に『神農は、婦人の癥堅寒熱に主效があるといつた』とあるは、大いに意味のあることで、この物は血の藥である。故に婦人に適するのだ。

(一)行夜（別錄）

和名　おさむしノ一種
學名　(Carabus sp.?)

【校正】拾遺の負盤を併せ入る。

【釋名】負盤（別錄）屁盤蟲（弘景）氣蟠　弘景曰く、行夜は、現に小兒が屁盤蟲と呼び、或は氣蟠といふものがそれである。藏器曰く、氣蟠は、短い翅はあるが遠くは飛べぬもので、好んで夜中に行き、人

(五)本經ニ閉ヲ痺ニ作ル。

(一)矢野曰ク、甲蟲類中おさむし科(Carabidae)ノ一種ニみゐでらはんめう、一名へこきむし、一名へひりむし(Pheropsophus jessoensis Morawitz)ナルモノアリ。此種ニ觸ルレバ放屁スルガ如ク臭氣アル氣ヲ出スヲ以テ、本邦ニテハ行夜ヲ以テ此

が觸れると臭氣を出すものだ。蜚蠊と同名で相似たものではあるが、結局同一物ではない。(二)戎人はこれを食ふ。味は極めて辛辣だ。蘇恭が所謂、巴人の重ずる負蠜とはこの蟲のことだ。

時珍曰く、負盤の三種、行夜、蜚蠊、蟲螽は、いづれも同名だが類を異にする。東蠻地方の者がいづれもこれを食ふところから、名稱の混淆を來したのだ。行夜と蜚蠊とは形狀は類似してゐるが、ただ廉薑の氣味のあるものが蜚蠊、觸れると臭氣を發するものが氣盤であつて、その點で區別がつく。張杲醫說の記載に『鮮于叔明は好んで負盤といふ臭蟲を食つた。毎に人を使つて三五升を採取させ、溫水に浮べて臭氣を盡く洩さしめてから、酥、及び五味で熬つて餅にして食ふのだが、甚だ美味だといつてゐた』とあるはこの物だ。

【氣味】【辛し、溫にして小毒あり】【主治】【腹痛、寒熱。血を利す】(別錄)

(一)竈馬(綱目)

和名　かまどうま、一名おかまこほろぎ
學名　Diestrammena sp.

褌ニ充ツ。然レドモ此種ハ小形ニシテ黄斑アリ、蜚蠊ニ似テ云云ノ記事ヨリ見レバ、此類ノ大形黒色ナル Carabus又ハ類似ノ種ヲ云フモノノ如シ。是等亦觸ルレバ氣ヲ出セバナリ。

(二)戎人トハ西北蠻夷地方ヲ指ス。

(一)矢野曰ク、きりぎりす科(Locustidae)ニ屬スルモノ、和名かまどうまハ漢名ヨリ起レルモノカ。

【釋名】**竈雞**（俗名）

【集解】時珍曰く、竈馬は處處にある。竈に穴を作つてゐるものだ。按ずるに、



促織

（竈馬）

西陽雜俎に「竈馬は、形狀は促織のやうでやや大きく、脚が長い。好んで竈の旁に穴を作つてゐるものだ。俗に、竈に馬がゐるは食物の豐富になる前兆だといふ」とある。

【附錄】（一）**促織**　時珍曰く、促織とは蟋蟀のことで、一名蛬、一名蜻蛚といふ。陸機の詩の義疏に『蝗に似て小さく、正黑色で漆のやうな光澤があり、翅、及び角があつて、善く跳ね、好く鬪ふ。立秋後になると夜鳴く』とある。詩の豳風に『七月野に在り。八月宇に在り。九月戶に在り。十月蟋蟀、我が牀下に入る』とあるがこのものだ。古方には用ゐられてない。此に附錄して將來に俟つ。

（一）矢野曰ク、促織、和名こほろぎ、學名 Gryllus sp. こほろぎ科（Grillidae）ニ屬ス、此屬ニ數種アリ。

【氣味】（缺）【主治】【竹刺の肉に入りたるには、一箇を取つて搗いて傅ける】（時珍）

（一）蟲螽　音は負終（フシウ）である。（拾遺）　和名　きりぎりす種類　學名　Species of Locustidae.

【校正】拾遺の蚱蜢を併せ入る。

【釋名】負蠜　煩（ハン）と發音する。蚱蜢　時珍曰く、この物には數種あつて、蟲螽といふはそれを總括した名稱だ。江東でこれを蚱蜢と呼ぶは、その身が瘦せ、長くして善く跳ね、窄にして猛だといふ意味である。螽を螺の字にも書く。



蟲螽—蚱蜢

【集解】藏器曰く、蟲螽は形狀は蝗蟲のやうで異つた斑のあるものだ。蚯蚓とは異類であるが同穴に棲み、雌雄の關係にある。その相交るものを取つて媚藥の材料にする。

（一）矢野曰ク、啓蒙ニハ蟲螽ニおほいなご、一名とのさまばつたヲ充ツレドモ誤レルガ如シ、寧ロきりぎりす科ニ屬スル諸種ノ總名ナルガ如シ。而シテ其小形ナル所ノ多數ノ名稱ノ如キハ、今之ヲ紙上ノ記載ノミニヨリテハ明ニスル事ヲ得ズ。但シ古クハ此等ニ皆邦産ノ諸種ヲ充テタリ、例セバ蚱蜢いねつきこまろ、一名しやうりやうばつた、草螽つゆむし、又くびきりばつた、土螽つちいなご、螽斯きりぎりす、蟹螽しやうりやうばつた、

時珍曰く、蛗螽は、草上にゐるものを草螽といひ、土中にゐるものを土螽といひ、草螽に似て大なるものを螽斯といひ、螽斯に似て細長いものを蟿螽といふ、爾雅に『蛗螽は蠜なり。草螽は負蠜なり。(二)斯螽は蜙蝑なり。蟿螽は螇蚸なり。土螽は(三)蠰螇なり』とあつて、この數種は、いづれも蝗に類して大小一定せず、長い角があり、長直な股があつて善く跳ね、青、黑、斑の數色がある。やはり能く作物を害するものだ。五月に股を動して聲を發し、冬になると土穴中に入る。(四)芒部の蠻夷地方ではこれを食ふ。蔡邕の月令には『この類の蟲は、土中深くその卵を産んで埋め、夏になると始めて出る』とある。陸佃は『草蟲は上風に鳴き、蚯蚓は下風に鳴く。風に因つて化するものだ。性忌まぬもので、一母が百の子を生む。故に詩に「喓喓たる草蟲。趯趯たる蛗螽」とある。やはり螽の類だ。形は大きく首が四角で、その首に王の字がある。沴氣の生ずるところ天を蔽ふて飛ぶものだ。性金聲を畏れる。北方地方ではこれを炒つて食ふ。一回に八十一の子を生み、冬大雪があると土に入つて死ぬ』といつてある。

氣味　【辛し、毒あり】

主治　【五月五日に交尾中のものを收取して夫婦

莎雞きりぎりす。即チはたおりばつた、紡績娘くつわむし、絡緯やぶきり、油胡盧こほろぎ、是等ノ内多少近似スルモノアレドモ、多クハ正確ニ當レルモノニアラザルベク、其等ヲ判定スルコト困難ナリ、是レ種類多クシテ記事簡單ニ且ツ日支種ヲ異ニスルヲ以テナリ。

(二)斯螽、爾雅ニハ蜇螽トアリ。

(三)蠰螇、爾雅ニハ蠰谿トアリ。

(四)芒部ハ今ハ雲南省騰衝縣管下ニ屬スル芒市河沿流ノ一帶部ナリ。明ニ安撫司ヲ置ク、即チ芒市司ナリ。

が佩びると互に愛媚せしめる】(藏器)

附錄　(五)吉丁蟲(拾遺)　藏器曰く、甲蟲であつて、背が正綠色で甲下に翅がある。嶺南の(六)賓、澄諸州に出る。その地方の者はこれを取つて帶びる。人をして喜んで好愛相媚せしめる藥だ。

(七)**金龜子**　時珍曰く、これもやはり吉丁の類の媚藥であつて、刀豆ほどの大いさで頭面は鬼に似てゐる。その甲は黑く硬く、龜のやうな狀態で四足、二角あり、身も首も皆泥金で塗り飾つたやうだ。蓋しこれも蠹蟲から變化したものである。段公路の北戶錄に『金龜子は甲蟲であつて、嶺南に出る。五六月草蔓上に生じ、楡莢ほどの大いさで背に金貼があり、行動には必ず二箇双ぶ。死ねば金色が隨つて滅する。それ故に粉を以て養つて媚藥に供する』とあり、竺法眞の(八)羅浮山疏に『この山に(九)金花蟲といふがある。大いさ斑蝥ほどで金のやうな色の模様があり、形は龜に似てゐる。養つて數日間玩び得るものだ』とあり、宋祁の益部記に『(一〇)利州の山中に(一一)金蟲といふがある。その形體は蜂のやうなもので、綠色で金を塗つたやうに光る。田舍の者共はこれを取つて婦人の釵、鐶の裝飾にする』とあり、鄭樵の通志

(五)矢野曰ク、吉丁蟲、和名學名未詳。一般ニ此ニたまむしヲ充ツ。たまむし(Chrysochroa elegans Thunberg)ハたまむし科(Buprestidae)ニ屬ス、記事簡ニシテたまむしナルヤ又ハこがねむしナルヤヲ知ルヲ得ズ。

(六)賓州、澄州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(七)金龜子、和名こがねむし、學名Anomala spp. 此種ハこがねむし科(Scarabaeidae)中ノ葉ヲ食スルモノニシテ、且大形ナル Anomala, Mimela 等ノ諸種ノ汎稱ナルベシ、是等ノ屬種類甚ダ多シ。

(八)羅浮山ハ草部隰草類女青ノ註ヲ見ヨ。

に『爾雅に「蚊は蟥蛢なり」とあつてその甲蟲は大いさ虎豆ほどあり、綠色で金のやうだ』とある。四種の書に記載したものはみな同一物だ。南方の地の諸山にもやはり時にこの蟲がゐる。

(二二)**腆顆蟲**(拾遺)　藏器曰く、嶺南に出る。形狀は扆盤に似て、褐色で身が扁い。これを帶びれば人をして相愛せしめるもので、彼の地では珍重する。

(二三)**叩頭蟲**　時珍曰く、蟲の大いさは斑蝥ほどで色が黑く、その後部を押へると叩頭して音を發てる。よく人の耳に入るものだが、生油を灌げば出る。劉敬叔の異苑に『叩頭蟲といふは形體は大豆ほどのもので、「叩頭せよ」と咒へれば叩頭し、「血を吐け」と咒へれば血を吐き、すべて命ずるまゝのことをする。殺すは不祥である。佩びれば人をして媚愛せしめる』とあり、晉の傅咸には賦の作がある。

(二四)**媚蝶**　時珍曰く、北戶錄に『嶺表に鶴子草といふがある。蔓花であつて、夏季に花を開き、その花の形は飛ぶ鶴のやうで、翅や羽の形も觜や爪の形も完全にある。これを媚草と稱して採取し、曝して化粧品の代用にして顏に塗るが、蔓上に春になると二箇の蟲が生じてその葉を食ふ。化粧品函の中にその蟲を入れてその葉で飼つ

(一九)矢野曰ク、金花蟲ハ今はむし科(Chrysomelidae)ノ種ニシテ、ぢんがさむし(Cassidae)ニ充ツ。

(二〇)利州ハ金部錦ノ註ヲ見ヨ。

(二一)矢野曰ク、金蟲ハ甲蟲ノ一種ニ充ツルモノアレドモ、せいほう科(Chrysididae)ニ屬スル蜂ノ類ナルベシ。

(二二)矢野曰ク、腆顆蟲未詳。

(二三)矢野曰ク、叩頭蟲、和名こめつきむしノ一種、學名species of Elateridaeこめつきむしナルコト明ナレドモ、其一種ナルヤ總名ナルヤ明ナラズ。

(二四)矢野曰ク、媚蝶未詳。

て置くと、やがて老いると蛻して赤黄色の蝶になる。それを婦人が取つて佩びてゐるが、細鳥皮のやうなものだ。人をして媚悦せしめるといひ、媚蝶と呼んでゐる』とある。○洞冥記には『漢の武帝の時、(一五)勒畢國から細鳥を獻じた。大いさは蠅ほど、形狀は鸚鵡のやうなもので、光陰の時刻を量り得るものであつた。後にみな自ら死んだが、宮女達のうちで、その皮を佩びたものが帝の愛幸を蒙つた』といふことである。

木蝱 音は萠(ホウ)である。(本經中品) 和名 あぶ 學名 Tabanus spp.

釋名 魂常(本經) 時珍曰く、蝱は翼で鳴くもので、その聲が蝱蝱と聞えるものだからかく名けたのだ。陸佃は『蟁は民を害するものだから蟁といふ。蝱は甿を害するものだから蝱といふ』といつてある。やはりこれでも意味は通じる。

集解 別錄に曰く、木蝱は(一)漢中の川澤に生ずる。五月に取る。頌曰く、今は處處にあるが、(二)襄、漢に近い地方に就中多い。

(一五)勒畢國、未考。

(一)漢中ハ石部特生礜石梁州ノ註參照。

(二)襄漢ハ草部山草類細辛ノ註ヲ見ヨ。

弘景曰く、この蝱は、形狀は蝱に似て小さく、血を噉はないものだ。近道ではそのゐるものを見ないが、商人の所持する商品にもやはり稀だ。方家ではただ蜚蝱だけを用ゐる。

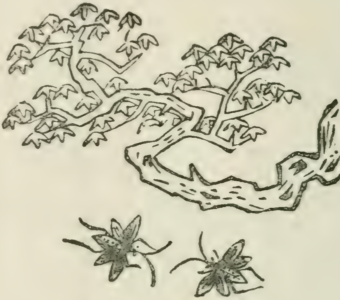
恭曰く、蝱には數種あつて、いづれも能く血を噉ふ。(三)揚、浙以南、江嶺の地方に多くゐる。木蝱は、長大にして綠色のもので、(四)始は蜩蟬のやうだ。牛、馬が咂はれて或は打ち仆れることもある。蜚蝱は、形狀は蜜蜂のやうで黄黑色だ。今は俗間でこれを多く用ゐる。又、小なる一種のものは鹿蝱と名け、牛蝱とも呼ぶ。大いさ蠅ほどのもので、牛、馬を嚙むことがやはり猛烈だ。商人はこれを採取して賣つてゐる。以上の三種は體を同うするもので、血を療ずるを本體とする。(五)多少の異同はあつても、これを用ゐて差支はない。木蝱は形が倍大なるものだ。然るに陶氏は『蝱に似て小さく、血を噉はない』といつたが、蓋し實物を識らないのだ。

藏器曰く、木蝱は木葉中から出るもので、葉を卷いた形は子を圓形に葉上に著けたやうだ。それを破つて初めて出たばかりには白蛆のやうだが、漸次に成長して子が化し、拆き破つて飛んで出る。それがよく物を嚙むのである。塞北にもゐるが、

(三)揚浙ハ江蘇、浙江兩省地方、江嶺ハ江西、廣東兩省地方。
(四)始、大觀ニ殆ニ作ル。
(五)大觀ニハ多少ノ上ニ餘療ノ二字アリ。

嶺南に極めて多い。(六)古度が蟻に化するやうなものだ。木蝱とはまだ木葉中にゐるもの、蜚蝱とは已に飛んで出たもののことで、あだかも蠶蛹と蛾とのやうに總て同一物だから、重複して記載すべき筋合ではないのだが、變形に隨つて功用にも不同があるものとして、後世の學者が註解を異にしたといふわけだ。

時珍曰く、金幼孜の北征錄に『北虜の(七)長樂鎭の草原にゐる蝱は、大なるは蜻蜓ほどのもので、人の顏に拂ひ觸れ、嘬し嚼ふ』とあり、元稹長慶集に『巴蜀の山谷地方は、春、秋に常に雨があり、五六月から八九月までには蝱が多く、道路に群り飛んでゐて、牛、馬が咂はれて血を流してゐる。人が嚙まれると非常に毒なものだ。その毒は肌膚の間に留まらないものだから、治療の方法がない』とある。これに據ると、藏器の說がやはり事實に近いやうだ。又、段成式は『南方の溪澗中に水蛆が多い。長さ一寸



〔木蝱〕

(六)無花果、附錄古度子ノ條ニ云、若數日不煮則化作飛蟻穿皮飛去也。

(七)長樂鎭、未詳。

餘の黑色のものだが、夏季の末に變じて虻になる。人が螫されると甚しい毒がある』といつてある。これを觀ると、虻の變化には木からするものも水からするものもあるわけで、單一ではないことになる。

【氣味】【苦し、平にして毒あり】【主治】【目赤痛、眥傷涙出、瘀血、血閉、寒熱(六)酸澌、子なきもの】(本經)

(一)蜚虻(本經中品)

和名　あぶ
學名　Tabanus spp.

【釋名】虻蟲　蜚は飛と同じ。

【集解】別錄に曰く、蜚虻は(二)江夏の川谷に生ずる。五月に取る。腹に血あるものがよし。弘景曰く、これは方家で用ゐる虻蟲のことだ。牛、馬の血を噉ふもので、その血が腹に滿るを伺つて掩ひ取つて乾す。

恭曰く、木虻、蜚虻、鹿虻は、いづれも牛、馬の血を食ふ。この物に限つたことはない。これはただ取りさへすれば使用に堪へる。何も血の充ちたものに限るわけ

(六)澌、音「セイ」心怯ナリ。「オピウ」ナリ。音「シ」凜ナリ。義同ジ。酸澌ハ「ゾクゾク」トシテ不安ナル貌ナリ。

(一)矢野曰ク、木虻及蜚虻共ニあぶ科(Tabanidae)中ノあぶ、又ハうしあぶ屬(Tabanus)ノ種ナルガ如ク、啓蒙ニハ後者ニこあぶ、又あなあぶノ名ヲ充ツ、此屬種類多ク大小等差アリ、色彩又灰靑色ヨリ黃褐色ニ至ルマデ一ナラズ、此等ノ區別ニヨリテ別名ヲ以テ呼ブモノカ。

(二)江夏ハ漢ノ郡名、草部隰草類敗醬ノ註ヲ見ヨ。

（三）霸州ハ今ノ河北省ノ霸縣ソノ舊治ナリ。
（四）順安軍ハ今ノ河北省ノ高陽縣ソノ舊治ナリ。

はない。鷹を養ふには饑ゑしめて役に立てるやうなものだ。食ひ飽かしめてからといふのではいかで疾を除く效があらうか。

宗奭曰く、蜚虻は、現に一般に多く用ゐる。大いさ蜜蜂ほどのもので、腹が凹んで褊く、色の微し黄綠なるものが雄である。（三）霸州、（四）順安軍の沿塘、濼界河に甚だ多い。この物は牛、馬等の血を食ふところから、瘀血、血閉の治療に用ゐるのだ。



〔蜚　虻〕
——鹿虻も同じ——

時珍曰く。これを採つて用ゐるには陶氏の說に從ふべきものだ。蘇恭は饑鷹を喩に引いてゐるが、比喩そのものが誤つてゐる。

修治　丸、散に入れるには、翅、足を去つて炒熟して用ゐる。

氣味　【苦し、微寒にして毒あり】之才曰く、麻黃を惡む。

主治　【瘀血を逐ひ、血積、癥瘕、寒熱を破り、血脈、及び九竅を通利す】（本經）【婦人の月水不

通、積聚。賊血の胸、腹、五臓に在るもの、及び喉痺結塞を除く』（別錄）【癥結を破り、積膿を消し、胎を墮す』（日華）

【發　明】　頌曰く、淮南子に『蝱は積血を破り、木を齗り、齲を愈す』とある。これは類推に因つたものだ。

時珍曰く、按ずるに、劉河間は『蝱は血を食ふものであつて血を治す。これはその性に因つて用を爲すのである。成無己は「苦は血に走る。血が結して行らぬものには、苦を以てこれを攻める」といつた。故に畜血を治するに蝱蟲を用ゐるのであつて、これは肝の經の血分の藥である。古方には多く用ゐてあるが、今は一般に使用するものが稀だ』といつてある。

【附　方】　舊二、新一。【蛇螫出血】九竅悉く出血するには、牛、馬の血を食つて滿腹したばかりのもの二十一箇を取り。燒き研つて湯で服す。（肘後）【母體危篤の場合の墮胎】蝱蟲十箇を炙き、搗いて末にし、酒で服す。胎は直ちに下る。（產乳）【打撲、墜損の瘀血】蝱蟲二十箇、牡丹皮一兩を末にし、酒で方寸匕を服す。血は化して水となる。久しき宿血が骨節中に在る場合には、二味等分。（備急方）

附録

(五)**扁前**(別錄)　有名未用に曰く、味甘し、毒あり。鼠瘻、瘑閉に主效があり、水道を利す。山陵中に生ずる。形狀は牛虻のやうで翼が赤い。五月、八月に採る。

(六)**蚊子**　時珍曰く、蚊は處處にゐる。冬蟄し、夏出で、晝伏し、夜飛ぶ。身が細く、喙が鋭く、人の膚血を咂つて大いに人體に害をなす。一名白鳥、一名暑蟁といふ。黍民とも書くが、それは誤だ。木葉、及び爛灰中に化生し、子を水中に產んで孑孑蟲となり、それから變じて蚊となるものだ。龜鼈はこれを畏れ、螢火、蝙蝠はこれを食ふ。故に鼈を煮る場合に數箇を入れると煮爛れ易い。

藏器曰く、嶺南に蚊子木といふがある。葉は冬青のやう、實は枇杷のやうで、熟すると蚊が出る。(七)塞北に蚊母草といふがある。葉の中に血蟲がゐて、それが化して蚊となる。江東に蚊母鳥、一名鷏といふがある。毎に一二升の蚊を吐く鳥だ。

(八)**蚋子**　時珍曰く、按ずるに、元稹長慶集に『蜀中に蚋子と呼ぶ小蚊がゐる。また小さくして黒いもので蠓子といふがゐる。目に見えぬほど微小なもので、塵と共に浮んで上下する浮塵子といふがゐる。いづれも巴蛇の鱗中を巢として棲み、よく

(五)矢野曰ク、扁前未詳、普通蠅ノ一種べつかふばい、一名あかばい(Eggizoneura formosa, Wied)ヲ充ツ。

(六)蚊子、和名か學名 species of Culex か科(Culexidae)ノ諸種種類多シ、Culex, Mansonia, Aedes, Theobaldia, Stegomyia, Anopheles 等ノ諸屬アリ。

(七)塞北トハ今ノ蒙古地方ヲ指ス。

(八)矢野曰ク、蚋子和名ぶと、一名ぶゆ學名 Simulium spp. 蚋子ニぶとヲ充ツぶと科(Simuliidae)ニ屬ス、但シ啓蒙ニハぬかが、又ぬかごヲ充ツ、但現時ぬかがヲ蠓子ニ充ツ、ぬかがハ本ヨリ小形ニシテぬすりか科(Chi-

ironomidae）ニ屬スル Ceratogogon ナリ當否疑アリ。浮塵子、啓蒙ニハうんか（丹後）ぬかばい（薩州）せせり（雲州、肥前）ナル種ヲ充ツ、恐ラクゆすりか科ノ種ナルガ如シ、本綱ノ浮塵子ハ或ハ此ニ近カランカ、而シテ現時ニテハ皆浮塵子ヲ以テ有吻目ニ屬スルよこばいノ類（Jassidae, Fulgoridae 等）ニ充テ、殊ニ其類ノ稻ヲ害スルモノヲ呼プニ浮塵子ノ名ヲ以テス、恐ラク誤用セルモノニシテ茲ニ浮塵子トハ全ク別類ナリ。

（九）烏蒙峽、今ノ雲南省昭通縣北ニ烏蒙山アリ。縣東二十支里ニ所謂烏蒙ノ部落アリ、ソノ峽谷地方

衣服の中に潛つて人の肌膚に入り、嚙まれたところは瘡になつて非常に苦むものだ。しかし楸葉を搗いて傅けさへすれば瘥える』とある。又、祝穆の方輿勝覽には『雲南の（九）烏蒙峽中には毒蛇が多く、その鱗中に黃鱦と名ける有毒の蟲がゐて、嚙まれると瘡になる。しかし搔いてはならない。冷水を沃いで鹽少量を擦りさへすれば癒える』とある。これ等もやはり蚋、蟆の類のものだ。

（一）竹蝨（綱目）

和名　ありまき、一名あぶらむし
學名　Species of Aphididae.

釋名　**竹佛子**（綱目）**天厭子**

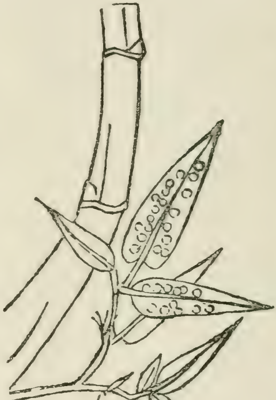
集解　時珍曰く、竹蝨は諸竹、及び草木上に生じていづれにもゐるものだ。初生には粉點のやうだが、久しくするとよく動き、無數に簇るもので。形は蝨ほどの大いさで蒼白色だ。濕熱の氣の化したものだともいひ、蟲の卵から化したものだともいふ。古方には用ゐられてないが、ただ南宮從の岣嶁神書に『江南、（三）巴卭、吳越、荊楚の地方には、春秋に竹の中に蝨に似て蒼い蟲がゐる。取つて陰乾したもの

チイフ。
(一)矢野曰ク、竹蝨ハありまきノ内竹葉ニ生ズル Oregma 屬ヨリ名チ生ゼルカト思ヘドモ其類ノ總稱ナラン。
(二)巴卭ハ漢ノ巴郡卽チ今ノ四川省重慶ヨリ臨卭、卽チ今ノ同省卭崍縣ニ亙ル一帶ノ地ナリ。吳越ハ草部山草類朮ノ註チ見ヨ。荊楚ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。

は、中風の治療に用ゐ得る』とある。卽ちこの物だ。(時珍)

【氣味】【毒あり】【主治】【中風の半身不遂。能く經路に透つて涎を追ふ】

【附方】新一。【中風偏痺】半身不遂には、麻黄を湯で煮つて糊にし、紙に攤して不遂ならぬ一方の上下體全面に貼り、ただ七孔とその患部とは除外して糊らずに置き、竹蝨を焙じで末にして三錢を、老人には麝香一錢を加へて研勻し、熱酒で調へて服して就寢する。須臾にして藥力が行り、風聲のやうに口から惡水を吐き、身體から膠のやうな臭汗を出したとき、急に糊紙を去り、別の麻黄湯で溫浴し、暖かに臥して休養し、十日間は淡泊の食物を攝る。それで手、足は故のやうになる。(崆峒神書)


〔竹蝨〕

本草綱目蟲部第四十一卷 終

本草綱目蟲部

第四十二卷

本草綱目蟲部目錄第四十二卷

蟲の四　濕生類二十三種　附錄七種

右附方　舊二十九、新一百零六。

蟲の四　濕生類二十三種　附錄七種

蟾蜍(一)（別錄下品）

和名　ひきがへる
學名　Bufo spp.

【釋名】 **鼁鼀** 音は蹙秋（シクシユウ）である。 **䵷𪓰** 𪓰の音は施（シ）である。 **蚵蚾** 音は何皮（カヒ）である。 **癩蝦蟆** 時珍曰く、蟾蜍を、說文には詹諸と書き、その說明に『その聲詹諸たり。その皮鼀鼀たり。その行くこと𪓰𪓰たり』とある。詩には『此の䵷𪓰を得る』とあり、韓詩註には『戚施は蟾蜍なり。戚、音は蹴』とある。後世これを苦蠪と名けるはその鳴聲を表したもの、蚵蚾とはその皮の磊砢たるをいつたものだ。 **蚼鼀** 音は蚼蹴（キクシユ）である。 **苦蠪** 蠪の音は籠（ロウ）である。



〔蟾蜍〕

（一）矢野曰ク、支那ニハ Bufo bufo asiaticus, B. raddei, B. melanostictus, 等ヲ產ス、日本ニテ最モ普通ナルハ Bufo bufo japonicus ナリ。矢野曰ク、此他ノ蛙類ニ對シテハ普通次ノ如キ種ヲ充テタリ雨蛤ニあまがへる(Hyla)ヲ、本邦ノモノハ Hyla arborea japonica 支那產ハ Hyla chinensis ナリ。金線蛙ニハとのさまがへる Rana nigromaculata, Hull ヲ充ツ、金襖子ニハかじか Polypedates buergeri ヲ充ツ、但シ此種ハ支那ニ產セズ。

【釋名】○○別錄に曰く、蟾蜍は(一)江湖の池澤に生ずる。五月五日に東に向つて行くものを取り、陰乾して用ゐる。

○○弘景曰く、これは腹が大きくして皮上に痱磊の多いもののことで、その皮の汁は甚だ毒があり、(二)犬が嚙むと口が全部腫れる。五月五日に東に向つて行くもの五頭を取り、縛つて密室中に閉ぢ籠め、翌朝それを視ると自から解けてゐるものだ。これを取つて術に應用すると、人間も縛られたものが自ら解ける。

○○蕭炳曰く、腹下に八字の丹書があつて、足で地に畫くものが眞の蟾蜍である。

○頌曰く、今は處處にある。別錄に『蝦蟇、一名蟾蜍』として、二者一物としたのは誤だ。按ずるに、爾雅に『鼁鼀は蟾蠩なり』とあり、郭璞は『蝦蟇に似て陸地に居るものだ』といつてあるのだから、一物でないことは明だ。蟾蜍は、多く人家の下濕の場所にゐるもので、形體は大きくして背上に痱磊が多く、行動は極めて遲緩で跳ね躍れない。また鳴くことを知らぬものだ。蝦蟇は、多く池澤の間にゐるもので、形體は小さくして皮上に黑色の斑點が多く、能く跳ねて諸蟲を吞で吸ひ込み、擧動の極めて急なるものだ。この二物は一類にしても功用にやや差別がある。やはり區

(一)江湖ハ江西、湖南兩省地方。

(二)犬、原書ニ大トアレドモ、犬ノ誤ナルコト必セリ。

別して使用すべきものだ。蟾蜍の屎は土檳榔と稱するもので、下濕の場所に往往ある。やはり治病に功能のあるものだ。

宗奭曰く、三本足のものが蟾だといふ言ひ傳へがあるところから、世間には、三本足の蟾の乾燥物などいふものを作つて一般人を瞞著するものもあるが、但し水をそれに沃いで見ると半日にしてその詐僞が暴露する。蓋し三本足のものといふは無いものなのだ。

時珍曰く、蟾蜍は、頭が鋭く、腹が皤く、眉が促り、聲が濁つて土形のものだ。大いさ盤ほどのものがある。自然論には『蟾蜍は口から吐いて生れ、糞を口から排泄する』とあり、抱朴子には『蟾蜍は、千歲を經たものには頭上に角があり、腹下に丹書がある。それを名けて肉芝といふ。能く山精を食ふものだ。人間がこれを得て食へば仙となる。術家ではこれを取つて應用し、霧を起し、雨を祈り、兵を辟け、縛を解く』とある。現に蟾蜍を使ふ技を行ふ者は蟾を聚めて戲藝を演じてゐる。蟾蜍がよく術者の命令の通りに擧動するところを見ると、靈性のあるものなることが推想される。許氏の說文に『三足の者を蟾となす』とあるが、寇氏がそれを非とし

たのは然るべきことである。但し龜、鼈いづれも三本足のものがあつて見れば、蟾に三本足のものがあつても不思議はないが、藥用には必ず三足のものに限ると考へることが謬なのだ。岣嶁神書に蟾寶の法なる記載があつて『大蟾一箇を用ゐ、長さ一尺の鐵釘で四足を各〻釘付けにし、炭火で早朝から正午まで炙り、前に水一盞を置いて物を吐かせる。それは皂莢ほどの大さで金光があるものだ。人がそれを呑めば江湖を越え得る』とあるが、予から見れば、さやうな術があつたところで誰がそれを呑めようぞ。方技家の大山師といふものだ。眞面目に受け取れることではないと思ふ。兎も角僞瞞に備へるために此に記載して置く。

修治　蜀圖經に曰く、五月五日に採取して日光で乾し、或は烘き乾して用ゐる。ある法では、皮、爪を去つて酒に一夜浸し、又、黄精の自然汁に一夜浸し、酥を塗つて炙き乾して用ゐる。

時珍曰く、今一般には、いづれも端午の日に捕取して風乾し、黄泥で固濟して煆いて性を存して用ゐる。永類鈐方には『蟾は、目赤くして腹に八字なきものは用ゐられぬ』とある。崔寔の四民月令に『五月五日に取つた蟾蜍は惡瘡の治療に用ゐ得

る』とあるはこのものだ。また酒に浸して肉を取つて用ゐることもある。錢仲陽の小兒の冷熱疳瀉を治する如聖丸には、乾いたものを酒で煮て膏にし、それを丸藥にしてあるが、これも一法だ。

〔氣　味〕【辛し、涼にして微毒あり】〔主　治〕【陰蝕、疳瘻、惡瘡、猘犬の傷瘡。能く玉石を合す】（別錄）【燒灰を瘡に傅ければ立ろに效驗がある。又、溫病發斑で衰弱し、危篤なるものには、腸を去つて生で搗き、一二箇を食ふ。瘥えぬものなし】（弘景）藏器曰く、搗き爛らして汁を絞つて飮み、或は燒いて末にして服す【疳蟲を殺し、鼠瘻、惡瘡を治す。灰に燒いて一切の蟲のある惡癢、滋胤瘡に傅ける】（藥性）【疳氣、小兒の面黃、癖氣を治し、癥結を破る。灰に燒き油で調へて惡瘡に傅ける】（日華）【小兒の勞瘦疳疾に主效あり、最も良し】（蘇頌）【一切の五疳、八痢、腫毒、破傷風病、脫肛を治す】（時珍）

〔發　明〕時珍曰く、蟾蜍は土の精である。上には月魄に應ずるもので、不思議な靈性があり、土中に穴居して蟲を食物とする。又、山精を伏し、蜈蚣を制するものだ。故に能く陽明の經に入り、虛熱を退け、濕氣を行り、蟲䘌を殺すもので、疳

病、癧疽、諸瘡の要藥である。別錄に『猘犬傷を治す』とあり、肘後方にもその方法があるが、按ずるに、宋書に『張收が猘犬に咬まれたとき、蝦蟇の膾を啖ふがよいといふ者があつたので、それを食ふと遂に癒えた』とある。これはやはり癧疽、疔腫を治する關係に因るものだ。大體に於て、この物は能く毒を攻め毒を拔くものである。古今の諸方に蝦蟇を用ゐるとあつて、その區別を正確にしてないが、實は蟾蜍の場合が多い。讀者はその區別を明にする必要がある。名稱だけに因つて用うべきその物の事實を誤つてはならない。

附方　舊七、新十七。【腹中の冷癖】水穀の飮食物が癊結し、心下に停痰があり、兩脇が痞滿し、按ずれば鳴轉し、逆して飮食を障害するには、大蟾蜍一箇を皮、腸を去つて四肢を剖解し、芒硝を體質の强き患者には一升、中の患者には七合、弱い患者には五合を入れ、水七升で四升に煮取つて頓服する。下すを度とする。(肘後方)

【小兒の疳積】小兒の疳積で、腹大し、黃瘦し、骨立し、頭に瘡を生じて結して麥穗のやうなるには、立秋後の大蝦蟇を首、足、腸を去り、淸油を塗つて陰陽瓦で炙熟して食ふ。積穢が自ら下る。五六箇を連服すれば、一个月後には容貌、體格が全

(四)大觀ニ疳ヲ洞ニ作ル。

然改まり、言ふべからざる妙效がある。【五疳、八痢】顏色黄に、肌瘦せ、好んで泥土を食ひ、乳や食物を欲しがらぬには、大乾蟾蜍一箇を燒いて性を存し、皂角を皮弦を去つて一錢を燒いて性を存し、蛤粉を水飛して三錢、麝香一錢を末にし、糊で粟米大の丸にし、一日二回、三四十丸づつを空心に米飲で服す。これを五疳保童丸と名ける。(全嬰方)【小兒の(四)疳泄】下痢するには、蝦蟇を燒いて性を存し、研つて方寸匕を飲で服す。(子母秘錄)【走馬牙疳】口、鼻を侵蝕するには、乾蝦蟆を黄泥で固く裹んで煆き、黄連と各二錢半、青黛一錢を末にし、麝香少量を入れ、和研して傅ける。(鄭氏小兒方)【疳で顋を蝕し穿つもの】金鞭散——疳瘡で顋を穿ち牙の落ちるを治す。母雞が抱いた卵の軟白皮で活きた土狗一箇を包み、大蝦蟇の口に入れて草で縛り、泥で固めて煆いて取り出し、研末して貼る。癒えるを度とする。(普濟方)【小兒の口瘡】五月五日の蝦蟇を炙き、研末して傅ければ痊える。(秘錄)【一切の疳䘌】去處を問ふことなく、皆よく治す。蝦蟇を灰に燒いて醋で和し、一日三五回傅ける。(梅師方)【全部を蝕し盡さんとする陰蝕】蝦蟇灰、兎屎等分を末にして傅ける。(肘後)【月蝕耳瘡】五月五日の蝦蟇を燒いて末にし、猪膏で和して傅ける。(外

臺方）【小兒の蓐瘡】五月五日に取つた蟾蜍を炙き、研末して傅ければ瘥える。（祕錄）【小兒の臍瘡】汁が出て久しく瘥えぬには、蝦蟇を燒いて末にし、一日三回傅ける。甚だ效驗がある。一には牡蠣等分を加へる。（外臺）【一切の濕瘡】蟾蜍を灰に燒いて猪脂で和して傅ける。（千金方）【小兒の癬瘡】蟾蜍を灰に燒いて猪脂で和して傅ける。（外臺方）【癩風蟲瘡】乾蝦蟇一兩を炙り、長肥皂一條を炙り、皮、子を去つて酒を蘸け、再び炙つて末にし、竹管で羊腸內に引き入れて固く括り、甑內に麩を鋪いてその上に載せて蒸熟し、麝香半錢を入れ、麩を去つて共に搗いて梧子大ほどの丸にし、二十一丸づつを溫酒で服す。（直指）【附骨壞瘡】久しく瘥えずして膿汁が絶えず、或は瘡孔中から骨の出るには、大蝦蟇一箇、亂髮を雞子一箇ほど、猪油四兩を煎じ枯して滓を去り、膏のやうに凝つてから、先づ桑根皮、烏頭の煎湯で瘡を洗つて拭き乾し、煅いた龍骨末を四邊に摻つて然る後に前の膏を貼る。（錦囊祕覽）【發背腫毒】未だ成らぬには、活きた蟾一箇を瘡上に載せて括つて置く。半日經つと蟾は必ず昏憒するが、その時それを水中に入れて命を救け、更に別の一箇に易へて前の如く繰返す。その蟾は必ずよろよろとなるものだ。その時更に再び別の一箇に易へて前の如

く繰返す。それで毒が散ずるものだ。屢〻實驗して效果を擧げた。もし病勢重き場合には、活きた蟾一箇、或は二三箇を破り開き、肚(はら)のついたまま熱に乘じて瘡上に合せる。久しからずして猛烈な臭氣が生ずるが、更に二三回試みれば癒える。微賤なものとして輕視してはならぬ。（醫林集要）【腫毒の初期】大蝦蟇一箇を剉碎し、炒つた石灰と共に泥のやうに研つて傅け、頻りに易へる。（余居士方）【破傷風病】蟾二兩半を切剉して泥のやうにし、花椒一兩を酒と共に炒熟したものを入れ、再び酒二盞半を入れて溫熱して服す。少頃して全身に汗が出て神效がある。【狂犬の咬傷】肘後方では、猘犬傷(せいけんしやう)で七日每に一回發作するを治す。生で蝦蟇膾を食ふ。甚だ良し、また燒炙して食ふもよし。本人に知らしめてはならぬ。自後再發の虞がない。袖珍では、風犬傷を治するに、蝦蟇の後足を搗爛らし、水で調へて服す。服するに先立つて頂心から血髮二三本を拔き去る。それで排尿中に沫(あわ)が雜つて出るものだ。【腸頭の挺出】蟾蜍皮一片を瓶に入れて烟に燒き、燻じ幷に傅ける。（孫眞人）【佩びて瘧疾を禳(はら)ふ】五月五日に大蝦蟇を取つて晒乾し、紙で封じて絳囊(かうなう)に入れて貯へ、本人にそれと知らしめずに、男は左、女は右の臂上に繫ける。（楊氏家藏方）【折傷接骨】大蝦

墓を生で泥のやうに研り、竹を劈いてその骨を裹んで縛る。自ら痊える。（奚囊備急方）

【大腸痔疾】蟾蜍一箇を磚砌で四方を圍つて中に入れて泥で固め、火で煆いて性を存して末にし、猪の大腸一截を兩端を括つて煮熟し、それを切碎いて前の末を蘸けて食ふ。同樣に三四回試みれば、痔は自ら落ちる。

頭　|主　治|　【功は蟾蜍に同じ】

蟾酥の採取、修治法　宗奭曰く、眉間の白汁を蟾酥といふ。油單紙で眉を裹んで裂くと酥が紙上に出る。それを陰乾して用ゐる。

時珍曰く、蟾酥を取る方法は一定したものでない。或は手で眉稜を捏して白汁を油紙上に取り、また桑葉上に取つて光線の入らぬ場所に挿んで置けば一夜にして自ら乾く。或は竹筒の中に盛つて置く。眞なるものは輕浮にして口に入れれば味の甜いものだ。或は蒜、及び胡椒等の辣い物を口中に納れると蟾の身から白汁を出す。それを竹篦で刮り下し、麪で和して塊にして乾す。その汁を目に入れてはならぬ。赤腫し、盲せしめるものである。或は紫草汁で洗ひ黙ければ消する。

|氣　味|　【甘く辛し、溫にして毒あり】　|主　治|　【小兒の疳疾、腦疳】甄權

（五）大觀ニ紙字下ニ子蘸乾蟾酥ノ五字アリ、此五字アリテ意義始メテ通ズルヲ覺ユ。

曰く、端午の日に眉脂を取り、硃砂、麝香で麻子大の丸にし、小孩子の疳瘦を治するには、空心に一丸を服す。腦疳の場合には乳汁で調へて鼻中に滴す。甚だ妙である。【酥を牛酥、或は呉茱萸苗汁と共に調へ、腰眼、陰囊に摩れば腰、腎冷を治し、幷に陽氣を助ける。又、蟲牙を療ず】（日華）【齒縫の出血、及び牙疼を治す。紙絍で少量を按ずれば立ろに止む】（宗奭）【發背、疔腦、一切の惡腫】（時珍）

附方　新九。【疔黄の拔取】蟾酥を麪で梧子大の丸にし、一丸づつを舌下に置く。黄が出るものだ。（青囊雜纂）【疔毒の拔取】蟾酥を白麪、黄丹で搜し、毎丸麥粒大の劑とし、指で瘡上を爬動して挿入し、重きものは挑げ破つて納れてから水澄膏を貼る。（危氏方）【疔瘡惡腫】蟾酥一錢、巴豆四箇を搗き爛し、飯で綠豆大の丸錠子とし、一丸づつを薑湯で服し、良久して萹蓄根、黄荊子を酒に研つて半椀を服し、四五次通じをつけ、粥で補ふ。（乾坤祕韞）【諸瘡の硬腫】針頭散――蟾酥、麝香各一錢を研勻し、乳汁で調ひ和して罐に入れ、乾くを待つて、少量づつを津で調へて傅け、外部から膏を貼つて護住する。毒氣が自から出て害とならぬものだ。（保命集）【一切の瘡毒】蟾酥一錢、白麪二錢、硃砂少量を井華水で調へて麥粒ほどの小錠子

とし、一錠づつを井華水で服す。瘡勢緊急なるときは、五七錠を葱湯で服するもよし。汗が出て癒える。【喉痺乳蛾】それ等の證には、癩蝦蟇の眉酥に草烏尖末、猪牙皂角末等分を和して小豆大の丸にし、一丸づつを研つて患部に點ける。神效がある。(活人心統)【一切の齒痛】疳蝕、齲齒、瘀腫には、蚵蚾一箇を用ゐ、その頭、背を鞭ち、その眉間から出る汁を竹篦で刮り取つて少量を點ければ直ちに止む。(類編)【風蟲牙痛】忍び難きには、聖惠では、蟾酥一片を水に浸して軟にし、麝香少量を入れて研勻し、粟米粒ほどを綿に裹んで咬みしめ、涎を吐すれば癒える。ある方では、胡椒を麝香に代へる。ある方では、蟾酥を絲線上に染まして一分に剪り、齒縫根の裏に紝入し、熱物を忌み避ける。半日にして效がある。乾いたものは熱湯で化開して用ゐる。【破傷風病】蟾酥二錢を湯に溶かして糊にし、乾蠍を酒で炒り、天麻と各半兩を末にし、合せ搗いて綠豆大の丸にし、一丸乃至二丸づつを豆淋酒で服す。(聖惠方)

(一)矢野曰ク、蝦蟇ハひきかへる中ノ大形種ヲ云フ歟。

蝦(一)蟇（本經下品）

和名　ひきかへる？
學名　Bufo sp.?

〔釋名〕 **蟼蟇** 蟼は驚（ケイ）と發音し、又、加（カ）と發音する。時珍曰く、按ずるに、王荊公の字說に『蝦蟇は土に懷くもので、取つて遠い場所に置くと一夜にして舊處に還る。或は遐かに距つた場所に置いても常に舊處を慕つて返るものだ。故に蝦蟇と名ける』とある。或は蝦蟆と書く、蝦とはその聲をいひ、蟆とはその斑をいつたものだ。爾雅には蟼蟇と書いてある。



〔蝦蟇〕

〔集解〕 藏器曰く、別錄に『蝦蟇、一名蟾蜍』とあるは誤で、蝦蟇、蟾蜍の二物はそれぞれ別種のものだ、陶氏が蟾蜍の說明を蝦蟇に移して註したところから、遂に混亂して區別を失ひ、現に藥物を取扱ふ者もやはり蟾蜍を蝦蟇に當ててゐるや

うになつたのである。蝦蟇は、陂澤中にゐるもので、背に黒點があり、身が小さく、よく跳ねて諸蟲を舌で吸ひ込み、呷呷と鳴聲を出し、舉動の極めて急なるものだ。蟾蜍は、人家の濕處にゐるもので、身が大きく、青黑色で點がなく、痱癗が多く、跳ねることも聲を出すことも知らず、行動の遲緩なものだ。又、鼃蛤、螻蟈、長肱、石撈、蠼子などいふ種類のものもあつて、或は水田中、或は溝渠の側にゐるが、格別の功果は認められてない。周禮に、蟈氏は鼃黽を去ることを掌る。牡菊を焚いて灰にし、それを洒げば死ぬとある。牡菊とは花の無い菊のことだ。

頌曰く、蝦蟇には多くの種類がある。誤用してはならない。黒虎といふは、身は小さくして黒く、嘴、脚に小斑がある。蚼黄といふは、前脚が大きく、後腿が小さく、色が斑で一條の尾子がある。黄蝹といふは、全身が黄色で腹下に長さ五七分の臍帶があり、停立してゐるとその帶下から自然汁が出てゐる。螻蟈といふは、夜鳴くもので、腰が細く、口が大きく、皮が蒼黑色のものだ。蟾といふは、黄斑があり、頭上に肉角がある。此にいふ蝦蟇は、皮上、腹下に斑點があり、脚は短く、鳴き叫ばぬもののことである。

○○時珍曰く、蝦蟇は、また能く鶉に變化するといふことが淮南子に出てゐる。蝦蟇、青鼃は、蛇を畏れるが蜈蚣を制す。この三者が同時に値ふと、そのいづれの者も動けなくなるものだ。故に關尹子に『(二)蝍蛆は蛇を食ひ、蛇は鼃を食ひ、鼃は蝍蛆を食ふ』とある。或は、月令に『螻蟈鳴き、反舌して聲なし』とあるも皆蝦蟇のことだといふ。

○○吳瑞曰く、長肱は石雞である。一名錦襖子といふ。六七月に山谷の間にゐる。性、味は水雞に同じ。

[修治] ○斅曰く、凡そ蝦蟇を使用するには、先づ皮、幷に腸、及び爪子を去つて陰乾し、毎箇に眞牛酥一分を塗つて炙り乾す。黑虎を使用する場合には、頭、尾、皮、爪の付いたままいづれも陰乾し、酒に三日間浸して漉出し、焙じて用ゐる。

[氣味] 【辛し、寒にして毒あり】 ○○大明曰く、溫にして毒なし。[主治] 【邪氣。癥の堅血を破る。癰腫、陰瘡。服すれば熱病を患はぬ】(本經) 【百邪、鬼魅に主效がある。癰腫、及び熱結腫に塗る】(藥性) 【熱狂を治し、惡瘡に貼り、煩熱を解し、犬咬を治す】(日華)

(二)白井曰ク、蝍蛆ハむかで(蜈蚣)ノ別名ナリ。

【發明】頌曰く、蝦蟇、蟾蜍の二物は、同一類ではあるが功用にやや差別がある。やはり區別して使用すべきものだ。

時珍曰く、古方には、多くは蝦蟇を用うとあり、近世の方には、多くは蟾蜍を用うとあるが、蓋し古代にあつては蟾をも通じて蝦蟇といつたのだ。今この二物を攷察するに、功用はやはり甚しい懸隔はないのであつて、古代に用ゐたそのものは多くは蟾蜍であつた。且つ今一般にもやはりただ蟾蜍を用ゐて奏效してゐるが、蝦蟇をば一向に藥に入れない。按ずるに、張杲醫說に『摭青襍說に「ある脚瘡の患者があつて、冬期には全然忘れたやうに何事もないが、夏期には臭爛して言ふべからざる痛があつた。たまたまある道人が、其方の疾は、草原の中を步行した際、蛇の交尾中の遺瀝がかかつて起つたもので、瘡中に蛇の兒がゐるために冬伏して夏出るのだといつて、生の蝦蟇を搗いて傅けさせ、一日に三回換へさせた。すると凡そ三日の後、瘡中から一條の小さい蛇が出て來たので、鐵鉗でそれを取り出した。病は遂に癒えた」とある』と記載してある。

朱震亨曰く、蝦蟇は土と水とに屬し、味は甘く、性は寒である。南方地方では喜

んでこれを食ふ。本草に『服すれば熱病を患はぬ』とあるところから、病人がやはり煮て食ふが、本草の意味は、或は炙き、或は乾し、或は焼いて薬に入れて用ゐることであつて、世間の人人が、羹に煮て椒、鹽を入れてその湯を啜るやうな方法をいつたのではない。この物は本來濕に因つて化生したもので、大いに能く濕を發し、久しきに亙れば濕が熱に變化するものだ。これは土氣厚くして自然に火を生ずるのである。

【附方】 舊三、新三。【風熱邪病】蝦蟇を灰に焼いて硃砂と等分を末にし、一日三回、一錢づつを酒で服す。甚だ神験がある。(外臺祕要)【狂言、鬼語】卒死するには、蝦蟇を焼いて末にし、一日三回、酒で方寸匕を服す。(外臺祕要)【噎膈吐食】蛇に呑まれた蝦蟇を泥で包んで煆いて性を存し、研末して一錢づつを酒で服す。(壽域方)【瘰癧の潰爛せるもの】黒色の蝦蟇一箇を腸を去つて焙じ研り、油で調へて傅ける。鐵器を忌む。【頭上の軟癤】蝦蟇の皮を剝いで貼る。毒を收めて癒える。(活幼全書)【蝮蛇の螫傷】生蝦蟇一箇を搗き爛して傅ける。(外臺)

肝 【主治】【蛇に螫されて牙が肉中に残り、痛み堪へ難きには、これを搗い

て傅ければ立ろに出る】(時珍) 記載は肘後にある。

膽　[主治]　【小兒の失音不語には、汁を取つて舌上に點ければ立ろに癒える】(時珍) 記載は孫氏集效方にある。

腦　[主治]　【靑盲。目を明にする】(別錄)

(一)鼃　(別錄下品)　和名未詳　學名未詳

[釋名]　**長股**(別錄)　**田雞**(綱目)　**靑雞**(同上)　**坐魚**(同上)　**蛤魚**　宗奭曰く、鼃は後脚が長いので善く躍る。その鳴聲の高いときは鼃と聞え、小さいときは蛤と聞える。

時珍曰く、鼃は好く鳴き、その聲が自らその名を呼ぶやうに聞える。南方地方では、これを田雞と呼ぶ。食ふと肉の味が雞のやうだといふ。又、坐魚と呼ぶは、その性坐することを好むからだ。按ずるに、爾雅には、蟾、鼃倶に魚類に列し、東方朔傳には『(二)長安には川に蛙魚が多い。これを捕獲するので人民各家の生活に窮乏

(一) 矢野曰ク、啓蒙ニハあをかへる一名あしながかへるヲ充ツ。今ノとのさまかへる Rana nigromaculata ナリ、此種支那ニモ產ス或ハ本種歟。

(二) 長安ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。

しない』とある。これで見ると、往古の時代には(三)關中でも常にこれを魚同様に食つたものだ。南方人に限つたことはない。鼃の字は蛙にも書く。

集解

別錄に曰く、鼃は水中に生ずる。採取に一定の時期はない。弘景曰く、凡そ蜂、蟻、鼃、蟬などにはその種類がなかなか多い。大きくして脊の青いものを俗に土鴨と呼ぶ。鳴聲の甚だ壯なものだ。黑色の一種をば南方人は蛤子と呼ぶ。食ふと至つて美味なものだ。形體の小さい善く鳴く一種をば鼃子と名ける。此にいふそのものだ。

保昇曰く、鼃は蝦蟇の屬だ。陸地にゐて脊の青いもので、蛙といふ鳴聲を出すもののことである。

頌曰く、今は處處にゐる。蝦蟇に似た背の青綠色のもので、嘴が尖つて腹が細い。俗に靑蛙といふ。また背に黃色の條のあるものもある。それは金線鼃といふものだ。陶氏の所謂『土鴨』は、爾雅に所謂『水に在るを鼁といふ』とあるそのもので、俗に石鴨と呼ぶ。所謂蛤子とは今の水雞のことである。(四)閩、蜀、浙東地方ではこれを上等の料理に用ゐる。



〔鼃〕

(三)關中ハ蜂蜜ノ註ヲ見ヨ。

(四)閩ハ福建省地方、蜀ハ四川省地方、浙東ハ浙江省地方。

時珍曰く、田雞、水雞、土鴨は、形體と名稱とに差異はあるが、功用の點では同一であつて、四月にこれを食ふが最も美味だ。五月、漸く老いてから採つて藥に入れる。考工記に『脰を以て鳴く者は鼃黽の屬なり』とある。農家ではその聲の早晩、大小に因つてその年の豐凶を占ふところから、唐の人章孝標の詩に『田家に五行なし、水旱を蛙聲に卜ふ』とある。蛙もまた能く鴽に變化するといふことが列子にある。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】宗奭曰く、平なり。時珍曰く、按ずるに、延壽書に『蛙骨は熱なり。これを食へば小便に淋に苦む。妊娠の婦人が蛙を食へば生兒の壽命を短くする。小蛙を多く食へば尿閉を起して臍下が酸痛し、死に至ることがある。車前を水に擂つて飲めば解し得るものだ』とある。吳瑞曰く、正月出るものを黃蛤と名ける。食つてはならない。

【主治】【小兒の赤氣、肌瘡、臍傷。止痛。氣不足】(別錄)【小兒の熱瘡。尸疰病の蟲を殺し、勞劣を去り、熱毒を解す】(日華)【これを食へば勞熱を解す】(宗奭)【水を利し、腫を消す。灰に燒いて月蝕瘡に塗る】(時珍)【料理して食へば、疳瘦を

調へ、虚損を補す。就中産婦に宜し。搗汁を服すれば、蝦蟇瘟病を治す】（嘉謨）

［發明］ 頌曰く、南方地方では鼃蛤を食ふ。虚損を補し、就中産婦に宜いといふことだ。

時珍曰く、鼃は水に産し、螺、蚌と性が同じものだから、能く熱毒を解し、水氣を利するのだが、但し濕化の物だけに、その骨の性はまた熱である。而るに現に世間でこれを食ふものを見るに、いづれも辛辣なもの、及び脂油と共に煎煮して食ふことにしてゐる。これは薪を抱いて火を救はんとするものだ。健康なり疾病なりに益するところが何處に在らう。按ずるに、戴原禮の證治要訣に『凡そ全身の水腫、或は單なる腹脹には、青鼃一二箇を皮を去り、炙つて食へば自ら消く』とある。

嘉謨曰く、顔面赤く、項の腫れる天行病を蝦蟇瘟と名ける。金線鼃を搗いてその汁を水で調へ、空腹に頓服すれば極めて效がある。嘗て數人を活した實驗がある。

［附方］ 新六。【蛤饌】水腫を治す。活きた蛙三箇を用ゐ、各箇に口に銅錢一箇を入れ、上に胡黄連末少量を著け、雄猪肚一箇を茶油で洗淨してその蛙を包んで括り、一夜煮て取出して皮、腸を去り、その肉、幷に猪肚を食つて酒で送下する。酸、

鹹のもの、魚、麪、雞、鵞、羊の肉を忌む。猪、鴨を食ふがよし。(壽域神方)【水蠱腹大】動搖すれば水聲があり、皮膚の黑色なるには、乾青蛙二箇を酥で炒乾し、螻蛄七箇を炒り、苦壺蘆半兩を炒り、右を末にして空心に二錢づつを溫酒で服す。三服を過してはならぬ。(聖惠方)【口禁する毒痢】水蛙一箇を腸肚と共に搗き碎き、瓦で烘き熱して麝香五分を入れ、餅にして臍上に貼る。氣が通ずれば能く食慾が進む。【諸痔疼痛】青蛙丸——青色蛙の長脚のもの一箇を燒いて性を存して末にし、雪糕で和して梧子大の丸にし、空心に先づ飯二匙を喫してから、次に十五丸づつを枳殼湯で服す。(直指方)【肛門の蟲蝕】腎臟を蟲が蝕し、肛全部を蝕し盡し、腸を穿つには、青蛙一箇、雞骨一分を灰に燒いて吹き入る。數〻用ゐて大效があつた。(外臺)【眼の如き瘑瘡】上が高く、下が深く、顆顆壘垂し、盲者の眼のやうでその中が青を帶び、各顆の頭上に一枚づつの舌を露出し、毒孔が內部に透つてゐるものである。生の井蛙の皮を燒いて性を存して末にし、蜜水で調へて傅ける。(直指方)

蝌斗（拾遺）

和名　おたまじやくし
英名　Tadpoles.

【釋名】**活師**（山海經）　**活東**（爾雅）　**玄魚**（古今注）　**懸針**（同上）　**水仙子**（俗名）　**蝦蟇臺**

時珍曰く、蝌斗は、一に蛞斗と書く。蛞は闊（クワツ）と發音する。按ずるに、羅願の爾雅翼に『その狀態は魚のやう、その尾は針のやうだ。又、その頭と尾とを併せて觀ると斗の形に似たやうでもある』とある。故に右の諸名がある。

玄魚とはその色をいつたもの、懸針とはその尾の狀態の形容だ。



〔蝌斗〕

【集解】藏器曰く、活師、卽ち蝦蟇の兒である。水中に生ずるもので、鮧魚のやうな尾があり、漸次に成長すると脚が生え、尾が脫ちる。

時珍曰く、蝌斗は水中に生ずる蝦蟇、靑鼃の子であつて、二三月頃、鼃や蟇が水際の草上に腸を曳き出し、

それが晒木綿を綯ひ纏へたやうに見え、日を經るに隨つて黑點が現はれる。かくて春水の節になつて騷がしく鳴くとき、それが皆蝌斗となつて出るのである。これを聒子といふ。所謂『蝦蟇は聲で抱く』といふは、その產する時の有樣のことだ。蝌斗の形狀は河豚のやうで頭が圓く、身體の表面は靑黑色だ。始めて出たばかりには尾があつて足はないが、やや成長すると足が生えて尾が脫ちる。崔豹は『雷を聞くと尾が脫ちるのだ』といつたが、必ずしもさうではない。陸農師は『月の大が盡きたとき先づ前の兩足が生じ、小が盡きたとき後の兩足が生ずる』ともいつてある。

主治　【火飆熱瘡、及び疥瘡には、いづれも搗き碎いて傅ける。又、髭髮を染めるには、靑胡桃子の上皮と搗き和して泥にして染める。一回で染つて變色せぬ】（藏器）

發明　時珍曰く、俚俗に、三月三日にいづれも小蝌斗を取つて水で呑み、それで瘡が生ぜぬといつてゐる。やはり解毒、治瘡の關係である。按ずるに、危氏得效方に、髭髮を染めるには、蝌斗、黑桑椹各半斤を用ゐ、瓶に密封して屋根の東隅に懸け、百日經過して泥に化したとき、それを取つて鬚髮に塗る。永く漆のやうに

黒くなるとある。又、岣嶁神書には『三月三日に蝌斗一合を取つて陰乾し、椹の熟する時を候つて汁一升を取つて浸し、東側の壁下に百日間埋め、取出して見て漆のやうな色になつたとき、それを髭髮に塗ると永く白くならぬ』とある。

卵　【主治】【目を明にする】（藏器）

溪狗（拾遺）

和名未詳
學名未詳

【集解】藏器曰く、溪狗は南方の地の溪澗中に生ずる。形狀は蝦蟇に似て尾の長さ三四寸あるものだ。

【氣味】【小毒あり】【主治】【溪毒、及び遊蠱には、燒いて末にし、一二錢匕を水で服す】（藏器）

山蛤（宋圖經）

和名　あかがへる
學名　Rana sp.

校正　もとは蝦蟇の條下に附錄されてあつたが、本書では一條を分けて記載した。



〔山蛤〕

集解　頌曰く、山蛤は山石中に蟄して棲息するもので、蝦蟇に似て大きく、色の黄なるものだ。能く氣を呑み、風露を飲むもので、襍蟲類をば食はない。山間の住民はやはりこれを食ふ。

主治　【小兒の勞瘦、及び疳疾に最も良し】（蘇頌）

(一)田父（宋圖經）

和名未詳
學名未詳

校正　もとは蝦蟇の條下に附錄されてあつたが、本書では一

(一)矢野曰ク、蛙ノ類、ひきかへるノ大形種ナラン乎。

条を分けて記載した。

【釋名】 蝓　論(ロン)と發音する。

【集解】 頌曰く、按ずるに、洽聞記に『蝦蟇の大なるものを田父といふ。能く蛇を食ふものだ。蛇がこれに逐はれると殆ど逃げやうがなくなる。するとその蛇の尾を嚙む。その蛇はそれで久して死んで了ふ。その尾は數寸ほどの間は少しも皮が壞れないが、內部の肉は已に全く無くなつてゐる』とある。蛇が毒を噉ふことは世間に言傳へてあるが、これは蛇を食ふといふのである。頗る怪しい說だが、別にかかる一種もあると見える。

時珍曰く、按ずるに、文字集略に『蝓とは蝦蟇のことで、大なるは屨ほどあり、蛇を食ふ』とあつて、これが卽ち田父である。考へて見るに、蛇は鼠を呑むものだが、蛇を食ふ鼠もある。蛇は豹を制するものだが、蛇を噉ふ貘もある。して見ると、田父が蛇を伏するといふも、やはりこれ等の類の事實なのだ。怪しいことはない。

【主治】 【蠼螋には、脊背上の白汁を取り、蛾子灰を和して塗る】(蘇頌)記載は

草宙の獨行方にある。

蜈蚣（一）（本經下品）

和名　むかで
學名　Scolopendra sp. and others.

〔釋名〕　螏蟍（爾雅）　蝍蛆（爾雅）　天龍　弘景曰く、莊子に『蝍蛆帶を甘んず』とあり、淮南子に『螣蛇霧に遊んで蝍蛆に殆し』とある蝍蛆とは蜈蚣のことだ。性能く蛇を制するもので、大蛇を見るとそれに上つてその腦を噉ふ。

恭曰く、山東地方では、蜘蛛を一名蝍蛆と呼び、やはり能く蛇を制するものだといふ。しかし、蜘蛛の條に蛇を制するの說はない。莊子、淮南にいふものは、いづれも蜈蚣をいつたのだ。

頌曰く、按ずるに、爾雅に『螏蟍は蝍蛆なり』とあり、郭註に『蝗に似て腹太く、（二）角あり。能く蛇腦を食ふ』とあるが、それは別の一種の物らしい。

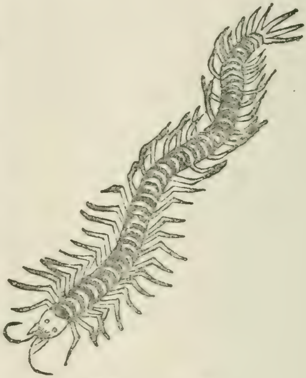
時珍曰く、按ずるに、張揖の廣雅、及び淮南子註には、いづれも蝍蛆を蜈蚣としてあつて、郭璞の說と異ふ。許愼は蝍蛆を蟋蟀とし、能く蛇を制すといひ、又、蝍蛆

（一）矢野曰ク、多足綱・唇口目（Chilopoda）ニ屬スルモノ、普通ナルむかでハScolopendra ニシテ、藥用ニハ此屬ノモノヲ用ウルガ如シ。

（二）爾雅、大觀に、角字上ニ長字アリ。

を馬蚿(はげん)としてあるが、それは馬蚿に蛆蟝(しよきよ)なる名があるためで、いづれも誤だ。頭、足の赤きものが良し。

集解 別錄に曰く、蜈蚣は(三)大呉の川谷、及び江南に生ずる。頭、足の赤きものが良し。



蜈蚣

弘景曰く、今は足の赤色のものは京口、(四)長山、高麗山、茅山(ばうざん)に多く出る。積草の腐爛した場所で取れるもので、取つたならば各部分を損傷せぬやうにして暴乾する。足の黃色のものは甚だ多いが用ゐるに堪へない。世間には火で炙つて赤くしたものもあるが眞物でない。蜈蚣に嚙まれたときは、桑汁、白鹽を塗れば癒える。

(五)蜀圖に曰く、(六)山南の川谷に生じ、また(七)襄、鄧(とう)、隨、(八)唐等の諸州に出る。土石の間、人家の屋壁中にやはりゐるもので、形は馬陸に似て身が扁(へん)たくして長い。頭が黑く、足の赤いものが良し。七八月に採取する。

(三)大呉トハ古ノ呉國ノ地、卽チ今ノ江蘇、浙江地方ヲ指スナルベシ。
(四)長山、今ノ縣名、山東省濟南道ニ屬ス。漢ノ於陵縣、隋ニ長山縣ニ改ム。又、奉天省錦縣ニ長山ナル山アリ。高麗山、高麗ニ在ル山ノ謂カ。ソノ山未詳。高麗ハ金部金ノ註參照。茅山ハ石部石膽ノ註。京口ハ草部毒草類甘遂ノ註ヲ見ヨ。
(五)蜀圖ハ蜀本草圖經ノ略。
(六)山南ハ唐十道ノ一、草部隰草類漏盧ノ註參照。
(七)襄州ハ石部理石ノ註。鄧州草部隰草類菊ノ註。隨州ハ山

宗奭曰く、蜈蚣は背が黒く光る緑色で、足が赤く、腹が黄である。その毒螫を受けたときは、烏雞屎、或は大蒜を塗れば效がある。その性蛞蝓を畏れるもので、蛞蝓の通つた跡は決して通らない。その身に觸れば直に死ぬ。故に蛞蝓は能く蜈蚣の毒を治するのだ。

時珍曰く、蜈蚣は西南方の處處にゐる。春出て冬蟄し、節節に足があり、鬚が二本で尾に岐があり、性蜘蛛を畏れるもので、その尿を放射されると直ちに斷爛するものだ。南方には極めて大なるものがゐる。本草にはその記載が漏れてゐるが、按ずるに、段成式の酉陽雜俎には『(九)綏定縣に出る蜈蚣の大なるものは、能く氣を以て蛇、及び蜴蜥を吸ひ、三四尺隔つてゐてもその骨肉が自ら消える』とある。沈懷遠の南越志には『南方の(一〇)晉安のある山に、長さ一丈餘の大蜈蚣が出て能く牛を啖ふ。その土地の者は炬火を燃いてそれを捕獲し、皮をば鼓に鞔り、肉をば曝して脯にするが、牛肉よりも美味だ』とある。葛洪の遐觀賦には『南方の蜈蚣の大なるものは長さ百歩あつて、頭は車箱ほどあり、肉は瓠のやうに白い。(一一)越地方の人民はこれを競つて買ひ求め、羹にし、又は炙つて料理する』とある。張耒の明道雜

草類丹參ノ註ヲ見ヨ。

(八)唐州ハ今ノ河南省泌源縣ノ地ナリ。唐ニ唐州ヲ置キ、明ニ縣トナシ、清コレニ因ル。

(九)綏定縣ハ南朝宋、齊ニ廣州宋康郡ニ屬ス。李氏地理釋ニ據レバ、廣東省肇慶府ノ境ニ在リシナラントイフ。未考。今四川省ニ綏定縣アレドモ段氏ノ指ス所ニアラズ。

(一〇)晉安ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(一一)越トハ閩越、即チ今ノ福建、廣東地方ヲ指シタルナルベシ。

（二二）黄州ハ隋ニ置ク、今ノ湖北省黄岡縣ソノ舊治ナリ。
（二三）岐亭ハ當時黄州麻城縣下ノ一部落ナリ。太平寰宇記ニ『岐亭河在縣西北八十里唐武德三年于縣置亭州取此爲名』トアリ。拘羅山所在未詳。
（二四）嶠南、嶺南トイフニ同ジ。

志には『（二二）黄州の（二三）岐亭に拘羅山といふ山があつて、その山に袤たところ一丈ほどの大蜈蚣が出る。土地の者はそれを捕獲して燻し乾し、商人が北方地方へ賣り出して大いに利益を得てゐる』とある。蔡絛の叢話には『（二四）嶠南の蜈蚣の大なるものは二三尺あり、螫されると死に至る。しかし、ただ托胎蟲を見ると巻き縮まつて少しも歩かない。するとその蟲が蜈蚣の首に登つて腦を取つて食ふ。故に蜈蚣傷を受けたときは、この蟲を搗いて塗れば立ろに痛が止まる』とある。時珍按ずるに、托胎蟲とは蛞蝓のことだ。蜈蚣は能く龍、蛇、蜴蜥を制して蝦蟇、蛞蝓、蜘蛛を畏れる。やはり莊子の所謂『物その天を畏る』陰符經の所謂『之を禽して制するは氣に在り』の事實である。

【修治】斆曰く、凡そこれを使用するには、千足蟲を用ゐてはならぬ。眞によく似てゐるが、ただその蟲は、頭上に白肉があり、面が赤く、嘴が尖つたものだ。若しそれを誤用し、またはそれに觸れると、腥臭の氣が頂に入つてよく死に至ることがある。凡そ蜈蚣を修治するには、先づ蜈蚣木末、或は柳蛀末と共に土器中で炒り、木末が黑く焦げたとき木末を去り、竹刀で足、甲を刮り去つて用ゐる。

時珍曰く、蜈蚣木とは如何なる木を指すか不明である。今一般には、ただ火で炙つて頭、足を去つて用ゐ、或は尾、足を去り、薄荷葉で包んで火で煨いて用ゐる。

【氣味】【辛し、溫にして毒あり】 時珍曰く、蛞蝓、蜘蛛、雞屎、桑皮、白鹽を畏る。

【主治】【鬼疰、蠱毒。諸蛇、蟲、魚の毒を噉ひ、鬼物、老精を殺す。溫瘧。三蟲を去る】（本經）【心腹の寒熱積聚を療じ、胎を墮し、惡血を去る】（別錄）【癥癖を治す】（日華）【小兒の驚癇、風搐、臍風口噤、丹毒、禿瘡、瘰癧、便毒、痔漏、蛇瘕、蛇瘴、蛇傷】（時珍）

【發明】 頌曰く、本經に『鬼疰を療ず』とある。故に胡洽の方の尸疰、惡氣、痰嗽を治する諸方に多く用ゐてある。今醫家では、小兒の口噤して開かず、授乳し得ざるものを治するに、（二五）東に走る蜈蚣を足を去つて炙き研り、猪乳二合で半錢を調へて三四服に分けて溫めて灌ぐ。有效だ。

時珍曰く、蓋し行て疾きものはただ風と蛇とであつて、蜈蚣は能く蛇を制するものだから、やはり能く風を截る。蓋し厥陰の經の藥である。故に主たる諸種の對症は、

（二五）東走蜈蚣、大觀ニ赤足蜈蚣ニ作ル。

多くは厥陰に屬するのだ。按ずるに、楊士瀛の直指方に『蜈蚣は有毒であつて、ただ暴烈なる風氣のみがこれに當つべきものである。風氣の暴烈なるものは、蜈蚣の能く截り能く擒にする力を用ゐる以外では容易に止まない。但し藥と病と正確に對應することが最も重要な點である。もし用劑が過ぎた場合には、蚯蚓、桑皮を用ゐれば解す』とあり、又『瘭瘡、一名蛇瘴といふ。蠻烟瘴雨の地方には毒蛇の氣が多く、その地の水、土、風氣に十分抵抗し得ずしてその氣に感觸した人は、數月のうちに必ず蛇瘴を發するのであるが、ただ。赤足の蜈蚣が最も能く蛇を伏するもので、上藥だ。白芷がこれに次ぐ』とある。又、聖濟總錄には『嶺南の(二六)朴蛇瘴、一名鎖喉瘴は、項が大いに腫れて喉に連つて痛むものだ。赤足蜈蚣の一二節を研細して水で服すれば癒える』とある。これに據れば、蜈蚣の蛇蠱、蛇毒、蛇瘕、蛇傷の諸病を治するは、いづれも前述の關係に因るものであつて、然して又、蜈蚣の痔漏、便毒、丹毒等の病を治することが竝に陸羽の茶經に記載してあり、枕中方に瘰癧を治する一法のあるところから見れば、蜈蚣の本來は、風を除き毒を攻むる功能のあるもので、獨り蛇毒を治するに限つたものではない。

(二六)朴字、本草經疏ニ外ニ作リ、本草逢原ニ有ニ作ル。

（一七）陰陽乳汁ハ蓋シ冷熱中間、卽微溫ノ乳汁ノコトナルベシ水部ニ陰陽水アリ參考スベシ。

附方　舊五、新十三。【小兒の撮口】但し舌上を看て、粟米大の瘡のあるもののことである。蜈蚣汁を用ゐ、指甲で刮破して研り、兩頭肉に傅ける。直に癒える。生のもののないときは乾いたものを用ゐてもよし。（子母祕錄）【小兒の急驚】萬金散——蜈蚣の完全なもの一條を、足を去つて炙いて末にし、丹砂、輕粉等分と研り勻ぜ、（一七）陰陽乳汁で和して菉豆大の丸にし、一歲に對し一丸の割合で乳汁で服す。（聖惠）【天弔驚風】目が上つて久しく下らず、眼に白睛が現れたもの、及び角弓反張して聲の出ぬものには、雙金散を主とする。大蜈蚣一條を、頭、足を去つて酥で炙り、竹刀で批開してその左、右を標記し、又、麝香一錢をやはり左右に分けて各標記し、研末して包みにし、各少量づつを、左邊のものをば左鼻に吹き、右邊のものをば右鼻に吹く。過多に用ゐてはならぬ。なほ眼が下らぬときは再び少量を吹く。眼が下つたならば止る。（直指）【破傷中風】死せんとするには、聖惠では、蜈蚣を研末して牙に擦り、涎沫を追ひ去る。立ろに瘥える。○儒門事親では、蜈蚣頭、烏頭尖、附子底、蠍梢等分を末にし、一字、或は半字づつを熱酒で灌ぎ、同時に瘡上に貼り、汗を取れば癒える。【口眼喎斜】口中の麻木するには、蜈蚣三條を用ゐ、一

條をば蜜で炙き、一條をば酒に浸し、一條をば紙で裹んで煨き、いづれも頭、足を去り、天南星一箇を四片に切つて、一片をば蜜で炙き、一片をば酒に浸し、一片をば紙で裹んで煨き、一片をば生で用ゐ、半夏、白芷各五錢と全部を末にして麝少量を入れ、一日一回、一錢づつを熱し調へて服す。(通變要法)【腹內の蛇癥】誤つて菜中の蛇精を食つて發つた蛇瘕、或は蛇肉を食つて發つた瘕で、腹中が常に饑ゑ、物を食へば直ちに吐くには、赤足蜈蚣一條を炙き、研末して酒で服す。(衛生易簡方)【蝮蛇の螫傷】蜈蚣を燒いて末にして傅ける。(一八)【射工の毒瘡】大蜈蚣一箇を炙いて研り、醋で和して傅ける。(千金方)【天蛇頭瘡】手指、頭上に生じたるには、蜈蚣一條を烟に燒き、一二回燻ずれば癒える。或は末にして猪膽汁で調へて塗る。(奇效)【丹毒腫瘤】蜈蚣一條、白礬を皂子一箇ほど、雷丸一箇、百部二錢を研末し、醋で調へて傅ける。(本草衍義)【瘰癧潰瘡】茶、蜈蚣の二味を香しく熟するまで炙き、搗き篩つて末にし、先づ甘草湯で洗淨してから傅ける。(枕中方)【膿の出る聤耳】蜈蚣末を吹く。(鮑氏)【小兒の禿瘡】大蜈蚣一條、鹽一分を油の中に七日間浸し、その油を搽るが極めて有效だ。(海上方)【便毒の初期】黃脚の蜈蚣一條を瓦で焙じて性を存して末

(一八)大觀ニ(抱朴子)ノ三字アリ。

にし、酒で調へて服し、汗を取れば散ずる。（濟生祕覽）【痔瘡疼痛】直指では、赤足蜈蚣を焙じて末にし、片腦少量を入れて唾液で調へて傅ける。孫氏集效では、蜈蚣三四條を香油で煮て一二沸して浸し、再び五倍子末二三錢を入れて缾に收めて密封し、痛み忍び難き場合に、瘡上にその油を點ける。卽時に痛が止むで大いに效がある。【腹大で箕ほどになつたもの】蜈蚣三五條を酒で炙いて研末し、一錢づつを雞子二箇を打ち破つた中に入れて攪き勻ぜ、（一九）紙糊沸湯で煮熟して食ふ。一日一服、三服連進すれば瘻える。（活人心統）【脚、肚の轉筋】蜈蚣を燒いて猪脂で和して傅ける。（肘後方）【婦人の趾瘡】甲の內部に惡肉が突出して癒えぬには、蜈蚣一條を焙じ研つて傅け、外部から南星末を醋で和して四圍に傅ける。（醫方摘要）

（一）馬陸（本經下品）

和名　やすで
學名　Species of Julus, Polydesmus, Fontaria and others.

【釋名】

百足（本經）　百節（衍義）　千足（炮炙論）　馬蚿　弦（ゲン）と發音する。馬蠸　拳（ケン）と發音する。馬蠲（郭璞）　馬軸（別錄）　馬䗃（爾雅）　飛蚿蟲（李當

（一九）紙糊沸湯、藥罐ノ蓋ヲ紙糊ニテ密閉スルヲ云フカ。

（一）矢野曰ク、多足綱倍足目（Diplopoda）ニ屬スルモノ。

之） 刀環蟲（蘇恭） 蛩 弘景曰く、これは甚だ多い蟲で、寸寸に斷たれてもやはり寸斷されたまま歩行く。故に魯連子が『百足の蟲、死して僵れず』といひ、莊子が『蚿、蛇を憐む』といつたのはそのことだ。

|集解| 別錄に曰く、馬陸は（二）玄菟の川谷に生ずる。

弘景曰く、李當之は『この蟲は、長さ五六寸で形狀は大蛩のやうだ。夏期には樹に登つて鳴き、冬になれば蟄に入る。今は一般に飛蚿蟲と呼ぶ』といつてあるが、今ある一種は細黃蟲で、形狀は蜈蚣のやうで甚だ長い。俗に土蟲と名ける。雞が食へば醉悶して死に至るものだ。方家では一向用ゐないので、商人も持つてゐないから、何ものが正確にそのものなりや詳でない。



〔馬　　陸〕
——山蛩も同じ——

恭曰く、この蟲は、太さは細筆の管ほど、長さは三四寸、色は斑で蚰蜒のやうでもある。（三）襄陽地方では、その名を馬蚿といひ、また馬軸とも呼ぶ。又、刀環蟲と名けるは、側臥してその狀態が刀環のやうだからである。ある人は自殺の目的で一

（二）玄菟ハ漢ノ郡名、今ノ奉天省ノ東部、鴨緑江ノ上流、佟佳河ノ沿流、興京、懷仁等ノ各地、吉林省ノ南部、松花江上流ノ地、及ビ朝鮮咸鏡道ノ北半、平安道ノ北半ニ亘ル。

（三）襄陽ハ石部握雪礜石ノ註ヲ見ヨ。

箇を服し、それで死亡した。

○斅曰く、千足蟲は、頭上に白肉があり、面が赤く、嘴が尖つたものだ。それに觸れると、腥臭の氣が頂に入つてよく死に至ることがある。

○○宗奭曰く、百節は身は槎のやうで節節に細かく蹙んだ文があり、紫黑色の光潤が現はれてゐる。百足は死ぬと側臥して環のやうになり、長さ二三寸で太いものは小指ほどある。古い墻壁中に甚だ多いものだ。藥に入れることは至つて稀である。

○○時珍曰く、馬蚿は處處にある。形體は蚯蚓ほどの大いさで、紫黑色だ。その足の數は百もあらうかと思ふほどあつて、皮は極めて硬く、節節に金線のやうな横文があり、首も尾も同じ太さのものだ。觸れば直ちに側臥して環のやうに局縮する。必ずしも死んでさうなるといふのではない。能く雞、犬を毒するものだ。陶氏の所謂土蟲は(四)蛆蜒のことで、死ねばやはり側踡して環のやうになる。雞が喜んで食ふものだ。李當之の說のものが據るべきものである。

正誤　○○藏器曰く、按ずるに、土蟲は足がない。一條の衣帶のやうで長さ四五寸、身は扁く、韭葉に似たもので、背上に黃黑色の(五)襉があり、頭は(六)鏟のやうだ。

(四)蛆ハ蚰ノ誤ナリトノ說アリ。
(五)襉ハ裙幅ノ褶ナリ。「ヒダ」ヲ取ツタ「ヘリ」ノコトナリ。
(六)鏟ハ平木之器ヲ云フ。

通つた跡には白涎が付いてゐる。濕地に生ずるもので、雞がこれを喫へば死ぬ。陶氏の『土蟲は蜈蚣に似たり』といふそのものは、土蟲でも馬陸でもない。蚰蜒のことだ。蘇氏の『馬陸は蚰蜒のやうだ』といふも誤だ。按ずるに、蚰蜒は黄色で斑がなく、足の無數にあるものだ。

時珍曰く、按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『度古は俗に土蠱と呼ぶ。身の形は衣帶のやう、色は蚯蚓のやうで、長さは一尺餘あり、首は鏟のやうで背上に黄黑襴がある。やや觸れば直ちに斷れるものだ。常に蚯蚓を趁ふもので、蚓はこれに掩はれると化して水となる。毒があつて、雞がこれを食へば死ぬ』とある。この說に據れば、陳藏器の所謂土蟲は蓋し土蠱である。陶氏は誤つて蚰蜒を馬陸としたが、陳氏もやはり土蟲を土蠱と誤つてゐる。

【修治】雷曰く、凡そ馬陸を捕採したならば、糠頭で炒り、糠が黑く焦げたとき取出して糠を去り、竹刀で頭足を刮り去つて研末して用ゐる。

【氣味】【辛し、溫にして毒あり】【主治】【腹中大堅癥、積聚を破る。息肉、惡瘡、白禿】（本經）【寒熱、痞結、脇下滿を療ず】（別錄）【邪瘧を辟ける】（時珍）

【發明】時珍曰く、馬陸は神農の藥であつて、雷氏は備さに炮炙の方法を著錄してある。然るに古方には用ゐてあるものが鮮く、ただ聖惠の逐邪丸に用ゐてあるだけだ。その方は『久瘧の間歇的發作を治す。百節蟲四十九箇、濕生蟲四十九箇、砒霜三錢、粽子角七箇を用ゐ、五月五日の日出前に東南に面した土地から右の二種の蟲を捜し取り、正午に南に向つて研勻して小豆大の丸にし、發作の日の早朝に、男子は左、婦人は右の手に一丸づつを握つて嗅ぐ。七回試れば立ろに效がある。調劑の際は喪中の男子、婦人、尼僧、雞、犬に見られることを忌む』とあつて、やはり別錄の寒熱を療ずとある說に合致する。大體に於いて有毒の物だから、ただ外用に止むべきもので、輕輕しく丸、散藥中に入るべきものではない。

(一)山蛩蟲（拾遺）

和名　おほゑんざむし（啓蒙）
學名　未詳

【集解】藏器曰く、山林の間に生ずる。狀態は百足のやうで大きく、馬斑色で長さ二三寸のものだ。更に太さ指ほどのもので、馬陸と名け、能く木に登つて群吟

(一)矢野曰ク、やすで類ノ大形種、種類未詳。

するものがあつて、それは已に本經に記載されてある。

時珍曰く、按ずるに、本經には、馬陸、一名百足とあつて、形狀は大蛩のやうだとしてある。然るに此には、形狀は百足のやうで大きく、更に大なるものをば馬陸といふとあるが、して見ると、これは又、百足を指して同一物としたらしい。蓋し此にいふものは馬陸の山に在つて大なるもののことである。故に山蛩といつたのだ。雞も犬も全然食はない。

【氣味】【大毒あり】

【主治】【酒を嗜んで已まぬ人は、この蟲の一節を取り、灰に燒いて水で服す。酒の香を聞くさへ不快になる。一節以上を服しては毒のために死に至る。又、黒く燒いて惡瘡に傅ける。また灰に燒いて粉せば、蠶の白殭病を治す。(藏器)

【附錄】(二)蚰蜒(拾遺) 藏器曰く、形狀は蜈蚣のやうで(三)甚だ長く、色は正黃で斑がない。大なるものは釵股ほどあり、足が無數にある。脂油の香を好むものだ。故に人の耳、及び諸竅中に入つたときは、驢乳を灌げば化して水となる。

時珍曰く、處處にゐるもので、墻屋、爛草中に就中多い。形狀は小さい蜈蚣のや

(二) 矢野曰ク、蚰蜒和名げじ、又、げじげじ學名 species of Scutigera, Therenopoda and others. 多足綱唇足目(Chilopoda)ニ屬スルモノ。

(三) 大觀ニ甚長ノ二字ナシ。

うで、身は圓くして扁たくなく、尾後が禿して岐がなく、足が多い。大なるものは長さ一寸餘で、死ねばやはり環のやうに踡屈する。陶弘景はそれで馬陸と誤つたのだ。この蟲が耳に入つたときは、龍腦、地龍、硇砂のうちの一味を吹けばいづれも效がある。或は香物で引出す。淮南子に『菖蒲は蚤虱を去つて蛉蛩を來す』とあるはこの蟲のことだ。楊雄の方言には『一名入耳。一名蚨虷。一名蚰蚭。一名蜻蜓』とある。又、一種の草鞋蟲といふがあつて、形はこれも似てゐるが身が扁く、やはり能く人の耳に入る。

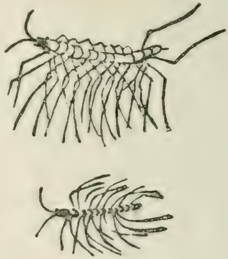
(四)蠼螋(拾遺)　瞿捜(クソウ)と發音する。

藏器曰く、形狀は小さい蜈蚣のやうで、色は青黑く、足が長い。能く人影を見ると放尿して瘡を發せしめる。その瘡は熱痱のやうで大きく、腰の周圍を遶れば治療の方法がない。山中のものの尿は更に猛烈な毒がある。しかし扁豆葉さへ傅ければ癒えるものだ。諸方に甚だ多く治法がある。

時珍曰く、蠼螋は喜んで氍毿の下に隱れるものだからこの名稱が生じたのだ。或は蛷螋とも書く。按ずるに、周禮に、赤茇氏はすべての隙屋から貍蟲、蛷螋の屬を

(四)矢野曰ク、蠼螋普通此ニ昆蟲類ノはさみむし(Dermaptera)ヲ充ツレドモ穏ナラズ。

除く役目だとある。乃ち求めて捜るである。この蟲は墻壁、及び器物の下に隠れてゐるもので、長さは一寸に足らず、形狀は小さい蜈蚣のやうで。色は青黑く、鬚が二本、足が六本で足は腹の前に在り、尾に叉岐(さき)があつてよく人やその他の物を夾(はさ)む。俗に捜夾子と呼ぶ。人影にその尿を放射すると瘡が生じ、身に寒熱を起すものだ。古方に、犀角汁、雞腸草汁、馬鞭草汁、梨葉汁、茶葉末、紫草末、羊鬚灰(やうしゆくわい)、鹿角末、燕窠土を用ゐ、ただその一品を塗ればいづれも有效だとある。



〔蚰蜒・蠼螋〕

孫眞人の千金方には『予は、嘗て六月中にこの瘡に罹つたことがあつて、五六日經過してから治療したが癒えなかつた。ところがある人に、地上に蠼螋(くそう)の形を畫き、刀でその腹の部分の土を僅に取り、唾で和して塗ることを敎へられ、二回塗るとそれで癒えた。如何にも萬物相感の事實だと思ふのだが、如何なる根據に出るか、その間の消息は窺知(きち)し得べくもない』とある。

（一）矢野曰ク、貧毛目(Oligochaeta)中みみづ科(Perichaetidae)ニ屬スルモノニシテPerichaeta屬ノモノ最モ普通ナリ。

（二）塿ハ盛リ上ゲタル土。

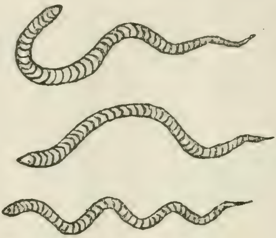
（三）巴ハ漢ノ郡、草部隰草類天名精ノ註ヲ見ヨ。

〔一〕蚯　蚓（本經下品）　和名　みみづ　學名　Perichaeta spp.

釋名　**螼螾**　音は頃引（ケイイン）　**朐䏰**　音は蠢閏（チンジユン）　**堅蚕**　音は遣忝（ケンテン）　**蜿蟺**　音は阮善（グワンゼン）　**曲蟺**　**土蟺**（綱目）　**土龍**（別錄）　**地龍子**（藥性）　**寒蟪**　**寒蚓**　**附蚓**（吳普）　**歌女**　時珍曰く、蚓が歩行するには引いて後に伸びる。その〔二〕塿は丘のやうだ。故に蚯蚓と名けたのである。爾雅にはこれを螼螾といひ、〔三〕巴地方ではこれを朐䏰といふ。いづれも地方音の轉訛である。蜿蟺、曲蟺はその狀態の形容であつて、東方の虯賦に「乍ち逶迤として蟮曲し、或は宛轉として蛇行す。性に任せて行止し、物に撃るれば便ち曲る」とあるはそのことだ。術家では、蚓は雲を興し、又、陰晴を知る能力があるといふ。故に土龍、龍子などの名稱がある。その鳴聲が長く吟するものだから歌女といふ。

大明曰く、路上に踏み殺されてあるものを千人踏と名ける。藥用として更に良きものだ。

【集解】別錄に曰く、白頸蚯蚓は平土に生ずる。三月に取つて暴乾する。弘景曰く、藥に白頸のものを用ゐるは、老いたるものを用ゐる意味である。採取して土を去り、鹽をつけて日光に暴せば須臾にして水になるものだ。道術には多くその屎を用ゐて蚓塿と呼び、また六一泥ともいふ、細泥を食つた屎だから沙石が交らないので、それで丹を調合する時釜を固泥するに用ゐるのだ。



〔蚯蚓〕

時珍曰く、現に處處の平澤、膏壤の地中にゐるもので、初夏に始めて出て仲冬に蟄結し、雨降るときはその先に出で、晴れるときは夜鳴く。或は結した時は能く化して百合となるもので、蛗螽と同穴に棲んで雌雄の關係を結ぶといふことだ。郭璞の贊に『蚯蚓は土の精にして、無心の蟲なり。交るに分を以てせず、蛗螽に唾る』とあるはそれをいつたのだ。今は小兒の陰腫に、この蟲に吹冒されたためだといふものが多い。經驗方に『蚯蚓に咬まれると、大風のやうな狀態になつて眉鬚皆落ちる。これには石灰水で浸すが良し。昔、浙江

將軍張詔がこれを病み、毎夕その體中に蚯蚓の鳴聲が聞えるのであつたが、ある僧に鹽湯で浸すことを敎へられ、數回試みて遂に癒えた」とある。

宗奭曰く、これは有毒のものだ。崇寧の末年、(四)隴州のある兵士は、暑中跣足でゐたために、蚯蚓に中てられて遂に不治に陷つた。又、數日の後、ある人がその毒に中つたが、鹽湯で浸し、並に一盃を飮むことを敎へられて癒えた。

【修治】弘景曰く、乾蚓を服する場合には、熬つて屑にして用うべきものだ。

斅曰く、凡そこれを採收したならば、糯米泔で一夜浸して漉出し、無灰酒で一日浸して焙じ乾して切り、毎一兩を蜀椒、糯米各二錢半と共に熬り、米が熟したとき揀り出して用ゐる。

時珍曰く、藥に入れるには、末にすることもあり、水に化することもあり、灰に燒くこともあつて、それぞれ對症上適宜の方法に隨ふ。

白頸蚯蚓【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】權曰く、小毒あり。之才曰く、葱、鹽を畏る。

【主治】【蛇瘕。三蟲を去る。伏尸、鬼疰、蠱毒。長蟲を殺す】(本經)【化した

(四)隴州ハ卯生類石蠶ノ註ヲ見ヨ。

(五) 大ハ天ノ誤。

(六) 葱、大觀ニ鹽ニ作ル。

水は、傷寒の伏熱、狂譫、大腹黄疸を療ず】(別錄)【溫病の大熱で狂言するは、汁を飲めば皆瘥える。炒つて屑にしたものは蚘蟲を去る。泥を去つて鹽で水に化したものは、(五)大行諸熱、小兒の熱病、癲癇に主效がある。丹毒に塗り、漆瘡に傅ける】(藏器)【(六)葱で化して水にしたものは耳聾を療ず】(蘇恭)【中風、癇疾、喉痺を治す】(日華)【射罔の毒を解す】(蜀本)【炒つて末にしたものは蛇傷毒に主效がある】(藥性)【脚風を治す】(蘇頌)【傷寒、瘧疾の大熱狂煩、及び大人、小兒の小便不通、急性、慢性の驚風、歴節風痛、腎臓風注、頭風の齒痛、風熱赤眼、木舌、喉痺、鼻瘜、聤耳、禿瘡、瘰癧、卵腫、脫肛に主效があり、蜘蛛の毒を解し、蚰蜒の耳に入りたるを療ず】(時珍)

【發明】弘景曰く、乾蚓を熬つて屑にしたものは、蚘蟲を去るに甚だ有效だ。

宗奭曰く、腎臓風、下注病には闕くべからざるものである。

頌曰く、脚風の藥には、必ずこの物を使として用ゐねばならぬ。けれども、やはり有毒のもので、ある人は脚病に罹つたとき、藥中にこの物を用ゐると、果して奇效を奏して病は瘉えたのだが、なほ二十餘日に亙つて服藥を輟めずに續服したため

に、躁憒を覺えてただ水のみを欲して已まず、遂に非常に衰弱して危篤に陷つた。概して病を攻むるに毒藥を用ゐる場合には、病に的中すれば直ちに服用を止むべきものである。

震亨曰く、蚯蚓は土に屬し、水と木とを有するもので、性は寒にして大いに熱毒を解し、濕病を(七)行る。

時珍曰く、蚓は物に在つては土德に應じ、星禽に在つては軫水である。上には槁壤を食ひ、下には黃泉を飲むものだ。故にその性は寒にして下行する。性寒なるが故に能く諸熱疾を解し、下行するが故に能く小便を利し、足疾を治して經絡を通ずるものである。術家では、蚓血は能く弓弩を柔にするなどといふが、これも恐らくは世間を誑す妄言だ。諸家は、これを服すれば毒が多いといつてあるが、郭義恭の廣志には『閩越地方の山間に棲む蠻民は、蚯蚓を膳部として啖ふ』とある。土地に相異があれば人間の生理狀態にまで不同があるのではあるまいか。

附方　舊九、新三十四。

「傷寒熱結」發病六七日にして狂亂し、鬼を見、犯走せんとするには、大蚓半斤を泥を去り、人尿で煮て汁を飲む。或は生で汁を絞つて用

(七)本書行上ニ天字アリ、天行濕病ト讀ムベシ。

ゐるもよし。(肘後方)【陽毒結胸】按ずれば極めて痛み、或は通じてもまた結し、喘促し、大躁し、狂亂するには、生地龍四條を取り、洗淨して泥のやうに研り、生薑汁少量、蜜一匙、薄荷汁少量を入れ、新汲水で調へて服す。若し熱の盛なるものならば片腦少量を加へ、それを與へて心下を揉む。片時にして自然に汗が出て解す。再服する必要はない。一回で神效がある。(傷寒蘊要)【諸瘧の煩熱】甚だしく燥するには、上記の方を服するが甚だ效がある。また瘴瘧をも治す。(直指)【小便不通】蚯蚓を搗き爛して水に浸し、濃汁半碗を濾し取つて服す。立ろに通ず。(斗門)【老人の尿閉】白頸蚯蚓、茴香等分を杵いて汁を飮む。直ちに癒える。(朱氏集驗方)【小兒の尿閉】乃ち熱結するものである。大地龍數條を泥を去り、蜜少量を入れて研つて莖卵に傅け、同時に燒いた蠶蛻紙、朱砂、龍腦、麝香と共に研り、少量を麥門冬、燈心の煎湯で調へて服す。(全幼)【小兒の急驚】五福丸——生蚯蚓一條を研り爛し、五福化毒丹一丸を入れて共に研り、薄荷湯少量に溶化して服す。〇善濟方に「梁國材の直話に、洋州の進士李彥直の家でこの藥を專賣してゐたが、一服千金の値で賣つたので、十人家族の生活費に十分であつたといふ。梁はその方を傳へ、親しく實驗

して屢〻效果を擧げた。一般嬰兒救療のために、特に記錄して置く」とある。【驚風悶亂】乳香丸――小兒の慢驚風で心神悶亂し、煩懊し、筋脈拘急し、胃虛し、蟲動し、反折して啼叫するを治す。乳香半錢、胡粉一錢を研勻し、白頸蚯蚓を生で捏ねて土を去つて搗き爛したもので和して麻子大の丸にし、七丸乃至十五丸づつを葱白の煎湯で服す。（普濟方）【慢驚虛風】平正なる附子を皮、臍を去つて生で研つて末にし、白頸蚯蚓をその末の中に入れ、末にくるまつて動かなくなつたとき、蚯蚓に著いた附子を刮り下して黃米大の丸にし、十丸づつを米飮で服す。（百一方）【急慢驚風】五月五日に蚯蚓を取つて竹刀で兩段に截り、急に跳るものと慢に跳るものとを各別に一纏めにし、各〻研り爛らして硃砂末を和し、丸にして急、慢それぞれ標記を明にし、急驚には急に跳る方の丸を、慢驚には慢に跳る方の丸を五七丸づつ薄荷湯で服す。（應驗方）【小兒の卵腫】地龍を土と共に末にし、津液で調へて傅ける。（錢氏方）【勞復卵腫】或は腹中に縮入して絞痛し、身體重く、頭が擧らず、小腹急熱し、拘急して死せんとするには、蚯蚓二十四箇、水一斗を三升に煮取り、頓服して汗を取る。或は蚯蚓數升を絞つてその汁を服す。いづれも良し。（肘後方）【手、足

の腫痛】断れんとするには、蚓三升を取り、水五升で汁二升半を絞つて服す。(肘後)
【代指の疼痛】蚯蚓を杵いて傅ける。(聖惠)　【風熱頭痛】地龍を炒つて研り、薑汁半夏餅、赤茯苓と等分を末にし、一字乃至半錢を生薑荊芥湯で服す。(普濟)　【頭風疼痛】龍珠丸——五月五日に取つた蚯蚓に腦、麝を和し、杵いて梧子大の丸にし、一丸づつを左右に隨つて鼻中に納れる。豫め薑汁を鼻に塗つて置く。立ろに癒える。(總錄)　【偏正頭痛】忍び難きには、聖惠では、龍香散——地龍を土を去つて焙じ、乳香と等分を末にし、一字づつを紙撚に卷き込み、燈上で烟に燒いて鼻で嗅ぐ。〇澹寮方では、人の指の甲等分を加へる。徐介翁の方だといふ。一捻づつを香爐上で慢火で燒き、紙筒でその烟を鼻に引き入れて熏じ、口に冷水を噙んで出る涎を吐き去り、同時に好茶一盞を點てて呷へば癒える。【風赤眼痛】地龍十條を炙いて末にし、茶で三錢を服す。(聖惠)　【風蟲牙痛】鹽で溶化した地龍水で麪を和し、歯上に納れる。又、皂莢を皮を去つて研つて末を上に塗る。蟲は直に出る。又、玄胡索、蓽茇と共に末にして耳を塞ぐ。(普濟)　【牙歯の裂痛】死曲蟺を末にして傅ければ止む。(千金翼)　【歯縫出血】止まぬには、地龍末、枯礬各一錢、麝香少量を研勻して擦

る。(聖惠方)【牙齒の動搖】及び外物の傷動で落ちんとし、諸藥を用ゐて奏效せぬには、乾地龍を炒り、五倍子を炒つて等分を末にし、豫め生薑を牙に揩つて後その末を傅けて擦る。(御藥院方)【木舌腫滿】治療を加へねば死亡する。蚯蚓一條を鹽で水に化して塗る。良久して漸次に消く。(聖惠方)【咽喉の卒腫】食物の通らぬには、地龍十四條を搗いて喉の外部に塗り、又、一條に鹽を著けて水に化し、蜜少量を入れて服す。(聖惠方)【喉痺塞口】普濟では、韭の生えた土地の紅く小さい蚯蚓數條を取り、醋に擂つて食へば痰血を吐出し、二三椀で神效がある。○聖惠では、地龍一條を研り爛らし、雞子白と攪き和して灌入すれば直ちに通ずる。【鼻中の瘜肉】地龍を炒つて一分、牙皂一挺を末にし、蜜で調へて塗る。清水が滴り盡きて瘜肉がとれる。(聖惠)【耳の卒かの聾閉】蚯蚓を鹽を入れた葱の中に入れ、水に化して點ける。立ろに效がある。(八)(肘金)【聤耳で膿の出るもの】生地龍、釜上墨、生豬脂等分を研勻し、葱汁で和して挺子に捻り作り、綿で裹んで耳を塞ぐ。○聖惠方では、地龍を末にして吹く。【耳中の耵聹】乾結して出ぬものには、白蚯蚓を葱葉中に入れて水に化し、耳に滴し滿てる。數回に過ぎずして容易に挑出する。【蚰蜒の耳に入つたとき】

(八) 大觀ニ金下ニ方字アリ。

（九）下段ハ一段ノ誤。

地龍を末にし、葱内に入れて水に化して點入する。それで蚰蜒も化して水となるものだ。（聖惠方）【白禿頭瘡】乾地龍を末にし、輕粉、麻油を入れて調へて搽る。（普濟方）【瘰癧の潰爛】流串せるには、荊芥根の（九）下段の煎湯で溫めて洗ひ、良久して瘡が破れて紫黑色になつた部分を針で刺して血を去り、再び三四回洗つてから、韮畑の蚯蚓一把を五更時刻に取り、炭火上で紅く燒いて末にし、一匙づつに乳香、沒藥、輕粉各半錢、穿山甲九片を炙つて末にして入れ、油で調へて傅ける。神の如き效がある。これは武進の朱守仁所傳の實驗を經た方である。（保命集）【龍纏瘡毒】水缸の底にゐる蚯蚓一條を泥共に搗いて傅ければ癒える。【蜘蛛咬瘡】全身に生じたるには、葱一本の尖頭を去つてその中に蚯蚓を入れ、兩頭を緊く押へて氣の洩れぬやうにし、頻りに動搖して化して水にし、それを咬まれた患部に點ける。甚だ有效である。（譚氏小兒方）【陽證脫肛】荊芥、生薑の煎湯で洗ひ、地龍の錢のやうに蟠つたものを土を去つて一兩、朴硝二錢を末にし、油で調へて傅ける。（全幼心鑑）【中蠱下血】爛肝の如きには、蚯蚓十四條を苦酒三升に漬け、蚓が死んでからその水を服す。已に死んだものも皆治し得るものだ。（肘後方）【癘風痛痒】白頸蚯蚓を土を去り、棗肉

と共に搗いて梧子大の丸にし、六十丸づつを美酒で服す。葷、蒜を忌む。（活人心統）

【對口毒瘡】已に潰れて膿の出るには、韭畑の蚯蚓を細に擣き、涼水で調へて傅け、一日に三四回換へる。（扶壽精）【耳聾氣閉】蚯蚓、川芎藭各一兩半を末にし、二錢づつを麥門冬湯で服し、服して後に頭を低れて伏して睡る。一夜に一服、三夜にして立ろに效がある。（聖濟總錄）【口舌の糜瘡】地龍、吳茱萸を研つて末にし、醋で調へて生麪に和し、足心に塗る。立ろに效がある。（摘玄方）

蚯蚓泥　土部に記載してある。

蝸　牛

瓜（クワ）媧（クワ）渦（クワ）と三種に發音する。（別錄中品）

和名　かたつむり
學名　Eulota spp.

【釋名】**蠡牛**　蠡は螺（ラ）と發音する。（藥性）**蚹蠃**（爾雅）附螺（フラ）と發音する。**螔蝓**（爾雅）移兪（イユ）と發音する。**山蝸**（弘景）**蝸蠃**　山海經には倮蠃と書いてある。**蜒蚰蠃**（俗名）**土牛兒**　弘景曰く、蝸牛とは山蝸のことで、その形が瓜字に似て牛のやうな角があるところから名けたものだ。莊子に所謂『蝸角に戰ふと

はこの物のことである。時珍曰く、その頭が蝸のやうに偏戾(ユガミマガル貌)し、その形體が渦のやうにうづまいてゐるところから、蝸、渦(共にクワと發音する)の二音で呼ぶのであつて、單に瓜の字のやうだからといふわけではない。その運行する有樣が延引するものだから蜒蚰といふ。爾雅にはこれを蚹蠃といひ、孫炎の註に『この蟲は蠃殼を負ふて行く。故に蚹蠃と名ける』とある。

集解 弘景曰く、蝸牛は山中、及び人家に生ずる。頭の形は蛞蝓のやうだが、ただ背殼を負ふてゐるものだ。



〔蛞蝓〕



〔蝸牛蛞蝓〕

大明曰く、これは殼を負ふ蜒蚰のことだ。

保昇曰く、蝸牛は池澤の草樹の間に生ずる。形は小螺に似て色白く、頭に四本の黑角があつて、行くときは頭を出し、驚くときは首尾倶に殼中に縮み入るものだ。

頌曰く、凡そ蝸牛を用ゐるには、形が圓くして大なるものを勝れりとする。久しき雨の晴れたば

かりに竹林、池沼の間に多くゐるものだ。城墻や陰處にある扁にして小なる一種は無力にして用ゐるに堪へない。

時珍曰く、蝸は身に涎があるもので、能く蜈、蝎を制す。夏期の暑熱中には自ら葉下に懸り、往往にして高く昇るために涎が枯れて、ために自ら死ぬものだ。

【氣味】【鹹し、寒にして小毒あり】鹽を畏る。【主治】【賊風喎僻、踠跌、大腸脫肛、筋急、及び驚癇】（別錄）【生で研つて汁を飲めば消渴を止める】（甄權）【小兒の臍風、撮口を治し、小便を利し、喉痺を消し、鼻衄を止め、耳聾を通じ、諸腫毒、痔漏を治す。蜈蚣、蝎、蠆の毒を制するには、研り爛らして塗る】（時珍）

【發明】頌曰く、嬰孩兒の藥に入れて最も勝れたものだ。時珍曰く、蝸牛の諸病に對する主たる治效は、大抵解熱、消毒の功力を取るだけである。

【附方】舊二、新十九。【小便不通】蝸牛を搗き、臍下に貼つて手で摩す。麝香少量を加へるが更に妙である。（簡易）【大腸脫肛】聖惠では、大腸の久積虛冷で排便毎に脫肛するを治するに、蝸牛一兩を灰に燒き、豬脂で和して傅ける。立ろに縮む。○又、前記の病症、及び痢後の脫肛を治するに、乾蝸牛一百箇を炒つて研り、一錢

づつを、赤汁を飛過した磁石末五錢、水一盞を半盞に煎じて調へて服す。一日三回。【痔瘡腫痛】丹溪は、蝸牛を油に浸して塗り、或は焼き研つて傅けた。○濟生では、蝸牛一箇の中へ麝香少量を入れて碗に盛り、翌日水を取つて塗る。【發背の初期】活きた蝸牛二百箇を新汲水一盞と共に湯瓶中に入れ、一夜封じてその涎水を取り、眞蛤粉を入れて旋調し、瘡上に掃き傅ける。一日十餘回。熱痛が止めばそれで瘡が癒える。(集驗方)【瘰癧のまだ潰れぬもの】殼のままの蝸牛七箇、丁香七粒を共に焼いて研り、花型に切つた紙に攤して貼る。(危氏)【瘰癧の已に潰れたもの】蝸牛を焼いて研り、輕粉少量と猪脊髓で調へて傅ける。(危氏方)【喉痺腫塞】蝸牛を綿で裹み、水に浸して含み嚥む。須臾にして立ろに通ずる。○又、蝸牛七箇、白梅肉三箇を研り爛し、綿で裹んで含み嚥む。立ろに效がある。【喉風腫痛】端午の日の正午に蜒蚰十餘條を取り、鹽三四箇と共に小瓶に入れて固く封じ、化して水となるを俟ち、その水を取つて點ける。(唐氏)【喉寒、口噤】蜒蚰を炙いて十四箇、白梅肉を炒つて十四箇、白礬を半生半焼にして二錢を研つて末にし、半錢づつを水で調へて服す。吐を催して立ろに通ずる。(聖惠方)【耳、腮の痄腫】及び喉下の諸腫には、蝸牛を翦

と共に研つて傅ける。【顏面の毒瘡】初期には、急に水蜒蚰一二條を探し取り、醬少量と共に擣いて紙に塗つて貼れば直ちに退く。その紙には一箇の小孔を穿けて氣を出すやうにする。これは凌漢章が祕傳の極めて有效の方である。（譚埜翁試驗方）【赤白翳膜】生蝸牛一箇を擣いて中に丹砂末を入れ、火にかけて炙沸し、その汁を綿に染めて眥中に傅ける。一日二三回。（聖惠方）【鼻血の止まぬもの】蝸牛を焙き乾して一箇、烏賊骨半錢を研末して吹く。（聖濟總錄）【撮口臍風】乃ち胎熱である。蝸牛五箇を殼を去り、研つて汁を口に塗り、奏效すれば止める。○又、ある方では、蝸牛十箇を殼を去つて研り爛らし、蒔蘿末半分を入れて研勻し、塗つて效を取るが甚だ良し。【耳の聾閉に滴す】蝸牛膏――蝸牛一兩、石膽、鍾乳粉各二錢半を末にし、瓷盒に盛つて火で赤く煅いて研末し、片腦一字を入れ、酒で一字を調へて耳中に滴し入る。癒えぬものなし。（いづれも聖惠方）【蚰蜒の耳に入つたとき】蝸牛を椎き爛して耳邊に置けば出る。（瑞竹堂方）【染鬚方】蜒蚰四十條を京墨水に入れ、三日間養つて馬屎中に一个月埋め、取出して試に白い絲の端をつけて見ると頭から尾まで黒くなるものだ。再び馬屎中に七日埋め、再びそれを試みて性が緩になつたときそれで鬚

を撚る。皮膚を黒くせぬやう注意されたい。(普濟方)【消渇引飲】止まぬには、崔元亮の海上方では、蝸牛の圓形にして大なるもの十四箇を用ゐ、水三合で密器に入れて一夜浸し、その水を取つて飲む。一劑に過ぎずして癒える。〇聖惠では、蝸牛を焙じて半兩、蛤粉、龍膽草、桑根白皮を炒つて各二錢半を研末し、一錢づつを楮葉湯で服す。

蝸殼　主治　【一切の疳疾】(頌)【牙䘌、顏面の赤瘡、鼻上の酒齇、久しき利下、脫肛】(時珍)

附方　舊二、新一。【一切の疳疾】自死蝸殼の皮薄く色黃白のもの七箇を洗淨し、少しも塵滓のないやうにして日光で乾し、その殼中に酥、蜜を入れて瓷琖に盛り、琖面に紙を糊著けして飯を炊く蒸氣の上に置いて蒸し、炊き上つて更に器に移さんとするとき、甑中に入れて飯に雜ひ裝ふてまた飯を蒸し、熱したとき取出して水淀のやうに研り、漸次に與へて一日にして食ひ盡さしめ、效を取つて止める。(韋丹方)【牙䘌の痛むもの】蝸牛殼三十箇を燒いて研り、日每に揩るが良し。(聖惠)【大腸脫肛】蝸牛殼を土を去つて研末し、溶化した羊脂で調へ塗つて送入すれば癒える。(李延壽方)

蛞蝓（一）　音は闊兪、クヮツユである。　（本經中品）　和名　なめくぢ　學名　Philomycus sp.

【釋名】**陵蠡**　蠡は螺（ラ）と發音する（本經）　**附蝸**（別錄）　**土蝸**（同）　**托胎蟲**（俗）　**鼻涕蟲**（俗）　**蜒蚰螺**　下文に詳記する。

【集解】別錄に曰く、蛞蝓は太山（たいさん）の池澤、及び陰地、沙石、垣下（ゑんか）に生ずる。八月に取る。

弘景曰く、蛞蝓は殼がない。蝸と呼ぶべきわけはなからう。附蝸とは蝸牛のことだ。この物は頭の形が蝸牛に似てゐるところから、やはり蝸と名けたものではあるまいか。

保昇曰く、蛞蝓、卽ち蝸牛である。而るに別錄にまた蝸牛の一條があつて、稱呼に數種の不同はあるが、主たる治效に差異はない。これは後人が誤つて揭げたもので、あだかも草部に雞腸の條があつて復た蘩蔞（はんろう）の條を重出してあるやうなものである。按ずるに、爾雅には『蚹蠃（ふら）は螔蝓（いゆ）なり』とあり、郭註に『蝸牛のことだ』とあ

（一）本經ニハ下品ニ列ス、大觀誤ッテ中品中ニ入ル。

る。玉篇にもやはり『螔蝓は蝸牛なり』とある。これで見れば一物なることが明瞭だ。その形狀は小螺に似て色は白い。池澤、草樹の間に生じ、頭に角が四本あり、行くときは角を出し、驚かせば縮つて首尾共に巧みに殼中に藏れるものだ。蘇恭が、蛞蝓を無殼の蝸牛としたのは正しくない。現に本經に『一名陵蠡』とあり、別錄にまた(二)土蝸とあつて、蝸、蠡と名けるものはいづれも蠃殼の屬である。殼がなくてはならないわけだ。現に下濕の場所に、大きくして(三)黃色の蝸牛で、殼がなくて角のある一種の蟲がゐるが、これは蝸牛の老いたるものだといふことだ。

宗奭曰く、蛞蝓、蝸牛は二物であつて、蛞蝓は角が二本あり、身の肉はただ一段のものだが、蝸牛は角が四本あり、背上に別に肉があつて殼を負ふて行く。これを一物だとするならば、經の文中に殊更に二條を分ける理由があるまい。蜀本に、又『蛞蝓を蝸牛の老いたものだ』といつてあるが、全然謂はれのないことだ

時珍曰く、按ずるに、爾雅には蛞蝓の名稱は擧げてなく、ただ『蚹蠃は螔蝓なり』とあり、郭註に『蝸牛のことだ』とある　別錄には螔蝓の名稱は擧げてなく、ただ『蛞蝓、一名蚹蠃』とある。これに據つて見れば、螔蝓とは蚹蠃のこと、蛞蝓とは

(二) 大觀ニ別錄又有土蝸之名トアリ、綱目ニ又有土蝸焉名トアルハ誤寫ナリ。
(三) 大觀ニ黃字於ニ作ル、然レバ一種蟲蝸牛ヨリ大ニシテ、殼無クシテ角アル者ト讀ムヲ正トス。

(四)三十六禽ハ方術家ノ說。三十六種ノ動物ヲ十二時ニ配ス。ソノ說五行大義ニ載ス。

蚹蝸のこと、蓋し一類中の二種といふことになる。蝦蟇と鼃とのやうなものだ。故にその主たる治病の功用は相似たもので、いづれも蜈、蠍を制す。名稱も相通じて倶に蝸といふのである。蜒蚰螺との關係に就ては、或は一物だらうといひ、或は二物だらうといふが、いづれも攷究が徹底しない。ただ許愼の說文に『附蠃は、背に殼を負ふものを蝸牛といひ、殼なきものを蛞蝓といふ』とある一言だけが的確に道破してある。

【正誤】　弘景曰く、蛞蝓は(四)三十六禽中の一部類に入るものだ。また四種の角蟲の類であつて、營室星の精である。方家では一向に用ゐたものがない。

恭曰く、陶氏の說は誤つてゐる。三十六禽の亥に配當した動物に壁水㺄といふがあるが、それは豪猪のことで、毛が蝟簪のやうなものだ。山海經に『㺄は、身は彘、面は人、音は嬰兒のやうだ』とあり、爾雅に『猰㺄は貙に類す。走ること迅にして人を食ふ』とあつて、三者いづれも蛞蝓ではない。蛞蝓とは殼のない蝸蠡のことだ。

【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】【主治】【賊風の喎僻、軼筋、及び脫肛、驚癇、攣縮】(本經)　○喎は苦乖の切(クワイ)に發音し、口の戾むこと。軼は跌(テツ)と

發音し、車の轉ずること。【蜈蚣、蠍の毒】（衍義）【腫毒の焮熱、熱瘡の腫痛】（時珍）

發明 宗奭曰く、蜈蚣は蛞蝓を畏れ、蛞蝓の通つた跡は過らず、その身に觸れば死ぬものだ。故に一般にこれを取つて蜈蚣の毒を治療する。

時珍曰く、按ずるに、蔡絛の鐵圍叢話に『（五）蟜南地方には蜈蚣が多く、大なるものは二三尺あり、人が螫されて死亡する。しかし、托胎蟲を見ると局促して動かなくなる。するとその蟲は蜈蚣の首に登り、その腦を蝕し陷れて殺して了ふ。それでその地の者はこの蟲を生で擣いて蜈蚣傷に塗るが、疼痛は立ろに止む』とある又、大全良方には『痔熱腫痛には、大蛞蝓一箇を泥に研り、龍腦一字、燕脂坯子半錢を入れて共に傅ける。豫め石薜を水で煮て熏洗するが尤も妙である。五羊大師趙尙書の夫人がこの病に罹つたときは、ただ蛞蝓、京墨を研つて塗つたが、やはり妙效があつた』とある。大體に於いて蝸牛と同功である。

附方 新一。【脚脛の爛瘡】臭穢近くべからざるには、蜒蚰十條を瓦で焙じて研末し、油で調へて傅ける。立ろに效がある。（救急方）

（五）蟜南ハ嶺南ニ同ジ。

緣桑蠃（一）（證類）

和名　うすかはまいまい
學名　Eulota (Acusta) spp.

【釋名】桑牛　天螺（綱目）

【集解】愼微曰く、この蠃（ら）は全く蝸牛に似たもので、黃色で小さく、雨後によく桑葉に傳ひ上つてゐるものだ。時珍曰く、この蠃は諸木の上にいづれもゐるものだ。特に桑上の者に限るのは、あだかも桑の螵蛸（へうせう）を用ゐると同じ意味である。

【氣味】（缺）【主治】【大腸脫肛には、燒いて硏り、猪脂で和して塗れば立ろに縮る】（愼微）記載は范汪方（はんわうはう）にある。【小兒の驚風を治するに、七箇を焙じ硏つて米飮で服す】（時珍）記載は宮氣方にある。

【發明】震亨曰く、小兒の驚風には、通聖散を蜜で丸にして服し、桑樹上の牛兒を陰乾して焙じた硏末を交互に服し、その風を平にする。時珍曰く、桑牛、蝸牛、蛞蝓の三物はみな一類のものだが、形狀がやや異ふ。故にその性、味、功用もみな彷彿たるもので、桑牛の驚を治する功力は、また殭蠶（きやうさん）、螵蛸

（一）矢野曰ク、啓蒙ニハものあらかひ科（Limnaeidae）ニ屬スルものあらがひ（Limnaea）ヲ充テタレドモ、習性ノ點ヨリかたつむり科（Helicidae）ニ屬スルうすかはまいまいニ非ザルカト之ヲ充テタリ。

の功力と同一だ。いづれも桑を食ふので、その氣がよく肝に入り、風を平にするのである。

溪鬼蟲（拾遺）

和名未詳
學名未詳

【釋名】射工（拾遺） 射影（詩疏） 水弩（同） 抱槍（雜俎） 含沙（詩註） 短狐（廣雅） 水狐（玄記） 蜮 音は或（ワク） 時珍曰く、この蟲は足角が弩のやうで、氣を以て矢となし、水勢に因つて沙を含んで人影を射り、それがために病となる。故に射、弩などの諸名がある。西陽雜俎には、これを抱槍と呼び『大いさ蜻蜋ほどのもので、腹下に槍に似た足刺があり、



〔射工〕
—溪毒—

有毒で人を螫す』とある。玄中記には『その形を視れば蟲である。その氣を見れば鬼である。その頭、喙は狐のやうだ』とある。五行傳には『南方の淫惑の氣から生じたものだ。故に蜮といふ』とある。詩に『鬼の如く蜮の如し。則ち得べからず』

とあるはこの物だ。

［集解］藏器曰く、射工は南方の溪毒のある地方の山林の間に出る。大いさ雞子ほどのもので、形は蛣蜣に似て頭に長さ一寸餘の一角があり、角上に四岐があり、黑甲下に翅があつてよく飛ぶ。六七月に取る。沙氣が多ければ短狐が生ずる。鶵、䳘、鸂、鶒の屬がこれを治す。

愼微曰く、玄中記に『水狐蟲は、長さ三四寸、その色黑く、廣さ一寸ばかり、背上に厚さ三分ほどの甲があり、その口に弩のやうな前に向つた角があつて、氣を以て人を射て、二三歩距つたところでも中る。中つたものは十中の六七まで死亡する』とあり、博物志には『射工は江南の山溪の中にゐる甲蟲で、長さ一二寸、口に弩のやうな形のものがあつて、氣を以て人影を射て瘡を發せしめる。治療せねば死亡するものだ』とあり、周禮に『壺涿氏は水蟲を除くことを掌り、炮土の鼓を以てこれを驅り、焚石を以てこれに投ず』とあるはこの物だ。

時珍曰く、射工は長さ二三寸、廣さ一寸ばかり、扁形で前が濶く後が狹い。頗る蟬の形狀に似てゐるところから、抱朴子には『その狀鳴蜩の如し』といひ、腹が軟

で背硬く、鼈のやうに甲を負ふてゐて黒色なところから、陸機は『その形鼈の如し』といつてある。この蟲は甲下に翅があり、六七月頃鉍鉍と音をたててよく飛ぶものだ。頭が濶く喙が尖つて二箇の骨眼があり、頭の狀態が醜く黒く、狐のやうでもあり鬼のやうでもあり、喙の端に爪のやうな長さ一二分の尖角ある。足は蟹のやうに六本あつて、二本は喙の下に生え、大きくして一箇の爪があり、四本は腹の下に生え、小さくして爪に岐がある。ともすると前足二本を揃へて屈め、その喙を抱へ捧げるやうな動作をする。その有樣は弩に矢を横につがへたやうな狀態だ。冬になれば谷間に蟄するのだが、この蟲の棲む場所には大雪も積らず、蒸すやうに氣が起ち上つてゐる。そこを一尺ほど掘下げれば取れるもので、それを陰乾して置いて用ゐるのである。蟾蜍、鴛鴦は能くこれを食ひ、鵞、鴨はこれを辟ける。故に禽經に『鵞飛べば蜮沈む』といつたのだ。又、水虎といふのがあつて、やはり水狐の類のものだ。鬼彈といふもあつて、それは溪毒の類のものだ。葛洪の所謂『溪毒は射工に似て物のないものだ』といふは皆この屬である。いづれも附錄する。

【附錄】（一）**水虎** 時珍曰く、襄河記に『（二）中廬縣に涑水といふ河があつて、そ

（一）矢野曰く、水虎

の河に注ぐ地點にある物がゐる。三四歳の小兒ほどのもので、㈢鱗鯉のやうな甲があつて射ても透らない。その物は秋期になると沙上に曝す事がある。虎の掌爪に似た膝頭を水上に出して身體を水に沒してゐるが、膝だけを出して人に見せるので、それを小兒が弄ぶと咬みつく。生擒してその鼻を摘んで引き廻せばやや自由になつてゐるものだ。名稱を水虎と呼ぶ』とある。

鬼彈　又、按ずるに、南中志に『㈣永昌郡に禁水といふ河があつて、十一二の兩月だけは渡れるが、その他の月に渡れば死んで了ふ。その河中の氣には惡物があつて、聲は聞えるが形は見えない。人がその氣に中れば青爛する。名稱を鬼彈と呼ぶ』とある。

角　【主治】【これを帶びれば溪毒を辟ける】（藏器）【陰乾し、末にして佩びても射工の毒を辟ける】（時珍）記載は抱朴子にある。

【發明】時珍曰く、按ずるに、葛洪の肘後方に『溪毒に中つたものを、一名中溪、一名水病といふ。これは射工に似て物體のないもので、春季に多い。この病に罹ると頭痛し、惡寒して傷寒のやうな狀態になり、二三日經過すると、腹中に蟲が

未詳、本邦ニテハ水虎ニ傳說上ノ動物ナルかはたらう一名かつぱチ充ツ、支那ニ於ケル水虎モ亦傳說上ノモノカト思ハルルモ、本邦ノ傳說ト起源ヲ同ウスルヤ否ヤモ不明ナリ。

㈡中廬縣ハ漢ニ置ク、今ノ湖北省襄陽ノ南宜城縣ノ西北、維水ノ北岸ニ治シタルモノノ如シ、維水ハ河、卽チ漢水ニ注グ。涑水、未詳。

㈢鱗ハ鯪ノ誤。

㈣永昌郡ハ漢ニ置ク、今ノ雲南省ノ西端、瀾滄江以西ノ地ナリ、今ノ永昌縣ソノ舊治ナリ。禁水、未詳。

生じて下部を食ひ、漸次に五臓を蝕し、注下して禁ぜざるものだ。良醫と雖も容易に治療し得ない。その初期に、下部に肉を截り取つたやうに正赤色の瘡が生ずるものは陽毒であつて最も急なるものだ。その瘡が蟲の嚙んだやうなものならば陰毒であつてやや緩である。いづれも二十日以内に死亡する。方家のこれに對する用藥は傷寒、溫病と似たもので、或は小蒜を煮た湯で浴し、また諸藥方を用ゐる』とあり、又『江南の射工毒蟲は、山間、水中にゐるもので、人がその場所に行き、或はその水を浴した場合、その蟲が沙を含んで人の形影を射るのである。その病には四種あつて、初期にはいづれも傷寒のやうで、或は中惡に似た狀態になり、一種は、全身に黑黶子を生じて、四邊悉く赤くなり、觸れば刺すやうに覺える。一種は、瘡になつて久しくして穿陷する。一種は、突起して石のやうになる。一種は火灼熛瘡のやうになるものだ。治療にはそれぞれ方法がある』とある。王充の論衡には『短狐は太陽の毒氣を含んで生ずるものだ。故に弓矢あつて人を射る。中つたものは火灼のやうになる』とある。

沙蝨[一]（綱目）

和名未詳
學名未詳

【釋名】𧍧蜁　梗旋（ビンセン）と發音する。（廣雅）蓬活（萬畢術）地脾

【集解】時珍曰く、按ずるに、郭義恭の廣志に『沙蝨は水中にゐる。色は赤く、大いさ蟣ほどに過ぎぬもので、皮中に入つて人を殺す』とあり、葛洪の抱朴子には『蝨は水にも陸にもゐる』雨後の早朝や夕暮に沙を踐むと必ず人に著き、毛髮で刺したやうに覺えて皮膚の內部に入るものだ、針で挑撥すれば取れる。丹のやうに正赤色のものだ。挑撥せねば肉に入つて死亡する。凡そこの蟲のゐる處を通るには、行きにも還りにも火で身體を炙れば、その蟲は火に隨つて去るものだ』とあり、又、肘後方には『山水の間には沙蝨が多くゐる、ほとんど肉眼で見えぬほど細なもので、水中や雨天、曇天、夜中などに草の中を行くと、この蟲が多く著いて皮膚中に鑽入し、皮膚が芒針で刺したかのやうに黍豆ほどに赤くなり、刺されて三日後には寒熱して瘡を發し、漸次に骨に入れば死亡する。嶺南地方では、刺されると直に茅葉、或は

(一)矢野曰ク、啓蒙ニハ海中ノ毒蟲トナシ、肥前方言ノふすべチ之ニ充ツレドモ如何、予ハ或ハ有毒性微生物ヲ傳染セシムルあかむしニアラズヤト想像ス、あかむしハTrombidiidaeニ屬スル Trombicula (Neotrombicula) autumnalis ナリ。

(一)潭州ハ今ノ湖南省長沙ノ地ナリ。袁州ハ石部石炭ノ註、處ハ土部白瓷器ノ註、吉州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

竹葉で挑撥して刮り去り、その上で苦苣汁を塗る。已に深く入つたものをば針で挑撥して取る。その蟲はさながら疥蟲のやうなものだ』とある。予が考察するところに據れば、溪毒、射工毒、沙蝨毒の三者は相近いもので、いづれも傷寒に似たものだ。故に挑沙、刮沙の法がある。今俗間で傷寒を病むものは、みな麻、及び桃、柳の枝でその全身を刮り、やはりそれを刮沙といふが、蓋し沙病を刮ることがその起原である。沙病は、また水沙、水傷寒ともいひ、初期には傷寒のやうで頭痛し、壯熱し、嘔惡し、手、足の指の末端が微厥するものだ。或は腹痛悶亂して須臾に死亡するものもある。それは攪腸沙といふ病だ。

【附錄】**沙蝨**　時珍曰く、按ずるに、錄異記に『(一)潭、袁、處、吉の諸州に沙蝨といふがゐる。卽ち毒蛇の鱗甲中にゐる蟲であつて、蛇がこれに苦められると急に水中に入つてその蝨を碾り出すのである。人がその毒に中れば三日にして死亡する』とある。これもやはり沙蝨の類のものである。

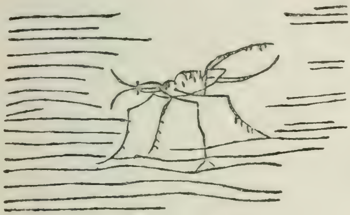
(一)水黽（拾遺）

和名　あめんぼ、一名かはぐも、一名みづぐも
學名　Species of Hygrotrechus, Limnotrechus, and others.

【釋名】水馬（拾遺）

【集解】藏器曰く、水黽は水上に羣游するもので、水が涸れると飛ぶ。長さは一寸ばかり、脚が四本あるものだ。海馬を呼ぶ水馬のことではない。

時珍曰く、水蟲であつて、甚だ多くゐるものだ。この類にはやはり數種あつて、現に(二)水爬蟲といふある一種は身が扁く腹が太くして背の硬い。卽ちこの物で、水爬とは水馬を訛つただけである。一種は水蠆であつて、身は長くして蝎の如く、能く蜻蜓に變ずるものだ。



〔水　黽〕

【氣味】【毒あり】【主治】【人をして渴せざらしめ、雞、犬を殺す】（藏器）

(一)矢野曰ク、あめんぼ科(Geridae)ノ昆蟲。

(二)矢野曰ク、水爬蟲、和名たがめ(Belostoma)水蠆、和名やまめ、たうめ、やごト云フとんぼうノ幼蟲ナリ

鼓蟲（一）（拾遺）

和名　みづすまし
學名　Gyrinus spp.

釋名　**鼓母蟲**

集解　時珍曰く、陳藏器の拾遺には鼓蟲を掲げてあるが、出處、形狀を説明してない。按ずるに、葛洪肘後方に『江南には溪澗中に射工蟲といふがゐて、人影を射ると病となり、或は傷寒のやう、或は中惡のやうな狀態となつて、或は言語不能となり、或は惡寒熱し、四肢拘急し、身體に瘡を生ずるものだ。水上に浮走する鼓母蟲一箇を取つて口中に含めば癒える。一旦死んだものも活きる。この蟲は正黑色の大豆のやうなもので、水上に浮遊する』とある。現にある水蟲で、大いさ豆ほどの光黑のものがこの蟲である。名稱を鼓母と呼ぶは、やはり豆の形に似てゐることの形容だ。

氣味　【毒あり】　**主治**　【禽獸を殺し、息肉を蝕す。惡瘡に傅ける】（藏器）
【白梅で裹んで含めば射工の毒を除く】（時珍）

（一）矢野曰ク、みづすまし科(Gyrinidae)ニ屬スル甲蟲、種類多シ。

（一）砂挼子（拾遺）

和名　ありぢごく
學名　Species of Myrmeleonidae.

【釋名】倒行狗子（拾遺）睡蟲（同上）

【集解】藏器曰く、これは處處にゐる。砂石中に生じて旋孔（せんこう）を作るものだ。大いさ大豆ほどで、背に刺があり、能く倒に行く。性睡るを好むので、睡蟲とも呼ぶ。

【氣味】【毒あり】【主治】【生で取つて枕中に置けば、夫婦をして相好合せしめる。射罔（しやよう）と合せ用ゐて飛禽、走獸を殺す】（藏器）

（二）蚘蟲（拾遺）

和名　ひとのはらのむし
學名　Ascaris lumbricoides, Linne.

【釋名】蛕　音は回（クワイ）俗に蛔と書く。いづれも蚘と同じ。人龍（綱目）

【集解】時珍曰く、蚘は人の腹中の長蟲である。按ずるに、巣元方の病源に『人の腹には九種の蟲があつて、伏蟲といふは、長さ四分、群蟲の主たるものだ。蚘蟲

（一）矢野曰ク、砂挼子ハうすばかげろふ科（Myrmeleonidae）ニ屬スル昆蟲ノ幼蟲ナリ、Acanthaclisis, Glenurus, Myrmeleon 等種類多シ。

（二）矢野曰ク、人體胃腸中ニ寄生スル線蟲類ニ數種アリ、其何レヲ藥用トスルカ明ナラザレドモ、茲ニハ最モ普通ナルモノヲ充テタリ。

といふは、長さ五六寸乃至一尺、これが發動すれば心腹が痛み、上下の口からよく涎、及び淸水を吐く。これに心を貫傷さるれば死亡する。白蟲といふは、長さ一寸、色は白く頭が小さい。これが甚だ多數に繁殖すれば人の精氣を損弱し、腰脚を疼かせ、長さ一尺に成長すればやはり能く人を殺す。肉蟲といふは、爛れた杏のやうな狀態で、人を煩悶せしめる。肺蟲といふは、蠶のやうな狀態で、人をして咳嗽して勞とならしめ、人を殺す。胃蟲といふは、蝦蟇のやうな形狀のもので、人をして嘔逆してよく噦せしめる。弱蟲といふは、また鬲蟲と名け、瓜瓣のやうな形狀のもので、人をして唾を多からしめる。赤蟲といふは、生肉のやうな狀態のもので、これが動くと腹が鳴る。蟯蟲といふは、至つて微少なもので、形狀は菜蟲のやうだ。胴腸中に棲息して人をして癰疽、疥癬、癘癩、痔瘻、疳䘌、齲齒の諸病を起さしめるものである。これ等の諸蟲はいづれも腸、胃中に寄生するもので、臟腑の氣の實する人に在つては害をなさないが、虛すれば侵蝕し、變じて諸種の疾病を生ずるものである。又、尸蟲といふがある。これは人間が生れると同時にあつて大害をなすものだ。その狀態は犬、馬の尾のやう、或は薄筋のやうで、脾臟中に寄生し、三寸ば

かりで頭、尾がある。凡そ補藥を服するには、必ず先づこの蟲を除去せねばならぬ。然らざれば藥の功力を發揮し得ぬものだ。凡そ一切の癥瘕は、久しく經てば皆蟲になるものだ』とある。紫庭眞人は『九蟲のうちの六蟲は傳變して勞瘵となるが、胃、蚘、寸白の三蟲は傳變しない。その六蟲が傳變すると、或は嬰兒のやうになり、鬼のやうな形になり、蝦蟇のやう、守宮のやう、蜈蚣のやう、螻蟻のやう、蛇のやう、鼈のやう、蝟のやう、鼠のやう、蝠のやう、蝦のやう、豬肝のやう、血汁のやう、亂髮、亂絲のやうな狀態となるものだ。凡そ蟲が腹中に在つては、月の上旬には頭を上に向け、中旬には中に向け、下旬には下に向けてゐるものだ。服藥には、月初の四五日の五更時刻を擇ぶが奏效し易い』といつてある。張子和は『巢氏の九蟲に關する解說はまことに詳である。さやうに蟲の變化する狀態はほとんど窮りないものであるが、要するにそれはみな濕熱が基礎となるものだ。木氣を得れば蟲となつて生じ、雨氣を得れば變化するのであつて、風木は熱を主り、雨澤は濕を主る事實でなければならぬ。かやうな關係で、五行の中にはいづれも蟲がある。諸木に蠹があり、諸果に螬があり、諸菽に蚄があり、五穀に螟、螣、蝥、蠈があり、麥が朽れ

ば蟻が飛び出し、栗が破れば蟲が飛び出し、草が腐れば螢が化生する。これはいづれも木の蟲だ。烈火中に鼠が居り、爛灰に蠅が生ずるはいづれも火の蟲だ。穴にゐる蟻、墻にゐる蝸、田にゐる螻、石にゐる蜴はいづれも土の蟲だ。蝌斗、馬蛭、魚鱉、蛟龍はいづれも水の蟲だ。昔、ある冶工が一箇の釜を破つて見ると、その截斷面の凹んだ處に米蟲のやうな正赤色の一箇の蟲がゐたといふ。これで見ると、金中にもやはり蟲がゐるのである』といつてある。

氣味 【大寒なり】 主治 【目中の膚赤熱痛には、大なるものを取つて洗淨し、斷つて汁を目中に滴す。三十年の膚赤もまた瘥える】(藏器) 【一切の眼疾、及び膚翳、赤白膜を生ぜるもの、小兒の胎赤、風赤眼を治するには、燒いて末にして傅ける。或は小兒の吐出したものを陰乾して末にし、汞粉少量を入れて唾液で調へて塗る。又、一切の冷瘻を治す】(時珍)

附方 新三。 【玉筋煎】小兒の胎赤眼、風赤眼を治す。小兒の吐出した蛕蟲二條を磁盒に盛り、紙で封じて濕地に五日間埋めて取出し、溶化して水となつたものを磁瓶に取收め、毎日銅筯で點ける。(普濟方) 【長月日を經過した風眼】眼赤く、瞼

力暗きには、蚘蟲五條を日光で乾して末にし、膩粉一錢、石膽半錢と末にし、一日二三回づつ點ける。（普濟方）【一切の冷瘻】人の吐いた蚘蟲を灰に燒き、先づ瘻を甘草湯で洗淨してから塗る。瘥えぬものなし。口に味ふ物に注意する。（千金方）

(一)風驢肚內蟲（綱目）

和名未詳
學名未詳

【集解】時珍曰く、凡そ人、畜の風病、瘡病には、肚內に必ず蟲があるもので、聖惠方では、目翳を治するにこの物を用ゐ「黑毛の驢のものが良し」とある。

【主治】【目中の膚翳には、二十一箇を曝乾し、石膽半錢を入れて共に研り、風に當らぬやうに磁盒に貯へ、毎日三五回點ける。その翳は自ら消える】（聖惠）

蠱蟲（拾遺）

和名　ましものむし
英名　A sort of poisonous insects

【釋名】時珍曰く、蠱を造るには、種種のあらゆる蟲を皿の中へ入れて互に食

(一)矢野曰ク、病驢腹中ノ寄生蟲ナレドモ、種名詳ナラズ。

ひ合はせ、その中で生き殘つたものを取つて蠱とするのである。故にその文字は蟲に從ひ皿に從ふのであつて、皿は器の意味だ。

「集解」 藏器曰く、古代には、人間が愚蒙質朴であつて蠱を造つて富を圖るといふことがあつた。その方法は、いづれもあらゆる蟲を取つて甕に入れ、幾年かを經過して開いて見ると、必ず他の諸蟲を食ひ殺して一箇の蟲だけが生殘つてゐる。それを蠱と名けたのだ。能く形を隱すこと鬼神のやうで、人のために禍を作すのである。つまり蟲の鬼であつて、人を咬んで死に至らしめることもある。或は、人の諸竅中から出るところを待つてゐて取り出し、それを曝乾して中蠱の患者に灰に燒いて服ませるといふ。これはやはりその類のものは自ら互に相伏するのだ。又一凡そ蠱蟲は蠱を療ずるものだ。その中つた蠱が何蟲を基本としたか、その名稱が判明すれば治療し得るのであつて、蛇蠱の場合には蜈蚣蠱蟲を用ゐ、蜈蚣蠱の場合には蝦蟇蠱蟲を用ゐ、蝦蟇蠱の場合には蛇蠱蟲を用ゐるの類である。これは相伏する關係にあるものだから治し得るのだ」といふ。

時珍曰く、按ずるに、蠱毒にはさまざまあるが、いづれも元氣を變亂するもので

ある。多くは飮食の機會に實行するものだ。これを他人に與へて與へられた者が患へば、使用した人に利益、幸福があるといふ。それで奸邪の徒輩がこれを造るのだ。南方にはまた蜥蜴蠱、蜣蜋蠱、馬蝗蠱、金蠶蠱、草蠱、挑生蠱等の毒がある。諸種の方には治蠱に關する法が非常に多くあつて、悉く列記するわけに行かない。

主治　【蠱毒には、灰に燒いて少量を服すれば立ろに癒える】(藏器)

金蠶（綱目）和名未詳 學名未詳

釋名　食錦蟲

集解　時珍曰く、按ずるに、陳藏器は、故錦灰は食錦蟲蠱の毒を療ずといひ、註に『この蟲は指環のやうに屈するもので、蠶が葉を食ふやうに舊い緋帛錦を食ふ』といつてあるが、今攷ふるに、この蟲は卽ち金蠶のことだ。蔡絛の叢話に『金蠶は蜀中に始めて發生したのであるが、近頃では(一)湖廣、(二)閩粵にまで多く傳播した。形狀は蠶のやうな金色のもので、一日に蜀錦四寸を食ふ。南方ではこれを飼つて糞

(一)湖廣ハ湖北、湖南兩省ノ地ナリ。
(二)閩粵ハ福建、廣東兩省ノ地ナリ。

を取り、それを飲食物中に入れて人を毒するのであるが、その毒を盛られたものは直ちに死亡する。蠱をその意に稱ふやうにして置けば、日に日に他から財物を聚めて、飼ふ人の家に暴富をなさしめるものだ。しかし、これを逐ひ拂ふことは極めて困難なもので、水火、兵刃も害し得ない。これを他に移すには、必ずその蠱に依つて聚め得た金銀、錦物に倍するものを調へ、蠱をその中に入れて路傍に棄てて置かねばならぬ。すると通行人が偶その財物を拾つて往く際に、蠱もその財物に隨つて往つて了ふ。これを「金蠶を嫁入らす」と稱へる。もしさうせねば、終には飼ふ者の腹中に入つて腸、胃を食ひ荒し、悉く食ひ盡して外に出るもので、尸蟲のやうなものである。ある人が(三)福清の長官に在任中、人民から金蠶毒に就ての訴訟があつたので、その毒の正體たる蟲を捕へようとしたが、容易にそれを捕捉し得なかつた。ところが、ある者の言に、刺蝟二箇を取つてその家に入れると必ず捕獲し得るものだといふに從つて、それを實行すると、蝟が果して寢臺と壁との隙間から擒り出したといふ。そもそも金蠶なるものは甚だ毒なるもので、鬼神の力があるかとさへ思はれるが、蝟が能くこれを制するといふは如何なる關係に由るものだらうか」

(三) 福清縣ハ後唐ニ置ク、今ハ福建省閩海道ニ屬ス。

(四)池州ハ石部鹵石類絲礬ノ註ヲ見ヨ。

とある。又、幕府燕閑錄には『(四)池州の進士鄒閬は家計甚だ貧しかつたが、ある日戸を開けて見ると一箇の小さい籠が置いてあつて、その中に銀器が入れてあるのを發見し、そのまま部屋に持歸つた。すると股に何物かが著いてゐるやうに感じたので、挑げて見ると、蠕蠕として蠶のやうな金色燦然たるものが著いてゐた。そこで早速取り拂つたが、やはりまた舊の處に著いてゐる。終には取つて踐み躙り、斫り碎き、水に投じ、火に入れたが、依然としてまた舊の處へ還つてゐる。閬は不思議に堪へずして友人に咨ねて見た。すると友人は「それは金蠶といふものだ」といつて、詳細に逐ひ禳ふ方法までも敎へてくれた。そこで閬は歸つて妻と相談し「これは到底飼つて置くわけには行かないから、他へ送つて了ふ外はないが、しかし今の貧困では、物を副へて送るなどは固より覺束ないことだ。外に分別もないから呑んで了はう」といつて、生きたままで呑んで了つた。家人は死にはせぬかと心配したが、一向に變つたこともなく、少しの苦みも感ぜずして、竟に天壽を全うした。これは彼の至誠が盛なために、妖邪も正には勝てなかつたものかと思ふ』とある。時珍は、金蠶蠱毒なるものの甚大なる害毒を竊かに考へるので、右二項の記事を備さ

に錄して、一はこの蠱が蝟を畏れるものなること、一は至誠であれば邪に勝つものなることを一般の參考に供する次第である。夷堅志に「この蠱に中毒すると、白礬を吮つても味が甘く、黑豆を嚼んでも腥くない。石榴根皮の煎汁を服すれば吐出する」とあり、醫學正傳に「樟木屑の煎汁を用ゐて吐かす」とあるも一方法だが、予は、蝟皮を以て治するの勝れるに若かずと思ふ。つまり天然の理に據るものだ。

附錄諸蟲　綱目一種　拾遺一種　別錄五種

唼臘蟲　時珍曰く、按ずるに、裴淵の廣州記に「(一)林任縣に臭肉を嗜む甲蟲がある。人が死ぬと全部を食ひ盡して、紛紛として屋内に滿ち、驅逐の方法がない」とあり、張華の博物志に「廣州西南の數郡では、人が死なんとすると麥のやうな形狀の飛蟲がその屋舍に集り、死ぬと屍に著いて食ふ。逐ひ拂つても肉のあるうちは去らないが、殘骨だけになると飛び去つて了ふ。ただ梓木の棺に納めるとこの蟲が來ない」とあり、林邑國記に「廣西の南部地方には唼臘蟲といふ死人を食ふ蟲があるが、ただ豹皮で屍を覆へば來ない」とある。この三說のものはみな一物である。そ

(一)林任縣、未詳。

の蟲は藥用にはならないが、人に害あるものだから心得て置く必要がある。

灰藥（拾遺）藏器曰く、嶺南の陶器を作る家に出る。形狀は青灰のやうなものだ。その地のものは「これは蚘から生ずるもので、凡そこれで物を拭つて置けば人をしてその物を喜び好ませ、相愛せしめるものだ」といつて竹筒に入れて取つて置く。家の中に置けば小兒、雞、犬の健康を損ずるものだ。

黃蟲（別錄）有名未用に曰く、味苦し、寒熱に主效がある。地上に生ずるもので、頭は赤く、足は長く、角があり、群つて棲息する。七月七日に採る。

地防　又曰く、人をして飢ゑず、渇せざらしめる。(二)黃陵に生ずる。形狀は蠕のやうだ。土中にゐる。

梗雞　又曰く、味甘し。毒なし。主として痺を治す。

益符　又曰く、閉に主效がある。一名無舌といふ。

蜚厲　又曰く、婦人の寒熱に主效がある。

本草綱目蟲部第四十二卷　終

(二)黃陵ハ今ノ湖南省湘潭縣ノ境ニアリ。

本草綱目鱗部

第四十三卷

本草綱目鱗部目錄第四十三卷

李時珍曰く、鱗蟲には水、陸の二類あつて類は同くないが、鱗たるに於ては同である。この故に、龍蛇は靈物であり、魚は水畜であつて種族は別であるが、變化に於ては相通ずる。これは蓋し、質は異ふが感は同いのであつて、鱗屬はみな卵生であるが蝮蛇は胎産し、水族はみな目を瞑らぬものだが、河豚は目を眨——眨(ヘン)と發音する——がす 藍蛇の尾はその頭から受くる毒を解し、沙魚の皮は還つてその魚で作つた鱠の食積を消す。苟も非凡な叡智でなければその間の消息を窮知することは六か敷い。唐、宋の本草には蟲、魚の區分を設けなかつたが、本書には鱗部として區分し、凡て九十四種を龍、蛇、魚、無鱗魚の四類に分類した。舊本は凡て五十八種である。

神農本草經七種 梁陶弘景註
名醫別錄十種 梁の陶弘景註
唐本草一種 唐の蘇恭
本草拾遺二十八種 唐の陳藏器
食療本草六種 宋の孟詵、張鼎
開寶本草十一種 宋の馬志

嘉祐本草一種 宋の掌禹錫　日華本草一種 宋人大明
食鑑本草一種 明の甯原　本草綱目二十八種 明の李時珍

附註

魏吳普本草　李當之藥錄　宋雷斅炮炙論　齊徐之才藥對　唐甄權藥性
孫思邈千金食治　唐李珣海藥　楊損之刪繁　南唐陳士良食性　蜀韓保昇重註
宋蘇頌圖經　唐愼微證類　宋寇宗奭衍義　陳承別說　金張元素珍珠囊
元李杲法象　王好古湯液　吳瑞日用　元朱震亨補遺　明汪穎食物
汪機會編　陳嘉謨蒙筌

鱗の一　龍類九種

龍 本經　弔 拾遺 即ち紫梢花。　蛟龍 綱目 蜃を附す。
鼉龍 本經　鯪鯉 別錄 即ち穿山甲。　石龍子 本經 即ち蜥蜴。
守宮 綱目 十二時蟲を附す。　蛤蚧 開寶　鹽龍 綱目

右附方　舊十九　新四十五

鱗の二　蛇類十七種

蛇蛻 本經　蚺蛇 別錄　鱗蛇 綱目　白花蛇 開寶

烏蛇 開寶　金蛇 開寶 銀蛇を附す。　水蛇 綱目

蛇婆 拾遺　黃頷蛇 綱目 赤楝蛇を附す。　蝮蛇 別錄 斫木蛇を附す。

蚖 別錄　藍蛇 拾遺　兩頭蛇 拾遺　天蛇 綱目

苟印 拾遺　蛇角 綱目 卽ち骨咄犀。　諸蛇 綱目

右附方　舊十六　新六十

[illegible]

鱗の一　龍類九種

（一）木村(重)曰ク、龍ハおほとかげ、學名Varanus(Monitor)ナラント考フ。とかげノ形態ヲ有シ舌ハ二ツニ裂ケ蛇ノ如ク長ク口外ニ伸出セラル、體長六尺ニ達シ印度、支那南部ニ分布ス。今カリニコヽニ學名ヲ掲ゲ後考ヲ俟ツ。

（一）龍（本經上品）

和名　たつ
英名　The chinese dragon.



〔龍〕

釋名　時珍曰く、按ずるに、許愼の說文の龍の字の篆文は象形になつてゐる。生肖論には「龍は耳が聽を虧くものだ。故に龍といふ」とある。梵書には那伽といつてある。

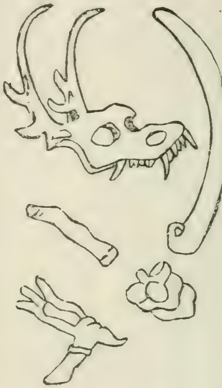
集解　時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に「龍は鱗蟲の長である。王符の說に「その形に九種の動物に似た點がある。頭の駝に似たる、角の鹿に

似たる、眼の鬼に似たる、耳の牛に似たる、項の蛇に似たる、腹の蜃に似たる、鱗の鯉に似たる、爪の鷹に似たる、掌の虎に似たるがそれだ。その背には八十一鱗あつて九九の陽數を具へ、その聲は銅盤を打ち鳴らす如く、口旁に鬚髯があり、頷下に明珠があり、喉下に逆鱗があり、頭上に(二)博山がある。博山はまた尺水とも名ける。龍に尺水がなければ昇天し得ないものだ。氣を呵して雲を成し、旣に能く水に變じ、また能く火に變ずるものだ」といつた』とある。陸佃の埤雅には『龍火は濕を得れば焰が立ち、水を得れば燔え廣がるが、人火を以て逐へば息むものだ。故に人の相火はこれに似てゐる。龍の卵は思抱に因つて生ずるもので、雄は上風に鳴き、雌は下風に鳴き、風に因つて化するものだ』とある。釋典には『龍が交尾するときには變じて二小蛇となる』とある。又、小說には、龍は性が粗猛なものだが、美玉、空靑を愛し、燕肉を嗜好し、鐵、及び莽草、蜈蚣、楝葉、五色の絲を畏れる。故に燕を食つたものは水を渡ることを忌み、雨を祈るには燕を用ゐ、水の患を鎭るには鐵を用ゐ、龍を激するには莽草を用ゐ、屈原を祭るには楝葉と色絲とで糉を裹んで江中に投ずるのだといふやうな記載もある。醫家が龍骨を用ゐるにも、やはりかや

(二)博山トハ彝器上ニ刻シタル山ノ形ヲイフ。

うな點にその性の愛惡があることを念頭に置く必要があらう。

（三）**龍骨**　別錄に曰く、（四）晉地の川谷、及び太山の巖水の岸、土穴中の龍の死んだ處に生ずる。採收に一定の時期はない。



（龍　骨）

弘景曰く、今は（五）梁、益、巴中に多く出る。骨は脊腦の白地錦文になつてゐるものを擇ぶことになつてゐる。舐めて見て舌に著くものが良し。齒は小さく強くしてまた齒の形があるかに見え、角は強くして實したものだ。いづれも龍蛻であつて、その實體の死んだものではない。

斅曰く、（六）剡州、滄州、太原のものが上級品である。その骨が細かで文の廣いものは雌、骨が粗くして文の狹いものは雄であつて、五色具はるものが上、白色、黄色のものが中、黒色のものが下級品である。凡そ一旦不淨の場所に落ちたもの、及び婦人が採つたことのあるものは用ゐられない。

（三）木村（重）曰ク、龍骨ハ恐クハあじあまんもすノ骸骨(Stegodon orientalis, Swinhoe)ナルベシ。四川省（巴ノ地）萬縣ノ附近ニテハ此象ノ化石發見セラレ體骨、齒牙等豐富ニ發掘シツツアリ。

（四）晉地ハ水部井泉水晉ノ註參照。

（五）梁、益ハ金部金ノ註、巴中ハ草部隰草類天名精ノ巴ノ註參照。

（六）剡州ハ石部石膏ノ註。滄州ハ蟲部卵生類石蠶ノ倫週ノ註參照。太原ハ草部隰草類青黛ノ註ヲ見ヨ。

普曰く、色の青白なるものが良し。

恭曰く、今はいづれも晉地に出る　生硬なものは好くなく、五色具はるものが良し。その色の青、黄、赤、白、黒は、それぞれ色と臟腑との關係に隨つて合致するものを採用すべきものなることは、五芝、五石英、五石脂を用ゐる場合と同様であるが、本經にはその點に論及してない。

頌曰く、今は(七)河東の州郡に多くある。李肇の國史補に『春水の季節になると魚が(八)龍門を登るので、そこには蛻骨が甚だ多い。地方人がそれを採つて藥とする。五色のものがある』とあつて、龍門は晉の地だから本經の記事と合致する。して見ると、龍骨といふはその魚の骨ではないかと思はれるが、又、孫光憲の北夢瑣言に『五代の時、(九)鎭州で一龍を鬪殺したことがある。土地の豪家曹寬がその二本の角を手に入れたが、その角の前面に藍色で亂錦のやうな文のある物があつた。その何物なるやに就いては何人も識るものがなかつた』とあるところから觀ると、やはり死んだものもあるわけだ。

宗奭曰く、諸説一定せず、結局は臆測であるが、嘗て崖崩れの中から、皮、體、

(七)河東ハ草部山草類甘草ノ註ヲ見ヨ。

(八)龍門ハ今ノ山西省河津縣ト陝西省韓城縣トノ中間、所謂河ヲ積石ニ導キテ龍門ニ至ルノ地ニシテ大禹ノ開鑿セル所トイフ。

(九)鎭州ハ今ノ河北省正定縣ノ地ナリ。

頭、角一揃ひ備つたものが出たことがある。それが蛻したものか斃死したものか判然せぬのであるが、それが蛻し、又は斃れたものであるとすれば有形の物だ。生きては目撃し得ないが死ねば目撃し得るといふわけである　龍が元來化の狀態にあるものとするならば、その形質だけ獨り化し得ぬといふわけがあらうか。

機曰く、經の文に死龍の骨とある。これを蛻なりといふ如きは結局臆說だ。

時珍曰く、龍骨は、本經には死龍とし、陶氏は蛻骨とし、蘇氏、寇氏の諸說はその兩說を共に疑つてゐるのであるが、竊に謂ふに、龍は神物であつて、自死する道理は無いやうに思はれるのであるが、蘇氏が引證した鬪死した龍の說や、左傳に「豢龍氏は龍を醢にし以て食ふ」とあり、述異記に「漢の和帝の時、大雨があつて龍が宮中に墮ちた。帝は命じて羹にして群臣に賜つた」とあり、博物志に『張華は龍肉を得て鮓にした。醋を得れば五色が生ずる』とある等の說を觀れば、龍には固より自死の者もあるわけだ。本經の說を正しとすべきであらう。

修治　斅曰く、凡そ龍骨を用ゐるには、先づ香草の煎湯を二回浴せ、粉に搗いて絹袋に盛り、それを燕子一羽の腸肚を去つた中に入れて井の水面上に一夜懸け、

取り出して粉に研る。補腎藥中に入れて神の如き效がある。

時珍曰く、近世の方法では、ただ赤く煆いて粉にし、また生で用ゐることもある。事林廣記には『酒に一夜浸して焙じ乾し、粉に研つて三回水飛して用ゐる。もし急用の場合には、酒で煮て焙じ乾す』とある。或は『凡そ藥に入れるには、水飛してから晒し乾し、一斤毎に黑豆一斗を用ゐて一伏時の間蒸し、晒し乾して用うべきものだ。然らざれば腸、胃に著いて晩年に熱を起す』ともいふ。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。權曰く、小毒あり。魚、及び鐵器を忌む。之才曰く、人參、牛黃と配合するが良し。石膏を畏る。時珍曰く、許洪は『牛黃は龍骨を惡む。而るに龍骨は牛黃を得れば更に良い。制伏の關係に因るのだ』といつてある。その氣は陽中の陰を收め、手、足の少陰、厥陰の經に入る。

【主治】【心腹の鬼疰、精物の老魅で欬逆し、膿血を洩痢するもの、婦人の漏下、癥瘕堅結、小兒の熱氣驚癇】（本經）【心腹煩滿、恚怒の氣が心下に伏在して喘息し得ざるもの。腸癰、內疽、陰蝕。四肢が痿枯し、夜間睡眠中に自ら驚いて汗の出

るもの。汗を止め、小便尿血を縮め、精神を養ひ、魂魄を定め、五臟を安ずる。白龍骨は、多寐洩精、小便洩精に主效がある】（別錄）【邪氣を逐ひ、心神を安じ、夜間夢中の鬼交で虛して夢多く、精神混亂して落付かぬを止め、冷痢を止め、膿血を下し、婦人の崩中帶下を止める】（甄權）【妊婦の漏胎。腸風下血、鼻洪吐血を止め、瀉痢、渴疾を止め、脾を健にし、腸、胃を澀する】（日華）【腎を益し、驚を鎭め、陰瘧を止め、濕氣脫肛を收め、肌を生じ、瘡を斂める】（時珍）

「發明」斅曰く、氣は男子の腎臟中に入るものだ。故に腎を益する藥に用ゐるがよし。時珍曰く、澀は脫を去るものである。故に成氏は「龍骨は能く浮越せる正氣を收斂し、大腸を固くして驚を鎭める」といつてゐる。又、帶脈の病となつたものに主效がある。

「附方」舊十一、新七。【健忘】久しく服すれば、聰明となり智慧を益す。白龍骨、遠志等分を末にし、一日三回、食後に酒で方寸匕を服す。（千金）【勞心夢洩】龍骨、遠志等分を末にし、煉蜜で梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、三十丸づつを蓮子湯で服す（心統）【精を暖め、陽を益す】前記の方から硃砂を去り、三十丸づつを

空心に冷水で服す。(經驗)【睡ると直ちに洩精するもの】白龍骨四分、韮子五合を散にし、空心に方寸匕を酒で服す。(梅師方)【遺尿淋瀝】白龍骨、桑螵蛸等分を末にし、二錢づつを鹽湯で服す。(梅師方)【老瘧の止まぬもの】龍骨末方寸匕を、發作の一時前に酒一升半を煮て三沸したもので盡く熱服し、寢具を温に被て汗を取れば效がある。(肘後方)【泄瀉の止まぬもの】白龍骨、白石脂等分を末にして水で梧子大の丸にし、紫蘇木瓜湯で服す。大人、小兒それぞれ量を計つて用ゐる(心鑑)【傷寒毒痢】傷寒發病後八九日乃至十餘日にして大いに煩渴し、熱を作し、三焦に瘡䘌があつて下痢し、或は口を張つた舌を吐き、目が爛れ、口舌に瘡が生じ、意識明瞭ならぬものには、この方を用ゐて熱毒を除き、痢を止める。龍骨半斤、水一斗を四升に煮取つて井底に沈め、五合を冷服し、漸漸に進める。(外臺方)【熱病下痢】死せんとするには、龍骨半斤を水一斗に研つて五升に煮取り、極めて冷えるを俟つて少しづつ飲む。發汗して癒效を擧げる。(肘後方)【久しき休息痢】止まぬには、龍骨四兩を打碎き、水五升で二升半に煮取り、五回に分けて冷服し、同時に米飲で和して丸にし、十丸づつを服す。(肘後方)【久痢脱肛】白龍骨粉を撲つ。(姚和衆方)【鼻衄眩冒】死せんとする

(二〇)木村(重)曰ク、あじあまんもすノ齒、科名まんもす(舊象)科。

には、龍骨末を吹く。(梅師方)【吐血、衄血、九竅の出血】いづれも龍骨末を鼻中に吹き入る。昔、ある患者は一斛の衄血があつて、あらゆる方を用ゐても止まなかつたが、この方を用ゐて斷止した。(三因方)【耳中の出血】龍骨末を吹入る。(三因方)【男子、婦人の尿血】龍骨末方寸匕を水で服す。一日三回。(千金方)【小兒の臍瘡】龍骨を煆き研つて傅ける。(聖惠方)【陰囊汗癢】龍骨、牡蠣粉を撲つ。(醫宗三法)

(二〇)**龍齒** [修治] 龍骨に同じ、或は酥で炙くともいふ。

[氣味]【澁し、涼にして毒なし】當之曰く、大寒なり。之才曰く、平なり。人參、牛黃と配合するが良し。石膏、鐵器を畏る。

[主治]【精物を殺す。大人の驚癇、諸痙、癲疾で狂走し、心下の結氣で喘息し能はぬもの。小兒の五驚、十二癇】(本經)【小兒の身熱で近くべからざるもの。大人の骨間の寒熱。蠱毒を殺す】(別錄)【心を鎭め、魂魄を安ずる】(甄權)【煩悶、熱狂、鬼魅を治す】(日華)

[發明] 時珍曰く、龍は東方の神である。故にその骨と角、齒とはいづれも肝病に主效があるのだ。許叔微が『肝は魂の變化する能力を藏するものだ。故に魂が

浮遊して定らぬを治するに龍齒を用ゐる』いつたのはその意味である。

(一一)**龍角**　[修治]　骨に同じ。

[氣味]　【甘し、平にして毒なし】之才曰く、乾漆、蜀椒、理石を畏る。

[主治]　【驚癇、瘛瘲、火の如き身熱、腹中堅、及び熱洩。久しく服すれば身を輕くし、神明に通じ、天年を延べる】(別錄)【小兒の大熱】(甄權)【心熱風癇には、爛角を磨つた濃汁二合を、一日二回、食前に服す】(蘇頌)。記載は韋丹方にある。

[發明]　頌曰く、骨、齒は醫家で常用するが、角は使ふことが稀だ。ただ深師の五邪丸に用ゐる『角がないときは齒を用ゐる』とあるが、千金では、心病を治するに角、齒を共に用ゐたものがある。

龍腦　[主治]　【その形は肥軟なもので、能く痢を斷つ】(陶弘景)

(一二)**龍胎**　[主治]　【產後の餘病、婦人の月經閉止】弘景曰く、近頃は巴中で形體の具はつた龍胞が數々採れた。產後の餘病を治するには、必ず末にして服すべきものだといふ。頌曰く、許孝宗の篋中方に『龍胎は蜀中の山澗に出る。大いに乾魚鱗に似たもので、煎する時には甚だ腥臊なものだ。婦人月經の積年不通なるを治

(一一)白井曰ク、龍角ハ舊象ノ牙ナラン。

(一二)岡田曰ク、龍胎未詳。

するには、瓦松、景天各少量と共に水二盞で一盞に煎じ、滓を去つて二回に分服する。少頃して腹中が轉動して下るものだ」とある。按ずるに、この物は方家では知るものが稀だが、昔は嘗て一般に用ゐられたらしいから、世間には識つてゐるものもあることと思ふ。時珍曰く、胞と胎とは倶に巴蜀に出る。いづれも血疾に主效あるものだ。蓋し兩者一物である。

龍涎　機曰く、龍の吐いた涎沫は香を制し得るものだ。時珍曰く、龍涎は方藥に用ゐることは鮮だが、ただ諸香に入れて、能く腦、麝の香氣を收蓄して數十年間消散せぬといふ。又、これを焚けば翠烟が空に浮ぶともいふ。西南方の海洋中に出るもので、それは春期中に群龍が吐いた涎沫が浮び出るのを、その地の蠻民が採收して賣り出すのであつて、一兩に付て千錢に取引される。また大魚の腹中を剖いて採るものもあるといふ。その狀態は、初は脂、膠のやうで黄白色だが、乾けば塊となり、黄黑色で百藥煎のやうに膩理があり、久しく經てば紫黑色になり、五靈脂のやうで光澤がある。その體は浮石のやうに輕飄で腥臊なものだ。

（一）木村（重）曰ク、支那古代ノ金石彫刻ニハ弔ト稱シテ蛇頭龜身ノ狀チ畫クアリ。詳シクハ後攷チ俟ツ。

弔（一）（拾遺）

和名未詳
學名未詳

【釋名】 **吉弔** 時珍曰く、弔は舊本には獨立した一條はなかつたが、ただ蘇頌の圖經に吉弔脂の記載があつて『龍が生んだもの』といひ、陳藏器の拾遺には予脂の一條があつて、廣州記に『予。蛇頭鱉身。主二蛭刺一云云』とあるを引照したが、今、廣州記、及び太平御覽を調べて見るに、ただ『弔。蛇頭龜身。膏至輕利』等の語があるだけで、所謂、頭蛇、身鱉の予の膏が蛭刺に主效があるといふことは書いてない。これは、弔の字は予に、龜の字は鱉に、至輕利の三字は主蛭刺に似てゐるから、陳氏が見た廣州記は傳寫の際に誤つたものだらう。陳氏はその誤そのままを踏襲して了つたのだ。弔は龍の種として生れるといふ以上、身が鱉であるわけはあるまい。病のうちにも蛭刺といふ病證はないのだから、その誤なることは言ふまでもない。ここに改め正して置く。精をば **紫稍花** と名ける。

【集解】 藏器曰く、裴淵の廣州記に『弔は嶺南に生ずる。頭は蛇、身は龜で、

水に宿り、また木にも棲む。その膏は至つて輕利なもので、銅、及び瓦の器に入れたのでは浸出して了ふが、ただ雞卵の殼に入れて置けば漏らない。その物に透ることとは醍醐よりも甚しい。摩すれば毒腫を治するに甚だ效驗がある。

○頌曰く、姚和衆の延齡至寶方に『吉弔脂は福建州に出る。甚だ得難いものだ。これを貯藏するには、琉璃の瓶に入れて更に樟木の盒に入れ、二重にして置かねばならぬ。さうせねば氣が透つて消失して了ふ』とあり、孫光憲の北夢瑣言には『海上の者の言に、龍は二箇づつ卵を生むもので、その中の一箇は吉弔となる。多くは鹿と游ぶもので、水邊に精液を遺すことがあつて、それが(二)流槎に値ふとその木の枝に枯れ著く。(一)蒲槌のやうな狀態で、微靑黃色のものだ。また灰色のやうなものをば紫稍花と稱へ、坐浴の湯に多く用ゐる』とある。

○時珍曰く、按ずるに、裴、姚二氏の說のよく合致するところを見ると、弔脂、卽ち吉弔脂なることに疑ない。又、陳自明の婦人良方には『紫稍花は湖澤中に生ずる。これは魚、蝦が竹木上に生み著けた卵で、狀態は餳のやうに透き徹るものだ。その木を去つて用ゐる』とあつて、これは孫氏の說と同じくない。近頃房中の諸術に多

(二)流槎ハイカダ。
(一)蒲槌ハ香蒲ノ花穗。

く用ゐる紫稍花は、いづれも湖澤中から採るもので、その色は灰白色で輕く鬆いものだ。恐らく眞物ではない。孫氏の說が正しいやうに思はれる。或は、紫稍花は龍涎と相類するものだともいふが、その事實なりや否やは判らない。

弔脂　一名弔膏　氣味　【毒あり】　主治　【風腫、癰毒、癮疹、赤瘙、瘑疥、痔瘻、皮膚の頑痺、踠跌、折傷の內損瘀血には、脂を塗り、その上を手を炙つて熱摩して透す】（藏器）【聾耳を治するには、經過年月の多少を問はず、每日杏仁半箇ほどの量を點入すれば癒える】（蘇頌）記載は延齡方にある。

紫稍花　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【陽を益し、精を祕し、眞元の虛憊、陰痿、遺精、餘瀝、脂の如き白濁、小便の節度なきもの、囊下の濕癢、婦人の陰寒、冷帶を療ず。丸、散、及び坐湯に入れて用ゐる】（時珍）又、和劑の玉霜丸の註には『紫稍花のないときは木賊をその代用とする』とある。

附方　新二。　【陽事痿弱】紫稍花、生龍骨各二錢、麝香少量を末にして蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを燒酒で服す。その藥效を解せんとするには、生薑甘草湯を飲む。（集簡方）【陰癢で瘡の生じたるもの】紫稍花一兩、胡椒半兩の煎湯で數回

溫洗すれば癒える。（逸傷論）

（一）蛟龍（綱目）

和名 とびとかげ
學名 Draco maculatus, Gray.
科名 とかげ科

【釋名】時珍曰く、按ずるに、任昉の述異記に『蛟は龍の屬である。その眉が交叉して生えてゐるから蛟といふのであつて、鱗あるを蛟龍といひ、翼あるを應龍といひ、角あるを虬龍といひ、角なきを螭龍といふ』とある。梵書には宮毗羅といつてある。

【集解】時珍曰く、按ずるに、裴淵の廣州記に『蛟は長さ一丈餘のもので、蛇に似て四足あり、形は廣くして楯の如く、頭が小さくして頸が細く、頸に（二）白嬰があり、胸の前が赭色で背上に青斑があり、脇邊は錦のやうで尾に肉環がある。太いものには數圍のものがあり、その卵も大きい。よく魚を率ゐて飛ぶものだ。鼈を得れば免れ得る』とある。王子年の拾遺錄には『漢の昭帝が（三）渭水で釣をしたときに白蛟を得た。蛇のやうで鱗甲がなく、頭に軟角があり、牙は唇の外に出てゐるもの

（一）木村（重）曰ク、蛟龍ハ雲南省山地ニ住ムとかげニシテ、上肢ヨリ胴ニ廣キ膜アリテ樹間ヲ飛ビ得、美ナル體色ヲ有ス稀ニ捕獲サル、日本ニ産セズ。

（二）嬰ハ貝デ作ツタ首飾リ。

（三）渭水ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。

であつた。大官に命じて鮓にして食つたが、甚だ美味であつた。骨は青くして肉が紫なものだつた』とある。これに據れば蛟もやはり食ひ得るものだ。

［附錄］蜃　之刃の切（シン）と發音する。時珍曰く、蛟の屬に蜃といふがある。その形狀はやはり蛇に似て大きく、龍のやうに角があり、鬣は紅く、腰以下の鱗は盡く逆立ち、燕子を食ふ。よく氣を吐いてその中に樓臺、城郭の景狀を現はすもので、それは將に雨降らんとするときに見える。蜃樓と名け、また海市ともいふものだ。その脂を蠟に和して作つた蠟燭は百步の先まで香氣が聞え、その烟の中にもやはり樓閣の形が現はれる。月令には『雉は大水に入つて蜃となる』とあり、陸佃は『蛇が龜と交れば龜を生み、雉と交れば蜃を生む。物異にして感同じきものだ』といひ、類書には『蛇と雉と交つて生んだ子を蟂といふ。蛇に似て四足あり、能く人を害す』とあり、陸禋は『蟂の音は梟（ケウ）であつて、蛟のことだ。或は蜃ともいふ』といひ、又、魯至剛は『正月に蛇と雉と交つて卵を生み、雷に遇ふと數丈の土中に入つて蛇の形となり、それが二三百年を經るとよく升騰する。その卵が土中に入らなければただの雉になるのだ』といつてある。この數說に就いて觀れば、蛟と蜃と

は共に一類のもので、生物として存在するものも、化せる體としての現象と見るべきものもあることになる。一種の海蛤にこれと同名のものがあつて、羅願は、雉から化した蜃だといつてゐるが、事實か否か判らない。介部車螯の條に詳記してある。

精【氣味】缺【毒あり】時珍曰く、按ずるに、張仲景金匱要略に『春、夏の二時に蛟龍が精を帶びて芹菜中に入る。人がそれを食へば蛟龍瘕となつて忍び難く痛む。治するには硬餳を一日に二三升づつ服す。蜥蜴のやうなものを吐出するものだ』とある。唐の醫師周顧は、これを治するに、雄黃、朴硝を煮て服して下した。

髓【主治】【顏面に傅ければ顏色を好くし、又、出產を容易ならしめる主效がある】（時珍）記載は東方朔別傳にある。

(一)鼉龍（本經中品）

和名 ちやうかうわに（長江鰐）
學名 Alligator sinensis, Fauv.
科名 クロコデル科

【釋名】**鮀魚**（本經）**土龍** 藏器曰く、本經に鮀魚とあるが、これは鼉と改むべきものである。鼉は、形は龍のやうで聲が甚だ怖ろしく、長さ一丈ほどあり、能

（一）木村（重）曰ク、鼉龍ハ揚子江中流以下ノ特產ノわにナリ、長サ六尺許、河濱沼澤ノ泥中ニ深サ五尺位ノ穴ヲ掘リテ棲ム、魚、蛙ヲ食ス。

く氣を吐いて雲を起し雨を降らすものだ。これは龍の類である以上、魚の字は取去るが穩當だ。

時珍曰く、鼉の文字は、その頭、腹、足、尾の狀態を形容してその事物をいひ表はしたものだ。博物志には土龍といつてある。鮀といふは魚の名であつてこの物ではない。本書には陳氏に依つて改正して置く。

【集解】別錄に曰く、鮀魚甲は南海の池澤に生ずる。採收に一定の時期はない。

弘景曰く、卽ち鼉甲のことだ。皮は鼓に張る。容易に死なぬもので、皮を剝ぐには沸湯を口から腹に沃ぎ入れて良久して剝ぐのである。

藏器曰く、鼉は性睡を嗜み、常に目を閉ぢてゐる。力は至つて猛く、能く江岸を碎いて穴中に入るものだ。これを採り取るには、百人で掘つたときは百人で牽かねばならず、一人で掘つたときは一人で牽かねばならぬ。さうせねば絕對に出ないものだ。

頌曰く、現に(二)江湖に極めて多い。形は守宮、鯪鯉などの動物に似て長さ一二丈あり、背、尾倶に鱗甲がある。夜になると鳴き吼えるのを舟人共が畏しがる。

安徽省蕪湖附近ニテヨク捕獲サル、藥用並ビニ迷信的ノ陳列品トナル。南方支那ニハ別種ヲ產ス、鼉龍(クアンロン)又ハ黿龍(リンロン)トモ謂ハル。

(二)江湖ハ大江、洞庭湖。

（三）篾ハ笓ノ俗字。集韻ニ頻脂ノ切（ヒ）箆ニ同ジ、鰕ヲ取ルノ具ナリトアリ。纜ハつなナリ。

（四）魚腦中ノ骨ヲ枕トイフ。

時珍曰く、鼉の穴は極めて深いものだ、漁夫は（三）篾纜に餌を著けて穴中に探り入れ、その鈎を吞むを俟つて徐徐に引き出す。能く横に飛ぶ性質のもので、上には騰れない。その聲は鼓の音のやうで、夜間更刻に應じて鳴くところから鼉鼓といひ、また鼉更ともいふ。俚人はそれを聽いて雨を占ふ。その（四）枕は瑩淨で魚枕に勝るものだ。卵は甚だ多く生むもので、百ほども生み、その親自身にもそれを食ふ。南方ではその肉を珍重して、婚禮の結納品などに用ゐる。陸佃は『鼉は身に十二種の動物に似た肉を具へてゐるもので、その內の蛇肉は尾に在り、最も毒なるものだ』といつてある。



〔鼉龍〕

鼉甲 【修治】 酥で炙り、或は酒で炙つて用ゐる。

【氣味】 【酸し、微溫にして毒あり】 權曰く、甘し、平にして小毒あり。日華曰く、毒なし。蜀漆が使となる。芫花、甘遂、狗膽を畏る。

【主治】 『心腹の癥瘕伏堅、積聚寒熱、婦人の小腹、陰中が相引いて痛むもの、

崩中下血、五色。及び瘡疥、死肌】(本經)【五邪で涕泣し、時に驚くもの、腰中の重痛、小兒の氣癃、眥潰】(別錄)【小腹氣疼、及び驚恐】(孟詵)【血積、婦人の帶下、百邪、鯛魎を除く】(甄權)【牙齒の疳䘌、宣露を療ず】(日華)【蟲を殺す。瘰癧、瘻瘡、風頑瘙疥、惡瘡を治するには、炙いて燒酒に浸して服す。功は鼈甲と同じ】(藏器)【陰瘡を治す】(時珍)

發　明　時珍曰く、鼉甲の主なる對症は多く厥陰に屬し、功果は只だ肝木を平にし、血を治し、蟲を殺すに在る。千金方に、風癲を治するものに鼉甲湯がある。當今藥種店で、能く蠱を辟けるものだといつて懸けてあるが、やはり殺蟲力を應用する意味である。

附　方　舊一。【腸風痔疾】頌曰く、皮、及び骨を灰に燒き、二錢を空心に米飲で服す。甚しきには、紅雞冠花、白礬の末を入れて和す。

肉　氣　味　【甘し、小毒あり】頌曰く、肉の色は雞に似たもので、冷氣癇疾を發する。藏器曰く、梁の周興嗣はこの肉を嗜み、後に鼉に噴かれて惡瘡が起きた。この物は靈妙な力を有つものだから、食はぬにましたことはない。その涎は最も毒

である。陶曰く、肉は至つて補益するものだ。やはり必ずしも食はぬと限つたものでもない。

【主治】【氣の缺乏で吸吸として足の地に立たぬもの】（別錄）【濕氣、邪氣の諸蟲、腹内の癥瘕、惡瘡】（藏器）

脂【主治】【風、及び惡瘡を摩す】（張鼎）

肝【主治】【五尸病には、一具を炙熟して蒜虀と共に食ふ】（肘後）

(一)鯪鯉（別錄下品）

和名　せんざんかふ
學名　Manis pentadactyla Linnæ,
科名　せんざんかふ科

【釋名】龍鯉（郭璞）　穿山甲（圖經）　石鯪魚　時珍曰く、その形は鯉に似たもので、陵に穴を穿つて居るものだから鯪鯉といふのである。俗に穿山甲と呼ぶ。郭璞の賦には龍鯉といつてある。臨海記には一尾の刺が三角菱のやうだから石鯪といふ(二)とある。

【集解】頌曰く、鯪鯉、即ち今の穿山甲であつて、(三)湖廣、嶺南、及び金、商、

(一)木村(重)曰ク、鯪鯉ハ頭部胸部ヲ除キ全身鱗ニ覆ハル、體ハ褐色ニテ大ナルハ四尺ニ達ス、而シテ三分ノ一ハ尾部ナリ。蟻、蜂ノ幼蟲等ヲ長キ舌ニテ舐食ス。此種ハ西印度、ネパール、アッサム及支那ニテハ揚子江南部四川省ニ産ス、海南島最モ多シ。此屬迪ニ二種ヲ産ス、鯪鯉(ラリー)ト稱ス。
(三)湖廣ハ蟲部化生

類禽鷲ノ註、嶺南ハ金部金ノ註、金州ハ草部山草類朮ノ註、商州ハ石部丹砂ノ註、均州ハ草部蔓草類蓁藘ノ註、房州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

均、房の諸州に生じ、深山、大谷の中にいづれもゐる。

○○弘景曰く、形は鼉に似て短小で、又、鯉に似て四足があり、黒色だ。陸にも水にも自由に棲息するもので、日中に岸に出て鱗甲を張り開き、死んだやうな狀態を裝ふて蟻をその甲中に誘き入れ、そのまま甲を閉ぢて水に入つて開き、蟻がみな浮き出るのを舌で取つて食ふ。



〔鯪鯉〕——穿山甲——

○○時珍曰く、鯪鯉は形狀が鼉のやうで小さく、背は鯉のやうで濶く、首は鼠のやうで牙がなく、腹には鱗がなくて毛があり、舌が長く、喙が尖り、尾と身と等しく、尾の鱗は尖つて厚く、三角がある。腹中には臟腑が完全に具つてゐて胃が特に大きい。蟻を誘ひ寄せて食物とするもので、その胃を開剖して見ると蟻が一升ほども詰まつてゐる。

甲【修治】○○時珍曰く、方に用ゐるには、或は炮き、或は燒き、或は酥で炙り、醋で炙り、童尿で炙り、或は油で煎じ、土で炒り、蛤粉で炒る。それぞれ處方に隨つて修治すべきものであつて、生では用ゐられたことがない。就中尾甲の力が勝れ

たものとなつてゐる。

〔氣味〕【鹹し、微寒にして毒あり】〔主治〕【五邪の驚啼、悲傷には、灰に燒いて酒で方寸匕を服す】（別錄）【小兒の驚邪、婦人の鬼魅悲泣、及び疥癬、痔漏】（大明）【蟻瘻瘡癩、及び諸疰疾を療す】（弘景）【燒灰を惡瘡に傅ける。又、山嵐瘴瘧を治す】（甄權）【痰瘧の寒熱、風痺の强直、疼痛を除き、經脈を通じ、乳汁を下し、癰腫を消し、膿血を排し、竅を通じ、蟲を殺す】（時珍）

〔發明〕弘景曰く、この物は蟻を食物とするものだ。故に蟻瘻を治す。

時珍曰く、穿山甲は厥陰、陽明の經に入る。古方には用ゐたものが稀だが、近世では風瘧、瘡科、通經、下乳に用ゐる要藥となつてゐる。蓋しこの物は、棲むには山に穴を穿ち、食物は水に入つて食ふ。陰に出で陽に入り、能く經絡に竄入して患部に達するものだからである。按ずるに、劉伯溫の多能鄙事に『油の容器が滲み漏るときは、穿山甲の裏面の肉靨を剝ぎ取つて投入する。自然に漏る部分に達して補ひ止めるものだ』とあり、又、永州記に「この物は隄岸上で殺してはならぬ。その血が土に入ると隄岸を滲漏せしめる處がある」とある。この二說を觀ると、これは

山をも穿ち隄をも漏らしめ、又、能く滲る部分にも達するものであつて、その性の走竄するものなることが首肯される。諺に『穿山甲、王不留を婦人が食へば乳が長流する』といふは、やはりその迅速なることを言つたものだ。李仲南は、その性は專ら行り散ずるものだから、病に的中すれば使用を止むべきものだ。過服してはならないと說いてある。又、按ずるに、德生堂經驗方には『凡そ風濕冷痺の證は水濕に因つて起るもので、全身の上下が强直して屈伸不能になり、忍び難く痛むものだ。これには五積散に穿山甲七片を加へる。病が手足の左右、或は臂、脇のいづれにあるか、その疼痛のある部位を看て、鯪鯉の身のその部分の甲を取つて炮熟し、全蠍を炒つて十一箇と共に、葱、薑を共に水で煎じて無灰酒一匙を入れたもので熱服し、汗を取り、風を避けるが甚だ良し』とある。

附方　舊五、新十八。

【中風癱瘓】手足の擧らぬには、穿山甲を左癱には右甲を、右瘓には左甲を炮熟し、大川烏頭を炮熟し、紅海蛤の碁子ほどの大いさのものと各二兩を末にし、半兩づつを葱白汁と擣き和して徑一寸半の厚い餅にし、病の左右に隨ひ脚の心に貼つて縛定し、密室內に安坐して脚を熱湯を入れた盆中に浸し、

身體が麻し、汗の出るを待つて急に藥を去る。十分に注意して風を避けねばならぬ。それで自然に手足が擧るやうになる。かくて半月に再び一回試みれば病根を除く。口を忌み、色を遠ざけて攝生せねばならぬ。やはり諸種の風疾を治するものだ。（衛生寶鑑）【熱痔で寒せぬもの】穿山甲一兩、乾棗十箇を共に燒いて性を存して末にし、二錢づつを發作の日の五更に井華水で服す。（楊氏家藏）【下痢裏急】穿山甲、蛤粉等分を共に炒つて研末し、一錢づつを空心に溫酒で服す。（普濟方）【腸痔、氣痔】膿血の出るには、穿山甲を燒いて性を存して一兩、肉豆蔻三箇を末にし、二錢づつを米飲で服す。甚しきには蝟皮灰一兩を加へる。病に的中すれば止める。（衍義）【鼠痔で瘡を成すもの】腫痛するには、穿山甲の尾尖の部分一兩を炙いて性を存し、鼈甲を酥で炙いて一兩、麝香半錢を末にし、一錢づつを眞茶湯で服して效を取る。（直指方）【蟻瘻の癒えぬもの】鯪鯉甲十四枚を灰に燒き、猪脂で調へて傅ける。（千金方）【婦人の陰㿉】硬くして卵のやうな狀態となりたるには、病の左右に隨つて穿山甲の左右邊五錢を取り、沙で黃に炒り焦して末にし、二錢づつを酒で服す。（摘玄方）【乳汁不下】涌泉散——穿山甲を炮いて研末し、一日二回、酒で方寸匕を服し、外部から

は油梳で乳を梳れば通ずる。（單驗方）【乳嵒、乳癰】方は上に同じ。【吹妳疼痛】穿山甲を炙き焦し、木通と各一兩、自然銅を生で半兩を末にし、二錢づつを酒で服して效を取る。（圖經）【痘瘡の變黑】穿山甲、蛤粉を炒つて末にし、毎服五分に麝香少量を入れて溫酒で服す。紅色を發し、神の如き效がある。（直指方）【腫毒の初期】穿山甲を穀芒の熱灰中に挿入して炮き焦し、末にして二兩に麝香少量を入れ、二錢半づつを溫酒で服す。（仁齋直指方）【馬疔腫毒】穿山甲を燒いて性を存し、貝母と等分を末にし、酒で調へて三四回服してから、下劑を用ゐて惡物を利し去れば癒える。（鮑氏方）【便毒、便癰】穿山甲半兩、猪苓二錢をいづれも醋で炙いて研末し、酒で二錢を服し、外部には穿山甲末を麻油、輕粉に和して塗る。或はただ土を塗る。（直指）【潰壞せる瘰癧】集驗方では、鯪鯉甲二十一片を燒き、研つて傅ける。○壽域方では、穿山甲を土で炒り、斑蝥、熟芥と等分を末にして傅け、外に烏桕葉を貼つて四壯灸すれば效がある。【眉の鍊癬瘡】眉中に生ずるものである。穿山甲の前膊のものを炙き焦して末にし、淸油に輕粉を和して調へて傅ける。（直指方）【蟻が耳に入つたとき】鯪鯉甲を燒いて研り、水で調へて灌ぎ込めば出る。（肘後）【聤耳の膿の出る

もの】穿山甲を燒いて性を存し、麝香少量を入れて吹く。三日で水が乾いて癒える。（錢氏小兒方）【耳の內部の疼痛】穿山甲二箇、夾土狗二箇を共に黃に炒り焦して末にし、一字を耳に吹入る。また耳聾を治す。（普濟方）【耳鳴、耳聾】突然聾せるもの、及び腎虛で耳內に風、水、鐘、鼓の如き聲あるには、穿山甲の大片一箇を蛤粉で赤く炒り、蠍梢七箇、麝香少量と末にし、麻油で化した蠟で和して挺子にし、綿で裹んで塞ぐ。（攝生方）【火眼赤痛】穿山甲一片を末にし、白紙に舖いて繩に卷き、烟に燒いて熏ずる。（壽域方）【倒睫拳毛】穿山甲を竹刀で肉を刮り去り、その甲上に羊腎脂を抹して黃に炙き、七回同樣に繰返して末にし、眼の左右に隨つて一字を鼻中に嗜ぎ、口中に水を噙む。一日三回、二个月にして效を取る。（儒門事親）

肉［氣味］【甘く濇し、溫にして毒あり】時珍曰く、按ずるに、張杲醫說に「鯪鯉肉は最も風を動ずるものだ。風疾ある人は、纔に數切れを食つても疾が一時に發し、四肢が頓かに不遂になる」とある。予が竊に謂ふに、この物は竄して血を行る性質がある。風疾の人は多く血虛するものだから、かやうな現象を惹起すのだ。兎に角その氣、味は共に惡いもので、到底使用に堪へないものだ。

(一)石龍子（本經中品）

和名　あをすぢとかげ
學名　Eumeces elegans, Boulenger.
科名　とかげ

〔釋名〕山龍子（別錄）泉龍（繁露註）石蜴　蜴（エキ）と發音する。蜥蜴（別錄）豬婆蛇（綱目）守宮　時珍曰く、この物は山石の間に生ずるもので、能く雹を吐き、雨を祈るに用ゐられる。故に龍子なる名を呼ばれたのだ。蜥蜴とあるは、本は析易と書いたもので、許愼は『易の字の篆文はこの物の象形だ』といひ、陸佃は『蜴は善く變易して雹を吐き、陰陽析易の義がある。周易の名は蓋し此に取つたものだ』といつてある。今俗に豬婆蛇と呼ぶものがそれである。弘景曰く、守宮とは蝘蜓のことだが、この物も守宮と名けるので甚だ區別がつき兼ねる。守宮の條に詳記する。

〔集解〕別錄に曰く、石龍子は(二)平陽の川谷、及び荊州の山石の間に生ずる。五月に取つて石上に著けて乾かす。

保昇曰く、(三)山南道の襄州、申州の處處にある。三、四、八、九月に採り、腹中の物を去つて熏じ乾す。

(一)木村(重)曰ク、體ノ背面ハ暗褐色五條ノ青綠色ノ縱線アリ、腹面ハ黃褐色、六寸ニ達ス、福建省ヨリ中央支那ニ多シ、臺灣、沖繩縣ニモ住ム。此屬他ニ二種支那ニ分布スルモ、一般的ノモノヲ取ル。

(二)平陽、堯ノ都セル處トイフ。今ノ山西省平陽府臨汾縣、卽チ漢ノ平陽縣ノ地ナリ。

(三)山南道ハ草部隰草類、漏盧ノ註、襄州ハ石部理石ノ註、申州ハ同桃花石ノ註ヲ見ヨ。

○○弘景曰く、この物の類に四種あつて、形大きくして純黄なるものを蛇醫母といひ、また蛇舅と呼ぶ。藥用には入れない。蛇醫に似て形小さく尾長く、人を見ても動かぬものを龍子といふ。形小さくして五色があり、尾が青碧色で美しいものを蜥蜴といふ。いづれも人を螫さない。一種は籬や壁に縁り傳はり、形が小さく色の黒いもので、これは蝘蜓といふ。人が螫されると必ず死亡するといふことだが、被害の事實はまだ聞かない。

○恭曰く、龍子、卽ち蜥蜴である。形は細くして長く、尾と身とは蛇に類似して四足があり、その足を取去れば蛇の形そのままだ。五色のものが雄であつて、藥用として良好だ。色の備らぬものは力が劣る。蛇師といふは山谷に生ずるもので頭が大きく尾が小さくして短く、色は青黄で或は白斑がある。


〔石龍子〕
——蜥蜴——

蝘蜓といふは人家の屋壁の間に生ずるもので、蛇師に似たものだ。卽ち守宮であつて、一名蠑螈といふ。爾雅には互に名を重ねて言つてあるが、いづれも眞說でない。

○頌曰く、爾雅には、蠑螈、蜥蜴、蝘蜓、守宮を一物とし、方言には、草に在るを

蜥蜴、蛇醫、壁に在るを守宮、蝘蜓とし、字林には、蠑螈を蛇醫としてある。これ等の諸說に據れば、草澤に在るものが蠑螈、蜥蜴、屋壁に在るものが蝘蜓、守宮となるわけだ。藥に入れるには草澤のものを良しとする。

○時珍曰く、諸說一定せぬが、大體に於てこの物には水、旱の二種あり、山石にあると、草澤にあると、屋壁にあるとの三者の區別があつて、本經にただ石龍を用うとあるものは、後世一般にただ蜥蜴と呼んでゐるものが事實同一物である。且つ山石の間に生ずとある說明も石龍、山龍なる名稱と符合してゐる。草澤にゐる蛇師、屋壁にゐる蝘蜓とは自から異ふ。蘇恭は、蛇師は山谷に生ずると云ひ、守宮を蠑螈とし、蘇頌は、草澤のものを藥に入れるとしてあるが、いづれも本經と合致しない。術家で雨を祈るに守宮を蜥蜴としてあるは就中甚しい謬だ。これに關する說明は、左の如く三種に整理すれば事實が明瞭となるわけだ。

　山石の間に生ずるもの——石龍といふ。卽ち蜥蜴であつて、俗に豬婆蛇と呼ぶ。蛇に似て四足あり、頭が扁く。尾が長く、形は細く、長さは七八寸から、大なるものは一二尺、金碧色の細鱗があり、その五色全きものが雄であつて、

藥用として就中勝れてゐる。

草澤の間に生ずるもの――蛇醫といふ。又、蛇師、蛇舅母、水蜥蜴、蠑螈と名け、俗にこれも豬婆蛇と呼ぶ。蛇が負傷すると草を啣んで敷かせ、又、能く水に入つて魚と交合するところから右の諸名がある。形狀は石龍と同じだが、頭が大きく、尾が短く、形態が粗く、色は青黃でやはり白斑があるものだ。藥には用ゐない。

屋壁の間に生ずるもの――蝘蜓といふ。卽ち守宮である。蛇醫に似て短小で、灰褐色のものだ。いづれも人を螫さない。これは本條に詳記してある。

又、按ずるに、夷堅志に「劉居中は山中で百匹の大蜥蜴を見た。長さ三四尺、脂のやうに光膩なもので、彈丸ほどの雹を吐き、忽にして風雷を作して雹を雨らせた」とある。

宗奭曰く、ある人は、蜥蜴が石の罅隙から出て水を數十回飲むうちに、そこの石の下に一二升の水雹が溜つたのを見たが、それからまだ數里と行かぬ間に猛烈な雹が降つたといふ。今一般にこの物で雨を祈るのは蓋しかかる事實から來たものだ。

(四)陰㿗、脫腸ナ云フ。

【修　治】時珍曰く、古方では酥を用ゐて炙り、或は酒で炙つたものだが、ただ傳尸勞瘵を治する天靈蓋丸だけは、石蜥蜴を腸肚のあるまま醋で四十九回炙つて用ゐてある。やはり特殊な一方法だ。

【氣　味】【鹹し、寒にして小毒あり】之才曰く、硫黃、蕪荑、斑蝥を惡む。

【主　治】【五癃、邪結氣。小便、水道を利し、石淋を破り、血を下す】(別錄)【水飲(四)陰㿗を消し、瘢を滑し、血を破る。娠婦は用ゐることを忌む】(時珍)

【發　明】宗奭曰く、蜥蜴は能く雹を吐し、雨を祈る。故に能く癃淋を治し、水道を利す。

時珍曰く、その功力の特長は水を利するに在る。故に千金には、癥結、水腫、尸疰、留飮を治するに蜥蜴丸があり、外臺には、陰㿗を治するにこれを用ゐてある。いづれもその水を利する點を應用したものだ。劉涓子が斑蝥、地膽と共に用ゐて瘻疾を治したのは、その小便を利する點と、二物の解毒の點を應用したものだ。

【附　方】新二。【小兒の陰㿗】蜥蜴一箇を灰に燒いて酒で服す。(外臺祕要)【諸瘻の癒えぬもの】蜥蜴を炙つて三箇、地膽を炒つて三十箇、斑蝥を炒つて四十箇を末

にし、蜜で小豆大の丸にして二丸づつを白湯で服す。諸種の方法で效果なきものを治す。(劉涓子鬼遺方)

肝 【主治】 缺

【附方】 新一。【生胎を去る】蜥蜴肝、蛇蛻皮等分を苦酒で和匀し、妊婦の臍の上部、及び左右を摩擦し、胎を溫かならしむれば下る。(聖惠)

(一)守宮 (綱目)

和名 やもり
學名 Gekko subpalmatus, Günther.
科名 やもり科

【釋名】 壁宮(蘇恭) 壁虎(時珍) 蝎虎(蘇恭) 蝘蜓 偃殄(エンテン)と發音する。弘景曰く、蝘蜓は喜んで籬壁の間に緣り傳はつてゐるものだ。この物を朱を餌にして飼ひ、滿三斤まで食はせてから殺して乾し、末にして女の身體に塗ると、房事を犯せば脫ちて了ふが、犯さねば赤い痣のやうになつてゐるものだ。故に守宮と名けたのである。しかし蜥蜴もやはり守宮と呼ばれるので、甚だ區別がつき兼ねる。按ずるに、東方朔が『守宮でなければ蜥蜴だ』といつたのはそのことだ。

(一)木村(重)曰ク、偏平ナル頭ト突出セル眼アリ。背部灰褐色ニ黑點アリ、壁、石、木等ニ止ル。物體ニヤヤ近似ノ色ヲ作ル。大サ四寸許、南東支那ニ分布ス、日本ノやもりト同種ノモノ海岸ニ分布シ、他ニ此屬ノモノ一種北支那ニ產ス、此科他ニ四屬分布ス。

恭曰く、蝘蜓はまた蠍虎と名ける。この物は常に屋壁にゐるところから守宮と名け、また壁宮とも名けるのであつて、朱で飼つて婦人に點ける云云はでたらめだ。

時珍曰く、守宮は善く蠍、蠅を捕へるところから虎なる名稱を呼ばれたので、春秋考異郵に「(一)守宮が蠆を食ふは土が水に勝つものだ」とある。臂に點けるの說に就ては、淮南萬畢術、張華博物志、彭乘墨客揮犀にいづれもその方法があるが、大抵眞の事實でない。恐らく別にその術があつたものと思ふが、今は傳はつてをらぬ。

楊雄の方言には「(二)秦、晉、(三)西夏ではこれを守宮といひ、また蠦蟺といふ。(四)南陽地方では蝘蜓と呼ぶ。澤中に在るものをば蜥蜴といひ、(五)楚地方では蠑螈といふ」とある。

【集解】時珍曰く、守宮は處處の人家の墻壁にゐるもので、形狀は蛇醫のやうで灰黑色だ。首が扁く、頸が長く、鱗が細かく、足が四本あり、長いものは六七寸ある。やはり人を嚙んだといふことは聞かない。南方の地にゐる十二時蟲といふは守宮の五色のもののことだ。下に附錄する。

【附錄】(六)**十二時蟲**　時珍曰く、十二時蟲、一名避役。(七)容州、交州の諸處に

(二)秦、晉ハ金部鐵ノ註ヲ見ヨ。
(三)西夏、楊雄ノ當時ニハ葱嶺ノ西オクソス河上流ノ地、及ビソノ以西ヲ西夏ト稱シタルモノノ如キモ、此ニ秦、晉ト接シテ西夏ト稱シタルトコロヲ見レバ今ノ新疆省ノ地ヲ指シタルモノノ如クニモ見ユ。
(四)南陽ハ石部玉類玉ノ註ヲ見ヨ。
(五)楚ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。
(六)十二時蟲、學名 Hemidactylus frenatus Dum. et Bibron. (やもり科) 南東支那ヨリ雲南省ニ分

産し、人家の籬壁や樹木の間に生ずる。守宮の類であつて、大いさは指ほど、形狀は守宮と同じだが、腦上から背に連つて冠幘(くわうさく)のやうな肉鬣(にくれふ)があり、頸も足も長く、身は靑色だ。大なるものは長さ一尺ほどあり、尾と身と等しいもので、人が嚙まれると治療の方法がない。嶺南異物志には、その首は一日の十二時に隨つて變色する。見たものには喜び事があるといひ、博物志には、その陰は多く(八)緗綠(しやうりよく)にして日中に變易し、或は靑、或は綠、或は丹、或は紅になるといひ、北戸錄には、十二色に變色するわけではない。ただ黃、褐、靑、赤の四色だけだといふ。竊(ひそか)に按ずるに、陶弘景は、石龍の五色のものが蜥蜴だといひ、陸佃は、蜥蜴は能く十二時に變易するから易なる名が生じたといふのであるが、それで見ると、この蟲もやはり蜥蜴なのだ。しかし籬壁の間に生ずるもの、蓋し五色の守宮なのであつて、陶氏の所謂、守宮に螫されると必ず死亡するといひ、また臂に點けると痣(あざ)になるといふは恐らくこの物



守宮 —壁虎—

布ス、大型ノやもりニシテヨク體色ヲ變ズ、大サ八寸許。

(七)容州ハ草部毒草類鈎吻ノ註、交州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(八)緗ハ桑葉初生ノ色ナリトイヒ、帛ノ淺黃色ナリトイフ。

だと思はれる。普通の守宮ならば臂に點けて見ても何ともならず、また螫されても死亡するやうなことはない。

〔氣味〕【鹹し、寒にして小毒あり】〔主治〕【中風癱瘓で手足の擧らぬもの、或は癧節風痛、及び風痓、驚癇、小兒の疳痢、血積で痞となつたもの、癘風、瘰癧。蠍螫を療ず】(時珍)

〔發明〕時珍曰く、守宮は、舊本には石龍の條に附錄して『藥用には入れぬ』といつてあるが、近代では方術に多く用ゐる。楊仁齋は『驚癇はみな心血の不足であつて、この物の血は心血と相類するものだから、驚癇を治するはその血を取つて心を補ふのだ』といつた。その說は正確な事實らしくも見えるけれども、實はさうではない。蓋し守宮は蠍蠆を食物とする。蠍、蠆が風を治する要藥だからその效力があるのであつて、守宮が風痓、驚癇の諸病を治する作用は、やはり蜈、蠍の性能が經絡に透ると同じやうなものである。且つ血分に入るものだから血病、瘡瘍を治するのだ。守宮は風を祛るもの、石龍は水を利するものであつて、功用に自から差別のあることに注意を要する。

附方

新十四。【小兒の臍風】壁虎の後半截を焙じて末にし、男は女兒を產んだ母の乳、女は男兒を產んだ母の乳で調勻し、稀雞屎少量を入れ、舌根、及び牙關に摻つてから、手に蘸けて兒に摩し、汗を取出す。甚だ妙である。（筆峯雜興方）【年久しき驚癇】守宮膏——守宮一箇を四足を剪り去つて血共に研爛し、珍珠、麝香、龍腦香各一字を入れて研勻し、薄荷湯で調へて服す。先づ或は吐し、或は下し、痰涎を去つて後にこの方を用ゐる。大いに神效がある。（奇效方）【小兒の撮口】硃砂を小甁に入れてその內へ活きた蠍虎一箇を入れて一个月餘置き、砂末を食ひ盡して全身が赤くなるを待ち、陰乾して末にし、三四分づつを薄荷湯で服す。（方廣附餘）【心虛驚癇】褐色の壁虎一箇をその血共に研り爛し、硃砂、麝香末少量を入れて薄荷湯で調へて服し、繼で二陳湯を服すれば神效がある。（仁齋直指）【癱瘓走痛】蠍虎、卽ち蝘蜓一箇を黄に炙り、陳皮五分、罌粟殼一錢、甘草、乳香、沒藥各二錢半を末にし、三錢づつを水で煎じて服す。（醫學正傳）【癧節風痛】忍び難きには、壁虎丸——壁虎三箇を生で研り、蠐螬三箇を紙で包んで煨いて研り、地龍五條を生で研り、草烏頭三箇を生で研り、木香五錢、乳香末二錢半、麝香一錢、龍腦五分と合せ研つて膏にし、

酒、糊を入れて搗いて梧桐子大ほどの丸にし、毎日空心に三十丸づつを乳香酒で服して效を取る。(總錄)【破傷中風】身體を角弓のやうに反張し、筋急し、口噤するには、守宮丸を用ゐて治療する。守宮を炙き乾し足を去つて七箇、天南星を酒に三日間浸し晒乾して一兩、膩粉半錢を末にし、薄麪糊で綠豆大の丸にし、七丸づつを酒で灌ぎ下す。少頃して汗が出て解してから更に一服を與へ、再び汗を出せば癒える。或は白附子一兩を加へて蜜で丸にする(聖惠方)【癘風で癩となつたもの】祛風散——東行の蠍虎一條を焙じ乾し、大蠶沙五升を水で淘つて炒り、各末にして小麥麪四升を拌ぜ、ほしうどんのやうにして曝乾して研末し、一日三回、一二合づつを柏葉の煎湯で服して效を取る。(衞生寶鑑)【瘰癧の初期】壁虎一箇を焙じ研り、毎日半分づつを酒で服す。(青嚢)【血積で塊と成つたもの】壁虎一箇を白麪に和し、一箇の鴨子大に包裹して研り爛らし、餠にして烙熟して食ふ。血塊を下すものだ。三五回に過ぎずして癒え、甚だ效驗がある。(青嚢)【小兒の疳疾】蠍虎丹——一切の疳瘦、下痢、證候の全く備るもの、及び無辜疳毒で邪病の如きものを治す。乾した雄蠍虎一箇を微し炒り、蝸牛殼、蘭香根、靛花、雄黃、麝香各一分、龍腦半分を各研

(九)脂麻ハ胡麻ノ別名。

(一〇)胎赤ハ嬰兒膿性結膜炎。

つて末にし、米醋で煮た糊で黍米大の丸にし、一日二回、十丸づつを(九)脂麻湯で服して效を取る。(奇效良方)【蠆蠍の螫傷】端午の日の正午に壁虎一箇を取り、雞膽に一竅を開けてその內に入れて陰乾し、一點星ほどを傷處に敷く、直ちに止む神效がある。(靑囊)【反胃膈氣】地塘蟲、卽ち壁虎七箇を砂鍋で炒り焦し、木香、人參、硃砂各一錢半、乳香一錢を末にし、蜜で梧子大の丸にし、朝夕各一服、七丸づつを木香湯で服す。(丹溪摘玄)【甚だしく痛む癰瘡】壁虎を焙じ乾して研末し、油で調へて傅ければ止む。(醫方摘要)

糞　【主治】【爛赤眼】(時珍)

【附方】新一。【(一〇)胎赤爛眼】視力薄弱なるには、蠍虎數箇を黃土を罐に盛つて按實した內に損傷せぬやうにして入れ、口を紙で封じて數箇の孔を開けて氣を出し、糞を數粒排泄するを俟ち、その糞に一黑點あるものを去つて頭の白きもの一箇を取り、唾液で研つて膏にし、眼瞼の周圍に塗る。揩り拭つてはならぬ。翌朝溫漿水で洗ふ。三回にして甚だ效がある。(聖濟總錄)

(一)蛤蚧（宋開寶）

和名　かへるとかげ
學名　Phrynocephalus fr ntalis
科名　とかげ科

釋名　蛤蠏（日華）僊蟾　志曰く、一雌一雄のもので、常に自らその名を呼ぶやうな鳴聲を出す。時珍曰く、蛤蚧とはその鳴聲に因んだ名稱、僊蟾とは形に因んだ名稱である。嶺南地方では蛙を蛤と呼ぶ、この物は首が蛙や蟾のやうだからかく呼ばれるのだ。雷斅は、雄が蛤、雌が蚧だといつたが、それでも通じる。

集解　志曰く、蛤蚧は嶺南の山谷、及び城墻、或は大樹の間に生ずる。形狀は守宮の大なるもののやうで、身長は四五寸、尾と身と等しい。最もその尾を大切にするもので、人に取られやうとすると、多くは自らその尾を嚙み斷つて去る。藥力は尾に在るので、尾の完全についてないものは效果がない。楊雄の方言に『(二)桂林地方では、守宮の能く鳴くものを俗に蛤蚧と呼ぶ』とある。蓋しこの物らしい。禹錫曰く、按ずるに、嶺表錄異に『蛤蚧は、首は蟇蟆のやうで背に蠶子のやうな細鱗があり、土黃色で身が短く尾が長い。多く榕木・及び城樓の間に巢み、雌雄が

(一) 木村(重)曰ク、蛤蚧ハ頭部ハ蛙ノ如ク背ハ砂色ヲ呈ス、大サ四寸許驚ク時ハ尾ヲ背部ニ揚ゲテ卷ク。北支那、蒙古ニ產ス、本文ニ嶺南ノ地ニ棲ミ樹間ニ飛ブトアリ、此條件ノ種名ハ Japalura Swinh nis, Günter. ニテきのぼりとかげ科ノモノナレドモ頭ガがまノ如クナラズ、ヨツテ前者ヲアゲテ後考ヲ俟ツ。

(二) 桂林ハ金部粉錫ノ註ヲ見ヨ。

（三）西路ハ、即チ西域今ノ新疆省ノ地ヲ指ス。

常に隨伴し、朝夕鳴く。或は一聲鳴くものは生後一年のものだといふ。その地方の者は肺病の藥だといつて賣つてゐる』とある。

○珣曰く、廣南の水中に生じ、夜は榕樹に上つてゐる。雌雄同伴するもので、その一箇を囮にすれば結局二箇を獲れるものだ。近來は(三)西路にもあつて、形體は小さいが滋補の效力の程度は同樣だ。その地ではこれを採つて腹を割き、竹で張り開いて曝乾して賣つてゐる。



〔蛤〕　〔蚧〕

○頌曰く、一般に首尾完全なものが需要されるので、これを獲るには、柄の長い兩股の鐵叉を用ゐてとりもちで獲るやうにし、榕木の間にゐるものを狙つてその叉で刺して獲る。一本の股で頭を刺し、一本の股で尾を刺すから、尾を嚙み斷つて逃げるわけに行かない。藥としては雌、雄を兩樣に用ゐ、陽人には雄を用ゐ、陰人には雌を用ゐるともいふ。

○斆曰く、雄は蛤であつて、皮が粗く、口が大きく、身が小さく、尾が粗い。雌は

蚧であつて、皮が細かく、口が尖り、身が太く、尾が小さい。

時珍曰く、按ずるに、段公路の北戸錄に『首は蟾蜍のやう、背は綠色で上に古錦紋のやうな黃色の斑點があり、長さは一尺ばかり、尾が短い、聲の甚だ大きいもので、多くは木の竅間にゐる。やはり守宮、蜥蜴の類だ』とある。又、顧玠の海槎錄には『廣西の横州には蛤蚧が甚だ多い。牝牡が上下にゐて互に呼び交し、幾日か纒綿たる情交を續け、交尾中抱き合つて地上に墜落することがあり、人が往つてそれを捕つてもなほ知覺せぬばかりか、手で引き離さうとしても死ぬとも離れない。それを熟稿草を細かに纒へて蒸し、曝乾して賣つてゐるが、それは煉つて房中の藥として甚だ有效だ。普通牝牡を擇ばずに捕つたものはただ雜藥、及び獸醫の方に用ゐるだけだ』とある。

【修治】　斅曰く、この物は毒が眼に在るものだ。眼、及び甲、尾、腹にある肉毛を去らねばならぬ。酒を浸透して二重に紙を隔てて緩やかに焙じ乾し、甆器に盛つて屋根の東側の角に一夜懸け、然る後に用ゐれば十倍の功力を發揮する。尾を傷めてはならぬ。

日華曰く、凡そこれを用ゐるには、頭、足を去り、鱗、鬣の內の不淨物を洗ひ去り、酥で炙いて用ゐる。或は蜜で炙く。

李珣曰く、凡そこれを用ゐるには、黃色になるまで炙つてよく搗いて用ふべきものである。口に少量を含めば走り驅けても喘がぬものにして始めて眞物だ。丸、散藥中に入れて用ゐられる。

氣味　【鹹し、平にして小毒あり】　日華曰く、毒なし。

主治　【久しき咳嗽、肺勞傳尸。鬼物、邪氣を殺し、淋瀝を下し、水道を通ず】(開寶)　【石淋を下し、月經を通じ、肺氣を治し、欬血を療ず】(日華)　【肺痿咯血、欬嗽上氣。折傷を治す】(海藥)　【肺氣を補し、精血を益し、喘を定め、嗽を止め、肺癰、消渴を療じ、陽道を助ける】(時珍)

發明　宗奭曰く、肺虛勞嗽を補するに有功だ。

時珍曰く、昔の人は、補は弱を去るもので、人參、羊肉の屬であるといつたが、蛤蚧は、肺氣を補し、喘を定め、渴を止めるの功力は人參と同じく、陰血を益し、精を助け、羸を扶ける功力は羊肉と同じである。近世では勞損、痿弱を治するに用

ゐ、許叔微は消渇を治するに用ゐたが、いづれもその滋補の功力を取つたのである。劉純は『氣液が衰へ、陰血が竭きたものに適するものだ』といひ、何大英は『喘を定め、嗽を止めるに、これ以上のものはない』といつた。

【附方】舊二。【久嗽肺癰】宗奭曰く、久嗽癒えずして肺に虚熱を積んで癰欬となり、朝夕膿血を出して止まず、喉中氣塞し、胸膈噎痛するには、蛤蚧、阿膠、鹿角膠、生犀角、羚羊角各二錢半を、河水三升で銀石器を用ゐて文武火で熬り、半升になつたとき汁を濾し、一日一服、時時に仰臥して少しづつ呷ふ。刑部張子皐がこの病に罹つたとき、樞密田況がこの方を授けて服ませたので遂に癒えた。【喘嗽で顏面の浮腫するもの】幷に四肢の浮腫するには、蛤蚧の雌一箇、雄一箇、頭、尾全きものを用ゐ、法酒に蜜を和したものを塗つて炙熱し、紫團人參の人の形に似たものの半兩と末にし、溶した蠟四兩と和して六箇の餅にし、糯米で煮た薄粥一盞にその餅一箇を投じて攪き溶し、熱して少しづつ呷ふ。(普濟)

（一）木村（重）曰ク、とかげ科ノモノナルベシ、後考ヲ俟ツ。

（一）鹽龍（綱目）

和名未詳
學名未詳

【集解】時珍曰く、按ずるに、何遠の春渚紀聞に『宋の徽宗の時、將軍蕭注は南蠻を討伐して、蠻酋が飼養してゐた鹽龍といふものを押收した。長さ一尺餘のもので、それを飼ふ入れ物には銀の盤を用ゐ、餌にする海鹽を玉の皿に入れて玉の箸で摘んで與へるのであつたが、かくすると鱗中から鹽が出る。それを取つて一錢匕を溫酒で服すると、大いに陽事を興奮させるといふのである。その後その龍は蔡京の手に歸した。死んでから鹽で數日間封じ、その鹽を取つて用ゐて見ると、やはり效力があつたといふ』とある。予の考では、この物は外國に產するもので、古來中國の文籍には載つてゐない。しかしかやうな功力があるといふことは誠に珍らしいものといはねばならぬ。かたがた此に附載して大方の考究に俟つ。

鱗の二　蛇類十七種

(一)蛇蛻（本經下品）

和名　へびのぬけがら、へびのきぬ
英名　Moulted skin of snake

［釋名］ **蛇皮**（甄權） **蛇殼**（俗名） **龍退**（綱目） **龍子衣**（本經） **龍子皮**（別錄） **弓皮**（本經） **蛇符**（別錄） **蛇筋**（吳普） 時珍曰く、蛇の字の古文はぬるぬるとしてとぐろを卷く形を象はしたものだ。蛻は脫（ダツ）と發音し、又、退（タイ）と發音する。退け脫ちるの意味である。龍、弓、符、筋などいふはいづれも後世の者の洒落た隱語の名稱だ。

［集解］ 別錄に曰く、(二)荊州の川谷、及び田野に生ずる。五月五日、十五日に取るが良し。

弘景曰く、草中には虺、蝮の蛻を見ることは稀だが、ただ長いものがある。これは多くは赤蟫、黃頷などのものだが、その何れの皮か見判けが付かぬ。但し石上の

(一)木村(重)曰ク、蛇皮(シエピー)ト總稱ス。

(二)荊州、古ノ九州ノ一。爾雅ニ「漢南ヲ荊州ト曰フ」トアリ。後漢ニ復タ古ノ州域ヲ以テ荊州ト稱ス。卽チ今ノ湖北、湖南、及ビ四川ノ東

部、河南ノ西部、貴州、廣西ノ一部ニ亙ル。草部隰草類地膚ノ註參照。

完全なものを取れば佳いのである。

頌曰く、南方の地には、木石の上、及び人家墻屋の間に多くある。蛇の蛻するには一定の時期がない。ただ不淨の物が著けば蛻し、或は甚しく飽食したときにも蛻する。

○斅曰く、凡そこれを使用するには、青、黄、蒼色のものを用ゐてはならぬ。ただ銀のやうに白色のもののみを用ゐる。先づ地下に深さ一尺二寸の坑を掘り、蛻をその中に一夜置いて取出し、醋に浸して炙り乾して用ゐる。

時珍曰く、今一般に蛇蛻を用ゐるには、皂莢水で洗淨して竹上に纏ひ著け、或は酒、或は醋、或は蜜に浸して黄に炙いて用ゐ、或は燒いて性を存し、或は鹽泥で固めて煆き、それぞれ處方に隨つてその方法を用ゐる。

【氣味】【鹹く甘し、平にして毒なし。火で熬るが良し】權曰く、毒あり。○磁石、及び酒を畏る。○妊婦には用ゐることを忌む。

【主治】【小兒の百二十種の驚癇。蛇癇癲疾で瘈瘲し、弄舌し、頭を搖かし、寒熱するもの。腸痔、蠱毒】(本經)【大人の五邪で言語僻越するもの。嘔逆を止め、日

を明にする。燒いて諸惡瘡の治療に用ゐる】(別錄)【(三)喉痺、あらゆる鬼魅】(甄權)【灸いて惡を辟け、小兒の驚悸、客熱を止るに用ゐ、煎汁を癧瘍、白癜風に傅ける。分娩を催ほす】(日華)【胎を安ず】(孟詵)【瘧を止める】藏器曰く、發作するその日に取つて兩耳を塞ぐ。又、手に少量を握り、幷に鹽、醋汁を服して吐かしめる。【惡を辟け、風を去り、蟲を殺す。燒いて末にして服すれば、婦人の(四)吹奶、大人の喉風を治し、目翳を退け、木舌を消す。小兒の(五)重舌、(六)重齶、(七)唇緊、(八)解顱、面瘡、(九)月蝕、(一〇)天泡瘡、大人の丁腫、漏瘡、腫毒に傅ける。煮た湯で諸惡蟲傷を洗ふ】(時珍)

|發明|　宗奭曰く、蛇蛻は口から退け始め、眼睛までも退けるものだ。現に眼藥、及び翳膜を去るにこれを用ゐるはその關係からである。

時珍曰く。藥に入れるには四種の理由がある。一は能く惡を辟ける。それは變化する性の靈妙を取るのである。故に邪僻、鬼魅、蠱、瘧の諸疾を治す。二は能く風を去る。それはこの物が方位に於ては巽に屬し、性の竄する點を取るのである。故に驚癎、癜風、喉、舌の諸疾を治す。三は能く蟲を殺す。故に惡瘡、痔瘺、疥癬の諸疾を治す。これはその毒を用ゐるのだ。四は蛻する意味である。故に翳膜、胎

(三)喉痺ハ扁桃腺炎。
(四)吹奶ハ乳房炎。乳房膿腫ヲ云フ。喉風ハ咽喉加多兒・木舌ハ舌炎。
(五)重舌ハ舌下軟瘤。
(六)重齶ハアゴニ皮ノ出來ルコト。
(七)唇緊ハ口吻側瘡疹。
(八)解顱ハ腦水腫。
(九)月蝕瘡ハ兩耳及鼻面ノ間ニ生ジテ、遂ニ筋骨ニ至ルモノ。
(一〇)天泡瘡ハ楊梅瘡。

（二一）纏喉風ハヂフテリヤ。

産、皮膚の諸疾を治す。その性能、行動等の合致點を、その類に從つて治療に應用するわけである。

【附方】 舊十一。新二十一。【喉痺】心鏡では、小兒の喉痺腫痛を治するに、燒いて末にし、乳汁で一錢を服す。【（二一）纏喉風疾】氣閉するには、杜壬方では、蛇蛻を炙き、當歸と等分を末にし、一錢を溫酒で服して吐かす。○ある方では、蛇皮を揉み碎き、烟に燒いて竹筒で吸入すれば破れる。○ある方では、蛇皮を白梅一箇に裹んで噙み嚥む。【大人、小兒の口瘡】蛇蛻皮を水に浸して軟にし、一二回口の內部を拭へば癒える。同時に藥を足心に貼る。（嬰孩寶鑑）【小兒の木舌】蛇蛻を灰に燒き、少量を乳で和して服す。（千金方）【小兒の重舌】（千金）【小兒の重齶】いづれも蛇蛻灰を醋で調へて傅ける。（聖惠方）【小兒の口緊】開合不能、飲食不能、言語不能なるは死亡する。蛇蛻の燒灰を拭淨して傅ける。（千金方）【小兒の解顱】蛇蛻を熬つて末にし、豬頰車髓で和して塗り、一日三四回易へる。（千金方）【小兒の頭瘡、小兒の面瘡、小兒の月蝕】いづれも蛇蛻の燒灰を臘豬脂で和して傅ける。（肘後方）【小兒の吐血】蛇蛻灰半錢を乳汁で調へて服す。（子母祕錄）【痘後の目瞖】周密の齊東野語に『小兒の痘後の障瞖に

は、蛇蛻一條を洗ひ焙じ、天花粉五分と末にし、羊肝を破開した中に夾んで縛定し、米泔水で煮て食ふ。予が娘、及び甥はいづれもこれを用ゐて奏效した。眞に奇方である』とある。【卒に生じた瞖膜】蛇蛻皮一條を洗ひ晒して細に剪り、白麪で和して餅にし、黑色に炙き焦して末にし、一日二回、食後に一錢を溫水で服す。（聖惠方）【小便不通】完全な蛇蛻一條を燒いて性を存し、研つて溫酒で服す。【胎痛で產せんとするもの】月の足らぬものである。完全な蛻一條を絹袋に盛つて腰の圍りに繫ける。（千金方）【橫產、逆產、胞衣不下】千金では、蛇蛻を炒り焦して末にし、東に向つて一刀圭を酒で服すれば順になる。○十全博救方では、鹽泥で固めて煆いて研り、二錢を楡白湯で服す。○濟生祕覽では、逆產で急に險惡に陷りたるを治す。蛇蛻の完全なもの一條、蟬蛻十四箇、頭髮一握をいづれも燒いて性を存し、酒で三回に分服し、同時に小針で產兒の足心を二十一回刺し、鹽少量を擦れば分娩する。【婦人難產】蛇蛻を水に泡けて產門を浴すれば自ら容易になる。（寶鑑）【婦人の吹乳】蛇皮一尺七寸を燒いて末にし、溫酒一盞で服す。（產乳）【頭なき腫毒】蛇蛻灰を猪脂で和して塗る。（肘後）【石癰】膿なくして石のやうに堅硬なるもの、蛇蛻皮を貼つて一夜

(一二)魚臍疔ハ疔瘡ノ一種ニシテ、瘡頭黑キコト深ク、形チ魚臍ノ如シ。コレヲ破レバ黃水滲出四畔浮漿スルモノ。

(一三)陷甲トハ小キ靴ノ爲ニ爪ガ傷ミ痛ムモノ。

經てば癒える。(總錄)【膿のある諸瘺】蛇蛻灰を水で和して傅ければ蟲が出る。(千金方)【(一二)魚臍丁腫】外臺では、蛇蛻を雞子ほどを水四升で煮て三四沸し、その汁を服すれば立ろに瘥える。○直指では、魚臍瘡で水が出て四畔に漿の浮ぶものを治す。蛇蛻を燒いて性を存して研り、雞子淸で和して傅ける。【癩に似た惡瘡】十年瘥えぬには、全蛻一條を灰に燒いて猪脂で和して傅け、同時に一條を燒いて溫酒で服す。(千金方)【癜風白駮】聖惠では、蛇皮灰を醋で調へて塗る。○外臺では、蛻で數百回摩擦して熱せしめ、その蛻を草中に棄てる。振返つて見てはならぬ。【(一三)陷甲の肉に入るもの】痛み苦むには、蛇皮の完全なもの一條を灰に燒き、雄黃を彈丸一箇ほどと共に研末し、先づ溫漿で瘡を洗ひ、針で破つて貼る。(初虞世方)【耳の突然甚しく痛むもの】內部に蟲があつて走り廻るやうに覺え、或は血水が流出し、或は乾痛して忍び難きには、蛇退皮を燒いて性を存して研り、鵞翎で吹入れば立ろに癒える。實驗を經た祕方である。(楊拱醫方摘要)

(一)蚺蛇

蚺は髯(セン)と發音する。（別錄下品）

和名　うはばみ、にしきへび
學名　Python reticularis, Schneider.
科名　にしきへび科

【釋名】南蛇（綱目）埋頭蛇　時珍曰く、蛇屬は紆行するもので、この蛇は身が太くしてその行動が更に徐やかに紆行し、冉冉たるものだから冉蛇と名ける。或は、鱗甲に髯のやうな毛があるからだともいふ。嶺南地方に產する首を擧げないものを眞物とするところから、世間では南蛇、埋頭蛇と呼ぶ。

【集解】頌曰く、蚺蛇は、陶弘景は(二)晉安に出るといひ、蘇恭は(三)桂、廣以南(四)高、賀等の州に出るといつたが、今は嶺南の諸郡いづれにもある。

弘景曰く、大なるものは三四(五)圍ある。地上を行くに頭を擧げぬものが眞物である。頭を擧げるものは眞物でない。その膏と膽とは能く見擬へるものだ。

韓保昇曰く、大なるものは徑一尺、長さ一丈ばかりある。蛇のやうで粗短なものだ。

恭曰く、その形は鱧に似て頭が鼉に似てゐる。尾は圓くして鱗がない。容易に死

(一)木村(重)曰ク、印度支那、フイリピン島南支那ノ一隅ニ分布ス、長サ三十尺ニ達ス、體ハ暗褐色ニシテ黑キ斑點アリ、腹部ハ汚黃色ヲ呈ス。中部北部支那ニハ居ラズ、靜止スル時ハ體ヲ卷キテ頭ヲ其中ニ埋ム、見世物ノうはばみ是ナリ。

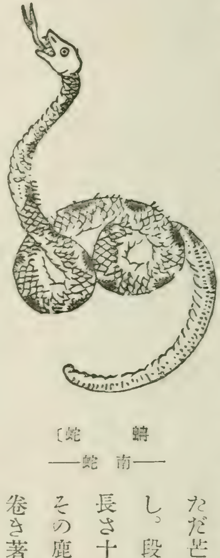
(二)晉安ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)桂廣以南トハ今ノ廣西、廣東地方及ビソノ以南ヲ指ス。

(四)高州ハ草部芳草類高良薑ノ註ヲ見ヨ。賀州ハ隋ニ置ク、今廣西省桂林道ノ賀縣ソノ地ナリ。

(五)五寸ヲ圍トイフ。

なぬものだ。その地のものは肉を截つて膾にし、珍味なものだといつてゐる。
藏器曰く、その膾は醋を著ける能く人の筋に卷き著いて脫けなくなるものだが、ただ芒草を筋にして用ゐればよし。段成式の酉陽雜俎に蚺蛇は長さ十丈あり、常に鹿を吞む。その鹿が盡く消化してから樹に卷き著くと、腹中にあつた鹿の骨が鱗を穿つて外に出る。養瘡の時には脂肪が肥えてゐて甚だ美味だ。或は、婦人の衣を投げ付けると蟠つて動かないといふ』とある。



〔蚺蛇——南蛇〕

時珍曰く。按ずるに、劉恂の錄異記に『蚺蛇は、大なるものは長さ五六丈、圍り四五尺あり、小なるものも三四丈を下らない。身に故錦纈のやうな斑紋がある。春夏期に山林中で鹿を狙つて呑む。呑むとその蛇は一旦瘦せるが、鹿が腹中で消化すると肥えて壯になる。或は、一年に一頭の鹿を食ふものだともいふ』とある。又、顧玠の海槎錄には『蚺蛇は鹿、及び山馬を吞む。後脚から吞むのだが、その毒氣が

（六）横州ハ唐ニ置ク、今ノ廣西省南寧道横縣ソノ地ナリ。

角まで當つて自から脱ちて了ふ。その膽は小なるものを佳しとする』とある。王済の手記には『（六）横州の山中には蚺蛇が多い。大なるものは十餘丈あつて、麞、鹿を食物とするのだが、骨や角は呑まれるに隨つて腐ち消ける。その地の者がこれを採るには、葛藤でその穴を塞ぐと蛇がこれを嗅いで無力になる。そこで穴を發いて取るのである。肉は極めて肪が肥えてゐて美味なものだ。皮は鼓に張り、また刀劍、樂器の飾にする』とある。范成大の虞衡志には『蠻地に駐屯中の衛戍兵が、蚺蛇を捕るには、頭一面に花を挿んで行き、蛇がその花を注視して動かない隙に乘じて、飛込んで行つてその首を斷ち落し、騰擲してやがて力が竭きて斃れるを待ち、舁き歸つて食ふ』とある。又、按ずるに、山海經には『巴蛇は象を食ひ、三年にしてその骨を出す。君子これを服して心腹の疾なし』とあり、郭璞の注に『今の蚺蛇がその類だ』とある。南裔志の蚺蛇の贊には『蚺は惟れ大蛇、既に洪にして且つ長し。采色駁映、其の文錦章。灰を食ひ鹿を呑み、腴成りて養瘠す。賓饗嘉食、是れ豆是れ觴』とある。

膽　段成式曰く、その膽は、上旬には頭に近く、中旬には心に近く、下旬には尾

（七）雷州ハ石部霹靂碪ノ註ヲ見ヨ。

に近い。

頤曰く、嶺表錄に『(七)雷州には蛇を飼養する職業があつて、毎年五月五日に官署指定の場所に蛇を舁き入れ、膽を取つて暴乾し、租税として納入する。その方法は、蛇を軟草を敷いて籃に一條毎にとぐろを卷かせて舁き入れ、膽を取るときには、地上に出して十數本の杈枒で蛇の腹を翻轉し、腹部を押し探つて膽のある部位を想定し、そこを剖開して肝、膽を取り出すのである。その膽の形狀は鴨子大のものだ。取り出して後は肝を腹に納れて絲で縫合し、また舁き歸つて放すのである。或は、一旦膽を取られた蛇は、他日再び捕へられやうとすると、仄かに遺る腹の瘡痕を出して見せ、腹に膽がないといふことを知らせるさうだ。又、一旦膽を取つて後も三年間は活きてゐるといふが、事實なるや否やは判らない』とある。

時珍曰く、南方人は蛇を啗むが、穴を發いて搜り取るのだから、その場合蚺が再び活きてゐて腹を出して見せやう筈はない。

弘景曰く、眞の膽は狹長にして全體が黑く、皮膜が極めて薄い。舐めれば甜く苦い。摩つて水を注げば沈んで散らぬものだ。

恭曰く、これを試驗する方法は、粟粒ほどを剔り取つて淨い水に入れて見る。水上に浮游し旋回して走るものならば眞物だ。直ちに沈むものは猪膽血である。しかし多量に入れては判らない。多量なればやはり沈み散ずるものだ。陶氏の試驗法は正確とはいはれぬ。

詵曰く、世間には猪膽、虎膽で作つた僞物が多いが、水中に入れると走るには相違ないがただ遲いのである。

【氣味】【甘く苦し、寒にして小毒あり】【主治】【口の腫痛、心腹の䘌痛、下部の䘌瘡】(別錄)【小兒の八種の癇】(甄權)【五疳を殺す。水に溶化して鼻中に灌げば小兒の腦熱、疳瘡、䘌漏を除く。下部に灌げば小兒の疳痢を治す。麝香と共に齒疳宣露に傅ける】(孟詵)【血を破り、血痢、蠱毒下血を止める】(藏器)【目を明にし、翳膜を去り、大風を療ず】(時珍)

【發明】時珍曰く、蚺は巳上の氣を禀け、その膽は甲乙の風木を受けたものだ。故にその味は苦中に甘がある。その治效の範圍はいづれも厥陰、太陰の病であつて、能く口を明にし、血を涼し、疳を除き、蟲を殺す。

(八)五心トハ兩手心、兩足心、頂心ヲイフ。
(九)宣露ハ牙疳ノコト、一種ノ壞血病デ、ハグキカラ血ノ出ル病。

○愼微曰く、顧含の乳母が失明したとき、蚺蛇膽を用ゐねばならぬので、含自ら探し求めたが手に入らなかつた。ところがある一人の童子から一箇の合子を授けられ、開けて見ると中に蚺蛇の膽があつた。童子は青鳥に化して飛び去つた。含がそれを用ゐて、乳母の目は遂に視力を回復した。

【附方】舊二、新二。【小兒の急疳瘡】水で蚺蛇膽を調へて傅ける。(聖惠)【小兒の疳痢】羸瘦して多く睡り、坐すれば目を閉ぢ、食物の通らぬには、蚺蛇膽豆二粒ほどを、通草を煮た汁に破り溶かして隨意に飲む。並に(八)五心、下部に塗る。(楊氏產乳)【齒䘌(九)宣露】膿血の出るには、蚺蛇膽三錢、枯白礬一錢、杏仁四十七箇を研勻し、齒䘌を布で揩り、舌で押して血を嗍ひ盡してから、一日三回これを摻る。癒えれば止める。(聖惠)【痔瘡腫痛】蚺蛇膽を研つて香油で調へて塗る。立ろに效がある。(醫方摘要)

肉 【氣味】【甘し、溫にして小毒あり】四月には食つてはならぬ。【主治】【飛尸游蠱で喉中に物があり、吞吐しても出ぬもの】(藏器)【疳瘡を除き、瘟疫、瘴氣を辟ける】(孟詵)【手足の風痛を除き、三蟲を殺し、死肌、皮膚の風毒、癘風、疥

癬惡瘡を去る」(時珍)

【發　明】權曰く、嶺南地方を旅行しても、蚺蛇を食へば瘴毒に侵されない。

時珍曰く、按ずるに、柳子厚の捕蛇說に『(一)永州の野に、質は黑くして白い模樣のある異蛇を產する。觸れると草木が盡く枯死し、禦ぎやうがない。ところが、それを取つて(二)腊にして食へば、大風、攣踠、瘻癘が已み、死肌を去り、三蟲を殺す』とある。又、張鷟の朝野僉載には『(三)泉州の盧元欽は癘風を患ひ、ただ鼻がまだ落ちないだけだつたが、この肉は風を治する功能があるといつて五月五日に蚺蛇を取つて增進したものがあつたので、それを食つて見ると三五日にして頓に輕快を覺え、百日にして平復した』とある。

【附　方】新三。【蚺蛇酒】諸風の癱緩、筋攣、骨痛、痺木。瘙痒を治し、蟲を殺し、瘴、及び癘風、疥癬、惡瘡を辟ける。蚺蛇肉一斤、羌活一兩を絹袋に盛り、糯米二斗を蒸熟し、缸の底に麴を入れてその上に蛇を置き、その上に飯を入れて密閉し、熟するを待つてその酒を取り、その蛇を焙じ研つて藥に和し、適當に量を計つてその酒を溫めて數盃飮む。風に當ること、及び房事を忌む。また袋に盛つて酒に

(一)永州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。
(二)腊ハ乾肉ナリ。
(三)泉州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

浸して飲むもよし。(集簡方)【急疳蝕爛】蚺蛇肉を膾にして食ふ。(聖惠方)【狂犬の咬傷】蛇の乾物を末にし、一日三回、水で五分を服す。蚺蛇が無いときは他の蛇を用ゐてもよし。(外臺秘要)

膏 弘景曰く、眞の蚺蛇膏は纍纍として梨豆子が相著いたやうなものだ。他の蛇膏はいづれも梅李子ほどの大いさのものだ。

氣味 【甘し、平にして小毒あり】**主治**【皮膚の風毒、婦人産後の腹痛、餘疾】(別錄)【多く藥に入れて用ゐる。また伯牛疾を療ず】(弘景) 癩である。【綿で裹んで耳聾を塞ぐ】(時珍) 記載は外臺にある。

牙 長さ六七寸。**主治**【これを佩びれば不祥を辟ける。遠行に利あり】(時珍) 異物志。

(一)鱗蛇 (綱目)

和名 うはばみ
學名 Python molurus.
科名 にしきへび科

集解 時珍曰く、按ずるに、方輿勝覽に『鱗蛇は、安南、雲南、(二)鎭康州、臨

(一)木村(重)曰ク、鱗蛇ハ浙江省ヨリ南部支那ニ分布スル小型ノうはばみニシテ、福建省ニテハ十五尺ニ達ス鱗小ニシ

安、(三)沅江、(四)孟養の諸處に產する。巨大なる蟒だ。長さは一丈餘、四足あり、黃鱗、黑鱗の二種あつて、能く麋鹿を食ふ。春、冬は山中に居り、夏、秋は水中にゐて能く人を傷害する。その地の者は殺して食ひ、膽を取つて治病に用ゐる。黃鱗のものを上等品とし、價格も高い』



〔蛇　蟒〕
——雲南の巨蟒——

とある。予の考ではこれもやはり蚺蛇の類であらうと思ふが、ただ足だけ餘分なものだ。陶氏は蚺蛇の說明に、眞物、僞物の區別をいつてゐるが、やはりこの類のことらしい。

膽 〔氣味〕【苦し、寒にして小毒あり】〔主治〕【藥毒を解く、惡瘡、及び牙疼を治す】(時珍) 記載は勝覽、及び一統志にある。

テヤヤ黃色ヲ帶ブルモ背部ハ褐色ナリ、無毒蛇ナリ、日本ニ棲マズ。

(二)鎭康ハ元ニ路ヲ置ク。今ノ雲南省騰越道ノ鎭康縣ソノ地ナリ。臨安ハ土部伏龍肝ノ註ヲ見ヨ。

(三)沅江縣ハ隋ニ置ク、今ハ湖南省武陵道ニ屬ス。

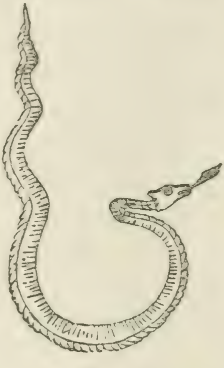
(四)孟養ハ明ニ司ヲ置ク、今ハナシ。按ズルニ雲南ノ境ニ在ルモノノ如シ。

(一)白花蛇 (宋開寶)

和名 しろすぢしまへび
學名 Nutrix strata,(Linne)
科名 遊蛇(いうだ)科

【釋名】 **蘄蛇**(綱目) **褰鼻蛇** 宗奭曰く、諸蛇は鼻が下を向くが、この蛇だけは鼻が上を向き、背に(二)方勝の花文がある。それでかく名けたものだ。

【集解】 志曰く、白花蛇は南地、及び蜀郡の諸山中に生ずる。九月、十月に採捕して火で乾す。白花のものが良し。



〔白花蛇〕
——蘄州のものは二十四方勝——

頌曰く、今は(三)黔中、及び蘄州、鄧州にいづれもゐる。その文は方勝の白い花型で、よく人の足を螫す。黔地方では、これに螫されたものは立ろにその足を斷ち切り、木製の義足を用ゐてゐる。この蛇が人家の屋室に入つてゐると爛れた瓜の臭氣があるものだ。その室には迂潤に

(一)木村(重)曰ク、白花蛇ハ體色暗褐色、多數ノ幅狹キ黑キ橫斑アリ。又縱走ノ白色縞アリ、腹部ニ黑斑アリ。四川省及揚子江ノ南方地方ニ産ス、日本ニテハ臺灣ニ産ス。大サ二丈前後、無毒ナリ。コレニ類スル一種南方支那ニ産ス。
(二)方勝ハ兩斜方形相互聯合スル紋狀ヲ云フ。
(三)黔中ハ金部金ノ註、蘄州ハ草部隰草類艾ノ註、鄧州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

入つてはならない。速かに辟除を要する。

時珍曰く、花蛇は湖、蜀いづれにもあるが、今はただ蘄蛇なる名稱だけが一般的になつてゐる。しかし蘄地方でもやはり多くは得られない。市場の商品、官廳の收納品はみな江南、(四)興國州の諸山中から來るものだ。この蛇は、頭は龍のやう、口は虎のやう、質は黒く、花紋は白く、脇に二十四箇の方勝文があり、腹に念珠斑があり、口に四本の長牙があり、尾上に長さ一二分の(五)佛指甲が一箇あり、腸の形は連珠のやうなものだ。多くは石南藤上にゐてその花、葉を食物とするので、石南を見當に尋ねて捕獲するのだが、先づ沙土一把を撒くと蟠つて動かなくなる。それを叉で取り、繩を懸けて曳き起し、劙刀で割いて腸物を去つてから、尾を反らしてその腹を洗滌する。これは製品を創けずに仕上げるためだ。かくてうねうねに屈曲せぬやうに、竹で支へて縛りつけて乾燥する。蘄地に産したものは乾燥しても眼光が陷らぬが、他の地のものはさう行かない。故に羅願の爾雅翼に『蛇は死ねばみな目を閉ぢるが、蘄州の花蛇は生けるが如く目を開いてゐる』とある。舒、蘄兩州の州界のものは一眼は開き一眼は閉ぢてゐる。故に一般にこの點で識別する。又、按ず

(四)興國州ハ草部隰草類紫菀ノ興國軍ノ註參照。

(五)彙言ニ佛ヲ小ニ作ル。

（六）鷣、音淫鷂也。

るに、元稹長慶集には『巴中の蛇には凡そ百種類もあるが、褰鼻白花蛇だけは何時何處にでもゐるものでない。これが毒螫を被れば毛髪竪立する。この蛇が溪澗で水を飲めば泥沙が盡く沸く。（六）鷣といふ鳥がよくその小なるものを食ふ。巴地方ではやはり禁厭の術で制するのであるが、雄黄烟で熏すれば腦裂するものだ』とあつて、この説は蘇頌の黔蛇の説明と合致する。しかし現に蘄蛇にはさうした甚しい毒はない。黔、蜀の蛇は同樣に白花の文はあつても、類と性とが異ふので、藥には蘄地の產に限られてゐるわけである。

【修治】頌曰く、頭、尾各部分一尺の間には大毒があるから用ゐない。ただ中央部だけを用ゐる。乾いたものを酒に浸し、皮、骨を去つて炙つてから貯へれば蛀がつかぬ。その骨刺は人の觸れぬ遠い場所へ棄てねばならぬ。それで傷めると生のものの毒と變らぬものだ。

宗奭曰く、凡そこれを用ゐるには、頭、尾を去つて酒に三日間浸し、炙つて皮、骨を盡く取り去る。それ等の物には甚しい毒があるから、觸れぬやうに注意を要する。

時珍曰く、黔蛇は長大なものだから頭、尾一尺を取り去れといふのだが、蘄蛇は頭尾各三寸を去るだけである。また單に頭、尾を用ゐることもある。蛇の大なるもの一條から得る淨肉は四兩だけのものだ。久しきに亙つて所持すれば蛀がつき易いが、肉を取つて密封して貯藏すれば十年經つても壞れない。按ずるに、聖濟總錄には『凡そ花蛇を用ゐるには、春、秋は酒に三晝夜浸し、夏は一晝夜、冬は五晝夜浸して取出し、炭火で焙じ乾す。かく三回繰返してから、砂瓶に盛つて地中に一晝夜埋めて火氣を出し、皮、骨を去り肉を取つて用ゐる』とある。

肉　［氣　味］【甘く鹹し、溫にして毒あり】時珍曰く、酒と配合するが良し。

［主　治］【中風、濕痺の不仁、筋脈の拘急、口、顏の喎斜、半身不遂、骨節疼痛、脚弱で久しく立てぬもの、暴しき風の瘙痒、大風疥癬】（開寶）頌曰く、花蛇は治風の功力が諸蛇よりも速なもので、黔地方では、疥癬が全身に發して諸藥の奏效せぬものを治するに、この蛇を生で取つて分量を測つて斷ち、磚を紅く燒いて醋を沃ぎ、氣が蒸發しつつあるところへその蛇を載せて一夜盆で覆ひ、かく三回繰返してから骨を去つて肉を取り、五味を雜ぜて羹にし、煮爛して一回に食ふ。一晝夜昏

（七）頭瘍ヲ疕トイフ。

睡狀態に入り、醒めると(七)瘡疕は皮に隨つて退き、その疾はそれで癒える。【肺風鼻塞、浮風癮疹、身體の白癜風、癧瘍の斑點を治す】(甄權)【諸風、破傷風、小兒の風熱、急性、慢性の驚風搐搦、瘰癧漏疾、楊梅瘡、痘瘡倒陷を通治する】(時珍)

【發明】 斆曰く、蛇の性は竄するもので、能く藥を引いて風疾のあるその部分に到達せしめるものだ。故に能く風を治す。

時珍曰く、風は善く行つて數々變ずるものである。蛇もまた善く行つて數々變ずるものであつて、花蛇はまた石南を食ふものだ。それが能く骨に透り、風を捜し、驚を截り、搐を定め、驚搐、癩癬、惡瘡の要藥たる所以であつて、それはこの物の內には臟腑に走り、外には皮膚に徹し、處として到らざるなき點を取るのである。凡そ蛇酒藥を服するには、絕對に風に當てることを忌む。

【附方】 新十三。【驅風膏】風癱、癘風、全身の疥癬を治す。白花蛇肉四兩を酒で炙り、天麻七錢半、薄荷、荊芥各二錢半を末にし、好き酒二升、蜜四兩と石器で熬つて膏にし、一日三回、一盞づつを溫湯で服し、急に暖かな場所に居て汗を出す。十日にして效がある。(醫壘元戎)【世に傳ふる白花蛇酒】諸風の新、久に拘らず、手足

緩弱、口、眼喎斜、言語蹇澀、或は筋脈攣急し、肌肉頑痺し、皮膚燥痒し、骨節疼痛し、或は惡瘡、疥癩等を生ずる疾を治す。白花蛇一條を溫水で洗淨し、頭尾各三寸を去つて酒に浸し、骨刺を去り淨肉を取つて一兩に、全蠍を炒り、當歸、防風、羌活各一錢、獨活、白芷、天麻、赤芍藥、甘草、升麻各五錢を入れ、剉碎して絹袋に盛つて貯へ、糯米二斗を蒸熟して普通の酒を釀すと同樣にしてその缸の中に袋を入れ、成熟するを待つて酒を取り、袋と倶に密封して煮熟し、七日間光線の透らぬ場所に置いて毒を出し、數盃づつを溫めて飲み、常に繼續して用ゐる。この方は、蘄地方で印刷に付し、蛇に添附して賭るものだが、起原出所は不明である。（瀕湖集簡方）【瑞竹白花蛇酒】諸風癘癬を治す。白花蛇一條を酒で潤ほし、皮、骨を去り肉を取つて絹袋に盛り、糯米一斗を蒸し、缸の最下層に麴を置いて蛇を置き、その上に飯を置いて物を以て密に蓋ひ、二十一日間經つて酒を取り、その蛇をば晒乾して末にし、三五分づつをその酒を溫めて服す。同時に濁酒、幷に糟で餅を作つて食ふが尤も佳し。（瑞竹堂經驗方）【瀕湖白花蛇酒】中風、傷酒の半身不遂、口、目喎斜、膚肉の瘒痺、骨節疼痛、及び年久しき疥癬、惡瘡、風癩の諸症を治す。白花蛇の頭

が龍の如く、口が虎の如く、地色が黒くして花文が白く、尾に佛指甲のある眞物一條を酒で洗つて潤透し、骨を去り肉を剌取して四兩、眞羌活二兩、當歸身二兩、眞天麻二兩、眞秦艽二兩、五加皮二兩、防風一兩を各〻剉みまぜて生絹袋に盛り、金華酒壜內にその袋を吊り下げて置き、糯米で作つた生酒の醅五壺を入れて袋を浸し、箬葉で密封し、大鍋に入れて一日間水で煮、壜を取出して光線の透らぬ場所に七日間埋めて取出し、一二盃づつを服す。同時に滓を日光で乾して末に碾り、酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを煮た酒で服す。風に當り、情慾を犯すこと、及び魚、羊、鵞、麪、風を發動するものを絕對に忌む。【雞峯白花蛇膏】營、衞の不調和で陽少く陰多く、手、足の舉動不快活なるを治す。白花蛇を酒で煮て皮、骨を去り、瓦で焙じて肉を取つて一兩、天麻、狗脊各二兩を細末にし、銀の鉢に入れて無灰酒一升で浸し、重湯で煮て稠膏のやうにし、銀匙で攪き廻しながら生薑汁半盃を入れ、共に熬りまぜて瓶に收め、一日二回、半匙頭づつを好き酒、或は白湯に溶して服す。極めて佳き神效がある。（備急方）【治癩白花蛇膏】白花蛇五寸を酒に浸し、皮、骨を去つて炙き乾し、雄黃一兩を水飛して研りまぜ、白沙蜜一斤、杏仁一斤を

皮を去つて研り爛したものと共に煉つて膏にし、一日三回、一錢づつを溫酒で化して服す。先づ通天再造散を服し、蟲物を下し去つてこれを服すれば根を除く。(三因)

【總錄白花蛇散】腦風で頭痛が間歇的に發るもの、及び偏頭風を治す。白花蛇を酒に浸して皮、骨を去り、天南星を漿水で軟に煮て切り炒つて各一兩、石膏、荊芥各二兩、地骨皮二錢半を末にし、一日三回、一錢づつを茶で服す。(聖濟總錄)【潔古白花蛇散】大風病を治す。白花蛇、烏稍蛇を各淨肉を取つて二錢を酒で炙り、雄黃三錢、大黃五錢と末にし、三日に一回、二錢づつを白湯で服す。(家珍)【三蛇愈風丹】癘風で手足痲木し、眉毛脫落し、皮膚瘙痒するもの、及び一切の風瘡を治す。白花蛇、烏稍蛇、土蝮蛇各一條をいづれも酒に浸し肉を取つて晒し乾し、苦參の頭末四兩と末にし、皂角一斤を切つて酒に浸し、酒を去つて水一椀で濃汁を挼み取り、その汁を石器で熬膏したものに末を和して梧子大の丸にし、七十丸づつを通聖散の煎湯で服し、粥飯を食つて壓する。一日三回服し、三日に一回浴し、汗を取り風を避ける。○治例には、蝮蛇を加へずして大楓子肉三兩を加へてある。【三因の白花蛇散】九漏、瘰癧が項、腋の間に發して痒痛し、憎寒し、發熱するを治す。白

(八)汞同澒、澒粉水銀粉ナリ。

花蛇を酒に浸して取つた肉二兩を焙じ、生犀角一兩二錢五分を鎊り研り、黑牽牛五錢を半生半炒にし、靑皮五錢を末にし、二錢づつに膩粉五分を入れ、五更時刻に糯米飮で調へて服す。惡毒を利下するを度とし、十日に一回服すれば病根を絕つ。發動する食物を忌む。【俗に傳ふる白花蛇丸】楊梅瘡を治す。先づ發散藥を服して後にこれを服す。花蛇肉を酒で炙り、龜板を酥で炙り、穿山甲を炙り、蜂房を炙り、澒粉、朱砂各一錢と末にし、紅棗肉を搗いて梧子大の丸にし、一日三回、七丸づつを冷茶で服し、魚肉を忌む。服し盡せば愈える。後に土茯苓の藥を服して調理する。○方廣心法附餘では、楊梅瘡を治す。花蛇肉一錢、銀硃二錢、鉛二錢、(八)汞二錢を末にして九條の紙撚に作り、一條づつを燈盞の中で香油に浸して燈に點じ、烘爐の內に入れて寢具の中に置き、一日三回、その中に臥して熏ずる。風を透らせてはならぬ。【托痘花蛇散】痘瘡の黑陷を治す。白花蛇を骨を連ねたまま焦げぬやうに炙つて三錢、大丁香七箇と末にし、五分づつを水に淡酒を和したもので服す。神效がある。時移つて身上に發熱し、その瘡は頓に出て紅色に復活する。(王氏手集)

頭【氣味】【毒あり】【主治】【癜風、毒癩】(時珍)

附方　新一。【紫癜風】除風散——白花蛇頭二箇を酒に浸して炙り、蠍稍一兩を炒り、防風一兩を共に末にし、一日一回、一錢づつを溫酒で服す。(聖濟總錄)

目睛　主治　【小兒の夜啼。一箇を末にし、竹瀝で少量を調へて灌ぐ】(普濟)

(一)烏蛇（宋開寶附）

和名　たいわんこぶら
學名　Naja atra,(Cantor)
科名　こうがだ(溝牙蛇)科

釋名　烏稍蛇(綱目)　黑花蛇(綱目)

集解　○志曰く、烏蛇は(二)商洛の山に生ずる。背に三稜があり、色は漆のやうに黑く、性は善良で物を噬まない。江東には、能く物を絡み殺す黑稍蛇といふがある。やはりこの類のものである。

○頌曰く、(三)蘄州、黃州の山中にゐる。乾寧記に『この蛇は生命あるもの(動物)を食はない。また人間にも害をしない。多くは蘆叢中に在つて南風、及びその花の氣を吸ふ。最も採捕し難いもので、多くは蘆枝上から取るのである。その身は黑くして光り、頭が圓く、尾が尖り、眼に赤光があり、枯死してからでも眼が陷らず、活

(一)木村(重)曰ク、烏蛇ハ怒ルトキハ頭部ノ後方ヲ膨脹セシム。甚シキ毒ヲ有シ、頭部ヨリ背部黑褐色ナリ、五尺ニ達ス、湖南省浙江省ニモ產スレドモ、廣東省ニ普通ニシテ、ココニテハ食用トス、臺灣南部ニ棲ムト同種ナリ。

(二)商洛縣、隋ニハ豫州上洛郡ニ屬シ、唐ニハ關內道商州ニ屬ス。今ノ陝西省關中道商縣ノ東八十五支里ニ舊治在リ。

(三)蘄州ハ草部隰草

類爻ノ註、黄州ハ蟲部化生類蜈蚣ノ註ヲ見ヨ。

（四）鼠狼、鄭樵爾雅註云、鼬鼠狀如鼠赤黄色大尾能啖鼠俗鼠狼。

きてゐる時と同樣だ。重量を秤つて見て七錢から一兩までのものが上等品、十兩から一鎰のものが中等品であつて、粗大なるものほど力が低下する。僞物は他の蛇を



烏　蛇

――蘄州のものは劍脊細稍なり――

黑く熏じて作つてあるが、やはりよく眞物と見紛ふやうに出來てゐる。しかし眼だけが光らない』とある。

宗奭曰く、烏蛇の脊の高いものを世間で劍脊烏と稱する。稍尾の先が細く長いもので、銅錢を一百文通せるほどのものが佳いのである。身の長さ一丈餘のものもある。その性は（四）鼠狼を畏れるものだ。蛇類中でもこの蛇だけが最も多く藥に使用される。

斅曰く、凡そ一切の蛇は、その雌雄と産地とを吟味せねばならぬものだ。蘄州の烏蛇は、頭上二寸ばかりの間を一筋に連つて長さ半分ほどの逆毛が生え、頭尾相對

するものである。これを藥に使用すれば神の如き效果がある。彼の地ではこの蛇の重さ一兩以下のものが手に入ると、通例賣出するものの內から特別に取つて置いて朝廷に進供する。この蛇の、腹下に長さ一寸ほどの一條の白い帶子のあるものは雄であつて、藥に用ゐるによし。採取したならば、頭、及び皮鱗、帶子を去つて剉斷し、苦酒に一晝夜浸して漉出し、柳木炭火で炙乾し、再び酥で炙り、屋下の巳の方位の地に坑を掘つて一夜埋め、再び炙乾して用ゐる。或は酒で煮乾して用ゐるもよし。

時珍曰く、烏蛇には二種あつて、一種は劒脊細尾のもので上等品である。一種は長大で劒脊がなく、尾稍が粗いもので風稍蛇と名ける。やはり風を治する功力はあるが、力は前者に及ばない。

肉　【氣味】【甘し、平にして毒なし】論に曰く、小毒あり。【主治】【諸風頑痺、皮膚不仁、風瘙癮疹、疥癬】(開寶)【熱毒風で皮肌に癩を生じ、眉髭脫落するもの、癘疥等の瘡】(甄權)【功は白花蛇と同だが、性善にして毒なし】(時珍)

【附方】　舊二、新五。【大風】朝野僉載に『商州のある人が大風を患つたとき、

家人はそれを惡んで山中に茅屋を作つて住はせて置いた。ところが、そこに置いてあつた酒罌に烏蛇が墮ちてゐたのを、本人が知らずに飮んでゐて、漸次に瘥えて了つた。後で罌の底から蛇骨を發見して、始めて蛇の功果であつたことが判明した』とある。○治例の大風を治する方では、烏蛇三條を蒸熟して肉を取り、焙じて研末し、蒸餠で米粒大の丸にして烏雞に喂はせ、喂ひ盡したときその雞を殺し、烹熟して肉を取り、研末して一錢を酒で服す。或は蒸餠で丸にして服す。雞を用ゐること三四羽に過ぎずして癒える。○祕韞では、大烏蛇一條を打殺して物に盛り、爛るを待つて水二碗に七日間浸し、皮、骨を去つて糙米一升を入れ、一日間浸して晒し乾し、白雞一羽を一日餌を與へずに置いてその米を與へて食はせ、毛羽が脫け落ちるを待つてその雞を殺し、煮熟して食ひ酒で飮下す。かく喫し盡してから、熱湯一盆で浸し洗ふ。大抵半日にしてその病は自ら癒える【紫白癜風】烏蛇肉を酒で炙いて六兩、枳殼を麩で炒り、牛膝、天麻各二兩、熟地黃四兩、白蒺藜を炒り、五加皮、防風、桂心各二兩を片に剉み、絹袋に入れて無灰酒二斗の中に浸して七日間密封し、一小盞づつを溫服する。雞、鵞、魚肉、發動する物を忌む。(聖惠)【面瘡䵟皰】烏蛇

肉二兩を灰に燒き、臘猪脂で調へて傅ける。（聖惠）【嬰兒の撮口】乳を飲み得ぬには、烏蛇を酒に浸し、皮、骨を去つて炙いて半兩、麝香一分を末にし、半分づつを荊芥煎湯で調へて灌ぐ。（聖惠）【破傷中風】項强し、身直するには、定命散が主效がある。白花蛇、烏蛇をいづれも後半身の二寸を取つて酒で洗ひ潤して肉を取り、蜈蚣の完全なるもの一條を炙り、右を末にして三錢づつを溫酒で調へて服す。（普濟方）

膏【主治】【耳聾には、綿で豆ほどを裹んで塞げば神效がある】（時珍）　記載は聖惠方にある。

膽【主治】【大風癘疾、木舌脹塞】（時珍）

【附方】新二。【大風龍膽膏】大風疾の治療に神效がある。冬瓜一箇を五寸長さに截つて（五）穰を去り、地坑を深さ三尺に掘つて淨めた中に置き、烏蛇膽一個、消梨一箇をその瓜の上に置いて物で隔てて土を蓋ひ、二十一日目に一回看て、まだ甚しく壞れぬときは四十九日置き、三物俱に瓜皮内に水に化してあるを取出し、一茶脚づつを酒に和して服す。二三回にして立ろに癒える。少しばかりの風疾ならば一匙頭づつを服す。（王氏博濟方）【木舌塞脹】治療せねば死亡する。蛇膽一箇を焙乾して

（五）穰ハ瓤ノ誤ナラン。

末にし、舌上に傳けて涎の出るを吐き去る。(聖惠)

皮　[主治]　【風毒氣で眼に瞖を生じたるもの、唇緊、唇瘡】(時珍)

[附方]　新一。【小兒の緊唇、脾熱の唇瘡】いづれも烏蛇皮の燒灰を酥で和して傳ける。(聖惠)

卵　[主治]　【大風癩疾】時珍曰く、聖濟總錄では、癩風の治療に、烏蛇卵で諸藥を和して丸にして服す。蛇肉と同功だといふことだ。

(一)金蛇 (宋開寶附)

和名　未詳
學名　*Zamenis spinalis*, Peters.
科名　いうだ科

銀蛇を附す

[釋名]　**金星地鱔**(圖經)　**銀蛇**　また　**錫蛇**　と名ける。時珍曰く、金、銀、錫と呼ぶはその色と功力とに因る命名、金星地鱔とはその形に因む命名である。

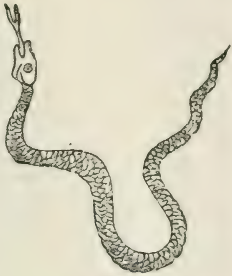
[集解]　頌曰く、金蛇は(二)賓州、澄州に生ずる。太さ中指ほど、長さ一尺ばかりのもので、常に木に登り、露を飮んで生存し、全體が金色で日に照すと光があ

(一)木村(重)曰ク、金蛇ハ細キ蛇ナリ。全支ニ分布ス、青黄色ノ地ニ黄又ハ淡紅ノ縦線背ヨリ後方ニ走ル、黄赤色ノ紋線大ナルモノハ赤金色チ呈ス。

(二)賓州、澄州ハ金部金ノ註チ見ヨ。

る。白いものをば銀蛇と名ける。近來はそのいづれをも捕ることは稀だが、(三)信州上饒縣(じやうねうけん)の靈山鄕に出る一種の金星地鱔といふがこの蛇に酷似したもので、冬期に收捕する。やはり解毒の功能があるものだ。

時珍曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄に『金蛇、一名地鱔。白きものを錫蛇と名ける。(四)黔(きん)州に產し、桂州に出るものがそれに次ぐ。太さ拇指ほど、長さ一尺ばかり。鱗甲上に金、銀色の別がある。解毒に有功だ』とある。これに據れば地鱔、卽ち金蛇であつて二種別物ではない。



〔金　　蛇〕
——廣西(銀蛇も同じ)——

肉　氣味　【鹹し、平にして毒なし】　主治　【金藥の中毒で、人肉が雞脚裂をなすを解す。夜間口に銀を含んで曉に達し、その銀が金色に變ずるのが金毒である。蛇四寸を取つて黃に炙き、煮て汁を頻(しきり)に飲み、瘥えるを度とする。銀蛇は銀藥の毒を解す】(開寶)　【藥毒を解し、洩瀉(えいしや)を止め、邪熱を除く】(蘇頌)　【久痢を療ず】(時珍)

發明　藏器曰く、嶺南には毒蛇、解毒の藥が多い。金蛇白藥がそれである。

(三)信州ハ金部金ノ註、上饒縣ハ鐵ノ註ヲ見ヨ。

(四)黔州ハ石部丹砂ノ註、桂州ハ草部毒草類鉤吻ノ註ヲ見ヨ。

時珍曰く、聖濟總錄に、久痢の止まぬを治するに金星地鱔丸といふがあつて、金星地鱔を醋で炙り、鉛丹、白礬を燒いて各五錢末にし、一日二回、二錢づつを米飲で服す。

(一)水蛇（綱目）

和名　たいわんやまかがし
學名　Natrix piscator (Schneider.)
科名　いうだ科

釋名　公蠣蛇

集解　時珍曰く、水蛇は所在にある。水中に生ずるものだ。大いさ鱓ほどあり、黄黒色で纈紋がある。人を嚙むが甚しい毒はない。陶弘景が『公蠣蛇は能く鱧に化するものだ』といつたのは卽ちこのものだ。水中には、また一種の泥蛇で、色黒く、穴居し、群を成し、人を嚙めば有毒のものもあるが、水蛇と同一物ではな



〔水　蛇〕

(一)木村(重)曰ク、支那ニ普通ニ產ス、鮮彩ナル色及ビ特別ナル斑紋ナシ三尺ニ達スレバ大ナルモノナリ、水中ニテヨク蛙等ヲ捕食ス、臺灣、印度ニモ產ス。

い。張文仲の備急方には『山中に公蠣に似た一種の蛇があるが、やはり人を嚙まない』とある。

肉〔氣味〕【甘く鹹し、寒にして毒なし】〔主治〕【消渇煩熱、毒痢】（時珍）

〔附方〕新一。【聖惠水蛇丸】消渇で四肢煩熱し、口乾し、心躁するを治す。活きた水蛇一條を皮を剝ぎ、黄に炙いて末にし、蝸牛五十個を水に五日間浸して涎を取り、天花粉末を入れて煎稠し、麝香一分を入れ、粟飯を和して綠豆大の丸にし、十丸づつを薑湯で服す。

皮〔主治〕【燒灰を油で調へて、小兒の骨疽で膿血の止まぬに傅ける。又、手指の天蛇毒瘡を治す】（時珍）

〔附方〕新二。【小兒の骨瘡】海上方の詩に『小兒の骨痛は言ふに堪へず、血を出し、膿を流して實に憐む可し。水蛇皮一個を尋ね取り、灰に燒き、油に抹して疼邊に傅けよ』とある。【天蛇毒】劉松篁經驗方に『(二)會水彎の陳玉田の妻が(三)天蛇毒瘡を病むだとき、一老翁があつて、水蛇一條を頭、尾を去り、中截の部分を長さ手の指ほど取つて骨、肉を剖き去り、それを患者に見せぬやうにして、その蛇皮で手

(二)會水彎、未詳。
(三)天蛇毒瘡、指頭ノ腫物、瘭疽ノ如キモノ。

指を包み、自然のまゝに束緊して紙で外部を裹んでくれた。すると全身に頓に涼を覺えてその病が癒えた。そこで數日の後に解いて視ると、手指に小繩ほどの一筋の溝が出來て、裹んだ蛇皮の內側に頭も目も完全に具つた一條の小蛇がゐた』とある。

(一)蛇婆（拾遺）

和名 しなうみへび
學名 Hydrus platurus, Linne.
科名 こうがだ科

【集解】藏器曰く、蛇婆は東海の水中に生ずる。さながら蛇のやうで、常に自ら浮游してゐるものだ。採取に一定の時期はない。

時珍曰く、按ずるに、ここにいふものは、形狀も功用も水蛇を指したものらしい。しかし考證すべきものがないので、各別條に揭げたものと思はれる。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】【主治】【赤白毒痢、蠱毒下血、五種の野雞病。惡瘡には炙つて食し、或は燒いて末にして二錢を米飲で服す】（藏器）

(一)木村(重)曰ク、蛇婆ハ長キヤヤ扁平ナル頭ヲ有ス、支那海ニハ海蛇五屬十種ヲ產スルモ今一般的ナルヲトル。

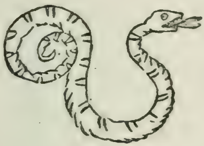
(一)黄頷蛇（綱目）

和名　しなあをだいしやう
學名　Elaphe taeniurus, Cope.
科名　いうだ科

赤楝蛇を附す

和名　やまかがし
學名　Natrix annularis, Howell.
科名　いうだ科


赤楝蛇


〔黄頷蛇〕

〔釋名〕　黄喉蛇（俗名）　赤楝蛇、一名桑根蛇　時珍曰く、頷とは喉の下をいふのであつて、色に因つて名けたのである　赤楝、桑根は形態の形容だ。陶氏は赤鏈としてある。

〔集解〕　時珍曰く、按ずるに、肘後、千金、外臺の諸方に多く用ゐてある自死蛇、及び蛇の呑んだ蛙、鼠に就ては、いづれも何蛇と指定してない。ただ本草には蝮蛇腹中の鼠とあるが、陶氏の註に『術家で用ゐる赤鏈、黄頷は多く人家の屋間にゐる。鼠子、雀雛

(一)木村(重)曰ク、黄頷蛇ハ揚子江附近及南方ニ分布ス、大ナル青黄色ノ蛇ニシテ背黒キ縄梯子狀ノ紋アリ、大ナルハ六尺ニ達ス鼠等ヲ捕食ス。赤楝蛇ハ揚子江及南方ニ分布ス頭部ニ黒紋アリ、體ハ灰青色ニシテ體側ニ赤色ノ大紋並ブ、北支那ニハ此屬別種ヲ産ス。

を呑み、腹中の大きくなつてゐるものから破り取つて乾したものだ』といひ、又、蛇蛻の註に『草間に虺、蝮の蛻を見ることは稀なもので、多くは赤棟、黄頷などのものである』といつてある。これに據つて見ると、古方に用ゐた自死蛇、及び蛇の呑んだ蛙、鼠もこの二蛇のものを當てたと見える。蛇蛻の場合でもやはり多くはこれを用ゐたのだ。赤棟は、紅色、黒色が節節に相交り、さながら赤棟や桑の根のやうな形狀をしてゐる。黄頷は黄色、黒色が相交り、喉下の色が黄であつて、大なるものは一丈近くもある。いづれも甚しい毒はないものだ。蛇遣ひが見世物に使ふが、死ねばそれを食つて了ふ。又、竹根蛇いふのがあつて、肘後には青蝰蛇といつてある。藥用には入れられない最も有毒のもので、喜んで竹、木に傳はり、竹の色と同色だ。長さは四五尺のものである。その尾三四寸の間に異樣なる點のあるものを熇尾蛇と名ける。毒の就中猛烈なものだ。その毒に中つたときは、急に三四壯灸すれば毒が行らなくなるから、その上で藥を傅ける。又、菜花蛇といふがある。やはり長大で黄綠色のものだ。方家ではこれも用ゐることがある。

肉　【氣味】【甘し、溫にして小毒あり】【主治】【酒に釀し、或は丸、散に入

れて風癩、頑癬、惡瘡を治す。自死蛇は漬けた汁を大疥に塗り、煮た汁で臂、腕の痛むものを浸す。灰に燒いて豬脂と共に風癬、漏瘡、婦人の妬乳、狂犬の咬傷に塗る】(時珍) 記載は肘後、梅師、千金の諸方にある。

【附方】新三。【狂犬の齧傷】自死蛇一條を燒き焦して末にし、瘡孔中に納入する。(千金方) 【貓鬼野道】歌ひ、哭し、正しき意識に因らぬ擧動をなすものには、五月五日に取つた自死赤蛇を灰に燒き、一日一回、六寸匕を井華水で服す。(千金方) 【癩に似た惡瘡】及び馬疥の錢ほどの大いさのものには、自死蛇一條を水に漬け、爛れてから骨を去り、汁を取つて塗れば手に隨つて瘥える。(千金)

蛇頭 【主治】【燒灰は久瘧、及び小腸癰に主效がある。丸、散に入れて用ゐる】(時珍)

【附方】新二。【發背腫毒】蛇頭燒灰を醋で和して傅け、一日三回づつ易へる。(千金) 【蝦蟇瘻瘡】五月五日の蛇頭、及び野豬脂、水衣と共に封ずるが佳し。(千金方)

骨 【主治】【久瘧、勞瘧。炙いて丸、散に入れて用ゐる】(時珍)

【附方】新一。【一切の冷漏】自死蛇から取つた骨を末にして封ずる。甚しく

痛むときは杏仁膏を摩すれば止む。(千金方)

涎　[氣　味]【大毒あり】思邈曰く、江南の山間地方で行はれる一種の蠱毒は蛇涎で藥を合せるもので、それを飲食物中に入れて用ゐるのであるが、これを食はされたものは瘕病を發し、長年月に亙つて死亡する。但し雄黃、蜈蚣の藥で治療すれば好結果を得る。

蛇の呑んだ鼠　[主　治]【鼠瘻、蟻瘻で針の穴のやうな細孔のあるものには、臘月猪脂で煎じ焦して滓を去つて塗る】(時珍)記載は千金にある。

蛇の呑んだ鼃　[主　治]【噎膈、勞嗽、蛇瘻】(時珍)

[附　方]　新三。【噎膈】蛇の呑んだ蝦蟇を泥で包んで燒いて性を存し、研末して米飲で服す。【久勞咳嗽】臭痰を吐くものには、水邊で蛇が青蛙を呑んでまだ完全に嚥下さぬものを搜し取り、蛇共に打ち殺して黃泥で固濟し、煆いて研り、空心に一二錢を酒で服す。至效がある。生物、冷物を忌む。五七日續けて用ゐれば永く再發せぬ。(總錄方)【蛇瘻の癒えぬもの】蛇腹中の鼃を灰に燒いて封ずる。(千金)

(一)蝮　蛇（別錄下品）

和名　たいりくはぶ
學名　Trimeresurus gramineus, Shaw
科名　まむし科

【釋名】反鼻蛇　時珍曰く、按ずるに、王介甫の字說に『蝮といふは、觸れば復讐に人を害し、害されるとその人がまた復讐する。故に蝮といつたのだ』とある。

【集解】弘景曰く、蝮蛇は土のやうな黃黑色で白い斑があり、頷が黃で口が尖り、毒が最も烈しい。虺は形が短くして扁く、毒は烈しくない。蚖と同物である。蛇の類は甚だ衆いが、この二種、及び青蝰だけが猛烈なもので、即時に治療せねば多くは死亡する。

恭曰く、蝮蛇は地の色をなし、鼻が反り、口が長く、身が短く、頭、尾が同じやうなものだ。(二)山南、漢、沔の地方に多くゐる。一名蚖蛇ともいふが、二種の物ではない。

頌曰く、蝮蛇は形が長くなく、頭が扁く、口が尖り、頭に斑があり、身に赤い

(一)木村(重)曰ク、たいりくはぶハ鼻短ク上方ヲ向ク、背部ハ暗綠ニシテ腹面黃色ナリ、又横ニ赤色ノ斑點アリ、支那一般ニ分布ス。ヨク木ニ登ル、沖繩ニ產スルはぶト同屬ニシテ、支那ニ六種ヲ產ス、有毒ナルモ食用トス。

(二)山南ハ唐十道ノ一、草部隰草類漏盧ノ註參照。漢ハ漢水、沔ハ漢水ノ長江ニ入ラントスル地點ノ稱ナリ。

（一）擘、郭註ニ謂擘指、卽拇指也トアリ。

文斑の青黒色のものもある。人が觸れ犯すと頭、足に粘著する。東方地方の諸山に甚だ多いので、草の中を歩行するには深く注意を要する。

藏器曰く、蝮蛇は錦文であるが、地と同色のものもある。多くの蛇の種類中でこの蛇だけ胎生する。この蛇に足に著かれたときは足を斷ち切らねばならず、手に著かれたときは手を斷ち切らねばならぬ。然らざれば全身が糜爛するものだ。七八月が最も毒の盛なときで、その頃にはその毒を洩すために樹を嚙むものだが、嚙まれたその樹は枯死して了ふ。又、草木の上に涎沫を吐いておくこともあるが、人がそれに觸ると蛇漠瘡といふ瘡になつて全身が腫れ、容易に治癒せぬものだ。療方は蛇螫の場合と同様である。



〔蝮　蛇〕
——虺も同じ——

時珍曰く、蝮と虺とに就いて、陶氏は二種だといひ、蘇恭は一種だといふが、今按ずるに、爾雅に『蝮虺は身の博さ三寸、首の大さ（一）擘の如し』とあるは蝮と虺と

を一種と見做したものだ。郭璞は『蝮蛇は南方だけにゐる。一名反鼻といひ、頸細く、頭太く、尾焦げ、鼻上に鍼があり、錦文が綬のやうで文の間に猪鬣のやうな毛があり、大なるものは七八尺ある。虺といふは所在にゐるもので、俗に土虺と呼ぶ。地と同色のものだ』といひ、顏師古は、俗名を以てこれを證して郭璞の說を是としてある。又、北史に、高道穆が『復た元顥を用う、乃ち虺を養つて蛇と成す』といつたとある。これはいづれも蝮、虺を二種と見做したものだ。蓋し蝮は長大なもの、虺は短小なものであつて、元來區別の判らぬほどのものではない。陶氏の說が正しいのである。柳子厚の蝮蛇の文に『目は蜂蠆を兼ね、色は泥塗に混ず。その頸は蹙恧としてその腹は次且たり。鼻を褰げ牙を鉤り、穴より出て榛に居り、怒を蓄へて蟠り、毒を啣んで趫る』とあつて、これは頗るその狀態を言ひ盡してある。抱朴子には『蛇は種類が最も多いが、蝮だけは人に中つて甚だ急なるものだ。その場合には、卽時に刀でその瘡の部分の肉を割去する。その肉を地に投ずると火で炙るやうに沸き起ち、須臾にして焦げ盡るものだ。かくすればその人が生命を取り止め得る』とあり、王充の論衡には『蝮蛇は太陽の火氣を含んで生ずるものだ。故に牙が利

(四)木村(重)曰ク、千歳蝮 學名 Trimeresurus jerdoni, Günter. 科名まむし科 たいりくはぶト同屬ナリ、ヨク木ニ登ル毒蛇ナリ、アツサム地方ヨリ湖北省マデノ西部支那ニ棲ム、今コレヲアテテ後考ヲ俟ツ。

(五)魏興ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。

くして毒がある』とある。

附録

(四)**千歳蝮** 頌曰く、東方の地に一種の千歳蝮といふがゐる。形狀は蝮のやうで短く、四本の脚があり、能く跳ね來つて人を嚙むもので、嚙まれたものは必ず死亡する。その場合人を嚙むと忽ち木に跳ね上つて『斫木、斫木』と鳴く蛇ならば助からぬが『博叔、博叔』と鳴く蛇ならば急に手當を加へれば一命を取止めるものだ。細辛、雄黃等分を末にして瘡中に納れ、一日三四回易へる。又、栝樓根、桂末を管中に入れ、氣の走出せぬやうにして身に佩び、その毒に中つた場合に急にそれを塗敷する。その手當は非常に敏速を要するもので、緩慢なれば助からない。

時珍曰く、按ずるに、字林に『睩聽は形が蜥蜴のやうなものだ。(五)魏興に出る。樹上にゐて跳ね來つて嚙み、嚙むと樹に還つて頭を垂れ、嚙まれた人の痛み叫ぶ聲を聽いてから立去るものだ』とあるがこの物である。その形狀は頭と尾と同樣で、大いさは衣を搗く杵ほどのものだ。俗に合木蛇と呼ぶ。長さは一二尺のものである。談埜翁方には『斫木蛇と名け、また望板歸と名ける。これを治療するには嫩黃荊葉を搗き爛して敷ける』とある。

膽　[氣　味]　【苦し、微寒にして毒あり】[主　治]　【䘌瘡】(別錄)　【下部の蟲を殺す】(甄權)　【諸漏を療ずるに研つて傅ける。若し痛むときは杏仁を杵いて摩る】(時珍)　記載は外臺にある。

肉　[氣　味]　【甘し、溫にして毒あり】[主　治]　酒に醸して用うれば、癩疾、諸瘻、心腹痛を療じ、結氣を下し、蠱毒を除く】(別錄)　【五痔、腸風瀉血】(甄權)　【大風、諸惡風、惡瘡、瘰癧、皮膚の頑痺、半身枯死、手足、臟腑間の重疾】藏器曰く、活きた蛇一條を取つて器中に入れ、それに醇酒一斗を投じて封定し、馬尿中に一年間置く。取出して開いて見ると、蛇は已に消化して酒の味だけが殘つてゐるものだ。前記諸證の病の場合、その酒一升以內を服すれば、身に習習たるを覺えて癒える。しかし小毒があるから頓服してはならぬ。また他の藥を服してはこの藥の效果が擧らない。又曰く、癩を生じた場合には一條を取つて——或は他の蛇でもよし——燒き熱してその上に坐る。馬尾のやうな赤蟲が出るものだ。同時にその蛇の肉を取つて鼻中を塞ぐ。

[發　明]　時珍曰く、癩疾は天地肅殺の氣を感じて發生する惡疾であり、蝮蛇は

天地陰陽の毒烈の氣を禀けて生ずる惡物であつて、毒物を以て毒病を攻めるのだ。蓋しその類に從ふのである。

【附方】　舊一。【白癩】大蝮蛇一條を傷けぬやうにして酒一斗に漬け、糠火で溫めてやや熱せしめて蛇を取出し、一寸を臘月猪脂と和して搗いて傅ける。（肘後方）

脂　藏器曰く、物に摩著すれば皆透るものだ。【主治】【綿で裹んで耳聾を塞ぐ。また腫毒にも傅ける】（時珍）

皮　【主治】【燒灰は丁腫、惡瘡、骨疽を療ず】（蘇恭）

蛻　【主治】【身癢、疥癬、瘑瘡】（蘇恭）

骨　【主治】【赤痢には、灰に燒いて三錢を飲服する。雜蛇でもよし】（藏器）

屎　器中で飼養して取る。【主治】【痔瘻】（蘇恭）

腹中の死鼠　【小毒あり】【主治】【鼠瘻】（別錄）千金に『燒いて末にし、一日二回、酒で方寸匕を服す。三日に過ぎずして大いに效驗がある』とある。

蚖（一）（別錄）

和名　未詳
學名　Trimerosurus mucrosquamatus, Cantor.
科名　まむし科

【集解】　別錄に曰く、蚖類である。一名蚖。短身土色にして文がない。

時珍曰く、蚖と蝮とは同類だ。卽ち虺であつて、長さ一尺餘のものだ。蝮は大きく、蚖は小さいが、その毒は同一である。食經に所謂『虺は色土の如くして小さく、蝮蛇の如し』とあるがそれである。詳細は蝮の條下を見よ。舊本に一蚖類である。一名蚖』としてあるは誤だ。これは『蚖は蝮の類である。一名蚖』とすべきであつて、蚖、卽ち虺の字である。蚖と蚖とは字の形が近似してゐるところから、傳寫の間に脫誤したものである。陶氏の註に『蝮、卽ち蚖』としたのもやはり誤であつて、蚖は蝮であるならば、別錄に更に二箇條に分けて掲げてある筈はない。ここにいづれも改め正して置く。

【氣味】（缺）【主治】【痺、內漏を療ず】（別錄）【破傷中風、大風惡疾を治す】（時珍）

（一）木村（重）曰ク、蚖ハまむしニ似ルモ體色暗灰色ニ褐色ノ斑アリ、福建省及ソノ西部ニ產ス。

> (一)木村(重)曰ク、あをへびハ背部青綠色ニシテ腹部黃色ナリ、福建省ニ普通ニ棲ム揚子江ノ北ニナシ、此種臺灣印度ニモ分布ス。
>
> (二)蒼梧ハ漢ノ郡名、卽チ今ノ廣西省蒼梧縣ニ治ス。

【附方】 新一。【破傷風】牙關緊急し、口噤して開かず、口面喎斜し、肢體弛緩するには、土虺蛇一條を頭、尾、腸、皮、骨を去つて醋で炙り、地龍五條を泥を去つて醋で炙り、重さ八錢の天南星一箇を炮き、右を末にして醋で煮た麪糊で綠豆大の丸にし、三丸乃至五丸づつを生薑酒で服す。かくて稀薟白粥を食つて汗を取れば瘥える。昔、宮使明光祖が統制官に赴任して重傷を負ふた際、これを服して效果を擧げた。（普濟方）

(一)藍蛇（拾遺）

和名 あをへび
學名 Liopeltis major, (Günther)
科名 いうだ科

【集解】 藏器曰く、(二)蒼梧の諸縣に出る。形狀は蝮のやうでくびれ目がある。そのくびれ目から兩斷とすれば、頭は毒で尾が藥だ。嶺南地方では藍藥と呼んでゐる。

【主治】 【頭を用ゐて合せた毒藥は人を毒殺するものだが、尾で作つた脯を食へばその毒を解す】（藏器）

(一)兩頭蛇（拾遺）

和名　しなはななし
學名　Calamaria septentrionalis, Boulg.
科名　いうだ(遊蛇)科

釋名　**枳首蛇**（爾雅）　**越王蛇**　時珍曰く、枳とは兩の意味だ。郭璞は『(二)會稽地方では、これは越王の弩の紘が化したものだから越王蛇と呼ぶのだといふ。江東地方では越王約髪と呼んでゐる』といひ、博物志には『馬鱉が牛血を食つて化したものだ』とある。けれどもやはり自ら種類があるのであつて、盡くが化生のものではない。



〔兩頭蛇〕

集解　藏器曰く、兩頭蛇は大さ指ほどのもので、一方の頭には口、目がない。兩頭倶に能く行くものだ。これが見れると不吉だといふ。孫叔敖がこれを埋めたといふは、その後の者がこれを見たならば必ず死ぬであらうといふことを恐れたのだ。

時珍曰く、按ずるに、爾雅に『中央に枳首蛇あり、中國

(一)木村(重)曰ク、兩頭蛇ハ小蛇ナリ、頭モ尾部モ太サ同ジク、其尾部ニ眼及口ノ如キ紋アリ、イヅレガ眞ノ頭ナルヤ區別ニ苦シム、體ハ灰色ニシテ黒ト白ノ斑點アリ。福建省ニ産ス。別ニ一種四川省ニ産スルモ代表的ノモノナトル。

(二)會稽ハ郡名、秦ニ置ク。今ノ江蘇省ノ東部、浙江省ノ西部皆ソノ地ニシテ、呉、即チ今ノ江蘇省呉縣ニ治ス。

の異氣なり』とあり、劉恂の嶺表錄に『(三)嶺外に極めて多い。長さ一尺餘、太さ小指ほどのもので、背に錦文があり、腹下が鮮紅色だ。一般にありふれたものになつてゐて、一向珍らしいとも思はない』とあり、羅願の爾雅翼に『(四)寧國に甚だ多い。同一穴中に數十ゐる。鱗が黑く模樣の白いものだ。又、夏季の雨後に出る一種で、蛣蚓の大いさほどで鱗があり、その尾が首のやうなものもある。やはり雨頭蛇と名ける』とある。又、張耒の雜志に『(五)黄州には一名山蚓といふ雨頭蛇がゐる。これは蚓が老いて化したものだといふが、その運行する狀態は蛇のやうでない。宛轉として甚だ遲鈍なものだ』とある。これは羅氏の雨後に出るといふそのものだ。

肉

【氣　味】　時珍曰く、按ずるに、南越志には『毒なし、夷人はこれを餌ふ』とある。

【主　治】　『瘧疾。山間の住民はこれを收取し、乾して項上に佩びる』（時珍）

(一)天　蛇（綱　目）

和　名　未詳
學　名　Calliophis macclellandi, Reinhardt.
科　名　こうがだ（溝牙蛇）科

【集　解】　時珍曰く、按ずるに、沈存中の筆談に『天蛇は幽陰の地に生じて雨に遇

(三)嶺外ハ嶺表トイフニ同ジ、今ノ廣東、廣西地方ヲイフ。

(四)寧國ハ晉ニ置キタル縣名、故城ハ今ノ安徽省寧國縣南ニ在リ、隋ニ廢シ、唐ニ復タ置ク。

(五)黄州ハ蟲部化生類蜈蚣ノ註ヲ見ヨ。

(一)木村(重)曰ク、天蛇ハ揚子江ノ南方支那ニ分布ス、赤褐ノ色帶首ト體ノ中間ニアリ、又眼ノ間ニ

ふて後に出るものだ。(二)越地方ではこれを非常に畏れる。その大いさは箸ほどのもので扁く、長さは三四尺、色は黄赤だ。醋を澆げば消える。或は石灰を糝しても死ぬ』とあり、又『天蛇は何物であるか判らないが、その物に螫され、その物の觸れた露水に濡れると全身が潰爛する。或はその物は草間にゐる花蜘蛛だといふが、それは事實でない。廣西のある役人が蟲の毒螫に遭つて全身潰爛したとき、ある醫師が視て「これは天蛇に螫されたものだから施すべき方法がない」といつた。そこで藥をその腫れた一箇所に傅け、鉗で蛇のやうなもの十餘箇を拔き出した。しかし結局助からなかつた。又、錢塘のある田舍者が突然癩を病んで全身潰爛し、喚き叫んで絶命せんとする苦しみをしたが、西溪寺の僧が視て「これは天蛇の毒だ。癩ではない」といつて、秦皮の煮汁一斗を作つて任意に飲ませたところ、第一日に病の半を減じ、三日にして頓に癒えた』とある。○又、水蛇が天蛇の毒を治することは前に記載してある。

黑帶アリ、毒蛇ムシロ小型ナリ、小ナル兩頭蛇ヲ好ミテ食ス。集解ニヨレバコノ他ニ適スルモノナシ、今假ニ學名ト頭註トヲ揭ゲテ後攷ヲ俟ツ。

(二)越トハ今ノ浙江省地方ヲイフ。

荷印（拾遺） 和名未詳 學名未詳

【集解】藏器曰く、荷印、一名荷斗。潮州に出る。蛇のやうで四足のあるものだ。

【主治】【耳中に滴せば聾を治す。左右の耳を徹らせる】（藏器）

蛇角（一）（綱目） 和名未詳 學名未詳

【釋名】**骨咄犀** また骨篤とも書く。**碧犀** 時珍曰く、按ずるに、陶九成の輟耕錄に『骨咄犀は大蛇の角である。骨咄は蠱毒と書くべきもので、この物は蠱毒を解すこと犀角の如しといふ意味だ』とあるが、唐書に（二）古都國なる地名があつて、やはりこれを產すとある。して見ると骨咄は古都の訛かとも思はれる。

【集解】時珍曰く、按ずるに、大明會典には『蛇角は（三）哈密衞に產する』とあ

（一）木村（重）曰ク、青海、新疆省ノ地ニ蛇角ト稱スルモノアリ、古代生物（恐龍又ハマンモス）ノ牙、骨カ、又ハ高山哺乳動物ノ角ナルベシ。後攷チ俟ツ。

（二）古都國、即チ骨咄。西域記ニハ珂咄羅トアリ。丁謙氏ノ考證ニ據レバ、パミルノ北方今ノ露領ニ

り、劉郁の西域記には『骨篤犀、卽ち大蛇の角であつて、西番に產する』とあり、曹昭の格古論には『骨篤犀とは碧犀のことだ。色は淡碧の玉のやうでやや黃色があり、その文理は角に似たもので、扣けば玉のやうな淸越な聲が出る。磨り刮つて嗅げば香氣があるが、燒いては臭くない。最も貴重なもので、腫を消し毒を解す功能がある』とあり、洪邁の松漠紀聞には『骨咄（四）犀は甚だ大なるものではない。紋は象牙のやうで黃色を帶びたものだ。これで作つた刀靶は價格に見積れぬ貴重な珍寶となつてゐる』とある。

【氣味】【毒あり】【主治】【腫毒を消し、諸毒、蠱毒を解す。毒を以て毒を攻むるのである】（時珍）

諸蛇（綱目）

和名　へびのるゐ
英名　Sorts of snakes.

【釋名】時珍曰く、蛇の字は古代の文字では它と書いた。俗に虵と書く。佘（シヤ）移（イ）佗（タ）の三音がある。篆文はその宛轉し屈曲する有樣の形容であつ

ンヅインダリア河ノ南、コンヅー城ノ地ナリトイフ。
（三）哈密衞、卽チ今ノ新疆省迪化道ハ哈密縣ノ地ナリ。
（四）屋屋ハ犀角ノ誤カ。

て、その運行が委佗たるものだからかく名けたのだ。嶺南地方ではこれを食ひ、或は訛と呼び・或は茅鱓と呼ぶが、按ずるに、山海經に『海外西南人は蟲を以て蛇となし、蛇を號して魚となす』とあるところから見ると、古代からさうした稱呼があつたものと見える。

【集解】 時珍曰く、蛇類に關するさまざまな語り艸は、明な說明の下に整理分類することが六ヶ敷い。それ等をば左に引きまとめて參考、便覽に供する。

【蛇は、禽に在ては翼火である】天文の象形であつて、南方に居る。【卦に在ては巽風である】巳を蛇とする。【神に在ては玄武である】北方の神であつて、玄龜と纏蛇との相合したものだ。【物に在ては毒蟲である】說文にある。【水、火、草、木、土の五種あり】北戶錄にある。【青、黃、赤、白、黑、金翠、斑花の諸色がある】各條に說明してある。【毒蟲であるが無毒のものがある】金蛇、水蛇は無毒だ。【鱗蟲であるが毛の生えたものがある】蝮蛇は文間に毛がある。山海經には『長蛇の毛は彘毫の如し』とある。【卵生であるが胎產のものがある】蝮蛇は胎生だ。【腹行するものだが四足あるものがある】鱗蛇、千歲蝮、苟印、蜥蜴にはいづれも足が

ある。【又、冠あるもの】雞冠蛇は頭上に冠があり、最も毒である。【角あるもの】三角蛇は角がある。【翼あるもの】西山經に『太華山。蛇あり、六足四翼。名けて肥䗤(ひゐ)といふ』とある。【飛ぶもの】山海經に『(一)柴桑(さいさう)に飛蛇多し』とあり、荀子に『螣蛇(とうじや)は足なくして飛ぶ』とある。【獸首のもの】大荒經に『(二)肅愼國に琴蛇あり、獸首蛇身』とある。【人面のもの】江湖紀聞に『嶺表に人面の蛇がある。能く人の姓名を呼び、人を害するものだ。ただ蜈蚣だけを畏れる』とある。【兩首のもの】枳首蛇(きしゆじや)。【兩身のもの】北山經に『(三)渾夕(こんせき)の山。蛇あり、肥遺といふ。一首兩身。見(あらは)るれば大旱す』とある。管子には『涸水の精を名けて蟡(き)といふ。狀蛇の如くにして一首兩身、長さ八尺。その名を呼ぶ。魚鼈(ぎよべつ)を取るべし』とある。【岐尾のもの】廣志に『雲南に出づ』とある。【鉤尾(こうび)のもの】張文仲は『鉤蛇は尾が鉤のやうで、人、獸を鉤つて水に入つて食ふ』といつてある。【(四)熇尾(かうび)のもの】葛洪は『熇尾蛇は青蝰(せいけい)に似てその尾は三四寸、異色あり。最も毒なり』といつてある。【(五)柂形(だけい)のもの】張文仲は『柂蛇は形が柂に似て長さ七八尺。人が中(あた)らるれば必ず死ぬ。船柂を削つて煮た汁に浸す』といつてある。【杵形(しよけい)のものがある】卽ち合木蛇。【又、

(一)柴桑山ハ山海經中次十二經ニアリ。畢沅註ニハ『今在潯陽柴桑縣南』トアリ。汪紱註ニハ『今江西南康府也』トアリ。卽チ今ノ江西省九江縣ノ西南九十里ニアル柴桑山ナリトイフ。

(二)肅愼ハ古ノ國名、今ノ吉林省、及ビ露領沿海州ノ地ナリ。琴蛇、本書ニハ琴蟲トアツテ、註ニ亦蛇類也トアリ。

(三)渾夕之山『嚻水出焉而西北流注於海』トアルニ見レバ蒙古漠北ノ地ニアルモノノ如シ。

(四)熇ハコゲイロ。

(五)柂ハ柁ニ同ジ、正船木也。和名カヂ。

青蛙】即ち竹根蛇。【白蛙、蒼虺、文蝮、白頸、黒甲、赤目、黄口などの類がある】張文仲は『悪蛇甚だ多し。四五月には青蛙、蒼虺、白頸、大蜴。六七月には白蛙、文蝮、黒甲、赤目、黄口、反鉤、三角の類であつて、いづれも毒の猛烈なものだ。又、南方に蚼蛇といふがある。人がもしそれに傷けられても死なないと、その人の身を終ふるまで狙つてゐるもので、幾百人の人込みの中にゐてもやはりその人の處へ來て的確にその人を狙ふ。ただ百里以上遠隔の地に遁げれば始めて免れ得る』とある。【蛇は出るに春を以てし、出れば物を食ふ】蛇は春、夏を晝とし、秋、冬を夜とする【その蟄するは冬を以てし、蟄すれば土を含む】それを春になると吐出する。即ち蛇黄石だ。【その舌は雙】物理論に『舌は心の苗、火は已に旺なり。已を蛇となす、故に蛇は雙舌なり』とある。【その耳は聾】埤雅に『蛇は聾なり、虎は(六)齈なり』とある。【その聽くは目を以てし】埤雅。【その蟠るは壬に向ひ】淮南子。【その毒は涎に在り】蛇を取扱つてもその涎を洗ひ落せば毒を受けない。蛇の涎は人に著けば蛇淡瘡となり、絲のやうに長く延く涎を吐く。それは能く人の目を害するものだ。段成式は『蛇が怒つた時は毒が頭、尾に在る』と

(六)齈ハハナツマルト訓ム。

いつてある。【その珠は口に在り】陸佃は『龍の珠は頷に在り、蛇の珠は口に在り、珠を所有する蛇は多くは陰暗の地に好んで居り、人を見ると口を張つて燼の如き氣を吐く』といつてある。【その行くことは紆り】淮南子に『蛇屬は紆行す』とある。【その食ふには呑み】牙があつて齒がない。【皮は數解蛻し】變化論に『龍は骨を易へ、蛇は皮を易へる』とある。【性方藥を曉る】稽聖賦に記述がある。又、異苑に『ある農夫が、一匹の蛇が負傷すると、他の一匹の蛇が草を啣んで來て傅けてやり、やがていづれへか起ち去つたのを見た。そこでその農夫がその草を採つて瘡の治療に用ゐ、名けて蛇啣といつた』とある。【蛇と蛇との交尾には雄が雌の腹に入る】交尾が畢ると退出する。段成式は『蛇交を見た人は三年で死ぬ』といひ、李廷飛は『蛟交を見た人には必ず喜び事がある』といつた。【蛇が雉と交れば蜃、及び蟂を生む】蛟龍の條に詳記してある。傅至剛は『蛟と雉と交つて生んだ卵は雷に遇ふと土に入り、久しくして蛟となる。土に入らぬものはただ雉になるだけだ』といひ、述異記には『江淮地方に能といふ獸がゐる。これは蛇精から化したもので、冬には雉となり、春にはまた蛇になる』とある。【蛇は龜鼈を以て雌

となし』埤雅に『大腰は純ら雌にして蛇を以て雄となす。蛇が鼈に求むれば鼈を生み、蛇が雉に求むれば蜃蛟を生む。物異にして感同じきなり』とある。【又、鱧、鱓と氣を通じ】本條に記載がある。【水に入つて石斑魚と交り】本條に記載がある。【山に入つて孔雀と匹し】禽經に『鵲が蛇を見れば噪して奔り、孔が蛇を見れば喜んで躍る』とある。【竹は蛇に化し、蛇は雉に化し】異苑に『(七)太元年間、(八)汝南地方のある者が木を伐つたとき、ある竹の中央が已に蛇の形に成つてゐて、枝葉は故の通りに茂つてゐるのを見た。又、(九)桐廬のある者が竹を伐つたとき、蛇が雉に化したのを見た。頭項が已に蛇のやうになつて身に就いてゐたといふ。なるほど、竹が蛇に化し、蛇が雉に化するものだといふはこのことかと思はれた』とある。【(一〇)夔は蛇を憐み、蛇は風を憐む】記載は莊子にある。【水蛇は鱓に化し】蛇鱓と名けて有毒のものだ。【螣蛇は龍に化す】神蛇は能く雲霧に乘じて千里に飛游する。【螣蛇は聽いて孕む】記載は變化論にある。又、抱朴子には『螣蛇は交らず』とある。【蟒蛇は目圓し】記載は述異記にある。大蛇を蟒といふ。【巴蛇は象を呑み】山海經に『巴蛇は象を食ひ、三年にしてその骨を出す』とある。【蚺蛇は鹿

(七)太元ハ晉ノ孝武帝ノ年號。元年ハ西暦三七六年ニ當ル。
(八)汝南ハ草部山草類苦參ノ註ヲ見ヨ。
(九)桐廬、今ノ浙江省桐廬縣ノ地ナリ。
(一〇)莊子ニ夔憐レ蚿、蚿憐レ蛇、蛇憐レ風トアリ。

(一)波斯ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(二)罽賓國ハ草部芳草類鬱金香ノ註ヲ見ヨ。

を呑み】本條に詳記してある。【玄蛇は麈を呑む】大鹿である。山海經に記載がある。【活褥蛇は能く鼠を捕ひ】唐書に『貞觀中、(一)波斯國からこれを獻じた。形狀は鼠と同じくして色は正青、能く鼠を捕ふ』とある。【食蛇鼠は能く蛇を捕ふ】唐書に『(二)罽賓國に食蛇鼠といふがゐる。喙尖り、尾赤く、能く蛇を食ふ。蛇螫を被つたものは、その鼠に嗅がせて尿を注がせれば立ろに癒える』とある。【蛇は鼠を呑むが、蛇を嚙ふ鼠狼があり】寇曰く、『嘗て、長さ一丈餘の一匹の烏蛇を鼠狼が嚙み、その蛇の頭を嚙んで曳き去るのを見た、やはりその物相互の間に畏、伏の關係があると見える。【蛇は蛙を呑むが、蛇を制する田父がある】治聞記に『蝦蟇の大なるものを田父と名け、蛇を見ればその尾を啣み、良久してその蛇は死ぬ。その尾に屬する部分數寸の間は、皮が損せぬが肉は已に盡きてゐるものだ』とある。【蛇は豹をして止らしめるが、蛇を食ふ貘がある】淮南子に『蛇は豹をして止まらしむ。物相制するなり』とある。貘とは白豹のことで、蛇、及び鐵を食ふ動物だ。【龜と蛇とは氣を同うするが、蛇を呷ふ龜がある】攝龜に記載がある。【玄龜は蟒を食ひ】王起は『小を以て大を制す。禽の制は氣に在り』といつてある。【蝍蛆は帶を甘な

ふ】荘子に記載がある。蝍蛆とは蜈蚣のこと、帶とは蛇をさしたのである。陸佃は「蜈蚣が大蛇を見れば能く氣を以てこれを禁じ、その腦、眼を啖ふ。蟾蜍は蝍蛆を食ひ、蝍蛆は蛇を食ひ、蛇は蟾蜍を食ふ。物に畏れあるはその天なり」とある。墨客揮犀には『蜈蚣が蛇を逐ふと、蛇は口を張つてその腹に入らしめる。故に腹中で之を食ふ』とある。【鴆歩めば蛇出で、鵙鳴けば蛇結す】記載は禽經にある。鴆鳥は能く禹歩し、禁咒して大石を自ら轉ぜしめ。蛇を取つて食ふ。蛇はその口に入れば直に糜れるものだといふ。鸛もやはりその通りだ。鵙とは伯勞のことである。【鸛、鶴、鷹、鶻、鷲はいづれも鳥にして蛇食ふもの】蛇鷹、蛇鶻、その他本條を見よ【虎、猴、麂、麝、牛はいづれも獸にして蛇を食ふものである】(二三)玃猴は蛇を食ふ。牛の蛇を食ふものは獨肝であつて有毒だ。【蛇の食物とする蟲は蛙、鼠、燕、雀、蝙蝠、鳥雛である。食物とする草は芹、茄、石楠、茱萸、蛇粟(二四)嗤子である――憎むところのものは蘘荷、菴蕳、蛇芮草、鵞糞である。畏るところの藥は雄黄、雌黄、羖羊角、蜈蚣である】千金に「山に入るには武都の雄黄、雌黄を佩び、或は羖羊角を烟に燒き、或は筒に蜈蚣を盛つて所持する。それで蛇

(二三)玃ハ老猴也。

(二四)嗤子ハ蛇粟ノ註、蛇粟ハ蛇床子ノ一名。

は近けないものだ」とある。【蛇が誤つて萵菜に觸れると、目が物を見得なくなる】續墨客揮犀に記載がある。【桑薪を以つて炙れば立ろに足が出る】藏器曰く、蛇に足のあるを見ることは佳からぬこととなつてゐるが、しかし桑薪で炙れば見えるものだ。怪むに足らない。陶弘景曰く、五月五日に地を燒き熱して酒を沃ぎ、蛇をその上に置くと足が現れる。【蛇が人の足に蟠るには、淋ぐに熱尿を以てし、或は沃ぐに熱湯を以てすれば自ら解ける。蛇が人の竅に入りたるには、灸するに艾炷を以てし、或は辣するに椒末を以てすれば自ら出る】艾炷を以て蛇の尾に灸し、或は蛇の尾を割き破つて椒末を以て塞ぐ。直ちに出るものだ。【內服して蛇毒を解する藥は雄黃、貝母、大蒜、薤白、蒼耳。外用として蛇蠚を治する藥は大靑、鶴蝨、苦苣、菫菜、射罔、萵苣、乾薑、白礬、黑豆葉、黃荊葉、蛇含草、犬糞、鵞糞、(一三)蔡苴機糞である】

本草綱目鱗部第四十三卷　終

(一五)蔡苴機ハ茶苜机ノ誤、雙頭鹿ノ一名、獸部卷五十卷上ヲ見ヨ。

本草綱目鱗部

第四十四卷

本草綱目鱗部目錄第四十四卷

鱗の三　魚類三十一種

鯉魚 本經　鱮魚 綱目 卽ち鰱魚。　鱅魚 拾遺　鱒魚 綱目 卽ち赤眼魚。

鯇魚 拾遺 卽ち草魚。　青魚 開寶　竹魚 綱目

鯔魚 開寶　白魚 開寶　鯼魚 食療　鱤魚 綱目

石首魚 開寶 鰲頭魚を附す。　勒魚 綱目　鱭魚 食療

鰣魚 食療　嘉魚 開寶　鯧魚 拾遺　鯽魚 別錄 鰤魚を附す。

魴魚 食療 卽ち鯿。　鱸魚 嘉祐　鱖魚 開寶 鰧魚を附す。　鯊魚 綱目

杜父魚 拾遺　石斑魚 綱目　石鮅魚 拾遺　黃鯝魚 綱目

鰷魚 綱目　鱠殘魚 食鑑 卽ち銀魚。　鱵魚 綱目

鱊魚 綱目　金魚 綱目 丹魚を附す。

右附方　舊十三　新六十

鱗の四　無鱗魚二十八種　附錄九種

附錄

右附方　舊九　新六十

鱗の三　魚類二十二種

(一)鯉魚（本經上品）

和名　こひ
學名　(Cyprinus carpio, L.)
科名　こひ科



鯉魚

【釋名】 時珍曰く、鯉は鱗に十字の文理があるところから鯉と名けたのである。弱つて死んでもその鱗は白くならない。頌曰く、崔豹に『(二)兗州地方では赤鯉を玄駒と呼び、白鯉を(三)黄驥といひ、黄鯉を(四)黄騅といふ』といつてある。

【集解】 別錄に曰く、(五)九江の池澤に生ずる。取るに一定

(一)木村(重)曰ク、雲南ヨリ此屬ニ一種記載サレタルモ全世界ニ於テ鯉ト稱スルモノハ日本ノこひト同種ナリ。又全支那鯉魚（リーユー）ニテ通ズ。大ナルハ六尺五寸（四川省重慶）ニ達ス。

(二)兗州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(三)黄、大觀ニ白ニ作ル。

(四)黄、大觀ニ雄ニ作ル。

(五)九江ハ漢ノ郡、鱧魚ノ條ニ註アリ。

の時期はない。

○頌曰く、處處にある。その(六)脇に通つてゐる一筋の鱗は、頭から尾までにいづれも三十六鱗であつて、大、小に拘らない。鱗毎に小黑點がある。多くの魚の種類の内でこの魚だけが最も佳きものだ。故に食品中に於ける上味とされたのである。

○○弘景曰く、鯉は諸魚の長である。形が優れて立派な上に、また能く靈妙な變化を示して(七)江湖を飛越するといふやうなことまでもある。琴高といふ仙人が鯉に乘つたといふはそれだ。山上の水中にもこの魚はゐるが、それは食はれない。

肉【氣　味】【甘し、平にして毒なし】日華曰く、涼なり、小毒あり。

○宗奭曰く、鯉は至陰の物だ。その鱗の數は三十六であつて、陰極まれば陽が復する。故に素問に『魚は中を熱す』とあり、脈訣に『熱すれば風を生ず』。これを食ふこと多ければ能く風熱を發す』といつてある。日華が『涼なり』といつたのは正しくない。風患者がこれを食はば無限に禍を貽すものだ。

○○時珍曰く、按ずるに、丹溪朱氏は『諸種の魚は水に在つて一息として停らない。皆よく風を動じ火を動ずるものだ。獨り鯉のみといふわけではない』といつてある。

(六)脇、大觀ニ背中ニ作ル。

(七)江湖、江西、湖南兩省地方ヲ指シテ江湖ト呼ビ、又、洞庭湖、揚子江ヲ併稱シテ江湖ト呼ブ。此ニハ後者ニ因リタルモノヽ如シ。

○詵曰く、鯉は、背上の兩筋、及び黑血に毒がある。溪澗中にゐるものは、毒が腦に在る。いづれも食つてはならない。凡そ鯉魚を炙る場合に、その烟を目に入れてはならぬ。目の光を損ずるもので、その結果は必ず三日間に現れる。天行病後の下痢、及び宿癥のものはいづれも食つてはならぬ。天門冬、硃砂を服した者も食つてはならぬ。犬肉、及び葵菜と合せて調理したものも食つてはならない。

主　治　【煮て食へば、欬逆上氣、黃疸を治し、渴を止め、水腫脚滿を治し、氣を下す】（別錄）【懷妊身腫、及び胎氣不安を治す】（日華）【煮て食へば、水氣を下し、小便を利す】（時珍）【鱠にして用ゐれば溫補し、冷氣、痃癖氣塊、（六）橫關伏梁の結して心腹に在るを去る】（藏器）【上氣欬嗽、喘促を治す】（心鏡）【燒いて末にしたものは、能く汗を發し、氣喘、欬嗽を定め、乳汁を下し、腫を消す。米飮で調へて服すれば、大人、小兒の暴利を治す。童尿に浸して煨いて用ゐれば、反胃、及び惡風の腹に入りたるを止める】（時珍）

發　明　時珍曰く、鯉は陰中の陽であつて、その功は小便を利する特長がある。故に能く腫脹、黃疸、脚氣、喘嗽、濕熱の病を消するのだ。鱠にすれば性が溫

（六）橫關伏梁ハ胃痙攣。

になる。故に能く痃結冷氣の病を去る。燒けば火に從つて化する。故に能く風寒を發散し、肺を平にし、乳を通じ、腸、胃、及び腫毒の邪を解するのである。按ずるに、劉河間は『鯉の水を治する、鶩の水を利するは、所謂その氣の相感に因るものだ』といつてある。

【附方】　舊五。新八。　【水腫】范汪は、大鯉魚一尾を醋三升で煮乾して食ふ。一日一回試みる。○外臺では、大鯉一尾、赤小豆一升、水二斗を用ゐ、煮て食ひ汁を飲み、一頓に服し盡す。下利し盡して痊えるものだ。【妊娠水腫】方は上に同じ。【水腫脹滿】赤尾の鯉魚一斤を破開し、水、及び鹽に觸れぬやうにし、生礬五錢を研末してその腹中に入れ、火紙で包裹して外部を黃土で泥包し、竈中に入れて煨熟して取出し、紙、泥を去つて粥で送下する。頭を食へば上消し、身と尾とを食へば下消する。一日に用ゐ盡す。屢〻實驗して奏效した（楊拱醫方摘要）【妊娠感寒】鯉魚一尾を燒いて末にし、酒で方寸匕を服して汗を出さしめる。（祕錄）【胎氣の長からぬもの】鯉魚肉と鹽棗と共に煮て汁を飲む。（集驗）【胎動不安】及び婦人が數〻胎を傷めて下血して止まぬには、鯉魚一尾を淸淨に修治し、阿膠を炒つて一兩、糯米二合、水二升

湔ハ附和ナリ。又、浥ト同ジ。ツケ、ウルホスナリ。

に葱、薑、橘皮、鹽各少量を入れて臛にして食ふ。五七日にして效がある。（聖惠方）【乳汁不通】鯉魚一尾を燒いて末にし、一錢づつを酒で調へて服す。（產寶）【咳嗽氣喘】鯉魚一尾を鱗を去り、紙で裹んで炮熟し、刺を去つて研末し、糯米と共に粥に煮て空心に食ふ。（心鏡）【惡風の腹に入りたるもの】久腫惡風の腹に入りたるもの、及び婦人新產に風が陰部に入つて馬鞭の如くに感じ、呼吸の氣短く、咳嗽するには、鯉魚の長さ一尺五寸のものを一夜尿に浸し、翌早朝木篦で頭から尾まで貫いて文火で炙熟し、皮を去つて空心に頓に食ふ。鹽、醋を用ゐてはならぬ。（外臺）【反胃吐食】鯉魚一尾を一夜童尿に浸して炮き焦して研末し、米と共に粥に煮て食ふ。（壽域）【一切の腫毒】已に潰れたもの、未だ潰れぬもの。鯉魚を灰に燒いて醋で和して塗る。癒えるを度とする。（外臺）【積年の骨疽】一回揑すると一回每に汁の出るものである。飴餹を熬つて瘡上に盛り上げ、その上で生鯉魚を破つて湔する。少頃して剔つて視ると蟲が出るものだ。更に洗つて藥を傅ければ蟲が出盡して癒える。（肘後）【小兒の木舌】長大にして口に滿つるには、鯉魚肉を切片して貼り、帛で縛りつける。（聖惠方）

鮓　氣味　【鹹し、平にして毒なし】弘景曰く、豆藿と合せて食つてはならぬ。消渇となるものだ。

主治　【殺蟲】（藏器）

附方　新一。【蟲のある聤耳】日夜膿血の止まぬには、鯉魚鮓三斤、鯉魚腦一箇、鯉魚腸一尾分を洗つて切り、烏麻子を炒り研つて一升と共に搗き、器に入れて微火で炙き暖め、布で裹んで耳に貼る。兩食頃（二時間ほどと見るべきか）經つと白蟲が出るもので、出盡れば癒える。風寒に當らぬやうに注意する（千金）

膽　氣味　【苦し、寒にして毒なし】之才曰く、蜀漆が使となる。

主治　【目熱、赤痛、青盲、目を明にする。久しく服すれば强悍となり、志氣を益す】（本經）【眼に點ずれば、赤腫、翳痛を治す。小兒の熱腫に塗る】（甄權）【雀目燥痛に點ずれば明になる】（肘後）【耳に滴せば聾を治す】（藏器）

附方　舊一。新三。【小兒の咽腫】痺痛するには、鯉魚膽二十箇を竈底土に和し、咽の外部に塗る。立ろに效がある。（千金方）【大人の陰痿】鯉魚膽、雄雞肝各一箇を末にし、雀卵で和して小豆大の丸にし、一丸づつを呑む。（千金方）【睛上に暈を生

じたるもの】久、新を問はず、長さ一尺二寸の鯉魚の膽を取り、銅鏡上に滴して陰乾し、竹刀で刮り下して少量づつ點ける。（總錄）【赤眼腫痛】聖濟總錄では、鯉魚膽十箇、膩粉一錢を和勻して瓶に貯へ、日毎に點ける。○十便良方では、鯉魚膽五箇、黃連末半兩を和勻し、蜂蜜少量を入れて瓶に盛り、飯上に置いて蒸熟し、それを日毎に五七回目眥に貼る。また飛血赤脈をも治す。

脂　主治　【食へば小兒の驚忤、諸癇を治す】（大明）

腦髓　主治　【諸癇】（蘇恭）【粥に煮て食へば暴かの聾を治す】（大明）【膽等分を和して頻に目眥に點ずれば青盲を治す】（時珍）

附方　新二　【卒かの耳聾】竹筒に鯉魚腦を盛つて飯の上で蒸し、耳中に注ぎ入る。（千金）【耳の膿に蟲あるもの】鯉魚腦に桂末を和して搗き勻ぜ、綿に裹んで塞ぐ。（千金方）

血　主治　【小兒の火瘡、丹腫瘡毒には、これを塗れば立ろに癒える】（蘇恭）

腸　主治　【小兒の肌瘡】（蘇恭）【聤耳の蟲あるものには、酢と共に擣き爛し、帛で裹んで塞ぐ。痔瘻の蟲あるには、切斷して炙熟し、帛で裹んでそれに坐る。い

づれも蟲の盡るを度とする】（時珍）

子　弘景曰く、猪肝と食ひ合せれば人を害す。

目　［主　治］【刺瘡、傷風、傷水で腫れたものには、灰に燒いて傅ける。汁が出て癒える】（藏器）

齒　［主　治］【石淋】（別錄）頌曰く、古今錄驗の石淋を治する方では、齒一升を研末して三歲醋に和し、全部を一日三回に分服する。外臺では、卒淋を治するに酒で服す。

時珍曰く、古方に石淋を治するに多くこれを用うとあるが、その意味は詳でない。

骨　［主　治］【婦人の赤白帶下】（別錄）【陰瘡。魚鯁の出ぬもの】（蘇恭）

皮　［主　治］【癮疹】（蘇恭）【灰に燒いて水で服すれば、魚鯁で六七日經過して出ぬものを治す。一日二回服す】（錄驗）

鱗　［主　治］【產婦滯血の腹痛には、灰に燒いて酒で服す。また血氣をも治す】（蘇頌）【燒灰は吐血、崩中、漏下、帶下、痔瘻、魚鯁を治す】（時珍）

［發　明］時珍曰く、古方では、多くは皮、鱗の燒灰を崩漏、痔瘻の藥に入れて

ある、蓋しその滞血を行る點を利用したものだ、魚鯁を治するはその類に從ふのである。

【附方】 新三。【痔漏疼痛】鯉魚鱗二三片を綿で棗ほどの形に裹み、坐藥として挿入すればその痛が止む。（儒門事親）【諸魚の骨鯁】鯉脊の三十六鱗を焙じ研つて涼水で服す。その刺は自ら跳出すること不可思議なものだ。（筆峰雜興）【鼻衄の止まぬもの】鯉魚鱗を炒つて灰にし、二錢づつを冷水で服す。（普濟方）

鱮魚（一）

音は序（ショ）である。（綱目）

和名　れんぎよ
學名　Hypophthalmichthys molitrix, Cuv. et Val.
科名　こひ科

【釋名】 鰱魚　時珍曰く、酒の美なるものを醑といひ、魚の美なるものを鱮といふ。陸佃は『鱮は羣行することを好むものだ。相與にするから鱮といひ、相連るから鰱ともいふのであつて、傳に「魚屬連行す」とあるがこのことだ』といつてある

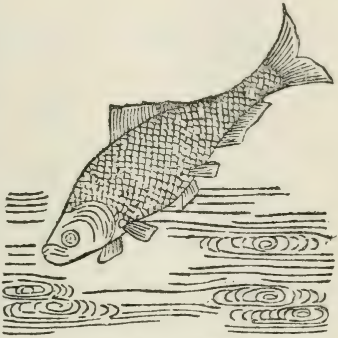
【集解】 時珍曰く、鱮魚は處處にある。形狀は鱅のやうで、頭が小さく、形が

（一）木村（重）曰ク、日本ノたなごナラズ、集解ニ如鱅而頭小形云云トアリ、形鰱ニ似テ色ヤヤ白シ、支那本土ニテハ白鰱（パイレン）、上海ニテ鰱（一般）鱮（ユー、南京）ト稱シ、臺灣ニテハ大頭鰱又ハ單ニ鰱魚（レンヒー）ト稱ス、支那全土、臺灣、アムール河流

偏く、鱗が細かく、腹が肥り、その色が最も白い。故に西征賦に「華魴躍鱗、素鱮揚鬐」とある。水から離れると死に易い。蓋し弱い魚だ。

肉　**氣味**【甘し、温にして毒なし】

主治【中を温め、氣を益す。多食すれば人をして熱中し發渴せしめ、又、瘡疥を發す】(時珍)



鱮魚
—鰱—

鱅魚(一)

音は庸(ヨウ)である。(拾遺)

和名　くろれんぎよ
學名　Aristichthys nobilis, (Richardson)
科名　こひ科

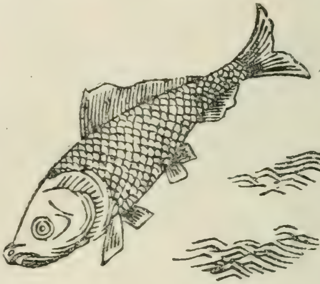
釋名　**鱃魚**　秋(シユウ)と發音する。記載は海經にある。時珍曰く、これは魚類の中での下品である。蓋し魚の庸なるものだから鱅といひ鱃といふ。鄭玄は『溶魚』としてある。

域ニ分布ス。成長早クシテ三尺ニ達スルアリ、養殖サル。臺灣ニテハ魚苗ヲ福建ニ仰グ。

(一) 木村(重)曰ク、鱮ニ似タレドモ體色青黒味ヲ帯ブ、支那本土ニテハ黒鰱(ヘイレン、上海)胖頭鰱(パントウレン、南京)黄鰱(ホアレン)花鰱(ホアレン、揚子江流域)等ト稱ス。臺灣ニテハ竹葉鰱(チ

ーヤンレン)ト稱シテ前者ト區別ス。他ハ鯛魚ト同ジ。共ニ日本本土ニ棲マズ、支那ニ於ケル重要食用淡水魚ナリ。一屬一種。

【集解】藏器曰く、陶氏の鮑魚の註に『今は長さ一尺ばかりの鱅魚をそツくり淡乾魚にしたものをそれとして居る。全然臭氣はないものだ』とある。その魚の目の旁にある骨を乙と名ける。禮記に『魚を食ふには乙を去る』とあるがそれである。ところが劉元紹は『海上の鱅魚は屍のやうに臭い。海人はそれを食ふ』といつてあるが、これは別の一種であらう。



鱅魚——胖頭

時珍曰く、處處の大河や湖にゐる。形狀は鰱のやうで色黑く、その頭は最大四五十斤までのものもある。味は鰱に亞ぎ、鰱の美味は腹に在るが、鱅の美味は頭に在る。或は鰱と鱅とを一物とするものもあるが、それは誤だ。首の大、小といひ、色の黑、白といひ甚だ等しくない。山海經に『鱃魚は鯉に似て首大きく、これを食へば疣に已む』とあるはこのものだ。

肉 【氣味】【甘し、溫にして毒なし】藏器曰く、ただ食料品となるだけであつ

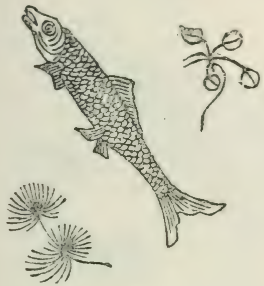
(二) 木村(重)曰く、鱒ノ體ハ圓味ヲ帶ビテ長シ、背部ニ靑味ヲ帶ブルモ他ハ銀色、眼赤シ、日本ノますナラズ。淡水魚ニテ支那本土滿洲方面ニモ產ス、棹鰰(トハクン、九江)、赤眼(チーエン、本土)鱒魚(ソンユー、全支)大サ二尺ニ達スルアリ。日本ニ棲マズ。一屬一種。

て、格別の功用はない。

主治　【胃を暖め、人に益あり】(汪穎)【これを食へば疾を已む。多食すれば風熱を動じ、瘡疥を發す】(時珍)

(二) 鱒魚 (綱目)

和名　缺
學名　Squaliobarbus curriculus, Rich.
科名　こひ科



[鱒魚 ―赤眼魚―]

【釋名】 **鮅魚** 必(ヒッ)である。**赤眼魚**

時珍曰く、說文に『鱒(そん)、鮅なり。赤目魚なり』とあり、孫炎は『鱒は好んで獨行する。尊にして必するものだ。故にその文字は尊に從ひ、必に從ふ』といつてある。

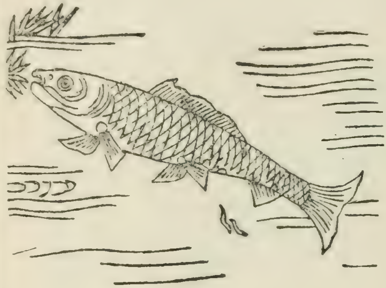
【集解】 時珍曰く、處處にある。形狀は鯶(こん)に似て小さく、赤脈が瞳を貫き、身が圓くして長く、鱗は鯶より細かく、地色は靑くし

て赤い模樣があり、好く螺蚌を食ひ、巧に網を遁れるものだ。

肉 〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【胃を暖め、中を和す。多食すれば風熱を動じ、疥癬を發す】（時珍）

（一）鯇魚 音は患（クヮン）である。（拾遺）

和名 鯇
學名 Ctenopharyngodon idellus, Cuv. et V l.
科名 こひ科



〔鯇魚〕——草魚

〔釋名〕**鯶魚** 音は緩（クヮン）である。**草魚** 時珍曰く、鯇はまた混（コン）と發音する。郭璞は鯶と書いた。その性の舒緩なものだから鯇といひ鯶といふのである。俗に草魚と呼ぶは、この魚が草を食ふからである。（二）江閩地方のいけす業者は草でこの魚を飼つて置く。

〔集解〕藏器曰く、鯇は江湖中に生ず

（一）木村（重）曰ク、鯇魚ハ鯉ニ似タル魚ナレドモ髭ナシ、支那本土一般ニ草魚（ツァオユー）ト稱シ、臺灣ニテハサウヒート發音ス。成長早ク、大ナルハ五尺ニ達ス、重要食用魚ナリ。日本本土ニ產セザルモ、滿洲、シベリヤ方面マデ分布スル淡水魚ナリ。草ヲ食スルヨリ草魚ト呼ブ。一屬一種。
（二）江閩トハ江西、福建兩省地方ヲイフガ如シ。

る。鯉に似たものだ。

時珍曰く、郭璞が『鯶子は鱒に似て大きい』といつたのはこの魚である。その形は長くして身が圓く、肉厚くして鬆い。狀態が青魚に類するもので、青鯇、白鯇の二種類があり、白いものが味が勝れてゐるので、商人はそれを多く(三)鮑にする。

肉【氣味】「甘し、溫にして毒なし」時珍曰く、李廷飛は『能く諸瘡を發す』といつてある。

【主治】「胃を暖め、中を和す」(時珍)

膽 臘月に收取して陰乾する。【氣味】「苦し、寒にして毒なし」【主治】「喉痺、飛尸には水で攪和して服す」(藏器)「一切の骨鯁、竹木刺の喉中に在るには、酒で二箇を化し、溫め呷つて吐かす」(時珍)

(一)青魚（宋開寶）

和名　鯖
學名　Mylopharyngodon aethiops, (Basilewsky)
科名　こひ科

【釋名】時珍曰く、青の字を鯖とも書く。色に因つて名けたものだ。大なるも

(三) 鮑トハシホヅケ魚ナリ。

(一) 木村(重)曰ク、鯇魚ニ似タル淡水魚、鯖魚(チンユー)トモ書ス。體色緑青色ヲ帯ブルモ、死ス

レバ稍黒紫色トナル。北支那ニテハ二尺ニ達ス。支那本土、シベリヤ方面ニ分布スルモ、日本ニ棲マズ。一屬一種。

(二)大觀ニ鯖下ニ鮓字アリ。

(三)荊楚ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。

のを鰻魚(ろうぎょ)と名ける。

集解 頌曰く、青魚は江湖の地方に生ずる。南方に多い魚で北地にも時としてゐることもある。採取に一定の時期はない。鯇(くゎん)に似て背が正青色だ。南方の地では多くこれを鮓(さく)に作る。古人の所謂五候(二)鯖とはこの物だ。その頭中の枕骨を蒸し、氣を通ぜしめて曝乾すると琥珀のやうな狀態になる。(三)荊楚地方ではこれを煮拍(しょはく)して酒器、梳篦(りうひ)を作るが、甚だ面白いものである。舊註に『琥珀の代用になる』といつたのは誤だ。



〔青魚〕

肉 氣味 【甘し、平にして毒なし】日華曰く、微毒あり。朮(じゅつ)を服する人はこれを忌む。

主治 【脚氣、濕痺】(開寶)【韮(きう)と共に白煮して用ゐれば、脚氣、脚弱、煩悶を治し、氣力を益す】(張鼎)

鮓　〔氣味〕【石を服する人と相反す】(開寶)　弘景曰く、生胡荽、生葵菜、豆藿、麥醬と食合せてはならぬ。

頭中枕　〔主治〕【水に磨つて服すれば、心腹の卒氣痛に主效がある】(開寶)【血氣心痛を治し、水氣を平にする】(日華)【飲器に作つて用ゐれば蠱毒を解す】(時珍)

眼睛汁　〔主治〕【目に注げば能く夜間物を視得る】(開寶)

膽　臘月に收取して陰乾する。〔氣味〕【苦し、寒にして毒なし】〔主治〕【暗目に點じ、熱瘡に塗る】(開寶)【赤目腫痛を消し、喉痺、痰涎、及び魚骨鯁を吐し、惡瘡を療ず】(時珍)

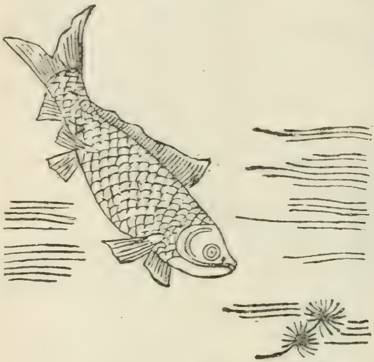
〔發明〕時珍曰く、東方の青色は入つて肝、膽を通じ、竅を目に開く。青魚膽を用ゐて目疾を治するは、蓋しこの關係に因つたものだ。喉痺、骨鯁を治するは、涌泄は平、酸、苦と關係のある點を應用したものだ。

〔附方〕新三。【乳蛾喉痺】青魚膽を含嚥する。○ある方では、汁を鼻中に灌いで吐かす。○萬氏は、膽礬を青魚膽中に盛つて陰乾し、少量づつを喉に點じて吐かす。○ある方では、朴硝を膽礬に代用する。【赤目障翳】青魚膽を頻りに點ける。

○ある方では黄連、海螵蛸各等分を加へる。○龔氏の易簡では、黄連を切片して井水で濃く熬り、滓を去つて膏に煎じ、大青魚膽汁を入れて適當に和し、片腦少量を入れて瓶に收めて密封し、毎日それを點けるが甚だ妙である。【一切の障翳】魚膽丸——青魚膽、鯉魚膽、青羊膽、牛膽各半兩、熊膽二錢半、麝香少許、石決明一兩を用ゐ、末にして糊で梧子大の丸にし、容心に十丸づつを茶で服す。（龍木論）

竹魚（綱目）

和名 鉄
學名 Elopichthys bambusa, Rich.
科名 こひ科



【竹魚——廣西——】

【集解】 時珍曰く、(二)桂林、(三)湘、灕の諸江中に出る。形狀は青魚のやうで、大きくして骨刺が少く、色は竹のやうに青翠色で愛すべきものだ。鱗下に朱點が交つてゐる。味は鱖魚の肉のやうだ。(四)廣南での珍品である。

(一) 木村重曰ク、學名命名者ハ此種ヲ廣東ノ黄甫ノ地ニ得テ竹魚ノ名ニヨリバンブーサト命名セルガ如シ、此學名ハ鱤魚ト同一ナリ、或ハ同種ヲ土地ニヨリテ稱呼異リタルカ、今假リニ同一トシテ後攷ヲ俟ツ、
(二) 桂林ハ金部鉛錫ノ註ヲ見ヨ。
(三) 湘、灕ノ二江ハ廣西省興安縣ノ陽海山ニ源ヲ發ス。湘江ハ東北流シテ洞庭湖ニ入ル。灕江ハ西南流シ、桂林ニ入ッテ

桂江トイヒ、潯江ト合シテ廣東省ニ入リ東流シテ海ニ入ル。
(四)廣南ハ廣東、廣西以南ノ地ヲ指ス。

(二)木村(重)曰ク、日本ニ於ケルぼらト同種、河ニ遡ル。支那本土ノ海岸ニ多シ。支那ニテハ此屬ニ五種アルモ、代表的ナルヲ取ル。ツエユー(黑キ魚)ト發音ス。ヨーロッパニ於テモ同種存ス、東洋方面ニテハ印度ヘデ分布ス、大サ一尺前後。

(一)粵ハ越ニ同ジ、蟲部化生類蜈蚣ノ註參照。

肉〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【中を和し、氣を益し、濕氣を除く】（時珍）

鯔魚（宋開寶）(二)

和名　ぼら、一名いな
學名　Mugil cephalus, L.
科名　ぼら科



〔釋名〕**子魚**　時珍曰く、鯔とはその色が緇黑色だから名けたものだ。(一)粵地方では子魚と訛つて呼ぶ。

〔集解〕志曰く、鯔魚は江、河の淺水中に生ずる。鯉に似て身が圓く、頭が扁で骨が軟い。その性は喜んで泥を食ふものだ。

時珍曰く、東海に生ずる。形狀は青魚のやうで長いものは一尺餘あり、そ

の腹には子が滿ちてゐて黄脂があり、味は美味だ。獺(だつ)が喜んでこれを食ふ。(三)呉越地方ではこれを佳品とし、醃(しほづ)けにし、鮝腊(さうさく)にする。

肉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【胃を開き、五臟を利し、人をして肥徤ならしめる、あらゆる藥と忌むものはない】(開寶)

(一)白魚(宋開寶)



白魚 —鱎—

和名 かはひら
學名 Culter ilishaeformis, Bleeker.
科名 こひ科

〔釋名〕鱎魚 音は喬(ケウ)であつて、去聲に發音する。時珍曰く、白の字は鮊(はく)とも書く。白とはその色を指したものだ。鱎とは頭と尾とが上に向つてゐるからだ。

〔集解〕劉翰曰く、江湖中に生ずる。色白く、頭昻(たか)く、大なるものは六七尺ある。時珍曰く、鮊は形が窄(せま)く、腹が扁(ひら)たく、鱗が細か

(三)呉越ハ草部山草類朮ノ註ヲ見ヨ。

(一)木村(重)曰ク、此屬ハ支那本土、滿洲ニ分布スルモ、日本、佛領印度支那等ニ棲マズ。五種アルモ、下記ノ學名ノモノ口上向ニシテ鱎者頭尾向上也ト一致ス。一般ニスベテノ種ヲ白魚(パイユウ)ト稱スルモ、個個ニ鱎魚(キヤオユー)[illegible][illegible](ツエーチヤン、四川省)白鰺(パイ[illegible]ン、湖北省)ト云フコトアリ。白キ魚ニシテ、大ナルモノ

一尺三寸以下。市場ニテハ小ナルモノ多シ。コレヲ小白魚(ショウバイコウ)ト云フ。此屬ニ近キ三屬アルモ、スベテ白魚ト呼バル。食用淡水魚ナリ。

く、頭、尾倶に上に向ひ、肉中に細刺がある。周の武王の時、白魚が舟に入つたといふはこの魚だ。

肉　[氣味]【甘し、平にして毒なし】詵曰く、新鮮なものは豉に和し羹に作るによいが、病を發するまでにはないにしても、多食すればやはり人を泥くする。一夜經たものは食つてはならない、人をして腹冷せしめるものだ。炙いて食つてもやはり少し氣を動ずる。或は醃け、或は糟に貯藏し、いづれも食し得る。瑞曰く、多食すれば痰を生ずる。棗と共に食へば腰痛を患ふ。

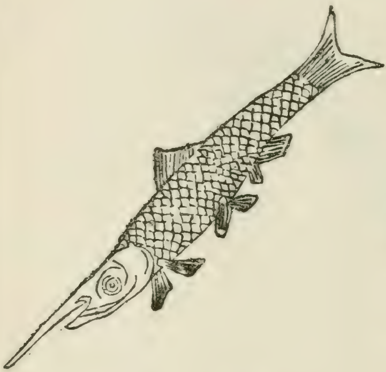
[主治]【胃を開き、氣を下し、水氣を去り、人をして肥健ならしめる】(開寶)【脾氣を助け、五臟を調へ、十二經絡を理し、相及ばざるの氣を舒展する】(食療)【肝氣不足を治し、肝を補し、目を明にし、血脈を助ける。灸瘡の發せぬには膾にしてこれを食ふが良し。瘡癤を患ふ人はこれを食へば膿を發する】(日華)

[發明]　時珍曰く、白魚は他の魚に比すれば食へるものらしいが、やはり能く中を熱し、瘡を發する。所謂『肝を補し、目を明にし、五臟を調へ、十二經絡を理す』なる說明も、恐らく溢美の詞であらう。たやすくは信じられない。開寶の註が

正しいであらうと思はれる。

(一)鯼魚（食療）

和名 缺
學名 Coriparius styani, Günther.
科名 こひ科



［釋名］ 時珍曰く、鯼は牲魚を啖ふものだ。その目が(二)瞍視するものだから鯼といつたのである。異物志にこれを石首魚としてあるは正しくない。食療には鯮と書いてあるが、古代にはこの文字はなかつた。

［集解］ 時珍曰く、鯮は江湖中に生ずる。體は圓く厚くして長く、鰔魚に似て腹がやはり膨起し、額が扁たく、喙が長く、口は頷の下に在り、鱗は細かく、腹は白く、背が微

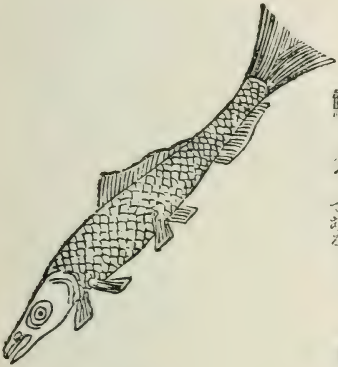
(一)木村(重)曰ク、支那揚子江附近ニノミ産スル淡水魚、殊ニ洞庭湖附近ニ多シ。眼球ニ輝アリ、乳白色ニ光ル、口ハ下向ニテ、體黄味ヲ帶ブ。水密子麻花魚（スヰミツマアホアユー、四川省重慶）叉ハ麻花魚（マーホアユー、湖北省）ト呼バル。大ナルモノ一尺五寸位ナリ。食用魚、一屬五種。
(二)瞍ハ字書ニヌスミミルナリ。恐ナリトアリ。

し黄色だ。やはりよく魚を噉ふ。大なるものは二三十斤ある。

肉【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【五臟を補し、筋骨を益し、脾、胃を和す。多食すれば健康に宜しく、鮓に作つたものが就中宜しい。曝乾すれば香美になり、やはり病を發せない】（孟詵）

鱤魚（一） 音は感（カン）である。（綱目）

和名 鉄
學名 Elopichthys bambusa, Rich.
科名 こひ科



〔鱤魚〕

【釋名】 䱂魚 音は紺（コン） 鰥魚 黃頰魚 時珍曰く、鱤は敢である。䱂は臽である（二）。臽は陷（カン）と發音する。食つて厭くことなく、行動が捷で取り難く、同類を呑啗し、力敢にして物を臽ふ。その性獨行するものだから鰥といふ。詩に『其魚

（一）木村（重）曰ク、頭形さわら、かつをニ似ル、細鱗ノ淡水魚、背部青味ヲ帶ビ、頭ノ後半部胸鰭ハ黃ヲ帶ブ。鱤魚（カンユー）竿魚（カンユー）揚子江沿岸）桿條魚（カンテアチユー、洮南）細鱗白魚（シーリンパイユウ、奉天）黃肚魚（ホワントウユー、滿洲）等ト呼バル。支那本土、滿洲ニ產スルモ他ニナシ。大ナルハ三尺ニ達スル食用魚ナリ。中部支那ニ多シ。一屬一

鮪鰼とあるはこの物だ。

［集解］時珍曰く、鱤は江湖中に生ずる。體は鯮に似てゐるが腹が平に、頭は鯇(くわん)に似て口が大きく、頰は鮎(てん)に似て色黃に、鱗は鱒に似てやや細かく、大なるものは三四十斤あつて魚を啖ふ。最も毒するもので、池中にこの魚が居れば他の魚が育(そだ)たない。東山經に『(三)姑兒の水、鱤魚(かんぎよ)多し』とあるはこの魚だ。異苑に「諸魚が產せんとするとき、鰼が頭を以てその腹を衝く。世にこれを衆魚の生母といふ(二)」とある。しかし、諸魚が子を生むるに必ず雄魚がその腹を衝き、その上尿白を以てその生んだ子を蓋ふものだ。盡く鰼魚(こぎよ)が衝くと限つたものではない。

肉　［氣味］【甘し、平にして毒なし】　［主治］【これを食へば嘔を已み、中を暖め、胃を益す】(時珍)

種。

(二)鰼ハ肉ヲ食ツテ厭カザルナリ。

(三)姑兒之山、『姑兒之水出焉』トアリ。汪紱ノ註ニ『或曰此卽齊東姑兒也』トアリ。姑兒トハ山東省招遠縣ノ會仙山ニ源ヲ發スル大沽河ヲ指スモノカ。

(一)石首魚（宋開寶）

和名　しなにべ(しなぐち)
學名　Collichthys lucidus, Rich.
科名　いしもち科

［釋名］**石頭魚**（嶺表錄）　**鮸魚**　音は免(ベン)である（拾遺錄）　**江魚**（浙志）

(一)木村(重)曰ク、支那沿岸、朝鮮沿海マデ分布スル普通ノにべ(ぐち)ナリ。海產魚。頭部ニ小石狀

ノ骨質塊アルニヨリ石首魚(ハチエスキユー)ト呼バル。上海ニテハ春四、五月鮮魚トシテ珍味トサレ、黄花魚(ホアンホアユー)ノ名ニテ知ラル。大サ八寸前後ヲ普通トスル食用魚ナリ。此屬ニ支那産ノモノ他ニ三種アリ、主ニ北支那沿岸ニ棲ム。支那ニいしもち科ノモノ六屬ヲ産ス。鰾ハ膜白クシテ食用膠トナル。又曰ク石首魚ノ頭骨中ニ耳石ト稱スル骨アリ、コレヲ頭中石魷ト云フ。英名(Otolith of sea-bass.

黄花魚（臨海志） 乾したものを**鯗魚**と名ける。鯗の音は想（ソウ）である。鱶とも書く。時珍曰く、鯗とは、能く人を養ひ、人は恒にこれを想ふ。故にその文字は養に從ふのだ。羅願は「諸魚の乾物はいづれも鯗といふのであるが、その美味なることは石首に及ぶものがないので、それで鯗なる稱呼をこの物が獨占したわけだ」といつてある。白いものを佳しとするところから白鯗と呼ぶ。風に露しては紅色に變じて味が失せるものだ。

集解　志曰く、石首魚は水から出て能く鳴くものだ。夜視ると光があり、頭の中に碁子ほどの石がある。一種の野鴨の頭の中にも石があるが、その野鴨はこの魚の變化したものだといふ。



〔石首魚——白鯗〕

時珍曰く、東南の海中に生ずる。その形は白魚のやうで、身が扁たく、骨が弱く、鱗が細かくして金のやうに黄色だ。首に二箇の白石があつて、玉のやうに瑩潔なもの

(二)嘉州ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。

だ。秋になると冠鳧に變化する。即ち冠のある野鴨そのものだ。腹中にある白鰾は膠の原料になる。臨海異物志に小なるものを踏水と名け、それに次ぐものを春來と名ける』とある。田九成の遊覧志には『每歳四月に海洋から來て數里の間一面に連り、その聲は雷のやうだ。海人は竹筒を水底に入れてその聲の聞えるところを探り、そこで網を下して流を截つてこれを取る。その取つたものに淡水を潑けて置くと、みな圉圉として無力になる。第一の潮に隨つて來るものが甚だ佳く、第二、第三の潮に隨つて來るものは、魚が次第に小さくなつて味も次第に減ずる』とある

附錄 **黒頭魚** 時珍曰く、四川の(二)嘉州に出る。形狀は鯶子に類し、長さは一尺に達するものがあり、その頭は墨のやうに黑く、頭上に二箇の白子がある。又、北斗魚と名ける。常に二三月に出るもので、漁人は夜間火で照して叉で取る。

肉 氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【蓴菜と合せて羹に作つて食へば、胃を開き、氣を益す】(開寶)

鯗 主治 【炙つて食ふ。能く瓜を消して水と成し、暴下痢、及び卒腹脹の消せぬを治す】(開寶)【宿食を消し、中惡に主效がある。新鮮な生のものはこれに及ば

ない】（張鼎）

【發明】時珍曰く、陸文量の菽園雜記に『痢疾は最も油膩、生、冷物を忌むものだが、ただ白鯗だけは食つても宜し』とあつて、この說は本草に『下利に主效がある』とある說と符合する。蓋し鯗は鹹水を飮むもので、性が熱せず、且つ脂なく膩ならぬところから、中を熱する患なくして食物を消化し、腸、胃を理めるのだ。

【附方】新一。【蜈蚣の咬傷】白鯗の皮を貼る。（集成）

頭中の石魫　【主治】【石淋を下すに水に磨つて服す。また灰に燒いて一日三回飮で服す】（開寶）【研末し、或は燒いて研つて水で服すれば、淋瀝、小便不通に主效がある。煮汁を服すれば、砒霜の毒、野菌の毒、蠱毒を解す】（時珍）

【附方】新二。【石淋、諸淋】石首魚の頭石十四箇、當歸等分を末にし、水二升で一升に煮て頓服すれば立ろに癒える。（外臺祕要方）【膿の出る聤耳】石首魚魫を研末し、或は燒いて性を存して研り、耳に摻る。（集簡方）

(一)勒魚（綱目）

和名　鰳
學名　Bolistis flavimarginatus, Bleeker.
科名　かははぎ科

(一)木村(重)曰ク、勒魚ハ日本ニオケルかははぎト同科ナ

リ。南方支那ノ海産、大サ四寸ニ達ス、腹部ニ刺アリ、又空氣ヲ口中ニフクミテ音響ヲ出ス、集解ニコレバ鰣魚ニ似ルトアリ、コレニ類シテ音ヲ出スモノナシ、假ニ學名ヲ附シテ後攷ヲ俟ツ。

(二)勒ハ俗ニヒキカケルナリ。

【釋名】 時珍曰く、この魚は腹に硬刺があつて人を(二)勒するからかく名けたものだ。

【集解】 時珍曰く、勒魚は東南海中に出る。四月の時が來ると漁人は網を布設して俟つのであるが、この魚群が來ると水中に聲が聽える。その漁獲には第一次、第二次、第三次とあつてそれで終る。形狀は鰣魚のやうで首が小さく、鱗が細かく、腹下に鰣の腹の刺のやうな硬刺があり、頭上に骨があつて、それを合せると鶴の喙の形のやうになる。乾したものをば勒鯗といひ、吳人がそれを嗜む。勒鯗の骨を生の甜瓜の蔕上に挿むと一夜にして熟するものだ。石首鯗の骨でもさうである。



勒魚　―松江―

肉 【氣味】 【甘し、平にして毒なし】 【主治】 【胃を開き、中を暖める。鯗にしたものが尤も良し】(時珍)

鰓 【主治】 【瘧疾には、一寸を七寶飲に入れ、酒、水各半で煎じて一夜露して

(一)木村(重)曰ク、鱭魚ハ支那沿岸及ビ揚子江(漢口マデ)黃河ニ產スル、元來海產ナレドモ、大河ニ於テ河ニ遡ル白キ刀ノ尖端ノ如キ形狀ナスニヨツテ刀魚(タオユー)、支那本土)鳳尾魚(フオンウイユウ、漢口)長尾鯯(チヤンウイトウ、南京)等ノ名アリ。日本ニテハ九州朝鮮ニ產スルえつニ似タリ。此屬支那ニテハ四種ヲ產スルモ一般的ナルモノヲ取ル。大ナルハ一尺許ニ達ス。南支那ニハ印度方面ニ近似ノ魚ヲ產ス。

服す】(時珍)摘玄方

(一)鱭魚　音は鱭(セイ)である。(食療)

和名　しなえつ
學名　*Coilia ectenes*, Jordun et Seale.
科名　かたくち科

【釋名】**鮆魚**　音は劑である。**鮤魚**　音は列(レツ)である。**鱴刀**　音は篾(ヘイ)である。**魛魚**　音は刀(タウ)である。**鱙魚**(廣韻)　音は遒(シユウ)また鮂とも書く。**望魚**　時珍曰く、この魚の形は物を切斷し、また竹を篾ぐ刀のやうだからかかる諸名がある。魏武食制にはこれを望魚といつてある。

【集解】時珍曰く、鱭は江湖中に生ずる。普通は三月に始めて出るもので、形狀は狹くして長く薄く、削つた木片のやうでもあり、長く薄い尖刀(せんたう)の形のやうでもあり、鱗は細かく、色は白く、吻上(ふんじやう)に二箇の硬鬚(かうしゆ)があり、


〔鱭魚〕
刀——魚

(三)鱐ハ魚ノ干物。

腮下に麥芒のやうな長鬣があり、腹下に刀のやうに鋭い硬角刺があり、腹から尾に近い部分に短鬣があり、肉中には細刺が多い。煎炙し、或は(三)酢鱐にして食ふ。いづれも美味だ。烹煮してはそれほどでない。淮南子に『鱭魚は飲むだけで物を食はない。鱣、鮪は物を食ふだけで飲まない』とあり、又、異物志には『鰽魚は初夏に海中から流に泝つて上るものだ。長さは一尺餘、腹下は刀のやう、肉中に毛のやうな細骨がある。これは鰽鳥が變化したもので、それ故に腹中にやはり二箇の鳥脊があるのだといふ。その鳥は色白く、鷺のやうで群り飛ぶものだ。夏になるとこの鳥は姿を隱してこの魚が出て來るのだから、變化したものなることは疑ない』とある。しかし、現に鱭魚はやはりそれ自身に子を生むのだから、必ずしも盡く鳥の變化したものとはいはれない。

肉 〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、疥を發するものだから多食してはならぬ。源曰く、火を助け、痰を動じ、疾を發する。

鮓 〔主治〕【痔瘻に貼る】(時珍)

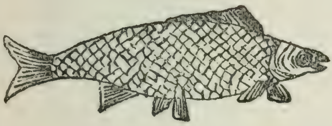
〔附方〕 新一。【瘻にして數孔あるもの】耕垈土を赤く燒いて苦酒に浸し、壁土

と合せて熱せしめ、その上に大鰲鮓を展轉してその土をまぶし、日毎に一回それを貼る。（千金方）

(一)鰣魚（食療）

和名　ひら、一名ひらこのしろ
學名　Ilisha elongata (Bennet.)
科名　いわし科

【釋名】寗源曰く、初夏の時期にはあるが、他の月には無い。故にかく名けたのだ。



［鰣魚］

【出産】時珍曰く、按ずるに、孫愐は『鰣は江東に出る』といつた。現に(二)江中にいづれもあるが、江東にだけ特にその漁獲が盛なので、(三)應天府ではこれを朝廷への貢納物に充ててゐる。毎年四月に鰣魚が出た後に出るのだが、海中から流を泝つて來るのだといふ。一般に甚だ珍重されてゐる。ただ蜀地方ではこれを瘟魚と呼び、畏れて

(一)木村(重)曰ク、鰣魚ハ元來海產魚ナレドモ揚子江ニテハ春四五月漢口マデ產ス。此時期ハ珍味トシテ高價ニ取引サル、ヨツテ鰣魚(スーユウ)ト呼バル。支那產ト同一名ナリ。日本ニテハ九州ヨリ和歌山縣、朝鮮、印度海等ニ分布サル、偏形ニシテ腹ニ三角形ノ鱗並ブ二尺ニ達ス。
(二)江中トハ江蘇省ノ長江沿岸地方ヲ指ス。
(三)應天府ハ唐ノ江寧府ノ地ナリ、明ニ改ム。

食はない。

【集解】時珍曰く、鰣魚は形が秀でて扁たく、やや魴に似て長く、銀のやうに白色だ。肉中に毛のやうな細刺が多い。その子は甚だ細膩なものだ。故に何景明はその銀鱗、細骨を稱美し、彭淵材はその美にして刺多きことを恨んだのである。大なるものも二三尺以内のもので、腹下に三本の角があり、鱗は硬くして甲のやうでやはりその鱗甲中に肪が在つて、非常に大切にしてゐるものだ。その性浮游するもので、漁人は水中數寸の處に絲網を沈めて取るのであるが、ただ一本の絲でもその鱗に掛れば全然動かなくなる。わづかに水を出れば直に死ぬもので、最も壞敗し易い。故に袁達の禽蟲述に『鰣魚の罥網して動かざるはその鱗を護るなり』といつたのだ。烹煮するには適しない。ただ筍、莧、芹、荻などの屬と鱗の付いたまま蒸して食へば佳味だ。また糟で貯藏するもよし。その鱗は他の魚と異つて、石灰水に浸して晒し乾せば層層に起つものだ。これは婦人の花鈿を作るに甚だ良し。

肉　【氣味】【甘し、平にして毒なし】詵曰く、疳痼を發する。【主治】【虛勞を補す】（寗原）【蒸して油を投じ、瓶に盛つて土中に埋め、取り出して湯火傷に塗

る。甚だ效がある』（瀕湖）

（一）嘉　魚（宋開寶）

和名　鉠
學名　Salmo tensihmi, kishino. et Kimura.
科名　さけ科

【釋名】**鮇魚** 音は味（ミ）である。**拙魚**（綱目）**丙穴魚** 藏器曰く、左思の蜀都賦に『嘉魚は丙穴に出づ』とあつて、（二）李善の註に『魚が丙の日を以て穴を出るといふことだ。或は「穴が丙に向いてゐるのだ」魚が日の干支を擇（えら）んで出入するわけがあらうか』といふが、按ずるに、抱朴子に「燕は戊巳（ぼい）を避け、鶴は夜半を知る」とある。魚が丙の日を知らぬとは斷ぜられまい』とある。

時珍曰く、嘉は美である。杜甫の詩に『魚丙穴を知る、由來美なり』とあるはこの魚のことだ。河陽では鮇魚（みぎよ）と呼ぶ。味の美なることをいつたのだ。蜀地方では拙魚と呼ぶ。性の鈍なることをいつたのだ。丙穴に就ての説は一定せぬが、按ずるに、文選の註には『丙穴は（三）漢中沔縣（かんけん）の北に在つて、二個所ある。常に三、八月を以て取る。丙とは地名だ』とあり、水經には「丙水は丙穴に出づ、穴口丙に向ふ。故

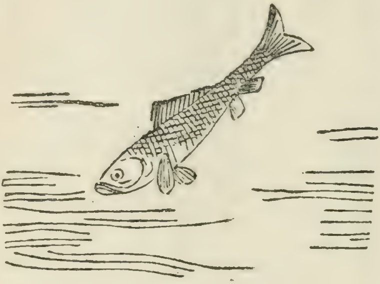
（一）木村（重）曰ク、嘉魚ハ四川省ノ山間ノ溪流ニ産ス、大サ一尺前後ノ細鱗魚ナリ、背部黑色ニシテ横縞ノ模樣アリ、又褐色ノ小斑點アルニヨリ虎魚（フーユー）横魚（ミヤナユ、四川省汶縣）ト呼バル珍魚ニシテ、ナカナカ採集サレズ。故岸上理學博士並ビニ筆者ノ新命名ニ係ル（參照東方文化事業部生物學部報告揚子江魚類ノ生物學的調査第一報）。

（二）鈴木曰ク、李善註以下、今本文選蜀都賦ノ李善註ニハコノ文ナシ。藏器ノ引ケル李善註ハ果シテ

何ニ據リタルヤ詳ナラズ。大觀ニ吳都賦トアルハ誤ナリ。
(三)漢中沔縣、本書ニハ沔陽縣トアリ。沔陽縣、卽チ今ノ沔縣ニシテ、陝西省漢中道ニ屬ス。
(四)嘉州ハ金部鉛ノ註、雅州ハ水部甘露ノ註、梁山ハ石部孔公孽ノ註ヲ見ヨ。
(五)大邑ハ唐ノ縣名、今ハ四川省建昌道ニ屬ス。順政ハ草部隰草類菊ノ順政郡ノ註參照。

に嘉魚と名く。常に三月を以て穴を出で、十月穴に入る』とあり、黃鶴は『蜀中には丙穴が甚だ多い、獨り漢中のみではない。(四)嘉州、雅州、梁山、(五)大邑、順政の諸縣にいづれも丙穴があつて、嘉魚は常に春末を以て出游し、冬月に穴に入る』といつてある。

【集解】志曰く、嘉魚といふは乳穴内の小魚であつて、常に乳水を食ふ。人體に益あるはそれがためだ。



〔嘉魚——丙穴〕

時珍曰く、按ずるに、任豫の益州記に『嘉魚は蜀郡の處處にある。形狀は鯉に似て鱗が細く、鱒のやうだ。肉は肥えて美味である。大なるものは五六斤あり、乳泉を食物とし、丙穴に出る。二三月水に隨つて穴を出で、八九月水に逆つて穴に入るものだ』とあり、夔州志には『嘉魚は春の社日の前に出て秋の社日の後に歸る。首に黑點があり、身は長く鱗

は細く、肉は玉のやうに白くして味は頗る鹹い。鹽泉を食物とするからだ』とあり、范成大の虞衡志には『嘉魚は、形狀は鱒のやうで脂多く、味は極めて美味だ。(六)梧州地方ではこれを鮓にして遠隔地への贈物とする』とあり、劉恂の嶺表錄には『蒼梧の(七)戎縣の江水からは毎日嘉魚が出る。鱒に似て肥美なものだ、他の諸魚の及ぶところでない。毎に炙いて食ふのだが、炙くときには芭蕉の葉で火を隔てる。それは脂が火中に滴らぬための用心だ。また(八)脡にするもよし』とある。

肉　[氣味]　【甘し、溫にして毒なし】　詵曰く、微に毒はあるが、味多くして珍美だ。　[主治]　【これを食へば人をして肥健ならしめ、悅澤ならしめる】(開寶)　【煮て食へば腎虛、消渴、勞瘦、虛損を治す】(藏器)

[發明]　志曰く、この魚は乳水を食物とするので、功用は乳と同じ。能く久しくこれを食へば、その功力は乳よりも強い。英雞に似たところがある。詵曰く、常に崖石下の孔中にあつて乳石沫を食ふものだ。故に補益するのである。

(一)鯧魚（拾遺）

和名　まなかつを
學名　Stromateus argenteus, Boulenger.
科名　まなかつを科

(六)梧州ハ廣西省梧州府、蒼梧ハ漢ノ郡名藍蛇ノ註ヲ見ヨ。
(七)戎縣、未詳。
(八)脡トハ乾肉ヲ云フ。
(一)木村(重)曰ク、鯧ハ中部支那ヨリ南支那ノ海ニ產ス。四

季漁獲シテ食用ニ供セラル。大ナルモ一尺五寸前後ナリ。鯧魚（チヤンユー）ハ支那全土ノ用語ナリ。

【釋名】 **鯧魚**（錄異） **鯧鯸魚**（拾遺） **昌鼠**（藏器） 時珍曰く、昌は美である。味を以て名けたものだ。或は、この魚が水に游いでゐると、他の多くの魚がそれに隨つてその涎沫を食ふ。その有樣が娼のやうだ。それで名けたものだともいふ。閩地方では鯧魚と訛つて呼ぶ。廣地方では骨つきのまま煮て食ひ、狗瞌睡魚と呼ぶ。

【集解】 藏器曰く、鯧魚は南海に生ずる。形狀は鯽のやうで身が正しく圓く、硬骨がない。炙き魚にして食ふと至つて美味だ。

時珍曰く、閩、浙、廣南の海中に四五月に出る魚だ。嶺表錄に『形は鯿魚に似て、腦上が突起して背に連り、身は圓く、肉は厚く、鱖魚のやうに白く、ただ脊骨が一條あるだけだ。これを修治するに、葱、薑と共に口の小さい甕に入れて粳米を入れて置けば、その骨も軟になつて食し得る』とある。



［鯧魚］——松江——

肉 【氣味】 【甘し、平にして毒なし】 【主治】 【人をして肥健ならしめ、氣力を益す】（藏器）

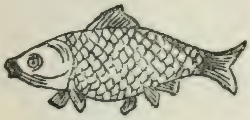
腹中子 【氣味】 【毒あり、人をして下痢せしめる】（藏器）

(一)鯽魚（別錄上品）

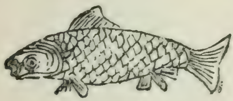
和名　ふな
學名　Carassius auratus (Linn.)
科名　こひ科

【釋名】鮒魚　音は附(フ)である。時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『鯽魚は旅行するに相卽いて行くものだ。故にこれを鯽といひ、相附いてゐるものだから鮒といふのだ』とある。

【集解】保昇曰く、鯽は所在の池澤にゐる。形は小さい鯉に似てゐるが、色黑くして體促り、壯大にして脊が隆く、大なるものは三四斤に達する。



鯽魚



〔鯽魚〕

時珍曰く、鯽は喜んで泥に偎み、雜物を食はない。故に能く胃を補するのだ。冬期は肉厚く、子多く、その味が就中美味だ。酈道元の水經註に『蘄州(二)廣齊の青林湖の鯽魚は、大いさ二尺あり、食へば肥美であつて、寒、暑を辟ける』とあり、

(一)木村(重)曰ク、鯽魚ハ東洋ヲ原産トス。日本ニ棲ムト同種ノ淡水魚ナリ。一般ニ鯽魚(チーユー)ニテ知ラル、大ナルハ一尺五寸ニ達ス。一屬一種。變種甚多ク、眼ノ突出セルモノ、又紅色ノモノ、黑色ノモノ等アリ。金魚ノ項參照。

(二)廣齊、廣濟ヲ正トス、縣名、唐ニ置ク、今ハ湖北省江漢道、即チ清ノ黃州、明ノ蘄州府ニ屬ス。

東方朔の神異經には『南方の湖中には鯽魚が多く、長さ數尺のものがある。これを食へば暑に宜しく、而も風寒を辟ける』とあり、呂氏春秋には一魚の美なるものに(三)洞庭の鮒あり』とある。これで觀ると、鯽は古代から佳品とされて來たものだ。

【附錄】 (四)鰤魚 詵曰く、鰤魚といふ一種は鯽と頗る同じものだが、味が同じくなく、功力も及ばない。鰤は櫛の化したもの、鯽は稷米の化したものだ。それで腹にまだ米の色があるのだといふ。寬大なるものが鯽、狹小なるものが鰤である。

時珍曰く、孟詵が『鯽、鰤いづれも櫛、稷から化成したもの』といふは甚しい謬說だ。ただ鼢鼠が鰤に化し、鰤が鼢鼠に化すといふことは劉績の霏雪錄中にも書いてあり、時珍もやはり見たことがある。これはやはり生生化化の理であるが、鯽、鰤には多く子がある。盡く化したものとはいへない。鰤魚は即ち爾雅に所謂『鱖鯞』郭璞の所謂『妾魚、婢魚』崔豹の所謂『靑衣魚』世俗に所謂『鰟魮鯽』であつて、鯽に似て小さく、且つ薄黑色で揚赤だ。その行動は三尾一群になつてゐて、前に一尾、後に二尾續いて行く、その有様が婢妾を見るやうなところから名けたものだ。

頌曰く、(五)黔中に重唇石鯽魚といふ美味なる一種がある。やはり鯽の類だ。

(三)洞庭、即チ今ノ洞庭湖ナリ。

(四)木村(重)曰ク、鰤魚ハかはたなご學名 Pseudoperilampus ocellatus Kner. 科名こひ科

鰤魚ハかはたなご類ノ總稱ナリ、支那ニハかはたなご類ハ五屬十五種ヲ産ス。體形ヨリ膨皮(ボンピー)鱊鮏(ボンピー、中部支那)ト稱セラル。ココニハ代表的ノモノノ學名ヲ揭ク。體長圓形ニ近シ。

(五)黔中ハ金部銀ノ註ヲ見ヨ。

(六)茭首ハマコモズミチ生ズル筍ノ如キモノノ稚弱ノモノ。

肉　氣味【甘し、温にして毒なし】鼎曰く、蒜に和して食へば熱を少くし、沙糖と共に食へば疳蟲を生じ、芥菜と共に食へば腫疾を成し、猪肝、雞肉、雉肉、鹿肉、猴肉と共に食へば癰疽を生じ、麥門冬と共に食へば人を害する。

主治【五味と合せて煮て食へば瘧痢に主效がある】(藏器)【中を温め、氣を下す】(大明)【下痢、腸痔を止める】(保昇)【夏期には熱痢に有益だが、冬期には宜くない】【蓴と合せて作つた羹は、胃弱で食物の下らぬに主效があり、中を調へ、五臓を益す。(六)茭首と合せて作つた羹は、丹石の發熱に主效がある】(孟詵)【生で搗いて惡核腫毒の散せぬもの、及び瘑瘡に塗る。小豆と共に搗いて丹毒に塗る。灰に燒き醬汁に和して諸瘡の十年瘥えぬものに塗る。猪脂でその灰を煎じて服すれば腸癰を治す】(蘇恭)【小豆と合せて煮た汁を服すれば水腫を消す。炙いて油で調へて婦人の陰疳諸瘡に塗れば、蟲を殺し、痛を止める。白礬を釀し、燒き研つて飲で服すれば、腸風血痢を治す。硫黄を釀して煅き研り、五倍子を釀して煅き研り、酒で服すればいづれも下血を治す。茗葉を釀し、煨いて服すれば消渇を治す。胡蒜を釀し、煨き研つて飲で服すれば、膈氣を治す。綠礬を釀し、煅き研つて飲で服すれば反胃を治

す。鹽花を釀し、燒き研つて齒疼に摻る。當歸を釀し、燒き研つて牙に揩れば、髭を黑くし、血を止める。砒を釀し、燒き研つて急疳瘡を治す。白鹽を釀し、煨き研つて骨疽に搽る。附子を釀し、炙き焦して油と共に頭瘡白禿に塗る】（時珍）

發明 震亨曰く、諸魚は火に屬するものだが、鯽だけは土に屬し、胃を調へ腸を實するの功がある。多食してはやはり能く火を動ずる。

附方 舊五。新三十二。【鶻突羹】脾、胃の虛冷で食物の下らぬを治す。鯽魚半斤を切碎いて沸豉汁を投じ、胡椒、蒔蘿、薑、橘の末を入れて空心に食ふ。（心鏡）【卒病水腫】鯽魚三尾を腸を去つて鱗を留め、商陸、赤小豆等分を塡滿して札定し、水三升で煮爛らし、魚を去つてその豆を食ひ汁を飲む。二日に一回試みれば三回に過ぎずして小便が利して癒える。（肘後方）【消渴飲水】鯽魚一尾を腸を去つて鱗を留め、茶葉を塡滿して紙に包み、煨熟して食ふ。數尾に過ぎずして癒える。（吳氏心統）【腸風下血】百一方では、活きた鯽の大なるもの一尾を腸を去り鱗を留め、五倍子末を塡滿して泥で固め、煅いて性を存して末にし、酒で一錢を服す。或は飯で丸にして一日三回服す。〇又、硫黃一兩を用ゐ、前記の方法のやうにして煅いて服しても效があ

る。【酒積下血】鯽魚を酒で煮て常に食ふが最も效がある。（便民食療方）【腸痔滴血】鯽魚の羹を作つて常に食ふ。（外臺）【腸風血痔】活きた鯽魚の翅側に孔を穿つて腸を去り鱗を留め、白礬末二錢を入れて、紙で裹んで椶櫚の毛を以て縛り、煨いて性を存し、研末して二錢づつを米飲で服す。毎日二回。（直指方）【血痢禁口】方は上に同じ。【反胃吐食】大鯽魚一尾を腸を去り鱗を留め、綠礬末を滿てて泥固し、煅いて性を存して研末し、一日二回、米飲で一錢づつを服す。（本事）【膈氣吐食】大鯽魚を腸を去り鱗を留め、大蒜を切片して塡滿し、紙で包んで十重に泥封し、晒して半乾のとき炭火で煨熟し、肉を取つて平胃散末一兩を和し、杵いて梧子大の丸にして密封して貯へ、三十丸づつを米飲で服す（經驗）【小腸疝氣】食事毎に鯽魚十尾を茴香と共に煮て食ふ。久しく食すれば自ら癒える。（生生編）【妊娠感寒】時行のものには、大鯽一尾を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。汗無くして腹中の緩痛するには、醋で服して汗を取る。（產乳）【熱病の目暗】熱病が瘥えて後に五辛を食つて發つたものには、鯽魚を臛にして食ふ。（集驗方）【目に弩肉を生じたもの】新鮮な鯽魚一斤を取り、中央に竅を開けて眶上に貼る。一日三五回。（聖濟總錄）【婦人の血崩】長さ五寸の鯽魚一尾

を腸を去り、血竭、乳香をその中に入れて綿で包み、燒いて性を存して研末し、三錢づつを熱酒で調へて服す。（葉氏摘玄方）【小兒の齁喘】活きた鯽魚七尾を器に盛り、その病兒に自らそれに排尿させて養ひ、紅色になるを待つて煨熟して食ふ。甚だ效がある。ある十歳の女兒にこの方を用ゐて永く發病しなかつた。（集簡方）【小兒の舌腫】新鮮な鯽魚を切片して貼り、頻に換へる。（總微論）【小兒の丹毒】髀から起つて陰頭に流下し、赤腫して出血するには、鯽魚肉を切つて五合、赤小豆末二合を擣き勻ぜ、水を入れて和して傅ける。（千金方）【小兒の禿瘡】千金では、鯽魚を灰に燒いて醬汁で和して塗る。○一方では、鯽魚を腸を去り、皂礬を入れて燒き研つて搽る。○危氏の方では、大鯽を腸を去り、亂髮を入れて塡滿し、燒き研つて雄黃末二錢を入れ、先づ瘡を虀水で洗ひ拭つてから、生油で調へて搽る。【小兒の頭瘡】晝は開いて膿を出し、夜は復た合するものには、長さ四寸の鯽魚一尾を腸を去り、大附子一箇を皮を去つて研末して塡入し、炙き焦して研つて傅け、蒜を搗いて封ずるが有效だ。（聖惠）【走馬牙疳】鯽魚一尾を腸を去り、砒一分、生地黃一兩を入れ、紙で包んで燒いて性を存し、枯白礬、麝香少量を入れて摻る。【牙疳出血】大鯽魚一尾を腸

を去り鱗を留めて當歸末を入れ、泥固して燒いて性を存し、煆いた鹽を入れて和勻し、日每に用ゐる。（聖惠方）【牙に揩つて鬚を黑くする法】方は上に同じ。【骨を刮り牙を取る法】鯽魚一尾を腸を去り、砒をその中に入れて陰地に露し、霜の生じたとき刮下して甁に取收め、針で牙根を搜開して少量を點ける。欬嗽して自ら落ちる。〇又ある方では、硇砂を鯽魚の內に入れ、煆いて甁に取收め、霜が生じたとき刮り取つて前記の方法の如くして用ゐる。【諸瘡腫毒】鯽魚一斤のものを腸を去つて柏葉を塡滿し、紙で裹み泥で包んで煆いて性を存し、輕粉二錢を入れて末にし、麻油で調へて搽る。（普濟方）【浸淫毒瘡】凡そ卒かに毒氣が身を攻めて、或は腫痛し、或は上下周圍が赤痒し、煩毒して死せんとするものは浸淫毒瘡である。生鯽魚を切片し、鹽を和して擣いて貼り、頻に易へる。（聖惠方）【胯上の便毒】鯽魚一尾、山藥五錢を共に擣いて敷けば消する。（醫林集要）【骨疽の膿の出るもの】黑色の鯽魚一尾を腸を去り、白鹽を滿てて札定し、水一盞で石器に入れて乾き焦げるまで煮て末にし、猪油で調へて搽る。少し痛んでも危惧するに及ばぬ。（危氏方）【手足の瘭疽】累累として赤豆の如く、剝げば汁の出るには、長さ三四寸の大鯽魚と亂髮一雞子大、猪脂一升を共に

煎膏して塗る。（千金方）【臁脛に生じた瘡】中位の鯽魚三尾を洗淨し、穿山甲二錢とを、長皂莢一挺を兩片に劈開して夾んでよく括り付け、煨いて性を存して研末し、先づ井水で瘡の膿水を洗淨してから、白竹葉を用ゐて孔を刺してこれを貼り、水が出盡るを俟つて麻油、輕粉の調藥を傅ける。一日一回。（直指方）【小兒の撮口】白沫を出すには、艾で口の上下に四壯灸し、鯽魚を燒き研つて酒で少量を調へて灌ぎ、手足を搯む。一歳半の小兒の場合は、魚網を洗つた水を灌ぐ。（小兒方）【婦人の陰瘡】方は主治の項に掲げてある。

鱠 主治 【久痢赤白、腸澼、痔疾、大人、小兒の丹毒、風眩】（藏器）【脚風、及び上氣を治す】（思邈）【脾、胃を温め、寒結氣を去る】（時珍）

鮓 主治 【瘡瘑には片に批いて貼る。或は桃葉と共に擣いて傅ける。その蟲を殺すのである】（時珍）

附方 新一。【赤痢の止まぬもの】鯽魚鮓を二片に切り、秫米一把、薤白一虎口を切り、合せて粥に煮て食ふ。（聖惠）

頭 主治 【小兒の頭瘡、口瘡、重舌、目翳】（蘇恭）【燒き研つて飲で服すれば

欬嗽を療ず】(藏器)【燒き研つて飲で服すれば下痢を治す。酒で服すれば脱肛、及び婦人の陰脱を治す。それと同時に油で調へて搽る。醬汁で和して小兒の面上の黃水瘡に塗る】(時珍)

子　猪肝を忌む。[主治]【中を調へ、肝氣を益す】(張鼎)

骨　[主治]【䘌瘡には、灰に燒いて數回傅ければ癒える】(張鼎)

膽　[主治]【汁を取つて疳瘡、陰蝕瘡に塗れば、蟲を殺し、痛を止める。喉中に點ければ、骨鯁、竹刺の出ぬを治す】(時珍)

[附方]　舊一。新二。【小兒の腦疳】鼻痒く、毛髮が穗に作り、黃瘦するには、鯽魚膽を鼻中に滴す。三五日で甚だ效がある。(聖惠)【消渇飲水】浮石、蛤蚧、蟬蛻等分を末にし、鯽魚膽七箇で調へて三錢を服す。神效がある。(本事)【耳に滴して聾を治す】鯽魚膽一箇、烏驢脂少量、生麻油半兩を和勻し、樓葱管中に七日間納れて置いてから、一日二回耳中に滴す。(聖惠方)

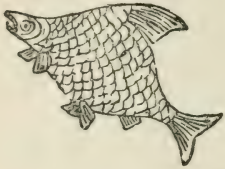
腦　[主治]【耳聾には、竹筒で蒸して滴らす】(聖惠)

(一)魴　魚　音は房（バウ）である。（食　療）

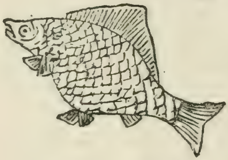
和　名　へんぎょ
學　名　Parabramis bramula (Cuv. et Val.)
科　名　こひ科

【釋名】鯿魚　音は編（ヘン）である。時珍曰く、魴は方である。鯿は扁である。その形狀が方で、その身が扁だからだ。

【集解】時珍曰く、魴魚は處處にあるが、(二)漢沔に就中多い。頭が小さく、項が縮まり、脊が穹く、腹が濶く、身が扁たく、鱗が細かく、その色は青白で腹中に肪があり、味が最も腴美で、その性は活水に宜きものだ。故に詩に『豈其れ魚を食はんや、必ず(三)河の魴』といひ、俚語に『(四)伊洛の鯉、魴は美なること牛、羊の如し』といふのである。又、火燒鯿なる一種がある。それは頭、尾ともに



火燒鯿



〔魴　魚〕
——鯿——

(一)木村（重）曰ク、魴魚ハ體偏平ニシテ頭尾狹キ菱形ヲナス。一般ニ鯿魚（ペンユー）ト稱セラル。支那本土及ビ滿洲ニ產スルモ日本ニナシ、大サ一尺二寸許ニ達ス。魚肉中ニ叉セル小骨多シ。一屬一種ノ淡水魚ナリ。

(二)漢沔ハ今ノ湖北省ノ安陸、漢陽ヨリ江陵ニ至ル間ノ漢水ト長江トノ中間一帶ノ地ヲイフ。

(三)河トハ黄河ヲ指ス。

(四)伊洛ハ草部隰草類木賊附錄問荊ノ註ヲ見ヨ。

魴に似てゐるが、脊骨が更に隆く、上に尾まで連つて赤鬣があつて、蝙蝠の翼のやうだ。黑質(五)赤章でその色は烟で薫じたやうである。故にかく名けたものだ。その大なるは二三十斤に達するものがある。

肉 [氣味]【甘し、温にして毒なし】 [主治]【胃氣を調へ、五臟を利す。芥に和して食へば能く肺氣を助け、胃の風を去り、穀物を消化する。鱠にして食へば脾氣を助け、人をして能く食慾を盛ならしめる。羹、臛にして食へば健康に宜し。功は鯽と同じ。瘡痢の人は食つてはならぬ】(孟詵)

(一)鱸魚（宋嘉祐）

和名　すずき
學名　Lateolabrax japonicus, Cuv. et Val.
科名　すずき科

[釋名] **四鰓魚**　時珍曰く、黑色を盧といふ。この魚は白質黑章だからかく名けたのだ。淞地方では四鰓魚といふ。

[集解] 時珍曰く、鱸は(二)吳中に産し、淞江に就中盛に獲れる。四五月はその出る時期で、長さは僅に數寸、形狀は鱖に微し似てゐるが、色は白くして黑點が

(五) 赤章、章ハあやト訓ズ。浮キ出テ模樣ノヤウニ見ユルヲイフ。

(一) 木村(重)曰ク、鱸魚ハ日本ニ於ケルト同種ノすずきナリ。支那及滿洲ノ河口附近ニ多産ス。一般ニ鱸魚(ルーユー)ト稱セラル、大サ二尺ニ達ス、松江ニ於テ鱸魚ト稱セラルルハ全クすずきト別種ニシテ、かじか科ニ屬スル Trachidermis

fasciatus, Heckel ナリ。コレチ四鰓魚（スーシーユー）ト稱ス。コレ鱸ガ四枚鰓蓋ノ下ヨリ見ユルニヨル。
（二）呉中トハ今ノ江蘇省呉縣ノ地チイフ。
（三）鱸鄕、未詳。

あり、口が巨（おほ）きく、鱗が細かく、四箇の鰓がある。楊誠齋の詩は頗るその狀態を言ひ盡したもので『鱸は（三）鱸鄕に出づ蘆葉の前、垂虹亭下錢を論ぜず。買來つて玉尺短きを如何、銀梭（ぎんさ）を鑄出して直是れ圓なり。白質黑章三四點、細鱗巨口一雙鮮なり。春風已に眞風味あり、秋風を想ひ得て更に逈然（けいぜん）』とある。南郡記には『呉人が淞江の鱸を隋の煬帝（やうてい）に獻じたとき、帝は「金虀（きんせい）、玉鱠、東南の佳味」といつた』とある。



〔鱸魚――松江〕

肉　〔氣味〕【甘し、平にして小毒あり】宗奭曰く、小毒あるにしても甚しく病を發するものではない。禹錫曰く、多食すれば痃癖（げんぺき）、瘡腫を發する。乳酪と共に食つてはならない。李廷飛は『肝は食つてはならぬ。人の面皮を剝ぐものだ。』といつた。詵曰く、鱸魚の中毒には、蘆根汁を用ゐれば解す。

〔主治〕【五臟を補し、筋骨を益し、腸、胃を和し、水氣を治す。多食すれば健康に宜く、鮓（さく）にしたものが就中良し。曝乾したものは甚だ香美だ】（嘉祐）【肝、腎

を益す】(宗奭)【胎を安じ、中を補す。鱠にするが就中佳し】(孟詵)

(一)鱖魚

居衛の切(ケイ)と發音する。(開寶)

和名　けつぎよ
學名　Siniperca chuatsi (Basilewsky.)
科名　すずき科

釋名　**罽魚**　音は薊(ケイ)である。**石桂魚**(開寶)　**水豚**　時珍曰く、鱖は蹶(けつ)である。その體が屈曲不能で僵(たふ)れ蹶(つまづ)いたやうだといふ意味だ。罽は(二)罽である。その紋斑が織罽(しよくけい)のやうだといふ意味だ。大明曰く、その味が豚のやうだから水豚と名け、また鱖豚と名ける。志曰く、昔、劉憑(りうひよう)といふ仙人があつて、常に石桂魚を食つたといふが、桂と鱖とは同音だからこの魚のことであらうと思ふ。

集解　時珍曰く。鱖は江湖中に生ずる。形は扁く、腹が濶(ひろ)く、口が大きく、鱗が細く、黑斑と釆斑とあつて、色の明なものが雄、やや晦(くら)いものが雌である。背に鬐鬣(きれふ)があつて人を刺す。皮は厚く、肉は緊り、肉中に細刺がなく、(三)肚があつて能く嚼む。やはり小魚を啖(く)ふものだ。夏期には石穴に居り、冬期には(四)泥罧(でいしん)に偎(した)しむ、沈下する性質を有つた魚である。小さいものの味は佳いが、三五斤のものになると

(一)木村(重)曰ク、鱖魚ハ九州産かはめばりニ似タル魚ナリ。支那本土、滿洲ニ產スル淡水魚ニシテ、鰭ノ前半ハ棘ナリ。支那ニ於テ最モ珍味トサル。大サ一尺前後。鱖魚(クヰユー)桂花魚(クヰホアユー)ノ名最モ一般ナリ。又花鯽魚(ホアチーユー、北平)トモ稱セラル。此屬ニハ他ニ四種アリ、共ニ類似ス。朝鮮ニ類似ノ一屬一種アリ。
(二)罽ハ毛織物。
(三)爾雅翼ニ云ク、凡牛羊之屬有肚故能嚙魚無肚不嚙鱖獨有肚能嚙。
(四)罧ハ水中ニ沈メ

タル積柴ニシテ魚ノ隱ルル所ナルモノ、ソレニ聚ルモノ、混罧ハ混ノツイタル柴ナリ。罧ハ疏簪ノ切、音森(シン)ナリ。

(五)洛水ハ合水ノ誤ナリ。中次七經牛石之山ノ條ニ『合水出于其陰。而北流注于洛。多鰧魚。云云』トアリ。合水ハ畢氏考證ニ據レバ今ノ河南洛陽縣ノ東南ニ在リトイフ。

美味でない。李廷飛の延壽書には『鱖の鬐刺は凡て十二あつて十二个月に應じてある。誤つてその鯁害を受けた場合には、ただ橄欖核を水に磨つて用ゐれば解すものだ。蓋しこの魚は橄欖を畏れるからだ』とある。



〔鰧魚〕
——圖——

【附錄】 **鰧魚** 時珍曰く、按ずるに、山海經に『(五)洛水、鰧魚多し。狀鱖の如く、逵に居る。蒼文、赤尾なり。これを食へば癰せず。以て瘻を治すべし』とあり、郭註に『鰧は音滕(トウ)逵とは水中穴道の交通するところ』とある。予が按ずるに、鰧は、その形狀といひ、擧動といひ、功用といひ、いづれも鱖と同じものだ。やはり鱖の類と思ふ。日華子が鱖を水豚としてあるが、それはこの鰧をいつたものではあるまいか。

肉 【氣味】 【甘し、平にして毒なし】 日華曰く。微毒あり。【主治】 【腹內の惡血。腹內の小蟲を去り、氣力を益し、人をして肥健ならしめる】(開寶) 【虛勞を補し、脾、胃を益す】(孟詵) 【腸風瀉血を治す】(日華)

【發明】時珍曰く、按ずるに、張杲の醫説に『越州の邵氏の女は、年十八で勞瘵を病んで幾年かを經過したが、偶々鱖魚羹を食つてやがて癒えた』とある。これで觀れば、勞を補し、胃を益し、蟲を殺すの説と符合する。して見ると仙人劉憑、隱士張志和がこの魚を嗜んだといふも謂れないことではない。

尾【主治】【小兒の軟癤にはこれを貼るが良し】（時珍）

膽【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【骨鯁にはその經過の長短を問はぬ】（時珍）

【附方】舊一。【骨鯁、竹木刺の咽喉に入つたとき】大人、小兒に拘らず、日久しくして或は臟腑に入り、痛刺し、黄瘦して甚しきものには、これを服すればいづれも出る。臘月に鱖魚膽を取收めて北側の簷下に懸けて乾し、一回の用量一皂子ほどを酒で煎じて溫めて呷ふ。それで吐けば鯁は涎に隨つて出るものだ。なほ吐かぬときは再服し、吐くまでを度とし、酒を量に隨つて飮む。出ぬものなし。蠡、鯇、鯽の膽いづれもよし。（勝金方）

（一）鯊魚（綱目）

和名　鈌
學名　Eleotris potamophila, Günther.
科名　はぜ科

〔釋名〕　鮀魚（爾雅）　吹沙（郭璞）　沙溝魚（俗名）　沙鰛　音は問（モン）である。

時珍曰く、これは海中の沙魚をいふのではない、南方の溪澗中の小魚をいふのだ。沙溝中にゐて沙を吹いて游ぎ、沙を咂つて食ふ。鮀といふは、肉が多く、形が圓くして陀陀たるものだといふ意味だ。



〔鯊魚——吹沙〕

〔集解〕　時珍曰く、鯊魚は、大なるものは長さ四五寸で、その頭も尾も太さが同様だ。頭の形状は鱒のやう、體は圓くして鱓に似てゐる。肉は厚く、唇が二重になり、鱗は細かく、黄白色で黒斑點文があり、背に鬐刺があつて甚だ硬く、その尾は岐がない。小さい時は子があつて頗る美味だ。俗に阿浪魚と呼ぶ。

（一）木村（重）曰ク、鯊魚ハ體黒色ヲ帯ビ、黒色ノ斑紋アリ、大サ四寸許揚子江ノ南方ニ多産ス。南京附近ニテハ鰕虎鯊（シヤフーシヤ）ト云フ。集解ノ「厚肉重唇」云云ニヨレバ Hemibarbus labeo ヲ云フガ如キモ、前者ヲ一般ニ鯊魚トイフ。

肉【氣　味】【甘し、平にして毒なし】【主　治】【中を煖め、氣を益す】（時珍）

(一)杜父魚（拾遺）

和名　しなはげかじか
學名　Furcina dabryi, Sauvage.
科名　かじか科

【釋　名】渡父魚（綱目）黃魩魚　音は幺（エウ）である。船矴魚（綱目）伏念魚（臨海志）時珍曰く、杜父は渡父と書くべきである。溪澗の小魚で渡父の食ふものだ。人を見ると喙を泥中に挿込んで船(二)矴のやうだ。



〔杜父魚〕

【集　解】藏器曰く、杜父魚は溪澗中に生じ、長さ二三寸、形狀は吹沙のやうで短く、その尾に岐があり、頭が大きく、口が闊く、その色は黃黑で斑があり、脊背上に鬐刺があつて人を螫す。

【氣　味】【甘し、温にして毒なし】【主　治】【小兒の差頽には、この魚を口で擘開して之を七回咬めば消する】（藏器）差頽といふは陰核の一方が大きくなる病氣

(一)木村(重)曰ク、杜父魚ハ體肥大ス、上部暗褐色ニシテ黃味ヲ帶ブ、泥沙上ニ棲ム。南方支那ノ淡水ニ棲ム、大サ四寸許、日本ニコレト同屬ノ一種アリ。
(二)矴ハ碇（イカリ）ニ同ジ。

である。

石斑魚(綱目)

和名 鈌
學名 Euchilognnis davidi, Sauvage.
科名 シヅリデー科

〔釋名〕 石鼇魚(延壽書) 高魚

〔集解〕 時珍曰く、石斑は南方の溪澗の水石の處に生ずる。長さ數寸、鱗白くして斑黒く、水面に浮游してゐるが、人の聲を聞くと劃然として深く入るものだ。臨海水土記に『長さは一尺餘あり、その斑は虎の文(もん)のやうだ。性淫なるもので、春期に(二)蛇醫と交尾する。それだからその子には毒がある』とあり、南方異物志には『高魚は鱒に似たもので、雌があつて雄がなく、二三月に蜥蜴(せきえき)と水上で交尾する。その胎は人を毒するものだ』とあり、酉陽雜俎には『石斑は蛇と交尾する。南方には土蜂がゐるが、土地の者はこの魚を殺して樹上に懸け、鳥を誘ふて食はせる。そ



〔石斑魚〕

(一)木村(重)曰ク、石斑魚ハ雲南、四川、貴州省ノ山間溪流ニ産スルなまづノ類スル淡水魚。體偏平ニシテヨク石上ニ密着シ、捕ヘントスレバ石チ抱キテ上ル、ヨッテ石把魚(シーパーユー、四川省)ト稱シ、又ハ石ト同樣ノ暗褐色ニヨリ石斑魚(シーパンユー、雲南)ト稱サル。一屬二種、印度ノ山地廣東省ニモコレニ似タル屬アリ。他地方ニナシ。大サ五寸マデ。

(二)蛇醫ハ石龍子ノ一種、木條ニ説アリ。

れで蜂窠は悉く食盡される』とある。

子　及び**腸**　[氣味]【毒あり。人をして吐瀉せしめる】醫説に『魚尾草汁少量を用ゐれば解す』とある。

(一)石鮅魚（拾遺）

和名　おひかは
學名　Zacco platypus, Temm. et Schl.
科名　こひ科

[集解] 藏器曰く、南方の溪澗中に生ずる。長さ一寸、背裏、腹下が赤い。南方ではこれを鮓にして甚だ美味だといつてゐる。



〔石鮅魚〕

[氣味]【甘し、平にして小毒あり】[主治]【瘡、疥癬】（藏器）

(二)黃鯝魚　音は固(コ)である。（綱目）

和名　鈌
學名　Pseudoculter exiguus, Basilw.
科名　こひ科

[釋名] **黃骨魚**　時珍曰く、魚の腸の肥えたものを鯝といふ。この魚は腸腹に

(一) 木村(重)曰ク、石鮅魚ハ日本ニモ分布ス、腹部及尾鰭ハ生殖時期ニ赤色ヲ呈ス。四川省、湖北省ニテハ桃花魚（トウホアユー）ト稱ス。四寸許ノ淡水魚ニシテ此屬ニ二種ヲ產ス。

(二) 木村(重)曰ク、黃鯝魚ハ日本ニ產セザル屬ノ魚ナリ、大サ三寸許ノ白キ魚、北支那ニ多ク見ラル。

脂が多く、漁人は黃油を煉り取つて燈火用にするが、甚だ鯹(なまぐさ)い。南方では黃姑と訛り、北方では黃骨魚と訛つて呼ぶ。



〔黃鯝魚〕

集解　時珍曰く、江湖中に生ずる小魚である。形狀は白魚に似て頭、尾が昂(あが)らず、身は扁たく、鱗は細かくして白く、濶さは一寸以上にはならず、長さは一尺まではならない。鮓にも葅(そ)にもなり、煎炙しても食ふ。甚だ美味だ。

肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【白煮して汁を飲めば、胃寒泄瀉(たいしや)を止める】(時珍)

油　主治　【瘡癬の蟲あるもの。燈火用とすれば人の目を昏くする】(時珍)

鰷魚(一)（綱目）

和名　鋏
學名　Parapelecus argenteus, Günther.
科名　こひ科

釋名　白鰷　音は條(デウ)である。鮤魚　音は餐(サン)である。鮂魚　音は囚(シュウ)である。時珍曰く、鰷は條(えだ)である。鮤は粲(あきらか)である。鮂は囚(とらはれびと)である。條と

(一)木村(重)曰ク、湖北省洞庭湖ヨリ下流、南京マデ分布サル。小魚ニシテ三寸ヲ出デズ。形全ク柳葉ノ如ク、而モ薄キ幅ヲ有ス。泳グヤ其

はその形狀、粲とはその色、四とはその性を表したものだ。

〔集解〕時珍曰く、鰷は江湖中に生ずる小魚である。長さ僅に數寸、形は狹くして扁たく、柳葉のやうな形狀だ。鱗は細くして整ひ、潔白にして美しいものだ。性好んで羣游する。荀子に『鯈は浮陽の魚なり』最も鮓、葅に宜し』とある。



〔鰷魚〕——鯈——

〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【煮て食へば憂鬱が已み、胃を暖め、冷瀉を止める】（時珍）

鱠殘魚（食鑑）(一)

和名　しなしらうを
學名　Protosalanx hyalocranius (Abbott)
科名　しらうを科

〔釋名〕王餘魚（綱目）銀魚　時珍曰く、按ずるに、博物志に『吳王闔閭が揚子江を渡るとき、魚鱠を食つてその殘餘を水中に棄てた。それが化してこの魚となつたのでかく名けたものだ』とある。或は又、越王としたのもあり、また僧寶誌とし

ノ銀白ノ鱗光リテ燦然ト輝クニヨツテ鰷魚（フオンユー、四川省）ノ名アリ。別種滿洲ニ二種、本土ニ一種、計四種知ラル。ナホ新種岸上、木村ニヨツテ記載サル。淡水ノ雜魚ナリ。分布此屬ハ支那滿洲ニ棲ム、日本ニナシ。

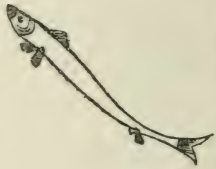
(一) 木村(重)曰ク、支那ニハしらうを屬ハ四個アリ、スベテ銀魚（インユー）ト呼バル（白魚ノ項參照）黃河、揚子江ニテハ五十浬モ上溯ス。大ナルハ四寸ニ達ス。此種ハ揚子江マデ產

ス。日本ノしらうなニ似ル。
（二）蘇松ハ蘇州松江ノ略稱。

（一）木村（重）曰ク、日本ノさよりト同種ナリ、長サ三尺前後、本來海産ナルモ揚子江ニテハ九江マデ産

たのもあるが、ますます傅會の上に傅會を加へたもので、問題にする價値はない。

集解　時珍曰く、鱠殘は（二）蘇松、浙江に産し、大なるものは長さ四五寸あり、身は筯のやうに圓く、銀のやうに潔白で鱗がない。鱠になつた魚といふだけに、ただ目と覺しき兩黑點があるだけのものだ。彼の地では尤も珍重し、小さいものを曝乾して各地へ賣り出してゐる。淸明節の前には子があつて、甚だ美味だ。淸明節後には子が出て瘦せ、ただ鮓、腊にする位のものだ。



〔鱠殘魚〕

氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【羹にして食へば、中を寛にし、胃を健にする】（寧源）

（一）鱵魚

音は針（シン）である。（綱目）

和名　さより
學名　Hemiramphus sajori (Temm. et Schleg.)
科名　さより科

釋名　姜公魚（俗名）　銅唲魚　音は稅（ゼイ）である（臨海志）　時珍曰く、

この魚は喙に一本の鍼がある。故にかかる諸名があるのだ。俗に、(一)姜太公が釣に用ゐた鍼だといふ。これも傅會の説だ。

【集解】時珍曰く、江湖中に生ずる。大いさや形狀はいづれも鱠殘魚と同じだが、ただ喙が尖り、鍼のやうな一本の細い黒骨があるだけの相異だ。東山經に『(二)沢水、北の方湖中に注ぐ。箴魚多し。狀鯈の如く、其の喙鍼の如し』とあるがこの魚だ。



〔鱵魚〕

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【食へば疫にかからぬ】(時珍)

(一)鱊魚 音は聿(エツ)である。(綱目)

和名 めだか
學名 Aplocheilus latipes, Schlegel.
科名 めだか科

【釋名】春魚(俗名) 腊にしたものを鵞毛脡と名ける。時珍曰く、爾雅に『鱊は鯞なり、小魚なり』とあるが、その名稱の意義は詳でない。春とは時期を以

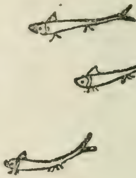
ス。其形ニヨリ鱵魚(シンユー)針魚(シンユー)ト稱サル。支那沿岸ニ普通ナルモノコレト共ニくろめさよりモ現出ス。

(一)姜太公ハ即チ呂望、即チ太公望。

(二)沢水、未考。

(一)木村(重)曰ク、日本ノめだかニ等シ、コレヲこあゆトスルカ其形狀大ニ疑アリ。こあゆ福建省ニ産スト云フ、モシ海産ナレバなめくぢうをハ此ノ條件ニ適

て名けたもの、鯗とは乾した腊に名けたものだ。



〔鱊魚〕

集解 時珍曰く、按ずるに、段公路の北戶錄に『廣の(二)恩州に鵝毛鯗といふものを產する。鹽で貯藏したもので、毛のやうに細くして味が甚だ美なるものだ』とあり、郭義恭の所謂『(三)武陽に一斤に千尾ある針ほどの小魚がある、蜀地方ではそれを醬にする』といつたそのものだ。又、一統志には『廣東の(四)陽江縣に出づ。卽ち鱊魚兒なり』とある。しかし今は(五)興國州の諸處にもあつて、彼の地方では春魚と呼ぶ。春期に岩穴中から水流に隨つて出るもので、形狀は初めて孵化したばかりの魚兒のやうなものだ。土地の者はそれを收取して曝乾し、鯗にして贈物などにするのであるが、薑、醋で味をつけて食ふと蝦米と同樣な味になるといふことだ。或は、これは(六)鱧魚の苗だともいふ。

氣味 【甘し、平にして毒なし】

主治 【中を和し、氣を益し、人をして喜悅せしめる】(時珍)

當ス。今假ニめだかトシテ後攷ヲ俟ツ。

(二)恩州ハ今ノ廣東省恩平縣ノ地ナリ。

(三)武陽、隋ノ郡名、今ノ河北省大名縣ノ地ナリ。漢ノ縣名、今ノ四川省彭山縣ノ地ナリ。後漢ノ國名、今ノ山東省費縣南ニ武陽ノ故城アリ。此ニハ漢ノ武陽縣ナイソカ

(四)陽江縣、今ハ廣東省高雷道ニ屬ス。

(五)興國州ハ草部隰草類紫菀ノ註ヲ見ヨ。

(六)食物本草ニハ鱧ヲ鯉ニ作ル。

(一)金魚（綱目）

和名　きんぎよ
學名　Carrasius auratus, var. (Linn.)
科名　こひ科

集解　時珍曰く、金魚には鯉、鯽、鰍、鰵の數種あるが、鰍、鰵が就中得難く、獨り金鯽だけは久しさに耐へる。前古には罕れに知られたものであつた。ただ博物志に『(二)功婆塞江に出る。腦中に金のあるものだ』とあるが、これもやはり訛傳である。述異記の記載に『晉の桓沖が廬山に遊んだとき、湖中に赤鱗魚のゐるのを見た』とあるがこのものだ。宋時代から始めて飼育するものが出て、今では處處の人家で玩賞用として飼つてゐる。春末に草上に子を生み、好んで自ら呑み啗つて了ふ。やはり化生し易いもので、初に出たときは黑色だが、久しくすると紅に變ずるのである。又、或は白色に變ずるものもあつて、それをば銀魚と名ける。また紅、白、黑、斑の相間るものもあつて、一定しない。その肉味は短くして鞕いものだ。物類相感志には『金魚は橄欖渣、肥皂木を食へば即死する。白楊皮を得れば蝨を生じない』とある。又、丹魚といふものもあるが、この類のものなりや否や審でない。

(一)木村(重)曰ク、古代ヨリ支那人鯽(ふな)ヲ飼育シテ其色形ヲ變ゼシム、卽チ金魚ナリ。金魚ハ支那ガ原產ナリ。

(二)功婆塞江、未詳。

今左に附記して置く。

【附錄】 (一)丹魚　按ずるに、抱朴子に『(四)丹水は京兆上洛縣の(五)冢嶺山に出て(六)汋水に入る。中に丹魚を出す。夏至の十日前の夜、その流を伺つてゐると魚が水側に浮んで出て、必ず赤光があつて火のやうに上を照すものだ。割いて血を足に塗れば水上を渡り得る』とある。

肉　氣味【甘く、鹹し、平にして毒なし】【主治】【久痢】(時珍)

【附方】　新一。【久痢禁口】病勢甚しくして死せんとするには、金絲鯉魚一尾重さ一二斤のものを普通のやうに淨治し、鹽、醬、葱を用ゐ、必ず胡椒末三四錢を入れて煮熟し、患者の前に置いて嗅がす。嗅せんと欲するときは意のままにその湯と共に食ふ。一回十分に飽食すれば病根を除く。屢ゝ治效を擧げた。(楊拱醫方摘要)

(一)木村(重)曰ク、丹魚、和名ひぶな、學名 Carrasit's auratus, Linn.(こひ科)解簡單ニシテ詳ナラズ。淡水ニ産スル特別ノ魚カ、字義ヨリ言ヘバ緋鮒ニ相當ス。今假ニひぶなトシテ後攷ヲ俟ツ。

(四)丹水、卽チ今ノ丹江。鈞水、卽チ今ノ老灌河ト合シテ漢水ニ入ル。

(五)冢嶺山ハ漢ノ京兆上洛縣、卽チ今ノ陝西省商縣ノ西北ニ在リ。

(六)汋水ハ鈞水ノ誤カ。丹水ノ註參照。

鱗の四　無鱗魚二十八種　附錄九種

(一)鱧魚（本經上品）

和名　らいぎよ(雷魚)
學名　Ophicephalus argus, Cantor.
科名　オヒケアフルス(蛇頭魚)科

釋名　蠡魚(本經)　黑鱧(圖經)　玄鱧(埤雅)　烏鱧(綱目)　鮦魚　音は同(トウ)である。(本經)　文魚　時珍曰く、鱧は首に七星があつて夜北斗に朝する。自然の禮があるものだ。故にこれを鱧といふ。又、蛇と氣を通じ、色黑く、北方の魚である。故に玄、黑をつけて呼ぶ諸名があるのだ。俗に火柴頭魚と呼ぶはこの魚である。その小なるものを鮦魚と名ける。蘇頌の圖經に、毛詩の諸註を引證して『鱧、卽ち鯇魚』といつたのは誤である。此には辯正を加へるまでもなく、直ちに削除する。

集解　別錄に曰く、(二)九江の池澤に生ずる。採取に一定の時期はない。弘景曰く、處處にある。これは公蠣蛇の變化したものだといふことだが、しかしまた相

(一)木村(重)曰ク、蛇頭ノ如キ頭ヲ有シ體色灰褐ニ黑色ノ斑紋アリ。支那全國ヲ通ジテ烏魚(ウーユー)黑魚(ヘイユー)ト呼バル。臺灣ニテハ雷魚(ライヒー)ト稱ス。朝鮮ニテハカムルチートト言フ。大サ七寸ニ達ス。近來日本ノ川ニモ移植サル、支那ニ七種アリ。

(二)九江ハ秦ノ郡名今ノ江蘇省淮揚道、安徽省安慶道、及び淮泗道ノ中部、江西省皆ソノ地ニシテ壽春、卽チ今ノ安徽省壽縣ニ治ス。漢モ同ジ、後漢ニハ今ノ安

徽省定遠縣ノ西北六十五支里ノ地ニ移ス。

生のものもある。性至つて死なぬものだから、その點は蛇の性があるやうだ。

時珍曰く、形が長く、體が圓く、頭、尾相等しく、鱗は細くして黑色に斑點の花文(くわもん)があり、頗る蝮蛇に類したもので、舌があり、齒があり、肚があり、背、腹に鬣(ひれ)があつて尾に連り、尾に岐がなく、形狀憎むべく、氣息腥惡なものだ。食品として重ぜられ、南方ではこれを珍味とするものもあるが、北方では尤もこれを絕つ。道家(だうか)ではこれを指して、水厭とし、齋戒の方法の上では忌むものとなつてゐる。



〔鱧魚〕
——烏喙——

肉【氣味】【甘し、寒にして毒なし。瘡あるものは食つてはならぬ。人をして瘢白(はんぱく)ならしめる】(別錄) 源曰く、小毒あり。益なし。食ふべきものでない。宗奭曰く、能く痼疾を發す。療病に用ゐるは、やはりその力の一端を利用するに過ぎない。

【主治】【五痔を療じ、濕痺、顏面浮腫を治し、大水を下す】(本經) 弘景曰く、

小豆と合せて白煮したものは腫滿を療するに甚だ有效だ。【大小便壅塞の氣を下す鱠にして脚氣風氣の人に與へて食はすが良し】（孟詵）【妊娠で水氣あるものに主效がある】（蘇頌）

【附方】舊三。新二。【十種の水氣で死に垂たるもの】重さ一斤の鱧魚の煮汁に冬瓜、葱白を和して鱠にして食ふ（心鏡）【一切の氣を下す】詵曰く、大鱧一尾を肚を開き、胡椒末半兩、大蒜片三顆を入れて縫合し、小豆一升と共に煮熟し、蘿蔔三五顆、葱一握を共に切碎してそれに投じて煮熟し、空腹に飽くまで食ひ、幷に汁を飮む。夜に入つて惡氣を無限に洩すものだ。五日にして更に一回試みる。【腸痔下血】鱧魚を鱠にして蒜虀と共に食ふ。冷物、毒物を忌む（外臺）【一切の風瘡】頑癬、疥癩の年久しく癒えぬものも、二三服に過ぎずして必ず癒える。黑火柴頭魚、即ち烏鱧一箇を腸肚を去つて蒼耳葉を塡滿し、鍋の底に別の蒼耳を置いてその上に左の魚を載せ、少量の水を入れて慢火で煨熟し、皮、骨を去つて淡食する。鹽、醬を入れてはならぬ。甚大なる效果を奏するものだ（醫林集要）【小兒を浴して痘を免れる】大晦日の夕刻、烏魚の大なるもの一尾、小なるもの二三尾を煮た湯で小兒の全

身、七竅すべてを浴す。腥いのを嫌つて清水で洗ひ去つてはならぬ。もしこれを信ぜぬならば、ただ片手、或は片足だけを(三)洗はずに置いて見るがよし。痘が發出した場合にその洗はなかつた部分を見ると、全面に夥く發してゐるものだ。これは異人の傳へた方である。輕輕しく心得てはならない(腸拱醫方摘要)

腸 及び **肝** 【主治】【冷敗瘡中に蟲を生じたるもの】(別錄)【腸を五味で香しく炙き、痔瘻、及び蛀骭瘡に貼る。蟲を盡く引き出すを度とする】(日華)

膽 【氣味】【甘し、平なり】日華曰く、諸魚の膽は苦いものだが、この膽だけは甘くして食へる點が異つてゐる。臘月に取收めて陰乾する。【主治】【喉痺で將に死せんとするには、少量を點入すれば瘥える。病の深きものには、水で調へて灌ぐ】(靈苑方)

(一)鰻 鱺 魚 (別錄中品)

和名 うなぎ
學名 Anguilla japonica, Temm. et Schl.g.
科名 うなぎ科

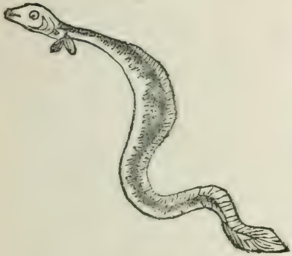
【釋名】 **白鱓**(綱目) **蛇魚**(綱目) 乾けるものを **風鰻** と名ける。時珍曰く、

(三)洗ハ浴ノ誤トセザレバ通ゼズ。

(一)木村(重)曰ク、日本ノうなぎト同種ナリ。廣ク支那ニ分布ナル。鰻鱺魚(マンヤーユー)白鱓(パ

鰻鱺は、舊註には『音は漫黎（マンリ）』としてある。按ずるに、許愼の說文には『鱺は鱧と同じ』とあり、趙辟公の雜錄にも『この魚は雄があつて雌がない。影を以て鱧魚に漫するのだ。するとその子がみな鱧の鬐に附いて生ずる。故にこれを鰻鱺といふ』とあつて、許氏の說と合致する。これは鱧（レイ）と發音するが正しいであらう。蛇といひ、鱓といふは形容の名稱だ。

【集解】頌曰く、所在にある。鱓に似て腹が太く、青黃色だ。これは蛟蜃の屬だといひ、善く江岸を衝き穿つので一般に甚だ畏れられてゐる。



〔鰻　鱺　魚〕
白——　——鱓

詵曰く、（三）欽州の溪潭中に出る一種は、背に五色の文があつて、頭は蝮蛇に似てゐる。藥に入れて最も勝れたものだ。江河中では五色のものは得難い。

時珍曰く、鰻鱺は、その狀態が蛇のやうで、背に肉鬣があつて尾に連り、鱗がなく舌があつて腹が白い。大なるものは長さ數尺ある。脂膏

イジエン）ト俗稱サレ、食用トシテ重要ナリ。支那ニハ外ニ二種記載サルルモ、一般的ナルヲトル。

（三）欽州ハ石部金星石ノ註ヲ見ヨ。

が最も多い。背に黄脈の通つたものは金絲鰻鱺と名ける。この魚は善く深い穴を穿つものだが、蛟、蜃の銜き穿つやうに甚しいものではない。或は鯶も鰻を産むといひ、或は鰻と蛇と通ずるものだともいふ。

〔正誤〕弘景曰く、鰻鱺は能く樹に攀ぢ上るもので、藤花を食ふ。恭曰く、鯢魚は能く樹に上るが、鰻には足がない、樹に上り得るわけがあらうか。謬説だ。

肉〔氣味〕【甘し、平にして毒あり】思邈曰く、大温なり。士良曰く、寒なり。○宗奭曰く、風を動ず。吳瑞曰く、腹下に黒斑のあるものは毒が甚しい。銀杏と食合すれば軟風を患ふ。機曰く、小なるものは食つてもよし。重さ四五斤のもの、及び水を行くに頭を昂げるものは食つてはならぬ。嘗て船夫がこれを食つて七日にして皆死亡したことを實見した。時珍曰く、按ずるに、夷堅續志に『四目のものは人を殺す。背に白點あつて鰓なきものは食つてはならぬ。妊娠中にこれを食へばその胎に疾あらしめる』とある。

〔主治〕【五痔、瘡瘻、諸蟲を殺す】詵曰く、痔瘻はこれで薫ずれば蟲が死

ぬ。諸蟲を殺すには、燒き炙つて末にし、空腹に食ふ。三五回で瘥える【惡瘡、婦人の陰瘡、蟲痒を治し、傳尸疰氣、勞損を治し、腰膝を暖め、陽を起す】（日華）【濕脚氣、腰腎間の濕風痺で常に水で洗ふやうに覺ゆるものを療ず。五味を用ゐて煮て食へば甚だ補益する。諸瘡瘻、癧、(三)腸風を患ふ人は常食するがよし】（孟詵）【小兒の疳勞、及び蟲心痛】（時珍）【婦人の帶下、一切の風瘙で蟲の行くやうに覺ゆるものを療ず　諸種草石の藥毒を壓して害をなす能はざらしめる】（張鼎）

【發　明】　頌曰く、この魚には毒があるけれども、五味を以て羹に煮て食へば能く虛損、及び久病の勞瘵を補す。

時珍曰く、鰻鱺の諸種の疾病に對する治功は、專ら殺蟲、去風にあるだけだ。蛇と類を同うするものだから、主治もそれに近い。稽神錄に『ある時瘵病患者が發生して、傳染死亡者が數人續出したので、同病根絕の目的から、既に感染した者をば悉く棺に入れ、揚子江の流に放棄したことがある。ところが下流の(四)金山にゐた漁夫が漂著した棺を引揚げて、開けて見ると一人の女が入れてあつて、まだ活きてゐたのであつた。そこで漁夫は己が住居の苫屋に昇ぎ込み、食事には鰻鱺を取つて與へ

(三)腸、食物本草ニ瘍ニ作ル。癧瘍ハアセナマヅ。

(四)金山、今ノ江蘇省滬海道ノ金山縣ソノ地ニシテ、清ニハ松江府ニ屬ス。金山城ノ故址アリ、吳越ノ錢王ノ築ク所トイフ。

て置くと、やがて病は癒えて了つた。それが縁で女は漁夫の妻になつた』とある。張鼎は『烟に燒いて蚊を熏ずれば、蚊は化して水となる。氈や屋舍、竹木を熏ずれば蛀蟲が斷える。骨を衣服の箱に置けば諸蠹が斷える』といつてある。これを觀ると、別錄に所謂、能く諸蟲を殺すの說がますます立證されるわけだ。

【附方】舊三。【諸蟲心痛】多く淸水を吐くには、鰻鱺を淡煮して飽食する。三五回で癒える。(外臺)【骨蒸勞瘦】鰻鱺二斤を淨治し、酒二盞で煮熟して鹽、醋を入れて食ふ。(聖惠)【腸風下蟲】同上。

膏【主治】【諸瘻瘡】(陶弘景)【耳中の蟲痛】(蘇恭)【曝乾し、微し炙つて油を取り、白駮風に塗れば即時に色が變り、五七回試みれば癒える】(宗奭)○集驗方に『白駮が頭部、面部に生じて浸淫し、漸次に發展して癬に似た狀態となつた時には、刮つて燥痛せしめ、脂を炙熱して搽る。三回に過ぎずして癒える』とある。

骨及び**頭**【主治】【炙き研つて藥に入るれば、疳痢、腸風、崩中、帶下を治す。灰に燒いて惡瘡に敷く。燒いて痔瘻を熏ずれば諸蟲を殺す】(時珍)

【附方】舊一。【一切の惡瘡】蛇魚骨を炙いて末にし、諸種の膏藥中に入れて貼

り、外部を紙で護る。（經驗）

血　【主治】【瘡疹が眼に入つて翳を生じたるには、少量を點ける】（時珍）

（一）海鰻鱺（日華）

和名　まあなご
學名　Astroconger myriaster, Brevoort.
科名　あなご科

【釋名】**慈鰻鱺**（日華）**狗魚**（日華）

【集解】（一）日華曰く、東海中に生ずる鰻鱺に類して大きい。功用は同樣なものだ。

【氣味主治】鰻鱺に同じ。【皮膚の惡瘡疥、疳䘌、痔瘻を治す】（日華）時珍曰く、按ずるに、李九華が「狗魚は暖なるものだが補せぬ」といつたのはこの物だ。

鱓（音は善（ゼン）である。）魚（別錄上品）

和名　たうなぎ
學名　Monopterus albus(Zuiouw)
科名　たうなぎ科

【釋名】**黃𩵮**　音は旦（タン）である。宗奭曰く、鱓は腹の黃なるものだ。故に

（一）木村（重）曰ク、日本ノまあなごト同種ナリ。支那沿岸ニ多産ス。海鰻鱺（ハイマンリー）ト俗稱ス。コレヲはもトスル人アリ、うなぎトスル人アリ、はもトスレバ齒ヲ謂ハザルガ疑ハシ、今假リニまあなごト定ム。はもハ南部支那ニテハホーザン（字不明）ト稱ス。

一般に黃鱓と呼ぶ。時珍曰く、異苑には、黃鉭と書いてあつて『黃疸なる病名はこの魚から出たものだ』とある。藏器が『鱣魚と書くべきだ』といつたのは誤だ。鱣の字は平聲で、黃魚のことである。

【集解】韓保昇曰く、鱓魚は水岸の泥窟中に生ずる。鰻鱺に似て細く長く、また蛇にも似てはゐるが鱗がない。青、黃の二種ある。


「鱓魚」

時珍曰く、黃質黑章で、體に涎沫多く、大なるは長さ二三尺あり、夏出て冬蟄する。蛇の變じた一種をば蛇鱓と名け、毒があつて人を害する。南方で鱓を販賣する商家では、缸に水を入れて數百尾畜つて置くが、夜間燈火で照して見ると、その蛇の化したものには必ず項下に白點があり、全身を水上に浮べてゐる。そこで直にそれをば取つて棄てる。或は蒜の花瓣をその缸中に投ずると、羣る鱓魚が跳擲して已まない。やはり物の性に相制するところがあるからだ。

藏器曰く、臛にするには(一)重煮にしなければならぬものだが、桑柴をば用ゐられない。やはり蛇の類のものだ。

弘景曰く、鱓なるものは荇菜根の變化したものだといひ、又、死人の髮の變化したものだともいふが、現にその腹中には孕んでゐる子があるのだから、必しも盡くが變化して生ずるものとは限らない。

肉　【氣味】【甘し、大温にして毒なし】思邈曰く、黑いものは有毒だ。弘景曰く、性は熱であつて能く補す。時行病後にこれを食へば(二)復する。宗奭曰く、風氣を動じ、多食すれば人をして霍亂せしめる。曾てある郎官がこれを食つて吐利し、瀕死の重體に陷つた事實を見た。

時珍曰く、按ずるに、延壽書に『多食すれば諸疳を發し、また人の生命を損ずることもある。大なるものは有毒で人を殺す。犬肉、犬血と食ひ合せてはならぬ』とある。

【主治】【中を補し、血を益し、(三)瀋唇を療ず】(別錄)【虛損、婦人産後の惡露淋瀝、血氣不調、羸瘦を補し、血を止め、腹中の冷氣、腸鳴、及び濕痺氣を除く】(藏器)

(一)重煮ハ湯煎ニスルコト。

(二)復トハ俗ニイフ「ぶりかへし」ナリ。

(三)瀋唇ハ口吻瘡、俗ニカラスノキウトト云フモノ。

【善く氣を補す。婦人産後に食ふがよし】(震亨)【五臟を補し、十二の風邪を逐ふ。濕風惡氣の患者は、臛にして空腹に飽食し、暖臥して汗を取る。汗が膠のやうに腰脚中から出るが、その汗の乾くを俟つて五枝湯を暖めて浴し、風を避ける。三五日に一回試るが甚だ妙である】(孟詵)【專ら一切の冷漏、痔瘻、臁瘡に貼つて蟲を引き出す】(時珍)

附方 新二。【臁瘡の蛀爛】黃鱓魚數條を打殺して香油を腹に抹し、それを瘡上に蟠らせて縛り付け。少頃して忍び難く痛を覺えて後に取下して看ると、その腹に針眼が著いてゐるものだ。それはみな蟲である。なほ蟲が取り盡きぬときは更に試み、然る後に人脛骨灰を油で調へて搽る。(奇效)【肉痔出血】鱓魚を煮て食ふ。その性は涼である。(便民食療)

血 尾上から取る。主治 【癬、及び瘻に塗る】(藏器)【口眼喎斜を療ずるには麝香少量と共に、左喎には右に塗り、右喎には左に塗り、正しくなつたとき洗ひ去る。耳痛を治するには數點を耳に滴し入る。鼻衄を治するには數點を鼻に入る。疹後生翳を治するには少量を目に點入する。赤疵を治するには、蒜汁、墨汁と共に

(四)赤遊風ハ丹毒。

(一)木村(重)曰ク、鰌魚ハ日本ノどぢやうト同種ナリ、分布亞細亞ニ亘ル、一般ニ泥鰍(ニーチー)ト

頬に塗る。又、(四)赤遊風に塗る】(時珍)

【發明】時珍曰く、鱓は善く穴を穿ち、足がなくして竄る。蛇と性を同じくするものだ。故に能く經脈に走り、十二の風邪、及び口喎、耳、目、諸竅の病を療ずるのである。風が血脈に中れば口、眼が喎斜するものだ。この血を用ゐてそれを治するはその類に從ふのである。

頭　五日五日に取收める。【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【燒いて服すれば、痢を止め、消渇を治し、冷氣を去り、痞癥の食物不消化を除く】(別錄)【蛇頭、地龍頭と共に灰に燒いて酒で服すれば、小腸癰を治するに有效だ】(集成)【あらゆる蟲が耳に入りたるには、燒き研つて綿で裹んで塞ぐ。立ろに出る】(時珍)

皮　【主治】【婦人の乳核硬疼には、灰に燒いて空心に溫酒で服す】(聖惠)

(一)鰌魚　音は酋(イウ)である。(綱目)

和名　どぢやう
學名　Misgurnus anguillicaudatus, (Cantor.)
科名　どぢやう科

【釋名】**泥鰍**(俗名)　**鰼魚**(爾雅)　時珍曰く、按ずるに、陸佃は『鰌の性は

稱セラル。中部支那ニハ他ニ三種ヲ出スモ一般的ノモノヲ取ル。

酋健なもので、動くことを好み、善く優れるからかく名けたのだ。小なるものを鰌魚と名ける』といつた。孫炎は『鰌はその泥に尋習するの意味だ』といつてある。

|集解| 時珍曰く、海鰌は海中に生じて極めて大きく、江鰌は江中に生じて長さ七八寸、泥鰌は湖、池に生じて最も小さく、長さ三四寸のもので、泥中に沈んでゐる。形狀は鱓に似てゐるが、小さくして首が鋭り、肉、身は青黑色で鱗がなく、涎があつて全身に纒はり、滑かにして速いために握り難い。他の魚と牝牡の交をなすものだ。故に莊子に『鰌は魚と游ぶ』といつてある。沙中に生ずるものには微かに文采がある。閩、廣地方では、脊骨を剗き去つて臛にして食ふが、甚だ美味だ。相感志には『燈心で鰌を煮るが甚だ妙だ』とある。



〔魚　鰌〕

|氣　味| 【甘し、平にして毒なし】弘景曰く、白犬血と食合はせてはならぬ。あるひは涼なりといふ。|主　治| 【中を暖め、氣を益し、酒を醒し、消渇を解す】（時珍）【米粉と共に羹に煮て食へば、中を調へ、痔を收める】（吳球）

附方　新五。【消渇飲水】泥鰌魚十尾を陰乾し、頭、尾を去つて灰に燒き、乾荷葉と等分を末にし、一日三回、二錢づつを新汲水で調へて服す。これを沃焦散と名ける。（普濟方）【喉中に物の哽へたとき】生鰍魚の頭を絲で縛り、尾の先を喉中に入れて牽き出す。（普濟方）【牙に揩つて髭を黑くする法】泥鰍魚、槐蕊、狼把草各一兩を搗いて團にし、瓦罐に入れて鹽泥で固濟し、初は文火、後には武火で炭十斤で燒いて取出し、研つて日每に用ゐる。一个月以內で白いものが皆黑くなる。（普濟）【陽事不起】泥鰌を煮て食ふ。（集簡方）【牛、犬の羸瘦せるもの】鰌魚一二尾を口、鼻から送入すれば立ろに肥える。（陳藏器）

(一)鱣　魚

音は邅（セン）である。（拾遺）

和名　てうざめ
學名　Acipenser sinensis, Gray.
科名　てうざめ科

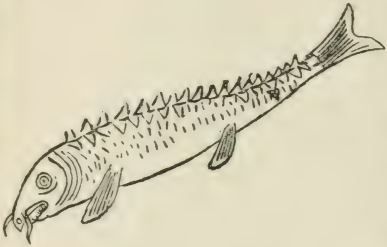
【校正】時珍曰く、食療本草には黃魚として重出してあるが、此には一條に併記した。

【釋名】黃魚（食療）　蠟魚（御覽）　玉版魚　時珍曰く、鱣とは、肥えてゐるた

(一)木村(重)曰ク、鱣魚ハ支那本土ニノミ産スル魚ナリ。揚子江、黃河最モ多シ、大サ四尺ニ至ラズ、鱘魚(ズンユー)黃鱘(ワンスン)鰉(ワヲン)ト稱セラル、滿洲西伯利亞ニハコレト同屬ノモノヲ産スルモ、支那本土ニ分

布セズ。
(二)遁如ハ迍邅ト同ジ形容詞ニシテ『ぬたくり、進まぬ』狀態ヲイフ。
(三)龍門ハ龍類龍ノ註ヲ見ヨ。
(四)江淮ハ草部山草類人參ノ註ヲ見ヨ。
(五)遼海トハノ今渤海ヲイフ。

めに善く游げぬその(二)遁如たる有様を形容した名稱だ。黄といひ、蠟といふはその脂色の形容だ。玉版といふはその肉の色の形容である。異物志には含光と名けてある。それはその脂肉が夜中光を發することを表したものだ。飲膳正要には『遼地方では阿八兒忽魚と名ける』とある。



黄魚〔鱣魚〕

〔集解〕藏器曰く、鱣は長さ二三丈、純灰色で體に三行の甲がある。(三)龍門を逆上ると能く化して龍となる。

時珍曰く、鱣は(四)江淮、黄河、(五)遼海の深水中に出る無鱗の大魚であつて、その形狀は鱏のやう、その色は灰白色、その背には三行の骨甲があり、その鼻は長くして鬚あり、その口は頷下に近く、その尾には岐がある。この魚の出るのは三月頃で、水に逆つて上る。平常は磯石湍流の間に棲み、物を食ふにはただ口を張つてその物に接け、その物の自ら入

るに任せてゐる。物をば食ふが飲まない。蟹魚が多く誤つてその口中に入るものだ。昔の人が『鱣、鮪は岫居す』といひ、世俗に『鱘鱑魚は先方から自から入つて來るものを食ふ』といつたのはこのことだ。その行動するには、水底に在つて地を去る數寸のところを動いてゐる。漁夫は小さい釣を千本近くも沈めてこれを取るのだが、そのうちの一本が身に著くと、痛みを避けやうとして動き廻り、ためにその他の多くの釣が悉く著いて了ふ。すると船をばそのまま數日間遊ばせて置いて、魚が疲れ果てるを待つて捕へるのである。その鱣魚は、小さいものも百斤近くあり、大なるものは長さ二三丈、重さ一二千斤に達するものもある。その氣は甚だ腥く、その脂と肉とは層層相間り、肉の色は白く、脂の色は黄で蠟のやうだ。その脊骨、及び鼻、幷に鬐と鰓とはみな脆く軟かで食し得る。その肚、及び子は鹽で貯藏するも佳し。その鰾はやはり膠の材料になる。その肉、骨は煮、炙きまた鮓にしていづれも美味だ。翰墨大全に『江淮地方では鱘鱑魚を酢にして片醤と呼び、また玉版鮓とも呼ぶ』とある。

肉　【氣味】【甘し、平にして小毒あり】詵曰く、氣を發し、風を動じ、瘡疥

を發す。蕎麥と和して食へば失音になる。寗源曰く、味は極めて肥美で、楚地方で就中これを珍重するが、多食すれば熱痰を生ずる。鮓にするが最も奇絶だが、やはり人體に益はない。時珍曰く、荊芥の藥を服したときは食つてはならぬ。

［主　治］【五臟を利し、人を肥美ならしめる。多食すれば(六)尅化し難い】(時珍)

肝［氣　味］【毒なし】［主　治］【惡血、疥癬。鹽を用ゐて炙いて食つてはならぬ】(藏器)

(一)鱘魚（拾遺）

和名　へらてうざめ
學名　Psephurus gladius, (Martens)
科名　へらてうざめ科

［釋　名］**鱏魚**　尋(ジン)淫(イン)の二種の發音がある。**鮪魚**　音は洧(ヰ)である。**王鮪**（爾雅）**碧魚**　時珍曰く、この魚は長く延びたものだ。故にその文字が尋に從ひ覃に從ふのであつて、いづれも延長の意味である。月令に『季春、天子鮪を寢廟に薦む』とあるところから、王鮪なる名稱が生じたのだ。郭璞は『大なるを王鮪と名け、小なるを叔鮪と名け、更に小なるを鮥子と名ける。鮥の音は洛(ラク)』

(六)尅化ハ消化ニ同ジ。

(一)木村(重)曰ク、鱘魚ハ揚子江、黃河ノミニ產スル魚ニシテ、上顎伸ビテ體長ノ三分ノ一ヲ占ム。鱗口ハ下方ニアリ、鱗ナク背部ハ黑碧色、腹ハ白シ、白鱘(パイスン)ト稱セラルルモ四川省ニテハ象魚(シャンユー)ト稱ス。大サ五尺ニ達ス。

此科ハ世界ニ於テ北米ミスシッピー河ト揚子江、黃河ニノミ産スル古代型ノ珍魚ナリ。一屬一種。

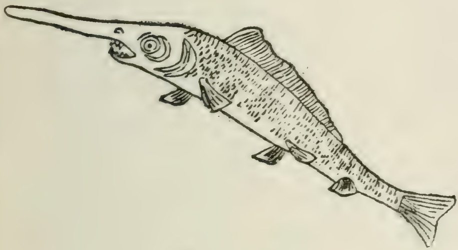
(二)周洛トハ宗周、洛陽ノ意ナラン。乃チ今ノ河南洛陽ノ地ナリ。

(三)登萊ハ今ノ山東省登州、萊州地方チイフ。

(四)樂浪ハ漢ノ郡名今ノ朝鮮ノ地ナリ。

(五)岫居ハ穴ニ住ムコト。

といつてある。李奇の漢書注には『(二)周洛では鮪といひ、蜀では䱜䲉といふ。䱜䲉の音は亘懵（コウボウ）』とある。毛詩疏義には『遼東、(三)登萊地方では尉魚（ゐぎょ）と呼んでゐる。(四)樂浪の尉の仲明といふ人は海に溺れて死んだ。それが化してこの魚となつたのだといふことだ』とある。蓋し尉はやはり鮪の字の訛つたものだらう。飲膳正要には『今遼地方では乞里麻（きりま）魚と呼んでゐる』とある。



〔鱘　魚〕

集解　藏器曰く、鱘は江中に生ずる。背が龍のやうで、長さ一二丈ある。

時珍曰く、江淮、黄河、遼海の水の深い處にゐる。やはり鱣の屬で(五)岫居（しうきょ）するものだ。長いものは一丈餘ある。春になると始めて浮び揚り、日を見ると目眩する。その形狀は鱣のやうで背上に甲がなく、その色は靑碧で腹下が白

く、その鼻は長くして身と等しく、口は頷下に在り、物を食ふが飲まない。頬下に梅花のやうな形の青斑紋があり、尾は岐になつて柄のやうだ。肉は色が純白で味は鱣に亞ぐ。鬐、骨は脆くない。羅願は『鱘は狀（六）鬵鼎の如く、上が大きく下が小さく、頭大にして口哆く、銕兜鍪に似たものだ。その鰾はやはり膠になること（七）鮭、鮧のやうだ。やはり能く龍と化す』といつてある。

肉 【氣味】【甘し、平にして毒なし】詵曰く、毒あり。その味は美味ではあるが、諸藥毒を發し、風氣を動じ、一切瘡疥を發する。久しく食すれば、人をして心痛、腰痛せしめる。丹石を服する人はこれを忌む。乾筍と共に食へば癱瘓風を發すから食つてはならぬ。小兒が食へば咳嗽、及び癥瘕となる。鮓にしたものは珍味ではあるが、やはり人體に益はない。

【主治】【虛を補し、氣を益し、人をして肥健ならしめる】（藏器）【煮汁を飲めば血淋を治す】（孟詵）

鼻肉 脯にしたものを鹿頭と名け、また鹿肉とも名ける。その美味を形容したものだ。【主治】【虛を補し、氣を下す】（藏器）

（六）鬵、音尋、鼎大上小下卽甑也。
（七）一說ニ鱘ハ鱁ノ誤。

子 形は小豆ほどのものだ。 主治 【これを食へば肥美であつて、腹内の小蟲を殺す】(藏器)

(一)牛魚(拾遺)

和名 さんのいを(にんぎよ)
學名 Halicore dugong (Erxleben)
科名 じゆごん(儒艮)科

集解 藏器曰く、東海に生ずる。その頭は牛に似たものだ。

時珍曰く、按ずるに、一統志に『牛魚は(二)女眞の(三)混同江に產する。大なるものは長さ一丈餘、重さ三百斤あり、鱗、骨はなく、肉と脂とが相間(あひまじは)つてゐる。食へば味(四)長し』とある。又、異物志には『南海に牛魚、一名引魚といふがある。重さ三四百斤、形狀は鱧(れい)のやうで鱗、骨がなく、背に斑文があり、腹下が青色だ。海潮を知るもので、肉は味頗る長し』とある。この二說に據つて觀れば、これはやはり鱏(じん)の屬(たぐひ)だ。鱏の聲を引くときは響がやはり相近い。

肉 【毒なし】 主治 【六畜の疫疾には、乾脯にしたものを末にし、水で和して鼻から灌ぐ。直ちに黃涕を出すものだ。また病牛の處に置いて氣をして相熏ぜ

(一)木村(重)曰ク、牛魚ハ世界ノ珍獸海產ニシテ大サ十尺以上ニ達ス、印度、南太平洋、琉球近海ニ產ス、帶白青色、人魚コレナリ、無鱗哺乳動物ナリ、引魚(エンユー)ハ人魚ト音ヤヤ等シ、今カリニ人魚ヲ取ル。

(二)女眞ハ今ノ滿洲ノ地ナリ。

(三)混同江、松花、黑龍ノ兩江吉林省同江縣ニ入ツテ合流シ混同江ト稱ス。又、松花江ヲ混同江ト稱ス。

(四)長ハ餘味アルコト。

しむるもよし】（藏器）

(一)鮠魚 音は桅（クワイ）である。（拾遺）

和名　しろぎぎ
學名　Leiocassis dumerili, Bleeker.
科名　ぎぎ科

【釋名】 **鮰魚** 音は回（クワイ）である。**鱯魚** 化（クワ）獲（クワク）の二種の發音がある。**鰈魚** 化（クワ）を上聲に發音する。**鱝魚** 音は癩（ライ）である。時珍曰く、北方地方では鱯（くわく）と呼び、南方地方では鮠（くわい）と呼ぶ。いづれも鮰（くわい）と發音が相近い。近來は鮰魚と稱して、鱯、鮠の稱呼はあまり知られぬやうになつた。鰈（くわ）といふはまた鱯の發音の轉訛である。(二)秦地方では、これは癩を發するといふところから鱝魚と呼んでゐる。その他は鮎魚（ねんぎよ）の條を見よ。



〔鮠魚〕
——鮰魚——

【集解】 時珍曰く、鮠（くわい）は江淮の間に生ずる無鱗魚である。やはり鱘の屬だ。頭、尾、身、

(一)木村(重)曰ク、日本ノぎぎニ似テ大ナル種、背鰭及胸鰭ニ大ナル棘アリ、背隆起シテ頭部固シ、背部灰青色、腹部淡紅色ヲ帶ブ、鮠魚(ウイユー)鮰魚(ウイユー)鮠魚(ウイユー)ト一般ニ稱セラル。此ノ屬ハ本土ニ九種ヲ產ス、滿洲ニモ棲ムモ日本ニ棲マズ、淡水魚ナリ、大ナルハ二尺ニ達ス。

(二)秦トハ陝西省地方ヲイフ。

鬐ともに鱘の狀態に似てゐるが、ただ鼻が短いだけであつて、口もやはり頷下に在る。骨は柔脆でない。腹は鮎魚に似て背に肉鬐がある。郭璞が『鱯魚は鮎に似て大きく、色白し』といつたのはこの物だ。

正誤　藏器曰く、鮠は海中に生ずる。大いさ石首ほどで、腥くない。鱠にすれば雪のやうだ。隋朝の時、(二)呉都から鮠魚鱠を進獻したことがある、よく晴れた日光に照して曝乾し、瓶に盛つて貯へ、調理せんとするとき、布で裹んで水に浸して用ゐるのであるが、生きたものから作つたのと少しも異らなかつたといふ。

時珍曰く、藏器のいふ話は杜寶の拾遺錄に出てゐるが、その說は『隋の大業六年、呉都から海鮸乾鱠を獻じた。その法は、五六月に取つた四五尺の大鮸の、鱗が細かく、紫で細骨がなく、腥くないものの肉を取つて切り、晒して極度に乾し、新瓶に盛つて泥で封じ固めて貯へる。調理せんとするとき、布で裹んで水に浸し、少頃して水を去ると皎白にして新らしいもののやうになる』といふのである。時珍按ずるに、これは海鮸、卽ち石首の大なるもののことだ。鱗があつて腥くないものである。江、河にゐる鮠魚ならば鱗がなくて極めて腥いものだ。陳氏は蓋し、鮸と鮠の

(二) 呉都、江蘇省呉縣ノ地ヲイフ。

二字がよく似てゐるところから、うかとかやうな謬誤に陷つたものと見える。ここに正して置く。

肉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】頌曰く、能く癇疾を動ずる。野猪、野雞の肉と食合はせてはならぬ。癩を生ずるものだ。

〔主治〕【胃を開き、膀胱の水を下す】（藏器）

(一)鮧魚 音は夷（イ）である。（別錄上品）

和名 なまず
學名 Parasilurus asotus (L.)
科名 なまず科

〔釋名〕 **鯷魚** 音は題（テイ）である。**鰋魚** 音は偃（エン）である。**鮎魚** 時珍曰く、この魚は額が平夷で低く偃し、その涎が粘滑なものだ。鮧は夷、鰋は偃、鮎は粘である。古には鰋といひ、今は鮎といふ。北方では鰋といひ、南方では鮎といふ。

〔集解〕 弘景曰く、鯷とは鮎のことだ。又、鱯といふ鯷に似て大きいものがある。鮠は鯷に似て色が黄だ。人魚は鮎に似て四足がある。

(一) 木村(重)曰ク、日本ノなまづト同種ナリ、大ナルハ五尺ニ達ス（揚子江）支那、滿洲、日本、西伯利亞ニ分布スル淡水魚、一般ニ鮎（ネンユー）ト稱セラル、一屬一種。

保昇曰く、口と腹と共に大なるものを鱯と名け、背が青く口の小なるものを鮎と名け、口が小さく、背が黃で腹の白いものを鮠と名ける。

時珍曰く。二說倶に周到な說明といひ難い。鮎といふは無鱗の魚であつて、首大きく、額が偃し、口大きく、腹太く、身は鮠のやう、尾は鱧のやう、齒があり、


〔鮧魚〕
——鮎魚・鱯——

胃があり、鬚があり、流水に生ずるものは色が青白く、止水に生ずるものは色が青黃である。大なるものはやはり三四十斤に達するものがあるが、倶に大口、大腹であつて、いづれも口の小なるものはない。鱯といふは今の鮰魚のことで、鮎に似てゐるが口が頷下にあり、尾に岐がある。南方ではその地方音で鮠と訛つてゐるが、ここに釐整して置く。

凡そ鮎、鮠を食ふには、先づ翅の下を割つて懸けて置く。それで涎が自ら流れ盡きて粘滑でなくなるものだ。

肉

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、鱗がない。有毒だ。多く食つ

てはならぬ。頌曰く、寒にして毒あり。佳品ではない。目赤く、鬚赤く、腮のないものはいづれも人を殺す。牛肝と食合せてはならぬ。風噎を患ふものだ。涎を野猪肉と食合せてはならぬ。吐瀉を發すものだ。弘景曰く、鹿肉と食合せてはならぬ。筋、甲を縮ましめるものだ。時珍曰く、荊芥と反する。

【主治】【百病】(別錄)【臛にすれば人を補す】(弘景)【水腫を療じ、小便を利す】(蘇恭)【口、眼の喎斜を治するに、活きた鮎の尾尖を切り、(二)朝吻に之を貼れば直ちに正しくなる。又、五痔下血、肛痛には、葱と共に煮て食ふ】(時珍)

【附方】新一。【身體、面部の白駮】鮎魚半斤のもの一尾を腸を去り、粳米と鹽、椒で普通のやうに鮓に作り、荷葉で三包にして縛り、更に荷葉で二重に包んで置いて臭爛させ、先づ布で患部を拭つて赤くしてから、その鮓を炙いて包んで熱に乘じて熨し、汗を出してから綿衣で患部を包んで風に當らぬやうにする。瘥えるを度とする。(總錄)

涎【主治】【(三)三消渇疾には、黃連末を和して丸にし、一日三回、五七丸づつを烏梅湯で服すれば效がある】(蘇頌)

(二)朝ハ午前ノコトカ。

(三)三消渇疾トハ上消、中消、腎消ノ三病チ云フ。

目

〔主治〕【刺傷が水に當つて痛むには、灰に燒いて塗る】（思邈）

肝

〔主治〕【骨鯁】（時珍）

〔附方〕新一、【骨鯁の喉に在るもの】栗子肉上の皮半兩を研末し、乳香、鮎魚肝各一分と共に搗いて梧子大の丸にし、綿で一丸を裹み、呑み下して釣り出す。（總錄）

(一)鯑魚 音は啼（テイ）である。（綱目）

和名　とびはぜ
學名　Periophthalmus cantonensis, Osbeck.
科名　とびはぜ科

〔校正〕時珍曰く、舊註には鯢魚の條中に記載してあるが、本書では分離して記載した。

〔釋名〕人魚（弘景）孩兒魚　時珍曰く、鯑はその聲が孩兒のやうに聞えるので右の諸名がある。鯷とし、鰊とするはいづれも正しくない。

〔集解〕弘景曰く、人魚は荊州の(二)臨沮、(三)青溪に多くゐる。鯷に似て四足があり、聲が小兒のやうだ。その膏は燃しても消耗しない。秦の始皇が(四)驪山の塚中で用ゐた人膏といふはこの物だ。

(一)木村(重)曰ク、體黑色ヲ帶ビタル小魚ヨク飛ビテ草上ニ至ル、眼ハ頭上ニアリテヤヤ突出ス、長サ三寸許ノ淡水魚、南部支那ニ產ス、音ヲ出ス、鰭ヲ翅又ハ足ノ如ク擴ゲテ靜止ス。集解ニヨレバぎばち科ノモノニ類スルモ今假ニとびはぜトシテ後攷ヲ俟ツ。
(二)臨沮ハ漢ニ縣ヲ置ク。今ノ湖北省當陽縣ノ西北ニ故城在リ。
(三)青溪、江蘇省江

寧縣ノ東北ニ青溪水アリ。然レドモ此ニハコノ水名ヲ指スカ或ハ臨沮ニ青溪ナル水名アリシヤ明ナラズ。

(四)驪山ハ水部溫湯ノ註ヲ見ヨ。

(五)決水、本書ニ『又東北二百里。曰龍侯之山。無草木。多金玉。決。決之水出焉。而東流注于河。其中多人魚。云云』トアリ。

(六)休水、中次七經ニ出ズ。畢氏ノ考證ニ據レバ今ノ河南偃師縣ノ東南界ニ在リトイフ。

(七)蟄蛙、山海經ニハ盩蜼トアリ。

宗奭曰く、鯑魚は、形が微に獺に似て四足があり、腹は重く嚢のやうに墜り、身は微紫色で鱗がない。鮎、鮠と相類するものだ。嘗て剖開して見たところが、中に小蟹、小魚、小石が數箇あつた。



〔鯑魚〕

——孩兒魚・人魚——

時珍曰く、孩兒魚といふものに二種ある。江湖中に生じて形も色も皆鮎、鮠の如く、腹下の翅の形が足に似て、その顋、頬が軋軋として小兒の啼聲のやうに聞えるものは卽ち鯑魚である。また一種の溪澗中に生ずるもので、形と聲は同じだが、ただ能く樹に上るものならば鯢魚である。北山經に『(五)決水、人魚多し。狀鯷の如くにして四足、音小兒の如し。これを食へば瘕疾なし』とあり、又『(六)休水、北方洛に注ぐ、中に鯑魚多し、狀(七)蟄蛙の如くにして長く、距足白くして對す。これを食へば蠱疾なし、以て兵を禦ぐべし』とあるが、この二說を考ふるに、前者は陶弘景の說と合致し、後者は寇宗奭の說と合致する。蓋し同一物だ。現に漁夫は、これが網に掛かると不漁だとして、驚き怖れて棄てて了ふ。蓋しかやうに食へるもの

だといふことをば知らぬのだ。徐鉉の稽神錄には「謝仲玉なる者が、婦人が水中に出沒して腰已下が皆魚であつたのを見たといふ。乃ち人魚だ」とあり、又、徂異記には『査道が朝命で(八)高麗に派遣されたとき、海沙中に肘の後方に紅鬣のある一婦人のゐるのを見た。問ふて見ると人魚だといふことであつた』とある。この二者は名は同じだが物は異ふ。鮷や鯢のことではない。

【氣味】【甘し、毒あり】【主治】【これを食へば瘕疾を療ず】(弘景)【蠱疾を無くする】(時珍)

(一)鯢魚　音は倪(ゲイ)である。(拾遺)

和名　さんせううを
學名　Megalobatrachus sligo, Boulen.
科名　さんせううを科

【釋名】人魚(山海經)　魶魚　音は納(ドフ)である。　鰨魚　音は塔(タフ)である。大なるものを鰕と名ける。音は霞(カ)である、時珍曰く、鯢とは聲が小兒のやうだから名けたもので、即ち鮷魚の能く樹に上るもののことである。俗に『鮎魚は竿に上る』といふはこの物のことだ。海中の鯨と名は同じだが物は異ふ。蜀地

(八)高麗ハ土部禁ノ註ヲ見ヨ。

(一)木村(重)曰ク、日本ノさんせううなト同形ナリ。大ナルハ五尺ニ達ス。廣東省ニ最多ケレドモ揚子江南方ノ諸省ニモ豐富ナリ。二屬二種知ラル。納魚(ナイユー)又ハワーワーユー(文字不詳小兒魚ノ意)ト言ハル。

(三)秦ハ陝西地方。

(一)雍州ハ水部廿籍ノ註ヲ見ヨ。(四)峡中ハ四川省巫山以西ノ地。

方では魶と名け、(三)秦地方では鰨と名ける。爾雅には『(一)大なる者を鰕といふ』とあり、異物志には『魚の形ではあるが足で行くこと鰕のやうだ。故に鰕と名ける』とある。陳藏器がこれを鱯魚としたのは考察の不十分であつた。又『一名王鮪』といつたのも誤である。王鮪とは鱘魚のことだ。

集解　藏器曰く、鯢は山溪中に生ずる。鮎に似て四足あり、尾長く、能く樹に上る。大旱のとき、水を含んで山に上り、草葉に身を覆ひ隠して口を張り、鳥が來てその水を飲むとき吸ひ込んで食つて了ふ。聲が小兒の啼くやうだ。

時珍曰く、按ずるに、郭璞は『鯢魚は鮎に似て四足あり、前脚は猴に、後脚は狗に似たもので、聲は小兒のやうだ。大なるものは八九尺ある』といひ、山海經には『(二)決水、人魚あり。狀鯑魚の如し。これを食へば瘕疾を已む』とあり、蜀志には『(一)雍州の西山の峽谷に魶魚が出る。鮎に似て足があり、能く木に攀ぢ上る。聲は嬰兒のやうだ。食へるものだ』とあり、酉陽雜俎には『(四)峽中の人は鯢魚を食ふ。樹に縛りつけて鞭ち、構汁のやうな白汁が出てから始めて料理して食ふものだ。さうせねば毒がある』とある。

黃顙魚(一)(食療)

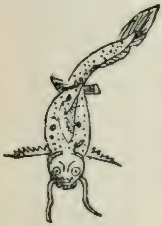
和名　ぎばち
學名　Pelteobagrus fulvidraco, Richardson.
科名　ぎばち科

【氣味】【甘し、毒あり】【主治】【これを食へば瘡疥を已む】(山海經)

【釋名】黃鱨魚(古名)　黃頰魚(詩註)　鉠䰲　音は央軋(アウアツ)である。黃䰲

時珍曰く　顙、頰は形を以てし、鱨とは味を以てし、鉠䰲とは聲を以て名けたものだが、今世人は一字づつ分けて黃鉠、黃䰲と呼んでゐる。陸璣が黃楊と書いたのは謬だ。

【集解】時珍曰く、黃顙は無鱗魚であつて、身、尾倶に小鮎に似て、腹下が黃で背上が青黃だ。腮下に二箇の橫骨があり、兩鬚があり、胃がある。羣り游いで軋軋と聲を出す。性容易に死なぬものだ。陸璣が「魚身にして鱗なく、頰骨が正黃色のものだ。魚にして力あるもので、能く飛躍する」といつたそのものだ。陸佃は『その膽は、



[黃顙魚]
—黃䰲—

(一)木村(重)曰ク、日本ニ產スルぎばち(又ハぎぎ)ト同型ナリ、廣ク支那全土ニ分佈ス。黃鮎子(ホワンアンツー)昂公(アンコン)ノ名ニヨリテ一般ニ知ラル。

春、夏は上に近く、秋、冬は下に近い〔一〕といつたが、やはり一種の特異な點だ。

【氣味】【甘し、平にして微毒あり】詵曰く、無鱗の魚である。人體に益なし。瘡疥を發する。時珍曰く、荊芥と反す。人體に害がある。

【主治】【肉は至つて能く酒を醒す】(弘景)【風を祛る】(吳瑞)【煮て食へば、水腫を消し、小便を利す。燒灰は、瘰癧の久しく潰れて收斂せぬもの、及び諸惡瘡を治す】(時珍)

【附方】新三。【水氣浮腫】黄顙三尾、綠豆一合、大蒜三瓣を水で煮爛し、魚を去つて豆を食ひ、その汁で商陸末一錢を調へて服す。その水は化して清氣となつて消する。〔二〕詩に『〔三〕一頭の黄顙〔四〕八鬚の魚、綠豆を共に煎ず一合餘。白煮し羹にして頓服と成す。〔五〕管教水腫自ら消除す』とある。(集要)【瘰癧の潰壞】黄顙魚を破開して蓖麻子二十粒を入れ、括り付けて廁坑中に置き、冬は三日、立春後は一日、夏は半日にして取出して洗淨し、黄泥で固濟して煨いて性を存し、研つて香油で調へて傅ける。【臁瘡の浸淫】方は上に同じ。(いづれも普濟)

涎 翅下から取る。【主治】【消渴】(吳瑞)

〔二〕詩ハ訣ノ誤。
〔三〕一ハ當ニ三ニ作ルベシ。
〔四〕八ハ兩ノ誤。
〔五〕管ハ却ノ誤。

【附　方】新一。【生津丸】消渴飮水の度なきものを治す。黃顙魚涎で靑蛤粉、滑石末等分を和して梧子大の丸にし、三十丸づつを粟米湯で服す。

頰骨【主　治】【喉痺腫痛には、燒き硏つて三錢を茶で服す】（時珍）いづれも記載は普濟にある。

河　豚（一）（宋開寶）

和名　めふぐ
學名　Tetrodon ocellatus, Osbeck.
科名　ふぐ科

【校　正】食療の鯸鮧、拾遺の䲅魚を併せ入る。

【釋　名】**鯸鮧**　一に鯸鮐に作る。**鰗鮧**（日華）**䲅魚**　一に鮭に作る。**嗔魚**（拾遺）**吹肚魚**（俗）**氣包魚**　時珍曰く、豚とはその味の美あるを言つたもの、侯夷とはその形狀の醜きを言ひ表したもの、䲅とはその體の圓いことの意味、吹肚、氣包はその嗔りふくらんだ有樣の形容である。北山經には𩶱魚と名けてある。𩶱の音は沛（ハイ）である。

【集　解】志曰く、河豚は江、淮、河、海、いづれにもゐる。

（一）木村重曰ク、日本ニ產スルふぐト同種ナリ。支那沿海ニ分布ス、殊ニ揚子江ニ於テハ漢口マデ上溯シテ生活ス。大サ四寸許。

藏器曰く、腹が白くして背に印で捺したやうな赤道があり、口は能く開閉し、物が觸れると嗔怒して腹が脹れ、氣毬がふくれたやうに浮き上る。一般にこれを取るには物で搔き廻して挑弄して取る。

時珍曰く、今は呉越に最も多い。形狀は蝌斗のやうで、大なるものは一尺餘あり、背は色が青白で黄縷がある。また鱗もなく、腮もなく、膽もなく、腹下が白いけれども光らない。大抵三尾づつが一組になつてゐるものだ。彼の地では春期に甚だこれを珍重し、就中その腹の肥つたものを珍重して西施乳と呼んでゐる。嚴有翼の藝苑雌黄に『河豚は水族の奇味である。世間には人を殺すものと傳へられてゐるが、余が(二)丹陽、(三)宣城の知事に在職中、その地の人民が各斤にそれを食つてゐるのを見た。但しその調理には、菘菜、蔞蒿、荻芽の三物を用ゐて煮るのであるが、一向にそれを食つて死んだといふものはなかつた。南方の地では、鱗がなく腮がなく、膽がなく、(四)聲があつて目の能く(五)瞚するものは皆有毒だといひ、河豚にはそれ等の各條件を備へてゐるので一般に畏れられるのだが、しかしこれには二種ある



河豚

(二)丹陽ハ草部芳草類積雪草ノ註ヲ見ヨ。

(三)宣城ハ草部山草類黄連ノ註ヲ見ヨ。

(四)聲字ハ食物本草、本草洞共ニ睦ニ作ル。

(五)瞚ハ開合スルコトヲ云フ。

ので、その色が炎黒で文點のあるものは斑魚と名け、毒が最も甚しいのである。或は、三月後になれば斑魚といひ、食はれなくなるといふことだ』とある。又按ずるに、雷公炮炙論には『鮭魚を樹に挿せば立ろに乾枯する。狗膽を塗ればまた繁茂する』とあり、陶覽は『河豚魚は小さいものだが、獺、及び大魚もこれを敢て啖はない。して見るとこれはただ人に毒なだけのものではなく、又、よく一般の物を毒するものらしい』といひ、王充は論衡に『あらゆる物のうち、太陽の火氣を含んで生ずるものはみな有毒だ。魚では鮭と鯵、鮍とである。故に鮭肝は人を殺し、鯵、鮍は人を螫すのである』といつた。

【氣味】【甘し、温にして毒あり】宗奭曰く、河豚には大毒がある。而るに毒なしといふは何事であらうか。味は珍美ではあるが、修治の方法を失つてこれを食へば人を殺す。生命を大切に思ふものは遠ざけるがよい。

藏器曰く、海中のものには大毒あり、江中のものはそれに亞ぐ。これを煮る際には直接に鍋に近けてはならない。物を以て懸けて置かねばならぬものだ。

時珍曰く、これを煮る場合には中に煤炱の落ちるを忌む。荊芥、菊花、桔梗、甘草、

（六）江陵縣、今ハ江蘇省蘇常道ニ屬ス。

附子、烏頭と相反し、荻筍、蔞蒿、禿菜と適合し、橄欖、甘蔗、蘆根、糞汁を畏れる。按ずるに、陶九成の輟耕錄には『凡そ河豚を食つたときは、その一日中湯藥を服してはならない。荊芥を犯すことを恐れるのである。この二物は大いに相反するものだ。また烏頭、附子の屬を惡む。余は（六）江陵にゐた時、ある儒者がそのために生命を喪つたのを親しく實見した。河豚の子は必ず食つてはならぬ。嘗て水に一夜浸して置いたところ、大いさ芡實ほどになつた』言ひ傳ひに、その毒に中つたときは、至寶丹、或は橄欖、及び龍腦を水に浸して用ゐれば、いづれもその毒を解するものだといふが、またある方法がある。それはただ槐花を微し炒り、乾臙脂と等分を共に擣いて粉にし、水で調へて灌ぐのであつて、大いに妙である』とある。又按ずるに、物類相感志には『凡そ河豚を煮るには、荊芥と共に煮て五七沸して水を換へる。かくすれば毒がなくなる』とある。これは二說相反してゐるやうに見えるが、實は河豚の毒は荊芥に入るから毒がなくなるといふのではあるまいか。兎もあれ、陶九成の說に從ふ方が危險でないやうだ。

【主治】【虛を補し、濕氣を去り、腰脚を理し、痔疾を去り、蟲を殺す】（開寶）

【硇砂を伏す】(土宿本草)

肝 及び **子** 〔氣　味〕【大毒あり】藏器曰く、口に入れば舌を爛らし、腹に入れば腸を爛らす。これを解すべき藥はないが、ただ橄欖木、(七)魚茗木、蘆根、(八)烏蓲草根の煮汁が解し得る。

時珍曰く、呉地方では、その血は毒があり、脂は舌を麻せしめ、子は腹を脹らせ、眼は眼華を生ぜしめるといふので『油は麻し、子は脹し、眼睛花すと』いふ語がある。しかし、江陰地方ではその子を鹽漬にし、その白を糟漬にして埋めて置き、それを調理して食ふ。諺に『命を捨てて河豚を喫ふ』とはこれであらう。

〔主　治〕【疥癬、蟲瘡には、子を蜈蚣と共に燒いて研り、香油で調へて搽る】(時珍)

(一)海豚魚(拾遺)

和　名　いるか
學　名　Dolphinus dussumeri, Blanfordt.
科　名　いるか科

〔釋　名〕 **海豨**(文選) 江中に生ずるものを **江豚** と名ける(拾遺) **江猪**(綱目) **水猪**(異物志) **䱐魚** 音は志(シ)である。 **饞魚** 音は讒(ザン)である。 **鯆䱐**

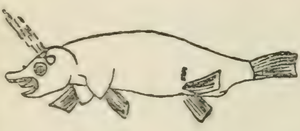
(七)魚茗木、未詳。
(八)烏蓲草ハ荻ノ一名。
(一)木村(重)曰ク、日本ニ言ノいるかト同型ナリ。揚子江ニテハ江猪ト呼ビ、七百浬上流湖北省宜昌ニモ泳遊ス、大サ五尺許、背黒色ナリ。

洞庭湖ニテハ湖神トシテ崇ビテコレヲ獲ラズ。揚子江ニテモ亦獲ラズ、群遊ス、一般ニハ海豚（ハイトン）ト言フ。

(二)江豚ハDelphinus climensis, Flower.ヲ云フナルベシ、此種ハ長江ノ上流七百餘浬ヲ溯江ストイフ。

音は敷沛（フハイ）である。時珍曰く、海豚、江豚はいづれも形に因つて命けた名である。郭璞の賦に『海豨、江豚』とあるはこのものだ。魏武食制には、これを鮮鯆といつてある。南方異物志には、これを水猪といつてある。又、饞魚なる名稱はその涎の多いことを謂つたものだ。

【集解】藏器曰く、海豚は海中に生ずる。風潮を候て出沒するもので、形は豚のやうだ。鼻が腦上に在つて聲を發し、水を直上に噴き、幾百となく羣をなす。その子は鯊魚の子のやうで、幾萬の多數が母に隨つて行く。人が子を取つて水中に繫いで置くとその母が自ら來るので、それを捕獲する。(二)江豚は江中に生じ、形狀は海豚のやうで小さい。水上に出沒するもので、舟夫はそれを候て風を占ふ。その中にある油脂を燈火に點ずると、樗蒲の遊戯を照すには明だが、讀書や工作には暗い。俗に懶け嫁が變化したものだといふ。



海豚
——江豬——

時珍曰く、その狀態は、大いさ數百斤の猪ほどあり、形色は青黒く、鮎魚のやうで、人間のやうに兩乳があり、雌雄が

ある。數尾同行して一は浮き一は沈む。それを拜風といふ。その骨は硬く、その肉は肥え、食物にはならぬ。膏が最も多いもので、石灰を和して船に(三)艌るに良し。

肉　[氣　味]【鹹く、腥く、味は水牛肉の如くし、毒なし】[主　治]【飛尸、蠱毒、瘴瘧には脯にして食ふ】(藏器)

肪　[主　治]【惡瘡、疥癬、痔瘻、犬、馬の瘑疥に摩つて蟲を殺す】(藏器)

(一)比目魚(食療)

和名　したびらめ
學名　Cynoglossus abbreviatus, Gray.
科名　したびらめ科

[釋　名] **鰈**　音は蝶(テフ)である。**鞋底魚**　時珍曰く、比は竝である。各箇に目が一箇で相竝んで行く。爾雅に所謂『東方に比目魚あり。比せざれば行かず。その名を鰈といふ』とあるがこの物だ。段氏の北戶錄には、これを鰜、音は兼(ケン)といつてあり、吳都賦には、これを鰨、音は介(カイ)といつてあり、上林賦には、これを魼、音は墟(キヨ)といつてある。鰈とは(二)屧のやうだといふ意味、鰜とは兼ねて行くの意味、鰨とは相介けて行くの意味、魼とは相(三)胠るの意味である。俗に

(三)艌ハ俗語ナリ。篇海ニハ音念(ネン)トアリ。舊船ヲ修理スルヲ艌トイフ。塗リ繕フナリ。

(一)木村(重)曰ク、日本ニ產スルしたびらめニ類ス、揚子江ニテハ九江マデ分布ス。本來海產ナリ、大サ七寸許、支那ニハ此屬六種記載サル。鞋底魚(アーティユー)比目魚(ピームーユー)ト稱サル。

(二)屧ハ靴ノ中ノ敷皮。

(三)胠ハ左右相離レルノ意ナリ。

鞋底魚と呼び、臨海志には婢簁魚と名け、臨海風土記には奴屩魚と名け、南越志には版魚と名け、南方異物志には箬葉魚と名けてある。いづれも形に因つて呼んだものだ。

【集解】時珍曰く、按ずるに、郭璞は『所在の水中にゐる。形狀は牛脾、及び婦人の鞋の底のやうなもので、鱗が細かくして紫白色、兩片相合して行動し得るものだ。その合する方の一面は平で鱗がなく、口は腹下近くにある』といつてある。劉淵林はこれを王餘魚としたが、蓋しさうではない。



比目魚
（鞋底魚）

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【虛を補し、氣力を益す。多食すれば氣を動ずる】（孟詵）

（一）鮹魚 音は稍（セウ）である。（拾遺）

和名　とうぎょ
學名　Macropodus opercularis, Linn.
科名　とうぎよ（鬪魚）科

【集解】藏器曰く、江湖に產する。形は馬鞭に似て尾に兩岐があり、鞭鞘のや

（一）木村（重）曰ク、小鯛ニ似タル小魚、體色暗褐色ニシテ横又ハ縦ノ縞アリ、尾ハ二叉シテ長ク垂

ル、怒ル時ハ赤色ニ變ズ、二寸許、南方支那ノ淡水魚、臺灣ニ二種アリ。鮹魚ノ集解ニアツベキ小魚ヲ假ニ定メテ後攷ヲ俟ツ。

（一）木村（重）曰ク、種種ノさめヲ混同ス、此ノ解說中ニテハ「ねこざめ」「あなざめ」「のこぎりざめ」等ヲ曰フ。今其代表的ナルヲ取リテ學名ヲ附ス。支那海ヨリ長崎マデイヅレモ分布ス。

うだから名けたものだ。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【五痔下血、瘀血の腹に在るもの】（藏器）

（一）鮫魚（唐本草）

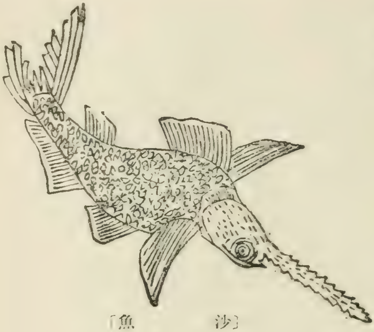
和名　あなざめ
學名　Isuropsis glauca, Müller et Henle.
科名　あなざめ科



〔白——鮫〕　〔沙——魚〕

【釋名】**沙魚**（拾遺）**䱜魚**　䲂（ジャク）錯（シャク）の二音である。**鰒魚**　音は剝（ハク）である。**溜魚**　時珍曰く、鮫は皮に沙があり、その文が交錯して䲂駁だ。故にかかる諸名がある。古は鮫といひ、今は沙といふが、その實は一物だ。或は、もとは鮫と名けたのだが、訛つて鮫となつたのだともいふ。段成式は『それは力が健強なもので、

河伯徙兒と稱する』といつてある。
藏器曰く、鰒と石決明とは同名だが異類のものだ。
【集解】恭曰く、鮫は南海に產する。形は鼈に似て、脚がなく、尾がある。保昇曰く、圓くして廣さ一尺餘あり、尾の長さも一尺ばかりある。背の皮の粗錯なものだ。



「沙魚」——胡沙——

頌曰く、これには二種あるが、いづれも鼈に類したところはない。南方人は通じてこれを沙魚といひ、大きくして喙が長く鋸のやうなものを胡沙といふ。性善にして肉が美味だ。小さくして皮の粗いものを白沙といふ。肉は彊くして小毒がある。彼の地では、いづれも鹽で修治して脯に作り、その皮を剔り淨めて沙を去り、剪つて鱠にして食膳に供するが、美味なるものだ。食へば人體に益があ

る。その皮は刀靶の飾になる。

宗奭曰く、鮫魚と沙魚とは形がやや異ふが、しかし皮は一様だ。

時珍曰く、古には鮫といひ、今は沙といふ。これは一類の内に數種あるものであつて、東南の近海諸郡にいづれも有る。形はいづれも魚に似たもので、目青く、頰赤く、背上に鬣があり、腹下に翅がある。味はいづれも肥美なもので、南方人はこれを珍重する。大なるものは尾の長さ數尺あり、よく人を傷ける。皮は全面に眞珠のやうな沙があつて斑なものだ。背に鹿のやうにして堅彊な珠文のあるものをば鹿沙といひ、また白沙ともいふ。能く鹿に變化するといふことだ。背に虎のやうにして堅彊な斑文のあるものをば虎沙といひ、また胡沙ともいふ。虎魚が變化したものだといふ。鼻前に斧斤のやうな骨があつて、能く物を撃ち舟を壞るものをば鋸沙といひ、又、挺額魚といひ、また鐇鯌ともいふ。それは鼻骨が鐇斧のやうだといふ意味だ。鐇の音は蕃（バン）である。沈懷遠の南越志には一環雷魚といふは鯌魚である。長さ一丈ばかりのもので、腹に兩筒の洞があり、その腹に水を貯へて子を養ふのであるが、一尾の腹に二尾の子を容れ、子は朝に口中から出て暮に還つて腹に入る。

鮫皮に珠があつて、刀劒の飾にし、また骨や角を細工するに用ゐる』とある。

藏器曰く。その魚は狀貌は一定せぬが、いづれも皮上に沙があつて、木賊のやうに木を揩るに用ゐ得る。小なるものは子であつて、母に随つて行動するのであるが、物に驚くと口から母の腹中に入る。

肉〔氣 味〕【甘し、平にして毒なし】〔主 治〕【鱠にして用ゐれば五臟を補す。功は鯽に亞ぐもので。やはり(三)鱐鮓にもなる】(詵)【甚だ人體に益あり】(頌)

皮〔氣 味〕【甘く鹹し、平にして毒なし】〔主 治〕【心氣鬼疰、蠱毒吐血】(別錄)【蠱氣、蠱疰】(恭)【灰に燒いて水で服すれば、魚を食つたための中毒に主效がある】(藏器)【燒き研つて水で服すれば、鯸鮧魚の毒を解し、魚鱠を食つて成つた積の消せぬものを治す】(時珍)

〔附 方〕舊二 新一 【疰を治する鮫魚皮散】頌曰く、胡洽の五尸鬼疰、百毒惡氣を治するに用ゐた方。鮫魚皮を炙き、硃砂、雄黃、金牙、蜀椒、細辛、鬼臼、乾薑、莽草、天雄、麝香、雞舌香各一兩、貝母半兩、蜈蚣、蜥蜴を各﹅炙いて二箇を末にし、一日二回、半錢づつを溫酒で服す。またこれを佩びるもよし。時珍曰く、

(三) 鱐ハ音速デ、乾魚ノコト。

千金の鮫皮散は鬼疰を治す。鮫魚皮を炙き、龍角、鹿角、犀角、麝香、蜈蚣、雄黄、硃砂、乾薑、蜀椒、蘘荷根等分を末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。また佩びるもよし。

膽 臘月に收取する。**主治**【喉痺には、白礬灰に和して丸にし、綿で裹んで喉中に納れ、惡涎を吐き去れば癒える】（詵）

烏賊魚（一）（本經中品）

和名　まいか
學名　Sepia maindroni.
科名　かふいか（甲烏賊）科

釋名 **烏鰂**（素問）**墨魚**（綱目）**纜魚**（日華）乾けるものを**鮝**と名ける。（日華）骨を**海螵蛸**と名ける。頌曰く、陶隱居は『これは䳁鳥が變化したものだ。現にその口、腹俱に頗る相似たところが遺つてゐる』といつた。腹中に墨があつて用ゐられるものだから烏鰂と名けたのであつて、能く波を吸ひ墨を噀いて水を黑く溷し、それで身を隱し自ら衞つて人の害を防ぐものだ。又、南越志には『その性烏を嗜み、毎に自ら水上に浮んでゐて、烏が飛んで來て既に死んだものと思つて

（一）木村重曰ク、支那ノ沿岸ニかふいか屬四種ヲ產スルモ、代表的ノモノヲ取ル、體細長ク胴長七寸ニ達ス、乾シテスルメトナス。

啄むところを卷き取り、水中に入つてそれを食ふ。それで烏賊と名けたのであつて、その意味は烏を賊害するものといふのである』とある。

時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に『九月、寒烏水に入つて化してこの魚となる』とある。文墨の法則となすべきものがあるといふので烏鰂と名けたもので、鰂は則である。骨を螵蛸と名けたのはその狀態を形容したものだ。

大明曰く、この魚には二本の鬚があつて、風波に遇ふとその鬚を碇のやうに下して或は石に粘着する。その狀態が船の纜のやうだから纜魚と名けたのだ。

瑞曰く、鹽を用ゐて乾したものを明鯗と名け、鹽を用ゐずに乾したものを脯鯗と名ける。



口は腹下に在る
（革魚も相類す）
〔烏賊魚〕
──海螵蛸──

【集解】別錄に曰く、烏賊魚は東海の池澤に生ずる。採取に一定の時期はない。

頌曰く、近海の州郡にいづれもある。形は革囊のやうで口は腹下に在り、八本の

足が口の傍に聚つて生え、その背上にはただ一本の骨がある。厚さは三四分、その形狀は小舟の形のやうで、輕虛にして白く、また帶のやうに甚だ長い二本の鬚がある。腹中の血、及び膽はさながら墨のやうなものだ。文字も書けるが、但し年が經てば全然その迹がなくなつて白紙ばかりになる。世俗に、烏賊は墨を懷いて禮を知るものだといふので、これを海若白事小吏と稱へる。

時珍曰く、烏鰂は鱗がなく、鬚があり、皮が黑く、肉が白い。大なるものは蒲扇ほどあり、燂熟して薑、醋で食へば脆くして美味なものだ。背骨をば海螵蛸と名け、形は樗蒲子に似て長く、兩端が尖り、色白くして脆く、通草のやうだ。幾重の層紋があつて、指甲で刮つて末にもなる。世人はまたこれを鏤めて鈿飾にする。又相感志には『烏則は小滿の節が過ぎると形が小さくなる』とある。

藏器曰く、海人の話に『これは秦の始皇が東海地方へ巡幸したとき、その算籌の袋を海に棄てたのがこの魚に化したのだ。それゆゑに形が今でも似てゐるので、まだ墨さへその腹に殘つてゐるのだ』といふ。

禹錫曰く、陶弘景、及び蜀本圖經には、いづれも『これは鷀鳥の化したものだ』

（二）木村（重）曰ク、やりいか、學名Symplectoteuthis oualaniensis, (Lesson)烏賊魚ノ甲ト稱スルモノ小ナリ、コツテ柔魚トナス、大平洋ニ分布ス。

（三）木村（重）曰ク、烏賊ノ體中ニ石灰質ノ甲トスルモノアリ、コレヲ海螵蛸トイフ。Cuttle-bone

（四）滷、大觀ニ鹵ニ作ル。

（五）縮トハ不純物ヲ分離シ排除セシムルコトナリ。

といつてあるが、鶩といふは水鳥で、鷖に似て項、腹が短く、翅は紫白色、背上は緑色の鳥である。唐の蘇恭が『鶩烏といふものはない』といつたのは誤だ。

【附錄】（二）柔魚。頌曰く、柔魚なる一種の魚は烏賊とよく似てゐるが、ただ骨がないものだ。越地方で珍重する。

肉【氣味】【酸し、平にして毒なし】瑞曰く、味は珍美である。風氣を動する。

【主治】【氣を益し、志を强くする】（別錄）【人に益あり。月經を通ず】（大明）

骨 一名（三）海螵蛸

【修治】弘景曰く、黄に炙つて用ゐる。斅曰く、凡そこれを使用する場合に、沙魚骨なるものを用ゐてはならぬ。その形は眞に似てゐるものだが、ただ表面の文の順なるものが眞物であつて、横なるものは眞物でない。血（四）滷を水にしたものに浸し、幷に煮ること一伏時して漉し出し、一箇の坑を掘つてその坑を赤く燒き、その内に魚骨を入れ、一夜置いて取出して藥に入れる。かくすれば效力が倍加するものだ。

【氣味】【鹹し、微溫にして毒なし】普曰く、冷なり。權曰く、小毒あり。之才曰く、白及、白斂、附子を惡む。能く鹽を淡くする。硇を伏し、銀を（五）縮する。

【主治】【婦人の赤白漏下、(六)經汁血閉、陰蝕腫痛、寒熱癥瘕。子なきもの】(本經)【驚氣が腹に入つて臍を環つて腹痛するもの。男子の陰中腫痛。人をして子あらしめる。又、瘡の膿汁多くして燥かぬを止める】(別錄)【血崩を療じ、蟲を殺す】(日華)【炙き研つて飲服すれば、婦人の血瘕、大人、小兒の下痢を治し、小蟲を殺す】(藏器)○又曰く、骨を井水に投ずれば蟲が皆死ぬ。【眼中の熱涙、及び一切の浮翳を治するには、研末して蜜で和して點ける。久しく服すれば精を益す】(孟詵)○恭曰く、また牛、馬の障翳をも治す。【婦人の血枯病で肝を傷めて唾血し、下血するに主效があり、瘧を治し、癭を消す。研末して小兒の疳瘡、痘瘡の臭爛、男子の陰瘡、湯火傷、跌傷の出血に傅ける。燒いて性を存して酒で服すれば、婦人の(七)小戶嫁痛を治す。雞子黃と共に小兒の重舌、鵞口に塗る。蒲黃末と共に舌腫で泉の如く出血するに傅ける。槐花末と共に鼻に吹けば衄血を止める。銀硃と共に鼻に吹けば喉痺を治す。白礬末と共に鼻に吹けば蝎螫疼痛を治す。麝香と共に耳に吹けば聤耳の膿あるもの、及び耳聾を治す】(時珍)

【發明】○○時珍曰く、烏鰂骨は厥陰の血分の藥である。その味は鹹くして血に走

(六) 經汁ハ經水ノコトナラン、經汁血閉四字一句デ、月經閉止ヲ意味スルカ。

(七) 小戶ハ陰門。

る。故に血枯、血瘕、經閉、崩帶、下痢　疳疾は厥陰の本病であり、寒熱瘧疾、聾、瘻、少腹痛、陰痛は厥陰の經の病であり、目翳、流涙は厥陰の竅の病であつて、厥陰は肝に屬し、肝は血を主るものだから、諸種の血病は皆これで治するのである。按ずるに、素問に『胸脇支滿を病んで、食事に妨があり、病の至れる場合は、先に腥臊なる臭氣の感覺があつて淸液を出し、先に唾血して四肢が淸し、目眩し、時時にかかる狀態の前後する血病がある。これは血枯と名ける病であつて、この病の發るのは、年少の時に大いに血を脫したことがあるか、或は醉中に房事を行つたために氣が竭き、肝が傷むが原因である。故に月經が衰へて少くなり、或は潮來しなくなるのである。これを治するには、四箇の烏鰂骨、一箇の藘茹を末にし、雀卵を用ゐて小豆大の丸にし、五丸づつを服して鮑魚汁を飲む。これは腸中、及び傷める肝を利する結果となるのである』とある。これに據つて見れば、この物が厥陰の血分に入るものなるに疑ない。

〔正　誤〕　鼎曰く、久しく服すれば嗣を絕し、子を無くする。

時珍曰く、按ずるに、本經には『癥瘕、子無きに主效がある』とあり、別錄には

『人をして子有らしめる』とあり、孟詵も亦『久しく服すれば精を益す』といつてある。張鼎のこの説のみ獨り相背戻するは誤に相違ない。『血病には鹹を多く食ふといふことがない。それに烏鰂はまた血閉に主效があるのだからこの説が出たのだ』といふかも知れないが、しかし、經閉には有餘と不足の二證があつて、有餘のものは血滯であり、不足のものは肝傷である。烏鰂の主とするところは肝傷の血閉であつて不足の病證だ。正に素問の説と合致するのである。人をして嗣を絶せしめるといふ道理が何處にあらうぞ。これは本經、別錄の説を正準とすべきものである。一般にその誤を承ける恐れがあるから、此に辨正して置く。

附　方

舊三。新二十。

【婦人の血枯】前項を見よ。【赤白目翳】聖惠では、傷寒熱毒が眼を攻めて生じた赤白翳を治するには、烏鰂魚骨一兩を皮を去つて末にし、龍腦少量を入れて一日三回點ける。○諸種の目翳を治するには、烏鰂骨、五靈脂等分を細末にし、熟猪肝を切片してそれを蘸け、一日二回食ふ。【睛にかかる赤翳】照水丹――眼翳のただ厚きものを治するに尤も效があり、また赤翳が睛にかかつて瞳子を貫くを治す。海螵蛸一錢、辰砂半錢を乳細し、水飛して澄し取り、黃蠟少量を

化したもので和して劑にして貯へ、就寢時に火の上で固めて黍米大の丸にし、皆中に揉み入れて睡り、夜明けに溫水で洗ひ下す。なほ退かぬときは更に一回用ゐれば效がある。(海上方)【雀目夜眼】烏賊骨半斤を末にし、黃蠟三兩を化して和し、捏ねて錢大の餠子にし、猪肝二兩を竹刀で批開した中に摻つて括りつけ、米泔水半碗で煮熟して食ひ、その汁で送下する。(楊氏家藏)【血風赤眼】婦人に多い。烏賊魚骨二錢、銅綠一錢を末にし、一錢づつを熱湯に泡けて洗ふ。(楊氏家藏)【疳眼で淚の流れるもの】烏賊魚骨、牡蠣等分を末にし、糊で皂子大の丸にし、一丸づつを猪肝一頭分と共に米泔で煮熟して食ふ。(經驗)【膿の出る底耳】海螵蛸半錢、麝香一字を末にし、綿杖で繳淨して耳中に吹入る。(澹寮方)【鼻瘡疳䘌】烏賊魚骨、白及各一錢、輕粉二字を末にして搽る。(錢乙小兒方)【小兒の臍瘡】血、及び膿の出るものには、海螵蛸、臙脂を末にし、油で調へて搽る。(聖惠方)【頭上に生じた瘡】海螵蛸、白膠香各二錢、輕粉五分を末にし、先づ油で瘡を潤ほし淨めてからその末を搽る。二三回で癒える。(衞生易簡方)【癧瘍白駁】先づ布で拭つて赤くし、烏賊骨を三年酢に磨つて塗る。(外臺秘要)【疔瘡惡腫】先づ刺して血を出し、海螵蛸末を摻ればその疔が出る。(普濟方)【蝎螫の

痛楚】烏賊骨一錢、白礬二分を末にして鼻に嗃ぐ。螫傷の左壁にあるには左鼻に嗃ぎ、右壁に在るには右に嗃ぐ。(衛生寶鑑)【灸瘡の瘥えぬもの】烏賊骨、白礬等分を末にし、日毎に塗る。(千金)【小兒の痰齁】多年のものには、海螵蛸末一錢を米飲で服す。(葉氏摘玄方)【小便血淋】海螵蛸末一錢を生地黄汁で調へて服す。○又ある方では、海螵蛸、生地黄、赤茯苓等分を末にし、一錢づつを柏葉車前湯で服す。(經驗方)【大腸下血】大人、小兒に拘らず、臟毒、腸風、及び內痔下血日久しく、多食して飢ゑ易きには、先づ海螵蛸を黄に炙つて皮を去り、研末して一錢づつを木賊湯で服し、三日後に猪臟黄連丸を服す。(直指方)【卒然の吐血】烏賊骨末二錢を米飲で服す。(聖惠)【骨哽の喉に在るもの】烏賊魚骨、(八)陳橘紅を焙じて等分を末にし、寒食麪に餳を和したもので芡子大の丸にし、一丸づつを含み溶して汁を嚥む。(聖濟總錄)【舌腫出血】泉の如く出るには、烏賊骨、蒲黄等分を炒つて細末にし、毎にそれを塗る。(簡便單方)【跌破出血】烏賊魚骨末を傅ける。(直指方)【陰囊濕痒】烏賊骨、蒲黄を撲つ。(醫宗三法)

血　主治　【耳聾】(甄權)

腹中の墨　主治　【血刺心痛には醋に磨つて服す】(藏器)　炒り研つて醋で服す

(八)橘紅ハ藥名、陳ハ古ルモノ。

るもよし。

(一)章魚（綱目）

和名　またこ
學名　Polypus vulgaris, (Lamarck.)
科名　またこ科

釋名　**章擧**（韓文）　**鱆魚**　音は佶（キツ）である。（臨海志）

集解　頌曰く、章魚、(二)石距の二物は烏賊に似てやや大きく、更に珍好な食品として重ぜられるものであるが、藥用には入れない。

時珍曰く、章魚は南海に生ずる。形は烏賊のやうだが大きく、八本の足があり、身上に肉がある。(三)閩粤地方では、採つたばかりの新鮮のものを薑醋で食ふが、味は水母のやうなものだ。韓退之が所謂『章擧、馬甲、(四)柱鬪、怪を以と自呈す』とはこの物である。石距もやはりその類のもので、身が小さくして足が長い。鹽を入れて燒いて食ふと極めて美味だ。

氣味　【甘く鹹し、寒にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、李九華は『章魚は冷であるが泄せぬ』といつた。

主治　【血を養ひ、氣を益す】（時珍）

(一) 木村(重)曰ク、支那海一般ニ分布サル、胴長四寸許、甚シクハ食用トサレズ。

(二) 石距ハてながだこ。學名 Polypus variabilis, Sasaki. 科名 たこ科 木村(重)曰ク、支那沿海ニ多シ、大サ二寸餘長シ、日本ニテモ島根縣方面ニ産ス。

(三) 閩粤ハ福建、廣東兩省地方。

(四) 食物本草ニ柱鬪ヲ杜鬪ニ作ル。

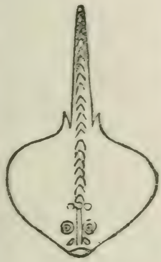
（一）木村（重）曰ク、尾ニ棘アリ、體亦褐色、體長八寸許ノ海産魚、此ノ他ニ支那海ニ五種ヲ産ス、ツエ、ヤオ、ユー（棘ノアル漬ノ意）ト稱ス。

（一）海鷂魚（拾遺）

和名　づゞゑひ
學名　Dasyatis sinensis, Steind.
科名　あかえひ科

【釋名】 **邵陽魚** 食鑑には少陽とした。**荷魚** 韻には魺としてある。**鱝魚** 音は忿（フン）である。**鯆魮魚** 音は鋪魮（ホビ）である。**蕃蹹魚** 音は番沓（バンタフ）である。**石蠣** 時珍曰く、海鷂とは形の形容、少陽、荷はいづれも形色を言つたものだ。その他の名稱の意味は詳でない。

【集解】 藏器曰く、東海に生ずる。形は鷂に似て肉翅があり、よく石の上に飛び上る。齒は石版のやうで尾に大毒があり、物に逢ふと尾で撥ねてそれを食ふ。その尾で人が刺されると、甚しいものは死ぬことがある。人の尿するを俟つてその場所に釘のやうに刺して置くとその人が陰腫痛を發し、それを拔き去れば癒える。海人はその刺毒を受けると魚扈竹及び、海獺皮でそれを解す。又、鼠尾魚、地青魚といふがあつ



口が腹下に在る
〔海鷂魚〕
――少陽魚――

て、いづれも南海に生じ、總て肉翅があつて尾中に刺がある。肉を食ふにはその刺を去る。

時珍曰く、海中に頗る多いが、江湖にも時にゐることがある。その狀態は盤か荷葉のやうで、大なるものは圍り七八尺あり、足なく、鱗なく、背が青くて腹が白く、口が腹下に在り、目が額上に在り、尾は長くして節があり、人を螫して甚だ毒がある。皮の色と肉の味とは倶に鮎魚と同じだが、肉中には皆骨があつて、節節が比んで聯り、脆く軟かで食へるものだ。吳地方ではこれを腊にする。魏武食制に『蕃踰魚は、大なるものは箕ほどあり、尾の長さ數尺ある』とあるはこの物だ。嶺表錄異に『(二)雞子魚は、嘴の形が鷄のやうで、肉翅があり、鱗なく、色は鮎魚に類し、尾は尖つて長く、風濤のある時は風に乘じて海上に飛ぶ』とあるが、これも海鷄の類であらう。

肉 氣味 【甘く鹹し、平にして毒なし】 時珍曰く、小毒あり。主治 【人を益せぬ】(弘景) 【男子の白濁、膏淋、玉莖の澀痛】(寗源)

齒 【毒なし】 主治 【瘴瘧には、黑く燒いて研末し、二錢匕を酒で服す】(藏器)

(二) 雞ハ鷄ノ誤カ。

尾【毒あり】【主治】【齒痛】陶弘景）

(一)文鰩魚（拾遺）

和名　とびのうを
學名　Cypselurus agoo, (Temm. et Schl.)
科名　とびうを科

【釋名】飛魚

【集解】藏器曰く、海南に生ずる。大なるものは長さ一尺ばかり、翅があつて尾と齊い。海上に羣り飛ぶものだ。海人はこれが來るのを見ると大風があるものだとしてある。呉都賦に『文鰩夜飛んで網に觸る』とあるはこの魚だ。

時珍曰く、按ずるに、西山經に『(二)觀水、西に流沙に注ぐ、文鰩魚多し。狀鯉の如く、翼鳥の如く、身魚の如く、文蒼く、首白く、喙赤し。常に夜を以て飛び、西海より東海に游ぶ。その音鸞雞の如し。その味甘し。これを食へば狂を已む。見れば大穰なり』とあり、林邑記には『飛魚は身圓く、大なるものは一丈餘あり、翅は胡蟬の如く、出入羣飛し、(三)游翔翳薈し、沈めば海底に泳ぐ』とあり、又、一統志には『陝西鄠縣の(四)澇水に飛魚を出す。狀鮒の如し。これを食へば痔疾を已む』

(一)木村(重)曰ク、日本ノとびうをト同種ナリ、大サ一尺許、群レテ海上ヲ飛ブ、支那海ヨリ此屬六種ヲ産スルモ一般的ノモノヲトル、飛魚(フヒユー)ト稱サル。

(二)觀水、呂氏春秋ニハ灌水ニ作ル。高誘ハ灌水ハ西極ニ在リトイフ。劉逵ノ呉都賦注ニハ濩水ニ作ル。所在未考。

(三)游翔ハオヨギカケルコト、翳薈ハオドリアツマル貌。

(四)澇水、卽チ古ノ潦水ナリ。陝西省鄠縣ノ南ニ源ヲ發シ咸陽ノ西南境ニ入ッテ渭水ニ注グ。

とある。

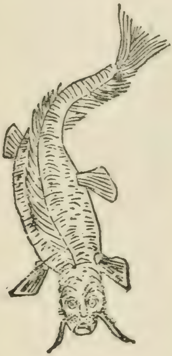
肉［氣味］【甘く酸し、毒なし】［主治］【婦人の難産には、黒燒にして研末し、一錢を酒で服す。臨月にこれを帶びれば安産する】（藏器）【狂を已み、痔を已む】（時珍）

（一）魚虎（拾遺）

和名　はりせんぼん
學名　Diodon holacanthus, L.
科名　はりせんぼん科

［釋名］土奴魚（臨海記）

［集解］藏器曰く、南海に生ずる。頭は虎の如く、背の皮は猬の如く、刺があつて人に觸著すると蛇咬のやうだ。また變じて虎になることもある。



〔虎　魚〕
―沙　虎―

時珍曰く、按ずるに、倦游錄に『海中の泡魚といふは、大いさ斗ほどあり、身には刺があつて猬のやうなもの

（一）木村（重）曰ク、總テ溫暖海ニ產ス、大サ二寸許、ヨク體ニ生ジタル針ヲ立テテ威喝ス、支那海ニハ他ニ一種ヲ產ス。

だ。能く變化して豪豬（がうちよ）となる』とあつて、これ卽ち魚虎である。述異記には『老いれば變じて鮫魚になる』とある。

〔氣味〕【毒あり】。

(一)魚師（綱目）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

〔集解〕時珍曰く、陳藏器の諸魚の註に『魚師は、大なるものは毒があつて人を殺す』とあるが、今は識るものがない。ただ唐韻に『鰤（し）は老魚なり』とあり、山海經に『(二)歷虢（れきくわく）の水、師魚あり。これを食へば人を殺す』とあるがその物をいつたのかも知れぬ。

(一)海蛇（拾遺）

和名　びぜんくらげ
學名　Rhopilema esculenta, Kishino.
科名　びぜんくらげ科

〔釋名〕**水母**（拾遺）**樗蒲魚**（拾遺）**石鏡**　時珍曰く、蛇は作（サ）宅（タク）の

(一)木村（重）曰ク、モシ鰤ナレバ日本ノぶり、此魚肉ノプトマイン中毒ノ意ナルカ又ハ有毒ナル河豚ノ意カ大ナル老魚ノ總稱ナルヤ不明ナリ。後攷ヲ俟ツ。

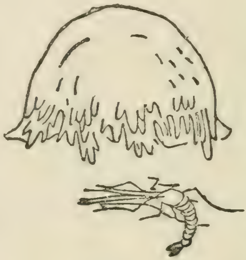
(二)歷虢之水、北次三經ニ『饒山―歷虢之水出焉。而東流注于河。其中有師魚。云云』トアリ。所在未考。

(一)木村（重）曰ク、大ナルハ笠ノ直徑四尺ニ達ス。コレヲ明礬漬トシテ食フ、常食サル。温海殊ニ舟

山列島附近ニテ大イニ漁獲サル、水母（スイムー）ノ名ニテ呼バル。

二種の發音があつて、南方人は訛つて海拆といひ、或は蜡鮓とも書いてあるが、いづれも正しくない。劉恂は『閩人は蛇といひ、廣人は水母といふ』といひ、異苑には石鏡と名けてある。

集解　藏器曰く、蛇は東海に生ずる。狀態は血䘓のやうで、大なるは牀ほど、小なるは斗ほどあり、眼目、腹胃がなく、蝦を目として働かせるもので、蝦が動けば蛇が沈む。故に水母は蝦を目とするといふのであつて、やはり蛩蛩と駏驉との關係のやうなものだ。煠出しで薑醋で食ふことを海人は珍らしからぬ食物としてゐる。



〔海　蛇〕
――水　母――

時珍曰く、水母は形が渾然として凝結した紅紫色のものだ。口、目がなく、腹下に絮を懸けたやうな物があつて、多くの蝦がそれに附いてゐてその涎沫を咂ふ。浮沈すること飛ぶやうなものだ。潮のために遮られて蝦が離れて了ふと蛇が歸れなくなる。それを漁夫が捕取するのだ。割き取つて石灰、礬水で浸し、その血汁を去ると色がやが

て白くなる。その最も厚いものをば蛇頭といひ、味が更に勝れてゐる。生でも熟でも食へる。茄柴灰(かさいくわい)を鹽水に和したもので淹(つ)けるが良し。

【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】【主治】【婦人の勞損、積血、帶下。小兒の風疾、丹毒。湯火傷】(藏器)【河魚の疾を療ず】(時珍)記載は異苑にある。

鰕(一)（別錄下品）

和名　すぢえび
學名　Leander paucidens, (de Haan)
科名　パレイモン科

【釋名】時珍曰く、鰕の音は霞(カ)である。俗に蝦(か)と書く。湯に入れると紅色になつて霞のやうだといふわけだ。

【集解】時珍曰く、江湖に産するものは大きくして色白く、溪池に産するものは小さくして色青い。いづれも鬚が(二)磔(は)ね、鼻が鉞(まさかり)のやうで、背に斷節があり、尾に硬鱗があり、足が多くあつて好く躍る、その腸は腦に附著し、その子は腹外にあるものだ。凡そ數種あつて、米鰕、糠鰕(かうか)はその精粗に因り、青鰕、白鰕は色に因つて名け、梅鰕といふは梅雨の時期にゐるから、泥鰕、海鰕といふはその產地に因つ

(一)木村(重)曰ク、生時體透明ニシテ頭及ヒ腹ニ黑條アリ、一寸五分ニ達ス、日本ニ廣ク分布ス、支那ニテハ鰕米(シヤミー)ト稱ス。ぬかゑびノ類モ產スルモ一般的ノモノヲトル。

(二)磔、書法ニ字ノ右下ノハネタルヲ磔トイフ。又、裂ケタル貌ヲ磔トイフ。

て名けたものだ。嶺南に天鰕といふがあつて、その蟲は蟻ほどの大いさのものだが、秋の社日後に羣つて水中に墮ち、變化して鰕となる。その地ではそれを鮓にして食ふ。凡て鰕の大なるものは、蒸し曝して殼を去り、鰕米といふものにして食ふ。薑、醋で調品するが珍味とされてゐる。



〔鰕〕
——海鰕は大きい——

【氣味】【甘し、溫にして小毒あり】詵曰く、水田、及び溝渠に生じたものには毒があつて、就中鮓中に入つたものが有毒だ。藏器曰く、熱飯と密器中に盛つて作つた鮓を食へば人を毒することと死に至ることがある。弘景曰く、鬚の無いもの、及び腹下が全體黑いもの、幷に煮ても色の白いものはいづれも食はれない。小兒、及び雞、犬が食へば、脚が屈して弱くなる。鼎曰く、風を動じ、瘡疥、冷積を發する。源曰く、風熱を動ずる。病あるものは食つてはならぬ。

【主治】【五種の野雞病、小兒の赤白遊腫には、搗き碎いて傅ける】(孟詵)【嚢

にして食へば鼈瘕を治し、痘瘡を托し、乳汁を下す。一定の方法に依つて製したものは陽道を壯にする。煮汁は風痰を吐す。搗いて膏にして蟲疽に傅ける】（時珍）

附方　新五。【鼈瘕疼痛】類編に『陳拱は鼈を病み、やがて明瞭に見えんとするほどに皮膚の內部に現はれて、痛み忍び難かつたが、外科醫者の洪氏が「新鮮な鰕を羹にして食ふがよい」といつたのに從つて、久しくして痛が止んだ。明年また發つたが、再び前記の方法で治癒し、遂に根絶した』とある。【腎を補し、陽を興す】鰕米一斤、蛤蚧二箇、茴香、蜀椒各四兩を用ゐ、いづれも靑鹽を酒に溶したもので炙き炒り、木香の粗い末一兩を和勻し、熱に乘じて新しい缾中に收めて密封し、一匙づつを空心に嚼んで鹽酒で飮下す。甚だ妙である。【風痰を宣吐する】殼付きのままの鰕半斤に葱、薑、醬を入れて汁に煮、先づ鰕を喫して後に汁を喫し、肚腹を緊く束ね、翎で探り導いて吐かす。【臁瘡の蟲を生じたるもの】小鰕三十尾を頭、足、殼を去り、糯米飯と共に研爛らし、紗を隔てて瘡上に貼り、別の紗で罨ふて一夜置いて解き下す。それを引き上げて見ると全面に小さい赤蟲が著いてゐるものだ。その時直に葱、椒の湯で洗淨し、舊い茶籠中の白竹葉を瘡の大小に隨つて

剪つて貼り、一日二回換へ、汁の出盡きるを待つて、逐日苦楝根(くれんこん)の煎湯で洗ひ、好き膏を貼る。肉を生ぜんとするときは膏藥を貼換へてはならぬ。發動する食物を忌む。(直指方)【血風臁瘡】生鰕、黃丹を擣き和して貼り、一日一回換へる。(集簡方)

(一)海鰕(拾遺)

和名　くるまえび
學名　penaeus canaliculatus, Oliver.
科名　ペネウス科

【釋名】紅鰕(藏器)　鰝　音は浩(カウ)である。(爾雅)

【集解】藏器曰く、海中の紅鰕は長さ一尺ほどあり、鬚は簪(さん)になる。崔豹の古今注に『(二)遼海地方に、蜻蛉のやうな飛蟲で繙泔(はんこん)と名ける蟲があつて、七月に羣り飛んで天(そら)が闇くなる。その地方民はこれを食ふ。鰕が變化したものだといふ』とある。時珍曰く、按ずるに、段公路の北戶錄に『海中の大紅鰕は長さ二尺餘あり、頭は盃に、鬚は簪杖に作り得る。その肉は鱠(くわい)になり、甚だ美味だ』とあり、又、劉恂の嶺表錄には『海鰕は皮殼が嫩紅色で、前足に鉗(はさみ)があるものだ。色は朱の如く、最大なるものには長さ七八尺から一丈に達するものがある』とある。閩中には五色鰕と

(一) 木村(重)曰ク、日本、支那、印度、南洋諸島等ノ內灣ヨリ外海ニ產ス、大ナルモノハ九寸ニ及ブ、尾張ニテハいせゑびト稱ス。此屬他ニ三四種アリ。
(二) 遼海ハ鱣魚ノ註ヲ見ヨ。

いふがある。やはり長さ一尺餘のもので、彼の地では二尾づつ乾して對鰕と呼び、高等な料理に使ふ。

【氣味】【甘し、平にして小毒あり】時珍曰く、猪肉と共に食へば、人をして唾多からしめる。

鮓【主治】【飛尸(ひし)、蚘蟲(くわいちう)、口中の甘䘌(かんちく)、齲齒(うこ)、頭瘡。疥癬、風瘙、身痒を去り、山蚊子の人の肉に入りたるを治す。その當初に食へば瘡が發して癒える】（藏器）

(一)海馬（拾遺）

和名　おほうみうま
學名　Hippocampus kelloggi, Jordan et Seale.
科名　やうじうを(楊子魚)

【釋名】水馬　弘景曰く、これは魚鰕類のもので、形狀が馬のやうだから名けたものだ。

【集解】藏器曰く、海馬は南海に產する。形は馬のやうで長さ五六寸、鰕の類である。南州異物志に『大いさは守宮(しゆきう)ほど、色は黃褐のものだ。婦人が難產で割裂して分娩するほどのものでも、この蟲を手に持たせると羊のやに安產する』とある。

(一)木村(重)曰ク、たつのをとしごノ大型ナリ、日本ニテハ九州南部ニ產ス、大サ四寸ニ達ス、食用トセズ、主ニ藥品トシテ乾シテ販賣セラル。支那ニテハ必ズ二尾揃ヘテ賣ル習慣アリ。

宗奭曰く、首は馬のやう、身は鰕のやうで、背が傴僂で竹節紋があり、長さ二三寸のものだ。

頌曰く、異魚圖に『漁夫が魚網を布いて置くとこの魚が多くその網にかかる。それを取收めて曝乾し、雌雄を對にする』とある。



〔海　馬〕

時珍曰く、按ずるに、聖濟總錄に『海馬は、雌は黃色、雄は青色だ』とあり、又、徐表の南方異物志には『海馬は、狀態は魚のやうで頭が馬のやう、喙は垂下し、黃色のものもあれば黑色のものもある。海人はそれを捕つても喰はない。暴乾し、又は火で熇して難產の時の備にする』とあるがこのものだ。又、抱朴子には『水馬と赤斑蜘蛛とを合せ、馮夷水仙丸と共に服すれば、水中に居ることが出來る』とあるが、今は水仙丸の何物なるやが判らない。

氣味【甘し、溫、平にして毒なし】**主治**【婦人の難產には、これを身に帶ぶれば甚だ效驗がある。その場合に臨み、燒いて末にして飮服し、幷に手に握れば直ちに安產する】（藏器）【難產、及び血氣痛に主效がある】（蘇頌）【水臟を暖め、

陽道を壯にし、瘕塊を消し、疔瘡腫毒を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、海馬は雌雄對をなし、その性溫暖なるもので、交感の意味があるから、難產、及び陽虛、房中術に多く用ゐるのであつて、蛤蚧、郎君子の功力のやうなものだ。鰕もやはり陽を壯にするから、その性は同じものと見える。

【附方】新二。【海馬湯】長年月に亙る虛實積聚の癥塊を治す。海馬を雌、雄各一箇、木香半兩、大黃を炒り、白牽牛を炒つて各二兩、巴豆四十九粒を用ゐ、靑皮二兩を童尿に浸して軟かにし、それで巴豆を包んで括りつけ、小便の內に入れて再び七日間浸し、取出して麩で炒つて黃色になつたとき豆は去つて用ゐず、その靑皮と前の諸藥とを末にし、二錢づつを水一盞で煎じて三五沸し、就寢時に溫服する。(聖濟錄)【海馬拔毒散】疔瘡、發背惡瘡を治するに奇效がある。海馬を黃に炙いて一對、穿山甲を黃土で炒り、硃砂、水銀各一錢、雄黃三錢、龍腦麝香各少量を末にし、水銀を入れて星の見えぬまで研り、少量づつを點ける。一日一回點ければ毒が自ら出る。(祕傳外科)

(一)鮑魚（別錄上品）

和名 ほしうを、ひもの
學名 Dried fish.

釋名 薧魚（禮記） 音は考（カウ）である。 蕭折魚（魏武食制） 乾魚 時珍曰く、鮑（はう）とは當今の乾魚のことだ。包裝し得るやうになつた魚といふ意味から、その文字は包に從つて書くのである。禮記にはこれを薧といひ、魏武食制にはこれを蕭折といつてある。いづれも蕭蒿（せうかう）に載せて曝乾して仕上げるものとの意味である。その鹽を用ゐずに壓搾して腊にしたものを淡魚といひ、鱐魚といふ。鱐の音は搜（ソウ）である。物で穿（うが）つて風乾したものをば法魚といひ、鮲魚といふ。鮲の音は怯（キヨ）である。その鹽で漬（つ）けて作つたものをば醃魚（えんぎよ）といひ、鹹魚といひ、䱕魚——䱕の音は葉（エフ）である——といひ、鰎魚——鰎の音は蹇（ケン）である——といふ。今は俗に通じて乾魚と呼ぶ。舊註には混淆（こんかう）してあつて明確でないが、今いづれも左に刪正を加へて置く。

集解 別錄に曰く、鮑魚は辛く臭し、鹹に中（あた）らしめてはならぬ。

(一)木村(重)曰ク、魚ノ干物(ひもの)支那ニテハ鹽ニ漬ケテ好ク壓シテ乾燥セシメタル二種アリ、大抵ハ内臓ヲ除ク、魚ヲ乾燥スルニ使フ繩多クハキグサナリ。

弘景曰く、俗間では一般に鹽を以て⑴鯹成したものを鯹魚と名けるが、鯹の字は鮑の字に似てゐる。今鮑といふは鱅魚を鹽を用ゐずに乾したもので、全然臭氣がない。藥には何種の魚のものを用ゐるが正確なるや不明だが、方家ではやはり用ゐることの稀なものだ。

恭曰く、李當之は『繩で穿つてあつて、胸中の濕ふてゐるものが良し』といつたが、蓋し魚の腸を去つて繩を通し、鹽を用ゐずに暴し乾したものだ。味は辛くして鹹くない。肥えた魚を用ゐたものは中が濕つてゐて彌よ臭く、尸臭のやうだ。それは鹽を使はないからである。鯷魚で作るものは⑶沔州、⑷復州で作るが、鹽を用ゐて鯹成するので、味が鹹くして辛くも臭くもない、やはり鮑とは異ふ。濕ふてゐる點も單に胸中だけではない。これは鹽を用ゐてあるからだ。この二種のものは雜魚でも皆作れるものだ。

頌曰く、現に⑸漢沔で作製する淡乾魚で、味の辛くして臭いものがそれである。或は『海中に一種の鮑魚なるものがゐる。形は小鱅に似て臭氣が最も甚しいもので、秦の始皇の死骸を車に積んだとき、その臭氣をごまかしたものがその魚だ』ともい

⑵鯹ハ浥ノ誤ナラン。浥ハ漬ケ潤スナリ。
⑶沔州ハ今ノ湖北省漢陽府ソノ舊ナリ。
⑷復州ハ今ノ湖北省沔陽縣ソノ舊治ナリ。
⑸漢沔、卽チ沔州、復州ノ地ナリ。

ふが、然し的確な證據はない。
時珍曰く、別錄に旣に『鹹に中てしめてはならぬ』とあるのだから、これは淡魚なることは疑ない。諸家の註は反つてさまざまの說をなしてあるが、按ずるに、周禮の註には『鮑魚は、魚を(六)糒室中に置き、糗を用ゐて乾して成る』とある。糒室とは土室のことだ。張耒の明道志には『漢陽、武昌は魚の多いところで、その土地では鹽を用ゐずに暴乾して淡魚を作り、船で江西へ送つて販賣する。(七)饒、信地方では、客への饔饍や祭典の供物にこれを用ゐねば十分念の入つたものといはれない。臭くして甚だ尾籠なものだが、そこが却つて結構なものとなつてゐるのだ』とある。これに據れば、鮑の淡魚であることは益す明かだ。ただ古代と現今では製法が同じくないだけのことである。又、蘇氏の所謂海中の一種の鮑魚なるものは、顧野王が書いたものにある『海中の鯀魚は鮑に似たり』といふそのもののことではあるまいか。さもなくば今の白鯗のことだらう。鯗といふも乾魚の總稱だ。又、現に淮地方で鯽を淡法で作つた魚も頗る佳い。藥に入れるには、やはり石首、鯽魚を用ゐて作つたものを勝るとすべきである。漢沔で製造するものは魚の性質が一定してゐない。

(六) 糒ハ焙ニ同ジ意ニテ。火焙ヲ云フ。

(七) 饒州、信州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

恐らく好適のものでなからう。鹹魚そのものも、近來はやり用ゐるものもあるから附記して置く。

【正誤】保昇曰く、鱭魚の口小さく背黄なるものを鮑魚と名ける。

時珍按ずるに、鱭魚の註に引用されたものは鮠魚であつて鮑魚ではない。蓋し鮠と鮑の文字の誤だ。

肉【氣味】【辛く臭し、溫にして毒なし】時珍曰く、李九華は『妊婦が食へば生兒が多病になる』といつた。

【主治】【墜墮、骽（腿と同じ）蹶（音は厥である）、踠折の瘀血、血痺の四肢にあつて散ぜぬもの、婦人の崩中血の止まぬもの】（別錄）【煮汁は婦人の血枯病で肝を傷めたるを治し、腸を利す。麻仁、葱、豉と共に羹に煮れば乳汁を通ずる】（時珍）

【附方】舊一。【妊娠中の感寒腹痛】乾魚一枚を灰に燒き、方寸匕を酒で服して汗を取れば瘥える。（子母祕錄）

頭【主治】【煮汁は眯目を治し、燒灰は疔腫、瘟氣を療ず】（時珍）

【附方】新三。【雜物の眯目】鮑魚頭二枚、地膚子半合を水で煮爛して汁を取

り、目中に注げば出る。(聖惠方)【魚臍疔瘡】火針瘡の初期に似て、四邊赤くして中央の黑いものは刺すがよし。若し甚だしく痛まぬものならば死に至ることがある。臘月の魚頭灰、髮灰等分を雞溏屎で和して塗る。(千金方)【瘟疫の豫防】鮑魚頭の燒灰方寸匕と小豆七粒の末を合せて米飲で服す。瘟疫の氣が感染しない。(肘後方)

鮑魚 [氣味]【鹹し、溫にして毒なし】[主治]【小兒の頭瘡で膿の出るには、麻油で煎熱して油を取り、頻りに塗る】(時珍)

穿鮑繩 [主治]【眯目の刺を去る。煮汁で洗ふが甚だ良し】(蘇恭)

(一)鱁鮧 (拾遺)

和名 にべ
學名 Glass gelatine (Gelatine from sea-bass's air-bladder.)

[釋名] **鰾** 匹少の切(ヒヤウ) 膠にしたものを**鰾膠**と名ける。藏器曰く、鱁鮧は逐題(チクダイ)と發音する。乃ち魚白のことだ。

時珍曰く、鱁鮧の發音は逐夷(チクイ)だ。題(タイ)と發音するは鮎魚を指す場合である。按ずるに、賈思勰の齊民要術に『漢の武帝が夷を逐ふて海上に至り、漁人が

(一)木村(重)曰ク、にべ(又ハぐち)ノ鰾ハ質厚クシテ大ナリ、コレヲ取リテ良質ノ膠ヲ得、又食用ニ供ス一般ニ料理ニ於テハコレヲ供ス。

魚腸を坑中で造つてゐるのを見てそれを取つて食つた。そこで此の名を命じたものだ』とあつて、この意味からすれば、夷を逐ふといふことからの名稱としなければならない。沈括の筆談には『鱁鮧は烏賊魚の腸だ』とあり、孫愐の唐韻には『鹽で貯藏した魚腸』とあり、南史には『齊の明帝は鱁鮧を嗜み、蜜に漬けて一回に數升を食つた』とある。これで觀れば、鰾と腸といづれも鱁鮧と稱して差閊ないわけだ。今一般に、鰾を煮凍らして膏にし、切片して薑醋で食ふ魚膏と呼ぶがこの物である。故に宋齊丘は化書に『鱁鮧は足垢と殊らない』といつたのだ。鰾とは諸魚の白脬のことで、その中が空で泡のやうだから鰾といふ。膠に作れるものだ。また縼膠とも名ける。諸魚の膠はいづれも膠を作り得るのだが、海岸地方の漁家では多くは石首鰾で作つて江鰾と呼んでゐる。江魚の鰾の意味だ。甚だ固く物を粘着せしめるもので、工匠には日用必須の物資だが、書籍の記載には多く略されてある。

鰾　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【竹木が肉に入つて久しく經過して出ぬものには、白を取つて瘡上の四邊に傅ける。肉が爛れて出る】（藏器）【折傷出血の止まぬを止める】（時珍）【灰に燒いて陰瘡、瘻瘡、月蝕瘡に傅ける】（李珣）

【附方】新一。【折傷出血】但し膜を透らぬものならば、海味中の鹹白鰾の、大片にして色白く、紅絲があつて片を成すものを傷處に舖き、帛で縛る。直ちに止まる。（普濟方）

鰾膠【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】【主治】【燒いて性を存したものは、婦人の難産、産後の風搐、破傷風痙を治し、嘔血を止め、瘀血を散じ、腫毒を消す。硇砂を伏す】（時珍）

【附方】新十。【難産】魚膠五寸を燒いて性を存して末にし、溫酒で服す。（皆效方）【産後の搐搦】强直するものは、風中としての治療を加へてはならぬ。これは風が子臟に入つたのであつて、破傷風と同じものだ。鰾膠一兩を螺粉で炒り焦し、粉を去つて末にし、三回に分服し、蟬蛻の煎湯で服す。（産寶）【産後の血運】鰾膠を燒いて性を存し、酒と童尿とで調へて三五錢を服するが良し。（事林廣記）【經血逆行】魚膠を切つて炒り、新綿の燒灰と二錢づつを米飲で調へて服すれば癒える。（多能鄙事）【破傷風搐】口噤し、强直するには、危氏の香膠散——魚膠を燒いて性を存して一兩、麝香少量を末にし、二錢づつを蘇木煎酒で調へて服す。同時に一錢を煮て瘡口を封ず

る。○保命集では、破傷風の表證があつてなほ解せぬものを治す。江鰾半兩を炒焦し、蜈蚣一對を炙き、研つて末にし、防風、羌活、獨活、川芎等分の煎湯で調へて一錢を服す。【嘔血の止まぬもの】鰾膠の長さ八寸、廣さ二寸のものを黄に炙り、刮つて二錢を、甘蔗節三十五個から取つた汁で調へて服す。(經驗)【便毒腫痛】已に大きくして軟になつたものには、直指方では、魚鰾膠を熱湯、或は醋で煮て軟かにし、熱に乘じて研り爛して貼る。○戴氏の露瘡、即ち羊核を治する方。石首膠一兩を燒いて性を存し、研末して酒で服し、外用として石菖蒲を生で研つて罨ふが效がある。【八種の頭風】魚鰾を燒いて性を存して末にし、就寢時に二錢を葱酒で服す。【赤白崩中】魚鰾膠三尺を黄に焙じて研末し、雞子と共に煎じて餅にし、好き酒で食ふ。

(一)魚　膾　音は檜（クヮイ）である。（拾　遺）

和名　さしみ、なます
學名　Flesh of fish.

【釋名】魚生　時珍曰く、劊ち切つて作るものだから鱠といふ。凡そ諸魚の鮮

(一)木村(重)曰ク、魚膾ハ魚肉ノ煮燒セズ生ノママノモノ。

(二) 鮏ハ唐韻ニ桑經ノ切、音ハ星(セイ)トアリ。說文ニ魚臭ナリトアリ。

(三) 繪縷ハ蟲ノ形ノ上ニ表レタスヂ模樣ナリ。

活なものを薄く切つて血(二)鮏を洗淨し、蒜、韲、薑、醋、五味を沃いで食ふものである。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】藏器曰く、夜に近く食つてはならぬ、不消化で積となるものだ。冷水を飲んではならぬ、蟲が生ずるものだ。時行病後に食へば胃弱となるから、乳酪と共に食つてはならぬ。霍亂を發するものだから、瓜と共に食つてはならぬ。

時珍曰く、按ずるに、食治に『凡そ物の命を殺すといふことが既に仁愛に虧けてゐる。しかもまだ肉が冷え切らず、動く力さへ消え去らずして生生しい物である。、やや烹て熟さぬものを食つてさへ人を害するのではないか。況や魚膾の肉の生なるに於てをやだ。人を損ずること最も甚しい。癥瘕ともなり、痼疾ともなり、奇病ともなるのである。考へねばならぬことだ。昔、生魚を食つて發病したものがあつて、藥を用ゐて下出したものを見ると、已に蟲の形に變じて(三)繪縷さへ見えるやうになつたものがあつたといふ。ある者は鼈肉を食つて積となり、藥を用ゐて下出したものを見ると、已に動物になつてゐて、能く動いたといふことだ。いづれもその證驗

とすべきものだ』とある。

【主治】【溫補し、冷氣濕痺を去り、膀胱の水、腹内の伏梁、氣塊冷痃、結癖疝氣、喉中の氣結、心下の酸水を除き、胃口を開き、大小腸を利し、腰脚を補し、陽道を起す】(藏器)【脚氣、風氣の人に宜し、上氣喘咳を治す】(思邈)【鯽鱠は久痢腸澼、痔疾、大人、小兒の丹毒風眩に主效がある】(孟詵)

【發明】汪穎曰く、魚鱠は辛辣にして病を劫す功がある。予が(四)蒼梧にゐた時、一婦人が呑酸を病み、諸藥も奏效しなかつたが、偶ま魚鱠を食つて遂にその病が癒えたのを見た。蓋し右の關係だ。

(一)魚鮓（拾遺）

和名　すし
學名　Fermented flesh of fish.

【釋名】時珍曰く、按ずるに、劉熙の釋名に『鮓は醞なり。鹽糝を以て醞釀して作る。諸魚いづれもこれを作り得る。大なるをば鮓といひ、小なるをば鰺といふ』とある。あるひは、南人は鰺といひ、北人は鮓といふともいふ。

(四)蒼梧ハ蟲部蛇類藍蛇ノ註ヲ見ヨ。

(一)木村(重)曰ク、古代ハ酢ヲ用ヰズ、自然醱酵ニヨリテすしヲ作レリ。日本モ亦然リ。現在モ地方ニヨリ自然醱酵ノすしヲ作ル。

【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】藏器曰く、凡そ鮓は皆瘡疥を發する。鮓の中に髮があれば人を害す。瑞曰く、鮓の熟せぬものは人の脾、胃を損じ、反て疾を致す。時珍曰く、諸種の鮓は、いづれも生胡荽（しやうこすゐ）、葵菜（きさい）、豆藿、麥醬、蜂蜜と食合せてはならぬ。消渴、及び霍亂を發するものだ。凡て諸種の無鱗魚の鮓を食ふは尤も人に益せぬものだ。

【主治】【癬瘡には、柳葉を和して搗き碎き、炙き熱して傅ける。酸く臭きものを糝と共に取つて屋上塵と和し、蟲瘡、及び馬瘑瘡（はくわさう）に傅ける】(藏器)【聤耳、痔瘻、諸瘡の蟲あるものを治し、白駁、代指病を療じ、下痢膿血に主效がある】(時珍)

【附方】新二。【白駁風】荷葉で鮓を裹んで臭くし、拭ひ熱して頻に擦り、效が現れたならば止める。(千金方)【代指痛】先づ刺して血を去り、鮓皮は炙つて裹む。

(一)魚脂（拾遺）

和名　うをのあぶら
學名　Fish-fatt, Fish-oil.

【釋名】魚油　時珍曰く、脂は(二)旨である。その味が甘旨なるをいふ。

(一)木村(重)曰ク、魚ノ內臟ニ附着スル脂。
(二)旨、ウマシト訓ズ。

【氣　味】【甘し、溫にして小毒あり】時珍曰く、魚脂を燈に點ずれば人の目を盲する。

【主　治】【瘕疾には、石灰に和して船に泥つた魚脂の鯹臭いもの二斤を用ゐ、銅器に入れ炷燃して暖ならしめ、紙を隔てて瘕上を熨す。晝夜火を息めぬやうにする。又、牛、犬の疥に塗れば立ろに癒える】（藏器）時珍曰く、南番では魚油に石灰を和して船に捻る。また江豚の油をも用ゐる。

魚魷(一) 枕(チン)である。（綱　目）

和名　うをのかしらのほね
學名　Skull of fish.

【釋　名】時珍曰く、諸魚の腦骨を魷といひ、丁といふ。魚尾を魩——音は抹(マツ)——といひ、丙といふ。魚腸を鮰といひ、乙といふ。魚骨を鯁といひ、刺といふ。魚脬を鰾といひ、白魚といふ。翅を鰭といひ、鬣といふ。魚子を䱊といひ、鱶といふ。

【主　治】【能く毒を銷す】（藏器）【蠱毒を解す。器にして飲食物を盛れば、盛つたものの中に蠱があればその器が裂破する】（時珍）延壽書。

(一) 木村(重)曰ク、魚ノ頭骨ノ總稱。

(一)木村(重)曰ク、魚ノ鱗四種アリ、硬鱗、圓鱗、櫛鱗、楯鱗是ナリ。

(二)鄰ハ粼ニ作ルベシ。波立ツ貌ナリ。

(一)木村(重)曰ク、鮞ハ魚卵ノ一塊ヲ云フ、魚子トハ卵（マコ）ナリヤ、精（シラコ）ナリヤ不明ナルモ、今魚卵ヲトツテ後攷ヲ俟ツ。

(一)魚鱗（綱目）

和名 うをのうろこ
學名 Scales of fish.

釋名 時珍曰く、鱗は(二)鄰である。魚は水中に產するところから鱗が鄰に似てゐる。鳥は林に產するところから羽が葉に似てゐる。獸は山に產するところから毛が草に似てゐる。魚は行ひて水に上り、鳥は飛んで風に上る。これは鱗、羽を逆に亂れぬやうにするためだ。

主治 【魚を食つて中毒し、煩亂し、或は癥積（ちようしやく）と成つたときは、灰に燒いて水で二錢を服す】（時珍）【諸種の魚鱗の燒灰は魚骨鯁に主效がある】（別錄）

(一)魚子（綱目）

和名 うをのこ
學名 Fish-eggs.

釋名 鮞 音は米（ベイ）である。鱶 音は蟻（ギ）である。

集解 孟詵曰く、凡そ魚が子を生めば皆草上、及び土中に粘著（ねんちやく）する。冬期寒

水の節が過ぎて後も腐壞せず。五月三伏の日になつて雨中に化して魚となる。

時珍曰く、凡そ魚は皆冬期に子を孕むもので、春末、夏期になると、湍(せせ)らぐ水の草の際に子を生み、牡魚がそれに跟(つ)いてゐて(三)酒白する。蓋しその子は數日にして化して出るものだ。それを魚苗といふ。最も成長し易いものだ。孟氏の說は蓋し謬(あやま)れる傳說に據つたものだ。

氣味　(缺)　**主治**　【目中の障翳】(時珍)

發明　時珍曰く、魚子は古法には用ゐられなかつた。ただ聖濟總錄の目を治する決明散中に用ゐてあるが、やはり何魚の子と指定してない。大抵青魚、鯉、鯽(しよく)などのものを用うべきものだらうと思ふ。

附方　新一。【決明散】一切の年久しき障翳、弩肉、赤腫疼痛を治す。活水中に生み付けた魚子半兩を、硫黃水を溫めて洗淨し、石決明、草決明、青葙子、穀精草、枸杞子(くこし)、黃連、炙甘草、枳實(きじつ)を麸で炒り、牡蠣粉、蛇蛻(じやぜい)を灰に燒き、白芷、龍骨、黃蘗(わうはく)各一兩、白附子を炮き、白蒺藜を炒り、黃芩(わうごん)を炒り、羌活と各半兩、虎睛一箇を七片にして文武火で炙乾して一劑分に一片を用ゐ、以上の各藥品を末にし、

(三)酒白トハ精液ヲ注グコト。

三錢づつを五更時刻に茶で服し、夜明方に再服する。赤、白翳膜は七日にして減去し、胬肉、赤腫で忍び難く痛むものは三五日で奏效する。猪、魚、酒、麪、辛辣の もの、色欲を忌む。凡そ惱み、怒り、酒色、風熱に遇つて疼くものならば活眼であつて、尙ほ治癒の可能性があるが、疼かぬものならば死眼であつて、絕對に治癒の可能性がない。(總錄)

本草綱目鱗部第四十四卷 終

昭和五年十一月十一日印刷
昭和五年十一月十四日發行

頭註國譯本草綱目(第十冊)　非賣品

監修兼翻譯者　白井光太郎
　　　　　　　鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　木村諭吉
東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行



東春陽堂
京出版